

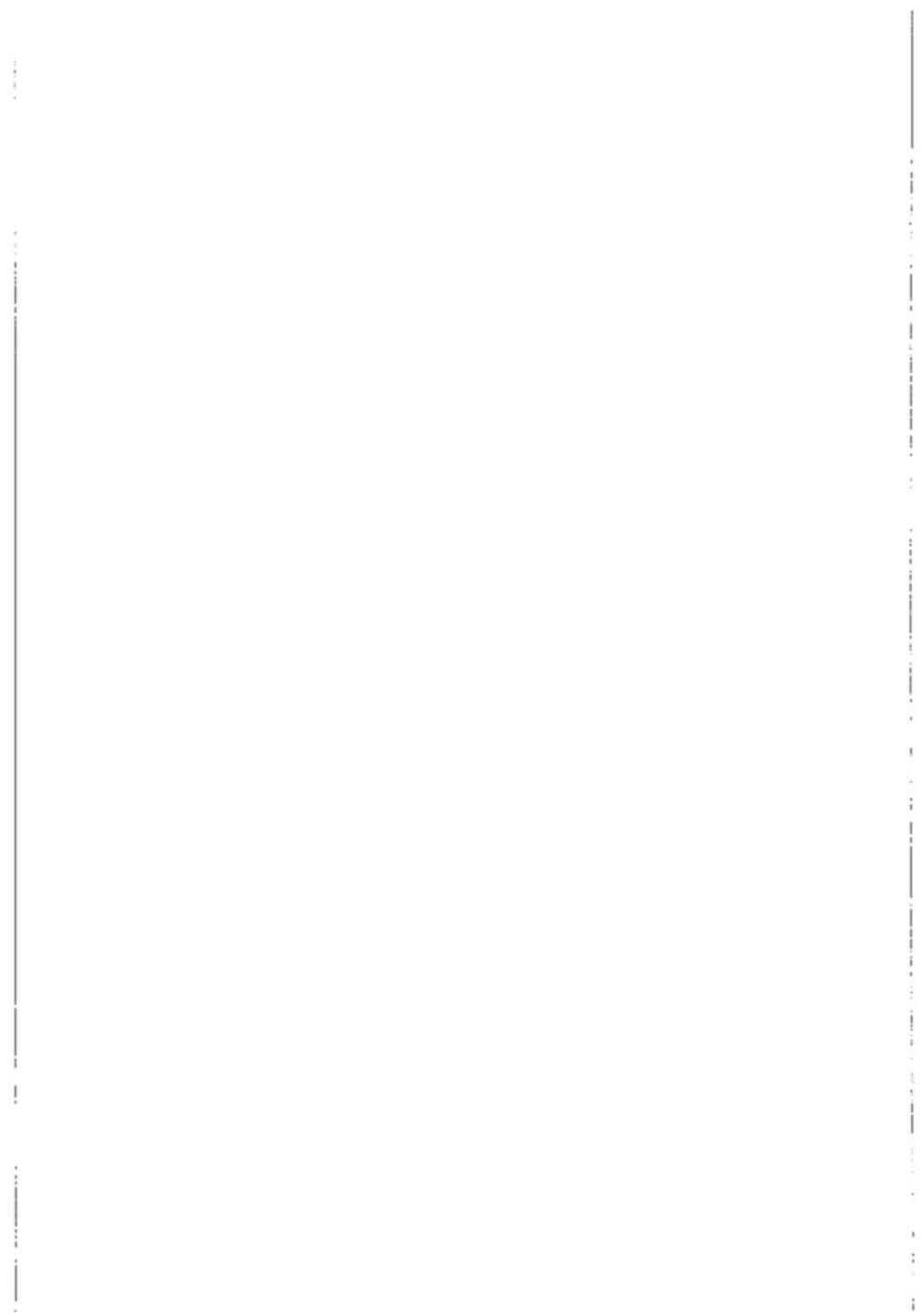
千歳市

ユカンボシ C 15 遺跡(1)

— 北海道横断自動車道（千歳一夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成8・9年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



千歳市

ユカンボシ C 15 遺跡(1)

— 北海道横断自動車道（千歳一夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書 —

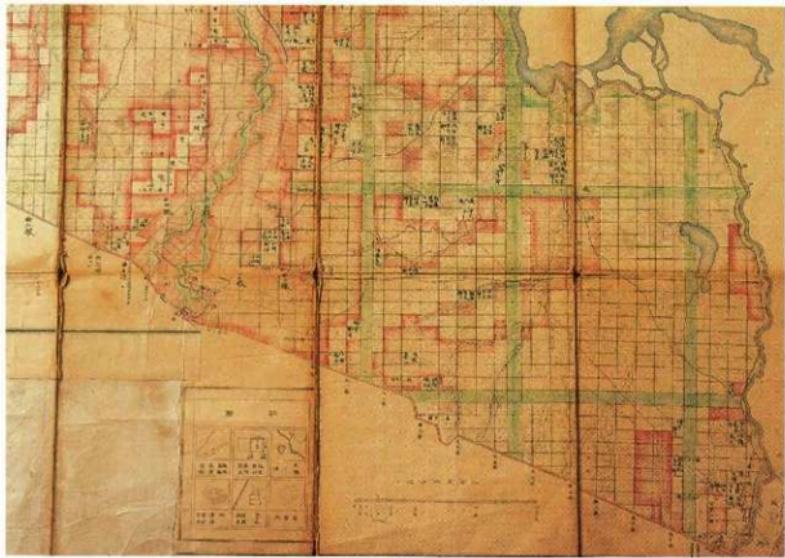
平成 8・9 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

口絵-1



遺跡全景 W→E



「胆振國千歳郡千歳原野区画図」部分（元図 1:25,000）

口絵一2



東低湿部基本土層 W→E



台地部深掘土層断面 S→N



P-12遺物出土状況 N→S



調査風景 E→W

例　　言

1. 本書は、北海道横断自動車道（千歳～夕張）建設工事に伴い、財團法人北海道埋蔵文化財センターが実施している、千歳市ユカンボシ C 15 遺跡の発掘調査の報告書である。本書では、平成 8・9 年度調査のうち、東側の調査分を報告する。ユカンボシ C 15 遺跡の調査報告書としての 1 冊目となる。
2. 本書の執筆は、西田茂・三浦正人・鈴木信・中田裕香・倉橋直孝・吉田裕史洋・大泰司統が分担し、文責は各項目の文末に括弧で示した。編集は、三浦正人・鈴木信が行った。
3. 遺物整理のうち土器・石器の一次整理は、土器を中田・石器を倉橋が行った。二次整理では、遺構の遺物は各遺構担当者が、包含層の土器・土製品は縄文時代以降を鈴木・縄文時代晩期を中田・縄文時代後期以前を大泰司が担当した。包含層の石器・石製品は倉橋が担当し、分類は鈴木が補佐した。
木製品・金属製品は三浦が、動植物遺存体は鈴木・倉橋が担当した。
4. 調査写真は主に菊池慈人・吉田が撮影し、遺物写真も菊池・吉田が担当、編集した。
5. 現場の遺構図・木製品出土状況図などの作図・整理は、三浦・鈴木・倉橋・吉田・大泰司・藤内まゆみ・三浦千晴・原靖寿・井口隆子・増田潔哉・大崎孝徳・梅木友子が担当、從事し、三浦・鈴木・大泰司が統括した。
6. 遺物の実測・トレース図は、土器を藤内・久末真紀子が、石器を高橋幸恵が、木製品・金属製品を小林由里子・小畠麻弓・釜蒔みどりが行い、各担当者が統括した。
7. 樹種同定は農林水産省森林総合研究所 平川泰彦氏の指導のもとに、岡本育子が行い執筆した。
8. 各種分析・同定は下記に依頼および依頼予定である。
放射性炭素年代測定（加速器質量分析法）は、株式会社地球化学研究所に依頼した。
恵庭 a 降下軽石層下の化石林に関する花粉分析は、北海道開拓記念館の山田悟郎氏に依頼し、報文を掲載した。
第 I・第 II 黒色土層の花粉分析・珪藻分析は、株式会社パリノ・サーヴェイに依頼し、当報告地区的報文を掲載した。
灰像分析、プラント・オパール分析は、株式会社パリノ・サーヴェイに依頼した。
脂肪酸分析は、株式会社ズコーシャに依頼した。
金属製品の材質分析は、岩手県立博物館の赤沼英男氏に依頼予定である。
須恵器の胎土分析については、依頼先を検討中である。
9. 木製品・金属製品の保存処理は、美々 8 遺跡での方法を用い、田口 尚が統括した。
10. 調査にあたっては下記の諸機関、各氏から御指導御協力をいただいた。
千歳市教育委員会埋蔵文化財センター、恵庭市教育委員会、北広島市教育委員会、北海道開拓記念館、青森県埋蔵文化財調査センター、八戸市教育委員会、大林東洋共同企業体、大場工業株式会社
大谷敏三、田村俊之、高橋 理、疊田良宏、松田淳子、遠藤昭浩、上屋真一、松谷純一、森 秀之、長町翠弘、佐藤幾子、大林千春、遠藤龍哉、山田昌久、平川泰彦、吉崎昌一、椿坂恭代、鈴木正章、野村 崇、山田悟郎、平川善祥、小林幸雄、右代啓視、舟山直治、高橋正勝、野中一宏、渡辺俊一、赤石慎三、三浦孝一、森岡健治、羽賀憲二、仙庭伸久、北澤 実、山原敏朗、宮 宏明、澤田 健、小林 貢、大島直行、角田隆志、疊原照司、森田知忠、菊池徹夫、木村英明、鈴木靖民、酒寄雅志、天野哲也、小野裕子、南 博史、山崎恵、辻誠一郎、阿部明彦、伊藤武士、井上雅孝、宇部則保、大野 亨、利部 修、木村 高、兎玉 準、高橋与右衛門、小松正夫、日野 久、船木義勝、藤沢 敏、村田晃一、加藤道男、斎野裕彦、仲田茂司、佐々木浩一、工藤竹久、清水恵一、千葉 茂、大沼忠春、種市幸生、千葉英一、田才雅彦、西脇対名夫、藤原秀樹

記号等の説明

1. 造構の表記は以下に示す記号を用い、原則として調査順に番号を付した。

H : 住居跡	P : 土壙	X : 周溝のある墓
HP : 住居跡に伴うビット	F : 焼土	M : 室状造構
HF : 住居跡に伴う焼土	TP : T ビット	

2. 造構図の縮尺は、スケール等が入っているもの以外は、原則として40分の1である。

造構平面図に方位記号がない場合は、上方 N - 22° - E である。

造構平面図の+はグリッドラインの交点で、交点傍らの名称記号は右下の区画を示す。

造構平面図の・小数字は、その地点の標高(単位m)である。

3. 造構平面図の出土遺物は記載のない限り、以下の記号を用いている。

● : 土器	■ : 磚石器	▲ : 刺片石器	× : フレイク・チップ
□ : 磚など	★ : 金属製品	* : 炭化物・骨片などの自然遺物	
◆ : 当該期の土器			

遺物記号に付されている数字は、土器・土製品・金属製品の掲載No.を示し、丸括み数字は、石器・石製品の掲載No.を示す。

4. 造構の規模は、「長軸の上端/下端×短軸の上端/下端×確認面からの最大深・最大厚」で示してある。

一部破壊されているものは現存長を()で示し、不明のものはーで示した。

5. 土層名は、下記の略号を用いた場合がある。

第0黒色土層: 0 B 0 黒	樽前 a 降下軽石層: Ta - a
第I黒色土層: I B I 黒	樽前 b 降下軽石層: Ta - b
第II黒色土層: II B II 黒	樽前 c 降下軽石層: Ta - c (c ₁ + c ₂)
漸 移 層: II B 下	樽前 d 降下軽石層: Ta - d
恵庭 a 降下軽石層: En - a	白頭山-苔小牧火山灰層: B - Tm
En - a 起源のローム層: En - L	支笏軽石流堆積物: Spfl
En - a 未風化軽石疊層: En - P	

火山灰の略号は、曾屋龍典・佐藤博之(1980)『千歳地域の地質』

北海道火山灰命名委員会(1982)『北海道の火山灰』による。

6. 土層の混在状態は、基本土層や上記の略号などを用いておもに下記のように表わしてある。

A + B : A と B がほぼ同量混じる

A > B : A に B が少量混じる

A > B : A に B が微量混じる

一部の土層説明には、『新版標準土色帖(1994年版)』を使用した。

7. 遺物実測図と土器拓影図の縮尺は、原則として以下のとおりである。一枚の図面に違う縮尺の図が配置されたものには、スケールを付したものもある。

復元土器: 3分の1 土器拓影: 3分の1 刺片石器: 2分の1

磚石器: 3分の1 土製品・石製品: 2分の1 金属製品: 3分の1

なお、木製品は各図ごとにスケールを付した。

8. 石器・石製品・木製品の大きさは、「最大長×最大幅×最大厚」で記してある。

目 次

口 絵

例 言

記号等の説明

調査要項

I 遺跡の位置と環境	1
1 位置と環境	1
2 周辺の遺跡	14
II 調査の方法、遺物の分類	19
1 調査の方法	19
2 土層の区分	24
3 遺物の分類	32
III 調査の概要	35
1 調査にいたる経緯	35
2 調査の概要	35
IV 表土層の遺構とその遺物	43
1 概要	43
2 杭列	44
3 室状遺構	52
V 0 黒層・I 黒層の遺構とその遺物	53
1 概要	53
2 住居跡	54
3 周溝のある墓	61
4 土壌	71
5 焼土	82
6 送り場	91
7 灰集中	91
8 錫冶遺構	93
9 集石	95
10 溝	95
11 道跡	95
12 土器觀察表・土器接合図・土器分布図の見方について	96
13 復元個体の接合関係について	96
一覧表	99

VI	II 黒層の遺構とその遺物	107
1	概要	107
2	住居跡	107
3	土壤	130
4	焼土	145
5	T ピット	149
	一覧表	169
VII	低湿部包含層の遺物	175
1	概要	175
2	I 黒層の土器・石器等	175
3	II 黒層の土器・石器等	190
4	木製品	200
	一覧表	222
VIII	台地部包含層の遺物	237
1	概要	237
2	I 黒層の遺物	238
3	II 黒層の遺物	262
	一覧表	282
IX	自然科学的分析	291
1	化石林形成ころの古植生について 北海道開拓記念館 山田 悟郎	291
2	ユカンボシ C 15 遺跡の珪藻化石・植物珪酸体よりみた環境変遷(1) パリノ・サーヴェイ株式会社	296
X	成果と問題点	325
1	「ユカンボシ」の呼称について	325
2	II 黒層の遺物とその遺構について	327
3	I 黒層の土器について	329
4	擦文文化期の墓	339
5	包含層出土の石器について	345

写真図版

報告書抄録

図 目 次

I 遺跡の位置と環境	
図 I - 1 遺跡の位置(1)	3
図 I - 2 遺跡の位置(2)	4
図 I - 3 遺跡の位置(3)	5
図 I - 4 周辺の地形(1)	8
図 I - 5 周辺の地形(2)	9
図 I - 6 周辺の地形(3)	10
図 I - 7 調査前状況図	11
図 I - 8 周辺の土層柱状略図	12
図 I - 9 台地部深掘り土層略図	13
図 I - 10 周辺の遺跡	16
II 調査の方法、遺物の分類	
図 II - 1 年度別調査区図・グリッド設定図	20
図 II - 2 東地区低層部調査機材配置図	23
図 II - 3 土層模式図	24
図 II - 4 土層図(1)	25
図 II - 5 土層図(2)	26
図 II - 6 土層図(3)	27
図 II - 7 土層図(4)	28
図 II - 8 土層図(5)	29
III 調査の概要	
図 III - 1 最終面コンター全図	36
図 III - 2 造構位置図	37
IV 表土層の造構とその遺物	
図 IV - 1 表土層造構位置図	43
図 IV - 2 杭列	45
図 IV - 3 杭列-7 杭	46
図 IV - 4 杭列-7・8 木製品	47
図 IV - 5 杭列-8・9 杭	48
図 IV - 6 室状造構	52
V 0 黒層・I 黒層の造構とその遺物	
図 V - 1 0 黒・I 黒層造構位置図	53
図 V - 2 H - 1	55
図 V - 3 H - 2(1)	56
図 V - 4 H - 2(2)	57
図 V - 5 H - 10(1)	59
図 V - 6 H - 10(2)	60
図 V - 7 X - 1(1)	62
図 V - 8 X - 1(2)	64
図 V - 9 X - 1(3)	65
図 V - 10 X - 2(1)	66
図 V - 11 X - 2(2)	67
図 V - 12 X - 3(1)	69
図 V - 13 X - 3(2)	70
図 V - 14 土壌(1)	72
図 V - 15 土壌(2)	75
図 V - 16 土壌とその遺物	79
図 V - 17 土壌の遺物(1)	80
図 V - 18 土壌の遺物(2)	81
VI II 黒層の造構とその遺物	
図 VI - 1 II 黒層造構位置図	108
図 VI - 2 H - 3	109
図 VI - 3 H - 4	111
図 VI - 4 H - 5	112
図 VI - 5 H - 6	114
図 VI - 6 H - 7	116
図 VI - 7 H - 8(1)	117
図 VI - 8 H - 8(2)	118
図 VI - 9 H - 9	120
図 VI - 10 H - 11	122
図 VI - 11 H - 12	123
図 VI - 12 住居跡の土器(1)	124
図 VI - 13 住居跡の土器(2)	125
図 VI - 14 住居跡の土器(3)	126
図 VI - 15 住居跡の土器(4)	127
図 VI - 16 住居跡の石器(1)	128
図 VI - 17 住居跡の石器(2)	129
図 VI - 18 土壌(1)	139
図 VI - 19 土壌(2)	140
図 VI - 20 土壌(3)	141
図 VI - 21 土壌(4)	142
図 VI - 22 土壌(5)	143
図 VI - 23 土壌(6)	144
図 VI - 24 焼土(1)	147
図 VI - 25 焼土(2)	148
図 VI - 26 T ピット(1)	157
図 VI - 27 T ピット(2)	158
図 VI - 28 T ピット(3)	159
図 VI - 29 T ピット(4)	160
図 VI - 30 T ピット(5)	161
図 VI - 31 T ピット(6)	162
図 VI - 32 T ピット(7)	163
図 VI - 33 土壌の土器(1)	164
図 VI - 34 土壌の土器(2)	165
図 VI - 35 土壌の土器(3)	166
図 VI - 36 土壌の土器(4)・T ピットの土器	167
図 VI - 37 焼土の土器・土壌の石器・土製品	168

VII 低温部包含層の遺物	
図VII-1 低溫部範囲図	176
図VII-2 I 黒層の土器(1)	178
図VII-3 I 黒層の土器(2)	179
図VII-4 I 黒層の土器接合図(1)	180
図VII-5 I 黒層の土器接合図(2)	181
図VII-6 土器分布図(1)	182
図VII-7 土器分布図(2)	183
図VII-8 土器分布図(3)	184
図VII-9 土器分布図(4)	185
図VII-10 土器分布図(5)	186
図VII-11 I 黒層の石器	188
図VII-12 石器分布図(1)	189
図VII-13 II 黒層の土器(1)	191
図VII-14 II 黒層の土器(2)	192
図VII-15 土器分布図(6)	193
図VII-16 土器分布図(7)	194
図VII-17 土器分布図(8)	195
図VII-18 II 黒層の石器	197
図VII-19 石器分布図(2)	198
図VII-20 石器分布図(3)	199
図VII-21 木製品出土位置図(I 黒層以下全層)	201
図VII-22 木製品出土位置図(0B・IB 1層)	202
図VII-23 木製品出土位置図(I B 2層)	203
図VII-24 木製品(1の1)	206
図VII-25 木製品(1の2)	207
図VII-26 木製品(2)	208
図VII-27 木製品(3)	209
図VII-28 木製品(4)	210
図VII-29 木製品(5)	211
図VII-30 木製品(6)	212
図VII-31 木製品(7)	213
図VII-32 木製品(8)	214
図VII-33 木製品(9)	215
図VII-34 木製品(0)	216
図VII-35 木製品(1)	217
図VII-36 木製品(2)	218
図VII-37 木製品(3)	219
図VII-38 木製品(4)	220
図VII-39 樹皮	221
VIII 台地部包含層の遺物	
図VIII-1 台地部範囲図	237
図VIII-2 I 黒層の土器(1)	239
図VIII-3 I 黒層の土器(2)	241
図VIII-4 I 黒層の土器(3)	242
図VIII-5 I 黒層の土器接合図(1)	243
図VIII-6 I 黒層の土器接合図(2)	244
図VIII-7 土器分布図(1)	245
図VIII-8 土器分布図(2)	246
図VIII-9 土器分布図(3)	247
図VIII-10 土器分布図(4)	248
図VIII-11 土器分布図(5)	249
図VIII-12 土器分布図(6)	250
図VIII-13 土器分布図(7)	251
図VIII-14 土器分布図(8)	252
図VIII-15 I 黒層の石器、分布図(1)	256
図VIII-16 石器分布図(2)	257
図VIII-17 石器分布図(3)	258
図VIII-18 石器分布図(4)	259
図VIII-19 I 黒層等の金属製品	261
図VIII-20 II 黒層の土器(1)	268
図VIII-21 II 黒層の土器(2)	269
図VIII-22 II 黒層の土器(3)	270
図VIII-23 II 黒層の土器(4)	271
図VIII-24 II 黒層の土器(5)	272
図VIII-25 II 黒層の土器(6)	273
図VIII-26 II 黒層の土器(7)	274
図VIII-27 II 黒層の土器(8)	275
図VIII-28 II 黒層の土製品	276
図VIII-29 土器分布図(9)	277
図VIII-30 土器分布図(10)	278
図VIII-31 土器分布図(11)	279
図VIII-32 土器分布図(12)	280
図VIII-33 土器分布図(13)	281
図VIII-34 II 黒層の石器(1)	285
図VIII-35 II 黒層の石器(2)	286
図VIII-36 石器分布図(4)	288
図VIII-37 石器分布図(5)	289
図VIII-38 石器分布図(6)	290
X 自然科学的分析	
図IX-1 検出された花粉・孢子の顕微鏡写真	292
図IX-2 検出された花粉・孢子	293
図IX-3 G 56区北の主要珪藻化石群集の層位の分布	305
図IX-4 低温部・東 Loc. 1 の主要珪藻化石群集の層位的分布	306
図IX-5 G 56区北の主要花粉化石群集の層位の分布	310
図IX-6 低温部・東 Loc. 1 の主要花粉化石群集の層位的分布	311
図IX-7 G 56区北の植物珪酸体群集の層位的分布	314
図IX-8 低温部・東 Loc. 1 の植物珪酸体群集の層位的分布	315
図IX-9 X - 3 層構の植物珪酸体群集	316
図IX-10 硅藻化石 顕微鏡写真(1)	320
図IX-11 硅藻化石 顕微鏡写真(2)	321
図IX-12 花粉化石 顕微鏡写真(1)	322
図IX-13 花粉化石 顕微鏡写真(2)	323
図IX-14 植物珪酸体 顕微鏡写真	324
X 成果と問題点	
図X-1 II 黒層遺物とその構成 間連図	328
図X-2 アヨロ3類 aと併行する土器	330
図X-3 後北 A式の変遷	331
図X-4 文様帶の説明	332
図X-5 後北 C ₂ ・D式深鉢の分類	334
図X-6 後北 C ₂ ・D式深鉢の変遷	335
図X-7 VI群 c類無文土器の変遷	336
図X-8 土坑墓等出土土器の時期	338
図X-9 土坑墓等の輪軸・長軸方向	340
図X-10 石器器種別割合	346
図X-11 石縫長さ幅グラフ	347
図X-12 石縫長さ重さグラフ	348

表 目 次

I 遺跡の位置と環境	
表I-1 周辺の遺跡	17
II 調査の概要	
表II-1 当報告遺構一覧(1)	38
表II-2 当報告遺構一覧(2)	39
III 表土層の遺構とその遺物	
表IV-1 杭列-7 杭等一覧	49
表IV-2 杭列-8 杭等一覧	50
表IV-3 杭列-9 杭一覧	51
IV 0 黒層・I 黒層の遺構とその遺物	
表V-1 遺構の金属製品等一覧	78
表V-2 遺構出土の土器觀察表(1)	99
表V-3 遺構出土の土器觀察表(2)	100
表V-4 遺構出土の土器觀察表(3)	101
表V-5 遺構出土の土器觀察表(4)	102
表V-6 土器・石器掲載一覧	103
表V-7 遺構遺物集計表(1)	104
表V-8 遺構遺物集計表(2)	105
表V-9 遺構遺物集計表(3)	106
V II 黒層の遺構とその遺物	
表VI-1 土器掲載一覧	169
表VI-2 石器掲載一覧	170
表VI-3 燃土規模一覧	170
表VI-4 遺構遺物集計表(1)	171
表VI-5 遺構遺物集計表(2)	172
表VI-6 遺構遺物集計表(3)	173
表VI-7 遺構遺物集計表(4)	174
VI 低溫部包含層の遺物	
表VI-1 土器觀察表	187
表VI-2 I 黒層掲載土器一覧	187
表VI-3 I 黒層掲載石器一覧	188
表VI-4 II 黒層掲載土器一覧	192
表VI-5 II 黒層掲載石器一覧	196
表VII-6 掘載木製品(1)	222
表VII-7 掘載木製品(2)	223
表VII-8 未掲載木製品等(1)	224
表VII-9 未掲載木製品等(2)	225
表VII-10 未掲載木製品等(3)	226
表VII-11 未掲載木製品等(4)	227
表VII-12 未掲載木製品等(5)	228
表VII-13 未掲載木製品等(6)	229
VIII 台地部包含層の遺物	
表VIII-1 I 黒層掲載土器一覧	245
表VIII-2 土器觀察表(1)	253
表VIII-3 土器觀察表(2)	254
表VIII-4 I 黒層掲載石器一覧	255
表VIII-5 I 黒層等の金属製品等一覧	259
表VIII-6 II 黒層掲載土器一覧(1)	282
表VIII-7 II 黒層掲載石器一覧(2)・土製品一覧	283
表VIII-8 II 黒層掲載石器一覧	287
IX 自然科学的分	
表IX-1 微化石分析試料	297
表IX-2 硅藻分析結果(1)	299
表IX-3 硅藻分析結果(2)	300
表IX-4 硅藻分析結果(3)	301
表IX-5 硅藻分析結果(4)	302
表IX-6 硅藻分析結果(5)	303
表IX-7 硅藻分析結果(6)	304
表IX-8 花粉分析結果	309
表IX-9 植物硅酸体分析結果	313
X 成果と問題点	
表X-1 後北 C ₂ ・D 式深鉢の分類(1)	332
表X-2 後北 C ₂ ・D 式深鉢の分類(2)	333
表X-3 土坑墓等の分類要素一覧	339
表X-4 北海道式古墳との比較	342
表X-5 石器種別集計表	346

図版目次

I 遺跡の位置と環境	
図版 I-1 遺跡全景	351
II 調査の方法、遺物の分類	
図版 II-1 水対策施設	352
図版 II-2 ウエルポイント装置	353
図版 II-3 基本土層(1)	354
図版 II-4 基本土層(2)	355
IV 表土層の遺構とその遺物	
図版 IV-1 杭列 -7	356
図版 IV-2 杭列 -7 杭	357
図版 IV-3 杭列 -7・8 木製品	358
図版 IV-4 杭列 -8・9 杭	359
図版 IV-5 室状遺構	360
V 0 黒層・I 黒層の遺構とその遺物	
図版 V-1 H-1	361
図版 V-2 H-2(1)	362
図版 V-3 H-2(2)	363
図版 V-4 H-10	364
図版 V-5 H-2・10の遺物	365
図版 V-6 X-1・2・3	366
図版 V-7 X-1(1)	367
図版 V-8 X-1(2)	368
図版 V-9 X-1の遺物(1)	369
図版 V-10 X-1の遺物(2)	370
図版 V-11 X-1の遺物(3)	371
図版 V-12 X-2(1)	372
図版 V-13 X-2(2)	373
図版 V-14 X-2の遺物、X-3	374
図版 V-15 P-2・3・4・5	375
図版 V-16 P-8・9・11	376
図版 V-17 P-12・14	377
図版 V-18 P-17・26・27	378
図版 V-19 P-28・29・30・31	379
図版 V-20 土壌の遺物(1)	380
図版 V-21 土壌の遺物(2)	381
図版 V-22 土壌の遺物(3)	382
図版 V-23 土壌の遺物(4)	383
図版 V-24 F-1・7・8・24・30・76	384
図版 V-25 F-20・29・37・39・41・60	385
図版 V-26 焼土の遺物(1)	386
図版 V-27 焼土の遺物(2)	387
図版 V-28 送り場	388
図版 V-29 鋳冶遺構	389
図版 V-30 鋳冶遺構の遺物、灰集中	390
図版 V-31 集石	391
図版 V-32 遺跡、溝	392
VI II 黒層の遺構とその遺物	
図版 VI-1 H-3	393
図版 VI-2 H-4	394
図版 VI-3 H-5	395
図版 VI-4 H-3・4・5の遺物	396
図版 VI-5 H-6・7・8・9	397
図版 VI-6 H-8・9	398
図版 VI-7 H-6の遺物	399
図版 VI-8 H-6・7・8の遺物	400
図版 VI-9 H-8・9の遺物	401
図版 VI-10 H-11	402
図版 VI-11 H-12	403
図版 VI-12 H-11・12の遺物	404
図版 VI-13 P-1・6・7・10	405
図版 VI-14 P-13・15・16	406
図版 VI-15 P-18・19・20	407
図版 VI-16 P-21・22・23	408
図版 VI-17 P-24・25・32	409
図版 VI-18 P-33・34・35	410
図版 VI-19 土壌の遺物(1)	411
図版 VI-20 土壌の遺物(2)	412
図版 VI-21 土壌の遺物(3)	413
図版 VI-22 土壌の遺物(4)	414
図版 VI-23 土壌の遺物(5)	415
図版 VI-24 土壌の遺物(6)	416
図版 VI-25 F-6・18・74・379・381	417
図版 VI-26 焼土の遺物	418
図版 VI-27 TP-1・2・3	419
図版 VI-28 TP-9・10・11	420
図版 VI-29 TP-12・13・14	421
図版 VI-30 TP-13・14・15・16	422
図版 VI-31 TP-17・18	423
図版 VI-32 TP-19・20	424
図版 VI-33 TP-21・22・23	425
図版 VI-34 TP-24・25	426
図版 VI-35 TP-26・27	427
図版 VI-36 T ピットの遺物	428
VII 低湿部包含層の遺物	
図版 VII-1 調査前状況	429
図版 VII-2 Ta-a等除去作業(1)	430
図版 VII-3 Ta-a等除去作業(2)	431
図版 VII-4 調査風景(1)	432
図版 VII-5 調査風景(2)	433
図版 VII-6 調査風景(3)	434
図版 VII-7 調査風景(4)	435
図版 VII-8 調査風景(5)	436
図版 VII-9 調査完了状況	437
図版 VII-10 低湿部I 黒層の土器(1)	438
図版 VII-11 低湿部I 黒層の土器(2)	439
図版 VII-12 低湿部I 黒層の石器	440
図版 VII-13 低湿部II 黒層の土器(1)	441
図版 VII-14 低湿部II 黒層の土器(2)	442
図版 VII-15 低湿部II 黒層の土器(3)・石器等	443
図版 VII-16 木製品(1)	444
図版 VII-17 木製品(2)	445
図版 VII-18 木製品(3)	446
図版 VII-19 木製品(4)	447

図版Ⅷ-20	木製品(5)	448
図版Ⅷ-21	木製品(6)	449
図版Ⅷ-22	木製品(7)	450
図版Ⅷ-23	木製品(8)	451
図版Ⅷ-24	木製品(9)	452
図版Ⅷ-25	木製品(10)	453
図版Ⅷ-26	木製品(11)	454
図版Ⅷ-27	樹皮	455
図版Ⅷ-28	木製品樹種 顕微鏡写真(1)	456
図版Ⅷ-29	木製品樹種 顕微鏡写真(2)	457
図版Ⅷ-30	木製品樹種 顕微鏡写真(3)	458
図版Ⅷ-31	木製品樹種 顕微鏡写真(4)	459
図版Ⅷ-32	木製品樹種 顕微鏡写真(5)	460
図版Ⅷ-33	木製品樹種 顕微鏡写真(6)	461
図版Ⅷ-34	木製品樹種 顕微鏡写真(7)	462
図版Ⅷ-35	木製品樹種 顕微鏡写真(8)	463
図版Ⅷ-36	木製品樹種 顕微鏡写真(9)	464
図版Ⅷ-37	木製品樹種 顕微鏡写真(10)	465
図版Ⅷ-38	木製品樹種 顕微鏡写真(11)	466
図版Ⅷ-39	木製品樹種 顕微鏡写真(12)	467
■ 台地部包含層の遺物		
図版Ⅷ-1	Ta-a等除去作業	468
図版Ⅷ-2	調査風景(1)	469
図版Ⅷ-3	調査風景(2)	470
図版Ⅷ-4	調査風景(3)	471
図版Ⅷ-5	調査完了状況	472
図版Ⅷ-6	台地部I 黒層の土器(1)	473
図版Ⅸ-7	台地部I 黒層の土器(2)	474
図版Ⅸ-8	台地部I 黒層の土器(3)	475
図版Ⅸ-9	台地部I 黒層の土器(4)	476
図版Ⅸ-10	台地部I 黒層の土器(5)・石器	477
図版Ⅸ-11	台地部I 黒層等の金属製品	478
図版Ⅸ-12	台地部II 黒層の土器(1)	479
図版Ⅸ-13	台地部II 黒層の土器(2)	480
図版Ⅸ-14	台地部II 黒層の土器(3)	481
図版Ⅸ-15	台地部II 黒層の土器(4)	482
図版Ⅸ-16	台地部II 黒層の土器(5)	483
図版Ⅸ-17	台地部II 黒層の土器(6)	484
図版Ⅸ-18	台地部II 黒層の土器(7)	485
図版Ⅸ-19	台地部II 黒層の土器(8)	486
図版Ⅸ-20	台地部II 黒層の土器(9)	487
図版Ⅸ-21	台地部II 黒層の土器(10)	488
図版Ⅸ-22	台地部II 黒層の土器(11)	489
図版Ⅸ-23	台地部II 黑層の土器(12)	490
図版Ⅸ-24	台地部II 黑層の土器(13)	491
図版Ⅸ-25	台地部II 黑層の土器(14)	492
図版Ⅸ-26	台地部II 黑層の土器(15)	493
図版Ⅸ-27	台地部II 黑層の土器(16)	494
図版Ⅸ-28	台地部II 黑層の土器(17)	495
図版Ⅸ-29	台地部II 黑層の土器(18)	496
図版Ⅸ-30	台地部II 黑層の土製品	497
図版Ⅸ-31	台地部II 黑層の石器(1)	498
図版Ⅸ-32	台地部II 黑層の石器(2)	499
図版Ⅸ-33	台地部II 黑層の石器(3)	500

調査要項

事業名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査

事業委託者：日本道路公団北海道支社

事業受託者：財団法人 北海道埋蔵文化財センター

遺跡名：ユカンボシ C 15遺跡（北海道教育委員会登載番号：A-03-263）

所在地：千歳市長都183-1, 1190-1ほか

調査期間：平成8年4月1日～平成9年3月26日（発掘 6月26日～10月30日）

平成9年4月1日～平成10年3月31日（発掘 5月6日～10月31日）

調査面積：平成8年度 3,025m²（うち当報告分 605m²）

平成9年度 8,855m²（うち当報告分 3,180m²）

調査体制

平成8年度

第2調査部	部長	鬼柳 彰
第2調査部第2調査課	課長	西田 茂
	主任	三浦 正人（発掘担当者）
	文化財保護主事	倉橋 直孝（発掘担当者）
	△	吉田裕吏洋

平成9年度

第2調査部	部長	鬼柳 彰
第2調査部第2調査課	課長	西田 茂（発掘担当者）
	主任	三浦 正人（発掘担当者）
	主任	鈴木 信（発掘担当者）
	△	中田 裕香（発掘担当者）
	文化財保護主事	倉橋 直孝（発掘担当者）
	△	吉田裕吏洋
	△	大泰司 統
第1調査部資料調査課	主任	田口 尚
	△	菊池 慎人

I 遺跡の位置と環境

1 位置と環境

(1) 位置 (図 I - 1)

ユカンボシ C 15 遺跡は、JR 千歳駅の北方約 6 km に位置し、千歳川の西方 500 m にある。千歳川にかかる「長都大橋」から「東 6 線」(道道馬追原野北信濃線) を南に一区画進むと「市道南 23 号」に達する。この東 6 線と南 23 号とが交わるあたりから西側 300 m ほどが遺跡の広がりとして確認できている。標高は 5 ~ 9 m である。ここでの水位は通常 6 m ほどであるが、千歳川の改修工事が一段落する 30 年前までは、標高 8 m のあたりまでは沼沢地であった。この沼沢地は千歳川、長都川、ユカンボシ川の水を集め、停滯水域であり、「オサットー」、「長都沼」と呼ばれていた。

5 万分の 1 地形図から割りだした遺跡の位置は、東の地区の中央部が東経 141 度 38 分 49 秒、北緯 42 度 52 分 41 秒である。

(2) 地形 (図 I - 2 下、図 I - 6・7、図 II - 1)

ユカンボシ C 15 遺跡の調査予定地は図 II - 1 に示した。概略東西の長さ 300 m、南北の幅 80 m の範囲である (図 I - 6・7)。遺跡の広がりは南北方向にびることは確実であるが、東西方向にどれほど延びているのかは明らかでない。市道南 23 号の道路敷地、側溝部分を含んでいる。一見平らなどろに見えるが、相対的な地形として台地と低湿地とが推定されている。

図 I - 7 は道路工事予定図をもとにした地形図である。ユカンボシ C 15 遺跡は、高速道路の計画路線のうちで盛り土による本線部分にあたる。

東側の地区 (東地区) と西側の地区 (西地区) とは 60 ~ 80 m ほどの距離がある (図 II - 1)。この空隙は試掘調査の成果から、耕作等によって遺物包含層が消失した地域であるとの北海道教育委員会文化課の判断による。2 年にわたる発掘調査の結果、東地区と西地区との間には流路の地形が横切って低湿部をなしており、東西の地区は別の地形単位として理解できることになった。

このような台地部と低湿部とがどのように形成されたのかについて、今回の調査によって得られた資料からは次のように考えられる。

図 I - 8 は高速道路の建設に際しての機械ボーリングによる資料をもとに、堆積土層の概略を明らかにするために簡略化した土層柱状図である。地表を厚さ 30 cm ほどで覆っているのは樽前 a 火山灰であり、基底部は支笏 (シコツ) 火砕流である。支笏火砕流と樽前 a 火山灰の間にある火山灰は恵庭火山灰である。西が高くて東に低い緩やかな平坦面は、支笏火砕流と恵庭火山灰の残存から推定すると西から東へ 2 km につき 12 m ほどの割合で低下している。

支笏火砕流で形成された緩斜面が、湧水・流水による浸食・下刻作用によって谷地形がつくられ、場所によっては砂、礫などの堆積がすむ。そこでは草木の繁茂の具合により泥炭質土が形成されるところもあり、また粘土、シルト、泥炭などの互層が発達するところもある。

支笏火砕流の二次堆積によって形成された地形の上には、さらに厚さ 2 m の恵庭火山灰層が、谷地形を埋めるように堆積する。基底地形に起因する水脈をもつ湧水・流水の浸食・下刻作用により再び谷地形が出現する。しかしながら、恵庭火山灰をすべて流失してしまうほどの強い作用ではなく、谷地形の形成には至っていないようである。谷地形形成にいたらない理由としては、緩やかな傾斜地 (平坦面) であることから堆積作用が下刻作用より卓越する、三角洲地形に変わりゆく場所だったからであろう。このようなことからユカンボシ C 15 遺跡の近辺には、恵庭火山灰を基盤とする島状あるいは半島状の地形の残存が見られることになる。

図 I - 9 は F - 22・23・24 区でおこなった深掘の試掘溝の土層断面図をもとに、擦文時代の住居跡、

現在の舗装道路などを加筆したものである（図絵2下）。

恵庭火山灰は標高6m付近を基底部とし、厚さ2mほどほぼ平らに堆積している。最上部のローム（En-L）と記すのが波状断面を示しているのは、寒冷期における構造土の結果なのであろう。樹木が繁茂する平坦面に厚さ2mにも達する火山灰が堆積し、これによって直径30cmほどの樹木も根こそぎ倒れている様子が見てとれる。恵庭火山灰の堆積によって地下水位に変化があり、標高7m付近を上下しているのもわかる。縄文時代の遺物・遺構が検出されるのは、8mよりも高いところの第Ⅱ黒色土、ならびに恵庭火山灰が削平されてしまった場所（最下位で5.5m）などである。この恵庭火山灰が削平されてしまったところは、水位の上下変化により、水面下になったり、陸化したりしたようである。擦文化期からアイヌ文化期、さらに河川改修が一段落する現代までは、停滞水域であり泥炭の形成が進行していた。

（3）周辺の環境（図I-6・7、図II-1）

高速道路用地になる前は、東側の地区は民家、畠、水田、市道であり、西側の地区は畠、水田、市道であった。低平な地域であるが、相対的に高いところが宅地、畠、低いところが水田という土地利用である。

遺跡の西側には幅72m（40間）で南北に伸びる防風林（国有保安林）がある。これは北海道庁が1893年に完了した「植民地区画割」にもとづく樹林地帯であり、1918年（大正7年）から始められた「耕地防風林の人工造成」の成果である。トドマツやイチイなどの針葉樹、ヤチダモ、ハンノキ、カシワ、ミズナラ、コブシ、オニグルミ、クリ、ホオノキ、カエデなどの落葉広葉樹が目に付く。ミズキは初夏に白い花が咲くので防風林内の多くの場所に育っていることがわかった。林内樹上の高いところにアオサギが営巣、繁殖しているのも認められた。

林床で目を引くのは早春であれば黄色のアクジュソウ、赤紫のタチツボスミレ、青のエゾエンゴサク、初夏は白色のエンレイソウである。遺跡の近辺にはヤマクワ、タラノキ、ヤマブドウ、コクワなどがみられた。林縁の一部には荒れ地をあらわすヨモギ、イタドリ、ヤナギなどが侵入している。

初夏に白く咲くスズランは畠の栽培種で換金作物である。周辺の畠では小麦、ジャガイモ、アスパラガス、カボチャ、ダイコン、キャベツ、飼料、牧草などが作ってある。夏の休耕田でホティアイオイの群落がなす青い花敷きは壯観である。道路の脇で目に付く野の花には白いコンロンソウ、赤紫のムラサキケマン、青紫のナギナタコウジュ、黄色のツリフネソウ、暑天時の白いマツヨイセンノウなどがある。これらの作物、野草の分布は用水路、排水路の整備、水位の低下によるところが大きい。

東地区にあった民家では、鶏卵用のニワトリ飼育が企業的に行われていた。ニワトリ舎をイタチ、キツネ、アライグマなどから守るために多数の犬が杭につながれていた。犬杭の多くは深く打ち込まれ、樽前a火山灰を突き抜けており、第Ⅰ黒色土層まで達して遺構を攪乱しているものもあった。遺構、遺物包含層の搅乱部分には、ゴミ穴、井戸、民家の基礎などによるところもあった。2か所の井戸は、開拓期以降のものであり飲用水の確保用と思われる。

（4）古地図（図絵1下、図I-2（上）（下）・3（上）（下）・4・5）

「図絵1下」は、1894年（明治27年）北海道庁が刊行した「胆振国千歳郡千歳原野区画図」（部分）である。これは恵庭市郷土資料館の所蔵品を撮影したものであり、元図は25000分の1である。原野に東西150間（270m）、南北100間（180m）の区画が示してあり、すでに植生者の人名も一部記入してある。青色は河川湖沼、緑色は「風防林及堤防地」、赤色は「既貸下済地」である。

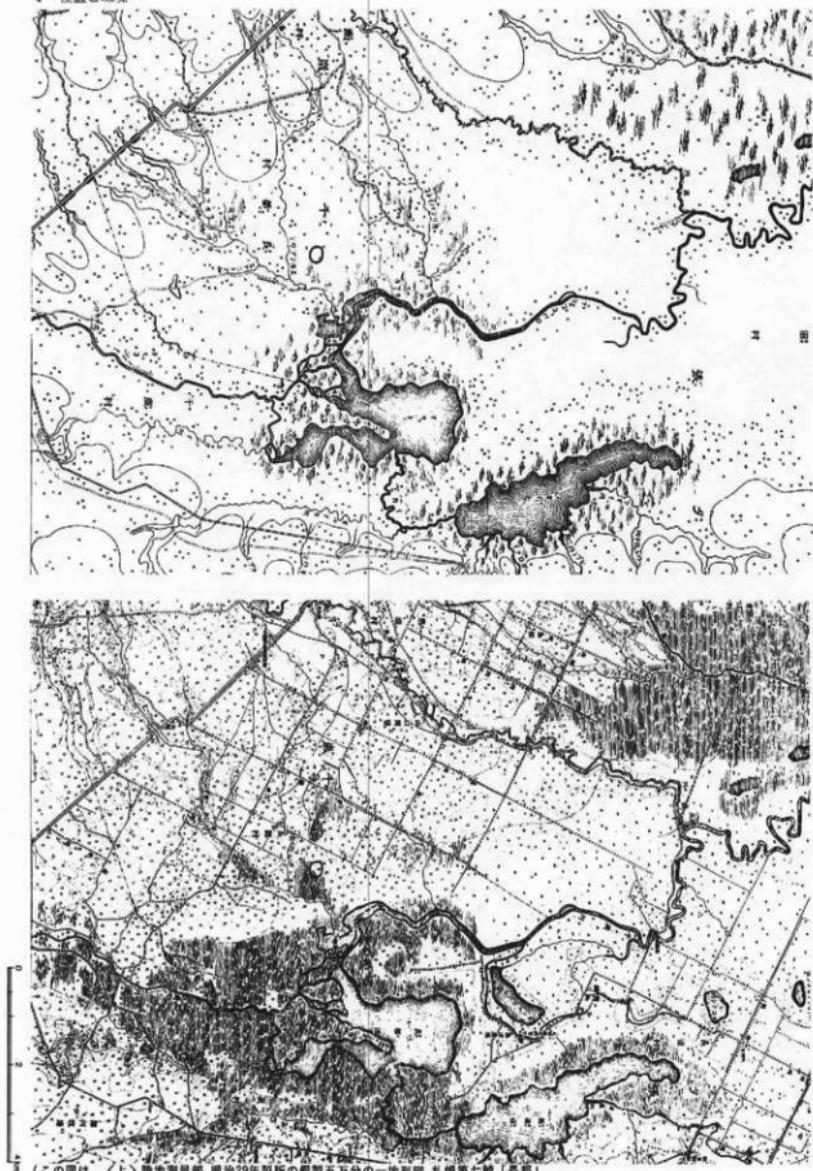
図I-2（上）（下）・3（上）（下）はユカンボシC15遺跡周辺の古い地図である。ともに元図は5万分の1の図である。

I 遺跡の位置と環境



図 I-1 遺跡の位置(1)

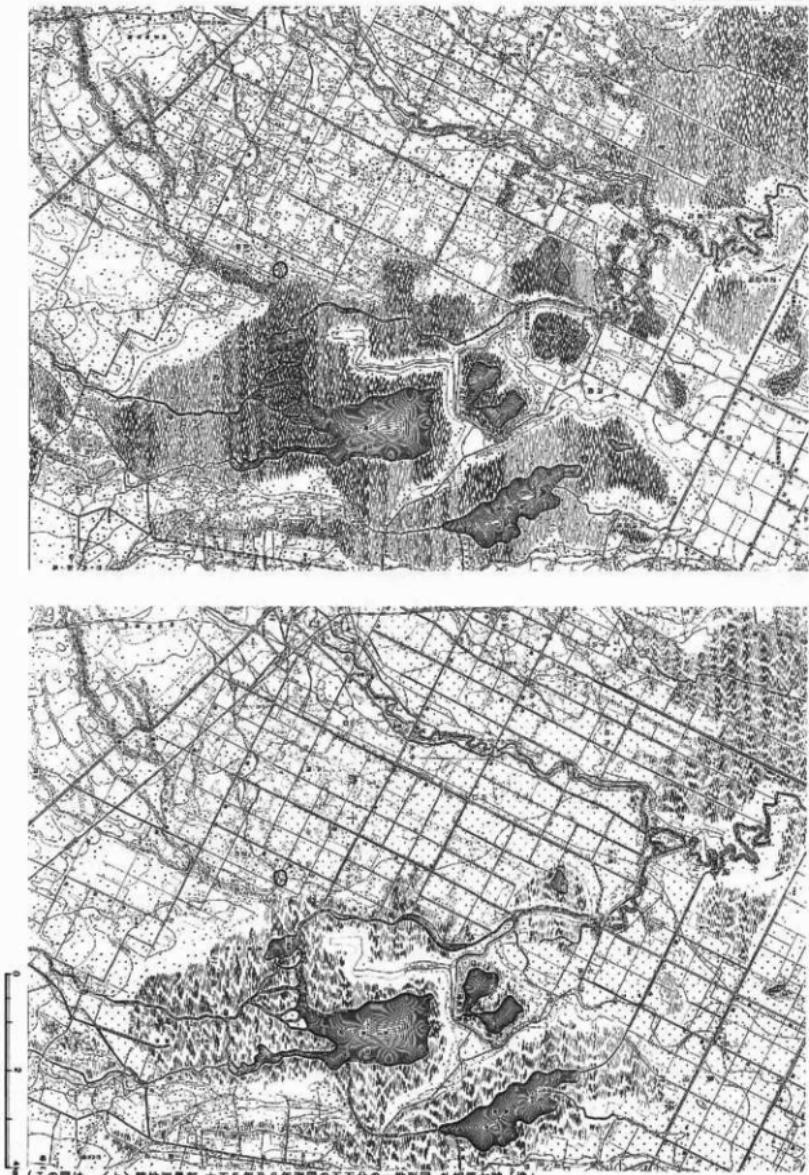
I 位置と環境



(この図は、
〈上〉陸地測量部、明治29年製版の概観五万分の一地形図、札幌第七號「長部」
〈下〉同、明治42年部分修正図、43年改版の概観五万分の一地形図、札幌第七號「漁」に
加筆し、1/100,000に縮小複製したものである。)

図 I-2 遺跡の位置(2)

I 遺跡の位置と環境



(この図は、(上) 地理測量部、大正5年及6年測量の五万分の一地形図、札幌第七號「猿」
(下) 同、昭和10年修正測五万分の一地形図、札幌第七號「恵庭」に
加筆し、1/100,000に縮小複製したものである。)

図 I-3 遺跡の位置(3)

図I-2(上)は1896年(明治29年)「陸地測量部」製版の「北海道假製五万分一図」「長都」(おさつ)である。これは「假製」という制約もあって、海岸線や河川に比べて丘陵や山地の表示は概略的なものである。行政の区画として、右下に「千歳(チトセ)村」、左端に「漁(イザリ)村」、中央部に「長都(オサツ)村」が記入してある。この図の地名表記は「千歳」を例外として、アイヌ語を片仮名・漢字で写したものばかりである。ユカンボシC15遺跡の位置は「長都(オサツ)村」のなかであり、「エカンブウシ」の表示の北側にあたる。

ユカンボシC15遺跡付近の地表のようすは、低温な原野と表現してある。川の流れは、「トウイソ川」を合わせて西から流れて来る川(無記名)と、南から流れて来る「ヲサツ川」「イヨマイ川」が合流し、「オサットー」の西端に注ぎ込むように描いてある。

ユカンボシC15遺跡にあたるところから目を西の方に向けると、標高20mと40mの間の丘陵斜面に沿って直線的に延びる道路が認められる。これは1873年(明治6年)に完成した札幌と室蘭とを結ぶ「札幌本道」、別名「室蘭街道」(むろらんがいどう)の一部である。系譜をたどれば、1807年(文化4年)の山田文右衛門にはじまる石狩と千歳とを結ぶ道路開削の後身、改良物である。1858年(安政5年)夏にはぼこの道筋を西から東へ歩いた松浦武四郎が「新道」という表現をしているのは、その前年に幅2間で開削、改修されたことの反映である。(『戊午日誌第三十三卷東西新道誌』)。かつての室蘭街道の一部は、現在国道36号と呼ばれている。

この道路よりもいくぶん低いところに「小路」の表示がある。これらはアイヌコタンや「場所」「番屋」「会所」を連絡するものであり、室蘭街道開設以前からの踏み分け道である。例えば、同じく「小路」の表示になっている「エカンブウシ」の下流の川岸からはじまり、「エニアトマム」の東側を通り、「クッタラウシ」まで南に延びる小路は、石川和助が安政4年(1857年)の視察時に通過した道筋でもある。このときの報告書『觀國錄』には、ここからは流れが速く、舟の扱いが難しいので「ヲサツ」から「千歳会所」までは陸行するのだと記してある。

さきに引用した松浦武四郎の報告には、アイヌの小屋9軒ほどがあるとの聞き書きが記されている。「エニアトマム」のいくぶん北側に認められる人家の記号は、上述の人家に間違するものであろう。

図I-2(下)は1910年(明治43年)「陸地測量部」発行の『漁(いざり)』である。

この図の全体に関しては等高線から地形が良好に読み取れるが、あいにくユカンボシC15遺跡の周辺は低平な原野であり、地形の判読は困難である。ユカンボシC15遺跡のある場所は、「長都沼」に注ぐ「長都川」の西側であり、「イカンボシ川」の表示の北側に広がる低温な原野である。地表のようすは低温な原野(沼沢地)の西側いくぶん高い場所は「満葉樹林」地として表現されている。「イカンボシ川」の表示から川を3kmほどさかのぼったところに「イカンボシ」の地名表記がある。

この図の大きな特色は、広大な原野に格子目の道路が描き込まれていることである。これは北海道府が農耕地開拓のために企画した「植民区画」の道路である。一つの区画を300間(540m)とするもので、東西に走るものと「号」と呼び、南北のものを「線」と称する。南北の道では「基線」「東3線」「東6線」が読み取れ、東西のものは「南18号」「南20号」「南24号」「南26号」が読み取れる。これらの号線道路の基準となる「基線」「零(基)号」の交点は現在の長沼町にある。

この「千歳原野植民地区画割」(号線の設定)は1893年には完了しており、翌1894年2月から「植民地払下」は始まっている。「イカンボシ川」が「東4線」と交差した南側には「文」の記号が認められる。これは1901年に開校した「長都尋常小学校」である。学校の北およそ300mの「イカンボシ川」には「水車房」の記号がある。

室蘭街道のなかほどには「大曲」という和語の地名が明記してある。さらに「山口開墾」「舞鶴」「島

津農場」も和語地名である。

「長都沼」を含む「千歳川」の流域には広大な沼沢地が描き込まれている。これは農耕地としての可否を示したものであろう。さきに「オサットー」と記されていたところは「長都沼」となっている。

図I-3(上)は1920年(大正9年)「大日本帝国陸地測量部」発行の『漁』(いざり)である。この図は複写の繰り返しのためにいさか明瞭を欠くが、「植民区画」の道路建設が進展していることが見てとれる。等高線は5m毎に描いてあり、ユカンボシC15遺跡を横切るように10mの等高線が走っている。遺跡の周辺は、東側は低湿の荒れ地、西側は「灘葉樹林」の荒れ地と表現してある。南側には「田」の記号も認められる。ここで注目すべきは「ユカンボシ川」の流路である。「ユカンボシ」の呼称もさることながら、ユカンボシC15遺跡の中を北に流れ、そして東に折れて「長都川」に注いでいる。およそ9mよりも低いところは滯水域と推定できる。

行政区画が「千歳」となっているのは、1915年(大正4年)に「千歳、長都、蘭越、烏樋舞」の村が合併して「千歳村」になったからである。水準点は、「東3線」に沿って「南18号」に10、「南22号」に13.9、「南27号」に21があり、「東6線」と「南26号」との交点に12がある。学校の位置は「東5線」と「南26号」とが交わるところに移動している。

図I-3(下)は1936年(昭和11年)「大日本帝国陸地測量部」発行の『恵庭』(えにわ)である。この図には左下に直線で伸びる「鉄道」が描いてあり、左端には「えには」駅もある。鉄道線路は1926年(大正15年)開業の「北海道鉄道札幌線」(苗穂-沼ノ端)の一部である。「植民区画」の「号線」もさらに整備されている。

この図に到って、ユカンボシC15遺跡の位置が道路との関係において具体的かつ詳細に述べることができるようになる。すなわち、発掘調査しているところは「南23号」と「東6線」とが交わるところから西側であるということである。「ユカンボシ川」の流路は、ここでも「東5線」と「東6線」との間を北流し、大きく東に折れて「長都川」に注いでいる。遺跡の周辺には「乾田」の記号が多くなっている。

学校の位置は再び移動しており「東5線」と「南22号」とが交わるところにある。

図I-4は1947年撮影の空中写真をもとにして、1997年に図化した地形図である。

河川改修の工事前なので、自然地形がよく表現されている。10mの等高線で示される島状、半島状の地形がよく残っている。号線道路で大きく区画された内側の農地は、地形の起伏にそったさらに小さな地割になっている。「南23号」と「東6線」とが交わるところは標高9.5mである。

図I-5は1962年撮影の空中写真をもとにして、1997年に図化した地形図である。

千歳川の改修工事がはじまり、長都川の下流部の直線化が進行中である。農耕地の地割はいくぶん大きくなっている。「南23号」と「東6線」とが交わるところは標高8.2mである。

現在の5万分の1地形図の図幅名称は「恵庭」(図I-1)である。千歳川、長都川などの河川改修により水位が低下し、かつての「長都沼」の湖沼は消失した。「植民区画」の道路、「防風林」が整然と直進している。改修工事による流路変更の結果、現在のユカンボシ川は「南24号」の南側を東に流れ、長都川に合流している。千歳市域においては、河川改修の工事が進展し、護岸はコンクリートブロックで覆われ、直線化した流路になっている。自然河川の姿が残るのは最上流部の恵庭公園内とその下流部のわずかな範囲だけである。「東5線」と「南22号」とが交わるところに位置している長都小学校は、中学校との併設校である。

このユカンボシC15遺跡の発掘調査が終了し、高速道路の建設工事がすすめば、東西に走る長大な構造物が、低平な地域に出現することになる。

(西田 茂)

1 位置と環境

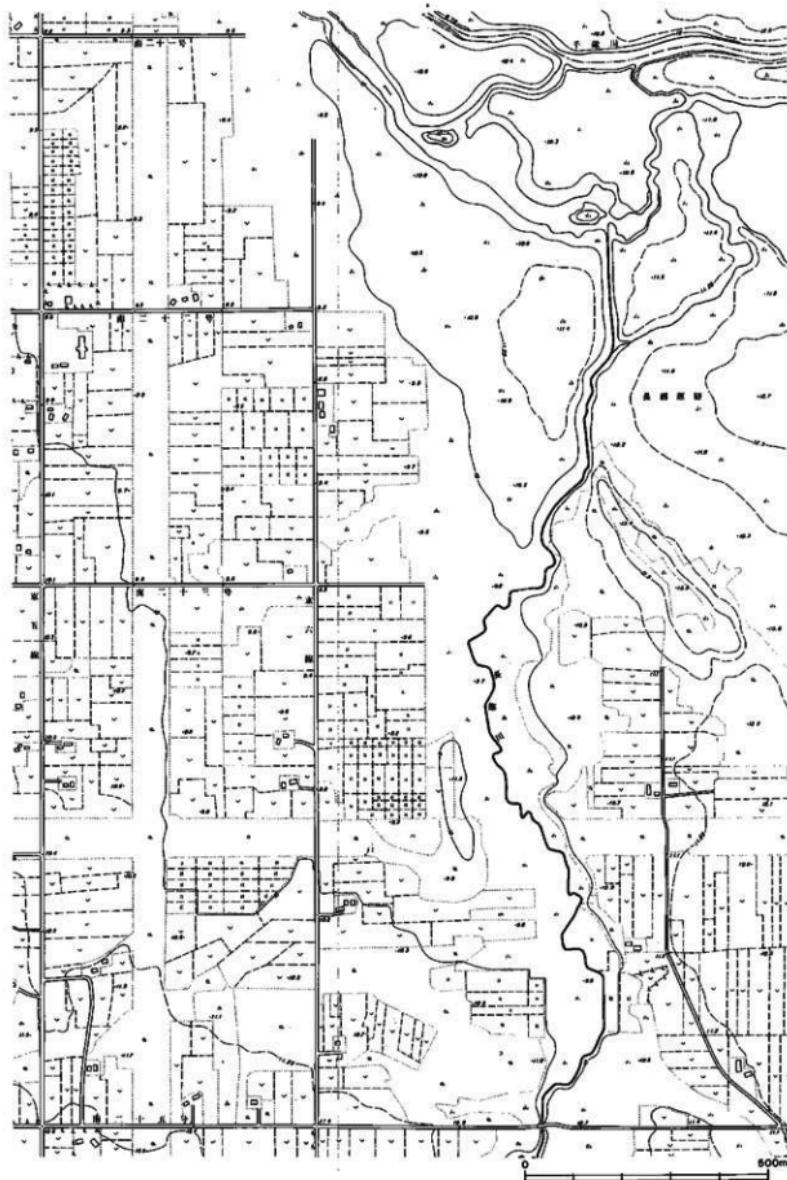
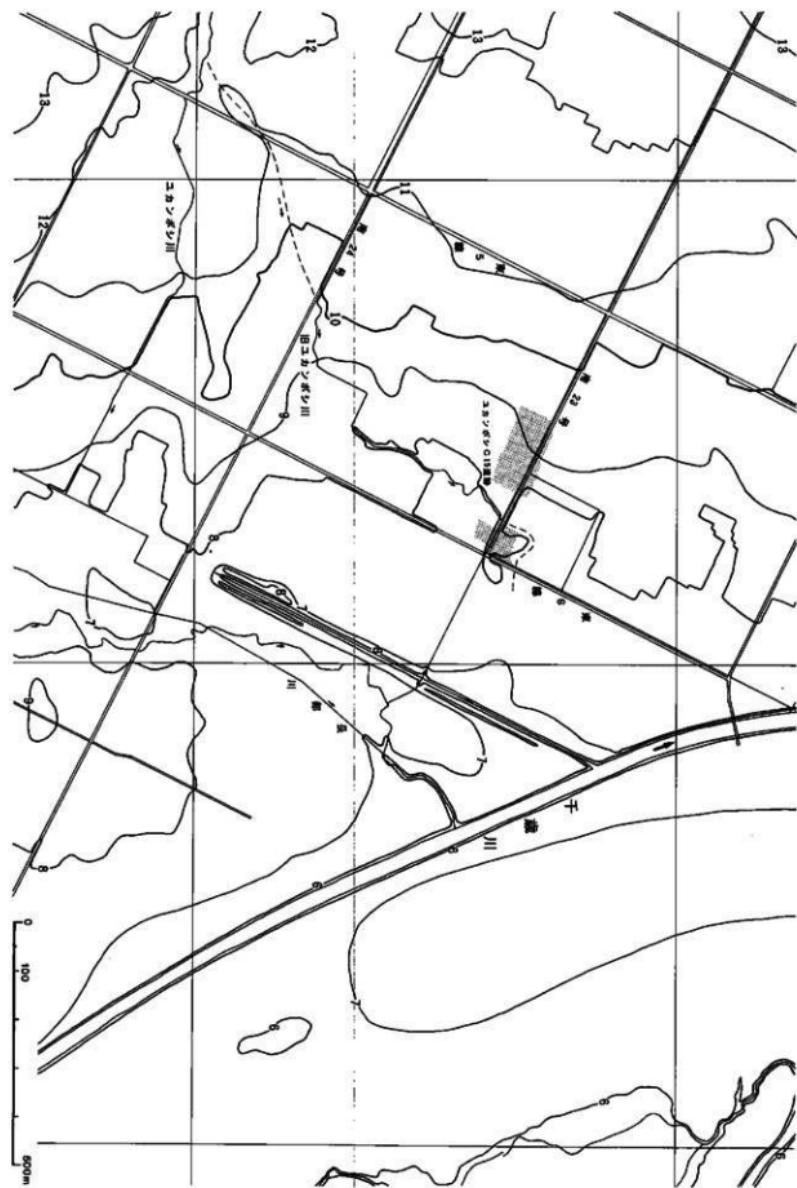


図 I-4 周辺の地形(1)



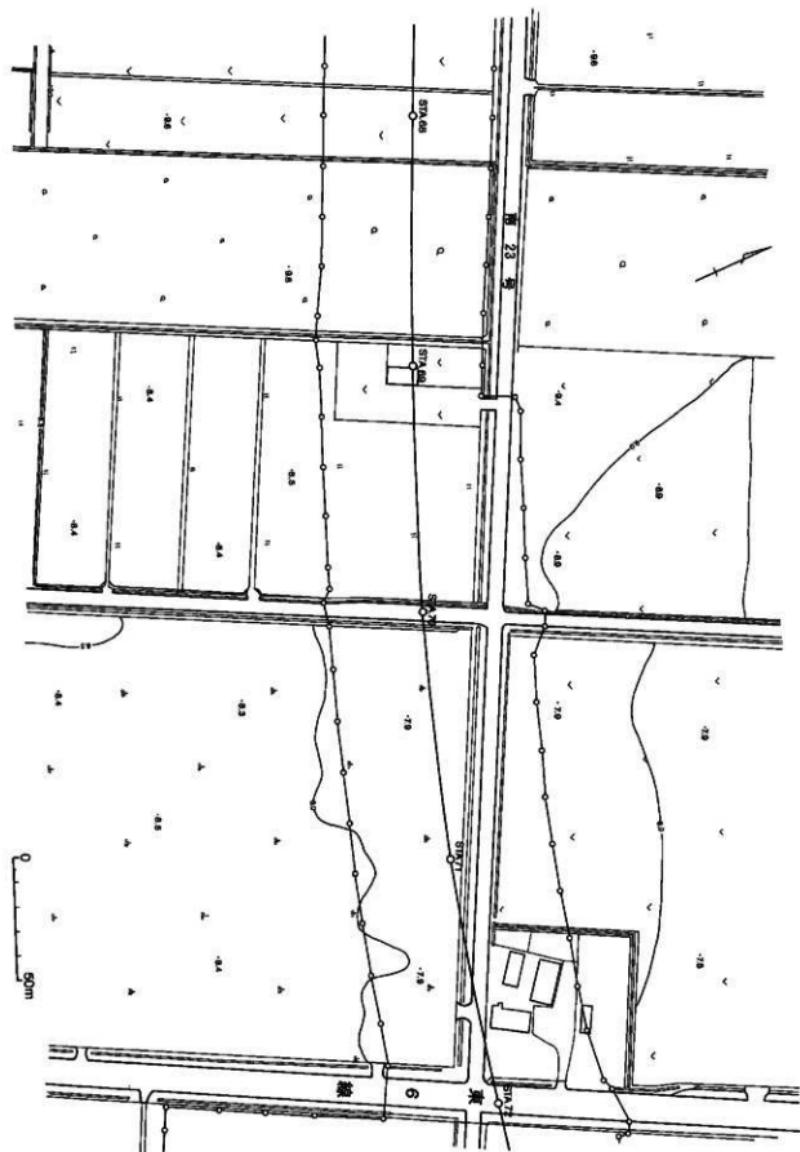
図 I - 5 周辺の地形(2)

1 位置と環境



図I-6 周辺の地形(3)

I 遺跡の位置と環境



図I-7 調査前状況図

1 位置と環境

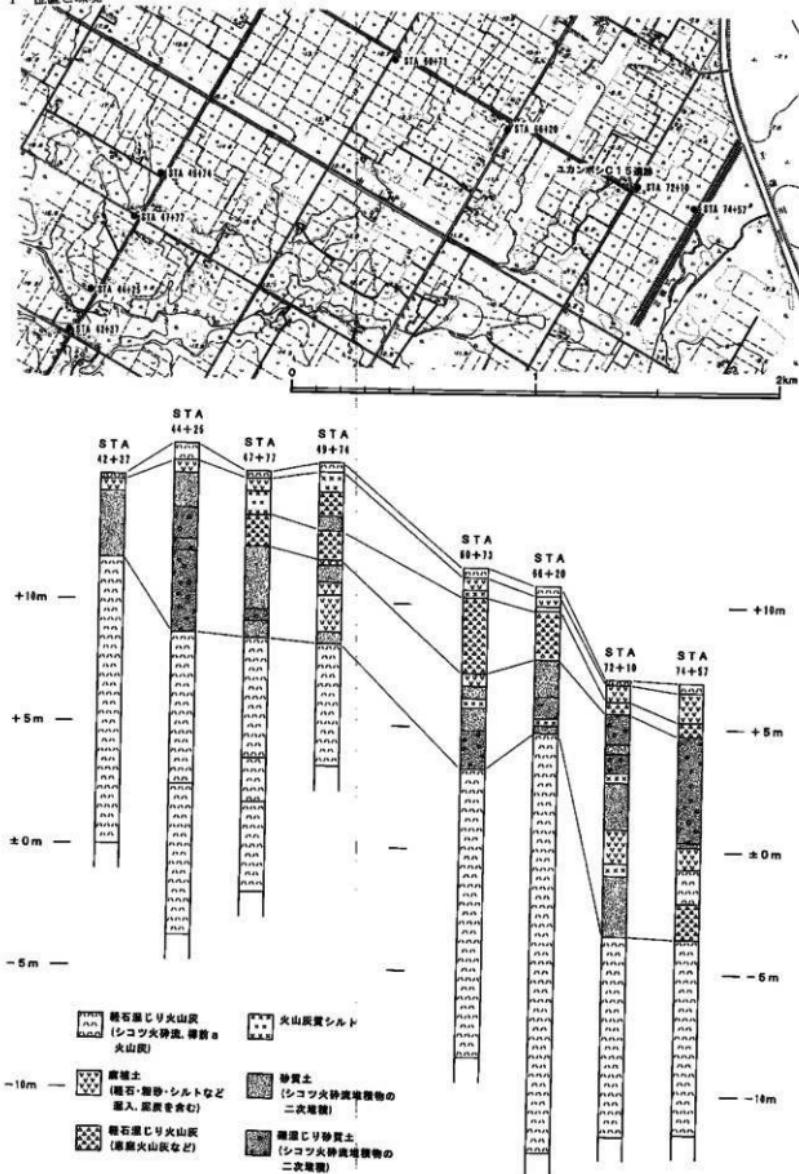


図 I-8 周辺の土層柱状略図

I 遺跡の位置と環境

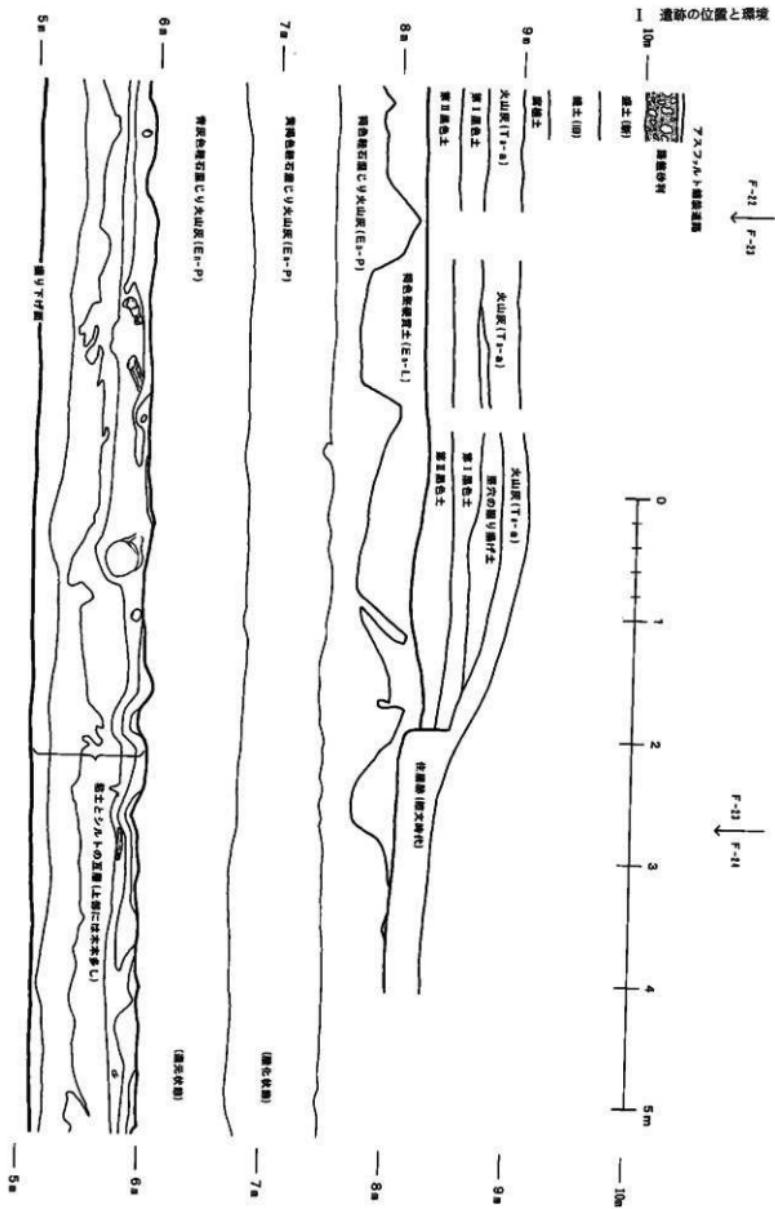


図 I-9 台地部深掘り土層略図

2 周辺の遺跡（図I-10、表I-1）

図I-10は、北海道教育委員会作成の埋蔵文化財包蔵地カードと『千歳市埋蔵文化財包蔵地分布図』(1994年、千歳市教育委員会)、恵庭市教育委員会作成の埋蔵文化財包蔵地カードなどをもとにして作ったユカンボシC15遺跡周辺の遺跡分布図である。これによると長都川の流域、ユカンボシ川の流域には、いたるところに遺跡が見つかっている。

これらの遺跡の中には大正時代から知られているものもあるが、大半は最近20年間の分布調査、発掘調査によって明らかになつたものである。遺跡の時代・時期については、調査の歴史、報告書の有無を含めて表に示した。遺跡の特色について、最近5年ほどの新しい知見を主にして記述すると、次のようになる。

なお、遺跡の名称は千歳市、恵庭市とともにアイヌ語の河川名をもとにして、河川流域ごとに数字を付して区別してある。ユカンボシに関しては上流が恵庭市(E)、下流部が千歳市(C)なのでアルファベットを加えて識別している。

旧石器時代 地図から少しあみ出した位置にあるオサツ16遺跡から土壌、焼土を伴う細石刃石器群が検出されている。細石刃核には、峰下型とオショロッコ型とがあり、オショロッコ型の点数は100点をうわまわるものである。オサツ2遺跡では焼土3か所とともに少量の細石器石器群が出土している。ユカンボシE5遺跡の低地面からも細石刃核1点がみつかっている。1997年夏の調査でユカンボシE10遺跡で、少量の細石器石器群が検出されている。これらはすべて恵庭a降下軽石層(En-a)よりも上位からの出土である。

縄文時代 早期後半から前期、中期、後期、晩期の住居跡・墓などの遺構、土器・石器などの遺物は長都川、ユカンボシ川に面した遺跡から重複して見つかる例が多い。遺構、遺物のまとまり、濃淡から判断すると少しづつ場所をずらしながら生活が営まれていたことがわかる。Tピットと呼ばれる落とし穴は、発掘調査が行われたほとんどの遺跡から検出されている。時期ごとの特色はつぎのようになっている。土器型式が判明したものは()で示してある。

早期前半 貝殻条痕文土器がオサツ16遺跡、オサツ18遺跡、ユカンボシE8遺跡から出土している。

早期後半 ユカンボシE8遺跡では住居跡、土壌墓(東釧路Ⅲ式、コッタロ式)が検出され、東釧路Ⅱ式土器も出土している。ユカンボシC2遺跡では、標高7.5~8.0mのあたりから住居跡(東釧路Ⅲ式、コッタロ式)が検出されている。ユカンボシE9遺跡では土壌(東釧路Ⅱ式)がみつかっている。ユカンボシE10遺跡からは東釧路Ⅱ式土器、ユカンボシE4遺跡では、中茶路式、東釧路Ⅳ式などの出土が報告してある。ユカンボシE5遺跡では、東釧路Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式などの土器が出土している。

縄文時代前期 前半の時期の住居跡はユカンボシC13遺跡(縄文式)、オサツ14遺跡(静内中野式)で検出されている。ユカンボシC2遺跡からは、縄文土器、静内中野式土器が出土している。静内中野式土器は、ユカンボシE3遺跡の川床低湿部分からも検出されている。ユカンボシE5遺跡では後半の住居跡(大麻5式)が調査されている。

縄文時代中期 前半の住居跡はオサツ14遺跡(円筒上層式)、ユカンボシC9遺跡(円筒上層式)で見つかっている。ユカンボシE5遺跡では中葉の住居跡(荻ヶ岡2式)が検出されている。ユカンボシC9遺跡でも中葉の住居跡(天神山式)が検出されている。後半の住居跡はオサツ2遺跡、ユカンボシE3遺跡(柏木川式)、ユカンボシE4遺跡、カリンバ2遺跡などにある。中期末の住居跡はオサツ15遺跡、ユカンボシC13遺跡で調査されている。

縄文時代後期 前半の住居跡はオサツ2遺跡、オサツ14遺跡、カリンバ4遺跡で検出されており、

これらには土器窓い炉がみられる（すべて余市式）。

後期中葉の大規模な集落がユカンボシ E 3 遺跡、ユカンボシ E 8 遺跡で確認されている。ともに多くの土壙墓もある。ユカンボシ E 3 遺跡の住居跡は 4 本の主柱穴、地床炉、出入口構造が明瞭に検出できたものが多い。ここでは住居構築時の排土置場（盛土遺構）も見つかっている。ユカンボシ E 3 遺跡とユカンボシ E 8 遺跡のあいだの川床低湿部分からも多量の遺物が出土している。ユカンボシ E 9 遺跡には土壙墓（ウサクマイ C 式）がある。

ユカンボシ C 8 遺跡からは中葉のホッケマ式土器が、ユカンボシ C 5 遺跡からは後葉の堂林式土器が多く出土している。

縄文時代晚期 前半期の遺物がユカンボシ E 7 遺跡で出土している。

統縄文時代 土壙墓はオサツ 2 遺跡、カリンバ 2 遺跡で検出されている（後北式）。天王山式系あるいは赤穴式として報告された土器が出土しているのは、ユカンボシ E 4 遺跡、ユカンボシ E 8 遺跡、ユカンボシ E 9 遺跡などである。これらには後北 C₂・D 式土器がともなっている。ユカンボシ E 9 遺跡では土製紡錘車も出土している。

ユカンボシ E 5 遺跡では「袋状掘り込み」のある土壙墓が検出されている。この土壙墓から出土した土器 2 点には底部穿孔がある。

縄文文化期 穴穴住居跡が廻地として残っており、地表面の観察によって集落であると判断されるのは、つぎのように数多い。オサツ 1 遺跡、オサツ 2 遺跡、オサツ 3 遺跡、オサツ 5 遺跡、イヨマイ 1 遺跡、長都田中遺跡、ユカンボシ C 2 遺跡、ユカンボシ C 3 遺跡、ユカンボシ C 5 遺跡、ユカンボシ C 6 遺跡、ユカンボシ C 8 遺跡、ユカンボシ C 9 遺跡、ユカンボシ C 10 遺跡、恵庭公園遺跡、ユカンボシ E 1 遺跡。

発掘調査によって集落であるとわかったのは、オサツ 14 遺跡、ユカンボシ E 7 遺跡、ユカンボシ E 10 遺跡、カリンバ 2 遺跡、カリンバ 3 遺跡である。カリンバ 3 遺跡では溝状遺構が報告されている。ユカンボシ E 4 遺跡の穴穴構造からは底部に穿孔のある土器 2 個体が出土している。

ユカンボシ C 8 遺跡からは、擦文化期初頭の土器と一緒に「南貝塚式」土器が出土している。ユカンボシ E 7 遺跡では初期の土壙墓が見つかっている。カリンバ 2 遺跡でも土壙墓が検出されている。鍛冶遺構が検出されたのはオサツ 2 遺跡である。

ユカンボシ C 1 遺跡は、かつて河野広道が苫小牧での講演において「北海道における古墳様墳墓」を説明するなかで「近年私が発見したもの」と述べている場所と推定されるところである。河川改修の結果、現在では長都川の流路のなかになってしまったが、1947年の空中写真から作った地形図によると細長い島状の高まりとなっている場所である（図 I-4）。

オサツ 2 遺跡の低温部からは、1997年夏の千歳市教育委員会の調査でも、木製遺物が出土している。同じく1997年夏、カリンバ 2 遺跡の穴穴住居跡から、銅鏡が出土した。これは白頭山-苫小牧火山灰の下からの検出であり、9世紀後半から10世紀初頭の時期が推定されている。

アイヌ文化期 チャシは釜加（カマカ）、長都（オサツ）、都（ミヤコ）の 3 か所がある。1997年5月7日、都のチャシと図示してあるところよりも南側、市道「南25号」に並行して、幅 1 m 深さ 1 m ほどで長さ 100 m 余りの溝が掘られていた。溝の壁には上部の幅 2 m あまりで、地表からの深さが 0.7 m ほどの略三角形をなす黒色土の落ち込みを 2 か所観察できた。黒色土の落ち込み間の距離は 20 m ほどであった。この長大な溝は煙地防風のためのイチイ植樹のためのものであり、翌日には埋めもどされた。

発掘調査で土壙墓に遭遇したものは、オサツ 2 遺跡、ユカンボシ E 3 遺跡、ユカンボシ E 4 遺跡、

2 周辺の遺跡



(この図は、千歳市教育委員会発行「千歳市埋蔵文化財名録地分布図」のNo.24・25・26と
恵庭市教育委員会作成の恵庭市埋蔵文化財名録地分布図の該当図に加筆し、1/30,000に縮小複製したものである。)

図 I - 10 周辺の遺跡

表 I-1 周辺の遺跡

地	遺跡名	種別	時期	発掘調査等	文献記号等
1	カリントー	集落跡	縄文		1 215
2	豊加のチャシ	チャシ跡	アイヌ	1965 石川徹・大塚利夫	1 215
3	ユカシボシC1	墓	縄文、アイヌ	1947.5 河野広道 No.11ほか	4・5
4	ユカシボシC2	兔形跡・墓・遺物包含地	縄文、アイヌ	1959 石川徹。1988.6 佐藤勝 1992 国立文化センター、1994 千歳市 千歳市	2 216・6 (遺跡実験) 7・8・新規時
5	ユカシボシC3	兔形跡	縄文、後・古	1990 千歳市教委	9・整理中
6	ユカシボシC4	兔形跡	縄文、後・古		
7	ユカシボシC5	兔形跡・墓	縄文・後・古、後・古	1950.9 千歳市教委	9・10・整理中
8	ユカシボシC6	兔形跡・墓	縄文・後・古、後・古	1950 千歳市教委	9・整理中
9	ユカシボシC7	兔形跡	縄文		
10	ユカシボシC8	兔形跡	縄文・後・古、後・古	1951 千歳市教委	10・整理中
11	ユカシボシC9	兔形跡	縄文・後・古、後・古	1955 国道埋文センター	11
12	ユカシボシC10	遺物包含地	縄文・後・古、後・古		北海道式古墳?
24.3	ユカシボシC11	遺物包含地	縄文・後・古	1992 千歳市教委	10・整理中
24.4	ユカシボシC12	遺物包含地	縄文後期		
25.1	ユカシボシC13	遺物包含地	縄文・後・古、後・古	1951 千歳市教委	12
25.9	ユカシボシC14	遺物包含地	縄文		
26.3	ユカシボシC15	兔形跡・墓・低湿地ほか	縄文・後・古・後・古、7世紀	1986.91~(国)道埋文センター	13・14・15 986.9.16・987.3.16
13	オサツ1	兔形跡・墓	縄文、アイヌ	1950 河野広道 No.3ほか	
14	オサツ2	兔形跡・墓	縄文、後・古	1992.9.3~34 (国)道埋文センター	2 218・16・17 986.9.16
15	オサツ3	兔形跡	縄文		
16	オサツ4	遺物包含地	縄文・後・古		
17	オサツ5	兔形跡	縄文・後・古、7世紀		1 23 (整理)
18	オサツ6	遺物包含地	縄文		
19	オサツ7	遺物包含地	縄文		
20	オサツ8	遺物包含地	縄文		
15.0	オサツ9	兔形跡	縄文		
15.1	オサツ10	兔形跡	縄文		
15.2	オサツ11	兔形跡	縄文		
24.5	オサツ14	兔形跡・遺物ほか	縄文・後・古、7世紀	1994 (国)道埋文センター	16
24.8	オサツ15	兔形跡	縄文・中・後期	1995.9.6~97 (国)道埋文センター	16・17・整理中・新規時
26.6	オサツ17	兔形跡・遺物	縄文・中・後期、縄文		
27.1	ボンオサツ1	高・遺物包含地	縄文・後・古	1995.9.6 北海道文化財保護協会	20・21・整理中
21	長都のチャシ	チャシ跡	アイヌ	1965 千歳市教委調査	1 23 (整理)・2 215・3
22	イヨマイ1	振跡・高ほか	縄文、アイヌ		
23	イヨマイ2	遺物包含地	縄文後・後期		
24	イヨマイ3	兔形跡	縄文		
25	イヨマイ4	兔形跡ほか	縄文・後・古		
26	長都田中	兔形跡	縄文、7世紀	1953 Howard A. MacCord	22
27	シマコツナイ1	遺物包含地	縄文中期		
28	シマコツナイ2	遺物包含地	縄文中期・後期		
29	シマコツナイ3	遺物包含地	縄文・後期		
30	シマコツナイ4	兔形跡	縄文		
31	シマコツナイ5	遺物包含地	縄文後期		
32	クヨリナリナリナリ1	兔形跡	縄文		
33	クヨリナリナリナリ2	兔形跡	縄文		
34	カマクンナイ	兔形跡	縄文		
35	郡	遺物包含地	縄文後期		チャシ跡?
36	郡のチャシ	チャシ跡	アイヌ	1966 石川徹・大塚利夫	1 215
月原鹿公園	兔形跡	縄文		1963 石川徹・大塚利夫	23 (整理)
ミユカシボシE1	遺物包含地	縄文・後・古			
ミユカシボシE2	遺物包含地	縄文・後・古			
ミユカシボシE3	兔形跡・墓	縄文・後・古、7世紀	1991.9.2 千歳市教委	24・25・26	
ミユカシボシE4	兔形跡・高ほか	縄文・後・古、7世紀	1991 (国)道埋文センター、1995 佐藤勝	27・34・新規時	
ミユカシボシE5	兔形跡・高ほか	縄文・後・古、7世紀	1991.9.2 (国)道埋文センター、1993 佐藤勝	29・30	
ミユカシボシE6	遺物包含地ほか	縄文・後・古、7世紀	1990 千歳市教委	31・新規時	
ミユカシボシE7	兔形跡・高ほか	縄文・後・古、7世紀	1994 佐藤勝、1996.9.1996.9.7 (国)道埋文センター	33・14・32・33・新規時	
ミユカシボシE8	兔形跡ほか	縄文・後・古、7世紀	1998.10.31 千歳市教委	34	
ミユカシボシE9	高ほか	縄文・後・古、7世紀	1992.9.4 千歳市教委	25・35	
ミユカシボシE10	高ほか	縄文・後・古、7世紀	1990 佐藤勝、1997 (国)道埋文センター	34・35・新規時	
ミユカシボシE11	遺物包含地ほか	縄文中期	1995 千歳市教委	37	
ミユカシボシE12	遺物包含地	縄文・後・古			
ミユカシボシE13	高ほか	縄文・後・古	1986.8.7-9.5・9.6-11~ 千歳市教委	26・31・38・39・新規時	
ミユカシボシE14	高ほか	縄文・後・古	1976.8.24 木村英明	40	
ミユカシボシE15	遺物包含地	縄文	1996 千歳市教委	41	
ミユカシボシE16	遺物包含地	縄文			

表1-1の文献

- 1 大橋利夫・石川徹 1957 「千歳遺跡」千歳市教委
 2 宇田川洋校注 1981 「河野常言ノート 古事記」
 3 北海道教育委員会 1983 「北海道のチャン」
 4 河野広道 1954 「古小牧地方古代史」古小牧市教委
 (1972 「経北文化論」河野広道著作集Ⅱ 所収)
 5 宇田川洋編 1984 「河野広道ノート 古事記」
 6 石川徹 1979 「続千歳遺跡」千歳市教委
 7 千歳市教委 1983-90 「ユカンボシ 2 遺跡発掘調査概要報告 1・2」
 8 (同) 北海道埋蔵文化財センター 1994 「千歳市ユカンボシ C 2 遺跡」北埋調報85
 9 千歳市教委 1991 「ユカンボシ 3・5・6 遺跡発掘調査概要報告」
 10 北海道教育庁文化課 1991 「市町村における発掘調査の概要(平成3・4年度)」
 11 (同) 北海道埋蔵文化財センター 1996 「千歳市ユカンボシ C 9 遺跡」北埋調報100
 12 千歳市教委 1992 「ユカンボシ C 13 遺跡における考古学的調査」
 13 (同) 北海道埋蔵文化財センター 1997 「調査年報9 平成8年度」
 14 (同) 北海道埋蔵文化財センター 1998 「調査年報10 平成9年度」
 15 北海道考古学会 1991 「1991年度 遺跡調査報告会資料集」
 16 (同) 北海道埋蔵文化財センター 1995 「千歳市オサツ 2 遺跡(1)・オサツ14 遺跡」北埋調報96
 17 (同) 北海道埋蔵文化財センター 1996 「千歳市オサツ 2 遺跡(2)」北埋調報103
 18 北海道文化財保護協会 1990 「千歳市オサツ 15・16・18 遺跡」北文保調報3
 19 北海道文化財保護協会 1991 「千歳市オサツ 15 遺跡(2)」北文保調報6
 20 北海道文化財保護協会 1996 千歳市ポンオサツ 遺跡・ケネチ 5 遺跡「北文保調報2」
 21 北海道文化財保護協会 1997 「千歳市ポンオサツ 遺跡(2)・オサツ18 遺跡(2)・ケネチ 5 遺跡(2)」北文保調報5
 22 Howard A. MacCord 1980 [CULTURAL SEQUENCES IN HOKKAIDO] [Proceedings of the United States National Museum] 3443
- 23 大橋利夫・石川徹 1966 「恵庭遺跡」恵庭市教委
 24 恵庭市教委 1982 「ユカンボシ E 3 遺跡 A 地点・ユカンボシ E 8 遺跡 B 地点」
 25 恵庭市教委 1992 「ユカンボシ E 3 遺跡 B 地点」
 26 恵庭市教委 1993 「ユカンボシ E 3 遺跡・ユカンボシ E 9 遺跡」
 (同) 北海道埋蔵文化財センター 1992 「恵庭市ユカンボシ E 4 遺跡」北埋調報15
 28 北海道教育庁文化課 1991 「市町村における発掘調査の概要(平成7年度)」
 (同) 北海道埋蔵文化財センター 1993 「恵庭市ユカンボシ E 5 遺跡」北埋調報11
 恵庭市教委 1994 「ユカンボシ E 5 遺跡 低地帯における調査」
 31 北海道教育庁文化課 1997 「市町村における発掘調査の概要(平成8年度)」
 恵庭市教委 1995 「ユカンボシ E 7 遺跡」
 33 北海道考古学会 1996 「1996年度 遺跡調査報告会資料集」
 34 恵庭市教委 1989 「ユカンボシ E 8 遺跡」
 35 恵庭市教委 1996 「ユカンボシ E 9 遺跡 B 地点」
 36 恵庭市教委 1997 「ユカンボシ E 10 遺跡」
 37 恵庭市教委 1996 「シマコツナイ E 1 遺跡」
 38 恵庭市教委 1987 「カリンバ 2 遺跡」
 39 恵庭市教委 1989 「カリンバ 2 遺跡 第1地点における調査」
 40 木村英明 1985 「いわゆる北大式土器とその文化に関する基礎的研究(予報)」
 41 恵庭市教委 1997 「カリンバ 4 遺跡」
- * 千歳市教委 1979 「千歳市における埋蔵文化財(上)」市文調報V
 * 千歳市教委 1994 「千歳市埋蔵文化財包蔵地分布図」
 * 北海道教育委員会生涯学習部文化課 埋蔵文化財包蔵地カード
 遺跡は包蔵地カードの登載番号による

カリンバ2遺跡などである。建物跡が検出されているのはユカンボシ C 2 遺跡、ユカンボシ C 4 遺跡、ユカンボシ C 5 遺跡、カリンバ2遺跡である。

オサツ2遺跡からは鉈が、ユカンボシ C 9 遺跡では鉄鍋、山刀、曲鎌などが出土している。ユカンボシ E 8 遺跡からは内耳鉄鍋、集石の出土が報告してある。カリンバ4遺跡では建物を推測させる小柱穴が検出されている。ここからは刀、鉈、刀子などの鉄製品が出土している。ユカンボシ E 5 遺跡では小土壤に伏せた鉄鍋が出土しているが、これは開拓期の遺物の可能性もあるとのことである。

オサツ2遺跡の低湿部からは、板縫船舟敷部、櫛、中柄、箒、串、漆椀、下駄、立杭、樹皮製品などの木製遺物が多量に検出されている。オサツ14遺跡では、焼土と建物跡が検出され内耳鉄鍋、串、割り材などの木製遺物も出土している。

(西田 茂)

II 調査の方法、遺物の分類

1 調査の方法

発掘区の設定（図II-1）

現地調査の基本図は、北海道横断自動車道工事予定図1,000分の1を使用した。発掘区の設定は、以下のようにおこなった。

まず、工事予定中央線のSTA 69、STA 70をそれぞれM-10、M-30とする。これを基軸線として5mの方眼を設定する。この5mの方眼は、北西端の交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称される（例：D-62）。さらにこの5mの方眼は2.5m四方に分割されて小発掘区となり、反時計まわりに、北西端からa、b、c、dと呼ぶ（例：D-62-b）。

この方眼の平面直角座標は、第図系でつぎの通りである。

STA-69 (M-10) : X = -124295.5363, Y = -49502.1207

STA-70 (M-30) : X = -124332.6406, Y = -49409.2737

調査予定地の遺跡内容の推定（図II-1、III-1・2）

試掘調査によって推定される遺跡内容は以下のようなものであった。

a : 調査区域は、東と西二つの地区に分かれている。b : 広い調査範囲は、低温部を多く含んでいる。c : 台地部分とでも称すべき高まりでは農耕地として遺物包含層が削平を受けたところもある。d : ほぼ全面に樽前a火山灰がみられる。その厚さは30cmほどである。e : 低温部では木製遺物の検出が予想される。その時期はアイヌ文化期、あるいは擦文文化期であろう。f : また、縄文時代後期の土器破片も出土している。

調査計画と結果

広い調査範囲であるから、発掘は2か年あるいは3か年に渡るものとなるであろう。このような長期の発掘において良好な調査記録を残すには、より周到な計画が必要となる。とりわけ調査範囲の大半は低温部であり、湧水や滲水が予想される。結果的には、除水、排水にはウエル・ポイント法で対処し、安全確保とともに、遺物の検出にあたっても台地上の発掘に近い形で進行できた。

2か年の調査によってその8割（計画面積比）が終了したことになる。

1996年の発掘調査（日誌抄）

5月29日(木)東の地区で建設用重機を使っての表土の除去作業を行う。現表土、盛り土、旧表土、樽前a火山灰などを剥ぎ捨てる。

6月5日(火)高速道路工事施工業者（大林組、東洋建設共同企業体）と現地で具体的な打合せを行う。調査事務所、現地整理作業室などの設置場所、電気、水道の導配線、排水の処理、発掘調査の廃土の扱い方法、ベルトコンベアの設置と移動、電源の確保など。

6月17日(月)~21日(金)鋼矢板の設置確認。木製遺物整理作業室の砂利敷、排水施設などの整備。カマ場の確保、ベルトコンベア、排水ポンプなどの設置をおこなう（図II-2）。

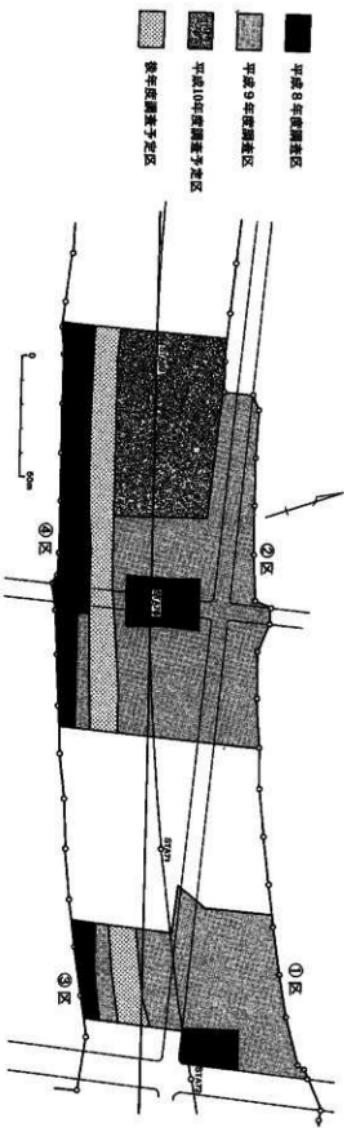
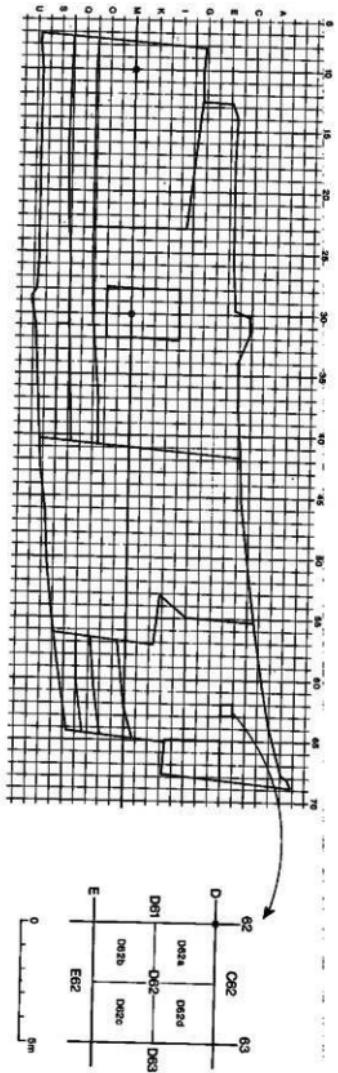
6月24日(月)~29日(土)発掘用器材、諸物品の搬入。発掘前の写真撮影、地形測量、安全確認などのち、作業員の移動を行い発掘調査を始める。木製遺物、土器、石器の出土がはじまる。土層、遺物包含層、火山灰の層序関係の把握に努める。本格的な調査になる。

7月1日(月)~6日(土)降雨溜水のための排水溝を作り発掘を行う。0B層、I B層、II B層を順次掘り下げ、自然倒木の判別、廃棄を行う。0B層、I B層、II B層の遺物取上げを始める。

7月8日(月)~13日(土)東の地区的調査が終了に近づく。西の地区的準備作業を行う。

7月22日(月)~27日(土)東の地区的調査を終了し、西の地区を掘り始める。

1 調査の方法



図II-1 年度別調査区図・グリッド設定図

7月29日(月)～8月3日(土)30日の豪雨のために調査区域が水没する。木製遺物は製品とみなせるものが多く出土し始める。また、立杭列の検出は、建物跡を推定できる。

8月5日(月)～9日(金)木製遺物の写真撮影、実測、取上げ、水洗いを順次行う。曲げ物の取上げ方法を検討し、発泡ウレタンで周囲を固めることにする。お盆休みに備えての保全作業を行う。

8月19日(月)～24日(土)調査再開。22日からの雨で調査区域水没。23日の早朝が激しい。「…夜半からの豪雨でI-31区の23号道路沿い側溝の土管や暗渠連結部から水漏れが始まった(6:30)。オランダの少年状態で水止めをしたが、効果なく。水量が増加し側溝決壊のおそれがあったため、土嚢を積む(-7:30)。その間に共同企業体へ連絡(7:00)。土嚢を積み重機で土砂を投入し、一段落(9:20)…」

8月26日(月)～9月28日(土)木製遺物の出土が多くなる。取上げを順次進める。

9月31日(月)～10月5日(土)付替道路の工事関連で、調査範囲の拡大検討を求められ、了解する。

10月7日(月)～12日(土)木製遺物の検出、取上げを順次進める。範囲拡大区域の調査を始める。

10月14日(月)～19日(土)木製遺物のパック詰め作業を本格化し、収集準備を始める。

10月21日(月)～26日(土)発掘作業を順次縮小し、収集のための作業を行う。

10月28日(月)～31日(木)遺物を札幌の整理作業場所へ搬送する。物品、器材を整理し、次年度調査計画のあらまし検討を終えて、札幌に収集する。

1997年の発掘調査(日誌抄)

4月のうちに、調査区域を取り囲むように鋼矢板を打ち並べ、ウェルポイント、排水ポンプ、ベルトコンベアなどを設置する。東地区の一部では建設用重機を使って、表土の除去を行う(図II-2)。

5月6日(火)7日(水)札幌を出発してユカンボシC15遺跡に到着。調査事務所内外の整備を行う。

5月8日(木)人力による表土の除去作業など、発掘をはじめる。調査員7名、作業員129名である。これでも作業員不足なので随時採用ということにする。

5月10日(土)東地区、西地区を同時に発掘。東地区にて竪穴住居の凹地から「送り場」を確認する。

5月12日(月)～17日(土)鉄製品、木製遺物、土器、石器等の多量出土が始まる。木製品では中柄、制裁棒、漆椀、下駄も出土する。東地区では住居跡、土壤、焼土などの検出が相次ぐ。17日(土)朝8:50、調査区内の仮設電柱に落雷があり、電線が切断され停電となる。FAXが火を喰き電話不通となる。

5月19日(月)～24日(土)東地区では遺構、包含層の調査が進展する。擦文時代の土塙墓、縄文時代のTピットの検出が相次ぐ。多数の攪乱の小土塙は番犬の繁ぎ杭の跡と理解する。

5月27日(火)北海道教育委員会文化課(調査員:種市、藤原)による範囲確認のための(追加)試掘調査が行なわれる。今回の区域での調査範囲拡大は不要との結論である。

5月28日(水)に周溝のある墓(X-1)と呼ぶことになる遺構の調査方法の検討を始める。

5月29日(木)西地区で重機を使っての表土除去を開始する。とりあえずは東側から行う。

6月11日(土)市道南23号を切り替え、アスファルト、路盤砂利などを除去して、発掘を始める。

6月24日(火)周溝のある墓の調査に着手する。北海道教育委員会文化課(調査員:大沼)による範囲確認のための(追加)試掘調査が行なわれる。今回の区域での調査範囲拡大は120m²である。

6月30日(月)西地区の市道部分に竪穴住居の凹みを確認する。空中写真による地形測量を検討する。

7月10日(木)周溝のある墓などの空中写真撮影。15日(火)高所作業車を使っての写真撮影。

7月18日(金)東地区的調査を終了し、以後西地区的調査を行う。西地区は木製遺物が多量である。

8月西地区的低湿部では木製遺物が多量に出土。台地部では住居跡、土壤などの検出が相次ぐ。

9月低湿部では木製遺物がさらに多量に出土。船材が目につく。台地部では遺構の検出が相次ぐ。

1 調査の方法

10月前半で当初計画範囲の発掘を終了する。後半は遺物整理、物品、機材の整理、遺物搬送を行う次年度の調査計画のあらましを検討して、月末に札幌に搬収する。

2か年の調査経過の概略は以上のことであった。東地区、西地区ともにそれぞれ調査区域が2か所づつあり、準備、発掘、最終確認、後始末の繰り返しであった。

発掘調査の進行と手順 東地区、西地区ともに広い調査予定地であるから遺構・遺物の全体的な濃淡を早めに把握する必要がある。はじめ5m四方の発掘区を飛び飛びに四分の1程度発掘した(25%調査)。これをもとに遺構・遺物の分布状況を推定し全体の調査に取りかかった。

低温部ではI B層とII B層とは間層(Ta-c層)によって区別できるので分層発掘とした。さらに遺物包含層であるI B層とII B層の発掘はそれぞれに細かく分層しておこなった。Ta-c層の希薄な台地部では、I B層にTa-cが混入することによって分層しえた。これらの調査は人力による手掘り作業で、発掘区ごとにスコップ、ツルハシ、移植ゴテ、竹ヘラなどを用いて遺物の多寡、土層の変化をみきわめながらおこなった(包含層調査)。

遺構の調査 25%調査、包含層調査時に住居跡、土壤などを推定できたときは、その平面形の長軸と短軸方向に土層観察用の土手を残して掘り下げた。想定される床面の検出は、土層観察用の土手に接して小さな先行溝を掘るなどして、慎重に行った。遺物は、出土の状況を詳細に記録化してから取り上げた。時期判定、遺構の判断は、Ta-a、Ta-cなどの火山灰混入の有無でなしたものもある。

遺物の取り上げ 土器、石器等の遺物は出土の状況に応じて、位置や土層を記録してから発掘区ごとに取り上げた。とりわけ本来的な遺物包含層と考えられるI B層、II B層・II B下層から検出される遺物については、出土状態の詳細な記録化をおこなった。集中的に出土する土器破片は、破損の状況を十分に検討して接合・復元作業を考慮した取上げにつとめた。微細遺物の密集部分では、水洗いによって取り上げたところもある。

En-a層も手掘り作業でいくつか試掘溝を掘ったが、この土層からは遺物が検出されなかった。さらに重機を使ってEn-P層の火山灰層を除去した後、手掘り作業でF-22・23・24に試掘溝をもうけたが、この土層からは遺物が検出されなかった(旧石器時代の遺物確認調査)。

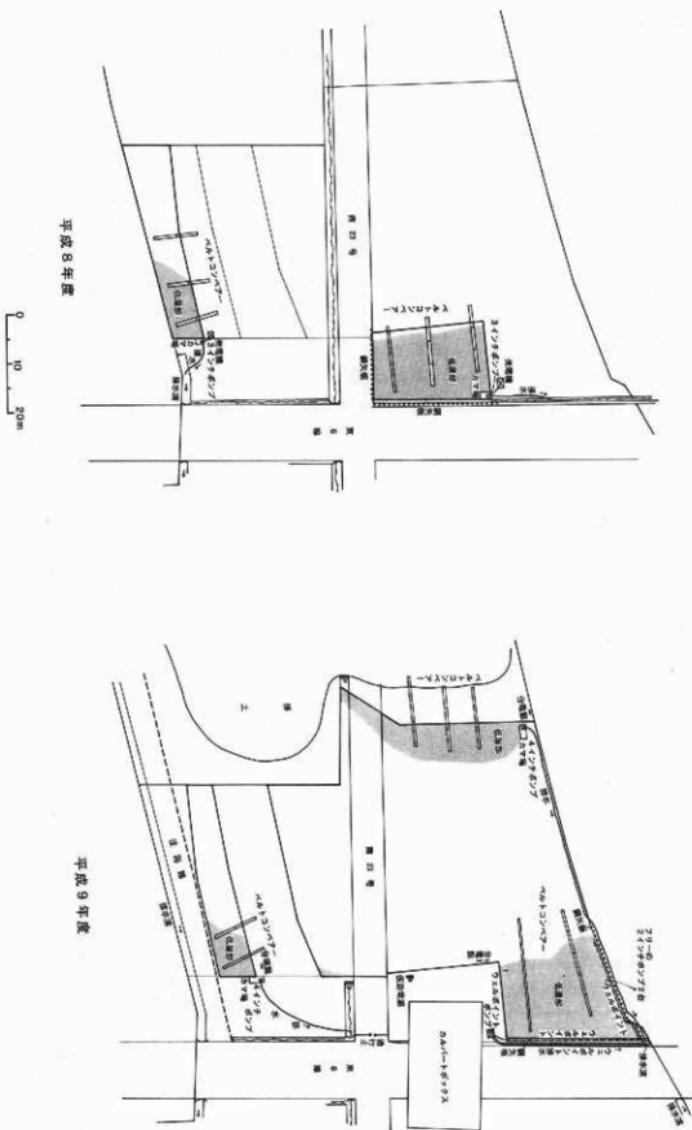
木製遺物の発掘、取上げ 発掘作業はスコップ、移植ゴテ、竹ヘラなどを用い、慎重を期した。木製遺物は乾燥による変形、変質が著しいので、これを防ぐために検出の後、速やかに水を含んだ晒布で保全しさらにビニールで蔽った。出土状態、位置の記録化の後に取上げるのは土器、石器等と同じである。取上げたものは、簡易ブルーや遺物収納箱などで水に浸けて、変形、変質を防いでいる。

木製品の保存処理は美々8遺跡低湿部での方法と同じである。詳細は次回以降に記す予定である。

遺物整理の方法 出土した遺物は、野外作業と並行して現地で水洗・注記作業をおこなった。小片あるいは微細なものを除いて、大多数の遺物には発掘区と出土層、および取上げ番号を注記した。現地では遺物収集帳点検・補正(遺物台帳作成)、大まかな遺物の分類までおこなった。冬期の室内整理作業で、土器・木製品の接合・復元作業、石器や黒曜石剥片類の接合、土器・石器・木製遺物の実測・製図、集計およびそのほかの記録類の整理をおこなった。

土器の接合・復元作業においては、破片個々の出土位置を明記することによって、土器の破損状況を明らかにすることにつとめた。遺跡は縄文時代、縄繩文時代、擦文文化期、アイヌ文化期において繰り返しが利用する場所であったが、各時期における占地が異なっており、さらにTa-a火山灰の厚い堆積があり耕作等による搅乱を免れたことも幸いして、遺構・遺物の残存状態が比較的良好であった。このために、土器破損の様子を把握できたものが多い。したがって、いくつかの小地域において住居跡、土壤と多量の土器との相互の関係について、明確な結論が得られたものがある。(西田)

II 調査の方法、遺物の分類



図II-2 東地区低温部調査機材配置図

2. 土層の区分

調査にあたっての土層区分は、基本的には東地区・西地区とも通観できるものとした。さらに台地と低湿部の有機的連続性が明確なものとなるよう意識した。図II-3はこれを模式化した柱状図である。次に土層図の位置関係を示し、その特徴を示す。

図II-4 土層図(1)

アーア'イーイ'は西側低湿部と台地部肩のEライン東西セクション。ポイント「イ」でずれているのは、低湿部セクションの良好な面を選択したためである。Ta-aと搅乱土除去後の図。IB3層中にB-Tmが断続的に確認できる。Ta-cは確認できず、II黑層相当は砂と泥の互層である。

ウーウ'は台地部から東側低湿部のEライン東西セクション。平成8年度調査時の図に平成9年度調査の修正を加えた。IB3層中にB-Tmがほぼ連続して確認できる。Ta-cはc₂しか確認できないが、腐植土としてのII黑層や、低湿部と台地のI黑層連続性・分層が見てとれる。

図II-5 土層図(2)と図II-6 土層図(3)

2枚5本の図連続でアーア'。東側低湿部の調査範囲東壁のセクション。平成8年度と9年度がEラインで接合。9年度調査の修正を加えた。Ta-a除去後の図。IB3層中にB-Tmがほぼ連続して確認できる。Ta-cはc₁・c₂とその間層腐植土が確認できる。腐植土や粘土化した状態のII黑層が観察できる。IB3層とIB4層の間にあった流路の跡やそこへの泥と砂の堆積、倒木痕も確認できる。II黑層対応の古い倒木痕もみられる。

図II-7 土層図(4)

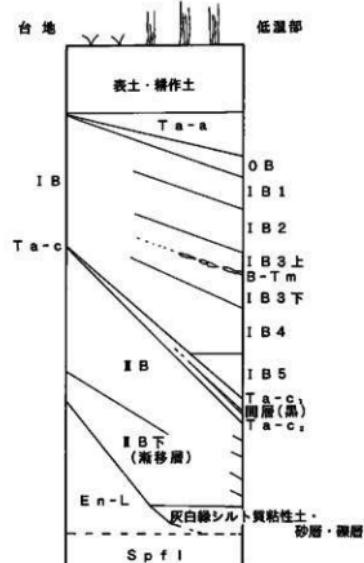
アーア'は台地中央部のG-I間の南北セクション。台地の標準的な土層である。

イーイ'は西側低湿部の南北セクションの一部である。調査範囲と合わないのは、東西セクションと直交した面で固化したためである。IB3層中にはB-Tmがほぼ連続して確認できる。やはり、Ta-cは確認できず、IB4層以下とII黑層相当は砂と泥の互層である。

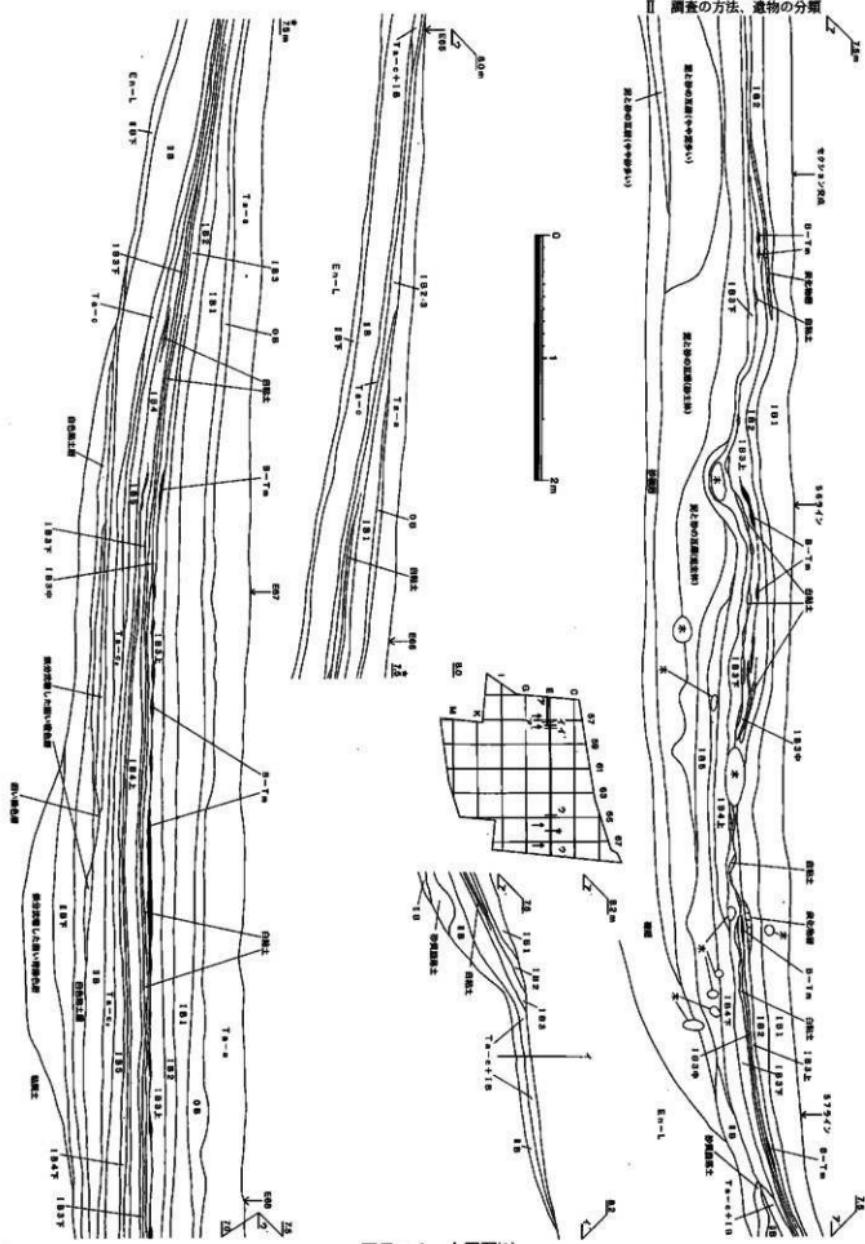
図II-8 土層図(5)

アーア'は南側低湿部の調査範囲南壁のセクションの一部。平成8年度調査時の図に平成9年度調査の修正を加えた。IB3層中にB-Tmが断続的に確認できる。II黑層は薄く粘土化している。

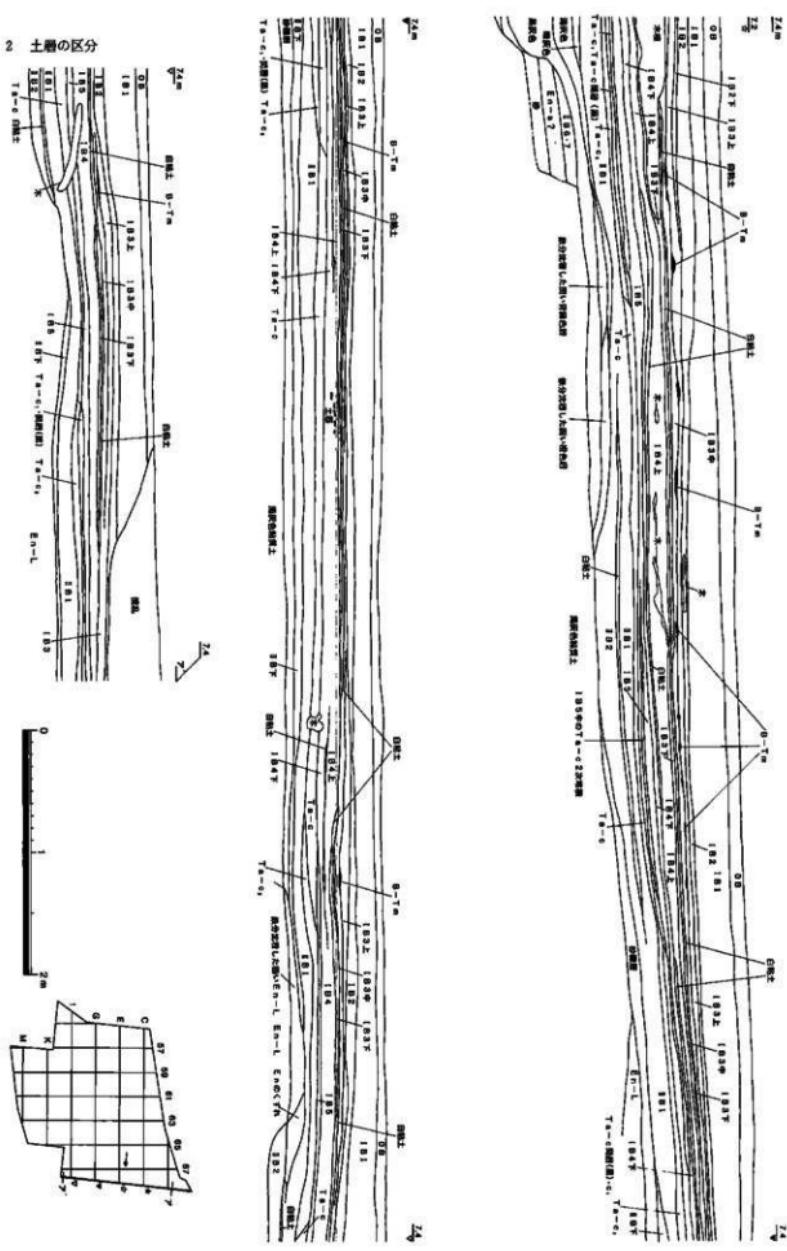
イーイ'は南側低湿部の調査範囲東壁のセクションの一部。上層は耕作搅乱を受けている。B-Tmは確認できない。



図II-3 土層模式図

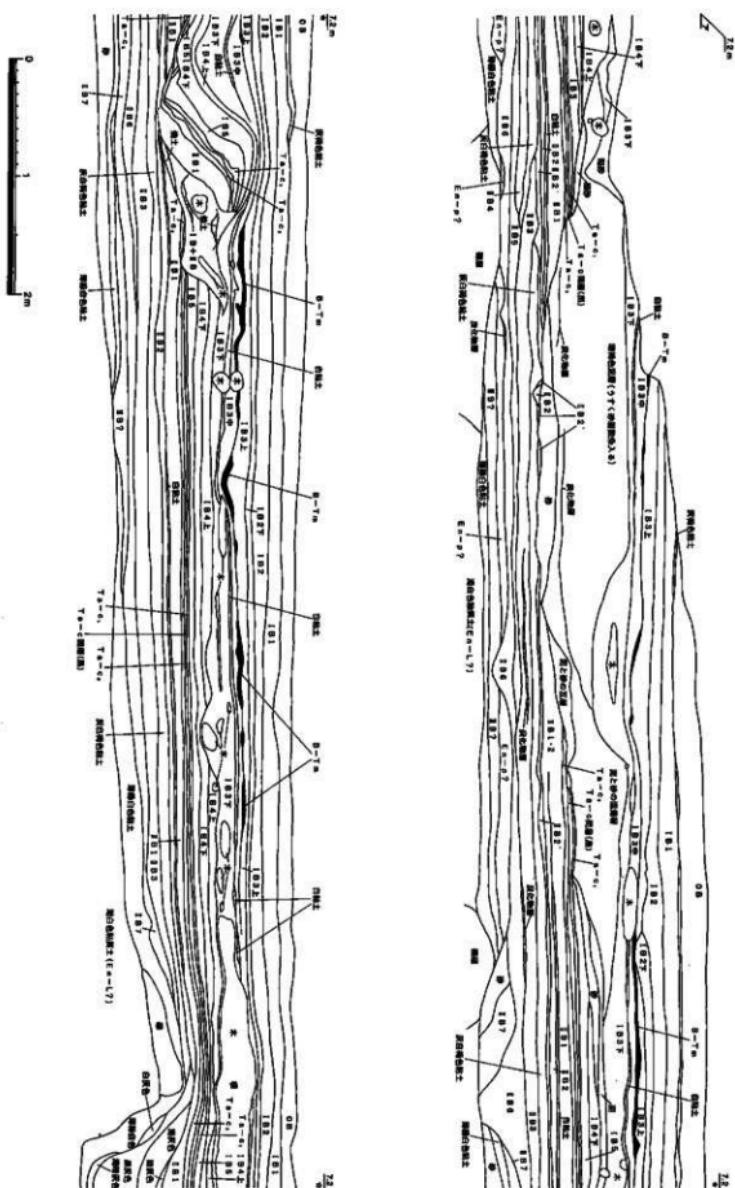


図II-4 土層図(1)



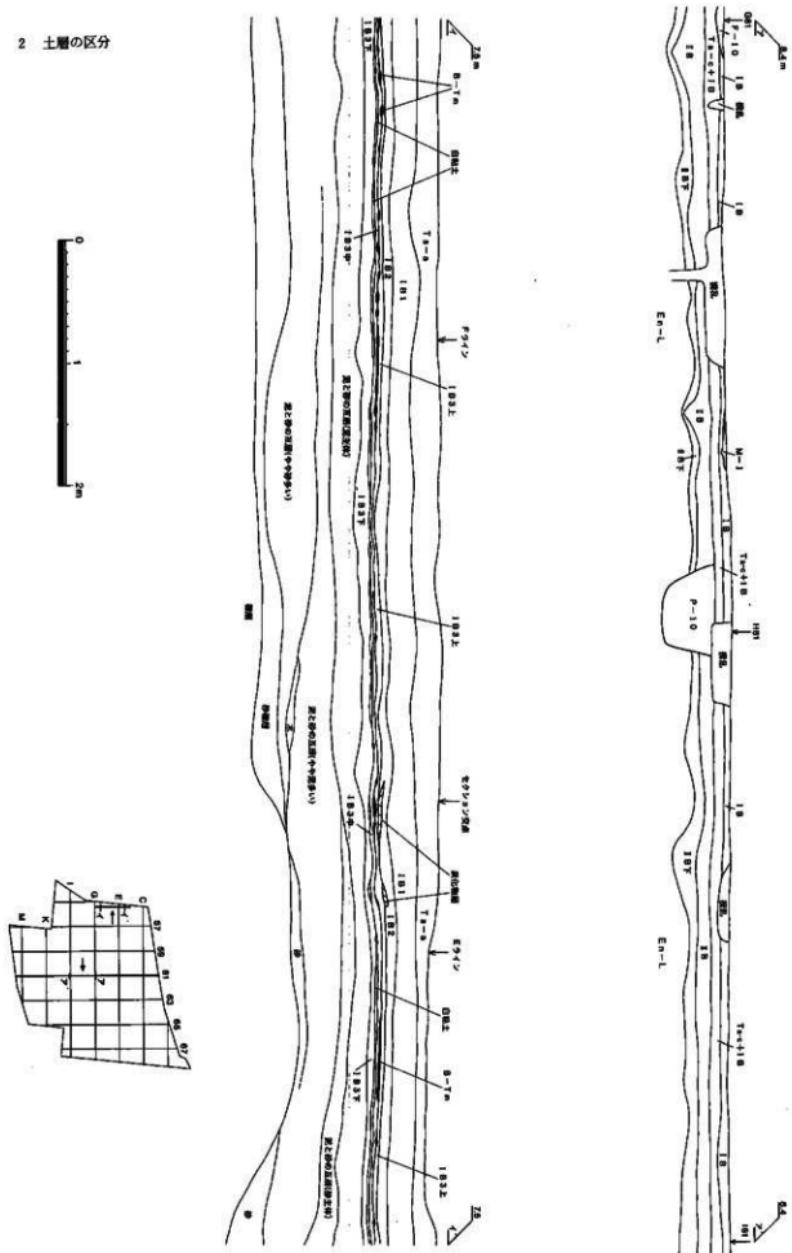
図II-5 土層図(2)

II 調査の方法、遺物の分類

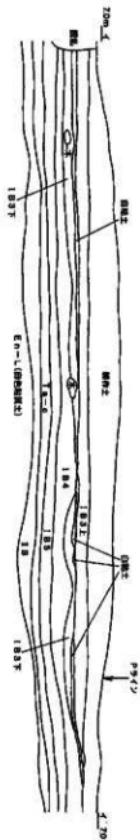


図II-6 土層図(3)

2 土層の区分

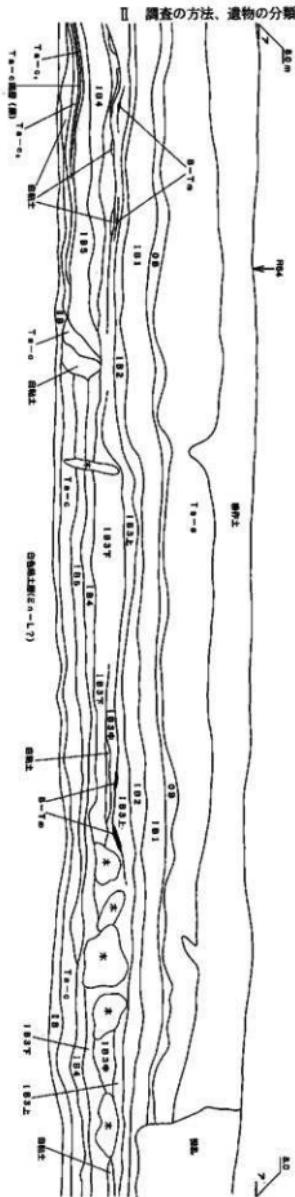


図II-7 土層図(4)



図II-8 土層図(5)

- 29 -



以下、当報告分である東地区の細分した層の説明を記す。全体的な色の傾向は、図版-2を参照願いたい。

耕作土：台地上では耕作はⅠ黒層まで、部分的にはⅡ黒層までおよんでいる。西側の低湿部のように搬入土が混ぜられている可能性もある。

旧表土：耕作がTa-a上面まで達しているところが多く、ほとんど残存していない。本来は開拓が入るまでTa-aの上に堆積していた腐植土層で、IV章で遺構を報告している。

Ta-a：縫前a降下軽石層。1739年（元文4年7月）噴出。良好な残存部で層厚30~40cm。

0B：紫がかった褐色泥炭層でおもに低湿部に形成。層厚10~20cm。新千歳空港内の美々8遺跡低湿部で、ⅠB層よりも上位の泥炭層としてTa-aとTa-b（1667年噴出、当遺跡では確認されていない）の間に確認されたのが最初の命名である。近世アイヌ文化期の包含層で、当遺跡では木製品が若干出土する。

I B：台地上では分層されず、層厚10~15cmの黒色土層となる。低湿部のⅠB1~3に対応する。

I B 1：黒褐色泥炭層。腐植進行中の層。層厚15~30cmで均一に分層されず、低湿部全域に堆積する。アイヌ文化期にかけての主要包含層で、自然木とともに大量の木製品が検出される。

I B 2：濁暗灰褐色泥炭層。比較的腐植の進んだ層。層厚10~20cmでほぼ均一に低湿部全域に堆積する。擦文化期後期からアイヌ文化期にかけての主要包含層で、自然木とともに大量の木製品が検出される。

I B 2下：東側低湿部セクションの中央部分で、上層より腐植未発達の層が確認できた。

I B 3：濁暗褐色~暗褐色泥炭層。低湿部全域に堆積する。B-Tmや白粘土が見られない部分では、わずかな色と植物質のちがいで分層できる場所とそうではない部分がある。大きな木根や自然木が多く、木製品も出土する。擦文化期相当層。

I B 3上：B-Tmより上位のⅠB 3層。やや暗い色で、下層よりは腐植未発達。

B-Tm：白頭山-苦小牧火山灰。灰白色で粉状。低湿部や擦文化期の遺構覆土に層厚0~2cmで断続的に分布する。10世紀中頃の降下。これでⅠB 3の上中および上下を分層する。

I B 3中：B-Tmと白粘土層に挟まれた層。やや明るい色で、上層より腐植未発達。

白粘土：低湿部でⅠB 3中下層の間やⅠB 4上下層の間、ⅡB 1とⅡB 2層の間にあり、層厚0~4cmの粘質土層。Spf1（支笏輕石流堆積物）やEn-a（恵庭a降下軽石層）の水成二次堆積と思われる。

I B 3下：B-Tmより下位のⅠB 3層。白粘土層のある部分では、中層とに分層できる。やや茶色がかった層で、ⅠB 3上層より腐植未発達。

I B 4：濁暗褐~濁黑褐色泥炭層。部分的には腐植の発達した腐植土層。白粘土層や色の違いで、上下に分層できることが多い。大きな木根や自然木が多く、木製品も出土する。統繩文時代~擦文化期初頭相当層。

I B 4上：濁暗褐色。下層よりも腐植未発達で、部分的に砂質のことがある。

I B 4下：濁黑褐色。上層よりもやや腐植が発達し、黒昧がち。

I B 5：黒褐色腐植土層。部分的には腐植未発達の泥炭層で、Ta-cと混合する部分もある。確認できないところもある。少量の木製品や土器が出土する。繩文時代晩期~統繩文時代の層。

I B + Ta-c：台地上ではTa-cが明確な層をなしておらず、Ⅰ黒層の一部と混合している。層厚10~20cmの黒色土層で、低湿部のⅠB 4・5層に対応するものであろう。

Ta-c：縫前c降下軽石・岩片層。2,000~2,500 B.P.噴出。低湿部の浅い部分や斜面では1枚

で確認される。c₁とc₂の混合の場合とc₂主体のことがある。

Ta - c₁ : 槽前c₁降下軽石層。層厚1~3cmで出現し、暗灰色を呈する。

間層(黒) : Ta-c₁とc₂の間の黒色腐植土で、層厚1~2cm。堆積には約50年かかると推定される。従って、c₁とc₂の時間差も約50年と考えられる。遺物は確認できていない。

Ta - c₂ : 槽前c₂降下岩片層。層厚1~10cmで、一部直上層の黒色土と混合する部分もある。茶褐色~暗褐色を呈する。

II B : Ta-c 下の黒褐色腐植土で、台地上および低湿部の浅い部分や斜面はII B 下とにしか分層されない。層厚10~25cm。縄文時代の包含層で、低湿部のII B 1~3層に相当する。

II B 下 : 游移層で暗褐~暗黄褐色を呈す。層厚10~25cm。遺物はほとんどみられない。分層されたII B 4層以下に対応する。

II B 1 : 黒~黒灰色土、15~25cmのほぼ均一な層厚を持つ。水の影響下でより粘質な部分と腐植土的なところがある。縄文時代の主要包含層で、土器・石器や少量の木を含む。

II B 2 : 濁暗灰色粘質土で層厚5~15cm。少量の縄文土器や木を含む。

II B 3 : 黑灰色粘質土で層厚5~20cm。少量の縄文土器を含む。炭化物層が入る。以下の層からの遺物の出土はない。

II B 4 : 濁暗灰色粘質土で、北側でのみ確認できる。

II B 5 : 濁黑灰色粘質土で、北寄りでのみ確認できる。

II B 6 : 黑灰色粘質土で、層厚不均一。小流路に溜ったように見受けられる。

II B 7 : 濁暗灰~濁灰色粘質土で、En-aに近い。

泥と砂の互層等 : 西側低湿部では、西沖合に行くに従い、II B 層以下、I B 4層以下が水流でなくなり、かわりに河川堆積と思われる泥と砂の互層がみられる。両者の混合比や色合いで幾層かに分層できる。下層部では磨滅した縄文土器等が出土することからもII B 相当層ととらえられる。

また、東側低湿部でもI B 4層以下II B 1・2層までをえぐるような流路があり、そこの泥と砂の溜りも河川堆積と思われる。統縄文後半から擦文化期前半に相当する。

砂・砂層・砂礫層・礫層 : 水流があったと思われる箇所では、基盤層がEn-a系ではなく、径1mmほどの砂質や径3cmほどの礫、あるいはその混合土となる。灰~灰緑色を呈す。

En - P : En-a(恵庭a降下軽石層)の未風化軽石礫層。黄褐~明黄褐色。低湿部ではさらに脱色し、白っぽい。

En - L : En-a(恵庭a降下軽石層)起源のローム層。黄褐~濁黄褐色。低湿部では脱色し、白っぽかったり腐植土混じりになる部分もある。

鉄分沈着した固い橙色層 or 青緑色層 or En - L 等 : En-L 層に水の影響で鉄分が沈着し、岩盤のように固化した層。場所や高低差で発色や固さ、厚さが違う。

……(白 or 灰色系) 粘土・粘質土 : En-L 層が水の影響で脱色、粘土化した層。色や水分状態などが場所や高低差で違う。Spfl の水成二次堆積の可能性もある。

III B ? : II B 2~7層と同じく、やや黒味がかる粘質土。En-a系の層よりも下層にあるため、IIIとした。

炭化物層 : 各層中にみられる厚さ1cm以上の炭化物層を図示した。

(三浦)

3 土器・土製品の分類

3. 遺物の分類

(1) 土器の分類

基本的な分類は、昭和51年度の『美沢川流域の遺跡群Ⅰ』に準拠し、今回はこれに修正・加筆を加えながら使用した。

I群 繩文時代早期に属する土器群を本群とする。

a類：貝殻腹縁痕文、条痕文のある土器群。

b類：縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文のある土器群。

b1類：東釧路Ⅱ・Ⅲ式に相当するもの。

b2類：コッククロ式に相当するもの。

b3類：中茶路式に相当するもの。

b4類：東釧路Ⅳ式に相当するもの。

今年度の調査では早期は唯一、Ⅱ黒層の造構P-18から東釧路Ⅳ式が1点出土している。

II群 繩文時代前期に属する土器群を本群とする。

a類：胎土に纖維を含み厚手で縄文が施された丸底・尖底の土器群。

a1類：縄文、組紐回転文、羽状縄文が施された土器群。

a2類：静内中野式に相当するもの。

b類：円筒土器下層式、大麻V式に相当するもの。

今年度の調査では出土していない。

III群 繩文時代中期に属する土器群を本群とする。

a類：円筒土器上層式、萩ヶ岡1式、萩ヶ岡2式に相当するもの。

b類：萩ヶ岡3式以降の土器群。

b1類：天神山式に相当するもの。

b2類：柏木川式に相当するもの。

b3類：北筒式（トコロ6類）、ノダップⅡ式、煉瓦台式に相当するもの。

今年度の調査においてa類（萩ヶ岡1式、萩ヶ岡2式）は本群の65.5%を占め、Ⅱ黒層出土の土器の主体となる型式群である。b類ではb1・b2類が出土していない。なお、a類については成果と問題点で詳述する。

IV群 繩文時代後期に属する土器群を本群とする。

a類：余市式～入江式に相当するもの。

b類：船泊上層～エリモB式に相当するもの。

c類：堂林式～御殿山式に相当するもの。

今年度の調査において、余市式、堂林式が多く出土し、入江式、ウサクマイC式が少量出土している。

V群 繩文時代晚期に属する土器群を本群とする。

a類：大洞B式、大洞B-C式に相当するもの。

b類：大洞C₁式、大洞C₂式に相当するもの。

c類：大洞A式、大洞A'式に相当するもの。

今年度の調査において、a～c類の在地系土器と亀ヶ岡系土器が出土している。

V群 続繩文時代に属する土器群を本群とする。

a類：大狩部式、江別太1式・2式、江別太遺跡最下層の土器群、後北式に並行しない恵山式（南川Ⅲ群・アヨロ2類以前）に相当するもの。

b類：後北A式、後北B式、後北C₁式、後北式に並行する恵山式（南川Ⅳ群・アヨロ3類）に相当するもの。

c類：後北C₂・D式、北大I式に相当するもの。

d類：北大II式、北大III式に相当するもの。

今年度の調査において、b・c類が出土しており、台地部で後北A式、後北B式が多く出土している。なお、b類はF-41からは恵山系（アヨロ3a並行）の深鉢が出土している。c類は後北C₂・D式末期～北大I式の深鉢・片口が出土し、有文と無文の2系統がある。c類については成果と問題点で詳述する。d類については、石狩市ワッカオイC地点遺跡1・2・3号墓（1975年）、恵庭市ユカンボシE5遺跡GP-1（1992年）、恵庭市ユカンボシE7遺跡（1996）で北大II式と無文の北大III式の共伴例があることからd類を設定した。

VI群 擦文文化期に属する土器群を本群とする。

a類：十勝茂寄式に相当するもの。

b類：千歳市美々8遺跡における佐藤和雄分類（1989年）のⅡ・Ⅲ・Ⅳに相当するもの。

c類：佐藤和雄分類V・VI・VIIに相当するもの。

d類：佐藤和雄分類Ⅷ・Ⅸに相当するもの。

a類は弦文の北大III式と無文の北大III式。今年度の調査の土坑墓・周溝のある墓の土器はb類である。c・d類が少量出土している。

（2）土製品の分類

今年度の調査において、Ⅰ黒層では紡錘車、フイゴの羽口が出土し、Ⅱ黒層では再生土製円盤、三角土製品などを再生土製品として扱っている。ほかには焼成粘土塊、スタンプ形土製品などがある。

（鈴木）

参考文献

石狩町教育委員会『Wakkaoi』（1975）

（財）北海道埋蔵文化財センター『美沢川流域の遺跡群廻』（1989）

（財）北海道埋蔵文化財センター『ユカンボシE5遺跡』（1992）

（財）北海道埋蔵文化財センター『調査年報9』（1996）

(3) 石器・石製品の分類

器種別の大分類にとどめ、記号等による細分はおこなっていない。

剥片石器には、石鎌、石槍・ナイフ（ポイント・ナイフ）、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー類、楔形石器、二次加工痕のある剥片（R フレイク）、刃こぼれ状の使用痕のある剥片（U フレイク）、などがある。石鎌の製作途上のものは、「石鎌未製品」と呼称した。

礫石器には、石斧、たたき石、くぼみ石、すり石、北海道式石冠、台石・石皿、砥石、石錘などがある。ほかには、フレイク、有意な礫（二次加工痕や使用痕が明瞭ではない礫が、人により動かされたり、使用されている可能性を持つ）などがある。石斧の製作途上のものは、「石斧未製品」と呼称した。

そのほかには石核、原石、礫がある。

なお、「石斧」と分類したものは、刃部や基部など明確な部位が遺存し、識別できたもので、「石斧片」と分類したものは、明確な部位が遺存していないものである。石斧以外の礫石器は、明確な分類条件としての部位が遺存していない破片もあったが、大分類にまとめている。(倉橋)

III 調査の概要

1 調査にいたる経緯

日本道路公団が建設を進めている北海道横断自動車道（千歳市～夕張市間）にかかる埋蔵文化財の保護についての活動は、北海道教育委員会が行っている。すなわち1988年（昭和63年）4月～5月の遺跡所在確認調査、1991年10月以降の遺跡範囲確認調査である。

範囲確認調査を終えた遺跡で、工事計画の変更が不可能であるために発掘調査を必要とする埋蔵文化財包蔵地は千歳市11か所、恵庭市3か所、由仁町2か所、夕張市3か所が明らかになっている。千歳市内の11か所は、西から東に、次のような遺跡名である。オサツ16遺跡、オサツ18遺跡、オサツ15遺跡、ポンオサツ遺跡、ユカンボシC15遺跡、オサットー1遺跡、キウス4遺跡、キウス5遺跡、キウス7遺跡、ケネチフ5遺跡、ケネチフ8遺跡。

恵庭市内の3か所は、千歳市内のポンオサツ遺跡とユカンボシC15遺跡とのあいだに、西からシマコツナイC1遺跡、ユカンボシE10遺跡、ユカンボシE7遺跡である。

ユカンボシC15遺跡は、道路の路線が決定したのちに遺跡であることが判明した。遠からず、建設工事が予定されていることもあって、北海道教育委員会による範囲確認のための試掘調査は次のような日程で行われた。

1995年（平成7年）5月29日～6月2日（調査員：大沼忠春。西側の低湿部）

1995年6月26日～27日（調査員：大沼忠春。防風林の西側）

1995年11月6日～10日（調査員：千葉英一、西脇対名夫。西側の台地部分、東端部）

1995年11月27日～12月1日（調査員：種市幸生、千葉英一、田才雅彦。中央の低湿部、東側の台地）

1996年（平成8年）4月17日（調査員：大沼忠春。民家、宅地部分）

以上のように行われた範囲確認調査をもとに、1996年6月から財団法人北海道埋蔵文化財センターにより、発掘調査が継続されている。発掘調査中の1997年5月27日（調査員：種市幸生、藤原秀樹）と6月24日（調査員：大沼忠春）に民家跡の西側部分で、追加の試掘がおこなわれた。

1996年の調査面積は3,025m²、1997年の調査面積は8,855m²である。当埋蔵文化財センターが今後の調査を予定している範囲は3,000m²である。

本書は1996年、1997年に調査したうちの東地区（①区③区）3785m²についての報告である。

2 調査の概要（図II-1、図III-1・2）

調査予定地は概略東西の長さ300m、南北の幅80mの範囲である。このなかで調査区域は、東と西の二つの地区に別れている。さらに道路工事の工程を考慮して①②③④の四区画に分けて調査を進めている（図II-1）。2か年の調査によってその8割（計画面積比）が終了したことになる。

1996年の発掘調査

遺構と遺物

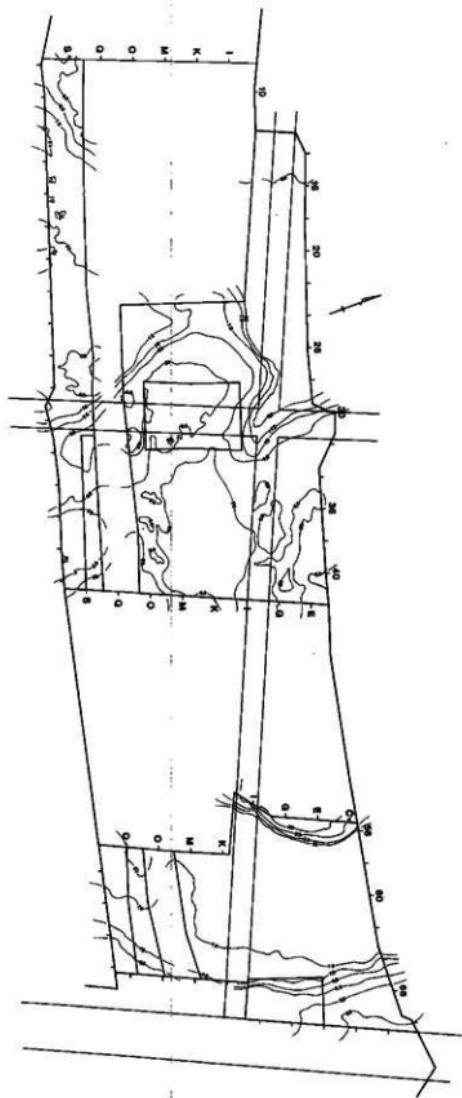
検出した遺構は西と東の台地部からTピット8基、東地区的低湿部で焼土6基、西地区的低湿部で杭列6連である。遺物は土器、石器等10,000点、木製遺物が破片数で35,000点が出土した。また土壤水洗等によって種子、骨片、昆虫等も見つかっている。

第I 黒色土の遺構と遺物

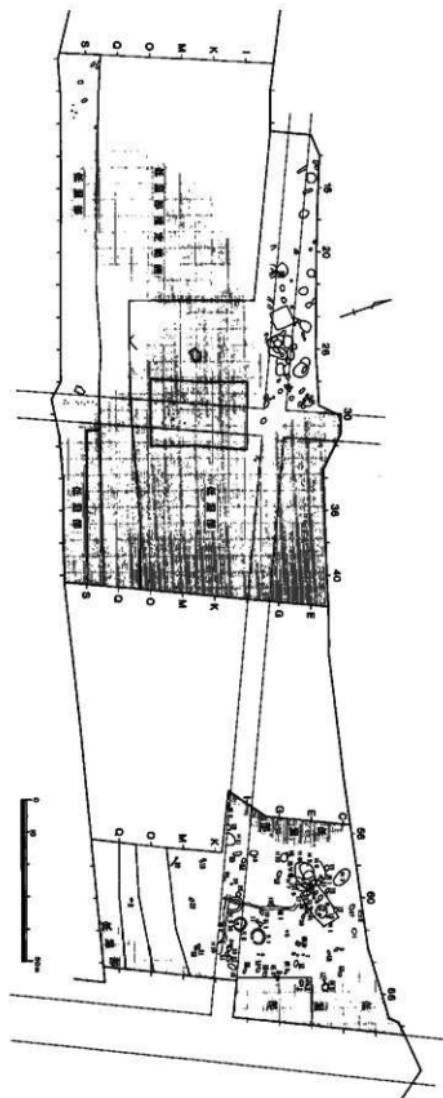
東地区的低湿部の焼土1基は統繩文時代とみなされる土層から検出された。西地区的低湿部で検出された杭列6連は擦文文化期～アイヌ文化期のものである。

木製遺物は西地区から多く出土している。製品のうちで交易で得たものは漆椀、曲げ物、竹製品等である。一方、自家製品とみなされるものは舟部材ならびに櫂、櫂軸受け、あかくみ等の舟材である。

2 調査の概要



図III-1 最終面コンター全図



- ・柵網分の点を示した
- ・塗土は仮想、なども示していない
- ・塗土のもののは土塗
- ・瓦子、アンダーライン入りはTビード
- ・瓦網中は灰、塗瓦は塗瓦、塗瓦は瓦と各々略した

図III-2 遺構位置図

表III-1 當報告遺憾一覽(1)

地名		グリード	面積
住居跡	H-1	C 60・61, D 57・58, E 61, E 69・60	0.5
	H-2	B 57・58, C 57・58	1.5
	H-3	B 58・59, C 58・59	1.5
	H-4	C 60・60・61	1.5
	H-5	C 65, D 65	1.5
	H-6	D 57・58, E 57	1.5
	H-7	D 58・59, E 58・59	1.5
	H-8	D 58・59, E 58・59	1.5
	H-9	E 62・63	1.5
	H-10	I 56, J 56	1.5
周縁部あるもの	X-1	F 57	1.5
	X-2	H 61・62	1.5
	X-3	I 56, J 56	1.5
	P-1	I 59, J 60	1.5
	P-2	B 61・62, A 60c, A 61b, B 60d, H 61 =	1.5
	P-3	C 63a b	1.5
	P-4	H 63d	1.5
	P-5	F 62a b	1.5
	P-6	E 63a c	1.5
	P-7	E 63a d	1.5
土壌	P-8	D 60d	1.5
	P-9	D 59c d, D 60a b	1.5
	P-10	G 60c, G 61b, H 60d	1.5
	P-11	H 61a b	1.5
	P-12	C 60c d	1.5
	P-13	D 60c d	1.5
	P-14	D 60c d	1.5
	P-15	C 57c, D 57d, C 58b, D 58a	1.5
	P-16	F 57a	1.5
	P-17	B 59c	1.5
被覆	P-18	H 57a b	1.5
	P-19	G 60a b c d	1.5
	P-20	D 59c, E 59d	1.5
	P-21	D 59c a b, E 59a b	1.5
	P-22	D 59b c, E 59a b	1.5
	P-23	I 55c, J 55d	1.5
	P-24	J 58d	1.5
	P-25	I 59c d	1.5
	P-26	I 59a	1.5
	P-27	B 60a b c d	1.5
植生	P-28	I 59a b	1.5
	P-29	E 60a b	1.5
	P-30	E 60a b	1.5
	P-31	D 60c, E 60d	1.5
	P-32	I 54b, J 54a	1.5
	P-33	I 53b, J 53a	1.5
	P-34	I 52c, I 63b, J 62d, J 63a	1.5
	P-35	I 52c, I 63b, J 62d, J 63a	1.5
	F-1	G 67a b	0.4
	F-2	E 65d	0.5
土	F-3	G 65c	0.5
	F-4	G 65c	0.5
	F-5	E 66c	0.5
	F-6	E 66c	0.5
	F-7	E 66d	0.5
	F-8	G 58c, G 59a b	0.7
	F-9	G 57d, G 58a	1.5
	F-10	F 60c, F 61b, G 60d, G 61 =	0.7
	F-11	G 62b	1.5
	F-12	G 62a d	1.5
被覆	F-13	G 62b	1.5
	F-14	G 62b	1.5
	F-15	G 62b	1.5
	F-16	G 57b c	1.5
	F-17	G 57a	1.5
	F-18	F 60c, G 60d	1.5
	F-19	G 57c, G 58b	1.5
	F-20	G 58a	1.5
	F-21	F 60c	1.5
	F-22	E 62b	0.7
土	F-23	B 65c	0.5
	F-24	E 64a	1.5
	F-25	E 64d	0.7
	F-26	G 63d	1.5
	F-27	F 65d	0.7
	F-28	E 65d	1.5
	F-29	G 63b	1.5
	F-30	G 63a	1.5
	F-31	H 64d	1.5
	F-32	G 63a	1.5
被覆	F-33	E 65b	0.5
	F-34	F 65b	0.5
	F-35	F 65c	0.5
	F-36	H 63a d	0.5
	F-37	H 61a d	0.5
	F-38	F 60a	0.5
	F-39	F 62a	0.5
	F-40	F 62a	0.5
	F-41	F 62a	0.5
	F-42	F 62a	0.5

表III-2 当報告遺構一覽(2)

さらにたたき棒、板、器類、ヘラ類、串箸類、矢中柄、花矢、かんじき、火鑓板などもある。

このほか柱・杭などの建材、割材類、丸木材、又木類、枝材、炭化材、切片、樹皮などがある。これらの木製遺物は擦文文化期～アイヌ文化期のものであるが、擦文文化期のものが多種多量であることは特筆される。

第Ⅱ 黒色土の遺構と遺物

Tピット8基は西地区の台地部に5基、東地区の台地部に3基検出された。東地区的低湿部で検出された焼土5基は縄文時代とみなされるものである。

土器は磨滅した状態で散在的に出土している。縄文時代中期、後期、晚期とみなされるものである。石器の点数は多くはないが石鎌、石槍、ドリル、石斧、すり石などの定形的なものが出土している。

1997年の発掘調査

遺構と遺物

検出した遺構は、住居跡33基、土壙69基、Tピット54基、周溝のある墓3基、焼土382基である。遺物は土器43,000点、石器等14,000点、木製遺物90,000点、金属遺物等38点が出土した。また土壤水洗等によって種子、骨片、昆虫等も見つかっている。市道南23号の区域では舗装、路盤砂利、盛り土を除去して調査した。水道管、排水管、側溝等により遺構、包含層が帶状に消失したところも多い。

第Ⅰ 黒色土の遺構と遺物

遺構、遺物の大部分は東地区、西地区ともに台地部分から検出されている。

東地区的遺構は、擦文文化期のものが住居跡1、土坑墓12、周溝のある墓3であり、アイヌ文化期のものは、建物跡、鍛冶遺構、送り場、灰集中、道路などである。なかでも注目されるのは、擦文文化期の土坑墓と周溝のある墓である。

土坑墓の平面形は橢円形と隅丸長方形のものがある。長さはともに1.2m程度のものが多い。副葬品は鉄斧、鎌、小刀、須恵器坏、土師器坏、擦文土器壺などがある。副葬品から判断すると8世紀後葉から9世紀初頭のものと考えられる。土坑墓の長軸方向のまとまりが二方向に集中していることは、二世代にわたった構築を推定させる。

周溝のある墓は上述の土坑墓とほぼ同じ時期のものである。周溝の直径は4～5mであり、墳丘は認められない。周溝は3基とも南東部で途切れています。

土器、石器等は縄文時代晚期、統縄文時代、擦文文化期のものがある。木製遺物は東側と西側の低湿部から出土している。擦文文化期のものは矢中柄、串、やす等があり、アイヌ文化期のものは制裁棒、矢中柄、キテ中柄、へら、串、マキリ輪、皿、櫂などが目につく。

西地区的遺構は擦文文化期の住居跡3、土坑墓2、アイヌ文化期の建物跡、杭列などがある。このうち平面形が方形の窪穴は、一辺が5.5m、深さ80cmほどであり、4本の主柱、煙道のある竈がある。これの覆土には、B-Tmが認められた。

西地区的低湿部からは多量の木製遺物が出土した。大多数は、擦文文化期、アイヌ文化期のものである。製品として個別の認定ができるものには、制裁棒、たたき棒、横樋、縦枠、樹皮製容器、箸類、串類、壹針、へら状製品、矢柄、矢中柄、やす、キテ中柄、鉄斧柄、下駄などがある。

前年度の調査でも注目されていた舟に関する部材、製品類が今回も多数出土した。具体的には舟底(舟敷)、舳先、艤(とも)、舷側板、舟縁板、舟胴の支え板、車櫂、車櫂受台部、早櫂、あか汲みなどである。

このほか柱、杭などの建材、割材類、枝材、正目板、切片、炭化材、樹皮、股木類、草本類のまとまりなどが断片を含めて多数出土している。竹棒、漆桶、曲げ物などのように移入品と考えられるも

のもある。これらの木製遺物とともに永楽通宝、青磁皿、擦文後期の土器がⅠB2・3層から検出された。

第Ⅱ 黒色土の遺構と遺物

遺構は東地区、西地区とともに縄文時代中期、後期の住居跡、土壙、Tピット、焼土がある。縄文時代中期、後期の住居跡は、東地区、西地区とともに重複して検出されるものがある。西地区的Tピットには重複したものがある。焼土は縄文時代中期、後期のものが多い。

土器、石器等は縄文時代中期、後期、晩期のものが台地部のみならず、低温部（標高6～7m）からも検出されている。これらは流路や水面高度の変化を示す資料である。ごく少数であるが縄文時代早期の土器破片が東地区から出土している。

3 本書の概要（図Ⅲ-2、表Ⅲ-1、2）

1996年、1997年調査のうち東地区3,785m²についての報告である。なお、以下の説明の（ ）内は員数、あるいは遺構名称である。

遺構 遺構は住居跡（12）、周溝のある墓（3）、土壙（35）、焼土（91）、Tピット（22）、送り場（1）、灰集中（3）、鍛冶遺構（1）、集石（2）、溝（1）、道跡（2）、杭列（3）、室状遺構（3）である。

住居跡の時代・時期別の区分はアイヌ文化期（H-1）、擦文文化期（H-2・10）、縄文時代後期後葉（H-6・11・12）、縄文時代後期前葉（H-3・7・8・9）、縄文時代中期中葉（H-4）、縄文時代中期後半～後期中葉（H-5）である。H-6・7・8・9は重複している。

H-1は10本の柱穴が長さ12m、幅6mの長方形に形作るもので、中に2か所の焼土がある。H-2は縄文時代の豊穴住居跡の凹地に作られており、白色の粘土塊が出土した。炉は検出されたがカマドはなかった。H-10は道路の側溝等により大きく破壊されており、一部を検出したに過ぎない。

縄文時代の住居跡はその所属時期を土器型式名で示すことにつとめた。

周溝のある墓（X-1・2・3）は擦文文化期のものである。周溝の直径が4～5mで、墳丘は存在しない。したがって、北海道式古墳とは異なる。墓の時期は8世紀後葉から9世紀初頭である。

X-1では周溝の埋積土のなかにB-Tmが認められた。周溝の底面には掘削工程を明瞭に示す凹凸が残っていた。この周溝には器形を復元できる球腹甕もあった。主体部には土坑墓が4つあり、長軸方向の相違や切りあいからみて、追葬がなされたものと考えられる。X-2の主体部は、いわゆる木棺直葬である。ここからは小刀が1点出土した。X-3の主体部は検出できなかった。

土壙の時代・時期別の数は擦文文化期（12）、続縄文時代（3）、縄文時代後期（9）、縄文時代中期（11）である。擦文文化期のものは、その形態、出土遺物、埋積土の様子などの類似から周溝のある墓とほぼ同じ墳のものと判断される。

焼土の時代・時期別の数は近世アイヌ文化期10、擦文文化期～中世アイヌ文化期15、続縄文時代80、縄文時代後期（11）、縄文時代中期（25）である。これら多数の焼土のなかには出土した土器等をもとにしてさらに詳細な時期が推定できるものがある。近世アイヌ文化期のものは西側の高いところに集中している。擦文文化期～中世アイヌ文化期のものは北西側に集中している。続縄文時代の場合、前葉では中央部西側に集中し、中葉では中央部分に集中しているが、後葉では南東側に散在的である。

縄文時代の焼土は検出土層、出土土器、周辺の出土遺物などを参考にして時期の細分につとめた。

TピットはすべてTa-c火山灰の降下時期よりも古い。台地部の縁に沿う立地で、配列を認めうる。

送り場は凹地に灰・炭化物・焼土・動植物遺存体のまとまりがあり、銅製煙管が出土したものである。銅製煙管は火皿と吸い口のみならず羅字も検出できた。埋積過程にある豊穴住居跡に残されたア

イヌ文化期の遺構である。

灰集中3か所あり、これらの時期は以下のようである。灰集中1は近世アイヌ文化期、灰集中2は擦文文化期～中世アイヌ文化期、灰集中3は近世アイヌ文化期である。

鍛冶遺構は1か所ある。2か所の焼土と炭層の形態および銛鉄片、鉄滓、鍛造剝片？、磁性のある球状遺物（湯玉状）、羽口などの出土から鍛冶遺構と判断した。時期は擦文文化後期～中世アイヌ文化期である。

集石は2か所ある。集石1は礫39点、集石2は礫2点である。ともに統繩文時代の後北式土器の時期のものであろう。

溝は1条ある。擦文文化前期のものとみなされる。

道跡は2条ある。道跡1は住居跡（H-1）、送り場1、灰集中1を連絡するものとみなされる。時期は近世アイヌ文化期である。

表土層の遺構で杭列と室状遺構として報告したものがある。

遺物 土器、石器等は擦文文化期、統繩文時代、繩文時代晚期・後期・中期のものがある。木製遺物は東側と西側の低温部から出土している。擦文文化期のものは矢中柄、串、やす等があり、アイヌ文化期のものは制裁棒、矢中柄、キテ中柄、へら、串、マキリ鞘、皿、櫂などが目につく。

土器

台地部での繩文時代の土器はもっとも多いのは中期中葉のもので、後期前葉、後期後葉のものも多い。繩文時代晚期の土器は前葉のものが多く、東側西側の低温部から出土している。統繩文時代の土器は東側の低温部の狭い範囲にまとまって出土した。低温部の土器は流水が運んだ砂礫層や砂層から検出されるものもある。再生土製品と呼ぶものは繩文時代中期のものであろう。

石器等

台地部、低温部とともに定形的な石器、および剝片・砂片類が出土している。定形的な石器は石鎌、石槍（ナイフ）、石錐、つまみ付ナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、台石・石皿、砥石、石錘などがある。片岩製の石鎌は統繩文時代の後北B式土器のそばから検出されている。

木製遺物

低温部から多くのものが出土した。擦文文化期～アイヌ文化期のものがほとんどであるが、とりわけ近世アイヌ文化期のものが多い。

木製品は、舟関係・狩猟漁労具、杭や柱などの建材・容器・串類などのほか矢矢・制裁棒・漆器・下駄などがある。さらに抉りや孔のある加工材、板材・割材・枝材・丸木材・樹皮などもある。なかでも注目に値するものは舟敷（舟底）であろう。これの残存状態は悪いが、長軸に直行するような切断が認められ、「物送り」を推定させるものである。

報告にあたっては木取りの観察、樹種の同定につとめた。樹種同定の結果は、スギ・ヒノキ属？アスナロ属？ブナ・ケヤキ属という近辺での自生よりも持込みを推察させるものもある。

自然科学的分析と年代測定値

環境変遷を明らかにするための分析なども進めており、その一部を報告してある（Ⅸ章）。Ta-c降下火山灰については、低温部での調査でTa-c₁とTa-c₂との間層を確認していた。そこでこのTa-c₁とTa-c₂の間に泥炭などを資料として年代測定を行った。以下のような測定値が得られている。

Ta-c ₁ の上	補正14C 年代	2110±50	(Beta -112943)
Ta-c ₁ と Ta-c ₂ との間層	補正14C 年代	2350±50	(Beta -112944)
Ta-c ₂ の下	補正14C 年代	2450±50	(Beta -112945) (西田)

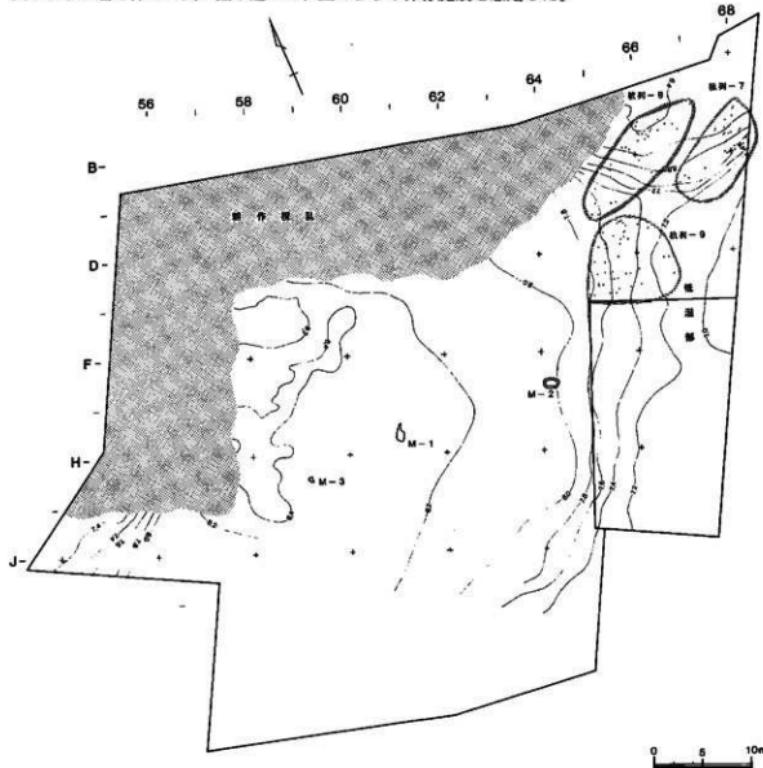
IV 表土層の遺構とその遺物

1. 概要

対象となる表土層の範囲は図IV-1に示した、Dライン以南、58ライン以東の台地部と東側の低湿部上面である。年代は、樽前a火山灰降下の1739年以降である。低湿部は0黒層からの調査を意識したため、Ta-aの重機での除去をあらかじめ行ったが、その時点で杭や木製品が出土したため、表土層に遺構があったらしいとは考えていた。台地部には家屋などの施設があり、これを撤去した状態で、すでにTa-aはほとんど残存していなかったため、表土層の遺構の確認は考慮に入れてていなかった。

低湿部では、I黒層調査中に相当数の立杭が見つかった。先端や体部にTa-a粒の付着が見られることや、杭自体の残存状態から、より新しいものと判断し、これを表土層の遺構「杭列」として3列とらえた。

台地部でもI黒層調査中に、表土層からの構築と断面観察から判断される遺構が確認できた。白い灰のような層を伴った浅い掘り込みで、室のような保存施設を想定した。



図IV-1 表土層造構位置図

2. 杭列

検出できた杭および杭跡が、建物跡か柵列・杭列なのか、単独の杭か、判別がつけにくかったため、3列の杭列としてまとめ報告する。なお杭列-1~6は、来年度以降報告する②④区（西地区）に所在する、主にⅠ黒層の遺構である。

杭列-7 (図IV-2・3・4、表IV-1、図版IV-1・2・3)

位置 A 67、A 68、B 66、B 67

構成 立杭は A 67 cd 区と A 68 b 区に集中する。ここでは、コンターラインに直交する列と並行する列が見られ、No. 19・20・23のような太い柱も存在する。No. 4 から No. 7 までの西に延びる列は、No. 10 や No. 21 などに続くコンターラインと並行する列であろう。

杭の特徴 樹種のほとんどがトネリコ属で、体部に枝払いの切痕のあるものが多い。太い杭と細い杭が混在し、太細の配列はとらえにくい。ほとんどの先端にはあざやかな削り痕が見られる。

遺物 7-a・b・c は No. 1・2・3 の北あたりから、Ta-a 除去の際に出土した木製品である。7-a は、樹心をはずして削った厚板で、作業台のようなものであろう。7-b は柾目板。7-c は樹心をはずして削った厚板に、長方形の角孔が開けられた材。孔は二つあり、いずれも両面から削り込んでいる。他の材と組合させて使うものであろう。7-d は図示していないが、面取のある棒状の材である。

用途 作業小屋かそれに類する水辺の施設であろう。

杭列-8 (図IV-2・4・5、表IV-2、図版IV-3・4)

位置 A 66、A 66、A 67、B 65、B 66、C 65

構成 東側に集中する列は、コンターラインと並行するきれいな並びを呈する。その他も 2~3 本で列になる小さなまとまりとなっている。西側の斜面上位のものは、杭列-9 の北側と関係するものかもしれない。その斜面上位に太い柱？が散在する。

杭の特徴 樹種の構成は不統一である。No. 17 以下の東列のものは、径 3.0cm 前後の細いものが多い。先端はほとんどにあざやかな削り痕が見られる。

遺物 8-a・b とも東列付近から出土。8-a は早櫂の柄先端、8-b は早櫂の水摶部であろう。

用途 船着場とそれに接続する施設であろうか。

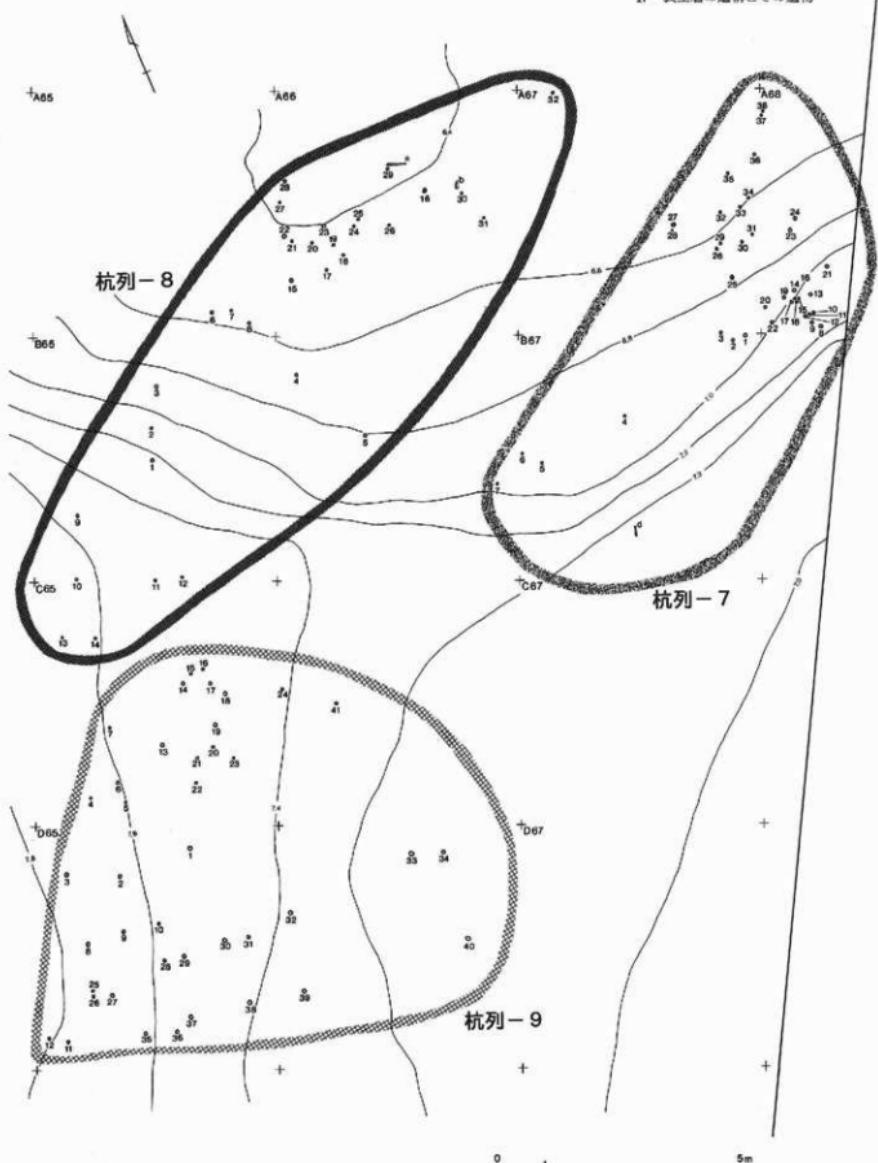
杭列-9 (図IV-2・5、表IV-3、図版IV-4)

位置 C 65、C 66、D 65、D 66

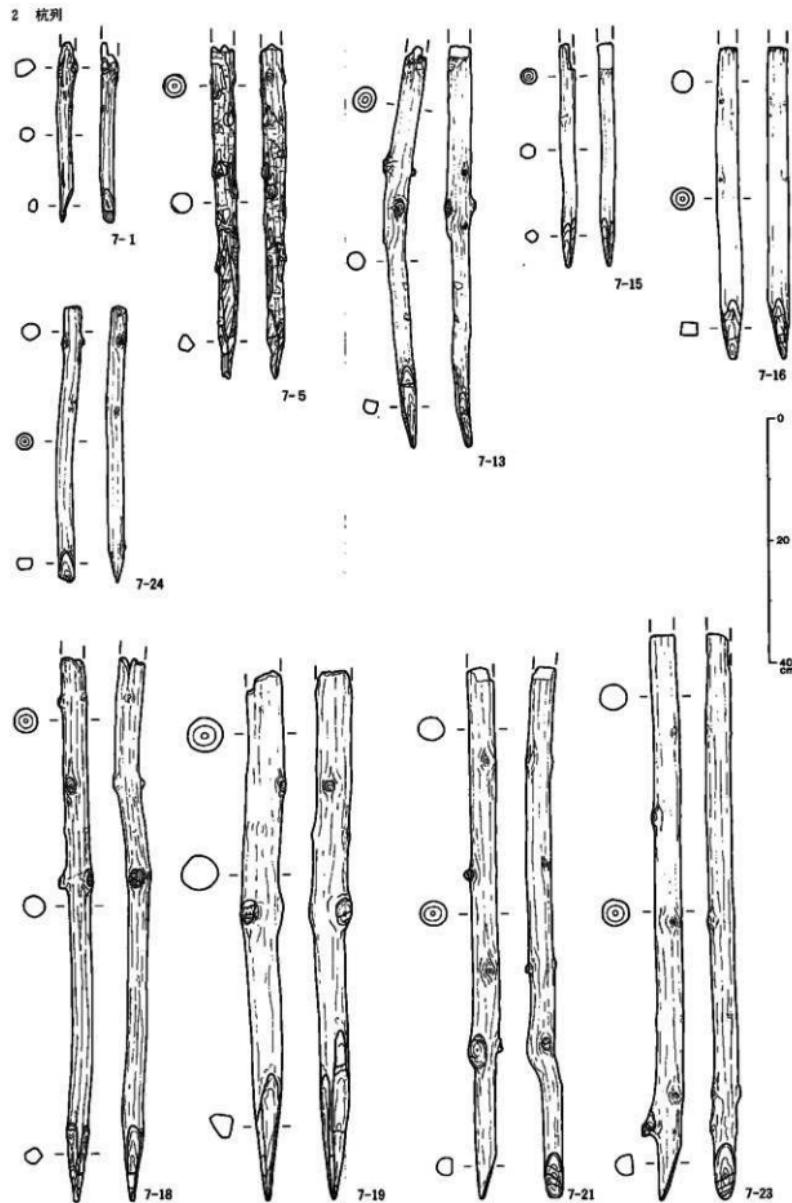
構成 北側は、4~5 本の組み合わせでコンターラインに直交する列と並行する列が見られる。南側は、コンターラインに直交して東西に延びる 2~3 列で構成される。この列は各々の杭が、南北でもほぼ対応関係にある。No. 16・23・32・34・35・39・40 と要になる位置に太い柱？が配置されているのが特徴的である。

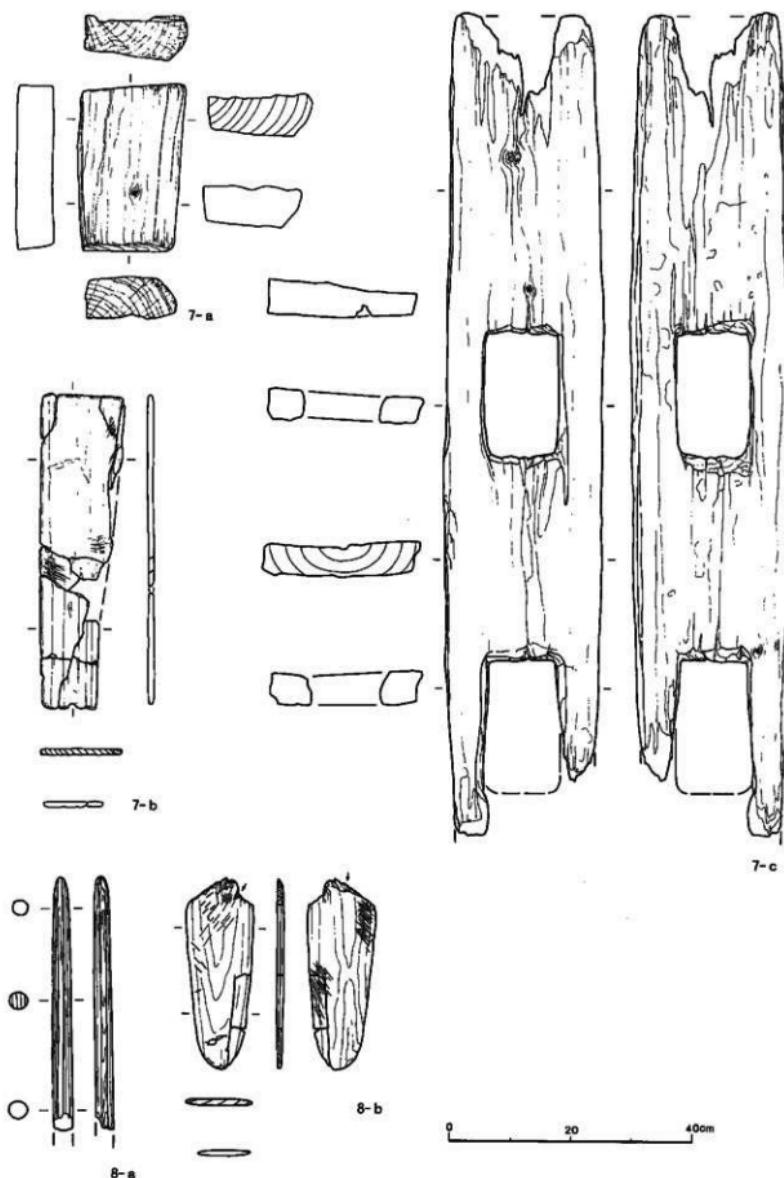
杭の特徴 樹種の構成は不統一の感があるが、トネリコ属とハンノキ属が比較的多い割合を示す。斜面上位のものが多いためか、杭跡のみの確認も多い。残存する杭の先端はほとんどが削りで尖っている。削材から作られた杭が數本見られる。

用途 建物か、斜面の上り下りのための階段のような施設であろうか。

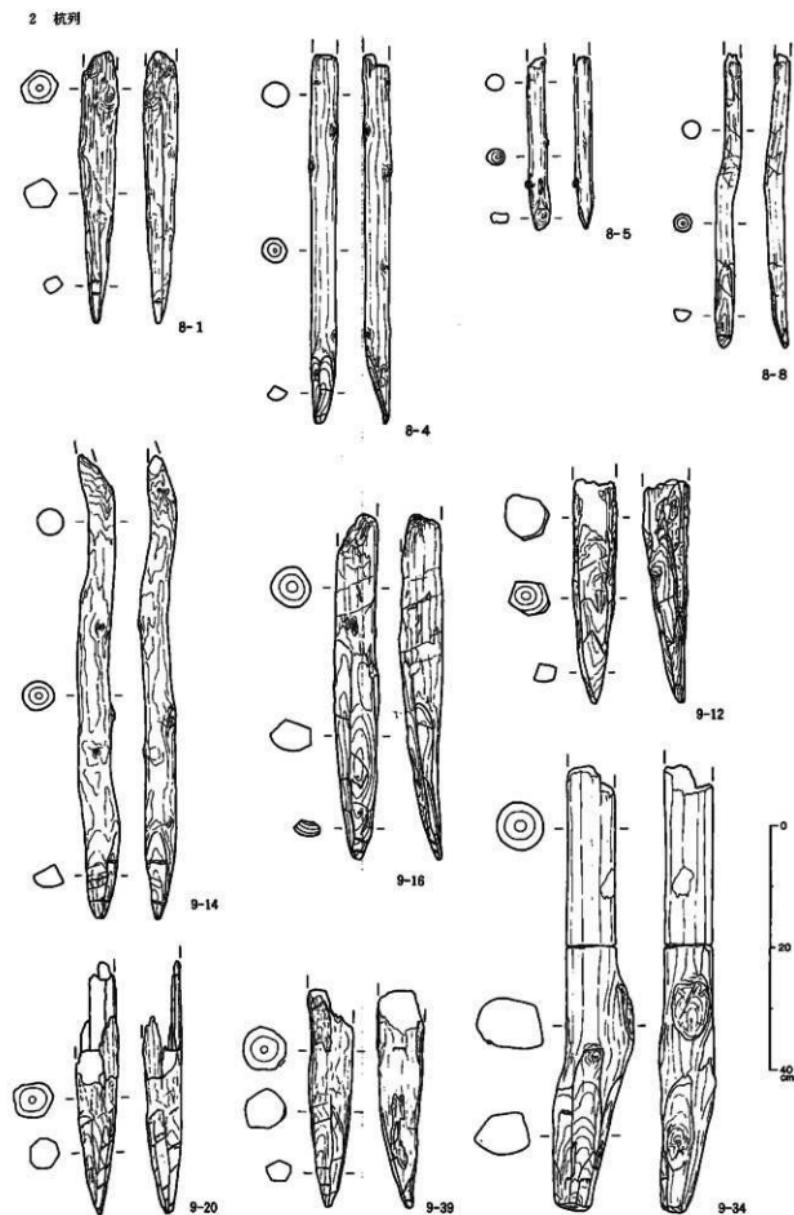


図IV-2 杭列





図IV-4 桧列-7・8 木製品



図IV-15 桁列-8・9 桁

表N-1 桁列-7 杭等一覧

杭列名-杭等	遺物名	形状	先	端	形	等	元本数	皮剥離	被	長さ	幅	厚さ	備考
杭列7-1 杭等	繩状先	V-2	1.06 丸木	尖	对面2面削	片側削大	未先	○	トネリコ層	[21.3]X16.0X7.3	2810	1	枝張い切痕あり
杭列7-2 杭	-	1.07 丸木	尖	对面4面削	尖	未先	○	トネリコ層	[81.3]	3.1	5.4	1	枝張い切痕あり
杭列7-3 杭	-	1.08 丸木	尖	对面4面削	尖	未先	○	トネリコ層	[84.1]	3.5	6.95	2	枝張い切痕あり
杭列7-4 杭	-	1.09 丸木	尖	1面削	尖	未先	○	トハンドイ層	[50.3]	3.4	3.11	1	枝張い切痕あり
杭列7-5 杭	-	1.10 丸木	尖	1面削	尖	未先	○	トハンドイ層	[54.1]	3.9	4.0	1	枝張い切痕あり
杭列7-6 繩状	-	1.11 丸木削	尖	4面削	尖	未先	○	カエデ層	[29.2]	2.1	3.8	2	
杭列7-7 杭	-	1.15 丸木	尖	4面削	尖	未先	?	トネリコ層	[17.3]	4.8	11.40	1	
杭列7-8 杭先	-	1.17 丸木	尖	4面削	尖	未先	○	トネリコ層	[19.3]	4.0	14.0	1	
杭列7-9 杭	-	1.18 丸木	尖	4面削	尖	未先	○	トネリコ層	[66.4]	4.9	9.15	1	
杭列7-10 杭	-	1.19 丸木	尖	4面削	尖	未先	○	トネリコ層	[61.5]	2.9	3.7	1	枝張い切痕あり
杭列7-11 杭	-	1.60 丸木	尖	对面削	尖	未先	○	トネリコ層	[81.0]	3.1	7.1	1	
杭列7-12 杭先	-	1.61 丸木	尖	对面2面削	尖	未先	○	オニグルミ	[29.8]	4.3	3.34	1	
杭列7-13 杭	-	1.62 丸木	尖	对面3面削	尖	未先	○	トネリコ層	[61.3]	5.1	5.0	1	枝張い切痕あり
杭列7-14 繩状	-	1.63 丸木	尖	1面削	尖	未先	○	トネリコ層	[53.6]	2.5	3.15	2	枝張い切痕あり
杭列7-15 繩状	-	1.64 丸木	尖	5面削	尖	未先	○	トネリコ層	[34.2]	2.4	1.11	1	
杭列7-16 杭	-	1.65 丸木	尖	对面削	尖	未先	○	トネリコ層	[50.4]	3.7	4.0	1	
杭列7-17 杭	-	1.66 丸木	尖	对面3面削	尖	未先	○	トネリコ層	[75.0]	3.1	7.0	1	枝張い切痕あり
杭列7-18 杭柱?	-	1.67 丸木	尖	对面4面削	尖	未先	○	トネリコ層	[87.1]	5.5	8.60	1	枝張い切痕あり
杭列7-19 杭柱?	-	1.68 丸木	尖	6面削	尖	未先	○	トネリコ層	[86.2]	6.9	17.50	1	枝張い切痕あり
杭列7-20 杭柱?	-	1.69 丸木	尖	8面削	削削部是18cm	削削部是18cm	○	ハンノキ層	[55.2]	6.4	12.65	1	枝張い切痕あり
杭列7-21 杭	-	1.70 丸木	尖	对面削	尖	未先	○	トネリコ層	[86.3]	5.5	10.60	1	枝張い切痕あり
杭列7-22 杭	-	1.71 丸木	尖	对面2面削	尖	未先	○	トネリコ層	[38.1]	3.0	2.9	1	枝張い切痕あり
杭列7-23 杭柱?	-	1.72 丸木	尖	1面削	尖	未先	○	トネリコ層	[92.1]	6.1	12.65	1	枝張い切痕あり
杭列7-24 杭	-	1.73 丸木	尖	对面2面削	尖	未先	○	トネリコ層	[45.2]	3.5	2.74	1	
杭列7-25 杭	-	1.74 丸木	尖	对面4面削	尖	未先	○	トネリコ層	[52.0]	4.4	7.05	1	
杭列7-26 杭・杭先	-	1.75 丸木	尖	平削	尖	未先	?	トネリコ層	[95.1]	4.2	3.03	1	
杭列7-27 杭	-	1.76 丸木	尖	对面4面削	尖	未先	?	トネリコ層	[26.3]	3.4	2.27	1	
杭列7-28 杭	-	1.77 丸木	尖	对面2面削	尖	未先	?	トネリコ層					
杭列7-29 杭	-	1.78 丸木	尖	对面4面削	尖	未先	?	杭列7-18-19のうち丸木(杭は 杭列8-17~19の合計18本で、 尖2:つぶれ1本)の比率 尖のうち 1・2面削表面残 約7割 3面以上削 約3割					
杭列7-30 杭	-	1.79 丸木	尖	对面2面削	尖	未先	?	トネリコ層					
杭列7-31 杭	-	1.80 丸木	尖	对面4面削	尖	未先	?	トネリコ層	[51.1]X13.7X1.0	(650)	10	"	
杭列7-32 杭・杭先	-	1.81 丸木	尖	对面4面削	尖	未先	?	トナラ層	[21.1]X16.0X7.3	2810	1	A5c付近出土	
杭列7-33 杭	-	1.82 丸木	尖	对面4面削	尖	未先	?	ヤナギ層	[13]				
杭列7-34 杭	-	1.83 丸木	尖	对面4面削	尖	未先	?	イヌエンジ	: 1				
杭列7-35 杭	-	1.84 丸木	尖	对面4面削	尖	未先	?	モクレン層	: 1				
杭列7-36 杭	-	1.85 丸木	尖	对面4面削	尖	未先	?	トネリコ層					
杭列7-37 杭	-	1.86 丸木	尖	对面4面削	尖	未先	?	トネリコ層					
杭列7-38 杭	-	1.87 丸木	尖	对面4面削	尖	未先	?	トネリコ層					

同生日本古樹種判定は、
トネリコ層
ヤナギ層
イヌエンジ
モクレン層

表N-2 案列-8 案等一覧

種別	学名	通称名	標本番号	説明	先端	側面	裏面	元主軸皮膜度	被毛	長さcm	径cm	直さcm	幅cm
杭列8-1	杭	V-4	丸木	尖	6面削	削表面	木割り	未完	トネリコ属	14.0	5.3	170	1
杭列8-2	杭先(往?)	-	丸木	尖	3面削	削表面	尖	?	カエデ属	18.0	6.1	270	2
杭列8-3	杭先	-	丸木	尖	5面削	元	元	?	トネリコ属	19.9	5.2	224	1
杭列8-4	杭	V-4	丸木	尖	面2面削	削表面	未完	?	トネリコ属	59.5	4.5	670	1
杭列8-5	杭先	V-4	丸木	尖	面2面削	削表面	未完	○	オニグルミ	28.0	3.7	158	1
杭列8-6	杭	-	丸木	尖	3面削	削表面	未完	?	コシアブラ	36.0	3.8	331	2
杭列8-7	杭	-	丸木	尖	面3面削	削表面	未完	?	コシアブラ	25.7	3.6	235	1
杭列8-8	杭	V-4	丸木	尖	面1面削	削表面	未完	?	ハリギリ	47.4	3.3	250	2
杭列8-9	杭先(往?)	-	丸木	尖	面2面削	削表面	未完	?	ハシノキ属	35.2	1.4	394	1
杭列8-10	杭	-	丸木	尖	面3面削	削表面	未完	?	イスエンジユ	38.8	4.4	350	1
杭列8-11	杭先(往?)	-	丸木	尖	面7面削	削表面	未完	?	カエデ属	35.7	1.3	883	1
杭列8-12	杭先	-	丸木	尖	4面削	削表面	未完	?	トネリコ属	31.1	4.4	217	1
杭列8-13	杭先	-	丸木	尖	2面削	削表面	未完	?	イスエンジユ	29.9	5.2	302	1
杭列8-14	杭先(往?)	-	半空	尖	2面削	削表面	未完	?	イスエンジユ	37.5	6.3	563	1
杭列8-15	杭	-	丸木	尖	2面削	削表面	未完	?	ハシノキ属	54.3	5.1	160	1
杭列8-16	杭	-	丸木	尖	面3面削	削表面	未完	?	トネリコ属	35.9	4.9	632	1
杭列8-17	杭	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杭列8-18	杭	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杭列8-19	杭	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杭列8-20	杭	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杭列8-21	杭	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杭列8-22	杭	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杭列8-23	杭	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杭列8-24	杭・杭先	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杭列8-25	杭	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杭列8-26	杭	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杭列8-27	杭	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杭列8-28	杭	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杭列8-29	杭	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杭列8-30	杭	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杭列8-31	杭	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杭列8-32	杭	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
杭列8-a	杭(早開株?)	V-3	丸木	尖	1/4削	丸削状に削り、表面調整	未完	?	ヒノキ属	41.0	3.0	240	1
杭列8-b	早開木持部	V-3	丸木	尖	2/2削	削表面	未完	?	アスナロ属	(1.1)X0.081.0	110	2	1

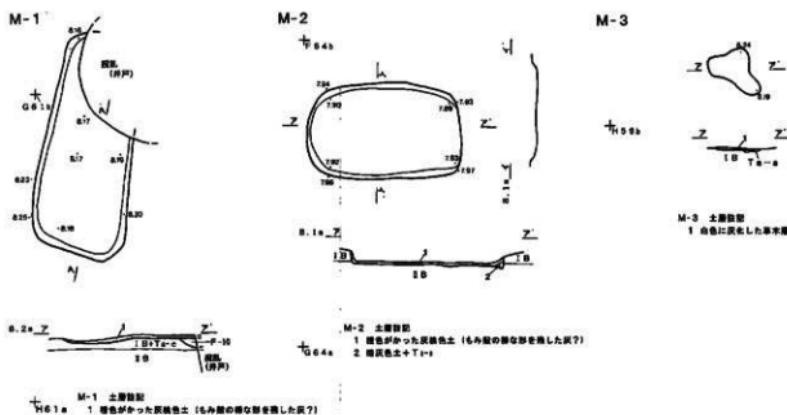
同左1本の樹齢内訳は
トネリコ属 : 10本
ヤナギ属 : 13
イスエンジユ : 1
モミ属 : 1
モクレン属 : 1

杭列7-18-38のうち丸1点と
杭列8-17-31の合計25本で、
尖2: つぶれ丸1の比率
尖のうち
1・2面削削表面 約7削
3面以上削 約3削

表N-3 柏原-9 東-1

排列	地名	遺物名	断面	不規則	尖	端形	齒	等	元系別	接觸面	輪	粗	長さcm	幅cm	高さcm	断片	備考
排列9-1	杭先	-	1.82	丸木	尖	2面削	根表面	?	クワ属	(13.5)	4.5	154	1				
排列9-2	杭先剥片	-	1.83	丸木	尖?	削りあり	?	クワ属	-	-	-	-	64	6			
排列9-3	杭先剥片	-	1.84	丸木	不明	不明	?	ナガギ属	-	-	-	-	66	5			
排列9-4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡	
排列9-5	杭先剥片	-	1.85	丸木	不明	不明	?	ニレ属	(23.0)	4.5	353	多					
排列9-6	杭先剥片	-	1.86	丸木	尖?	削り	?	オニグルミ	(12.1)	6.0	192	1					
排列9-7	杭先	-	1.87	丸木	尖	直交4面削	?	スエシジユ	-	-	-	-	530	1			
排列9-8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡	
排列9-9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡	
排列9-10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡	
排列9-11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡	
排列9-12	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡	
排列9-13	杭先	-	1.93	半削	尖	削面利用2面削	根表面	?	ナガギ属	(16.4)	7.5	338	1				
排列9-14	杭	IV-4	1.94	丸木	尖	2面削	根表面	元先	クサクダ属	(14.8)	5.9	1290	1				
排列9-15	杭	-	1.95	丸木	尖	2面削	根表面	元先	ニレ属	(55.0)	6.5	1240	1				
排列9-16	杭(往?)	IV-4	1.96	丸木	尖	全削	根表面	5cm	ハシノキ属	(13.0)	5.4	1300	1				
排列9-17	杭先	-	1.97	半削	尖	2面削	根表面	?	ハシノイ属	(10.1)	4.7	220	1				
排列9-18	杭先	-	1.98	丸木	尖	4面削	?	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡	
排列9-19	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
排列9-20	杭	-	1.99	丸木	尖	6面削	?	オニグルミ	(11.1)	6.2	500	1					
排列9-21	杭	-	2.00	丸木	尖	直交2面削	根表丘陵	?	トネリコ属	(47.0)	6.0	965	1				
排列9-22	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡	
排列9-23	杭(往?)	-	2.01	丸木	尖	2面削	根表面	元先	ナガギ属	(14.3)	6.9	1130	1				
排列9-24	杭先	-	2.02	丸木	尖	直交2面削	根表面	元先	クサクダ属	(17.5)	6.5	515	1				
排列9-25	杭先剥片	-	2.15	不明	不明	不明	?	ハシノキ属	(5.8)	(3.3)	34	1					
排列9-26	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡	
排列9-27	杭先	-	2.14	丸木	尖	削りあり	?	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡	
排列9-28	杭先	-	2.13	半削	尖	斜面と先を細かく削る	?	トネリコ属	(15.2)	(5.2)	211	1					
排列9-29	杭先	-	2.06	丸木	尖	3面削	根表面	?	ハシノキ属	(26.2)	5.2	228	16				
排列9-30	杭先	-	2.12	丸木	尖	3面削	根表面	?	ハシノキ属	(18.9)	6.2	469	1				
排列9-31	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡	
排列9-32	杭先(往?)	IV-4	2.05	丸木	尖	直交3面削	根表面	元先	ナガギ属	(36.2)	7.3	80	1				
排列9-33	杭先	-	2.04	丸木	尖	1面削	根表面	?	トネリコ属	(4.6)	5.0	344	1				
排列9-34	杭(往?)	IV-4	2.03	丸木	尖	4面削	根表面	5cm	ハシノキ属	(31.3)	11.0	3550	2				
排列9-35	杭先(往?)	-	2.16	丸木	尖	5面削	?	トネリコ属	(31.3)	7.5	633	1					
排列9-36	杭先	-	2.07	1/4削	尖	斜面利用2面削	?	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡	
排列9-37	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
排列9-38	杭先	-	2.08	丸木	尖	直交2面削	根表面	?	クサクダ属	(30.2)	6.5	310	1				
排列9-39	杭先(往?)	IV-4	2.09	丸木	尖	5面削	根表面	以上	ナガギ属	(35.4)	7.4	180	1				
排列9-40	杭先(往?)	-	2.10	丸木	尖	5面削	?	トネリコ属	(33.8)	8cm	トネリコ属	(21.1)	6.2	1580	1	枝法小形もあり	

3 室状造構



図IV-6 室状造構

3. 室状造構

M-1 (図IV-6、図版IV-5)

位置 G 60 c, G 61 ad

長軸方向 N -22° - E

規模 (1.82) / (1.70) × 0.79/0.70 × 0.06 m

調査 61ラインの土層鉛錆調査中、井戸の搅乱断面上部に白色の灰のような薄層と焼土が確認された。断面観察をしながら白色の薄層を追いかけると、これは緩く凹ませて I 黒層の上に形成されたものであることがわかった。下の焼土は I 黒層の造構で F-10とした。

形態 井戸で表されているが、平面形はほぼ長方形で、浅い凹みになっている。南側がやや深い。

特徴 白色の薄層は、3~4 cmの厚さで全体に敷き詰められたようになっている。拡大視すると殻殻のような形態を残した灰のような物質である。これを敷いて何かを保存した室状の造構であろう。

M-2 (図IV-6、図版IV-5)

位置 F 64 d

長軸方向 N -69° - W

規模 1.27/1.24 × 0.79/0.71 × 0.11 m

調査 当初、白色の灰の集中として I 黒層の造構調査していたが、M-1 の発見と、覆土 2 に入る Ta-a により、表土の造構として扱うこととなった。

形態 平面形はほぼ長方形で、底面は平坦である。壁はほぼ垂直でしっかりした掘り込みになっており、II 黑層まで達している。

特徴 M-1 と同様であるが、M-1 よりもしっかりした室状の土壤となっている。

M-3 (図IV-6、図版IV-5)

位置 H 59 a

長軸方向 N -37° - E

規模 0.49 × 0.28 × 厚さ 0.02 m

調査 当初、灰の集中として I 黒層の造構調査していたが、下層への Ta-a の入り込みや、M-1・2 の調査から、表土の造構として扱うこととなった。

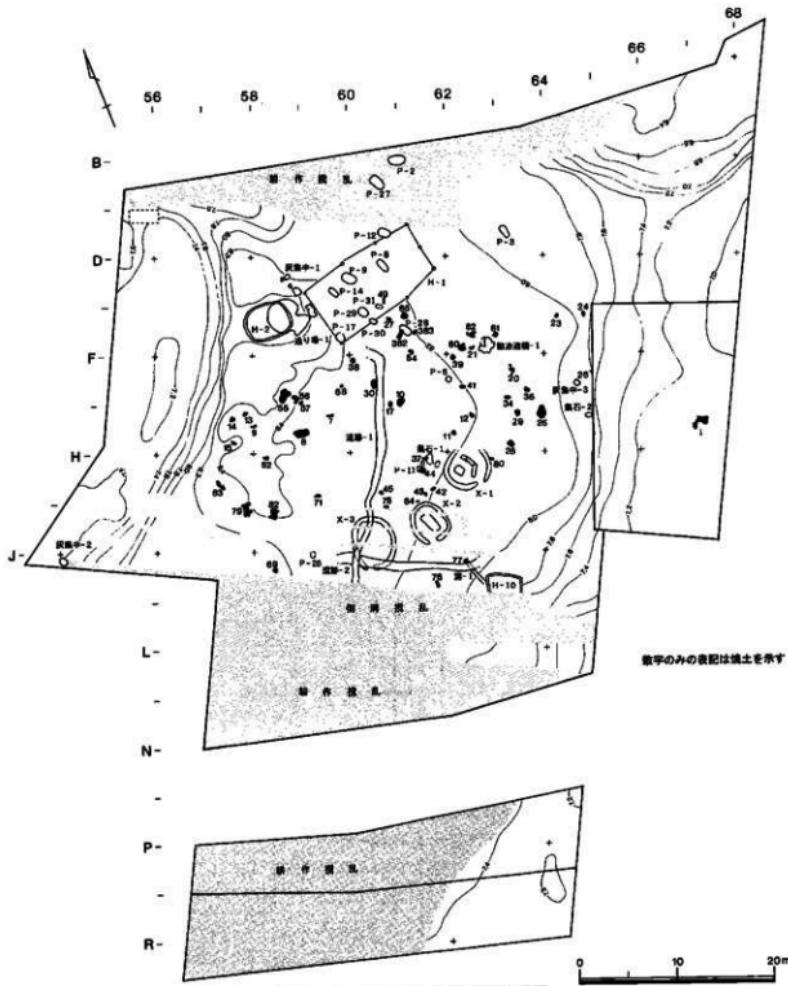
形態・特徴 不定形の薄い草木灰層。部分的な残存だろうか。

(三浦)

V 〇黒層・I黒層の遺構とその遺物

1 概要(図V-1)

遺構は、北にむかって伸びる舌状台地の頂部(標高8.4~7.8m)に位置する。〇黒層では住居跡1軒、送り場1か所、灰集中1基、道跡1条。I黒層では住居跡2軒、周溝のある墓3基、土坑墓12基、



2 住居跡

土壌3基、焼土54基、灰集中2基、鐵冶遺構1基、集石2か所、溝1条、道跡1条を検出した。層準と時期はほぼ以下のように対応する。0黒層・I黒層の上面は近世アイヌ文化期、上部は中世アイヌ文化期、擦文化期から続縄文時代後葉、中部と下部は続縄文時代中葉である。

近世アイヌ文化期の遺構は、台地の北西側に集中する。H-1と送り場1と灰集中1と道跡1は配置から見て一時期の遺構群ととらえられる。擦文化期の遺構はおもに、台地の北西側と南東側に集中し、北西側には前期の土坑墓・焼土が多く、南東側には前期の周溝のある墓がある。竪穴住居跡は中・後期で2軒出土しており、土坑墓・周溝のある墓と時期が異なる。続縄文時代後葉の遺構は台地の南東側に焼土が散在している。続縄文時代中葉の遺構は台地の中央部分に焼土が集中している。

遺構の遺物はおもに、周溝のある墓・土坑墓から8世紀代の擦文土器・須恵器・鉄製品が出土している。焼土からは後北A・B・北大I式が出土している。包含層の遺物は、擦文土器が台地の北西側と南東側、後北A・B式は台地の中央部分、後北C₂・D・北大I式は台地の南東側の低い部分に多く出土する。包含層の遺物は遺構の集中する地域に多く出土する傾向にある。
(鈴木)

2 住居跡

H-1 (図V-2、表V-7、図版V-1)

位置 C60・61、D59・61、E59・60 長軸方位 N-78°-E

規模 2.04×6.48m

調査 Ta-a層除去後、0黒層の上面にTa-aに覆われた柱穴の並びを確認した。また、柱穴の並びに囲まれた同一面には焼土が2基(HF1・2)確認された。HF2の脇には集石があった。

覆土 柱穴の覆土はTa-aを多量に含む黒色土である。ウ・カ・サ・シの形は先端が円筒形、エ・オ・キ・ク・ケ・コは截頭円錐形である。深さはウ・オ・カ・シの上面が削平を受けていて確かにことはわからないが、ウ・サ・シは先端が漸移層中で止まっているのに対してエ・キ・ク・ケ・コは先端がEn-L層に達している。以上より、ウ・サ・シは浅くエ・キ・ク・ケ・コはやや深く設置されたと考えることができる。

形態 平面形は長方形で、柱穴の間隔は、長軸並が4m前後、短軸並が2m前後である。

付属遺構 炉はいずれも地床炉で住居の長軸方向に長軸をむけて一列に並ぶ。HF1はよく焼けており、白色化した・魚骨(サケ科、ニシン科)・獸骨片を含んでいた。HF2もよく焼けしており、白色化した魚骨(サケ科、コイ科)片を少量含んでいた。HF2は灰像分析を依頼中である。

遺物出土状況 磚が11個出土した。

時期 柱穴・炉の検出層準から近世アイヌ文化期と考えられる。

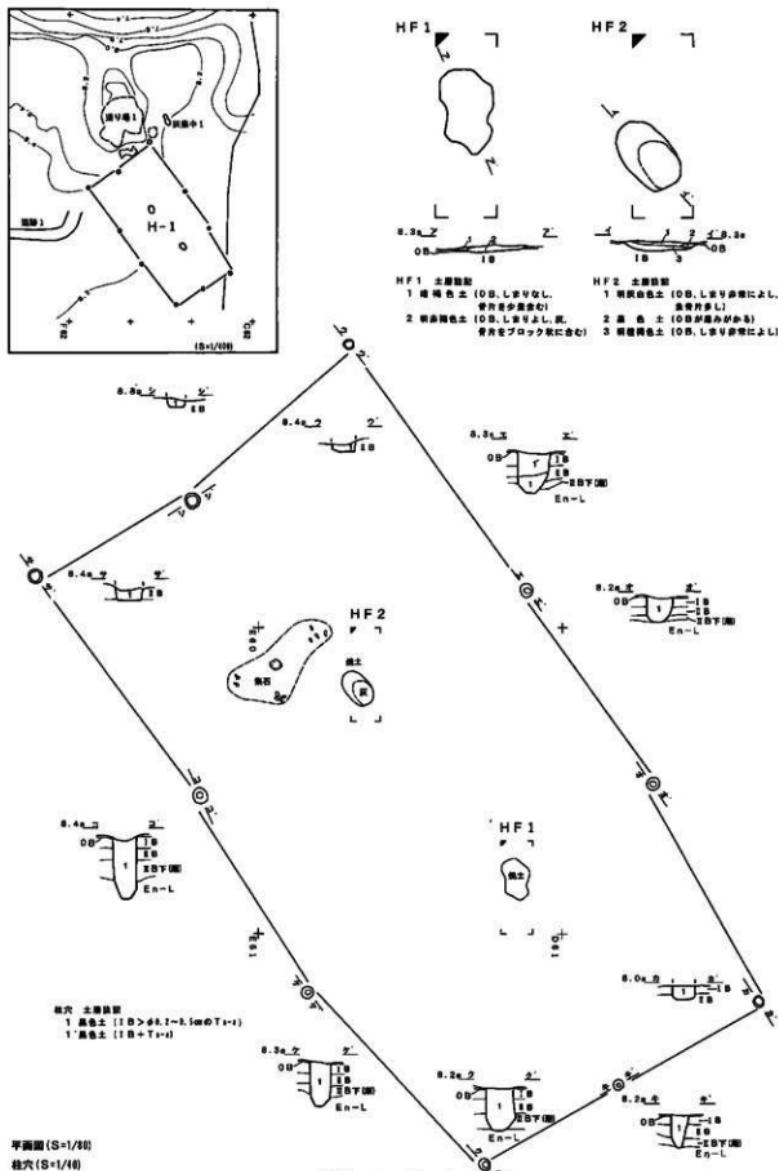
H-2 (図V-3・4、表V-6・7、図版V-2・3・5)

位置 D58・59、E58・59 長軸方位 N-87°-W

規模 4.55/4.24×3.67/3.47×0.17m

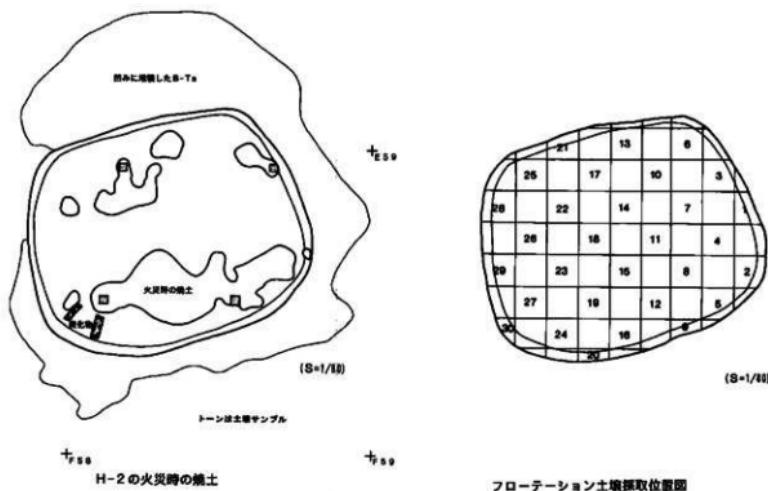
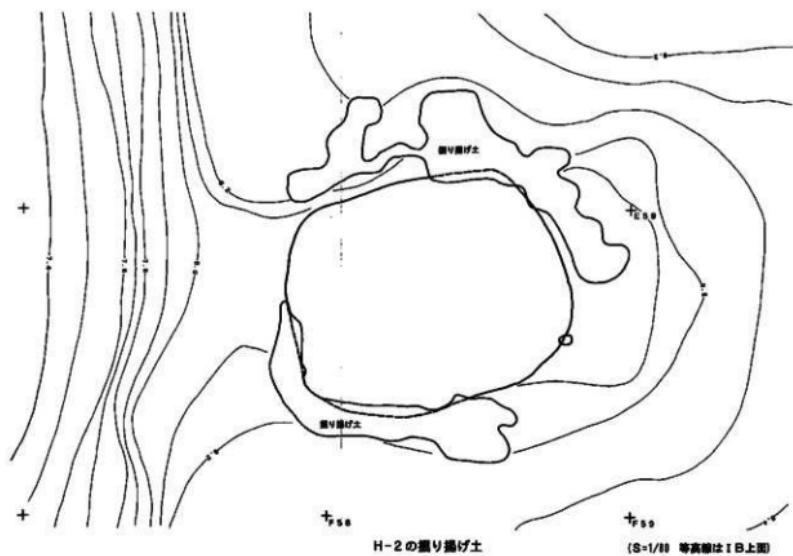
調査 Ta-a層除去後、0黒層の上面に深さ40cm位のくぼみを確認した。くぼみ内には0黒層が厚く堆積していた。擦文化期の竪穴住居跡であると予想されたが、くぼみがアイヌ文化期の送り場として利用されていることが多いので0黒層の上面の精査を優先した。その結果、くぼみが送り場であることが判明したのでそれを調査した後にH-2の調査を行なった。

H-2の調査はくぼみの中心から東西南北に試掘溝を設定した。土層断面の観察よりB-Tm層が切られていること、掘り揚げ土があること、下層に縄文時代の住居跡があることがわかった。構築面での上場平面形を検出すため竪穴周辺を少しづつ下げはじめたところで、くぼみの北東側と南西側の2か所に弧状の揚げ土の拡がりを検出した。試掘溝による立上りの確認と揚げ土の拡がりによって



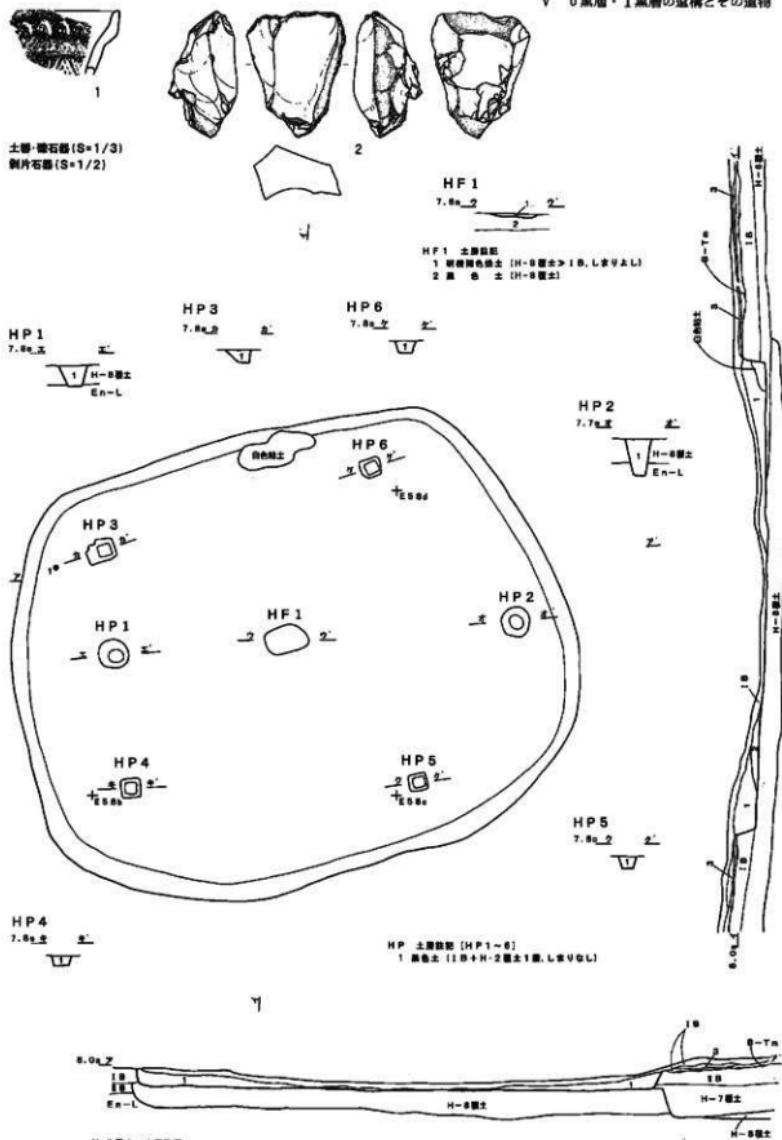
図V-2 H-1

2 住居跡



図V-3 H-2(1)

V 0層・I層の構造とその遺物



图V-4 H-2(2)

上場平面形が確定できたので竪穴内調査を開始した。竪穴内のI黒層、覆土1層を除去したところ、床面直上で火災による焼土の抜がりと炭化材を検出した。フローテーション用に焼土を4か所で採取した。床面では柱穴6か所、HF1を検出し、HF1はフローテーション用に土壤を採取、床面土壤はフローテーション用に50cm方格割付けをおこない31か所で採取した。HF1は灰像分析を依頼中である。

覆土 覆土1は竪穴中央部分では極めて薄く、住居焼失後に流れ込んだものと推定される。覆土2は住居壁からやや離れたところの床面直上に分布している。平面形と堆積状況から火災によって屋根土が焼土になったものと判断できるが、竪穴中央部分に分布していないことから、屋根全面を覆っていたわけではないようだ。

形態 暗丸長方形、床面は平坦で、壁は高さ15cm前後で外傾し直線的に立ち上がる。

付属遺構 柱穴は6か所で、平面形が方形で浅い柱穴が四隅に4か所、平面形が円形でやや深い柱穴が長軸上に2か所検出された。炉は地床炉で、長軸は住居の長軸方向と同じである。HF1はよく焼けていた。フローテーションの結果未炭化のイネ内外穎が2点検出された。魚骨・獣骨片は含まれていない。甕はなかった。入り口部分は、掘り揚げ土が北西側と南東側の2か所で途切れていること、柱穴の位置から南東部分に想定される。

遺物出土状況 床面から口唇が角張る摩滅した壺の口縁部片が1点、Ⅶd類の甕口縁部片が覆土1層下部から出土した。1と同一個体がE57d、F59dから出土している。ほかには疊が6個、フレイク2個、繩文後晩期の土器片が10片出土している。また、脱色したEn-Lの白色粘土塊が北側壁際から出土した。粘土塊はしまりではなく、汚れ・混じりがない。甕がないことから補修材とは考えられず、かつ汚れ・混じりがないことから土器の原材料と考えられる。

粘土塊をフローテーションした結果未炭化のエゾニワトコの種子が1点検出された。

遺物 1はⅦd類の甕の口縁部片で、同一個体はE57d(図版-2-29)、F59d(図版-2-30)から出土している。図版-2-29は、外面がヨコナデ→馬蹄形圧痕。内面は内黒、ヨコミガキ。図版-2-30は、外面が貼付帶→馬蹄形圧痕→横位沈線→下段鋸歯状文→上段鋸歯状文。内面は内黒、タテミガキ。29・30とも炭化物が付着する。

2は疊面を打面とする石核で、疊に摩滅がある。この石核はH-2に伴うものではなく、H-2が下層のH-8を破壊した際に紛れ込んだものである。黒曜石製。

時期 B-Tm層を切って構築されていること、掘り揚げ土の上にI黒層が堆積していること、覆土1層下部からⅦd類の甕口縁部片が出土していることからⅦd類の時期以降で、その時期からあまり隔たっていないと考えられる。約10m離れたD55のI-B-2層からⅦd類の甕が1個体出土していることも傍証になるか。

H-10(図V-5・6、表V-2・6・7、図版V-4・5)

位置 J62・63

長軸方位 N-87°-W

規模 -/-×3.62/3.47×0.41m

調査 Ta-a層除去後、0黒層の上面に深さ30cm位のくぼみを確認した。また、道路の側溝によって削り取られた断面の観察より撫文化期の竪穴住居跡であると予想された。くぼみがアイヌ文化期の送り場として利用されていることが多いのでI黒層の上面の精査を優先したが送り場はなかった。

H-10の調査は側溝によって削り取られた断面を土層観察面として利用した。土層断面の観察よりB-Tm層が切られていること、掘り揚げ土があることがわかった。構築面での上場平面形を検出するため竪穴周辺を少しづつ下げはじめたところで、くぼみの北側と東側に掘り揚げ土の抜がりを検

出した。断面観察により立上りの確認と掘り掲げ土の抜がりによって上場平面形が確定できたので豊穴内調査を開始した。豊穴内の0 黒層、覆土を除去し床面の精査を行なった。床面では浅い小穴2か所を検出し、床面土壤はフローテーション用に50cm方格割付けをおこない21か所で採取した。

覆土 覆土6・7・8は豊穴埋没時に最初に堆積した壁際の崩落土である。覆土5は中央部分でやや薄くなっているものの全面を覆っており、住居に流れ込んだものと推定される。覆土3・4は豊穴廃棄後暫くたって壁際に流入した土である。覆土5は全面を覆っているものの、すでに覆土6・7・8が堆積していることから、住居中央部分には屋根土はなかったものと考えられる。掘り掲げ土はB-Tm層直上に堆積していた。

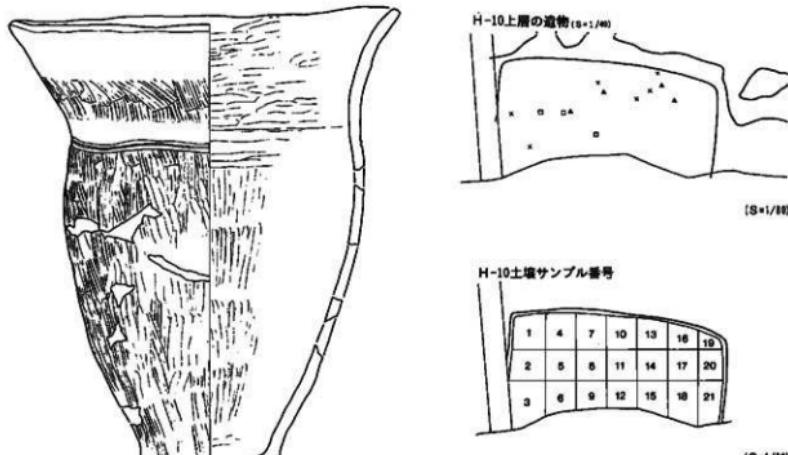
形態 約2/3が削除されているが方形とおもわれる。床面は平坦で、壁は高さ40cm前後で屈曲しながら外方に立ち上がる。

付属遺構 小穴は2か所で、平面形が円形で浅く、柱穴として機能していたかは疑問の残るところである。炉・竈は確認されなかった。竈は南西側に付設されている可能性がある。

遺物出土状況 I はⅣc類の甕で掘り掲げ土下の層準から出土した。ほかに覆土からは礫が2個、フレイク8個、Ⅲ群土器片が7個、時期不明土器片が3個出土し、床面からⅢ群a類土器片が1個、IV b類土器片が1個、時期不明土器片が3個出土している。床面土壤フローテーションの結果炭化種子が出土している。

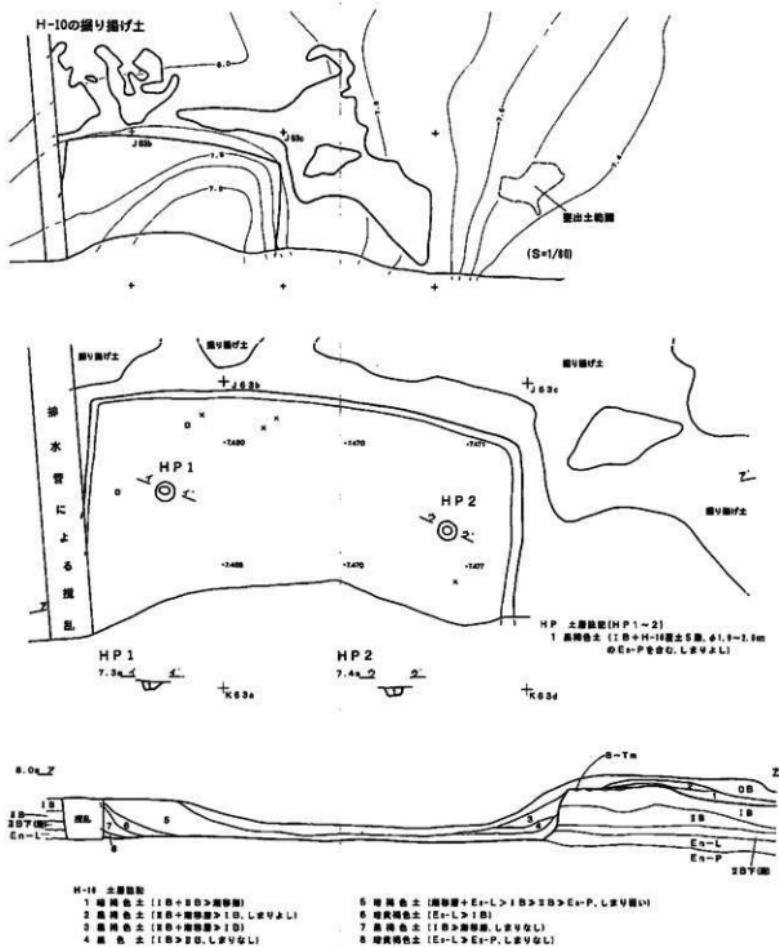
遺物 I はⅣc類の甕で、頸部下半に2本の沈縫が施されている。

時期 掘り掲げ土がB-Tm層直上に堆積していること、B-Tm層を切って構築されていることや掘り掲げ土付近出土の甕からB-Tm降下後に近い擦文化期中期である。
(鈴木)



図V-5 H-10(1)

2 住居跡



図V-6 H-10(2)

3 周溝のある墓

周溝のある墓は3基あり台地尾根部分の南側に集中している。これらは同じ平面形をもっているが、主体部構造が異なる。主体部は長軸方向によって3群位に分かれる。時期は掠文化期前期で、8世紀後葉～9世紀初めの層年代が与えられる。また、これらは土坑墓と併設されてる。

X-1 (図V-7~9、表V-2・6・7、図版V-6~11)

位置 G 62、H 62

規模	G 22/4.10×3.85/3.71×0.48m (区画域)	長軸方位
1.08/0.96×0.47/0.36×0.43m (G 1)	N-25°-W (G 1)	
1.09/0.92×0.57/0.43×0.36m (G 2)	N-46°-W (G 2)	
-/-×0.50/0.41×0.34m (G 3)	N-51°-W (G 3)	
1.16/1.00×0.33/0.28×0.26m (G 4)	N-22°-E (G 4)	

調査 Ta-a 層除去後、H 62 まで 0 黒層の上面に深さ 8cm 位の橢円形くぼみ (G 1 に当たる) を確認した。このくぼみは土壤の落ち込みと予想されたため、その周囲を残して H 62 全体を 3cm 位 (0 B 層厚分) 下げたところ、直径 4m、幅 20cm 位の輪状で僅かに褐色がかった土の抜がり (周溝に当たる) と G 1 に当たるくぼみの西側に紡錘形で僅かに褐色がかったわざかなくぼみ (G 2 に当たる) を確認した。そこで、くぼみの短軸上と輪状の直径線上を横断する位置にトレンチを設けた。その結果中央に土壤 2 基、両端に溝が確認された。

この時すでに、G ライングリットは排土用通路確保のために先行して調査を進め、En-P 面まで下がっていた。H 62 の北面セクションを確認したところ 2か所で B-Tm が堆積する溝を追認できた。以上より、B-Tm 降灰以前の溝・土壤を持つ掠文化期の遺構であることがわかった。周溝断面オキの上中下部で花粉分析を行なっている。

土壤の数は 2 基と予想されたので、溝の調査を先行させた。面を下げる調査は溝の構築面を削平してしまう可能性があるので、トレンチの断面から B-Tm の堆積を目安に、溝底を追ようにして調査した。土壤は G 1 の調査をはじめに行なった。トレンチ両面から掘り進んでゆくと、北西壁と南東壁に別な土壤 (G 3・G 4) を検出した。G 1・G 3・G 4 調査終了後に G 2 を調査した。

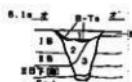
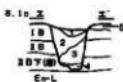
周溝の覆土 溝の深さによって覆土層の枚数は異なるが、すべて流れ込みの堆積を示している。周溝の 1 層は区画域内の掘り揚げ土の上を覆う I B 層である。B-Tm は周溝がほぼ埋まりきった時期に降下していることがわかる。周溝を掘り揚げた排土は区画域 (周溝の内側を区画域と呼ぶ) に置いている。

土壤の覆土 いずれの土壤も覆土は埋土で構成されている。G 2・G 3 は土壤上面が周溝の掘り揚げ土によって覆われている。周溝の掘り揚げ土の上に堆積した褐色がかった土の抜がりは (I B' 層のこと)、G 2・G 3 が遺体が腐食した後に掘り揚げ土が若干陥没して堆積したものである。G 1・G 4 は周溝の掘り揚げ土を切っている。

周溝の形態 幅は 40~25cm で南西部が広く北東部分が狭い。深さは 50~25cm で南西部が深く北東部分が浅い。底面は平坦で、断面は直線的で外傾する立ち上りをもつ。南西部の底面には幅 20cm 位の長楕円形の凹みがあった。その形態から鋸による掘削が行われたと推定される。周溝は南側で途切れおり意図的に周溝の掘削を停止している。その位置が土壤の長軸方向上であることから、途切れは墓道として機能していたと考えられる。

土壤の形態 G 1・G 2・G 3 は平面形が長方形で、立上りは直線的でやや外傾する。壤底面は En-L まで掘削されている。G 4 は平面形が長細い橢円形で、立上りは直線的でやや外傾する。壤底

3 周囲のある土



- カ 土壌剖面
- 1 黒 色 土 (1B, しまりなし) Hs1/1
 - 2 黒褐色土 (1B+2B>E-L>層状層, しまりなし)
Hs1/1Hs1/2
 - 3 黒褐色土 (1B+2B>E-L) Hs1/1Hs1/2
 - 4 黒褐色土 (1B+2B>層状層, 黒化物多く含む, しまりなし) Hs1/1Hs1/2
 - 5 黒褐色土 (1B+2B>層状層, しまりなし)
Hs1/1Hs1/2
 - 6 黒褐色土 (層状層+E-L>1B, しまりなし)
Hs1/1Hs1/2
 - 7 地表の盛り抜け土

- ニ 土壌剖面
- 1 黒 色 土 (1B, しまりなし)
Hs1/1
 - 2 黒 色 土 (1B+2B, しまりなし)
Hs1/1
 - 3 黒褐色土 (1B+2B>層状層, しまりなし) Hs1/1Hs1/2
 - 4 黒褐色土 (1B+2B>層状層, 層状層ブロック状)
Hs1/1Hs1/2
 - 5 地表の盛り抜け土

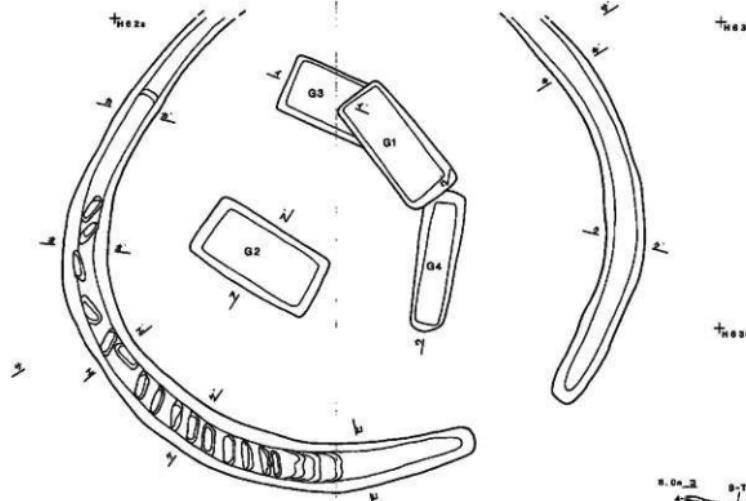
- オ 土壌剖面
- 1 黒 色 土 (1B, しまりなし)
Hs1/1
 - 2 黒褐色土 (1B+2B>層状層, しまりなし) Hs1/1Hs1/2
 - 3 黒褐色土 (1B+2B>層状層, しまりなし) Hs1/1Hs1/2
 - 4 黒褐色土 (1B+2B>層状層, 層状層ブロック状)
Hs1/1Hs1/2
 - 5 地表の盛り抜け土



- キ 土壌剖面
- 1 黒 色 土 (1B, しまりなし) Hs1/1
 - 2 黒褐色土 (1B+2B>層状層, 黒化物多く含む, しまりなし) Hs1/1Hs1/2
 - 3 地表の盛り抜け土



- ク 土壌剖面
- 1 黒 色 土 (1B, しまりなし) Hs1/1
 - 2 黒褐色土 (1B+2B>層状層, しまりなし)
Hs1/1Hs1/2
 - 3 黒 色 土 (1B+2B>層状層, 黒化物ブロック状)
Hs1/1Hs1/2
 - 4 地表の盛り抜け土



- ケ 土壌剖面
- 1 黒 色 土 (1B, しまりなし) Hs1/1
 - 2 黒褐色土 (1B+2B>層状層, 黒化物多く含む, しまりなし) Hs1/1Hs1/2
 - 3 黒 色 土 (層状層+E-L>2B, 黒化物ブロック状) Hs1/1, Hs1/1, 1/1
 - 4 黒褐色土 (1B+2B>層状層, しまりなし) Hs1/1Hs1/2
 - 5 黒 色 土 (層状層+E-L>2B, 黑化物ブロック状) Hs1/1, Hs1/1, 1/1
 - 6 地表の盛り抜け土

- ミ 土壌剖面
- 1 黒 色 土 (1B, 黒化物多く含む, しまりなし) Hs1/1
 - 2 黒 色 土 (1B+2B, しまりなし) Hs1/1
 - 3 黑褐色土 (1B+2B>層状層, しまりなし) Hs1/1Hs1/2
 - 4 地表の盛り抜け土



- オ 2 土壌剖面
- 6 黒 色 土 (1B>D, しまりよし) Hs1/1Hs1/1
 - 7 黑褐色土 (層状層>2B+E-L, しまりけり)
Hs1/1Hs1/2
 - 8 にぶい黒褐色土 (E-L>層状層, しまりなし)
Hs1/1Hs1/2

- G1 土壌剖面
- 1 黒 色 土 (1B+2B>E-L+層状層, 黑化物多く含む, しまりなし) Hs1/1Hs1/2
 - 2 黑褐色土 (E-L>層状層>1B+2B, しまりけり, しまりなし)
Hs1/1Hs1/2

- 地表・盛り抜け土 土壌剖面
- 3 黒 色 土 (1B) Hs1/1
 - 4 黑褐色土 (1B+2B>層状層, 黑化物多く含む, しまりなし)
Hs1/1Hs1/2
 - 5 黑褐色土 (1B+2B>層状層>E-L, 黑化物ブロックを含む, 黑化物多く含む, しまりなし) Hs1/1Hs1/2

図V-7 X-1(1)

面は漸移層中で止まっている。

遺構の構築順序 G 2・G 3は周溝の掘り揚げ土に覆われていること、G 2・G 3は長軸方向を同じくすること、G 1・G 4は周溝の掘り揚げ土に覆われていないこと、G 1はG 4を切っていることより以下の順序が考えられる。

1：G 2・G 3の掘削・埋め戻し→2：周溝の掘削→3：掘り揚げ土を区画域とG 2・G 3の上に覆う→4：G 4の掘削・埋め戻し→5：G 1の掘削・埋め戻し。

また、G 4はG 2・G 3を避け、長軸方向を変えて設けられていること、G 1はG 4をやや避け、長軸方向を変えて、G 3の1/2を破壊して設けられていることから、構築順「3：」と「4：」、「4：」と「5：」の時間差は互いの存在が認識できていたくらいの時間と推定でき、追葬と考えられる。

遺物出土状況 土壇からは、G 1 壌底から頁岩の礫片が1点、G 4 壌土1層から坏片2点、うち1点は土器集中aの破片と接合して壌（図V-8-6）となった。周溝内からは球洞窓（図V-9-10）が1個体出土している。この球洞窓は周溝セクションコの2層上部から出土していること、接合破片が区画域縁（土器集中e）にもあることから、溝が少し埋ったときに区画域縁に置かれたものである。区画域内では墓道側の周溝の縁に多く出土しており、いづれも周溝の掘り揚げ土上面から出土している。土器集中a・dの接合例は4例であり、大型窓2個（図V-9-11・12）、内外黒坏・内黒坏2個（図V-8-6・7）である。土器集中aからは内黒坏1個（図V-8-5）、その脇からは須恵器窓1個（図V-9-8）が出土している。土器集中dからは紡錘車（図V-8-3）が出土している。球洞窓窓部～底部（図V-9-9）は区画域の内と外の接合例で、窓部が区画域内の土器集中dで底部が区画域外の土器集中bから出土している。また、9・10はG 59・60、H 59のI 黒層とも接合関係を持つ（図V-30参照）。5・6・7は内面の剥落が特に顕著であることから、風化・凍結するような環境に正位置で置かれていたと考えられる。また、11・12は表面の劣化が著しい同じような状態にあったと推定できる。9・10には表面の劣化がみられない。これらの土器はすべてⅤ群b類である。

ほかには、周溝内から縄文中期の土器片2点、後北B式深鉢窓部片4点、礫2点出土した。G 62は周溝の及んでいたグリットであるが擦文土器は1点も出土していない、供獻土器はなかったようだ。区画域から窓片1点、土器集中dで接合しない窓・壌の細片が15点出土している。

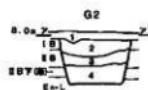
遺物（図V-8・9、図版V-9-11）

1は球洞窓の口縁部、同一個体片？がG 58（図V-2-23）、G 59（図V-2-24）から出土している。外面はタテハケ→ヨコナデ→沈線→ヨコナデ、内面はヨコハケ→ヨコナデ→ヨコミガキ。これらは、口縁端面がへこむくらい内外面から強くはさまれてナデられ、頸部と口縁部の境に沈線が施される。2は窓の底部、内面はヨコハケ、外底面は葉脈压痕がある。3は紡錘車で側面の沈線をミガキで所々潰している。5は体部下半がわずかに外反し、体部上半が内彎しながら立ち上がる内黒坏で、内面の劣化・剥落が著しい。6は体部が内彎している内外黒坏で所々剥落がある。7は体部下半が外彎し、体部上半が内彎気味に立上がる大型の内黒坏で、内面の剥落が著しい。8は須恵器窓で、体部下半は腰が張らずやや内彎気味に立上り、体部上半でやや外反する。高台は外へ踏ん張らない。疊付きは内傾して凹む。9・10は球洞窓で内外面に劣化・剥落はない。11は大型窓で内外面の劣化が著しい。12は大型窓で外面に劣化がみられ、炭化物が付着する。

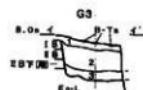
4は珪質頁岩の亜角礫、層理に沿って割り、厚みを減じた後に角を打ち欠いている。

時期 G 1・G 2・G 3・G 4・周溝はいづれもB-Tm降灰以前に埋没していることや区画域内・周溝出土の土器の時期から、8世紀後葉から9世紀はじめと考えられる。
(鈴木)

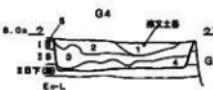
3 周溝のある墓



- G2 土層構成
 1 黄色土 (I B > 鹿野層、中や黄色がかる、炭化物を多く含む、しまりなし、表面の盛り抜け土)
 Reel, STS1, 1/1
 2 黄色土 (I B > 鹿野層、しまりよし) Reel, STS1, 1/1
 3 黄色土 (鹿野層+E-L、しまりない)
 Reel, STS1, 1/2
 4 にいえ黄褐色土 (E-L > 鹿野層、しまりなし)
 Reel, STS1, 1/2

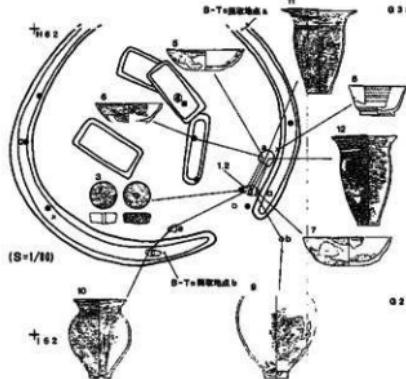


- G3 土層構成
 1 黄色土 (I B > 鹿野層、中や黄色がかる、炭化物を多く含む、しまりなし、表面の盛り抜け土)
 Reel, STS1, 1/1
 2 黄色土 (I B > 鹿野層+E-L、しまりよい) Reel, STS1, 1/1
 3 黄色土 (E-L > 鹿野層、中や黄色、しまりない)
 Reel, STS1, 1/2

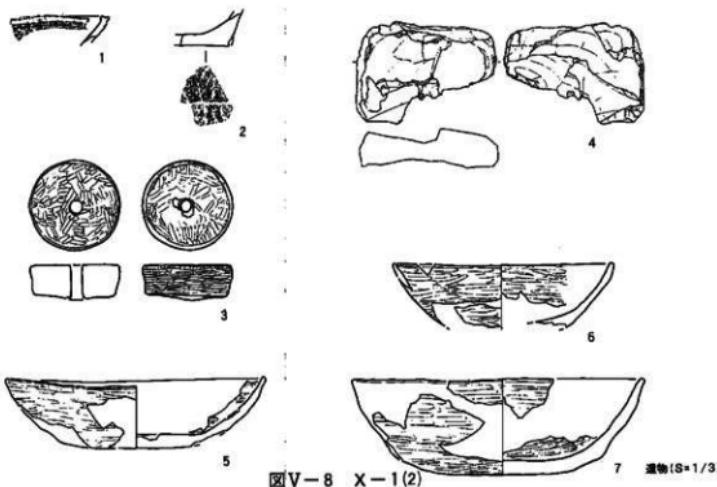
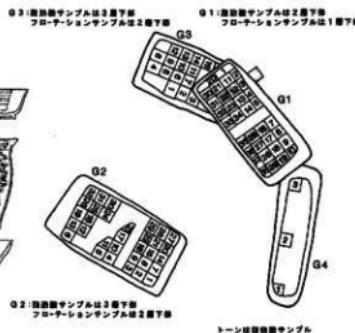


- G4 土層構成
 1 黄色土 (I B、しまりなし) Reel, STS1, 1/1
 2 黄色土 (鹿野層+E-L、しまりよし) Reel, STS1, 1/1
 3 黄色土 (I B > I B > 鹿野層、鹿野層ブロック状)
 Reel, STS1, 1/1
 4 黄色土 (E-L > 鹿野層、しまりない) Reel, STS1, 1/1
 5 鹿野の盛り抜け土

遺物出土状況



サンプル位置図

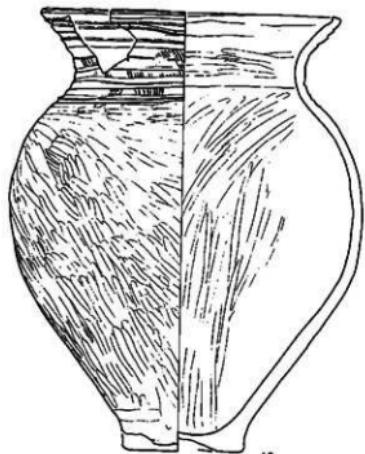


図V-8 X-1(2) 7 遺物(S=1/3)

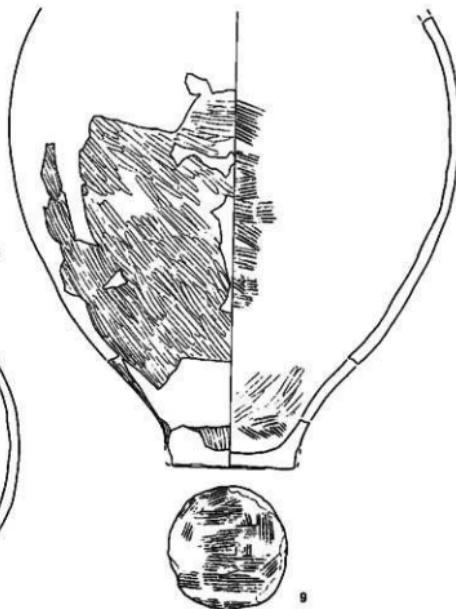
V 〇黒縞・I黒縞の盃柄とその遺物



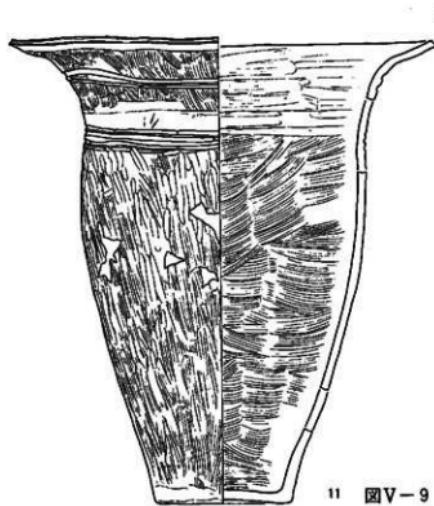
8



10

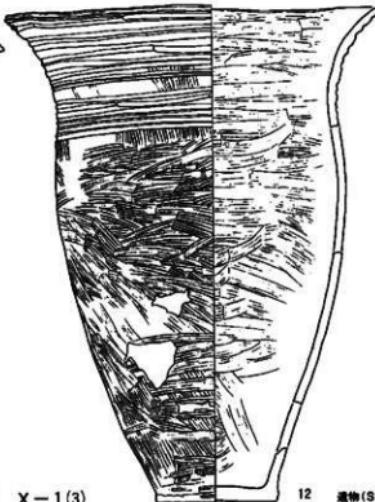


9



11 図V-9 X-1(3)

- 65 -



12 遺物(S=1/3)

3 周溝のある基

X-2 (図V-10・11、表V-1、図版V-6・12~14)

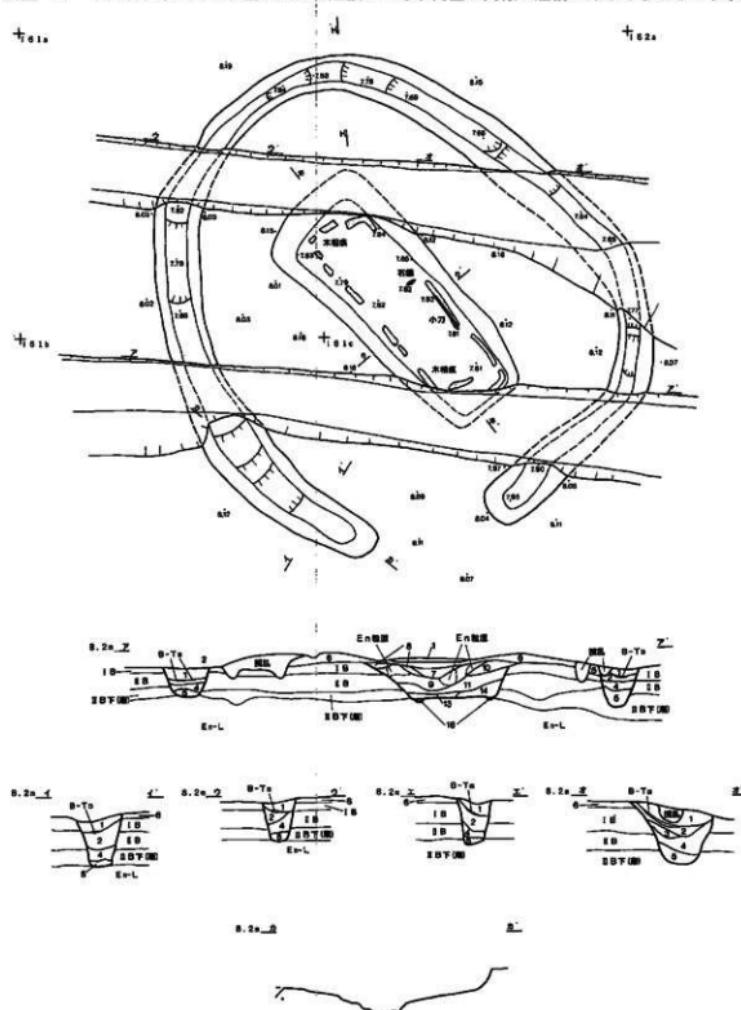
位置 I 61, I 62

墓壙長軸 N-20°-W

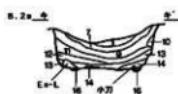
規模 4.10 / (3.50) × 3.71 / (2.77) × 0.50m (区画域)

(2.30) / (2.03) × 0.93 / 0.65 × 0.37m (墓壙)

調査 X-1の調査中、これが基であれば近接してもう何基か同様の遺構がありそうだという予測

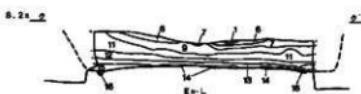


V 0 黒層・I 黒層の遺構とその遺物

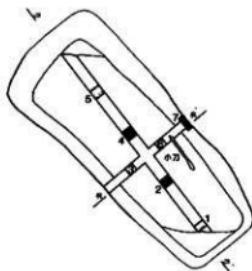


X-2 土壌鉆取

- 1 黒 色 土 (I B > Tr-i)
- 2 黒 色 土 (I B)
- 3 黒 色 土 (I B > Er-Lブロック)
- 4 黒 色 土 (I B, Tr-iを層間に含む)
- 5 黒 色 土 (層厚さ>10)
- 6 黒 色 土 (I B > I B > 層厚さ)
- 7 黒 黄 混合色土 (I B + Er-L)
- 8 黒 色 土 (I B > Tr-i)

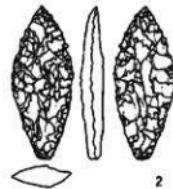
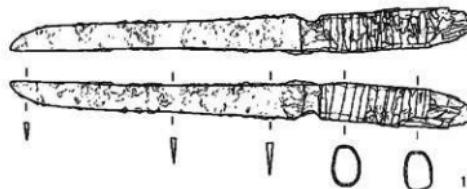


- 9 黒 色 土 (I B > Tr-i > 3段木腐植物+Er-L, Er-L粒を多量に含むブロックあり)
- 10 黒 色 土 (I B > Er + Tr-i > 木腐植物+Er-L)
- 11 黒 色 土 (I B > Tr-i > Er-L)
- 12 黒 色 土 (I B > V Er-L粒少なく、高級がさらに多い)
- 13 黒 色 土 (Er-L > 层厚さ>30)
- 14 黒 黄 混合色土 (層厚さ>10)
- 15 黒 黄 混合色土 (I B > V 硫化物層)
- 16 黒 黄 混合色土 (約1.5mのEr-Pを多量に含む、木腐質)



1-5: 遺物分析
2-4-7: 雜物質分析

X-2 基壇底土壤サンプル位置図



剥片石器 (S=1/2)

図V-11 X-2(2)

のもと、南23号道路下のⅠ黒層を精査した結果、X-3と並んでX-2をとらえた。道路部分は現道・旧道の側溝や上下水道管により数条の擾乱を受け、細長く分断されていた。しかし上層にはTa-a層が残存しており、広く大きな擾乱はない。この擾乱溝の壁面観察とⅠ黒層の上面からの凹み確認で、周溝とその中央部にある墓壙を発見したのである。

調査はまず、擾乱で寸断された周溝の正確な位置をおさえるため、擾乱溝の壁面を精査し、寸断ごとに1~3箇所のベルトを残して周溝を掘りあげた。これら断面や調査中の溝の全域でB-Tmの堆積が検出され、X-1同様B-Tm降灰以前の擦文文化期の遺構と確認された。

墓壙も擾乱溝の壁面に南北の斜断面が観察できたため、これをもとに長軸・短軸に直交する10cm幅のベルトを設定し、4ブロックにわけて土壌を採取しながら徐々に掘り下げた。墓壙断面や副葬品、木棺跡を精査し、ベルトから脂肪酸分析用土壌サンプルを採取した後、完掘した。

周溝の覆土 溝は、流れ込みの土によって埋まっている。Ta-a降下前は、凹みの痕跡程度であったことがわかる。B-Tmは溝が埋まりかかった頃に降灰している。溝の掘り揚げ土は覆土6で、セクション図のように周溝内側の区画域に薄く置かれており、墓壙の上にもかかっている。

墓壙の覆土 覆土各層の土砂混在具合から、埋め戻されたものと思われる。溝の掘り揚げ土が墓壙の上にもかかっており、しかもやや落ち込んでいることは、墓壙を埋めた後で周溝を掘ったこと、遺体の腐食後、少しへこんだことがわかる。

周溝の形態 幅は26~50cmで、北側が狭く、東側や南西部が広めの傾向がある。深さは24~50cmで南東部と北西部がやや浅い傾向にある。底面には鋤による掘削痕が認められ、エレベーション図で示したことなく凹凸が著しい部分が多い。断面でみると底面は平坦に作られ、立上りは直線的で比較的垂直気味であるが、区画域の肩が崩落した部分もみられる。周溝はX-1と同じく南側には巡っておらず、墓道としての意味を持つものと考えられる。

墓壙の形態 上端の平面形はほぼ長方形で、壁面は直線的に外傾斜して立ち上がる。壙底面はEn-Lの最上面に平坦につくられ、平面はやはり長方形である。擾乱により、北と南の2コーナーを失っている。壙底縁部には断続する帯状の黒色土が確認でき、これは木棺の跡と考えていた。調査後、青森県八戸市殿見遺跡の同型の遺構との類似性を指摘された。木棺跡のありかたから見て、底に板ではなく墓壙内縁に立てかけた板に蓋板を乗せた棺で、遺体安置後に墓壙内で組み合わされたものと推定された。頭位は後述する小刀の向きから、南と思われる。なお、棺の板や遺体およびその外包物の残存などは確認されていない。壙底から脂肪酸分析用土壌サンプルを採取し、現在分析依頼中である。

遺物出土状況 墓壙底の東長辺中央部、木棺跡の内側に沿って小刀が1本副葬されていた。切先を北に、刃を上に向いた状態であった。その切先の20cm北には、石槍が横位置で出土した。これは墓壙掘り込み時に壙したP-35かⅡ黒層から出土したものを見たか、埋め戻し時にP-35から脱落したものと考えられる。

遺物 1は平櫛平造の小刀で、反りではなく、刃部長17.6cm、緩く湾曲する刃区を持ち、刃には使い減りがみられる。茎には柄の握えが良好な状態で残っており、木質とそれを巻いた桜?の皮が観察できる。2は、黒曜石製の石槍（またはナイフ）で、横長剣片を素材としている。腹面側の二次調整は丁寧に施され、主要剣離面を残していない。

時期 X-1との関連や、溝が埋まりかかった頃にB-Tmが降灰していることから、8世紀後葉から9世紀初めころの、擦文文化期前期の墓ととらえられる。

(三浦)

X-3 (図V-13、表V-7、図版V-14)

位置 I 60、J 60 ad 長軸方向 N-30°-E

規模 5.4×4.28×0.18~0.38m 周溝の幅0.4~0.6m

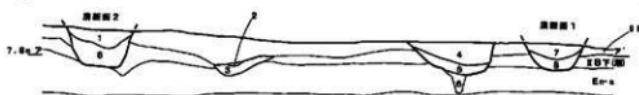
調査 包含層調査中に、馬蹄形の周溝を持つ墓X-1を検出した。さらに擦文時代の土坑墓が調査区内台地上に集中していた。そこで、台地上を擦文時代の墓域として推察した。そのためX-1のならびに同様な遺構、馬蹄形の周溝を持つ墓がまだあることを想定せねばならなかった。上面溝掃後、道路の側溝による擾乱をサブトレンチとして利用するなどして確認調査した。するとX-1の東側から、ふたつの馬蹄形の周溝を発見した。包含層II黒中にやや色調の異なる黑色土が馬蹄形状に入り込んでいた。三基のうち西端に位置するのがX-3である。溝を掘りあげ、墓穴の確認を行った。

形態 周溝は他の2基とは異なり、ほぼ横円形に近い。長軸は南北方向を向く。溝の断面形態を観察すると、ほぼ箱堀形に掘込んでいる事がうかがえる。短軸方向と並行に二本の溝状の擾乱がはしる。いずれも道路の側溝痕である。周溝部分は南西端に1mの切れ目がある。主体部もしくは土壤については検出できなかった。可能性として図中で周溝の中央に示した凹み（トレンチA 土層4・5・6）がある。しかし、床面と壁面の区別がはっきりしない為、風倒木による擾乱である可能性が高い。墓穴が、擾乱で消失した可能性もあるが、もともと土壤を持つ墓がなかった可能性がある。八戸市殿見遺跡1号墳など青森県における円形周溝墓にそのような類例はある。

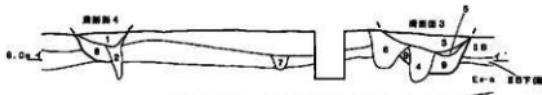
覆土 周溝の土層は自然堆積による埋没状況を示している。

遺物出土状況 溝中から、流入による繩文土器が出土した。他に、遺物の出土はなかった。

時期 立地から他の2基の円形周溝墓と同時期であることが想定できる。8世紀後葉～9世紀初頭と思われる。
(大泰司)



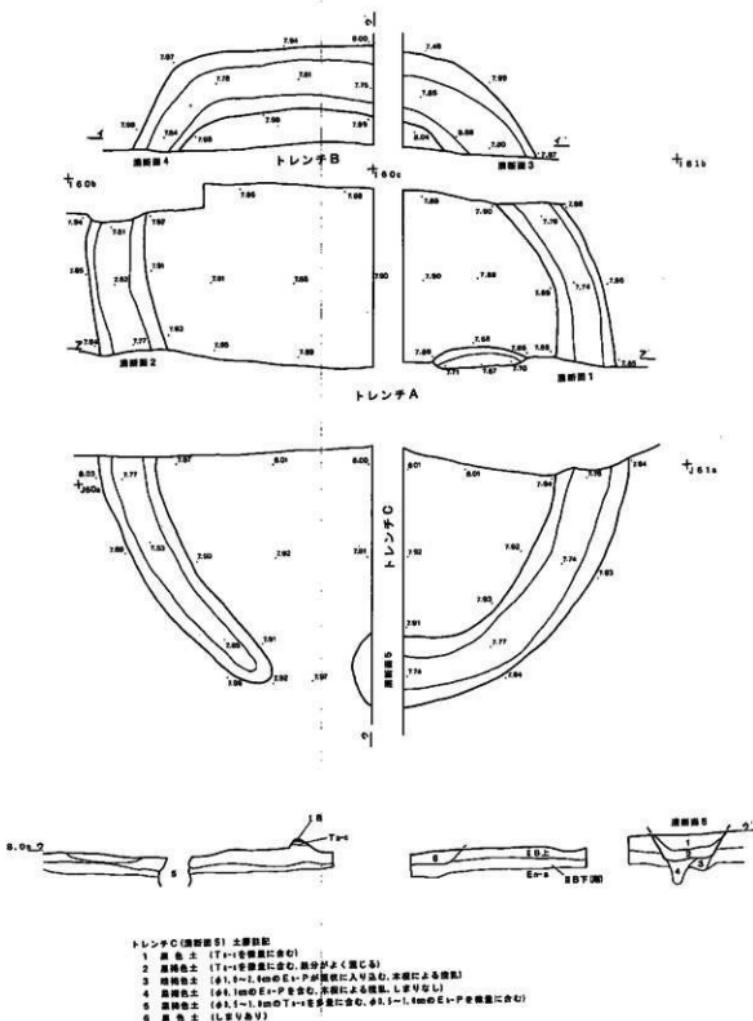
トレンチA(断面図1・2) 土層記号
1 黒色土 (約1.0mのT+L+Pを黒層に含む)
2 黄褐色土 (E+L+Pで黒層がうすく重複に入り込む)
3 黃褐色土 (E+LからE+Lへの遷移部)
4 黒色土
5 黄褐色土 (E+L+L)
6 黑褐色土 (E+L+Lによる擾乱)
7 黑褐色土 (約1.0mのT+L+Pを黒層に含む)
8 黄褐色土 (約1.0~2.0mのE+L+P層に亘る)



トレンチB(断面図3・4) 土層記号
1 黒色土 (約1.0mのE+L+Pを含む)
2 黄褐色土 (E+L+Lによる擾乱)
3 黑褐色土 (約1.0~1.5mのE+L+Pを黒層に含む)
4 黄褐色土 (E+L>E+L+L、約1.0mのE+L+Pを黒層に含む)
5 黑褐色土 (E+L>E+L+L)
6 黄褐色土 (E+L>E+L+L、木根による擾乱)
7 黄褐色土 (E+L>E+L+L、約1.0mのE+L+Pを黒層に入り込む、木根による擾乱)
8 黄褐色土 (1にE+Lを多量に含む、しまりなし)
9 黄褐色土 (3にE+Lを多量に含む、しまりなし)

図V-12 X-3(1)

3 周囲のある墓



図V-13 X-3(2)

4 土壙

土坑墓は台地尾根部分の北側に集中している。土坑墓は平面形で4群に分かれ、長軸方向で2群位に分かれる。時期は掠文化期前期で、8世紀中葉～9世紀初めの層年代が与えられる。またこれら土坑墓は周溝のある墓と併置されているものもある。P-9、12、17、28、29、30、31は墳底の土壤の脂肪酸分析を依頼中である。

(鈴木)

(1) 掠文化期の土坑墓

P-2 (図V-14、表V-6・8、図版V-15)

位置 A 60 c・61 b、B 60 d・61 a 長軸方向 N-67°-W

規模 (1.32)/1.17×(0.86)/0.96×(0.51)m

調査 上面は耕作によって削平されていたので、En-Lで平面形を確認した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 1層は上面からの擾乱。層界の乱れている2～4層は流れ込みの覆土。En-Lをブロックで含む5層は埋土。5層以下は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる。

形態 平面形は長楕円形、墳底は平坦で、壁は直線的でやや外傾する。深さは上面が削平されているわりに深い。

遺物出土状況 遺物はすべて2層からの出土である。非クロ内黒坏の口縁部・体部細片が9点、繩文土器片が1点、礫が3点。また、同じグリットの耕作土から段状沈線の甌（図V-4-42）下半部が出土した。P-2の上半部は耕作により削平されているのでP-2の墳口に置かれた可能性が高い。

時期 2層から非クロ内黒坏が出土していることからⅤb類の墳と考えられ、平面形が他の土坑墓（P-17、P-29）と類似するので、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-3 (図V-14、表V-8、図版V-15)

位置 C 63 ab 長軸方向 N-12°-W

規模 (1.25)/1.12×(0.76)/0.60×(0.11)m

調査 上部は耕作によって削平されていたので、En-Lで平面形を確認した。短軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 1層はEn-Lが混じったI黒で埋土である。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる。

形態 平面形は隅丸長方形、墳底は平坦で、壁は直線的でやや外傾する。

遺物出土状況 遺物はすべて1層からの出土である。礫は墳底付近から、土器は上部から出土した。繩文晩期土器片が3点、礫が3点。

時期 1層上部から繩文晩期土器片が出土してはいるものの、平面形が他の土坑墓（平面形：P-9、P-12、P-27）と類似することから、Ⅴb類の墳と考えてよく、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-8 (図V-14・16・17、表V-3・6・8、図版V-16・20)

位置 D 60 d 長軸方向 N-25°-W

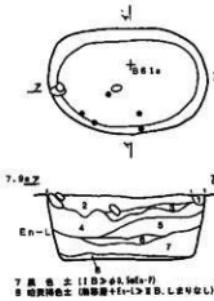
規模 1.42/1.22×0.53/0.43×0.26m

調査 I黒層を4cm下げるところで暗褐色の土の抜がりを検出した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 減移層をブロックで含む1層は埋土。1層以下は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから

4 土壌

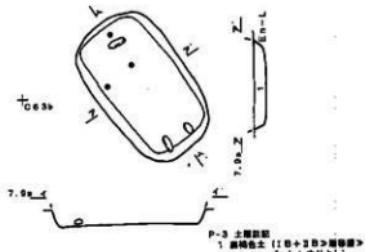
P-2



P-9



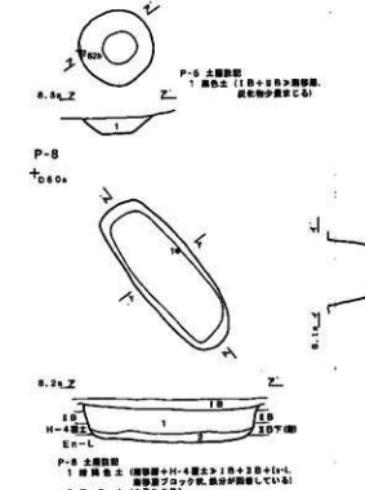
P-3



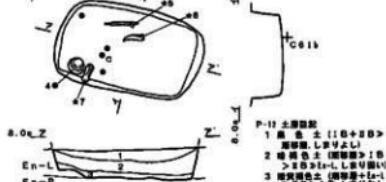
P-11



P-5



P-12



P-14



図V-14 土壌(1)

土坑墓と考えられる。

形態 平面形は長橢円形、壇底は平坦で En-L 上部に及んでいる。壁は直線的で外傾する。

遺物出土状況 遺物はほとんど 1 層からの出土である。壇底面から非クロロ坏の口縁～体部片（図 V-17-1）が 1 点、そのほか、1 層から縄文晚期土器片が 4 点、縄文後期土器片が 2 点、縄文中期土器片が 1 点、不明土器片 2 点、フレイク 4 点、石斧片 1 点、礫が 1 点出土している。

遺物 1 は坏の口縁～体部片で 1/12 しか残存していなかったが復元・実測した。体部は内彎し、体部中央に段状沈線を持つ。

時期 壇底面から非クロロ坏の口縁～体部片が出土していることからⅥ b 類の頃と考えられる。平面形・長軸方向が他の土坑墓（平面形：P-28）（長軸方向：X-1・G1）と類似することから、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-9 (図 V-14・16・17、表 V-1・8、図版 V-16・20)

位置 D 59 a・60 d **長軸方向** N -53° - W

規模 1.45/1.25×0.79/0.72×0.44 m

調査 I 黒層を数cm 下げたところで暗褐色の土の抜がりを検出した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 層界の乱れている 1～4 層は流れ込みの覆土。En-L をブロックで含む 5 层は埋土。5 层以下は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる。

形態 平面形は隅丸長方形、壇底は平坦で En-L 上部に及んでいる。壁は直線的で外傾する。

遺物出土状況 5 层下部の壇底面近くから刀子と手斧が出土している。土器は一次整理時に所在が不明になったので詳細は不明である。3 层からは擦文土器 4 点、時期不明 1 点。5 层上部から擦文土器 5 点、縄文中期土器片が 1 点。

遺物 2 は小型の曲刃鎌。両端を欠失しているが大きな湾曲が見てとれる。3 は小型の手斧。柄の袋部分には隙間があり、その正面には木質の付着がみられる。刃部を鏽で欠損している。

時期 5 层上部から擦文土器が出土していることから擦文文化期と考えられる。平面形・長軸方向が他の土坑墓（平面形：P-3、P-12、P-27）（長軸方向：P-30、P-31）と類似することから、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-12 (図 V-14・16・17、表 V-1・3・6・8、図版 V-17・20)

位置 C 60 cd **長軸方向** N -63° - W

規模 (1.20) / 1.08 × (0.69) / 0.63 × (0.25) m

調査 上面は耕作によって削平されていたので、En-L で平面形を確認した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 1 层は流れ込みの覆土。En-L を含む 2 层は埋土。2・3 层は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる。

形態 平面形は隅丸長方形、壇底は掘削痕を残してやや平坦で En-P 上部に及んでいる。壁は直線的で外傾する。

遺物出土状況 壇底から刀子と鎌、壁際の壇底から完形内黒坏（図 V-17-4）と斧が出土している。ほかには、1 层から内黒坏口縁片 1 点、統縄文期土器片が 2 点、縄文後期土器片が 1 点、フレイク 1 点出土している。

遺物 4 は内黒坏で体部は直線的に外上方にたちあがり、内面に凹線状の段、外面に体部中ばに段を持つ。外底面にはケズリがみられる。5 は刀子。柄と鞘の木質の残存状態からみて、区部にある柄

4 土壇

縁金具までが鞘に收まる呑口式である。切先は欠損する。6は緩い曲刃鎌。柄を装着する折り返しがある。先は欠損、中央部に綾織布？が付着している。7は袋柄斧。刃縁は曲率を持ち、袋部はあわせが大きく開いている。

時期 壕底から非クロ内黒坏が出土していることからⅦ b類の墳と考えられる。平面形・長軸方向が他の土坑墓（平面形：P-3、P-9、P-27）（長軸方向：P-2）と類似することから、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-14（図V-14、表V-8、図版V-17）

位置 D 59 c 長軸方向 N-33°-W

規模 1.01/0.74×0.35/0.23×0.42m

調査 I 黒層を4cm下げたところでEn-Pを含んだ黒色の土の抜がりを検出した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 En-Pを含んだ1層は流れ込みの覆土。2層以下は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる。

形態 平面形は長橈円形、壙底は平坦でEn-P上面に及んでいる。壁は外傾する。

遺物出土状況 壕底面から縄文中期土器片が1点、そのほか、1層から縄文後期土器片が1点、不明土器片1点、フレイク2点、礫が2点出土している。

時期 壕底面から縄文中期土器片が1点出土してはいるものの、平面形・長軸方向が他の土坑墓（平面形：P-30、P-31）（長軸方向：P-8、P-17）と類似することから、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-17（図V-15、表V-8、図版V-18）

位置 E 59 c 長軸方向 N-32°-W

規模 0.98/0.76×0.63/0.49×0.55m

調査 I 黒層を4cm下げたところで12cm位のくぼみを検出した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 1～2層は流れ込みの覆土。1層と2層のあいだにB-Tmが堆積している。3層以下は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる。

形態 平面形は橈円形、壙底は平坦でEn-L上部に及んでいる。壁は直線的で外傾する。

遺物出土状況 2層からフレイク3点、礫が1点出土している。

時期 平面形・長軸方向が他の土坑墓（平面形：P-2、P-29）（長軸方向：P-8、P-14）と類似することから、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-27（図V-15・16・17、表V-1・3・6・8、図版V-18・21）

位置 B 60 acd 長軸方向 N-45°-W

規模 (1.48)/1.30×(0.91)/0.85×0.26m

調査 上面は耕作によって削平されていたので、En-Lで平面形を確認した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

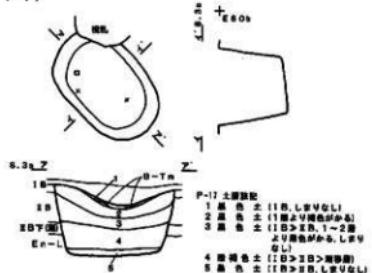
覆土 1層以下は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる。

形態 平面形は隅丸長方形、壙底は平坦でEn-L中部に及んでいる。壁は直線的で外傾する。

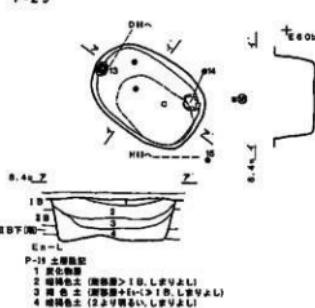
遺物出土状況 壕底から鉄素材・刀子が2点、2層の壙底面近くから内黒坏1点、内黒坏は約1/2が打ち欠かれて壙底の立上り部分にあわせて、枕のようにおかれていた。2層から統縄文土器片1点、1層からフレイク1点が出土している。

V 0 黒層・I 黒層の構成とその遺物

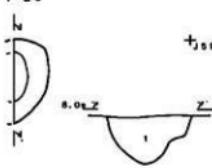
P-17



P-29

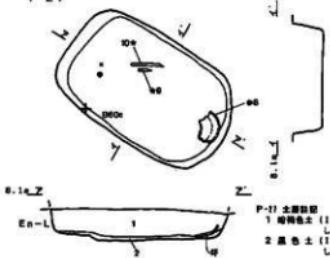


P-26



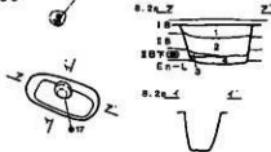
P-21 土壌断面
1 黒色土 (1B>2B)

P-27



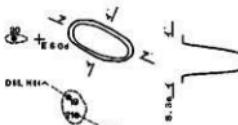
P-17 土壌断面
1 黒褐色土 (1B>2B>3B, しまりよい)
2 黑色土 (1B>2B, しまりよい)

P-30

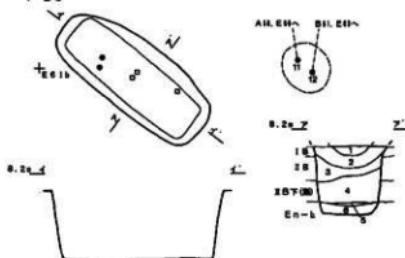


P-11 土壌断面
1 黒褐色土 (黒褐色土+1B, しまりよい)
2 黑褐色土 (黒褐色土+1~2B, しまりよい)
3 黑色土 (1B>2B>3B, しまりよい, 1段化層を含む)
4 黑褐色土 (黒褐色土+1B, 1段化層を含む)
5 黑褐色土 (黒褐色土+1~2B, しまりよい)

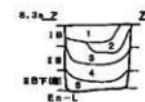
P-31



P-28



P-18 土壌断面
1 黒褐色土 (黒褐色土+1~2B, しまりよい)
2 黑褐色土 (黒褐色土+1~2B+3B, しまりよい)
3 黑褐色土 (黒褐色土+1~2B+3B+4B)
4 黑褐色土 (黒褐色土+1~2B>3B, しまりよい)
5 黑褐色土 (1B>2B, しまりよい)



P-22 土壌断面
1 黒褐色土 (黒褐色土+1~2B)
2 黑褐色土 (黒褐色土+1~2B+3B)
3 黑褐色土 (1B>2B>3B, しまりよい, 1段化層を含む)
4 黑褐色土 (黒褐色土+1B, 1段化層を含む)
5 黑褐色土 (黒褐色土+1~2B, しまりよい)

図V-15 土壌(2)

遺物 8は体部下半が外彎し、体部上半が内彎気味に立ち上がる大型の内黒坏、内外面は体部と底部の境に段を持つ。9は細帯状の鉄素材。10は細身の刀子。緩い傾斜の刃区がある。柄は刃部とほぼ同じ長さの柄の木質が残存しており、特異な形態を呈する。切先は欠損する。

時期 2層の壙底面近くから非クロロ内黒坏が出土していることからⅤb類の頃と考えられる。平面形・長軸方向が他の土坑墓（平面形：P-9、P-12）（長軸方向：P-28、P-29）と類似することから、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-28（図V-15・16・18、表V-3・6・9、図版V-19・21）

位置 E 61 ab 長軸方向 N-41°-W

規模 (1.41)/1.22×(0.58)/0.40×(0.57) m

調査 I 黒層上部で暗褐色の楕円形の抜がりを検出した。またその東側約0.6mには小型窓片の集中があった。短軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 1～2層は流れ込みの覆土。3層以下は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる。

形態 平面形は長楕円形、壙底は平坦でEn-L上面に及んでいる。壁はやや外彎する。

遺物出土状況 5層から縄文後期土器片1点、礫2点。3層から縄文後期土器片1点が出土している。壙口付近からはミニチュア窓と小型窓が出土している。

遺物 11は頸部に段状沈線があるミニチュア窓で頸部と胴部の境に段状沈線による段を持つ。耕作土出土の土器片と接合することから、石膏復元部分は耕作によって失われたと考えられる。底部は砂圧痕が付き、穿孔されている。12は頸部に凹線がある小型窓で、耕作土出土の土器片と接合することから、石膏復元部分は耕作によって失われたと考えられる。

時期 壙口付近から小型窓が出土していることからⅤb類の頃と考えられる。平面形・長軸方向が他の土坑墓（平面形：P-8）（長軸方向：P-27、P-29）と類似することから、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-29（図V-15・16・18、表V-3・6・9、図版V-19・22）

位置 E 60 a 長軸方向 N-41°-W

規模 0.98/0.89×0.66/0.58×(0.34) m

調査 I 黒層上部で炭化物の楕円形の抜がりを検出した。またその南側約0.2mには須恵器双耳壙が置かれていた。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 1層は炭化物層。2層は流れ込みの覆土。3層以下は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる。

形態 平面形は楕円形、壙底はやや凸があり、En-L上部に及んでいる。壁は直線的で外傾する。

遺物出土状況 壁際4層中位から内黒坏と小型窓、壙口付近から須恵器双耳壙と蔽石が出土している。その他には4層から上述の小型窓を除く窓片が3点、4層から縄文晚期土器片2点、不明土器片1点、礫2点出土している。2層からⅤb群細片が16点出土している。15は外内面に剥落があることから、風化・凍結するような環境に正位置で置かれていたと考えられる。13・14には内外面に剥落がみられない。

遺物 13は内黒坏で体部は内彎しながら立ち上がる。外面体部上半に弱い凹線。内面体部上半にミガキ残された弱い凹線状の溝が巡る。14は小型窓で内外面・口縁部破断面に炭化物が付着する。15は須恵器双耳壙で内外面に剥落がある。16は蔽石で安山岩の円錐、長軸側の一端を使う。土壙の脇から30cm離れたところで出土した。

時期 壁際4層中位から非ロクロ内黒坏と小型甕、壙口付近から須恵器双耳坏が出土していることからⅤb類の頃と考えられる。平面形・長軸方向が他の土坑墓（平面形：P-2、P-17）（長軸方向：P-27、P-28）と類似することから、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-30（図V-15・16・18、表V-3・4・6・9、図版V-19・23）

位置 E 60 ad 長軸方向 N-53°-W

規模 0.61/0.48×0.29/0.19×(0.32) m

調査 I 黒層上部で En-L を含んだ暗褐色土の横円形の抜がりを検出した。またその北側約0.4mには中型甕の破片が集中していた。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 1層は流れ込みの覆土。2層以下は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる可能性がある。

形態 平面形は横円形で土坑墓にしては小さい。壙底は平坦で En-L 上面に及んでいる。壁は直線的で外傾する。

遺物出土状況 壁際壙底から完形内黒坏が1点、壙口付近から中型甕が出土している。

遺物 17は非ロクロ非内黒坏で体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部下半の底部近くに沈線。18は中型甕で頸部と胸部の境に段状沈線による段を持つ。耕作土出土の土器片と接合することから、石膏復元部分は耕作によって失われたと考えられる。

時期 壁際壙底から非ロクロ非内黒坏が1点、壙口付近から中型甕が出土していることからⅤb類の頃と考えられる。平面形・長軸方向が他の土坑墓（平面形：P-14、P-31）（長軸方向：P-9、P-31）と類似することから、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-31（図V-15・16・18、表V-4・6・9、図版V-19・23）

位置 E 60 d 長軸方向 N-54°-W

規模 0.56/0.49×0.27/0.20×0.54 m

調査 I 黒層上部で En-L を含んだ暗褐色土の横円形の抜がりを検出した。またその南側約0.3mには小型甕・ミニチュア甕2個体分の破片が集中し、西側に約0.3mに須恵器坏が出土している。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 1～3層は流れ込みの覆土。4層以下は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる。

形態 平面形は横円形で土坑墓にしては小さい。壙底は平坦で En-L 上面に及んでいる。壁は直線的で上方に立ち上がる。

遺物出土状況 土壙内から遺物は出土していない。壙口付近から須恵器坏・ミニチュア甕・中型甕が出土している。20は細片になって出土し、外面の剥落が特に顕著であることから、風化・凍結するような環境に逆位置で置かれていたと考えられる。

遺物 20は須恵器坏で外面の剥落が著しい。19はミニチュア甕で頸部と胸部の境に段を持つ。底部穿孔。21は小型甕で底部穿孔。

時期 墓口付近から小型甕・須恵器坏が出土していることからⅤb類の頃と考えられる。平面形・長軸方向が他の土坑墓（平面形：P-14、P-30）（長軸方向：P-9、P-30）と類似することから、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。（鈴木）

(2) 縄文時代相当の土壤

P-5 (図V-14、表V-8、図版V-15)

位置 F 62 ab 規模 (0.62) / 0.28 × (0.60) / 0.24 × (0.14) m

調査 I 黒層中部で確認した。

覆土 1層は Ta-c が混じった I B である。

形態 平面形は円形、壇底は平坦で、壁は外彎する。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

時期 構築面の層準をとらえていないこと、遺構内から遺物が出土していないことから正確なことは不明である。当該グリットから後北 B 式土器片が 6 点出土しているのでこの時期の可能性がある。

P-11 (図V-14、図版V-16)

位置 H 61 ad 長軸方向 N -60° - W

規模 (0.85) / 0.67 × (0.41) / 0.33 × (0.18) m

調査 En-L 層中で確認した。短軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 層界の乱れている 1 ~ 5 層は流れ込みの覆土。

形態 平面形は梢円形、壇底は皿状で En-L 中部に及んでいる。壁は外彎する。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

時期 構築面の層準をとらえていないこと、遺構内から遺物が出土していないこと、平面形が他の土坑墓と異なること。正確なことは不明であるが当該グリットからは後北 B 式土器片が 38 点出土していることからこの時期の可能性がある。

P-26 (図V-15、図版V-18)

位置 J 59 a 規模 0.69 / 0.34 × - / - × 0.38 m

調査 道路側溝の搅乱に断面が見えていた。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 1 層は Ta-c が混じった I 黒である。埋め戻しの堆積状況を示していない。

形態 平面形は梢円形、壇底は皿状、壁は外彎する。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

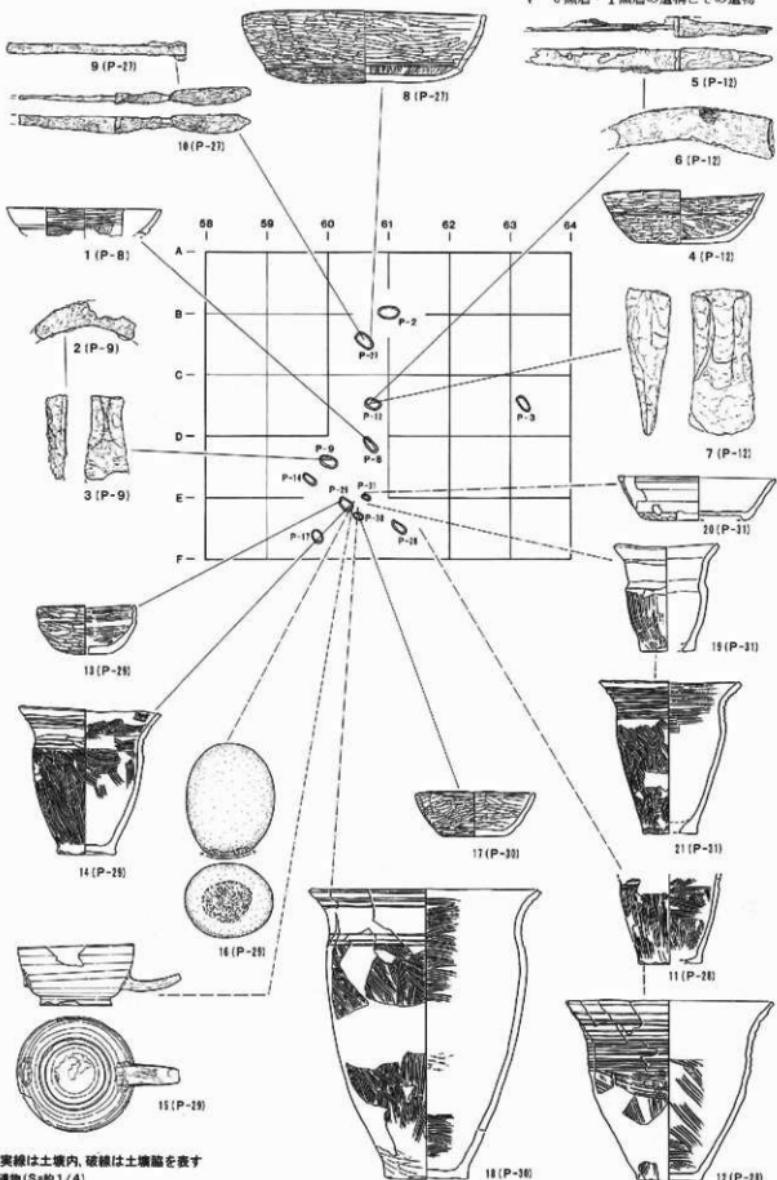
時期 遺構内から遺物が出土していないこと、平面形が他の土坑墓と異なることより正確なことは不明であるが、当該グリットから後北 C₁ 式土器片が 1 点出土しているのでこの時期の可能性がある。

(大泰司)

表V-1 遺構の金属製品等一覧

回数	回版編	名 称	量	規	大きさ	cm · g	備考
V17 1	V-14	小 刀	X-2	[B3相]	長さ 28.3 幅 3.2 厚 0.4 重量 55.5		墓壙底副葬品
V17 2	V-16	鎌	P-9	[B3相]	長さ (9.5) 幅 2.2 厚 0.2 重量 (6.0)		
V17 3	V-16	手 斧	P-9	[B3相]	長さ (8.0) 幅 3.0 厚 0.3 重量 (59.0)		
V17 5	V-16	刀 子	P-12	[B3相]	長さ (22.6) 幅 1.95 厚 0.35 重量 (46.0)		# - 口内
V17 6	V-16	鎌	P-12	[B3相]	長さ (15.8) 幅 3.7 厚 0.35 重量 (32.8)		# - 有付金
V17 7	V-20	斧	P-12	[B3相]	長さ 13.5 幅 6.2 厚 0.5 重量 (377.6)		
V17 9	V-21	麻 材	P-27	[B3相]	長さ 17.0 幅 0.85 厚 0.2 重量 9.6		
V17 10	V-21	刀 子	P-27	[B3相]	長さ (21.8) 幅 1.5 厚 0.4 重量 (26.0)		
-	V-27	鉢 片	F-10	I B 上	直径 2.7		鐵造鉢片か?
V27 1	V-18	キセル 扇首	送り場	O B 相當	長さ 11.6 幅 1.4 厚 0.9 重量 (5.4)		らお竹一部残存
V27 2	V-18	キセル 穂口	送り場	O B 相當	長さ (3.8) 幅 0.8 重量 (1.6)		
-	V-30	鉄 沢 (大)	鍛冶遺構	I B 上	直径 3cm以上 重量 167.0		
-	V-30	鉄 沢 (小)	鍛冶遺構	I B 上	直径 0.5~3cm 重量 117.5		
-	V-30	脱炭途中の鉄鉢等	鍛冶遺構	I B 上			
-	V-30	球状磁性物 (磁玉)	鍛冶遺構	I B 上	直径 713.8 (一部缺損のもの)		
-	V-10	球状粘土質磁性土	鍛冶遺構	I B 上			フイゴ羽口も出土

V 0 黒層・I 黒層の遺構とその遺物



図V-16 土壤とその遺物

4 土壤

P-8

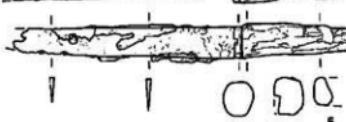
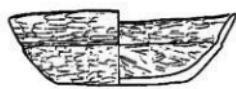


P-9

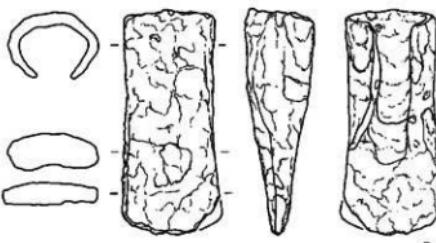
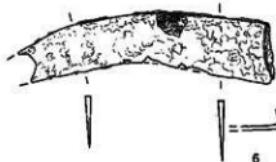


3

P-12

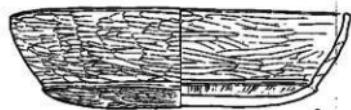


5



7

P-27



①

②

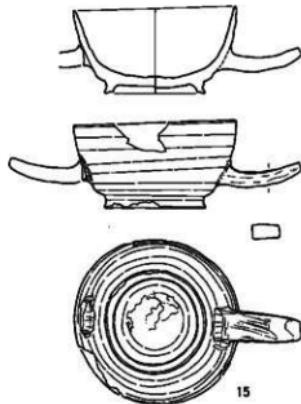
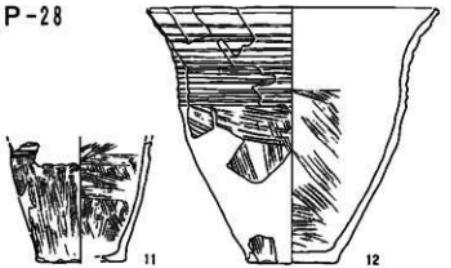
③

遺物 (S=1/3)

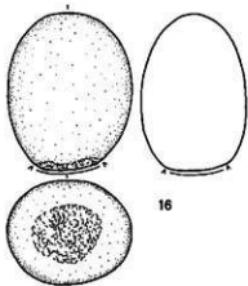
図V-17 土壌の遺物(1)

V 0 黒層・I 黒層の遺構とその遺物

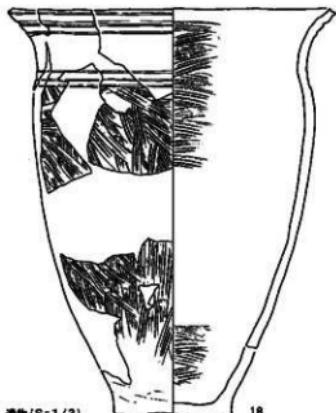
P-28



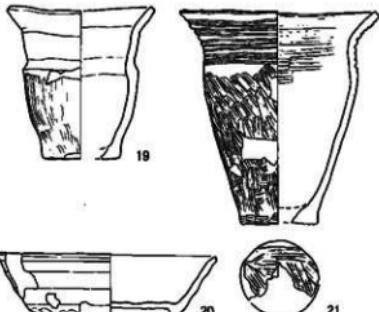
P-29



P-30



P-31



遺物 (S=1/3)

図V-18 土壌の遺物(2)

5 焼土

5 焼土

焼土は構築層準を主な分類根拠とし、同一小グリット内の土器の出土状況、伴出土器を加えて4種類に分類した。ただし一二例外がある。F-52は構築層準からみるとⅠ黒下部であるが、同一小グリット内の土器の出土状況を考慮してⅠ黒上部に分類した。F-1は構築層準からみるとⅠ黒下部であるが、伴出土器よりⅠ黒上部に分類した。

焼土は堆積状況から3種類の分類できる。第一に、土色に橙色が加わっていて締まりのある焼土は屋外炉と考えられる。第二に、土色に橙色が加わっていない締まりのないものは焼土遺構ではなく焼土が廃棄された遺構（廃棄遺構Ⅰと仮称）と考えられる。第三に、土色が暗褐色で、締まりのないものは焼土遺構ではなく、灰・いろいろなもの燃えさしが一緒に廃棄された遺構（廃棄遺構Ⅱと仮称）と考えられる。
(鈴木)

(1) Ⅰ黒層上面の焼土（図V-19、表V-9、図版V-24・27）

Ⅰ黒層上面の焼土は台地西側の標高8.4mあたりに集中している。遺構の時期はその層準からアイヌ文化期と考えられる。

屋外炉はF-7・8・10・21・24・63・82である。廃棄遺構ⅠはF-76である。廃棄遺構ⅡはF-26・79である。

フローテーションの結果F-7・8・10・21・63から種子は出土しているが堅果類は出土していない。F-10からは2.7gの鍛造鉄片が出土している。F-8・10・24・76からサケ科の遺存体が出土しており、白色になるまでよく焼けている。

これらはH-1と送り場1と灰集中1と道跡1の配置から見て近い時期の遺構群と捉えられる。

(2) Ⅰ黒層上部の焼土（図V-20・21、表V-9、図版V-24・26・27）

中世アイヌ文化期～擦文文化期の焼土 中世アイヌ文化期～擦文文化期の焼土（F-9・13・14・15・27・49・52・55・56・57・68・80・84・382・383）はおもに台地北西側に集中し、近くにはⅣd類期の豊穴住居H-2がある。その他には台地南東側にF-80・84がありX-1・2の近くである。

屋外炉はF-9・13・14・27・52・55・84・382・383である。廃棄遺構ⅠはF-15・49・68・80である。廃棄遺構ⅡはF-56・67である。

F-56から擦文土器窓の頸部が1点出土している。

フローテーションの結果種子はF-13・14・15・27・52・55・56から出土している。堅果類・動物遺存体は出土していない。F-68からイネ未炭化内外殻が出土している。

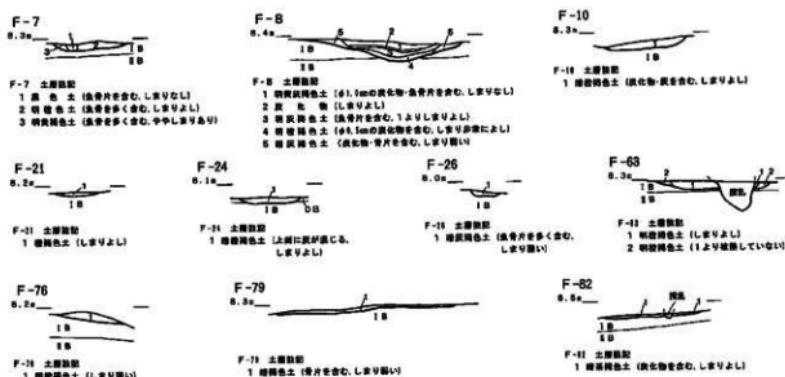
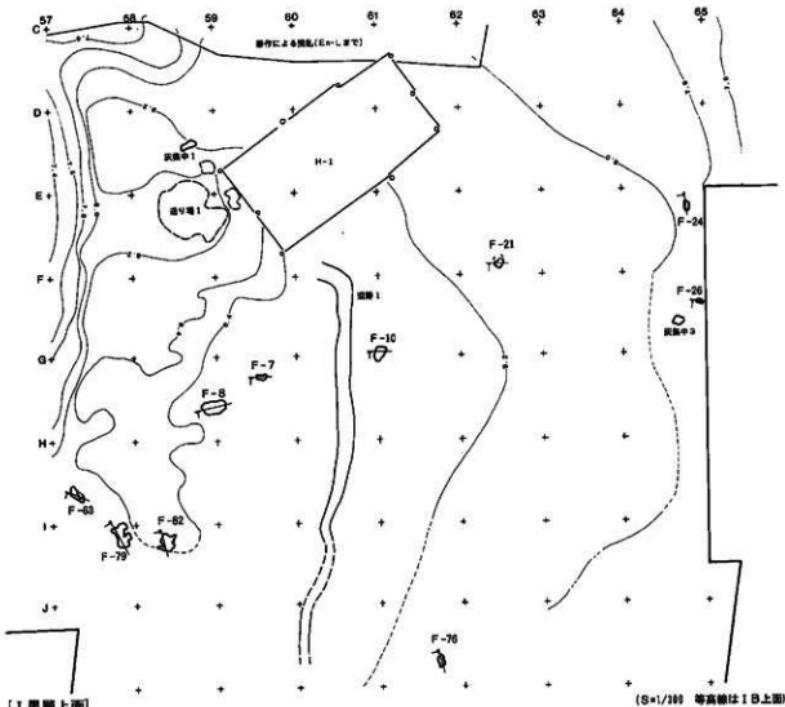
北大Ⅱ・Ⅲ式期～後北C₁式期の焼土 VI d類期（F-30・38）、北大Ⅰ式期（F-1・75・78）、後北C₁式期（F-35）、VI c類期（F-23）の焼土は台地の南東側に散在している。これらの時期のいずれの焼土の近辺にも住居などの定住を推測させる遺構がない。

F-1から北大Ⅰ式の深鉢2個体、搔器1点が出土している。F-30から被熱したVI d類の鉢？口縁部（図V-24-4）が1点出土している。F-38から石鏡1点が出土している。

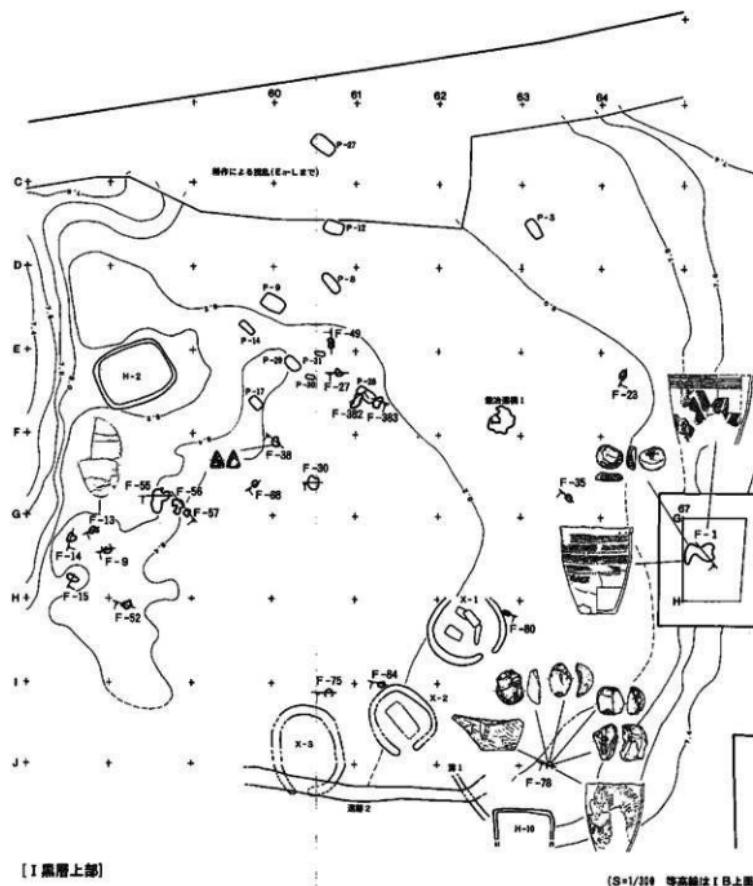
屋外炉はF-23・30・38・75・78、F-1である。廃棄遺構ⅡはF-35である。

F-75付近から北大Ⅰ式の深鉢（図V-4-41）が出土している。F-78中から北大Ⅰ式の片口1個体、深鉢1個体、搔器1点、石核1点（図V-24-14～19）が出土している。

フローテーションの結果、F-1・38・78から種子が出土している。堅果類・動物遺存体は出土していない。

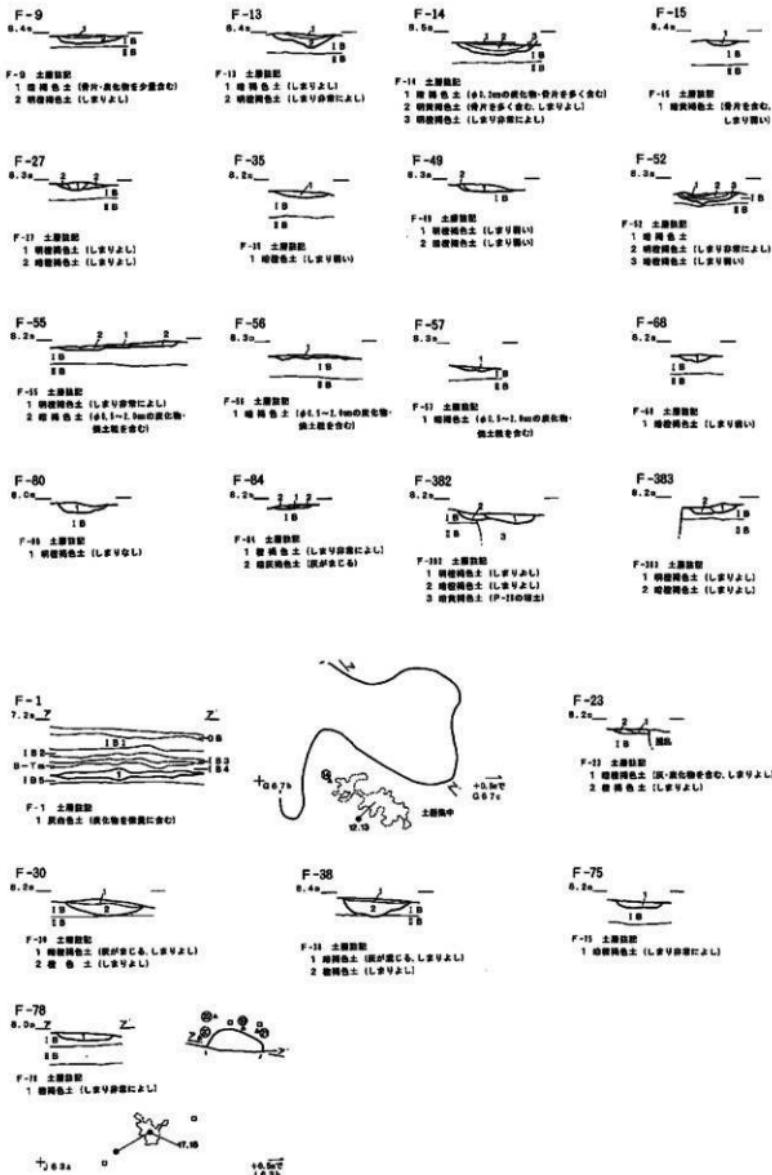


図V-19 烧土(1)



図V-20 燃土(2)

V-0 黒層・I 黑層の造構とその造物



図V-21 烧土(3)

(3) I 黒層中部の燃土 (図V-22、表V-9、図版V-25・26)

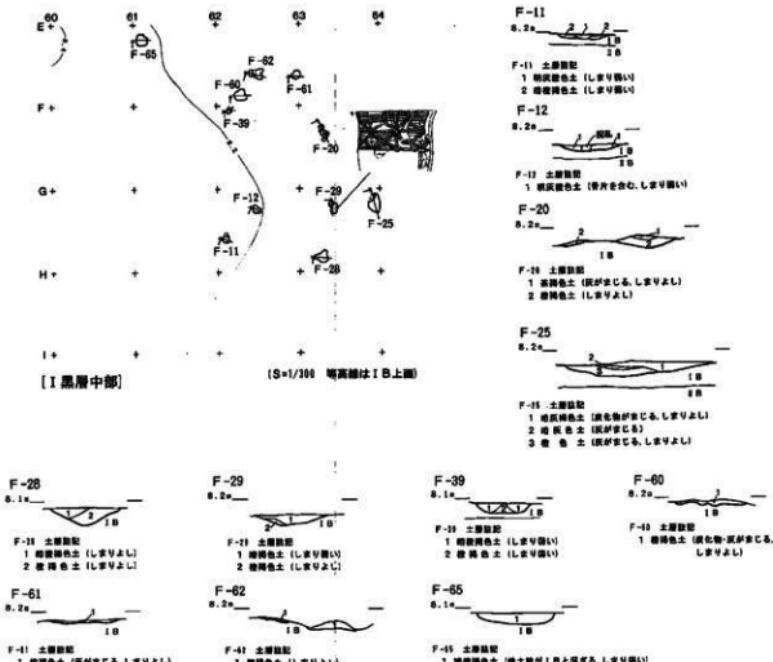
I 黒層中部の燃土は台地のほぼ中央部分に集中している。近辺に住居などの定住を推測させる遺構はない。遺構の時期は遺構は同一小グリット内の土器の出土状況と遺構の層準から判断すると、後北A式から後北B式の時期である。

屋外炉はF-20・25・28・29・60・61・62である。廃棄遺構IIはF-12・39・65である。

F-20わきからVI群深鉢底部片 (図V-24-2)、F-29中から後北B式深鉢 (図V-25-10)、F-39上から後北B式深鉢口縁部片 (図V-24-6)、F-60中から後北B式深鉢脛部片 (図V-24-7)、F-65中からVII群深鉢脣部片が出土している。なお、F-29中から後北A式深鉢口縁部 (図V-24-3) が出土しているが混入である。

その他に、後北A式深鉢 (図V-3-33) はF-25・28・29の傍わらから出土しておりF-25・29の傍わらの破片は被熱している。後北B式壺 (図V-3-36) はF-25・28の傍わらから出土しておりF-25の傍わら破片は被熱している。

フローテーションの結果、F-20・25・28・29・61・62・65から種子が出土している。堅果類は出土していない。F-12・20・25・29・61から動物遺存体が出土している。



図V-22 燃土(4)

(4) I 黒層下部の焼土 (図V-23、表V-9、図版V-25・26)

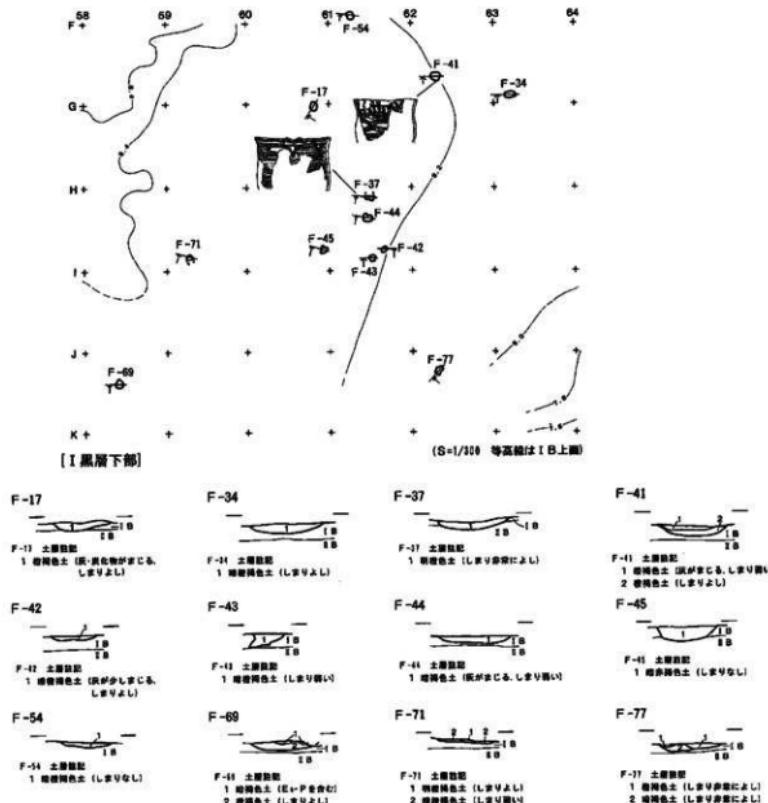
I 黒層下部の焼土は台地中央部分の西側寄りに集中している。近辺に住居などの遺構はない。遺構の時期は遺構は同一小グリット内の土器の出土状況と遺構の層準から判断すると、後北A式の古い時期である。

屋外炉はF-17・34・37・41・42・69・71・77である。廃棄遺構IはF-43・45・54である。廃棄遺構IIはF-44である。

F-37中から後北A式深鉢口縁部破片(図V-24-9)が出土し、接合破片はF-42・43の傍わらから出土し被熱している。F-41中から恵山系深鉢胴部破片(図V-25-11)が出土し、隣のグリットにはF-17・34・54がある。

F-17付近から後北A式深鉢(図V-3-32)が出土している。

フローテーションの結果、F-44・45・69・71から種子が出土している。堅果類・動物遺存体は出土していない。



図V-23 焼土(5)

(5) 焼土の遺物 (図V-24・25・26、表V-4・5・6、図版V-26・27)

土器：1は後北B式深鉢頸上半部片で被熱していない。肩部にはRL縦走、頸部にはRL横走→ナデ→隆起線文・刺突→刺突。2は後北B式深鉢頸下半部片、RL横走→ナデ→隆起線文・刺突→刺突。3は後北A式深鉢口縁部片、被熱している。口縁部に隆起線文→隆起線間に刺突。4はVI群で鉢とおもわれる口縁部片、被熱している。外面は未調整、内面はヨコハケのあとナデ。胎土は後北C₂・D式や北大I式のものよりも精良である。5は後北深鉢頸部下半片、被熱している、RL横走→ナデ→刺突。6は後北B式深鉢口縁部片、被熱している。隆起線文・刺突。7は後北B式深鉢頸部片、被熱している。隆起線文・刺突。8は後北B式深鉢口縁部片、被熱している。隆起線文・刺突。

9は4対の突起の下位に大きめのV字隆起線文をもち、そのあいだに4対のV字隆起線文をもつ。隆起線はナデにより断面が台形を呈する。後北A式の中頃のもの。

10は突起下に二重の円形隆起線文を縦位に2個配置する。

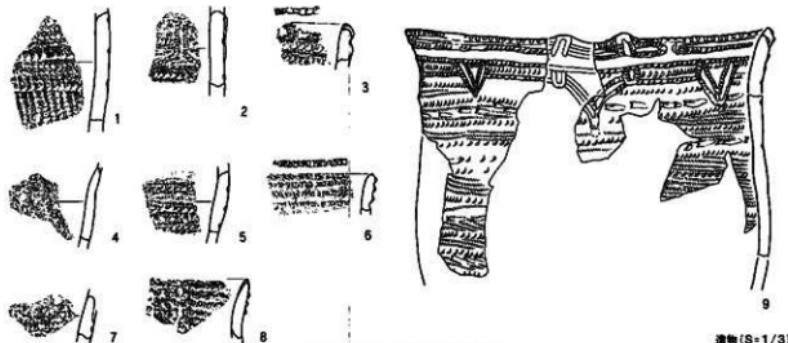
11は帶縄文を刺突で区画する。器面に対して鈍角に刺突しているため短い押引き文のようにも見える。沈線で区画していないので典型的な恵山式とはいえないが、アヨロ3a併行し、分布地域が典型的な恵山式と異なる可能性が高い。

12は口縁部断面形が方形で、口縁端面が外傾し、肩部下半は内湾気味にたちあがり肩部上半では直線的で、頸部が若干くびれている。口縁部に微隆起線文と円形刺突文を持つ北大I式の古い時期。

13は肩部上半が直線的で、肩部下半は内湾気味にたちあがり、頸部が若干くびれている。刺突文が充填文として施され帶縄文を縁取っていないこと、口縁部に微隆起線文がないことから北大I式ではない。しかし、口縁部断面形が方形であること、口縁端面が外傾することから後北C₂・D式として奇異である。後北C₂・D式末期の型式にあたる。

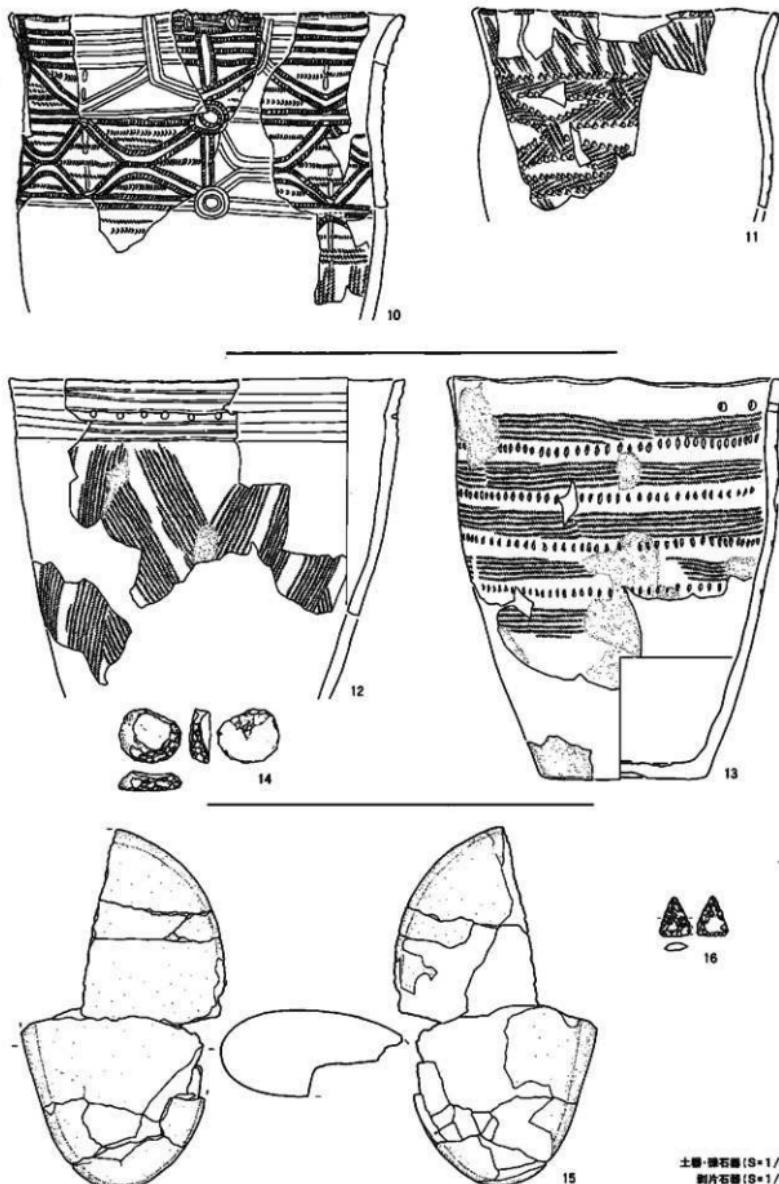
17は口縁部が上面観が五角形で波状となる。口縁部断面形が方形で口縁端面が外傾すること、体部は直線的に外上方に立ち上がること、口縁部に刻みのある微隆起線文がないことから北大I式であるが、口縁端面に刻みがあり後北C₂・D式のなごりをとどめている。底部は薄く高台状に発達していない。北大I式の古い時期の型式にあたる。

18は口縁部がわずかな波状で、波頂間の口縁部は内側に4か所入り込んで上面観は真円を呈さない。頸部は若干くびれており、口縁部断面形は丸い。北大I式の古い時期にあたる。



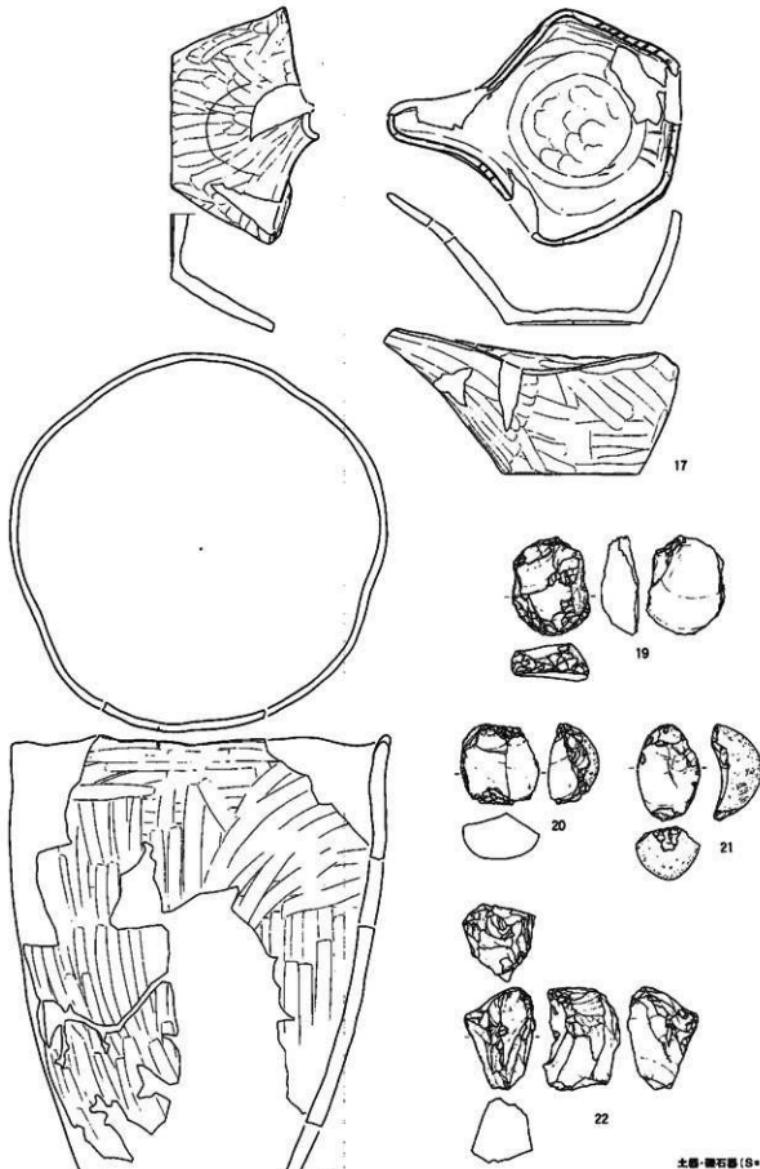
図V-24 焼土の土器(1)

遺物(S-1/3)



図V-25 焼土の土器(2)・石器(1)

土器・焼石器 ($S=1/3$)
剥片石器 ($S=1/2$)



図V-26 焼土の土器(3)・石器(2)

土器・焼石器 ($S=1/3$)
剥片石器 ($S=1/2$)

石器 14は背面側片側面に礫皮を残す。パルプの厚みを減じる調整が行われている。15は被熱した偏平構円礫で、短軸方向に分割されている。G 58 aに接合個体がある。16は被熱して光沢を失っている。19は小礫を両極打法で割った石核を素材とした搔器、片面に3か所礫皮を残す。球顆が発達している。20は小円礫が素材で打面は作出しない。並列剝離。楔形石器に転用する。21は小円礫が素材で打面は作出しない。作業面が彎曲して残核となった。作業面打点側を調整して彎曲を減じ、底面に作業面側から調整を入れて刃部を作出し搔器に転用した。22は打面転移を3回行なっている。上面には漬れが見られる。

(鈴木)

6 送り場1 (図V-27、表V-1、図版V-28)

位置 D 58 c・D 59 b・E 58・E 59 a

規模 4.23×3.48×0.04 m (集中イ)

0.79×0.68×0.02 m (集中ロ)

1.54×1.00×0.02 m (集中ハ)

調査 Ta-a層除去後、0黒層の上面に深さ40cm位のくぼみを確認した。擦文化期の竪穴住居跡であると予想されたが、くぼみがアイヌ文化期の送り場として利用されていることが多いので0黒層の上面の精査を優先した。その結果くぼみが送り場であることが判明したので、竪穴住居跡の土層観察をかねると予想された長軸方向にトレーンチを設定した。

覆土 1層は綺まりがなく、灰・炭化物・焼土・動植物遺存体を含む。

遺物出土状況 動植物遺存体のほかには、礫2個、南西約1mのところに銅製煙管の雁首と吸い口が出土し、羅字が残存していた。フローテーションの結果動植物遺存体が多量に検出された。

時期 0黒層の上面の遺構であること、銅製煙管の雁首と吸い口が出土していることから近世アイヌ文化期である。

(鈴木)

7 灰集中

灰集中1 (図V-27)

位置 D 58 d **規模** 0.38×0.18×0.03 m

調査 Ta-a層除去後、0黒層の上面に検出した。

覆土 1層は綺まりがなく、灰・炭化物・動植物遺存体を含む。

遺物出土状況 フローテーションの結果動植物遺存体は検出されなかった。

時期 0黒層上面の遺構であることから近世アイヌ文化期である。

灰集中2 (図V-27、表V-9、図版V-30)

位置 J 53 d・J 54 a **規模** -×-×0.05 m

調査 I B 2層上面で検出した。一部の灰を灰像分析に出している。

覆土 灰・炭化物・焼土・動植物遺存体を含む。

形態 上部灰層の平面はほぼ円形、下部炭化物層は一部を擾乱によって失われているが、平面は不整形である。ところどころに焼土や骨片のブロックがある。

遺物出土状況 フローテーションの結果、イネ種子、イネ内外穎、堅果類、サケ科等が検出された。

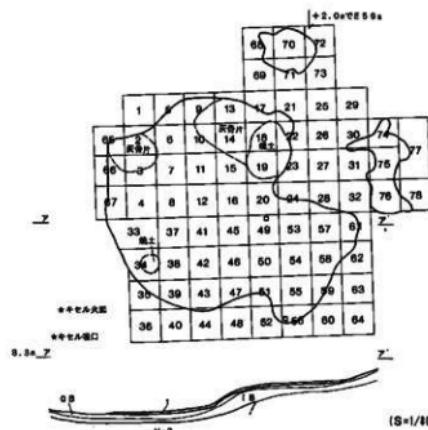
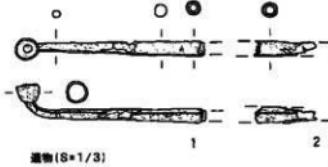
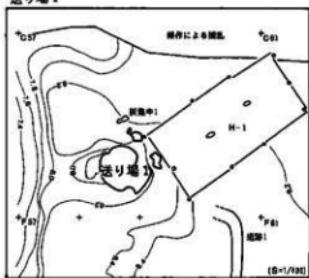
時期 検出層準、同一小グリット内の土器出土状況より中世アイヌ文化期～擦文化期である。

灰集中3 (図V-27、図版V-30)

位置 F 64 c **規模** 0.28×0.25×0.02 m

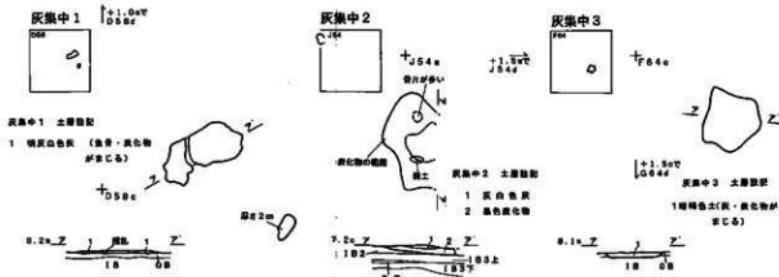
調査 Ta-a層除去後、0黒層の上面に検出した。フローテーションは行なっていない。一部を灰像分析に出している。

7 灰集中
送り場1



送り場1 土壠剖面

1 黒褐色粘土土 (灰・鉄・カクシッシュ鉄を含む、しまりなし)



鍛冶造構 1



- 2 黒褐色土 (しまりなし)
- 3 錆褐色土 (しまり多様に)
- 4 錆褐色土 (しまり非常に多い)

図V-27 送り場・灰集中・鍛冶造構

覆土 1層は締まりがなく、灰・炭化物を含む。

時期 検出層準が0 黒層の上面であることより近世アイヌ文化期である。

(鈴木)

8 錫冶遺構 1 (図V-27・28、図版V-29・30)

位置 E 62 c

規模 $0.78 \times 0.74 \times 0.05\text{m}$ (炭化物層)

調査 I 黒層を 3 cm 下げたところで、炭化物層 1ヶ所 (図左側) と下層に焼土層 2ヶ所 (図右側) 検出した。炭層を半截したところ下層に焼土を検出した。当初、炭層と 2ヶ所の焼土は関連はないと考えていた。炭層調査後に 1つの焼土を半截したところ断面から鉄滓が出土した。そこで初めて錫冶遺構ということがわかった。土壤サンプルは錫冶遺構との判断が遅れたためにメッシュは組まず、炭層で一括、2ヶ所の焼土で一括採取した。

覆土 上層に炭化物層、下層に焼土層がある。ともに締まりはよく焼土層は特に締まっている。焼土層の上部には灰のような白い物が堆積している。

形態 炭層は一部攪乱を受けているが不整な方形。炉 1 は弧状で橙黄色で炉 2 よりは発色がよくない。炉 2 は半円形に突出部が付く形である。突出部は轍の羽口先に当たる部分の可能性が強い。焼土層の断面は上が明瞭にくぼむ皿状を呈する。形態と断面形より、炉 1 は錫冶炉、炉 2 は精錬炉であり、炭層は別な遺構の可能性もあるが小規模な上屋の可能性もある。

遺物出土状況 炭層、炉 1・2 から脱炭途中の銑鉄片、鉄滓、錫造剝片?、磁性のある球状遺物 (湯玉状) が多数出土している。近くの攪乱 (F-62-a 区) から厚手の羽口が出土している。銑鉄片の出土例は千歳市オサツ 2 遺跡、厚手の羽口の出土例は奥尻町青苗遺跡、千歳市オサツ 2 遺跡の例がある。

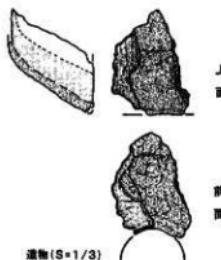
遺物 羽口は先端部分の破片である。残存最大厚約 3.5 cm、内径 2.4 cm。外面には黒褐色 (Hue 2.5 Y 3/1) の滓がつく。滓がついた部分から内面に向かって 1 cm は暗赤色 (Hue 10 R 3/4) を呈し、なにか溶解しておりやや光沢がある。さらに内面側は橙色 (Hue 2.5 YR 6/8) を呈する。胎土は比較的精良で、スサ (草本の茎) が混和されている。

性格 磁性のある球状遺物 (湯玉状)、脱炭途中の銑鉄片、鉄滓があることから錫精錬を行っており、錫造剝片?、磁性のある球状粘土があることから錫で製品・錫素材を製造していたと考えられる。厚手の羽口の出土例のある錫冶遺構はいずれも錫精錬を行なっていることも傍証になる。錫精錬から製品・錫素材の製造を一貫して行なっていた可能性がある。これらは成分分析依頼中であるので、その結果を待って詳細を述べたい。

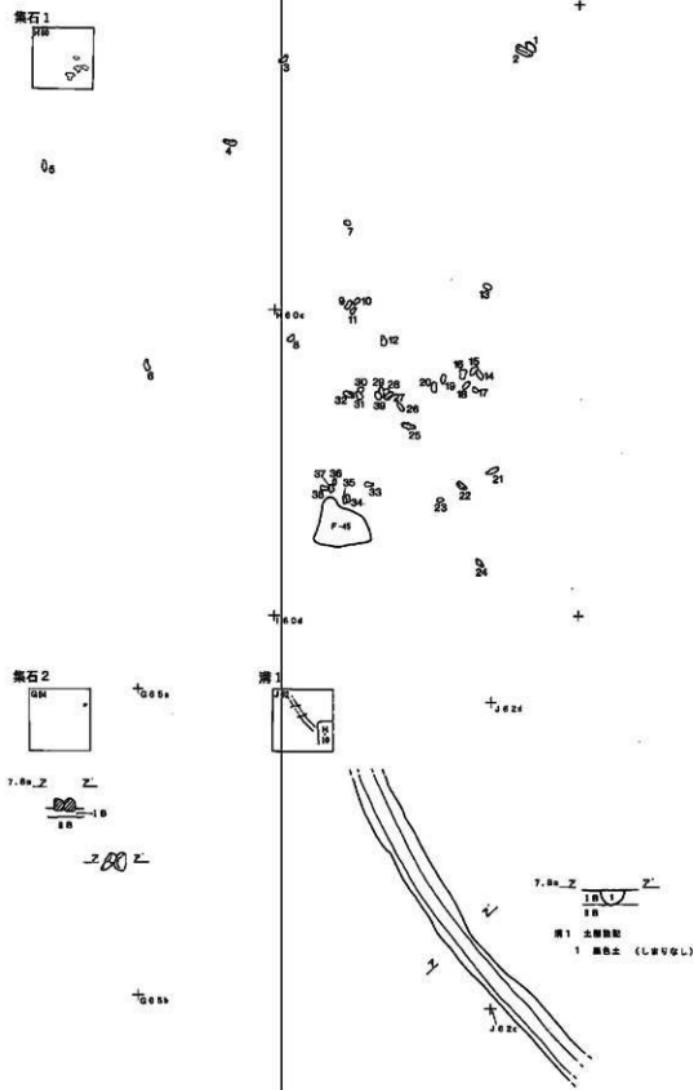
時期 I 黒層上部の遺構であることから中世アイヌ文化期～擦文

文化後期である

(鈴木)



図V-28 フイゴの羽口



图V-29 集石·溝

9 集石

集石1 (図V-29、図版V-31)

位置 H 60

調査 工場下部で検出した。

遺物出土状況 磚が39個出土した。

時期 I 黒墨下部の遺構であること、そばに E-45があることから後北式期であろう。

集石? (図V-29、図版V-31)

位置 G-61.d 調換 2個

圖書「黑腳下鄉去輸出」在

遺物出土情況：環形3個出土！

(六十一)

10. 第1 (圖V-29 圖版V-32)

位置 1.62 跟據 $1.5 \times 0.13 \times (0.06)$ m

【】問題文中で検出した「道跡2」に切られており、道跡2の上にはH-10の標ぼ木が載っている。

時期 道路2に切られており、上にはルート19の揚げ土があることで概文前期と思われる (鈴木)

11 當時

測驗 1 (圖 V - 30 ~ 圖版 V - 33)

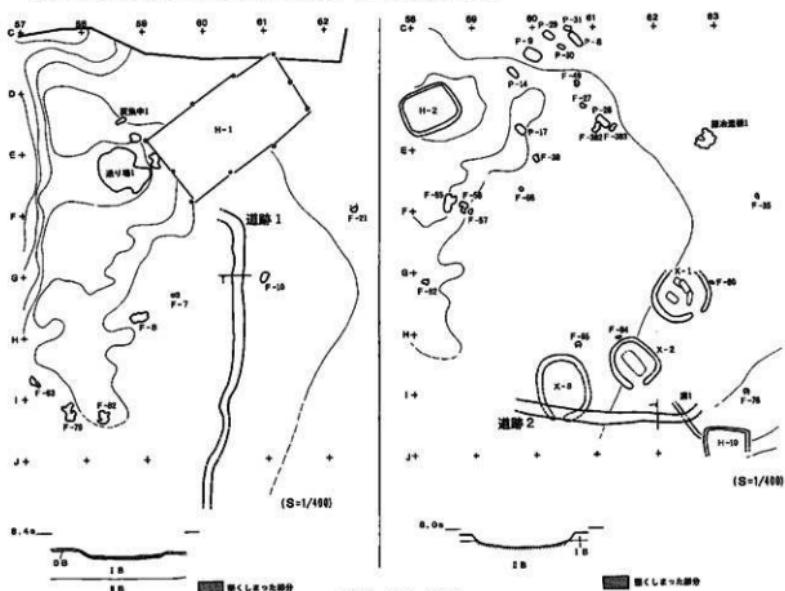
備註 E 60 : G 60 : H 60 : I 60 : L 60

標號 2E 4×0.3×0.06-

■ 東 9月開上乗でくぼれでいた

遺物出土特況・遺物は出土していなし

時期　Ⅰ黒層上面の遺構であること、H-1と送り場1と灰集中1へ向かっていることから見て
一期の邊境塔と想われる事から近世アム文化期である。



図V-30 道跡

13 復原個体の接合関係について

道跡 2 (図V-30、図版V-32)

位置 J59・J60・J61・J62

規模 14.2×0.8×0.1m

調査 I 黒層上部で検出した。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

時期 X-1の上層にあり、道跡2の上にH-10の揚げ土があるので摺文前期である。 (鈴木)

12 土器観察表・土器接合図・土器分布図の見方について

土器観察表V-2・3・4・5、V-1、V-2・3の見方は、成形・調整・施文の内容について、外面を上段に、内面を下段に分けて示した。外面または内面のなかで上下方向は成形・調整・施文の新旧を表し、下にいくほど新しい。縦方向は部位別に区分した。同一部位内において異なる調整等がある場合はその境界を破線で示した。

ただし、菱形・深鉢形の底部については外面の底部側面と外底面を分け、外面底部側面の内容を表中「外面×底部側面」の欄に記述し、外底面の内容は備考に記した。内面は底部側面が存在しないので、内底面の内容を表中「内面×底部側面」の欄に記述した。非クロロ坏形については外面に底部側面が存在しないので、底部側面という欄はない。調整等の欄に「?」があるのは技法不明を表す。施文は網掛けで示している。施文に括弧があるのは沈線などの本数などを示している。備考には、土器外面の全体的な土色を目安で示し、胎土等・型式名・残存状態を記した。

復元個体接合図V-31・32、V-4・5、V-5・6の見方は次のとおりである。小グリット(2.5×2.5m)ごとの集計を基本としている。小グリットの上に重ねて表現している枠は、大グリット(5×5m)の集計しかできなかったものである。また、枠内の数字の配置は部位別の集計で、凡例を示した。部位が判明していて地点不明の個体は集計表表中には加算されているが、分布図には示せない。従って、集計表の個数が分布図よりも多くなる場合がある。なお、接合関係が小グリット内に収まる個体や隣り合う小グリット内に収まる個体は掲載しない(V-3-19を除く)。

土器分布図V-6-10、V-7-14の見方は次のとおりである。集計の仕方は復元土器接合図と同じである。枠内の数字の配置は菱・深鉢形は上段：口縁部+頸部、下段：肩部+底部+不明を表す。ただし、V群坏形は上段：口縁部+体部、下段：底部+不明を表す。V群は上段：(菱の口縁部+頸部)+(坏の口縁部+体部)、下段：(菱の肩部+底部+不明)+(坏の底部+不明)である。

なお、群の数値は各類の数値の合計と群以下の細分が不可能なものの合計であり、類の数値は各型式の数値の合計と類以下の細分が不可能なものの合計である。

13 復原個体の接合関係について (図V-31・32)

X-1の球頭壺(9-9・10)は接合地点と部位がほぼ同じであり、そこにはF-7・8がある。P-2の小型壺(18-12)はP-27付近に接合関係をもつ。P-2とP-27とは長軸方向が類似する。P-29のミニチュア壺(18-13)とP-31の小型壺(18-19)は接合地点が同じで、X-2付近である。P-30の中型壺(18-18)はP-2付近に接合関係をもつ。P-31のミニチュア壺(18-21)はH 64cに接合地点を持つ。

F-41(25-11)の深鉢はF-37(25-9)の深鉢と重複し、後北A式の深鉢(V-3-33)の接合関係とやや重複する。F-29(25-10)の深鉢は後北B式の壺(V-3-36)や後北B式の深鉢(V-3-34)の接合関係と重複する。

F-1(25-12)の深鉢はその周辺に主に分布し、北大I式の深鉢(V-3-16)の接合関係と重複する。F-78(26-18)の深鉢はその周辺に分布し、F-1の接合個体の分布に隣接する。(鈴木)

V 0 黒層・I 黒層の遺構とその遺物

V-9-9 X-1

59	60	61	62	63
G				
H				
I				
	1 2	1		
			1	
			1 1	98



V-9-10 X-1

59	60	61	62	63
G				
H				
I				
	1			
				1 2 3
				4.47 2



V-18-12 P-28

60	61	62
B		
C		
D		
E		
F		
G		
H		
	1	
		1
		7
	1	
	6 4	
	7 91	



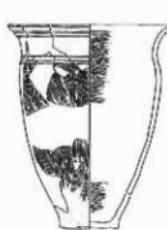
V-18-11 P-28

60	61
E	1 5
F	
G	
H	
	1
	2
	3

部位	口縁部	頸部	胴部	底部	合計
復元	2	4	17	4	27
復元残	4	4	23	0	31
合計	6	8	40	4	58

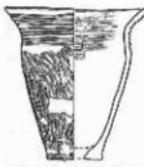
V-18-18 P-28

60	61	62
B		
C		
D		
E		
F		
G		
H		
	6 8 1 2	
	6 18 4 9	
	1	
	9	



V-18-21 P-21

60	61
E	8 1 1 1
F	6 11
G	
H	
	1
	2
	1
	2



部位	口縁部	頸部	胴部	底部	合計
復元	9	6	20	3	38
復元残	0	0	0	0	0
合計	9	6	20	3	38

(トーンは遺構出土破片)

壺

口縁部	底部
頸部	胴部

壺

口縁・体部	底部
底部	

図V-31 遺構の土器接合図(1)

13 復原個体の接合関係について

V-24-9 F-31

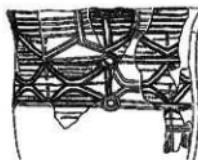
	61	62	63	64	65
D				1	
E					
F					
G		2			
H	1	2		1	1
I	3	2		4	2
J	5	2			



	口経部	頭部	肩部	不明	合計
復元	15	7	0	0	22
復元残	0	13	0	0	13
合計	15	20	0	0	35

V-25-10 F-29

	59	60	61	62	63	64	65	66	67
D									
E									
F			1						
G						2	3		
H					1	4			
I				2	3	1	2		
J				4					



	口絆部	顎部	胸部	不明	合計
復元	5	5	0	0	10
復元残	0	4	4	2	10
合計	5	9	4	2	20

V-25-11 F-1



	口脣部・頸部	頭部	不明	合計
復元	7	19	0	26
復元難	8	53	0	61
合計	15	72	0	87

V-25-12 F-1

V-26-18 F-78 以外

口縁部 不明
頸部 頸部

(上=シナガラ遺跡出土破片)

V-25-18 F-71

	60	61	62	63	64	65	
H					1 3 17 1		
I				3		1	
J		2 1		1 4	1 1		
K							
	口絶然	類	部・病	部	不	明	合
復元株	2		33	0	0	3	
復元株	0		4	0	0	0	
合計	2		37	0	0	3	



V-25-12 F-1

V-26-18 F-78

図V-32 遺構の土器接合図(2)

表V-2 遷拂出土の土器類実表(1)

表V-3 遺構出土の土器観察表(2)

表V-4 遺構出土の土器観察表(3)

VII

6-11-A

外	外 部 接 続 端 子	内 部 接 続 端 子	内 部 接 続 端 子	外 部 接 続 端 子	外 部 接 続 端 子
内	内 部 接 続 端 子	内 部 接 続 端 子	内 部 接 続 端 子	内 部 接 続 端 子	内 部 接 続 端 子
内	内 部 接 続 端 子	内 部 接 続 端 子	内 部 接 続 端 子	内 部 接 続 端 子	内 部 接 続 端 子
内	内 部 接 続 端 子	内 部 接 続 端 子	内 部 接 続 端 子	内 部 接 続 端 子	内 部 接 続 端 子
内	内 部 接 続 端 子	内 部 接 続 端 子	内 部 接 続 端 子	内 部 接 続 端 子	内 部 接 続 端 子

V-18-21

V-1-26	外 国	日本 國	通 用	備 考
	口語 名	學 名	類 型	
外 國	無尾ヨコヅナ 無尾魚	無尾魚 無尾魚	海 魚 海 魚	外國名と 日本名に 異同有 る。
日 本	無尾ヨコヅナ 無尾魚	無尾魚 無尾魚	海 魚 海 魚	日本名と 外國名 が同じ。

I3 復原個体の接合関係について

表V-6 土器・石器掲載一覧

住居の土器

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類
V-4-1	E57d	H-2	覆土1層	VIe
V-5-1	J84b	H-10	遺構付近	VI d

土壤の土器

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類
V-17-1	E60a	P-8	壠底面	VIc
4	C60c	P-12	壁際の壠底面	VIc
8	B60c	P-27	2層壠底面近く	VIc
V-18-11	E61b	P-28	4層	VIc
12	E61a	P-28	壠口付近ⅠB	VIc
13	E60a	P-29	壁際4層中位	VIc
14	E60a	P-29	壁際4層中位	VIc
15	E60a	P-29	壠口付近ⅠB	VIc
17	E60a	P-30	壁際の壠底面	VIc
18	E60a	P-30	壠口付近ⅠB	VIc
19	E60d	P-31	壠口付近ⅠB	VIc
20	D60b	P-31	壠口付近ⅠB	VIc
21	E60d	P-31	壠口付近ⅠB	VIc

銀冶遺構

図番号	発掘区	層位	備考
V-28-1	F62a	搅乱	銀冶遺構1付近 烏羽

X-1の土器

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類
V-8-1	H62c	X-1 区画内	壠跡d	VIc
2	H62c	X-1 区画内	壠跡d	VIc
3	H62c	X-1 区画内	壠跡d	VIc
5	H62c	X-1 区画内	壠跡a	VIc
6	H62c	X-1 区画内	壠跡a-d	VIc
7	H62c	X-1 区画内	壠跡a-d	VIc
V-9-8	H62d	X-1 区画内		VIc
9	H62c	X-1 区画内	壠跡b-d	VIc
10	H62b	X-1 区画内	壠跡c-d-e	VIc
			雨溝内2層上部	
11	H62c	X-1 区画内	壠跡a-d	VIc
12	H62c	X-1 区画内	壠跡a-d	VIc

焼土の土器

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類
V-24-1	G67b	F-1	焼土の盛	VIb 後北B式
2	G67b	F-20	焼土の盛	VIb 後北B式
3	G63a	F-29	焼土中	VIb 後北A式
4	F60b	F-30	焼土中	VId
5	H65a	F-37	覆土中	VIb 後北式
6	F62a	F-39	焼土中	VIb 後北B式
7	E62b	F-60	焼土中	VIb 後北B式
8	J61c	F-76	焼土中	VIb 後北B式
9	H64a他	F-37	焼土中	VIb 後北A式
V-25-10	F64b他	F-29	焼土中	VIb 後北B式
11	F61a他	F-41	焼土中	VIb 東山式
12	I664他	F-1	焼土上	VIc 北大I式
13	G67a他	F-1	焼土上	VIc
V-26-17	F63b	F-78	焼土の盛	VIc 北大I式
18	F63b	F-78	焼土の盛	VIc

遺構石器掲載一覧

図番号	遺構名	層位	分類	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
V-4-2	H-2	覆土1層	石核	黒曜石	51.5	40.6	21.2	39.9	
V-8-4	X-1	G1壠底	有意な礫	細貝岩	54.0	81.4	24.7	123.0	
V-11-2	X-2	墓 壁 底	石槍	黒曜石	62.5	24.2	9.0	9.7	
V-18-16	P-29	壠口付近	たたき石	安山岩	95.9	76.9	65.8	715.7	
V-25-14	F-1	焼土上面	スクレイバー	黒曜石	23.8	23.6	7.0	4.6	
V-25-15	F-13	焼 土 膜	有意な礫	砂岩	220.0	124.0	52.0	1290.9	G58a・6と接合
V-25-16	F-38	焼土上面	石核	黒曜石	15.5	(12.2)	2.4	0.5	
V-26-19	F-78	焼 土 中	スクレイバー	黒曜石	39.5	31.1	13.4	18.4	赤井川産
V-26-20	F-78	焼 土 中	石核	黒曜石	38.4	27.8	26.3	28.9	
V-26-21	F-78	焼 土 中	石核	黒曜石	38.3	25.9	16.6	17.3	
V-26-22	F-78	焼 土 中	石核	黒曜石	31.6	31.9	18.4	19.6	

表V-7 遺構遺物集計表(1)

H-1		床面
石	標・礫片	9
有意な標・礫片		2
器	石器合計	11

H-2		覆土	床	合計
土	IV	2		2
	V	8		8
	VI	1	1	1
器	土器合計	11	1	12
石	石標	1		1
	フレイク・チップ	2		2
	標・礫片	6		6
器	石器合計	9		9

H-10		5層	6層	7・8層	床直	掘掲土	埴土の下	合計
土	III	6			4	2		12
	III+			1				1
	IV+				1			1
器	不明	3			3			6
土器合計	9			1	8	2		20
石	フレイク・チップ	5	3				7	15
	標・礫片	2			1	1		4
器	石器合計	7	3		1	1	7	19

X-1		区画内	G1 墓底	G4 墓土	G4 墓土上面	G4 墓土1層	周溝	合計
土	III			1	2	1	2	5
	III+					1		1
	VI+						4	4
器	VIb	3 3 3				2	4 8	383
	須恵器 VIb	5						5
	筋縫車	1						1
土器合計	3 3 9			1	2	4	5 2	398
石	標・礫片							2
	有意な標・礫片		1				2	1
器	石器合計		1				2	3

X-2		高塙標土	高塙底	周溝	合計
土	III+	3			3
	VI			1	1
器	土器合計	3		1	4
石	石織・朱製品			1	1
	R・F			2	2
	フレイク・チップ	1		3 1	3 2
	標・礫片	2			2
器	石器合計	3		3 4	3 7
金属製品	鐵製品		1		1

X-3		周溝
土器	III	5

表V-8 造構遺物集計表(2)

P-2		覆土2層
土	VII	9
器	縄文土器	1
	土器合計	10
石	礫・礫片	1
	有意な礫・礫片	2
器	石器合計	3

P-3		覆土1層
土	V	2
	VII	1
器	土器合計	3
石	礫・礫片	3

P-8		縹底	覆土1層上部	覆土1層下部	覆土1層	合計
土器	III		1			1
	IV		1			1
	IVb		1			1
	不明		1		2	2
	土器合計	1	5		4	10
石	フレイク・チップ			1	3	4
	石斧片			1		1
	礫・礫片				1	1
器	石器合計			2	4	6

P-9		覆土3層	覆土5層上部	覆土5層下部	合計
土器	III		1		1
	VIb	4	5		9
	不明	1			1
	土器合計	5	6		11
金属製品	鉄製品			3	3

P-12		覆土1層	縹底	合計
土器	IVb	1		1
	VI	2		2
	VIb	1	1	2
	土器合計	4	1	5
石器	フレイク・チップ	1		1
金属製品	鉄製品		3	3

P-14		1層	縹底	合計
土器	II		1	1
	IV	1		1
	不明	1		1
	土器合計	2	1	3
石器	フレイク・チップ	2		2
	礫・礫片	2		2
器	石器合計	4		4

P-17		覆土2層
石	フレイク・チップ	3
	礫・礫片	1
器	石器合計	4

P-27		覆土1層	覆土2層上部	縹底	合計
土	VI		1		1
	VIb		3		3
	土器合計		4		4
石器	フレイク・チップ	1			1
	金屬製品			2	2

表V-9 造構遺物集計表(3)

P-28		I	B	覆土3層	覆土5層	合計
土	IV				1	1
	Vt			1		1
	VIb	57			57	
土器合計		57		1	1	59
石	輕石				1	1
	礫・礫片				1	1
	石器合計				2	2

P-29		2層	4層	合計
土	III		1	1
	V		2	2
	VIb	16	53	69
器	不明		2	2
	土器合計	16	58	74
	フレイク・チップ		1	1
石	たき石		1	1
	礫・礫片	1		1
	石器合計	1	2	3

P-30		壌底	I	B	合計
土器	VIb	1	45		46

P-31		I	B
土	VIb	54	
	痕跡 VIb	59	
	土器合計	113	

F-1		燒土上
土	VIb	7
	Vt	145
	土器合計	152
F-13		燒土上
石器	礫・礫片	1
F-29		I B
土器	VI	2
F-27		燒土中
石	礫・礫片	3
	有意味な礫・礫片	1
	石器合計	4
F-28		燒土中
土器	VIb	1
F-30		燒土面
土	VIb	1
	VI d	6
	土器合計	7

F-37		燒土上面
土器	VIb	2
	R - F	1
	フレイク・チップ	9
石器合計		10

F-38		燒土上面
土	VI	2
	VIb	1
	土器合計	3
石	石鉋	1
	フレイク・チップ	12
	石器合計	13

F-39		燒土上
土器	VIb	4
	フレイク・チップ	1
	F-41	燒土上
VI		1
F-43		燒土
土器	IVb	1

F-55		燒土上
石器	礫・礫片	2

F-60		燒土中
土器	IVb	1
	フレイク・チップ	1
	F-65	燒土上 燒土中 合計

F-65		燒土上 燃土中 合計
土	V	116
	Vt	7
	VI	1
土器合計	123	1 124

F-77		燒土内
土器	VI	2
石器	礫・礫片	1

F-78		燒土隙
土	III	2
	IIIt	1
	VIt	24
土器合計	27	
石	R - F	1
	フレイク・チップ	1
	石根	4
土器合計	4	
器	石器合計	10
	礫・礫片	4
	灰焦中	2

灰焦中		2 灰層
土器	VI	1

VI II 黒層の遺構とその遺物

1 概要

遺構は、北にむかって伸びる舌状台地の頂部（標高8.4～7.8m）と東西斜面の肩部分に集中する。住居跡9軒、土壙20基、Tピット21基、焼土36基を検出した。おもな遺構の時期は縄文時代中期前半、後葉、後期初頭、後期中葉、後期後葉である。住居跡はおもに台地の北西側斜面肩部に集中し、H-6～9は切り合い関係を持つ。おもな時期は後期初頭余市式である。土壙は台地の西半に後期中葉から後葉にかけての土壙が集中する。Tピットは東西斜面の両肩部分に等高線と直交するよう配列されている。特に東斜面に多い。焼土は台地全面に分布している。H-6～9は切り合い、その凹みには堂林式期の遺物が集中する。住居覆土最上部のF-379も堂林式期である。

遺構番号の欠番について、TP-4～8は1996年度④地区の調査であり、焼土F-85～F-378は1997年度②地区の調査であり、報告は次年度以降である。

2 住居跡

H-3（図VI-2・12、表VI-1・4、図版VI-1・4）

位置 B 58・59、C 58・59 長軸方向 N-53°-E

規模 (5.79) / 5.29 × (3.53) / 3.13 × 0.29 m

調査 遺構の上部は耕作によって漸移層上面まで削平を受けていた。また東側の一部は家屋の基礎によって削平を受けていた。長軸と短軸方向に2本のベルトを設けた。覆土の調査終了後に壁際で柱穴を検出した。床面には石突い炉の抜き取り痕のようなものを検出したが、焼土の痕跡が不明瞭であるために付属遺構番号はつけなかった。床面土壙はフローテーション用に50cm方格割付けをおこない9か所で採取した。

覆土 覆土1～2は流れ込みの堆積を示していた。覆土3は堅穴全面に分布しておらず、層厚の変動が激しい。なお、覆土上面には堂林式期の焼土（F-22）がある。

形態 平面形は長楕円形で、床面は平坦で、壁は高さ25cm前後で内彫して立ち上がる。

付属遺構 柱穴は8か所で、平面形は円形で浅い。床面に石突い炉の抜き取り痕のようなものを検出したが、くぼみ列の内側の土質は焼土の痕跡が認められなかつた。

遺物出土状況 覆土上位のII B層からはIII・IV群が多く出土している。覆土2層からは余市式土器が出土している。覆土4・5層からは遺物は出土していない。床面からは、III群胴部の破片が1点と表面を研磨した軽石や石器類が少量出土している。

土器 1～3はII B層出土、4～6は覆土2層出土。1はLR縄文→磨り消し→沈線文、堂林式。外面に炭化物が付着する。II B層出土。C 59 bから同一個体が1点出土している。2はLR縄文→貼付帯・RL縄文、余市式。3は横走ぎみのRL縄文で良く結まった節、余市式。4はRL縄文→弱いナデ、口縁端外側が外側に肥厚する、余市式。5はLR縄文→貼付帯・LR縄文→口縁端面・LR縄文→貼付帯の下側にナデによる無文帶、余市式。6はLR縄文→弱いナデ、余市式。

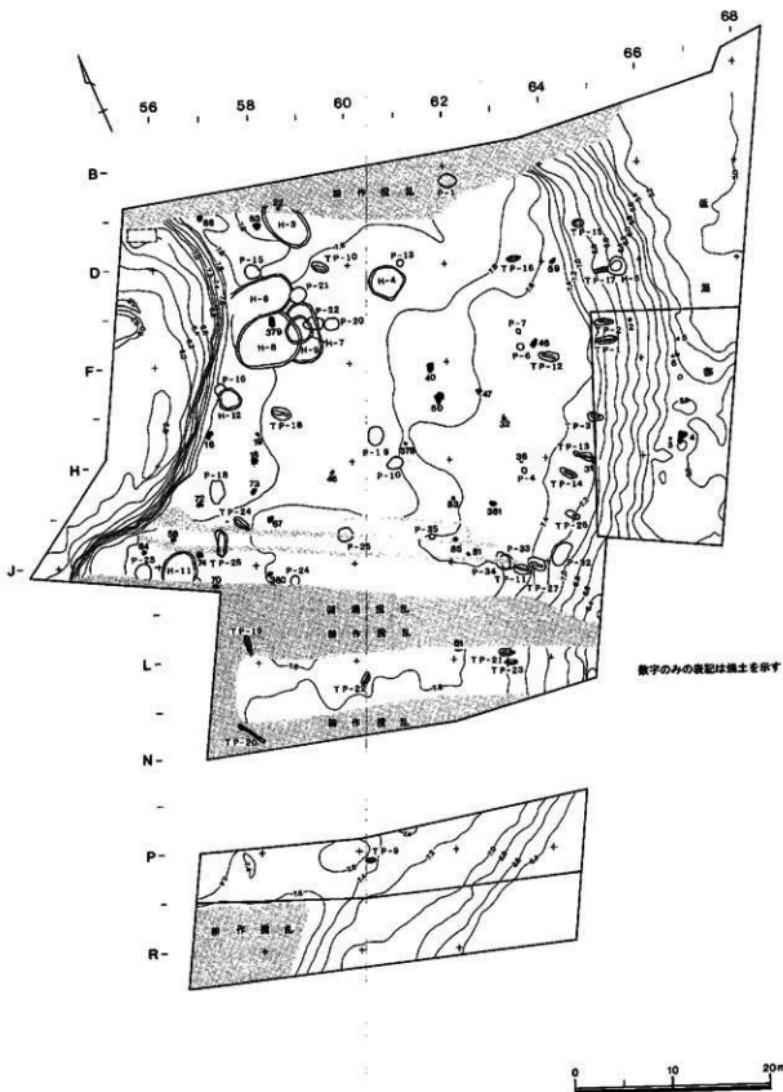
時期 覆土2層の遺物出土状況から、縄文後期初頭の可能性が高い。（鈴木）

H-4（図VI-3・12、表VI-1・4、図版VI-2・4）

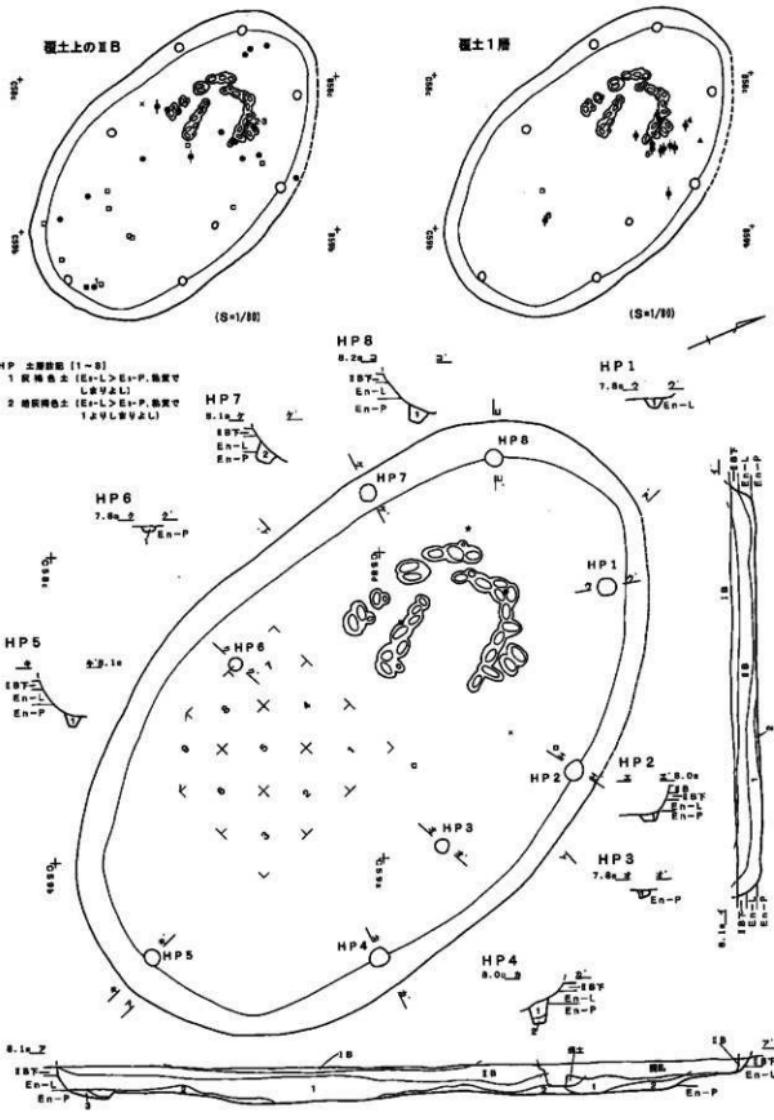
位置 C 60c、C 61b、D 60cd、D 61ab 長軸方向 N-37°-W

規模 3.28/3.15×3.32/3.07×0.19 m

調査 II B層下面を掘り下げている際に、隅丸方形の黒色土入り込みを検出した。大きさから住居の可能性があるとして調査を開始した。土層観察のため、グリット61ラインをベルト状に残し、黒



図VI-1 II 黒層造構位置図



图M-2 H-3

色土部分を掘り下げた。掘り込み面は土層断面からⅡ B 下層の直上である。土層確認後、完掘を行った。

HP の配列を考慮して、遺構北半分に空間を確保した、竪穴式住居であると判断した。

覆土 覆土は比較的しまっている。覆土について土砂の流入による埋没を観察できなかった。そのため、人為的に埋め戻した可能性がある。

形態 床面は比較的平坦である。プランは隅丸方形であるが北に面した辺以外の辺は丸みを帯びる。HP - 1、4、7、10を結んだ方形の長軸方向は掘り込みのプランの長軸より20°程北へずれる。

付属遺構 9つの柱穴とひとつの小土壙を遺構床面から検出した。

HP - 1、4、7、10を結ぶラインが方形を描く。HP 1、HP 10は直径8cm、HP 4、HP 7は直径15cm以上ありそれぞれ対をなしている。HP 1が30cmほど入り込んでいるのに対し、HP 10は10cmほどの入り込みである。しかし HP 9がその20cm北に並ぶ。いずれの柱穴も覆土はよく似る。深い1本の柱穴と浅い2本の柱穴が対をなして並ぶことになる。HP 8はその覆土の土層から埋め戻した痕跡をうかがえる。

遺物 覆土中からフレイクが10点、礫が2点、有意な礫が1点出土している。床面直上からRFが1点、フレイクが6点出土している。そのうち土器片6点を図示した。いずれも床面直上の遺物であり、Ⅲ群a類土器である。

7は口唇部の肥厚部と隆帶上を短沈線で加飾する。逆‘く’の字状に2本の短沈線を連続して施文する。8は指先原体としてを‘く’の字に連続刺突する。平行する隆帶の間を、隆帶と同じ様に平行して半截竹管による沈線を充填する。片方の側縁はよく爪を立てるが、対になる側は指頭のみ押しつける。9は半截竹管を連続して短く押し引く装飾を施す。‘く’の字あるいは、逆‘く’の字に連続施文する。10は沈線による加飾がある胴部破片である。11は隆帶上に、爪先による連続刺突を施す。爪は隆帶の両側縁を留めるような対として刺突する。12は半截竹管による縦方向の沈線を施す。6点とも内面は磨き調整を丁寧に施す。8・9・10・12は特に焼成が良好であり、器壁がよくしまる。

時期 床面直上出土のⅢ群a類土器から繩文時代中期中葉の住居と判断した。 (大泰司)

H - 5 (図VI - 4・12、表VI - 1・4、図版VI - 3・4)

位置 C 65 bc、D 65 ad **長軸方向** N - 49° - E

規模 2.17/1.26×1.81/1.04×0.49m

調査 東低湿部斜面のⅡ B 層調査中、Ⅱ B 下層面に円形の黒い落ち込みを確認した。北半分を掘り下げ、En-a層に達した一定の深さで床面を確認したので、住居跡と認識して調査に入った。西側の床と壁を調査中にTP - 17との切り合いを発見。覆土中にTピットの痕跡がみられなかったことから、本遺構がTP - 17を破壊していると確認した。

覆土 覆土4層と5層は、濁った崩落土。全体で自然埋没を示している。

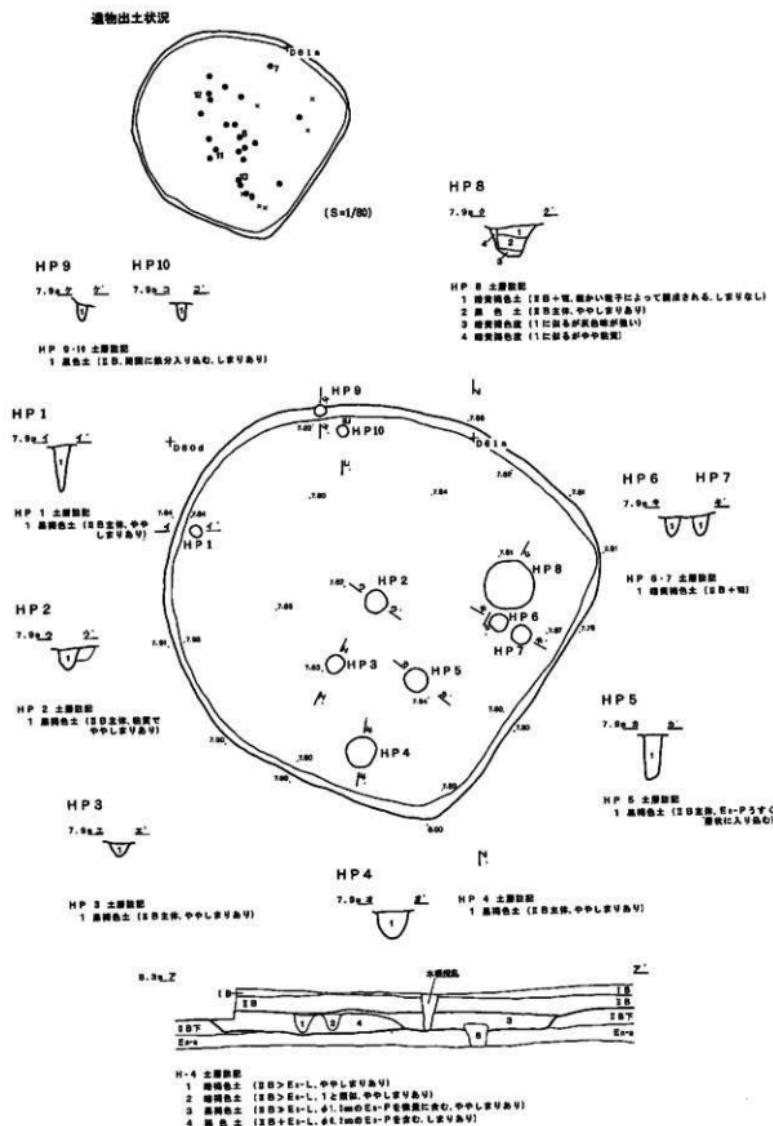
形態 平面形はやや橢円形、床面は皿状で、壁は内湾しながら立ち上がる。

遺物出土状況 覆土1層と床面直上から中期の土器が少量、確認面よりやや上からは後期中葉の土器が1点出土している。石器類は覆土2層からRF、床面から長さ10cm前後の礫が3点出土している。

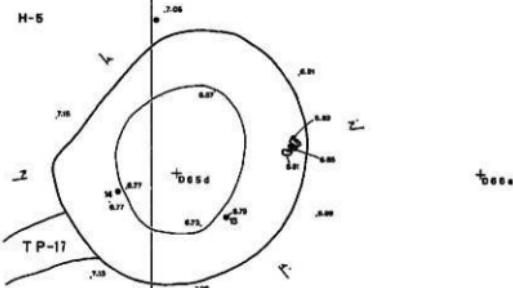
土器 13は覆土1層、14は床面直上。13は小突起下に円錐台形の貼付文→偏平な横位貼付帯→結束第1種（LR・LR）→小突起下に横位繩線文→口縁端に繩端による刺突。萩ヶ岡1式。14は結束第1種（RL・LR）で、内面はミガキ。Ⅲ群a類。

時期 TP - 17を破壊していること、周囲にⅣ群b類土器が出土していることから、中期後半以降、後期中葉のあいだに營まれた以降と推定できる。

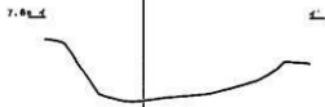
(三浦)



图V-3 H-4



H-5 土壌性質
1 黒 色 土 ($T = \rightarrow$ 黒じろ)
2 黒褐色地土 ($T = \rightarrow$ 黒じろ, 部分的に灰色の地土色が入り込む)
3 黒 色 土 ($T = \rightarrow$ 黒じろ)
4 灰褐色地土 (\rightarrow 地土色, $E = \rightarrow$ 入り込む, しまりなし)
5 灰褐色地土 (\rightarrow 地土色, $E = \rightarrow$ 5cmの小塊入り込む, 砂質)



IV-4 H-5

H-6 (図VI-5・13・16、表VI-1・2・4、図版VI-5・7・8)

位置 D 57°58' E 58° 長軸方向 N-81°-E

規模 -/-×-/-×0.27m

調査 遺構の先後関係の確認はH-2の調査で設けた東西南北トレーニングを利用した。土層断面の観察よりH-2に切られていること、掘り揚げ土があること、下層にH-8があることがわかった。H-2の調査後、トレーニングによる立上りの確認と揚げ土の抜がりによって上端平面形が確定できたので豊穴内調査を開始した。

覆土 覆土2は住居廃絶時の流入を示していた。

形態 平面形は長楕円形で、床面は平坦で、壁は高さ25cm前後で、外傾し直線的に立ち上がる。南西側の一部は河川の浸食によって失われている。

付属遺構 柱穴は6か所で、平面形は円形で浅い。炉は検出されなかった。

遺物出土状況 覆土上部の遺物は東半分に多く出土し、中期・後期の土器が多い。覆土中部の遺物は後期の土器が多く、とくに後期後葉の土器が多い。床面からは後期後葉の土器が多く出土している。石斧が覆土中部・床面から4点出土している。

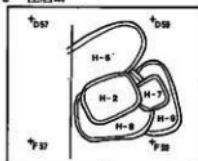
土器 15・19は覆土上部、8・19・21は覆土中部、16~18は覆土下部、19・20は床面出土。15は結束第1種羽状繩文、内面は丁寧なナデ。中期。16はRL繩文→貼付帯・RL繩文→貼付帯・LR繩文、余市式。17はLR繩文→沈線文、手稻式。H-8覆土6層から同一個体が出土している。18はLR繩文→沈線文、堂林式。口縁部は肥厚せず端面は内傾する。19はRL繩文→沈線文→沈線に向かって刺突、堂林式。口縁部はわずかに肥厚し端面は内傾する。H-8覆土5・6層とH-9覆土5層上部とD 58bに接合個体がある。20はLR繩文→刺突、堂林式。口縁部は肥厚せず端面はやや外傾する。H-8覆土5層とH-7覆土上部に接合個体がある。21はLR繩文→横位沈線文(上から7本)→充填沈線文→横位沈線文(下の2本)、堂林式。口縁部は肥厚せず端面は内傾する。H-8覆土6層に接合個体がある。

石器 4・5は覆土上部、1~3・6は覆土下部、7は床面出土。1は有茎、背面に厚みを減じるため、左側縁から右側縁付近にまで及ぶ深い調整が入る。2は主要剝離面がなくなるくらい調整が施されている。刃部はつぶれが著しく、腹面の稜に摩滅がある。3は白濁した色調を持ち、錯交剝離調整で側縁に刃部を整形する。右側縁刃部は済みが著しい。背面の一部に礫皮を残す。基部・末端部側縁には済みが入っている。4は自然面を残す角礫で、礫打面である。稜に摩滅がある。5は自然面を残す角礫で、礫打面である。1~5は黒曜石製。6は偏平棒状の転石を素材とする石斧の再生未製品である。刃部側を敲打し再生しようとしている。刃部の一部に研磨面が残存している。7は偏平な転石を分割したものを素材とする石斧、基部に礫面(転磨面)を残す。刃部両面に刃縁と直交する方向に条痕がある。8は偏平棒状の転石を素材とする。右側縁には自然面を残し、左側縁には剝離調整→研磨が加わる。折れ面の両主面の角に磨滅がみられる。9はやや厚みのある棒状の転石を素材とする。基部に自然面を残し、両側縁・主面には剝離調整→敲打→研磨が加わる。折れ面にはまばらに敲打痕が付く。10は偏平棒状の転石の側縁の一部を使用する。石斧素材の転用。6~10は緑色泥岩。

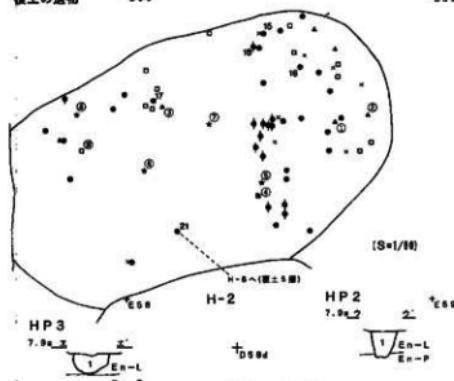
時期 H-8・P-21を切っていること。床面の遺物出土状況から、繩文後葉と考えられる。

(鈴木)

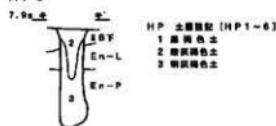
2 住居跡



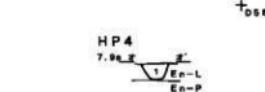
覆土の遺物



HP 6



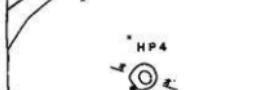
HP 4



HP 5



HP 4



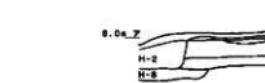
HP 5



HP 6



H-5



H-6 土層試験

1. 錆褐色土 (En-L>EB+En-P, しりべり多い, H-6裏引け土)

2. 黄褐色土 (En-L>EBしまり弱い)

図VI-5 H-6

H-7 (図VI-6・13・16、表VI-1・2・4、図版VI-5・8)

位置 D 58°59' E 58°59'

長軸方向 N -22° - E

規模 2.67/2.35×2.89/2.68×0.29 m

調査 先後関係の確認は井戸の側面と H-2 の調査で設けた東西トレンチを利用した。土層断面の観察より H-2 に切られていること、下層に H-8、H-9 があることがわかった。H-2 の調査後、トレンチによる立上りの確認と掲げ土の拡がりによって上端平面形が確定できたので竪穴内調査を開始した。

覆土 覆土 6 は住居廃絶時の流込を示していた。

形態 平面形は短い卵形で、床面は平坦で、壁は高さ30cm前後で、外傾し直線的に立ち上がる。

付属遺構 柱穴や炉は検出されなかった。

遺物出土状況 覆土上部の遺物はほぼ全面に出土し、後期後葉の土器・礫・礫片が多い。覆土中部の遺物は北東側に多く出土し、余市式土器・礫・礫片が多い。床面遺物は南西側に出土し、余市式土器がある。IV群 a 類土器はすべて余市式である。

土器 20は覆土上部出土、22~25・37は覆土中部出土、37は床面でも出土している。22は L 繩文→貼付帯・L 繩文→弱いナデ、余市式。23は R 繩文→貼付帯・R 繩文→弱いナデ、余市式。24は LR 繩文→貼付帯・LR 繩文、余市式。25は底部で LR 繩文、外底面にも繩文、余市式。20は堂林式、H-6 床面と H-8 覆土 5 層に接合個体がある。37は余市式、H-8 と H-9 に床面と接合個体がある。

石器 10・11は覆土上部出土。10は偏平な転石（亜角礫）を素材とした石斧未製品、側縁に剥離調整→敲打、刃部の剥離調整に失敗して放棄した。緑色泥岩。11は安山岩角礫で片面を使用する。

時期 H-8・H-9 を切っていること。床面の遺物出土状況から、余市式期と考えられる。

(鈴木)

H-8 (図VI-7・8・14・17、表VI-1・2・5、図版VI-5・6・8・9)

位置 D 58° E 57°58'

長軸方向 N -72° - E

規模 -/-×5.82/5.52×0.22 m

調査 先後関係の確認は井戸の側面と H-2 の調査で設けた東西南北トレンチを利用した。土層断面の観察より H-2、H-6、H-7 に切られていることが確認できた。H-2・7 の調査後、トレンチによる立上りの確認と掲げ土の拡がりによって上端平面形が確定できたので竪穴内調査を開始した。

覆土 覆土 5 は H-6・7 挖り掲げ土、覆土 6 は住居廃絶時の流込を示していた。なお、覆土上面には堂林式期の焼土 (F-379) があり、堂林式土器が多数出土している。

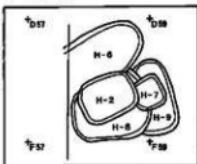
形態 平面形は短い卵形で、床面は平坦で、壁は高さ30cm前後で、外傾し直線的に立ち上がる。

付属遺構 柱穴は壁の近くに 8か所、炉 2基、付属土壙 1基が検出された。柱穴は先端がとがらず浅い。HF 2 と HF 1 は前後関係がある。

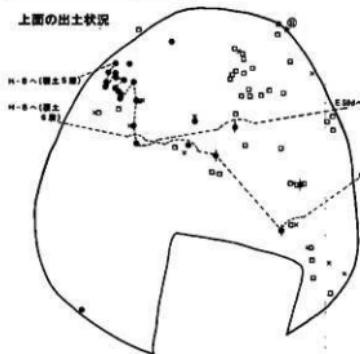
遺物出土状況 覆土 5 層上部の遺物は西側と東側によって分布し、後期の土器・礫・礫片が多い。覆土 5 層下部の遺物はほぼ全面に分布し、後期の土器・礫・礫片・フレイク・チップが多い。床面遺物は南西側にやや多く出土し、余市式土器が多い。IV群 a 類はすべて余市式である。石器の接合例は、造構間で石斧未製品 (図VI-17-7) と H-9 の覆土 5 層中部、覆土の黒曜石フレイクが P-21 覆土、造構内で覆土中層の礫が 1 例。

土器 20・27は覆土 5 層、21・22・28~30は覆土 6 層出土、37は床面出土。26は L 繩文→弱いナ

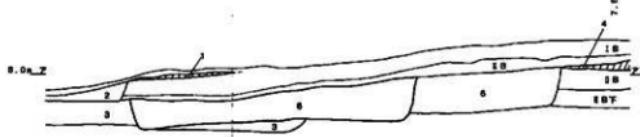
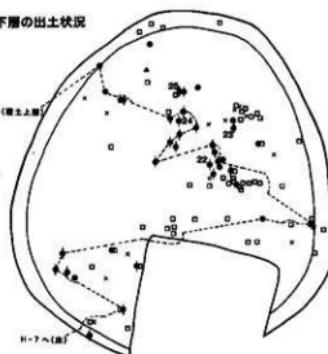
2 住居路



上画の出土状況



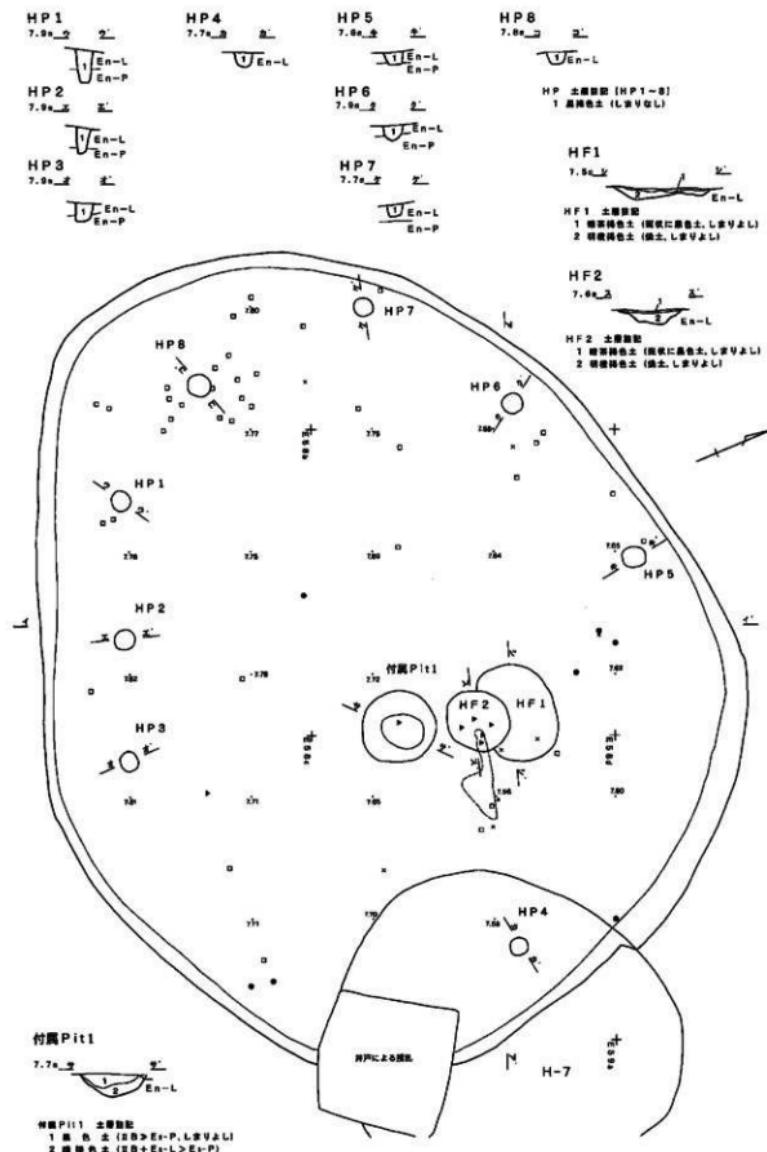
下關の出土状況



H-7 土體地盤

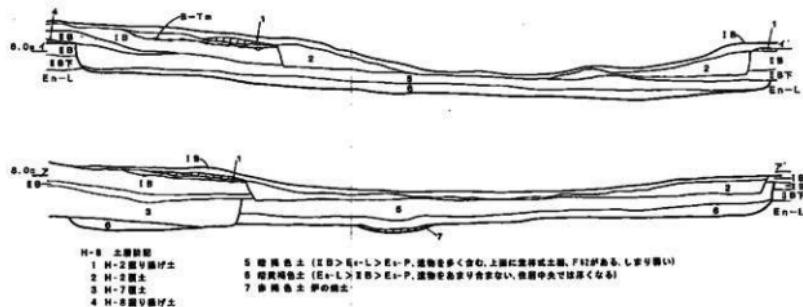
- 1 黒褐色土 (H-2 葉号掲げ土)
 2 黒 土
 3 黒褐色土・黒褐色土 (H-8 藤土)
 4 黒褐色土 (H-8 葉号掲げ土)
 5 黒褐色土・黒褐色土 (H-9 藤土)
 6 黒褐色土 (H-7 藤土) H-8 藤土よりやや薄い。しまりよし。

図VI-6 H-7

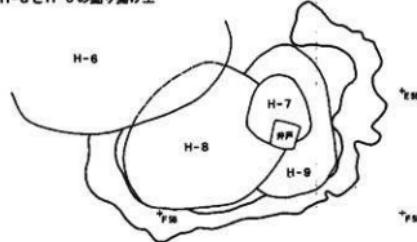


図VI-7 H-8(1)

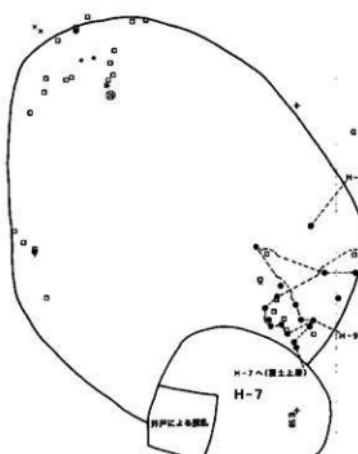
2 住居跡



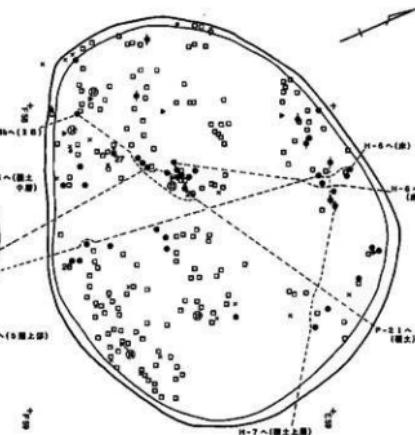
H-8とH-9の掘り掛け土



覆土上層の遺物 (S=1/10)



覆土中層の遺物 (S=1/10)



図VI-8 H-8(2)

デ→横位沈線文→充填沈線文、堂林式。E 61 b から同一個体が 2 点出土している。27は突起（頂部に十文字沈線）→LR 繩文→横位沈線文→斜沈線文→沈線間に向かって刺突（刺突は小さい）、堂林式。口縁部はやや肥厚し端面は内傾する。28は注口土器、LR 繩文→斜沈線文→横位沈線文→磨り消し帯、手稻式の古いもの。29は LR 繩文→沈線文、手稻式。H-6 覆土中部から同一個体が出土している。30は浅鉢のミニチュア、ナデ→沈線文→横位沈線文→沈線に向かって刺突、堂林式。T9は堂林式、H-6 覆土上・中部・床面と H-9 覆土 5 層上部、D 58 b に接合個体がある。20は堂林式、H-6 床面と H-7 覆土上部に接合個体がある。21は堂林式、H-6 覆土中部に接合個体がある。37は余市式、H-7 覆土上・中部・床面と H-9 床面と接合関係を持つ。

石器 12・13は覆土 5 層、14~18は覆土 6 層。12は有茎で折れている。背面に礫皮を残す。13は横長剥片を素材にしている。刃部の潰れが著しい。背面の稜に摩滅がある。14は刃部の潰れが著しい。被熱して光沢が失われている。15は球頭の発達が著しい。稜・刃部の潰れが著しい。16は被熱して光沢が失われている。17は球頭の発達が著しい横長剥片を素材にしている。先端が欠失している。18は偏平棒状転石（亜角礫）を素材とした石斧未製品、側縁・基部の剝離調整中に折れたものである。H-9 の覆土 5 層中部に接合資料がある。12・16は珪質頁岩、13~15・17は黒曜石。

時期 H-6・H-7 に切られていること。床面の遺物出土状況から、余市式期と考えられる。

(鈴木)

H-9 (図 VI-9・14・17、表 VI-1・2・5、図版 VI-6・9)

位置 D 58・59、E 58・59

長軸方向 N-6°-E

規模 6.20/5.82×/-×0.33 m

調査 先後関係の確認は井戸の側面と H-2 の調査で設けた東西南北トレントを利用した。土層断面の観察より H-7、H-8 に切られていることが確認できた。H-7・8 の調査後、トレントによる立上りの確認と掲げ土の拡がりによって上端平面形が確定できたので竪穴内調査を開始した。

覆土 覆土 5 はおもに H-7 掘り掲げ土、覆土 6 は壁の崩落土である。

形態 平面形は一端がたいらな橢円形、床面は平坦で、壁は高さ 30cm 前後で、外傾し直線的に立ち上がる。

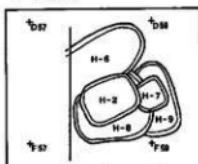
付属遺構 柱穴は 4 か所、炉は H-7 によって破壊された可能性が高い。

遺物出土状況 覆土 5 層上部の遺物は北側に偏って分布し、後期の中葉以降土器・礫・礫片が多い。覆土 5 層下部の遺物はほぼ全面に分布し、中期、後期初頭の土器・礫・礫片・フレイク・チップが多い。床面遺物は南側に多く分布し、礫・礫片・フレイク・チップが多く、後期初頭の土器が少量出土している。IV 群 a 類はすべて余市式である。石器の接合例は、遺構縁り掲げ土と包含層との間で片岩製石斧が 1 例あった。

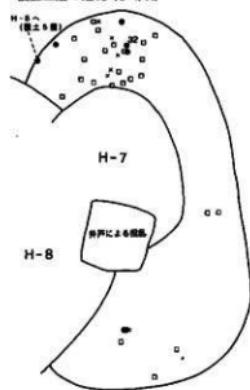
土器 20・31・32 は 5 層上部、33・34 は 5 層下部、36~37 は床面出土。31は LR 繩文→横位沈線文→沈線間に向かって刺突、堂林式。口縁部はやや肥厚し端面は内傾する。32は LR 繩文→刺突、堂林式の新しいもの。口縁部は肥厚せず端面は平坦。33は結束第 1 種羽状繩文→貼付帯・丸輪絞条体、円筒上層 a 式？。34は RL 繩文、余市式。35は RL 繩文→弱いナデ、Ⅲ群。36は RL・RL 羽状繩文、余市式。37は LR 繩文→横位貼付帯・LR 繩文→口縁部の縦位貼付帯・LR 繩文、所々で縦位貼付帯が横位貼付帯を連絡している、余市式。H-7 覆土上・中部・床面、H-8 床面と接合関係を持つ。19は堂林式、H-6 覆土上・中層・床面と H-8 覆土 5・6 層と D 58 b に接合個体がある。

石器 19は床面、21・23・18は覆土 5 層中部、20・22は掘り掲げ土、24は覆土。19は先端が欠失しており、刃部の潰れが著しい。20は球頭の発達が著しい。先端部両面が衝撃により剝離している。21

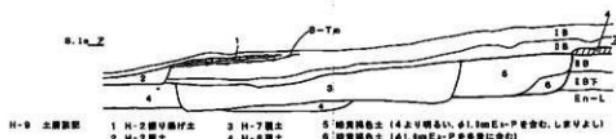
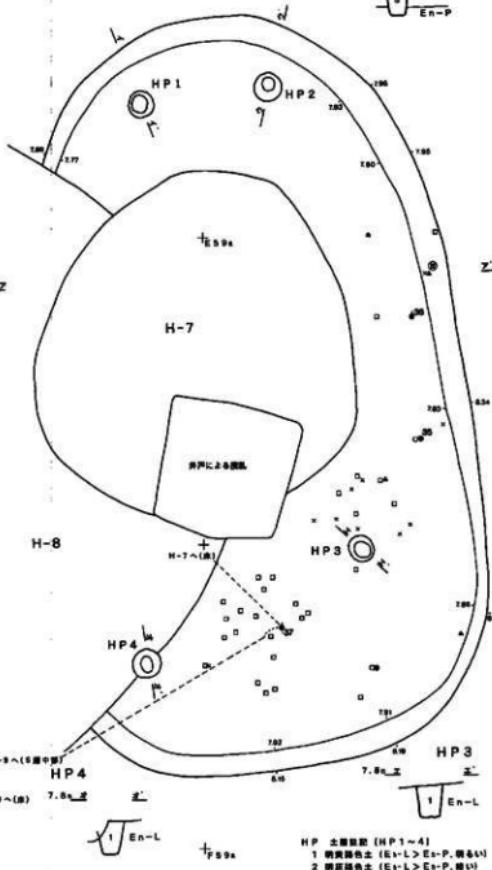
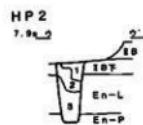
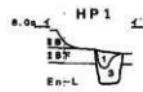
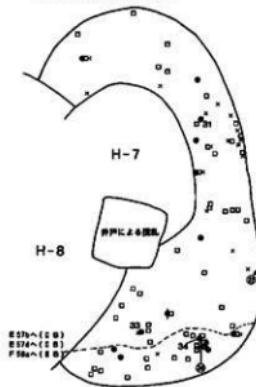
2 住居跡



覆土上層の遺物 (S=1/II)



覆土中層の遺物 (S=1/II)



図VI-9 H-9

は再生により先頭部が小さくなっている。22は背面に再生のための急角度の調整がはいる。背面側の後に摩滅が著しく、刃部の潰れが著しい。23は縦長の礫端片を素材としており、背面に礫皮を残す。右辺先端が欠失している。24は球頭の発達が著しい。18は偏平棒状転石（亜角礫）を素材とした石斧未製品、側縁・基部の剝離調整中に折れたものである。H-8の覆土6層に接合資料がある。19~24は黒曜石製、18は緑色砂岩。

時期 H-7、H-8に切られていること。P-21が切っていること。覆土5層下部、床面の遺物出土状況から、縄文後期初頭と考えられる。
(鈴木)

H-11 (図VI-10・15・17、表VI-1・2・5、図版VI-10・12)

位置 H 56、J 56 **長軸方向** N-23°-E

規模 -/-×3.47/3.23×0.24m

調査 道路の側溝に切られて断面が確認できた。立上がりの確認をし、II B層を下げて上端平面形を確定し、豊穴内調査を開始した。

覆土 覆土1は住居廃絶時の流込み。覆土2は火災時の焼土。覆土3は火災以前に堆積している。

形態 平面形はほぼ円形、床面は平坦、壁は高さ20cm前後で浅く、内縁気味立ち上がる。

付属遺構 柱穴が2か所確認できた。炉1基、付属土壙1基が検出された。

遺物出土状況 覆土上部の遺物はほぼ全面に分布し、後期後葉の土器・礫・礫片・フレイク・チップが出土している。覆土下部の遺物は全面にまばらに出土し、後期後葉の土器がある。床面遺物はほとんどない。石器の接合例は、覆土上部と焼土層で砂岩製砥石(図VI-17-2)が1例。

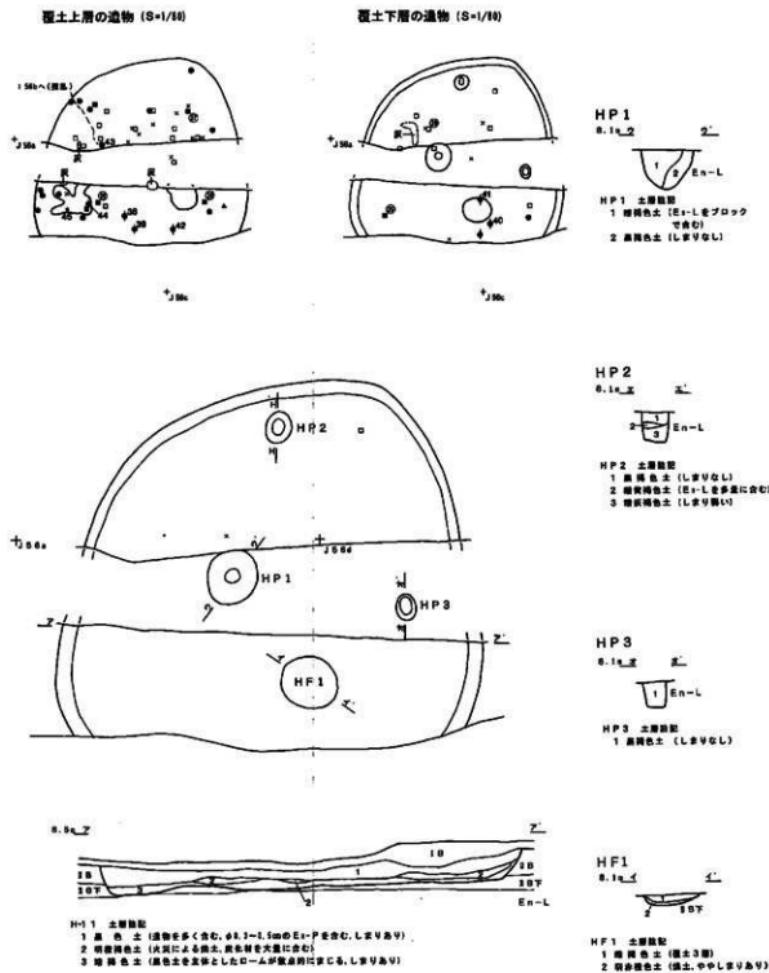
土器 38・39・42~45は覆土1層、40・41は覆土3層。38はLR縄文→磨り消し帯→横位沈線文、手稻式。39はLR縄文→磨り消し帯→横位沈線文、手稻式。40はLR縄文→弱いナデ→斜沈線文・充填沈線文→横位沈線文、堂林式。41はLR縄文→斜沈線文→横位沈線文、堂林式。42はLR縄文→ナデ→沈線文、堂林式。43はヨコナデ→LR縄文→底部ナデ、堂林式。44はスタンプ型土製品。柄部に貫通孔を持つ。施文単位は3を基調とする。円形刺突によって正三角形を描く。

石器 25・27は覆土3層、26・28は覆土1層、29は覆土1層と2層の接合資料。25は背腹両面に主要剝離面をやや多めに残す。左側刃部は潰れが著しい。黒曜石。26は基部が被熱による破損で欠失し、刃縁は再研磨し面を持つ。泥岩。27は安山岩の棒状亜円礫、長軸側の一端を使用する。28は偏平な素材の両主面を使用する。砂岩。29は厚さの偏りから推定すると、大きな皿状砥石の中央部分が薄くなつたので分割した破片がこの砥石であろう。両主面を使用している。割れ面に被熱による黒変が見られる。砂岩。

時期 覆土の遺物出土状況から、縄文後期後葉と考えられる。

(鈴木)

2 住居跡



图V-10 H-11

H-12 (図VI-11・15、表VI-1・2・5、図版VI-11・12)

位置 F 57 長軸方向 N-27°-W

規模 (1.32) / 1.08 × (1.28) / 1.01 × (0.36)

調査 II 黒層除去後、En-L 上面において黒色土の落ち込みを確認した。形態から 2 つの遺構が切り合っていることが予想された。ベルトを残して土層観察を行ったところ、P-16崩落後に H-12 が構築されたことが確認された。

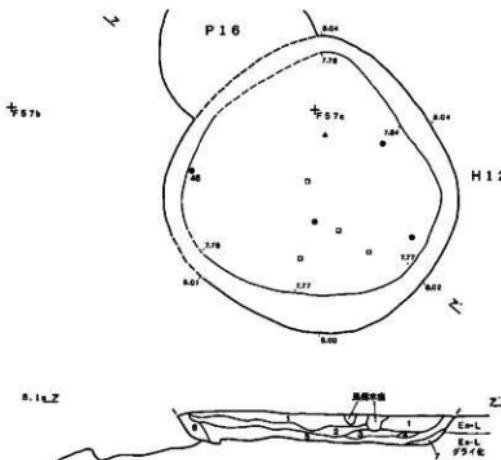
覆土 覆土 6・7 は堅穴埋没時に堆積したもので、その他は流れ込んだものと認識される。

形態 平面は隅丸台形である。床面はほぼ平面で壁への立ち上がりは明瞭である。北西側の床面において P-16 の壁への立ち上がりが確認される。

遺物出土状況 覆土から IV 群 c 類の口縁部 1 点、時期不明土器細片 1 点、礫 4 点、石核 1 点、床直上から時期不明土器細片が 1 点出土している。

遺物 46 は IV 群 c 類堂林式土器である。平行な細沈線で口縁部を加飾する。口縁断面は切り出し小刀状である。器面について、繩文を施した後、撫で付けた様子が窺える。

時期 P-16 崩落後に構築されていること、出土遺物から繩文時代後期後葉堂林式の時期と考えられる。

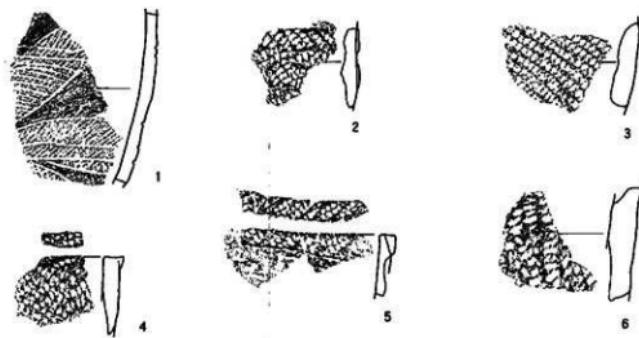


- H-12 土層剖面
- 1 黒 色 土 (EB, En-L)に留まつたE+Pを被覆疊かむ
 - 2 暗 黑 色 土 (EB>En-L, EBにEn-Lを被覆疊かむ)
 - 3 黄 黑 色 土 (En-P>EB, グライセラしたEn-LにEBを多少含む。草根の根糸が入り込む)
 - 4 暗 黑 色 土 (EB>En-P, EBにグライセラしたEn-Lを被覆疊かむ。しまり悪い)
 - 5 黄 黑 色 土 (EB>En-L, EBにグライセラしたEn-Lを被覆疊かむ。根糸が根糸をしあわせたものが入り込む)
 - 7 黑 色 土 (EB>En-L, EBにグライセラしたEn-Lを被覆疊かむ。しまりなし)

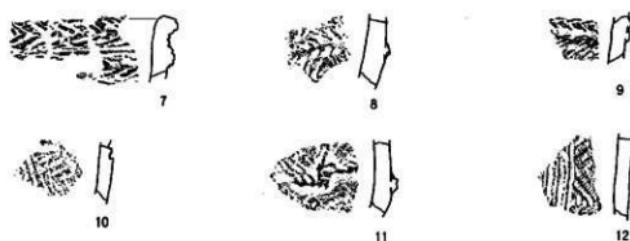
図VI-11 H-12

2 住居跡

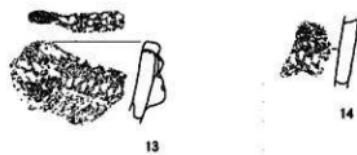
H - 3



H - 4



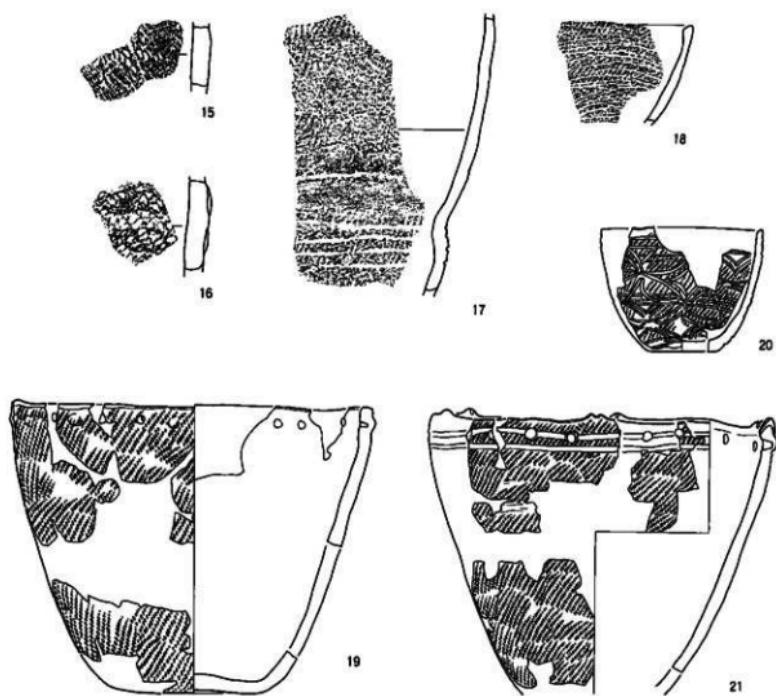
H - 5



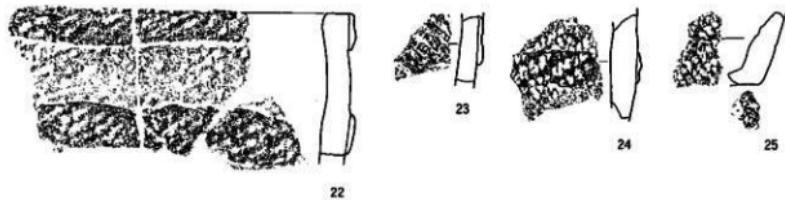
遺物 (S=1/3)

図 VI-12 住居跡の土器(1)

H-6



H-7

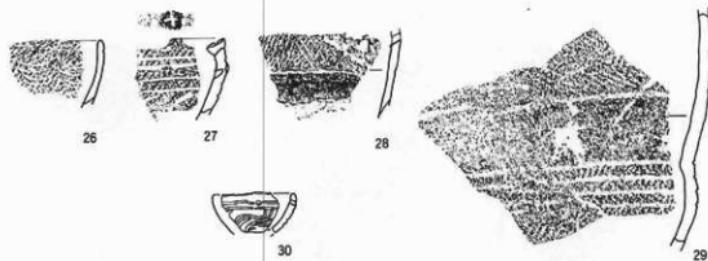


図VI-13 住居跡の土器(2)

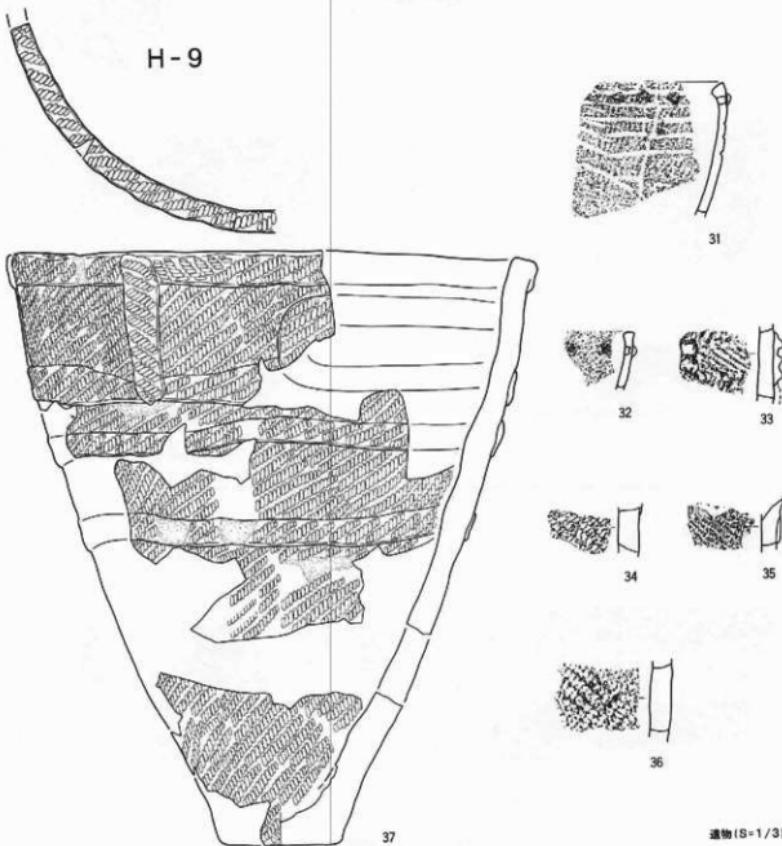
遺物(S=1/3)

2 住居跡

H-8



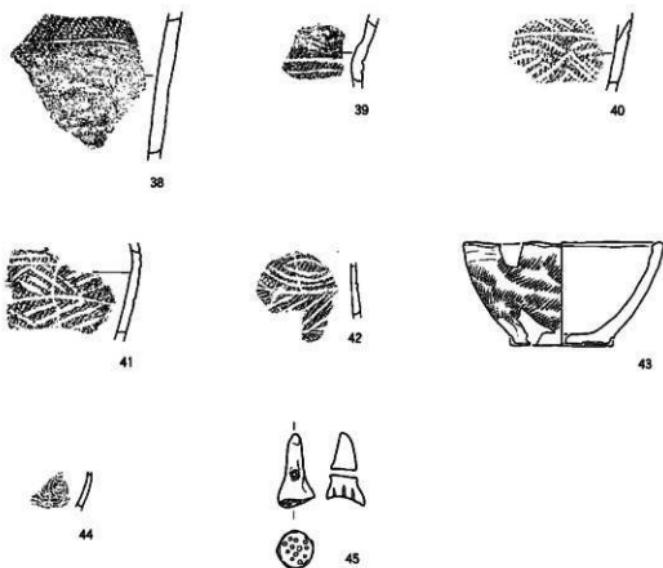
H-9



遺物(S=1/3)

図VI-14 住居跡の土器(3)

H-11



H-12

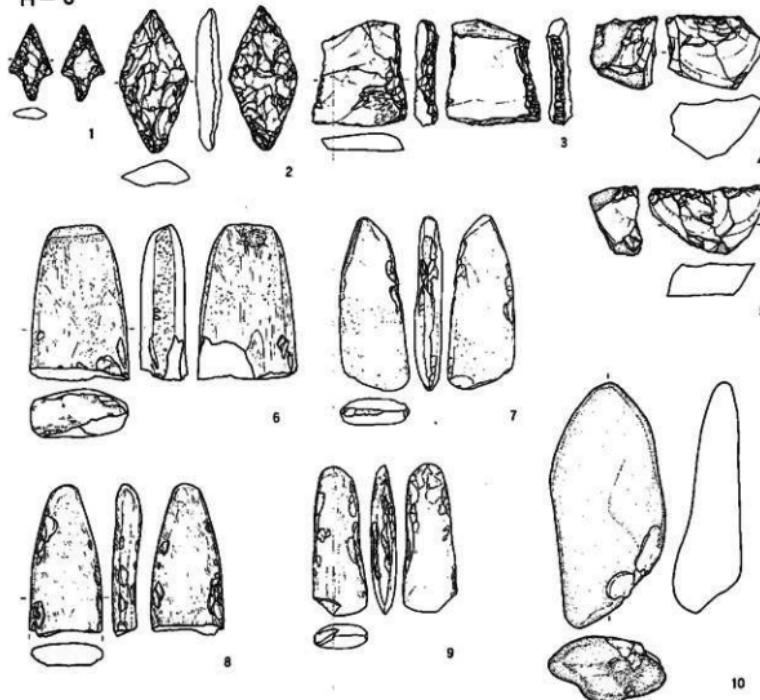


遺物(S=1/3)

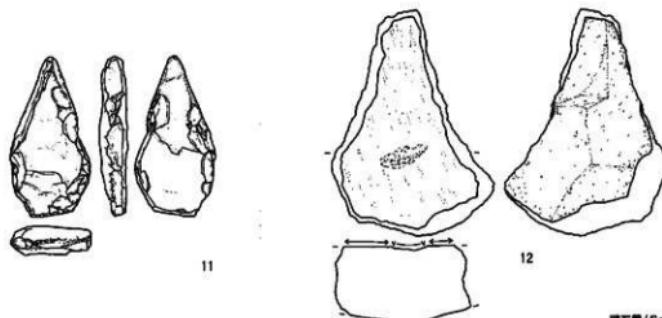
図VI-15 住居跡の土器(4)

2 住居跡

H - 6



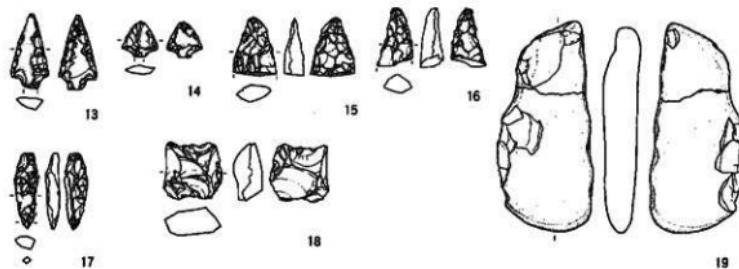
H - 7



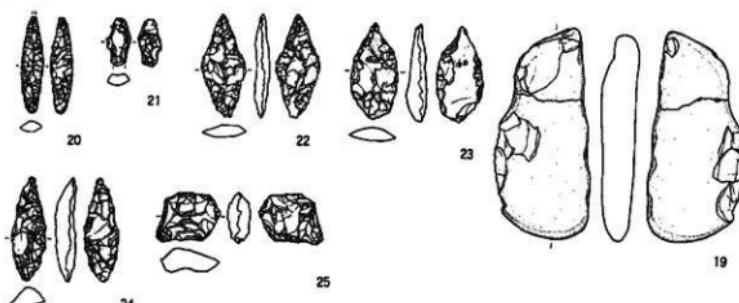
縁石器 (S=1/3)
剥片石器 (S=1/2)

図VI-16 住居跡の石器(1)

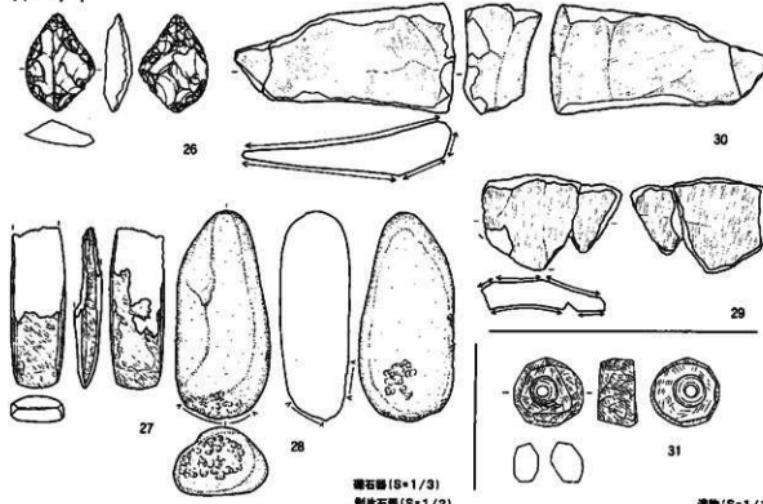
H-8



H-9



H-11

磨石器 (S=1/3)
剥片石器 (S=1/2)

遺物 (S=1/1)

図VI-17 住居跡の石器(2)

3 土壌

3 土壌

P-1 (図VI-18・33・35、表VI-1・6、図版VI-13・19)

位置 B.62 a 長軸方向 N-73°-W

規模 (0.92) / 0.80 × (0.75) / 0.66 × (0.09) m

調査 上面は耕作によって削平されていたので、平面形は En-L で確認した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 覆土は1層で構成されている。しまりがなく、En-L・En-P がブロックで混入していないことから流入したものと考えられる。

形態 平面形は橢円形、壇底は平坦で、壁は内彎する。

遺物出土状況 遺物はすべて土器で1層からの出土である。萩ヶ岡1式24点、萩ヶ岡2式6点である。

遺物 35-1は結束第1種 (LR・RL) 羽状繩文→貼付帯・半截竹管押し引き文・長めの半截竹管刺突、萩ヶ岡2式の新しいもの。波状口縁の波頂部である。P-19そしてD.61d・F.63d・H.61d・G.60cから同一個体が出土している。およそ30m離れての接合である。波頂部から垂下する隆帶が剥落した痕跡がある。内面は丹念に磨き調整を施す。焼成は良好であり、胎土はよく締まる。33-1は突起→結束第1種 (LR・RL) 羽状繩文→口縁部横位貼付帯・縦位貼付帯→口縁部横位貼付帯に繩文・親指の爪による連続刺突→縦位貼付帯に刺突→突起に沈線文、萩ヶ岡1式。結束第1種 (LR・RL) 羽状繩文を地文として施し、ある程度乾燥した後に粘土紐を貼り付ける。

時期 萩ヶ岡1式の大型破片、萩ヶ岡2式が出土していることから繩文時代中期前半と考える。

(鈴木)

P-4 (図VI-18、表VI-1・6)

位置 H.63 d 長軸方向 N-34°-E

規模 0.76/0.48 × 0.58/0.46 × 0.36 m

調査 I B 上面に Ta-a のたまたま凹みを検出した。I B の遺構の可能性があるものとして掘り下げたところ、土壌の周囲から統繩文土器が出土した。そこで凹みの様子から平面プランを推定して半割を行った。土層観察をした結果、Ta-a のたまたま凹みは風倒木痕であることが判った。しかしその下に II B の遺構があることがわかった。遺構は II B 中位より掘り込まれている。そこで完掘を行った。形態と覆土の状況から墓の可能性がある。

覆土 覆土は埋め戻しを示しており、しまりがある。

形態 不正な円形を基調とした平面プランであり壇底部から外側へ開き気味に立ち上がる。

遺物出土状況 遺物の出土はなかった。

時期 時期不明であるが、掘り込み面のレベルから繩文時代後期の可能性がある。

P-6 (図VI-18、図版VI-13)

位置 E.63 b, E.63 c 長軸方向 N-79°-W

規模 0.68/0.4 × 0.66/0.38 × 0.27 m

調査 II B から En-L への漸移層を II B 下とする。包含層を II B 下まで掘り下げたところ、円形の黒色土落ち込みを検出した。半割を行った結果、壁面と底面がしっかりしており遺構と判断した。掘り込み面は検出面より上である。

覆土 単層である。覆土はパミス混じりの埋め戻し土であり、よくしまる。

形態 土壌は平面プランについてはほぼ円形であり、形状としてはすり鉢形である。

遺物出土状況 遺物の出土はなかった。

時期 時期不明であるが、掘り込み面のレベルから縄文時代中期の可能性がある。 (大泰司)

P-7 (図VI-18・3、表VI-1・6、図版VI-13・19)

位置 E 63 d 長軸方向 N-86°-W

規模 (0.55) / 0.21 × (0.49) / 0.18 × (0.19) m

調査 平面形は En-L で確認した。長軸方向にセクションを設定して半剖した。

覆土 覆土は I B 層で構成されている。En-L・En-P がブロックで混入していないことから流入したものと考えられる。

形態 平面形は円形、壇底は平坦で、壁はやや内彎する。

遺物出土状況 単層の覆土中からⅢ群 a 類土器が1点、礫が1点出土した。

遺物 35-2 は結束第1種羽状縄文、Ⅲ群 a 類。全体に摩耗している。

時期 Ⅲ群破片が出土していることから縄文時代中期である。 (鈴木)

P-10 (図VI-18・35、表VI-1・6、図版VI-13・19)

位置 H 60 d 長軸方向 N-67°-W

規模 1.47 / 1.16 × 1.13 / 0.89 × 0.28 m

調査 II B 上面まで掘り下げたところ、黒色土の入り込みを確認した。遺構の可能性があると判断し、構造側を半剖し、土層を観察した。構築面は検出面とほぼ同じである。完掘し、形状を観察したところ、覆土の状況から土壤を掘ったまま、放置された穴の可能性がある。

覆土 土壤底部直上に黒色土の堆積(覆土13)を確認した。土壤埋没時の流入である。その上には、さらに土砂の流入による堆積を示す層が続く。

形態 平面プランは不整な橢円形である。土壤床面は比較的平坦である。壁面もしっかりしている。

遺物出土状況 覆土中からⅢ群土器が7点、Ⅲ群 a 類土器が1点、Ⅲ群 b 3 類土器が1点出土した。土壤底部の土層、覆土13層からの出土である。

土器 35-3 はⅢ群 b 3 類、中期後葉の土器である。口唇部および器内面は磨き調整が著しく、口唇部は細かい磨き調整によって平坦に面をとる。器壁は薄く、よく締まる。粒径1 mm の長石、石英が混和材として目立つ。登別市千歳市6 遺跡などから出土している短刻沈線文土器に器壁が似る。

時期 土壤底部の土層、覆土13層からのⅢ群 b 3 類土器より、縄文時代中期後葉の遺物である。

P-13 (図VI-18・35、表VI-1・6、図版VI-14・19)

位置 C 61 b 長軸方向 N-30°-E

規模 0.64 / 0.28 × 0.54 / 0.2 × 0.18 m

調査 包含層を En-L まで掘り下げたところ、円形の黒色土入り込みを検出した。遺構の可能性があると判断し、半剖を行った。人為的な穴と判断、完掘した。掘り込み面は検出面より上である。

覆土 覆土はバミス混じりの埋め戻し土であり、よくしまる。

形態 土壌は平面プランについてはほぼ円形であり、形状はすり鉢形である。

遺物出土状況 最上層である覆土1層の上部からⅢ群 a 類土器が1点出土し、それを図示した。

土器 35-4 は結束第1種羽状縄文を持つ胴部破片である。器外面は摩耗が著しい。内面にはよく煤が付着し、調整として縦方向の研磨が顕著である。

時期 検出レベルと、覆土中からのⅢ群 a 類土器より、縄文時代中期前半と考える。 (大泰司)

P-15 (図VI-19・35、表VI-1・6、図版VI-14・19)

位置 C 57 c, C 58 b, D 57 d, D 58 a 長軸方向 N-82°-W

3 土壌

規模 $(1.59) / 0.59 \times (1.46) / 0.59 \times (0.31)$ m

調査 平面形は En-L で確認した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 2層は H-6 の掘り揚げ土で構成されている。3層は En-L・En-P がブロックで混入していないことから流入したものと考えられる。

形態 平面形は円形、壇底は皿状で、壁は内彎する。

遺物出土状況 遺物はほとんど土器、壇底直上からⅢ群 a 類土器の破片が1点出土している以外は2層からの出土である。

遺物 35-5 は結束第1種 (RL) 羽状縞文を地文として持つ。横位貼付帯には継位丸軸絡条体による刺突を連続して施す。Ⅲ群 a 類土器であり、継位丸軸絡条体を刺突原体として用いる事から円筒上層 a 式併行の可能性を示す。

時期 壇底からのⅢ群 a 類土器から、中期前半の土壌である。

(鈴木)

P-16 (図VI-19・33、表VI-1・6、図版VI-14・19)

位置 F 57 ab 長軸方向 N-16°-W

規模 $(1.32) / 1.08 \times (1.28) / 1.01 \times (0.36)$

調査 II B 層除去後、En-L 上面において黒色土の落ち込みとし確認された。低湿部に向かう斜面の肩に位置するため西側の上場は確認できなかった。土壤埋没後 H-12 が構築されたため南東側の壁面は搅乱されていた。

覆土 覆土 6・7 は土壤埋没時に堆積したもので、他は流れ込んだものと認識される。

形態 上場は3/4が削除されているが、床面から円形と推測される。床面はやや凹凸しており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物出土状況 覆土からⅣ群 a 類土器が93点、礫が5点出土した。土器についてはすべて同一個体のⅣ群 a 類土器、余市式土器である。

遺物 図VI-33において、胴部上半(3)と底部(4)に分けて図示した。LR 繩と RL 繩を交互に施文する。口縁端部は平たく面を取り、LR 繩文を施す。器内面はよく磨く。器壁には粒径0.2~0.5cmの長石小砂粒をよく含む。3、4は同一個体である。実測図について4の地文原体が単節縞文のように表現されているが、3と同じ地文を持つ個体が上から撫で付けられたものである。

時期 出土遺物から縞文時代後期前葉余市式の時期と考えられる。

(吉田)

P-18 (図VI-19・33・35、表VI-1・6、図版VI-15・20)

位置 H 57 a、H 57 b 長軸方向 N-19°-E

規模 $2.34 / 2.0 \times 1.78 / 1.4 \times 0.32$ m

調査 一般道路南23号を横断工事による振替前の前、①地区の調査は道路北側までの腰開であった。道路の北の際、H 57 a グリットの包蔵層をII B 中位まで掘り下げた時、黒色土の入り込みを観察した。黒色土入り込みは道路の下側に入り込んでいた。そこで道路際で土層を観察することとして、黒色土部分を掘り下げた。壇底部からは残存率の高い土器底部を検出した。土壤であると判断した。

道路を切り替え後、道路上の調査を行った。遺構を完掘したところ、壇底部に遺物が集中していた。覆土の状況から一括廃棄の穴、あるいは墓の可能性がある。

覆土 土層は土壤の両側について(覆土3・4・5・7)は崩落しているものの、埋め戻しの土層(覆土1)を示していた。壇底部にうすく暗褐色土層が入り込む(覆土2)。

形態 不正な橢円形の平面プランを確認した。壇底部はほぼ平坦である。

遺物出土状況 覆土1層からI群土器1点、III群土器2点、III群 a 類土器1点、IV群土器1点、IV

群 b 頸土器 4 点、V 群土器 1 点、不明の土器片 1 点が出土している。たたき石 1 点、礫 1 点、覆土 2 層から礫が 4 点出土している。覆土 3 層から III 群土器 1 点、IV 群土器 1 点床面直上から IV 群 b 頸土器が 1 点出土している。そのうち復元個体 1 点（図 VI-33-2）、土器片 4 点を図示した（図 VI-35-6～8）。いずれも覆土 1 層からの出土である。

土器 33-2 は IV 群 b 頸土器、手稻式である。深鉢の肩下半部である。器の内外面には丹念に横方向の磨きを施す。器壁には粒径 0.2～0.5cm の黒曜石細片、長石小粒をよく含む。底部には削って調整した痕跡がある。被熱が甚だしい。35-8 と同一個体である可能性が高い。

35-6 は I 群 b 4 頸土器である。東釧路 IV 式であり横位の絶縁条付压痕により加飾する。器内面口縁端部にも加飾する。粘土で凸形をとった結果、径 1mm の紐を軸として同様な紐をコイル状に巻き付けたものが原体である。今回の報告において、I 群土器はこの 1 点のみである。7 は III 群 a 頸台形波頂部の破片である。萩ヶ岡 2 式土器である。立体的な波頂部であり、横断面を三角形に形成する。半截竹管により器面を飾る。8 は特に覆土 1 層の上部からの出土である。IV 群 b 頸、手稻式土器である。平行沈線を基調とした文様部分である。器壁は薄くよく締まる。器内面は丁寧に磨き調整を施す。

時期 覆土中の遺物について、土壤底部の手稻式土器から、縄文時代後期中葉の遺構である。

(大泰司)

P-19 (図 VI-20・35、表 VI-1・6、図版 VI-15・20)

位置 G 60 a、G 60 d 長軸方向 N-26°-E

規模 1.85/1.65×1.34/1.14×0.1m

調査 包含層を En-L まで掘り下げたところ橈円形の黒色土入り込みを検出した。遺構の可能性があると判断し、南半分を掘り下げた。遺構構築面は検出面よりやや上である。完掘をしたところ底面直上によく遺物が分布することがわかった。埋め戻した土壤である。

覆土 覆土は埋め戻し土である。単層であり、掘り上げ土を含む黒色土である。

形態 遺構の平面プランは橈円形である。土壤底部は比較的平坦であるが、床面をつくりだしてはいない。壁面は比較的しっかりしている。

遺物出土状況 遺物はほとんどが底面直上からの出土である。III 群土器が 47 点、III 群 a 頸土器が 5 点、分類不明の土器が 4 点出土している。覆土 1 より礫が 1 点出土している。そのうち 4 点を図示した (35-9～12)。4 点いずれも覆土 1 層からの出土であり、III 群 a 頸土器である。

土器 9 は口縁部の肥厚帯を含めて、逆「く」の字に短沈線を施す。隆帯を貼付した後、隆帯間に沈線を充填し、その後短沈線を施す。10 は P-1 出土遺物 (図 VI-35-1) と同一個体である。11 は口唇部分まで繩文を施した後、薄い隆帯を貼り付けて加飾する。へらの先端によって連続して斜位の刺突を施す。12 は G 60 d、G 60 c グリッド出土遺物と接合する。焼成は良好であり、器壁はよく締まる。口縁部に 2 条の隆帯を貼り付ける点、隆帯上を半截竹管の押し引きを施す点、胎土から 10 と同一時期の個体という可能性がある。10・12 の同一個体は F-33、P-1、P-19、H-4 からそれぞれ出土している。萩ヶ岡 2 式土器の新しい個体である。

時期 覆土中の遺物は III 群 a 頸土器が主体である。縄文時代中期前半の土壤であると考える。さらに、F-33、P-1、P-19、H-4 がほぼ同一時期であるならば中期前半の終末に位置づけできる。

(大泰司)

P-20 (図 VI-20、表 VI-6、図版 VI-15)

位置 E 59 d 長軸方向 N-75°-W

規模 (1.50)/0.80×(1.26)/0.63×(0.09)m

調査 平面形は En-L で確認した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 覆土は 1 層で構成されている。1 層は En-L・En-P がブロックで混入していないことから流入したものと考えられる。

形態 平面形は円形、墳底は皿状で、壁は内彎すると思われる。

遺物出土状況 遺物は礫・礫片・フレイク・チップで 1 層からの出土である。

時期 検出状況を考慮すると縄文時代後期後葉の土壤である。P-22 に近い時期と思われる。

(鈴木)

P-21 (図 VI-20・33・35・37、表 VI-1・2・6、図版 VI-16・21)

位置 E 59 a **長軸方向** 平面プランの形状に方向性なし

規模 (2.19) / 1.49 × (1.19) / 0.45 × (0.34) m

調査 平面形は En-L 層で確認した。南北方向にセクションを設定して半割した。P-21 との先後関係は確認面が下がり過ぎていたのでつかめなかった。

覆土 覆土は 3 つの層で構成されている。1 層は En-L・En-P がブロックで混入していないことから流入したものと考えられる。

形態 平面形は円形、墳底は皿状で、壁は内彎すると思われる。

遺物出土状況 覆土からは礫・礫片・フレイク・チップが出土し、墳底からは礫・礫片・フレイク・チップが出土している。IV 群 a 類はすべて余市式である。

遺物 33-5 は突起→LR 縄文→横位沈線文→円形沈線文→横位沈線文間に鋸歯状沈線文→沈線に向かって刺突、突起に円形刺突→ナデ、堂林式。口縁部は肥厚し端面は内傾する。内面に炭化物。

H-8 覆土 6 層に同一個体がある。35-13 は LR 縄文→刺突、堂林式の新しいもの。口縁部は肥厚せず端面は平坦。35-14 は底部破片である。器種は注口土器である。横走する沈線が器面を飾る。

37-6 はスタンプ型土製品。柄部は貫通孔で欠失、スタンプ面について、縁辺と中央の凹み部に長方形型の刺突を施す。縁辺の刺突はスタンプ面の中心から放射状に施す。凹み部にはアトランダムに刺突を施す。37-1 は横長削片を素材とし、腹面に急角度の調整がはいる。刃部の潰れ、稜の摩滅が著しい。

時期 H-6 に切られ、H-9 を切っていることから、覆土の遺物出土状況より縄文時代後期後葉と考えられる。

(鈴木)

P-22 (図 VI-21、表 VI-1・2・6、図版 VI-16・21)

位置 D 58 d, 59 a **長軸方向** N-75°-W

規模 -/- × (1.69) / 1.43 × (0.12) m

調査 平面形は漸移層で確認した。南北方向にセクションを設定して半割した。P-22 との先後関係は確認面が下がり過ぎていたのでつかめなかった。

覆土 覆土は 1 層で構成されている。1~3 層は En-L・En-P がブロックで混入していないことから流入したものと考えられる。

形態 平面形は長方形に近い形、墳底は皿状で、壁は内彎すると思われる。土壙の周囲には柱穴が 8 か所あり、土壙内の北側の壁には半円形の小柱穴が 4 か所あった。これらの柱穴は土壙の付属施設と考えられ、上屋の柱の可能性がある。

遺物出土状況 覆土 1~2 層からは礫・礫片・フレイク・チップが出土し、墳底からは礫・礫片・フレイク・チップが少量出土している。IV 群 a 類はすべて余市式である。

遺物 35-15、16 は IV 群 a 類余市式である。16 は LR 縄文→別条で末端を閉じた RL 縄文が施さ

れる。37-2は石器である。両側縁の潰れが著しい。再生の可能性を示唆する。

時期 H-9に切られていること、覆土の遺物出土状況より縄文時代後期後葉と考えられる。(鈴木)
P-23 (図VI-21・34・35、表VI-1・2・6、図版VI-16・22・23)

位置 J 55 d、I 55 c **長軸方向** N-29°-E

規模 (1.36) / (1.22) × 1.58 / 1.38 × 0.52 m

調査 メインセクションを観察するために、グリッドJラインから南へ50cmを残して包含層を掘り下げていたところ黒色土の入り込みを確認した。黒色土を掘り下げる土層を確認した。するとII B中位から掘り込まれた土壤である事がわかった。覆土13、14は明らかな埋め戻し土であった。完掘を開始したところ、遺構覆土上面に落ち込み(覆土1)があり、落ち込み部分に縄文時代後期後葉の土器が多く含む遺物の集中があった。(図VI-21:A層を参照)さらに掘り下げるところ土壤中央部の、壙底部より10cm高いレベルにおいて縄文時代後期中葉、手稻式土器のまとまった廃棄を検出した。土器は同一個体である。残存率が三分の一ほどの個体が出土した(34-6)。

完掘の結果、遺構壁面と底部はしっかりと形造られていた。縄文時代後期中葉に、人体の埋葬か、あるいは大量の有機物を廃棄した後、有機物が腐蝕、凹みが生じ、そこに縄文時代後期後葉の人間が土器を含んだ廃棄物を投棄したという想定を行った。そこで土壤底部直上、覆土14を土壤サンプルとして取り上げ、脂肪酸分析を行うものとした。分析を依頼中である。

覆土 覆土13、14が遺構構築時の埋め戻し土である。いずれも青植土である。その上部には自然の流入が見られる。覆土1からまとまった遺物の出土があった。

形態 搾乱で一部消失しているが、残存部から横円形の土壤と判断できる。壙底部は平坦である。

付属遺構 覆土1上面からHF1を検出した。廃棄遺物と同時期の層位である。縄文時代後期後葉堂林式期の廃棄に伴う焼土の可能性がある。

遺物出土状況 流入である層位、覆土3、5、9層からIV群c類土器が主体となって出土している。IV群c類土器を廃棄した層位である覆土1層からはスクレイバーが2点、フレイクが3点出土している。床面直上からIV群b類、手稻式土器が出土している。

土器 そのうち8点を図示した(34-6・8、35-17~22)。

34-6はIV群b類土器、手稻式である。壙底部からの一括出土である。5単位の波頂部を持つ深鉢の口縁である。口縁部には無文帯がめぐる。器面には平行沈線を基調とした文様を施す。口縁端部は丹念に成形する。器内面は丁寧に磨く。

34-8・35-19~23は土壤上部(覆土1層およびその直上)の一括した廃棄からの出土である。土層は1層の直上、II Bからの出土である。8はIV群c類土器、堂林式である。複数の波頂部を持つ小型の深鉢である。器表面は縄文施文後、丁寧に撫で付ける。口縁断面は端部について丸みを帯びて肥厚する。19はIV群a類である。入江式と呼称される一群の土器にあたる。器面には沈線による加飾をする。水平方向に長い、長横円形、入り組み文様を配する。区画のなかは縄文が施されている。雑な磨消縄文である。内面については横方向に丁寧な撫で調整を施す。器壁は薄く、よく締まる。20はよく締まった器壁を持つ。細沈線による鋸歯状文様を持つ。21は内面はよく磨く。口縁端部は粘土紐の貼り付けを丁寧に撫で付けて肥厚部を成型する。口縁部は内側に肥厚する。波頂部は縦位の短沈線を施す。22は磨り消し縄文による文様を器面に持つ。沈線によって加飾する。23は注口土器の注口部分である。節の細かいLR縄を全面に施す。17はIV群c類の口縁部破片である。口縁部内側には屈曲するような肥厚部がめぐり、微妙に内弯する。土壤の埋め戻し土である覆土5からの出土である。18はIII群b類土器である。輪積みによる成型痕がよく残る。器面調整はかるく撫で付けた程度で

3 土壌

ある。流入による覆土 3 層からの出土である。

時期 境底部から一括出土した手稻式土器から、縄文時代後期中葉の土壌である。 (大泰司)

P-24 (図 VI-20、表 VI-6、図版 VI-17)

位置 J 58 d 長軸方向 N-25°-E

規模 (0.54) / (0.36) × 0.82 / 0.4 × 0.28 m

調査 水道管による搅乱の壁面に遺構掘り込みを確認した。その時点で搅乱の壁面を清掃、記録した後、完掘した。土壌の半分は搅乱で消滅していた。II B 上面から掘り込まれた土壌であり、腐植土によって埋められた土である。

覆土 覆土は黒色土部分 (3 層) についてよくしまる。

形態 搅乱により半分消滅している。残部から、橢円形の土壌を推定できる。

遺物出土状況 覆土中より III 群 a 類土器が 2 点、IV 群 b 類土器が 1 点が出土している。図化しなかったが軽石が 1 点出土している。

時期 遺物は流入による物である。検出状況をみた結果、層位的には縄文時代後期以降の遺構である可能性が高いといえる。 (大泰司)

P-25 (図 VI-22・35、表 VI-1・6、図版 VI-17・23)

位置 I 59 d 長軸方向 N-42°-W

規模 (1.50) / 1.36 × (1.44) / 0.72 × (0.28) m

調査 水道管による搅乱によって断面形、平面形を確認した。搅乱を東西方向のセクションに利用した。

覆土 覆土は 3 つの層で構成されている。1 ~ 3 層は En-L・En-P がブロックで混入していないことから流入したものと考えられる。

形態 平面形は円形、境底は平坦で、壁は外傾し直線的に立ち上がる。

遺物出土状況 覆土 1 層から境底まで遺物の分布は土壌の東側によっている。覆土 2 層からは中期前葉の土器が出土し、覆土 3 層からも中期前葉の土器が多量に出土している。境底からは中期の土器が出土している。中期前葉の土器は、サイベズ置式 3 点、萩ヶ岡 1 式 13 点、萩ヶ岡 2 式 2 点出土している。丸軸絞条件で連続刺突がほどこされていることから、円筒上層 a 式併行する可能性がある個体が 6 点出土している。

遺物 いずれも III 群 a 類土器であり、境底の土層、覆土 3 層からの出土である。24 は貼付帶・丸軸絞条件圧痕文→沈線、は表面が剥落した破片の表面部分である。肥厚部分には縄を軸とした絞条件を「く」の字に刺突する。刺突の原体が丸軸絞条件であることから、円筒上層 a 式併行の可能性がある。25 は底部破片である。結束第 1 種羽状縄文→ナデ、III 群 a 類土器。底部が張り出す。

時期 覆土、境底の遺物出土状況より中期前葉と考えられる。 (鈴木)

P-32 (図 VI-22・34・36、表 VI-1・7、図版 VI-17・23・24)

位置 I 64 b、J 64 a 長軸方向 N-57°-E

規模 2.72 / 2.17 × 1.51 / 0.84 × 0.64 m

調査 上下水道管による搅乱の底面に、近接する二箇所の黒色土の落ち込みを確認した。位置と形状から一つの遺構と考え、搅乱に沿って中央部にベルトを残し、両側トレンチ調査を開始した。小片の遺物が多いため覆土層ごとに取り上げながら掘り進め、底と壁を確認してから全体を掘り広げた。

覆土 覆土 4 以外はしまりのない土で、自然埋没を示す土層となっている。

形態 平面形は、側偏する長卵形を呈する。底部にはほとんど平坦面ではなく、西南側が段差を持って

深くなる。

遺物出土状況 中期の土器や小礫片が全層からほぼ満遍なく出土した。覆土上中層からは、後期の土器や石鎌、フレイク・チップが、ごく少量出土している。

土器 図34-7・36-26~30・33・34はⅢ群土器、31・32はⅣ群a類の破片である。

7はⅢ群a類土器の底部である。内面は磨き調整を施すが、成型痕がよく残る。地文は結束第1種羽状繩文である。繩文は複節である。26は口縁部破片である。口縁部に貼付けた2本の隆帯は断面三角形を呈する。逆'く'の字形に爪の先端部を刺突する。器内面には撫で付けによる調整を施す。27は偏平な細い隆帯によって器面を加飾する。隆帯上には斜位方向からの連続刺突を施す。28は波頂部から半截竹管による2本の弦線を垂下する。H-4、図Ⅳ-19-2と同一個体である。29は波状口縁の頂部である。細い粘土紐を器面に貼付け、更に半截竹管の押し引きにより隆帯および地文部分を飾る。30は口縁部端部に粘土紐を2本並べて平たく貼付ける。刻みを2本の隆帯にまたがって'く'の字形に施す。内面には丹念に磨き調整を施す。31はⅣ群a類土器である。胎土には粒径1mmの長石をよく含む。32はⅣ群a類土器である。口縁端部に肥厚帯を有する。胴部直上には段状を形成する。段状になったか所を境界としてRL繩、LR繩を交互に施し、羽状に器面を飾る。口唇部にもLR繩文を施す。肥厚帯の直下には円形刺突を施す。刺突した後、刺突原体を器面に押しつけながら、下方に向かって抜き取る。33は底部破片である。内面には炭化物が薄く付着する。底部分は丁寧に撫で付ける。34は再生土製円盤である。隆帯上に爪による刺突を持つ。結束第1種羽状繩文を地文に持つ。

時期 覆土や壙底付近の土器から、中期前葉の土壌といえる。

(三浦)

P-33 (図VI-23・36、表VI-1・7、図版VI-18・24)

位置 I 63b、J 63a

長軸方向 N-39°-W

規模 1.70/1.27×1.28/1.10×0.38m

調査 水道管による搅乱の壁面に、二つの遺構が切り合った断面が観察できた。下部の遺構に嵌まり込むようある、新しい方の土壤をP-33。これに切られた下部の古い方の土壤をP-34として調査を始めた。搅乱の両壁面をベルトで残し、両側を掘りかろうじて底と壁を確認したが、搅乱が中央部に入っているため形状がとらえにくかった。そのため北側のベルトをはずして広げ、形状把握をして調査を進めた。

覆土 覆土4・5は崩落土。自然の埋没と思われる。

形態 平面形は、不整な卵形。底面はほぼ平坦で、壁も明瞭である。

遺物出土状況 覆土や壙底付近のほぼ全層から中期（主に前葉）の土器や小礫が出土している。

土器 図VI-36-35~40はⅢ群a類土器である。35は波状口縁の下部に展開する文様をもつ破片である。括れ部分を有する器形である。隆帯上について、外径2mmの半截竹管を連続して押し引く。器壁について焼成は良好であり、胎土は緻密である。36は偏平な粘土紐をはりつける。粘土紐を留めるために隆帯の両側縁に刺突を連続する。両側縁で刺突を対応させる。37は口縁部破片である。隆帯上には爪による刺突を有する。指頭まで深く刺突を施す。器内面には丹念に磨き調整を施す。38は口縁部破片である。口縁部には肥厚帯を有する。繩を軸とした絹条体によって肥厚帯および隆帯に刺突を施す。刺突は水平方向の隆帯に対して斜位に刺突する。39は偏平な隆帯に爪の先端を用いて連続刺突を施す。隆帯の一側縁を微隆起状に浮き立たせる。器壁は焼成が良好であり、よく締まる。内面について横方向に丹念な磨き調整を施す。40は胴部破片である。結束第1種羽状繩文を施す。胎土は緻密でよくしまる。内面に炭化物がよく付着する。

時期 覆土や壙底付近の土器から、中期前葉と考えられる。

(三浦)

P-34 (図VI-23、図版VI-18)

位置 I 62 c、I 63 b、J 62 d、J 63 a : 長軸方向 N - 3° - W

規模 1.91/1.52 × (1.32) / (0.96) × 0.43m

調査 上記のごとく新しい方の P-33を先に調査した。その終了後、断面の残る中央部から両側に掘り進んで底面と壁を確認していった。

覆土 自然埋没と思われるが、覆土は P-33にはほとんどを壊され不明な点が多い。

形態 P-33に削りとられてはいるものの、卵形を呈する平面形や、ほぼ平坦な底面は確認できる。壁も明瞭である。

遺物出土状況 P-33に壊されているせいか、遺物は出土していない。

時期 P-33に切られれていることから中期前葉以前と考えられるが、周囲からはこれと対応する土器の出土はない。中期前葉で P-33に先行するものと考えるのが、妥当であろう。 (三浦)

P-35 (図VI-23・36・37、表VI-1・2+7、図版VI-18・23・24)

位置 I 61 cd 長軸方向 N - 65° - W

規模 0.56/0.17 × 0.40/0.11 × 0.36m

調査 X-2 の墓壙調査中に、墓壙東壁と壙底に黒色土の落ち込みを確認した。X-2 の調査終了後、墓壙壁面に沿って断面を残し半截したところ、II 黒層の土壙を検出した。

覆土 En の入り方がまばらで、埋め戻したように見受けられる。

形態 平面形は、頭のつぶれた卵形。断面や全体形状は、すり鉢形で平坦面はない。

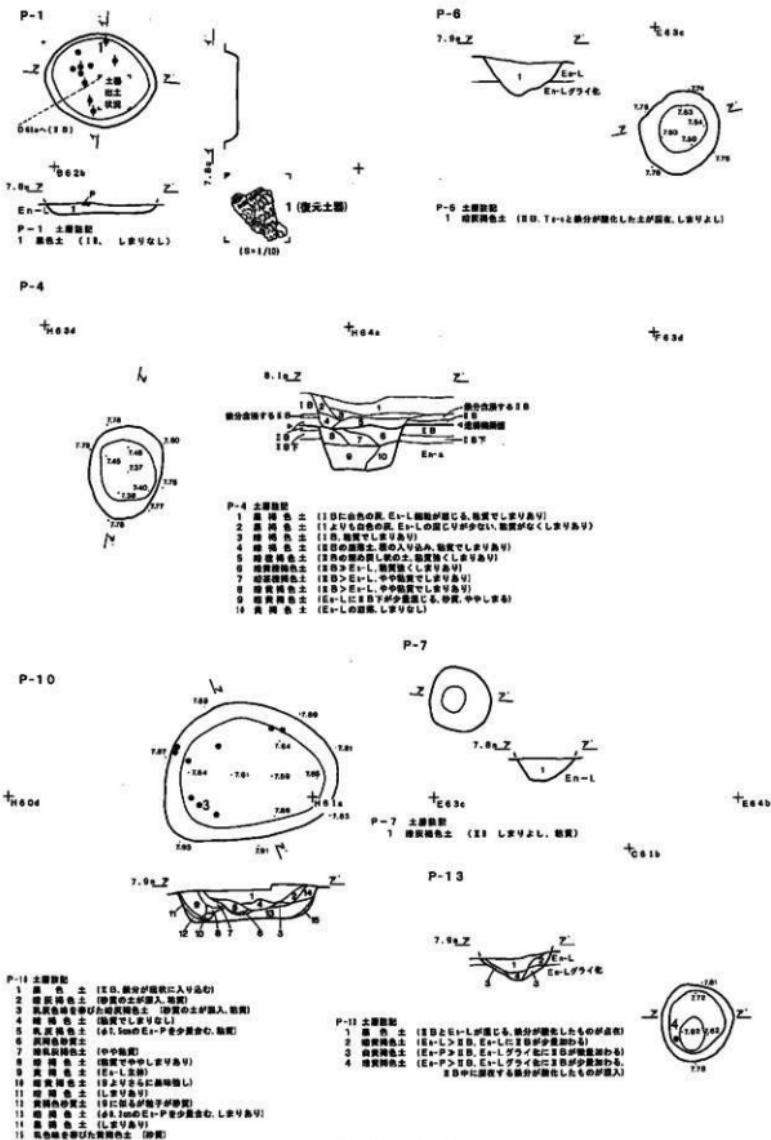
遺物出土状況 覆土 1 に埋め戻した上に置かれたように石斧が出土している。土器は覆土 4 の後期前葉のもの 1 点である。

土器 36-41 は IV 群 a 類、余市式土器の口縁部破片である。口唇部、口縁部肥厚帯、地文のいずれも同じ RL 繩で施文する。それも同じ RL 繩で施文する。

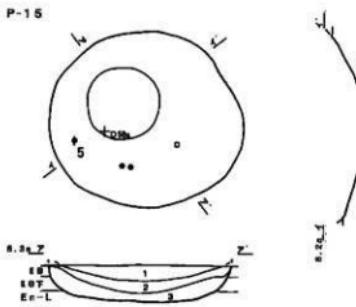
石器 37-5 は片岩製の石斧で、両側縁や頭部・刃部にも打撃による剝離がみられる。

時期 後期前葉の遺構と思われる。

(三浦)



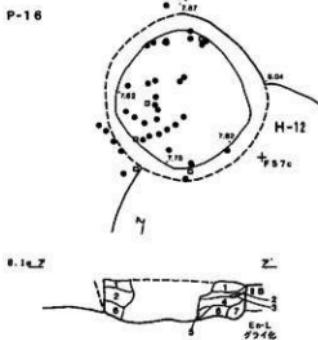
図V-18 土壌(1)



P = 1.5 °C

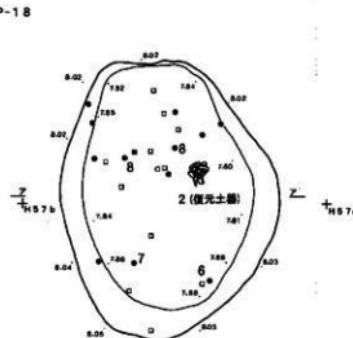
- 1 黑色土 (ミナミ)
 2 暗黃褐色土 (オクシゲン色の少量化)
 3 暗褐褐色土 (しまりよし)

新規物は全て2周である



Page 11

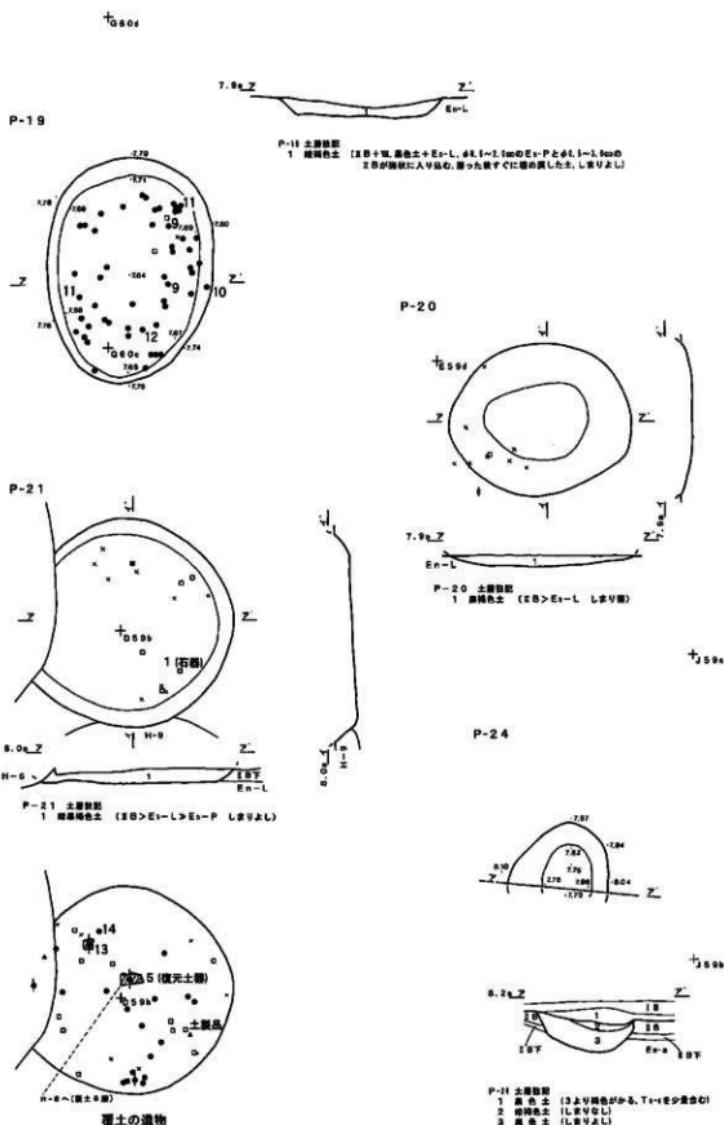
- 1 長 色 土 \rightarrow B₂ + I₂ の系のE-I₂を供給盆地に
 - 2 短 時間色 土 \rightarrow B₂ + E-L₂、E-L₂ によりE-L₂を生成する
 - 3 短 色 土
 - 4 長 時間色 土 \rightarrow B₂ + E-L₂ によりE-L₂を生成する
 - 5 長 時間色 土 \rightarrow B₂ + E-L₂、E-L₂ によりE-L₂を生成する
 - 6 短 時間色 土 \rightarrow B₂ + E-L₂、E-L₂ によりE-L₂を生成する
 - 7 短 時間色 土



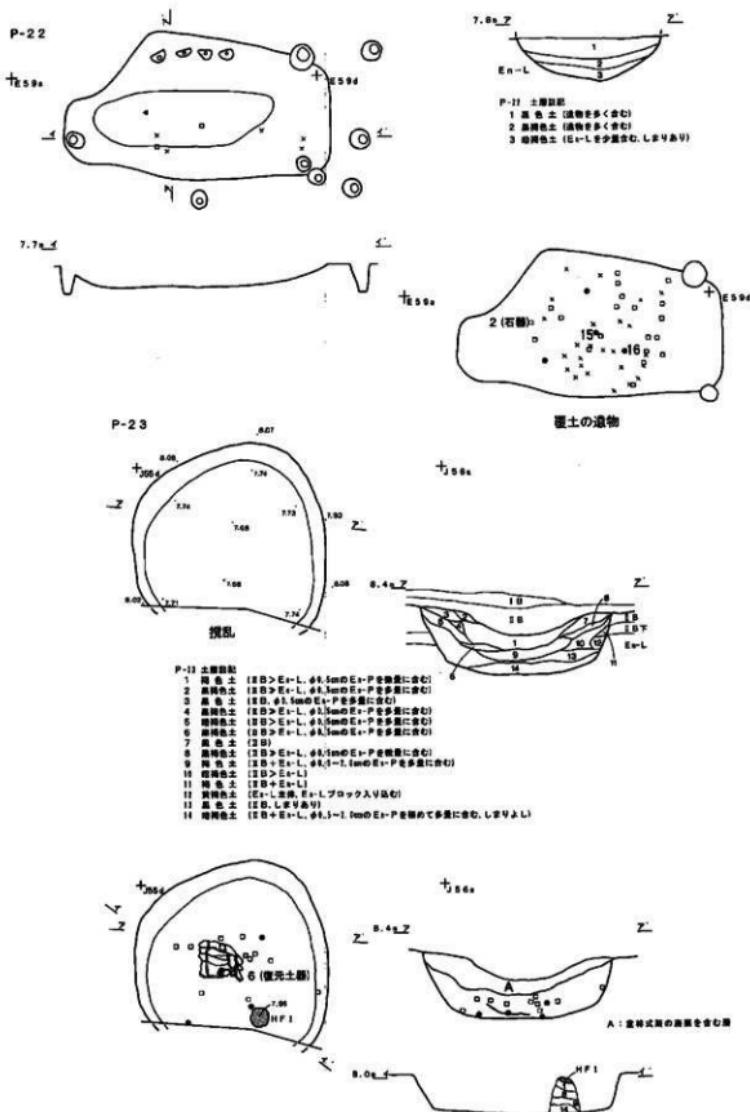
P-18 土壌組成
1 黒色土 (しまりあり)
2 明褐色土 (E日+E _s -L, シルト5~7.2mmのE _s -Pを含む)
3 暗褐色土 (E層を主張. やししまりあり)
4 鮮褐色土 (E日+E _s -L, しまりなし)
5 深色土 (E日+E _s -L, しまりなし)
6 淡褐色土 (E層による淡色)
7 灰褐色土 (E日+E _s -L, しまりなし)



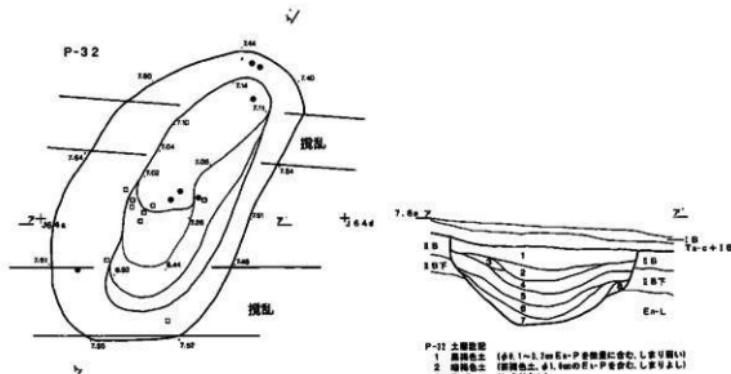
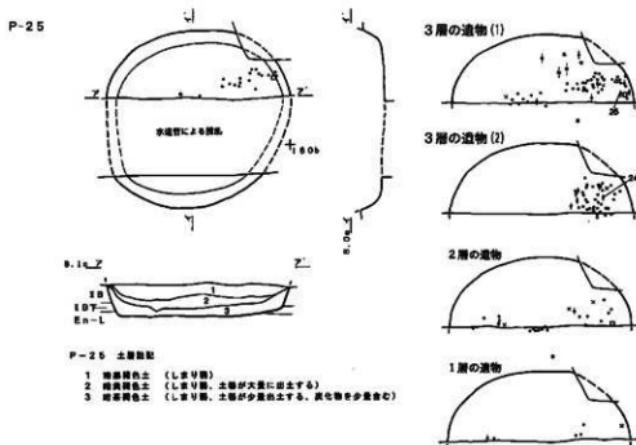
図VI-19 土壌(2)



卷之三



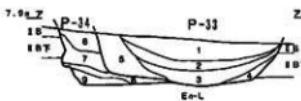
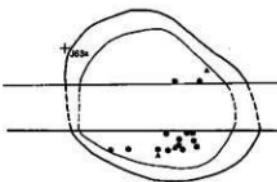
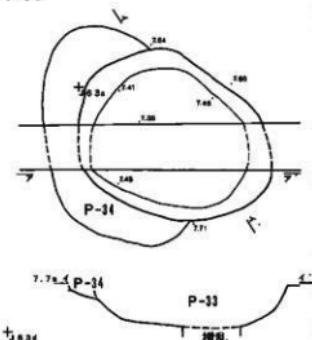
図VI-21 土壌(4)



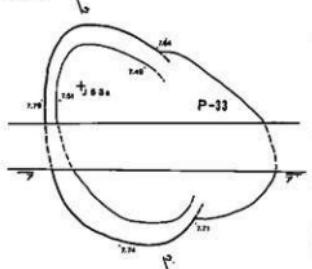
図VI-22 土壌(5)

3 土壌

P-33



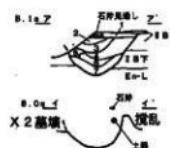
P-34



P-35



7.62m



P-35 土壌断面 (T=+c を根柢に含む)

- 1 黒色土 (しまり悪い)
- 2 黄褐色土 (しまり悪い)
- 3 黄褐色土 (しまり悪い)
- 4 黄褐色土 (しまり悪い)
- 5 黄褐色土 (しまり悪い, よりやか模るい)
- 6 黄褐色土 (しまり悪い)
- 7 黄褐色土 (しまり悪い, よりやか模るい)
- 8 黄褐色土 (しまり悪い, E=Lでセメント化)
- 9 黄褐色土 (しまり悪い, E=Lでセメント化)

図VI-23 土壌(6)

4 焼土（図VI-24・25・37、表VI-1・2・7、図版VI-25・26）

II B 包含層を掘り下げた際、焼土を36基検出した。台地の南北は斜面であり、黒色土の堆積厚が一定ではないため、検出面のレベルそのままの高低を比較する新旧関係の検討是不可能であった。また、焼土について、埋没後の攪拌や浸食による流出が作用するため、焚かれた面そのものは不明瞭である。そこで大まかな傾向として「II B 下層の上位、直上面から検出した焼土」、そして「II B 層の上、中位から検出した焼土」の2種類に分類した。

その作業を踏まえた上で、遺物について比較検討した。対象としたのは、焼土そのものから出土した遺物、焼土それぞれについて付近の包含層から出土した遺物である。さらには、焼土周辺に分布する遺構の時期を確認した。すると、例外として低湿地から検出したF-3~6を考慮せねばならなくなつた。いずれもII B 層中位から検出した焼土であるが、周囲に伴う遺物は縄文時代中期の遺物であった。現在低湿部となつた場所の堆積中から検出した遺構であり、他のII B 層中位検出焼土と共に伴う遺物の状況が異なる。むしろ共伴する土器について、II B 下層の上位検出の焼土群と内容が同じである。包含層出土の分類別土器分布とこれらの縄文時代焼土の位置を照らし合わせた。そして、焼土の時期を推定した。具体的な例として、F-67は後期後葉IV群c類、F-380は後期中葉IV群b類、F-40、50、378、83、381は中期中葉III群b 3類の時期に伴う可能性がある。

その結果、焼土群とその時期を想定した。II B 下層の上位、あるいはその直上に検出面がある焼土は縄文時代中期以降、後期半ば以前の焼土群であり、II B の上、中位面に検出面があったものは縄文時代後期半ばより後、晚期以前の焼土群である。

(大泰司)

(1) II B 下層の上位、直上面から検出した焼土（図VI-24・37、表VI-1・2・7、図版VI-25・26）

[F-3・、F-5・、F-6・、F-4・、F-18・、F-19・、F-33・、F-40・、F-46・、F-32・、F-47・、F-48・、F-50・、F-51・、F-53・、F-58・、F-59・、F-66・、F-70・、F-72・、F-73・、F-74・、F-83・、F-380・、F-381]

全部で25基検出した。よく焼けているものとしてF-6、18、33、40、46、32、48、50、53、66、70、72、74、380、381の16基がある。F-46は動いた焼土である。焼土周辺の包含層から出土した土器はIII群b 1類を始めとしてIII群土器が多い。焼土から直接出土した遺物についてはF-18からIII群b 1類土器が1点出土した。F-48についてIII群土器が1点出土した。F-66からIII群土器が1点出土した。F-68からはIII群土器が1点と時期不明の土器が1点出土した。F-74からはフレイクが1点、土器が3点出土した。F-79からはIII群b 1類土器が1点出土した。また、F-53に、黒曜石のフレイク集中が伴っていた。

ある程度の焼土の集中が見られるものとしてA群[F-32、40、47、48、50]とB群[F-58、70、72、73、74]がある。どちらもほぼ平坦な場所に焼土がかたまり、確実に中期とわかる遺構は付近はない。ただし中期後半に構築された可能性があるTPについては例外である。

37-57はF-18の遺物である。焼けているために、器面の剥落が激しい。口縁部文様帯について、隆帯上に連続刻みを施した区画文を持つ。区画内には短沈線による'く'の字形文様を充填する。内面には削るような磨き調整を施す。波状口縁の波頂部中央に把手を持つ個体を推定できる。

(2) II B 層の上、中位から検出した焼土（図VI-25・37、表VI-1・2・7、図版VI-25・26）
[F-2・、F-16・、F-22・、F-31・、F-36・、F-64・、F-67・、F-81・、F-85・、F-378・、F-379]

全てで10基検出した。F-22、64、379についてよく焼ける。焼土周辺から縄文時代後期から晚期

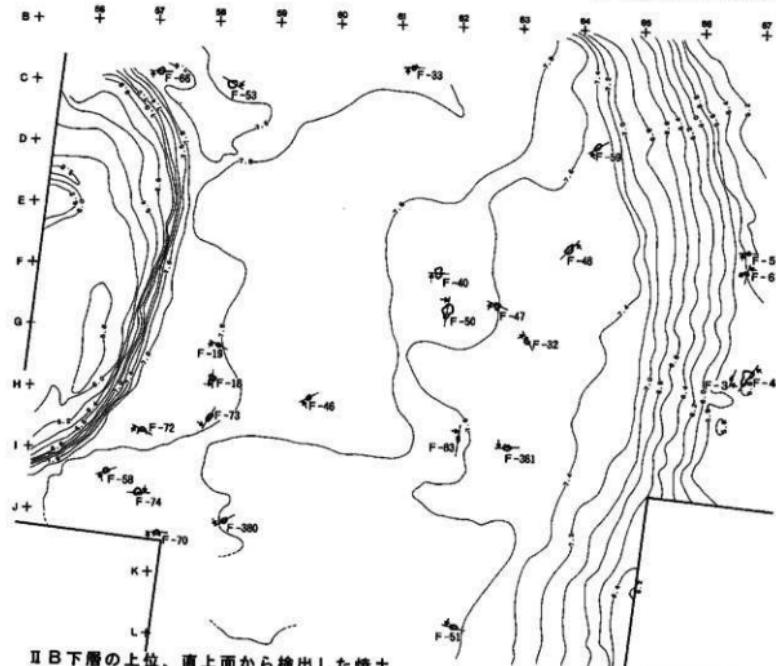
にかけての土器が出土している。また、それぞれの焼土近辺に縄文時代後期以降、晩期以前の遺構がある。特定の土器について分布の集中と焼土の位置が合致するものがあった。F-22、64、67、16、379である。いずれの焼土についても対応する土器はすべて堂林式である。しかしそれが即、焼土の時期につながるかどうかははっきりしない。他の焼土について共伴する土器の型式名が具体的にわかるものはない。しかし晩期も含めた、余市式以降の縄文土器が分布している。焼土そのものから、遺物は焼土中から出土しなかった。しかし同一検出面から出土した為、焼土に伴うと判断した遺物がある。

F-36とF-379の間に連する遺物を図示した。

37-58はF-36と同一検出面から出土した注口土器の胴部破片である。球形の胴部に縄文を充填した文様を施す。59はE-62cから出土した58との同一個体である。

F-379に連する遺物は34-9そして37-60-63である。9はIV群c類土器、堂林式である。口縁端部は撫で付けて調整する。豆粒状の突起が複数巡る。胴部には屈曲部分がある。屈曲部分には横方向に沈線が巡る。37-60は小型の浅鉢と推定できる破片である。器面はLR地文に細い沈線で明瞭な施文を施す。内面について丁寧に撫で付けて調整を施す。口縁端部には面をとる。口縁部付近に直径2mmの穿孔がある。61-63は注口土器の破片である。3点とも同一個体である。磨り消し縄文により、器面を飾る。無文部分は丹念に研磨されている。それに対して、器内面は指による成形痕がよく残る。注口部分は全面に縄文が施される。

(大泰司)



II B 下層の上位、直上面から検出した焼土

S=1/150 (等高線は基準面)

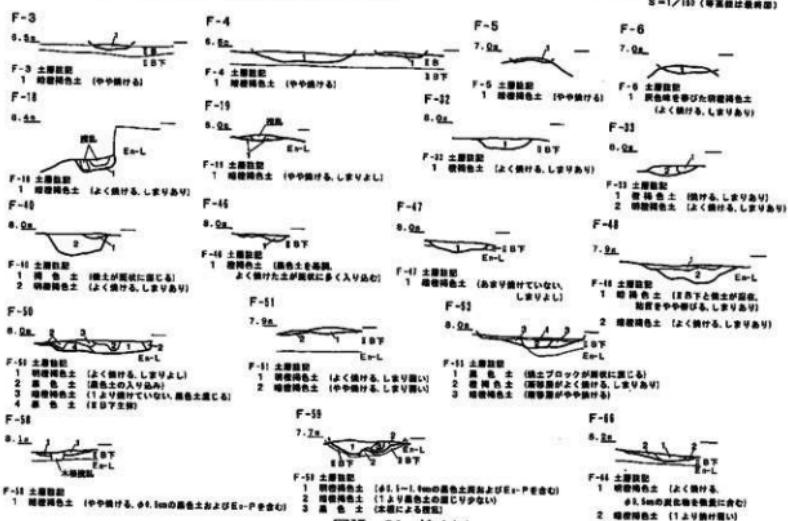
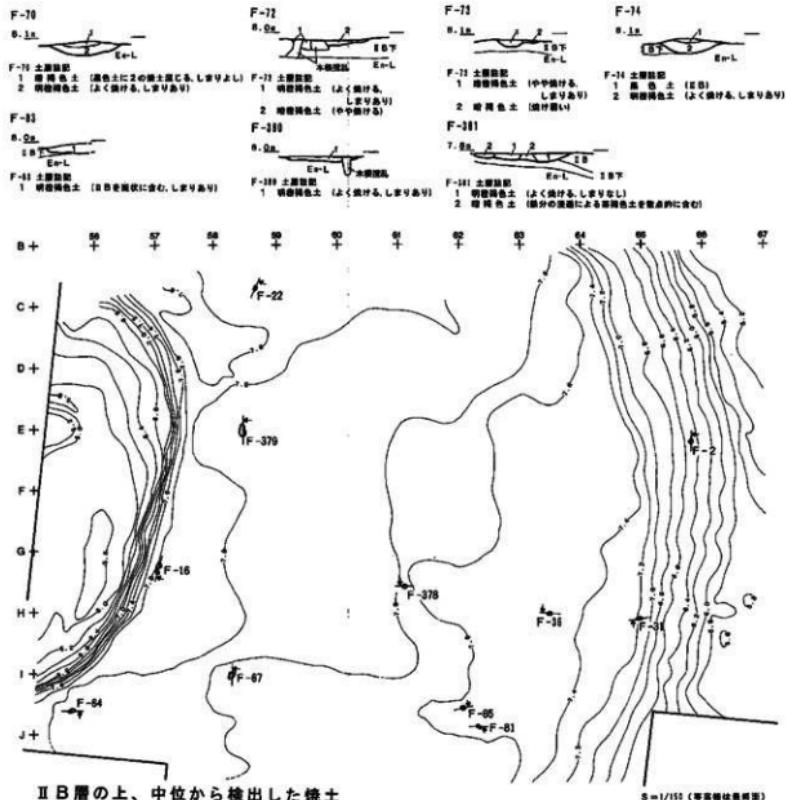


図 VI-24 焼土(1)

4 焼土



II B 層の上、中位から検出した焼土

S=1/150 (等高線付箇所)

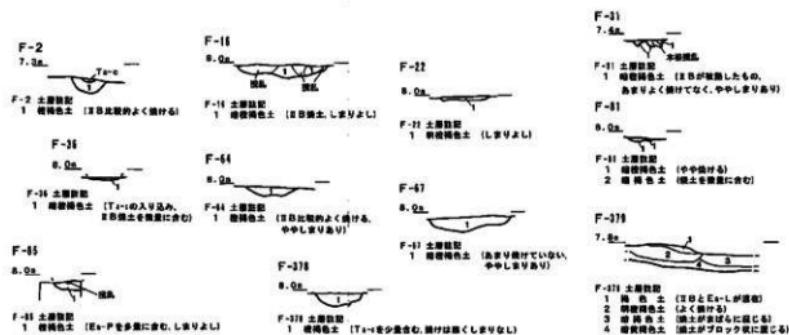


図 VI-25 焼土(2)

5 Tピット

Tピットについて概観する。Tピットは旧オサツ川本流に張り出す台地の端部に主として分布する。レベル的にはおおよそ7.0~7.5m前後に集中する。副次的な配列としては調査区内について西側の低湿地帯、標高8.0mラインにそつても並ぶ。

形態としては、A；平坦な底面を造りだすもの、B；断面形態が漏斗状で、先細るもの、C；平面プランが小判型のもの、以上の3形態に分けることができる。大小に関わらず、遺構を分類にあてはめると、A；TP-1、2、11、13、17、19、20、21、23（23は小型）、24、B；TP-3、10、12、14、16、18、22（22は小型）、25、26、27、C；TP-9（逆杭を壌底部に持つ）、15である。大きさと形態そして立地を考えるとセットとして〔TP-19、20〕、〔TP-22、23〕、〔TP-10、18、25〕、〔TP-14、27〕、〔TP-11、13〕、〔TP-3、26〕、〔TP-12、16〕の組み合わせを想定できる。狩猟方法として、台地よりオサツ川本流へと追い込み、Tピットに落とすという方法をとったと考ええる。

今回の調査区から検出したTピットについて、形態の類似、そしてシカ獵用の落とし穴という想定から、複数一組で用いたと想定できる。そこで形態と検出面を踏まえた上で、いずれのTピットも同時期の遺構と仮定した。構築時期として土壤底部や、ローム混じりで流入を示す土層から、Ⅲ群a類土器が出土しているTピットは、縄文時代中期後半以降であることを示している。また、遺構の断面から、Ta-c降下以前の遺構である。TP-10および焼土の集中がF~H 60~62グリッドに見られる。調査区全体の出土土器と遺構を時期に関して対比すると、Ⅲ群b 3類期のみ住居の検出がない。本年度調査した②地区において、覆土中の遺物出土状況から北筒式期と認められる形態BのTピットを検出した。台地をⅢ群b 3類期縄文時代中期後葉に狩猟場であったと想定し、Tピットを縄文時代中期後葉の遺構と位置づけた。

（大泰司）

TP-1（図VI-26・36、表VI-1・2、図版VI-27・36）

位置 E 65 ab 長軸方向 N-75°-W

規模 2.09/2.07×0.83/0.21×0.79m

調査 E 65 の包含層調査中にⅡB下面において、精円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸方向に対して南側を半割した。土壤の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。そして完掘を行った。中層はEn-P相当の橙褐色砂層の崩落土、最下層にⅡBの崩落土があり、そのままの直下を底面とした。掘り込み面は検出面より高いと思われる。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。底面は東側にわずかに低い傾斜があるが、平たく造り出す。西壁と東壁について壁面はオーバーハングする。平面プランは長楕円形であり長軸は東-西方向を向く。形態分類はAAである。

遺物 覆土1、2層からⅢ群a類土器が2点、礫175点が出土している。そのうち1点を図示した。42は崩落と流入後のⅡBの堆積層からの出土である。Ⅲ群の胴部破片である。屈曲具合から胴下半部の破片と推測できる。器表面に輪積み痕が残る。

TP-2（図VI-26、表VI-2、図版VI-27）

位置 E 65 ab 長軸方向 N-69°-W

規模 1.91/1.16×0.77/0.26×0.81m

調査 E 65 a の包含層調査中にⅡB下位で黒色土の落ち込みを検出した。半割したところEn-L相当の灰色砂層を10cmほど掘り込むTピットと確認した。

覆土 覆土は上部はⅡ B 主体、中層はEn-P相当の橙褐色砂層の崩落土、下層にⅡ B の崩落土があり、そこを底面とした。

形態 東側の底面は15cmほどオーバーハングしている。長軸のプランは、ほぼ東一西方向である。底面は東側にわずかに低い傾斜がある。形態分類はAである。

遺物 覆土1、2層からⅢ群a類土器が9点、礫67点が出土している。

(倉橋)

TP-3 (図VI-26、図版VI-27)

位置 G 64 d、G 65 a

長軸方向 N-65°-W

規模 1.68/1.08×0.74/0.22×0.73m

調査 平成7年度に64ラインの東側、平成8年度に64ラインの西側を調査した。平成7年度の調査ではG 64 d・G 65 a・bグリッドの包含層調査中にⅡ B 下位で黒色土の落ち込みを検出した。半割したところEn-P相当の礫層をわずかに掘り込むTピットと確認した。

平成8年度の調査については、VI層上面で、V層黒色土の落ち込みを確認した。昨年度の調査結果からTP-3の残部であると判断、完掘を行った。

覆土 上部はⅡ B 主体、中層はEn-P相当の橙褐色砂層の崩落土、最下層にⅡ B の崩落土があり、そこを底面とした。壙底部には埋没開始時の黒色土が堆積している。

形態 平面形態は長梢円形を基調とする。開口部分は崩落により、遺構上部の形は崩れている。壙底部部分は長梢円形プランで平坦である。底面は東側にわずかに低い傾斜がある。長軸は東一西方向である。形態分類はBである。

遺物 平成8年度の調査において、覆土中から礫が2点出土している。

TP-9 (図VI-26、表VI-2、図版VI-28)

位置 P 60 a

長軸方向 N-67°-W

規模 1.38/1.14×0.71/0.36×0.71m

調査 Ⅱ B 下層において、梢円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の東側を半割した。土壤の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。掘り込み面は検出面よりやや高いレベルと思われる。半割した部分から逆杭を検出した。木質部分が地下水中に含まれる鉱物と置換していた。土層堆積状況を確認後、完掘を行った。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態は底部分からまっすぐ立ち上がる。遺構中央部から開きながら開口する。崩落によるものであろう。壙底部は平たく面に造り出す。平面プランは小判形をした長梢円形である。長軸は東一西向きである。形態分類はCである。

付属遺構 逆杭の痕跡を2か所から検出した。完掘時に検出した側に木質は残っていなかった。

遺物 覆土中から礫が2点出土した。

TP-10 (図VI-27、図版VI-28)

位置 C 59 b、C 59 c、D 59 a、D 59 d

長軸方向 N-49°-W

規模 (1.77)/1.50×(0.87)/0.37×(0.87)m

調査 V層中位面において、梢円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の東側を半割した。土壤の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。掘り込み面は確認できなかつたが、検出面よりやや高いレベルと思われる。土層確認後、完掘を行った。

覆土 土層について、自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。

土壤壁面中央部分からもう一段崩落が見受けられる。壙底部は平たい底面を造り出す。プランはゆがんだ長楕円形である。長軸は北西-南東方向である。形態分類は大型のBである。

遺物 遺物の出土はなかった。

TP-11 (図VI-27・36、表VI-1・2、図版VI-28・36)

位置 J 63 a, d

長軸方向 N-48°-W

規模 1.46/1.25×0.98/0.22×0.88m

調査 V層下面において、楕円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。土壤の形状と覆土堆積状況からTピットと判断し、完掘を行った。掘り込み面は検出面より上と思われる。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。壙底部は平たく造り出す。南側壁面はオーバーハングする。地形的に、南側の方が斜面の下方である。長軸方向は北西-南東方向である。形態分類はAである。

遺物 覆土上部黒色土の流入中から、Ⅲ群a類土器が8点、Ⅲ群土器が2点、礫が1点が出土している。覆土12は黒色土の流入であり、壙底部直上に堆積する。その覆土12から、Ⅲ群土器が1点出土している。そのうち4点を図示した(図VI-36-43~46)。

4点ともⅢ群a類の腹部破片である。43・45・46は覆土1層からの出土である。43は覆土12層からの出土である。43は結束第一種羽状繩文を持つ腹部破片である。44も結束第一種羽状繩文を持つ腹部破片である。遺構底部の遺物である。45は縁帶上に爪による連続圧痕を持つ。指頭まで深く刺突する。器壁は厚く、胎土は粗い。混和剤として黒雲母が目立つ。46は偏平な粘土紐をはりつける。粘土紐を留めるかのように縁帶の両側縁に刺突を連続する。刺突は‘く’の字形になるように両側縁で対応する。器壁は薄くよくしまる。器内面には丁寧に磨き調整を加える。

時期 特にこのTピットに関しては壙底部のⅢ群土器、44から、中期前半より後の遺構と分かった。

TP-12 (図VI-27、図版VI-28)

位置 E 63 c, 64 b

長軸方向 N-50°-W

規模 1.96/1.37×0.88/0.22×0.81m

調査 V層下面において、楕円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。土壤の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。そして完掘を行った。掘り込み面は検出面より上である。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。壙底部は平たく造り出す。長軸は北西-南東方向である。形態分類は大型のBである。

遺物 遺物の出土はなかった。

TP-13 (図VI-28、図版VI-29)

位置 G 64 c, H 64 d

長軸方向 N-53°-W

規模 0.24/0.17×0.79/0.14×0.8m

調査 V層下面において、楕円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。土壤の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。そして完掘を行った。掘り込み面は検出面より上である。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

5 T ピット

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。壇底部は平たく造り出す。東壁について壁面はオーバーハングする。長軸は北西—南東方向である。形態分類は A である。

遺物 遺物の出土はなかった。

TP-14 (図 VI-28、図版 VI-29)

位置 H 64 ad

長軸方向 N-45°-W

規模 1.83/1.28×0.84/0.15×0.89 m

調査 V層下面において、橢円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。土壤の形状と覆土堆積状況から T ピットと判断し、完掘を行った。掘り込み面は検出面よりやや高いと思われる

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没過程を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。壇底部は平たく造り出す。長軸は北西—南東方向を向く。形態分類は B である。

遺物 遺物の出土はなかった。

TP-15 (図 VI-28、表 VI-1・2、図版 VI-30)

位置 C 64 d

長軸方向 N-75°-W

規模 1.33/0.62×0.72/0.53×0.69 m

調査 V層中位面において、橢円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。土壤の形状と覆土堆積状況から T ピットと判断した。検出面は、掘り込み面とはほぼ同じ面である。その後、完掘を行った。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。壇底部は平たい面として造り出す。プランは小判形であり、比較的小形である。長軸は東—西方向を向く。形態分類は C である。

遺物 覆土中から礫が 1 点出土している。

TP-16 (図 VI-29、図版 VI-30)

位置 C 63 bc

長軸方向 N-77°-W

規模 0.16/1.48×0.72/0.28×0.92 m

調査 V層中位面において、橢円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。土壤の形状と覆土堆積状況から T ピットと判断した。検出面は、掘り込み面とはほぼ同一である。その後、完掘を行った。長軸は東西方向である。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。壇底部について平坦に造り出す。平面プランは長橢円形であり、比較的小形である。長軸は東—西方向を向く。形態分類は B である。

遺物 遺物の出土はなかった。

TP-17 (図 VI-29、図版 VI-31)

位置 D 65 a

長軸方向 N-89°-W

規模 1.74/0.15×0.37/0.24×0.46 m

調査 H-5 を調査終了後、住居の西壁側、VI層中位面において、橢円形の黒色土入り込みを確

認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。深さは浅かったが、土壤の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。H-5より古い遺構である。掘り込み面は確認できなかった。その後、完掘を行った。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。壙底部は斜面の下方ほど掘り込みが深い。プランは長椭円形であり、比較的小形である。断面形状は漏斗形であるが、壙底部に長細い底面を造り出す。そのため形態分類はAにちかいが、Bとした。

遺物 遺物の出土はなかった。

TP-18(図VI-29・36、表VI-1・2、図版VI-31・36)

位置 F 28 bc 長軸方向 N-52°-W

規模 (2.05) / 1.79 × (1.17) / 0.39 × (1.16) m

調査 V層中位面において、椭円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の東側を半割した。土壤の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。掘り込み面は崩落部分が広いため確認できなかった。検出面よりやや高いレベルと思われる。土層確認後、完掘を行った。

覆土 土層について、自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。壙底部は斜面下方ほど掘り込みが深い。プランはゆがんだ長椭円形である。長軸は東-西方向を向く。形態分類はゆがんだBである。

遺物 覆土上部の黒色土流入部分からⅢ群a類土器が4点、Ⅲ群土器31点、Ⅳ群c類土器1点、礫が12点出土した。覆土中位に土砂の流入を示す8層からⅢ群土器14点が出土した。そのうち3点を図示した(36-47~49)。

47、48はⅢ群土器、49はⅣ群土器である。いずれも覆土1層からの出土である。

47は結束第一種羽状繩文を持つ胴部破片である。48はLR繩の原体を施文方向を変えて交互に施すことにより羽状に器面を飾る。49はⅣ群c類土器の口縁部破片である。口縁部は内側に屈曲する。いわゆるIO刺突を持つ。刺突は貫通するものとしないものがある。波頂部分の突起の頂部には円形刺突を施す。器表面は沈線によって文様を施す。器内面には横方向の磨き調整を施す。

時期 特にこのTピットについては覆土中の土器から、繩文時代中期以降の遺構である。

TP-19(図VI-30、図版VI-32)

位置 K 58 a 長軸方向 N-13°-E

規模 -/-×0.54/0.21×1.04 m

調査 V層中位面において、椭円形の黒色土入り込みを確認した。黒色土入り込みプランの南端は水道管の搅乱によって消滅していた。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。土壤の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。掘り込み面は崩落部分が広いため確認できなかった。検出面よりやや高いレベルと思われる。土層確認後、完掘を行った。

覆土 土層について、自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものである。土壤壁面の底部からの崩落も見受けられる。壙底部は平たい面は造り出さない。プランはゆがんだ長椭円形である。長軸は南北方向である。形態分類はAである。

遺物 遺物の出土はなかった。

5 T ピット

TP-20 (図VI-30、表VI-1・2、図版VI-32)

位置 L 57 d、M 57 c、M 58 b 長軸方向 N-34°-W

規模 (3.26) /3.15×(0.38) /0.16×1.05 m

調査 En-L 直上までの擾乱層を取り除いたところ、細長い不整橢円形状の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。土壤の形状と覆土堆積状況から T ピットの可能性を考えた。完掘したところ、En-L 面において、北端部分の縁が大きなブロック状に崩れて落ち込んでいる様子がはっきりと残っていた。削平面からの崩落であるため、擾乱時の崩落であろう。平面プランについて、屈曲部分があるため、2 つの T ピットが切り合っている可能性も考えた。しかし屈曲部壁面について構築の痕跡がなかったため、その可能性はない判断した。掘り込み面は遺構上部が擾乱により無くなっているため確認できなかった。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態は直線的に立ち上がる。壌底部を平たく造り出した様子はない。長軸は南西-北東方向である。形態分類は A である。

遺物 図示はしなかったが、覆土 1 層からⅢ群 b 3 類土器が 1 点出土した。

TP-21 (図VI-30、図版VI-33)

位置 K 62 c、K 63 b、L 62 d、L 63 a 長軸方向 N-70°-W

規模 (1.52) /1.29×(0.65) /0.24×(0.94) m

調査 VI 層上面において、橢円形の黒色土入り込みを確認した。遺構がグリッドの境界にあつたため、63 ライン以東を 10cm ほど掘り過ぎた。まず土層確認のため、短軸の東側を半割した。土壤の形状と覆土堆積状況から T ピットと判断した。掘り込み面は検出面よりやや高い面と思われる。土層確認後、完掘を行った。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態は脣部が膨らんだような形となっているが、遺構壁面の崩落によるものである。プランはゆがんだ長橢円形である。土壤底部の形状について斜面下方向である東側がオーバーハングする。長軸は東-西方向である。形態分類は A である。

遺物 遺物の出土はなかった。

TP-22 (図VI-31、図版VI-33)

位置 L 60 a、L 60 b 長軸方向 N-53°-E

規模 1.27/1.10×0.54/0.24×0.81 m

調査 V 層最下面において、橢円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南西側を半割した。土壤の形状と覆土堆積状況から T ピットと判断した。掘り込み面は確認できなかった。しかし検出面よりわずかに高いレベルと思われる。土層確認後、完掘を行った。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はやや開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。壌底部は平たい面は造り出さない。プランはゆがんだ長橢円形である。長軸は北東-南西向きである。形態分類は小型の B である。

遺物 遺物の出土はなかった。

TP-23 (図VI-31、図版VI-33)

位置 L 63 a 長軸方向 N-67°-W

規模 (1.23) /1.29×(0.46) /0.26×(0.84) m

調査 V層最下面において、橢円形の黒色土入り込みを確認した。黒色土入り込みの平面プランについて南側は壊されている。まず土層確認のため、短軸の西側を半割した。土壤の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。掘り込み面は確認できなかった。検出面よりやや高いレベルと思われる。土層確認後、完掘を行った。

覆土 土層について、自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態は壊底部分からやや開きながら立ち上がる。崩落によるものであろう。底面は造り出さない。平面プランは長楕円形である。長軸は東一西向きである。土壤の下半部の形態について西側が微妙にオーバーハンプする。壊底部分について斜面下方向である東側が深い。形態分類は小型のAである。

遺物 遺物の出土はなかった。

TP-24 (図VI-31・36、表VI-1・2、図版VI-34・36)

位置 I57d 長軸方向 N-31°-W

規模 1.76/1.77×0.92/0.34×1.20m

調査 V層下面において、橢円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。土壤の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。掘り込み面は検出面とほぼ同じレベルと思われる。土層堆積状況を確認後、完掘を行った。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。近代もしくは現代の杭跡を土層断面において確認した。

形態 短軸方向について、断面形態は底部分からやや開きながら立ち上がる。崩落によるものであろう。東側壁面について壁面底部から崩れた痕跡を確認できる。壊底部分は平坦に造り出す。平面プランは長楕円形である。長軸は南一北向きである。土壤の下半部の形態について南側が微妙にオーバーハンプする。壊底部分について斜面上方向である南側が深い。形態分類はAである。

遺物 覆土上部の黒色土流入か所からⅢ群a類土器が1点、Ⅳ群b類土器が1点、メノウ製のフレイクが1点出土している。壊乱部分から黒曜石製のフレイクが1点出土している。

そのうち2点を図示した(36-50、51)。いずれも覆土1層からの出土である。

50はⅣ群b類の胴部破片である。屈曲部分であり、屈曲部には無文帯がめぐる。器壁は薄く粒径1mm以下の長石粒が目立つ。同一個体がH59d、F60d、H59bグリッドから出土している。51はⅢ群a類土器の口縁部破片である。口縁部分には粘土紐を貼り付けて肥厚帯を形成する。隆帯部分にはLR繩によって連続した刺突を施す。胎土には粒径2mmの雲母が目立つ。

TP-25 (図VI-32・36、表VI-1・2、図版VI-34・36)

位置 I57a、I57b 長軸方向 N-20°-E

規模 (2.68)/2.39×1.12/0.67×1.13m

調査 V層中位面において、橢円形で大型の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。特に遺構西壁について、倒れる様な崩れ方をした痕跡を確認した。本来この遺構はより細長い形態であったと推測できる。土壤の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。掘り込み面は検出面とほぼ同じレベルである。水道管による搅乱が遺構を東西方向に切っていたため掘込み面で検出が可能であった。土層堆積状況を確認後、完掘を行った。

覆土 遺構壁面の自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、崩落が激しいためもともとの形状は分からぬ。壊底部分は平たく面に造り出す。平面プランは長楕円形である。長軸は南一北向きである。土壤の下半部の形態について、南

側、北側どちらも微妙にオーバーハングする。墳底部分について南側が深い。形態分類は A である。

遺物 遺構覆土上部の黒色土層、覆土 1 層から IV 群 b 類土器が 2 点、III 群土器が 1 点、黒曜石のフレイクが 1 点、礫が 3 点出土している。黒色土層よりやや下の褐色土層、覆土 2 層から III 群 a 類土器が 1 点、III 群土器が 1 点、III 群 b 1 類土器が 1 点、IV 群 a 類土器が 7 点、IV 群 b 類土器が 2 点。縞貫岩の石核が 1 点、黒曜石のフレイクが 4 点出土している。西側壁面崩落直後の堆積層、覆土 7 層から III 群土器が 7 点、ロームの崩落を主体とする土層、覆土 8 層から III 群土器が点出土している。そのうち 5 点を図示した (36-52~56)。

52~55 は覆土 2 層の遺物、56 は覆土 8 層の遺物である。52 は IV 群土器である。應消しも文様部分に幅広い原体によって直線を基調として文様を施す。器内面にはよく磨き調整を施す。53 は IV 群 a 類土器である。器面には粘土紐貼り付けによる肥厚帯がめぐる。肥厚帯の断面形態は偏平である。54 は IV 群 a 類の胸部破片である。器面に対して垂下するように粘土紐を貼り付ける。隆帯には器面に対して縦方向に軸をむけ、絆条压痕を施す。器壁は緻密であり、焼成が良好である。55 は隆帯により器面を飾る。III 群 a 類の胸部破片である。隆帯を用いて、器面を飾る。隆帯には器面に対して縦方向にヘラによる連続刺突を施す。器壁は緻密であり、焼成が良好である。56 は IV 群 c 類の土器である。小型の器形である。横走する沈線によって器面を飾る。内面は横方向の磨き調整を丹念に施す。

TP-26 (図 VI-32、図版 VI-35)

位置 I 64 a、I 64 d 長軸方向 N-39°-W

規模 (1.41)/0.62×(0.77)/0.23×0.96m

調査 V 層下面において、精円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。土壌の形状と覆土堆積状況から T ピットと判断した。掘り込み面は検出面よりやや高いレベルと思われる。土層堆積状況を確認後、完掘を行った。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態は底部分からまっすぐ立ち上がる。遺構中央部から開きながら開口する。崩落によるものであろう。西側壁面について壁面中央部から崩れた痕跡を確認できる。墳底部は北半分は南下がりに傾斜した掘り込みである。南側にかたよった位置に長精円形の墳底部を持つ。検出面について平面プランは長精円形である。長軸は南-北向きである。形態分類は小型の B である。

TP-27 (図 VI-32、図版 VI-35)

位置 J 30 d 長軸方向 N-48°-W

規模 (1.84)/1.45×1.17/0.31×(1.30)m

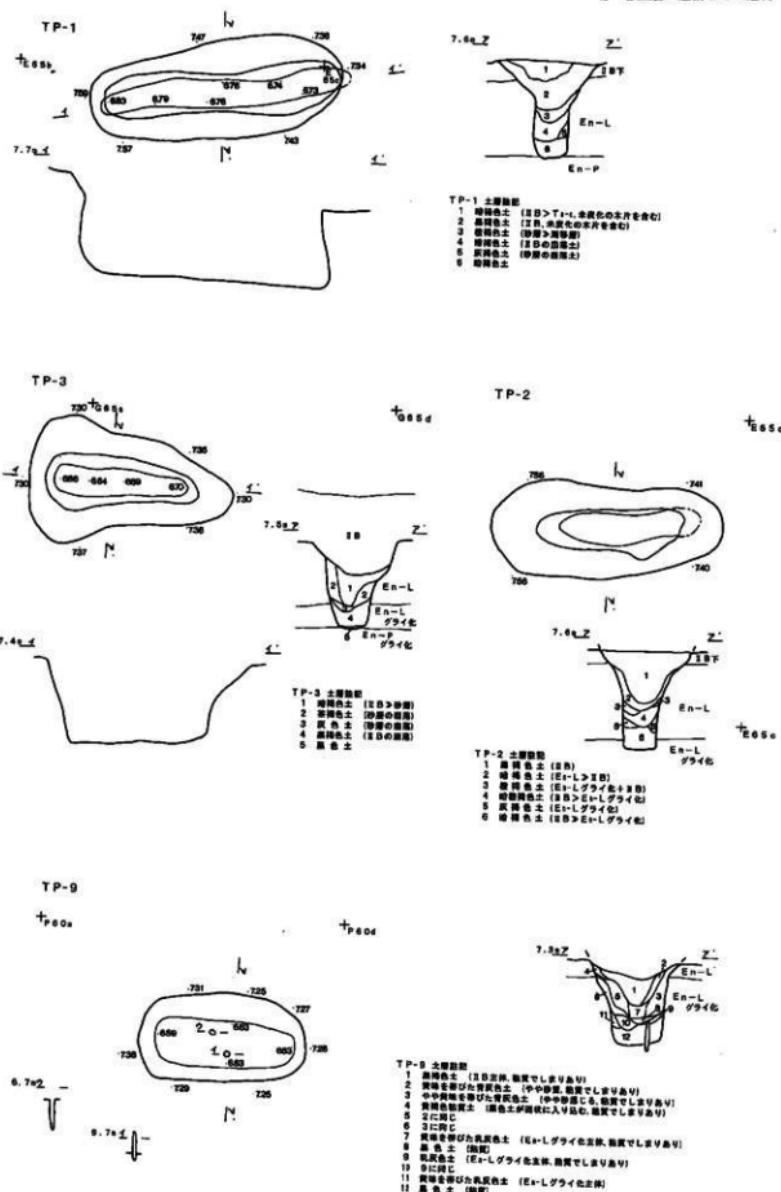
調査 V 層下面において、精円形の黒色土入り込みを確認した。遺構には水道管敷設のための擾乱によって、壊されている。まず土層確認のため、短軸の北側を半割した。土壌の形状と覆土堆積状況から T ピットと判断した。掘り込み面は検出面とほぼ同じレベルと思われる。土層堆積状況を確認後、完掘を行った。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態は底部分からまっすぐ立ち上がる。遺構中央部から開きながら開口する。崩落によるものであろう。墳底部は平たく面に造り出す。平面プランは長精円形である。長軸は東南-西北向きである。形態分類は B である。

遺物 遺物の出土はなかった。

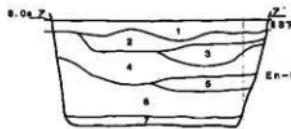
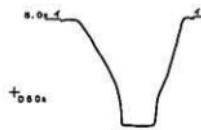
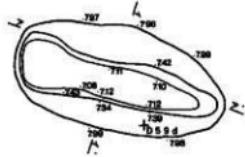
(大泰司)



図V-26 Tピット(1)

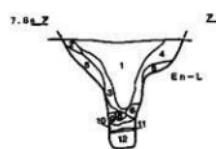
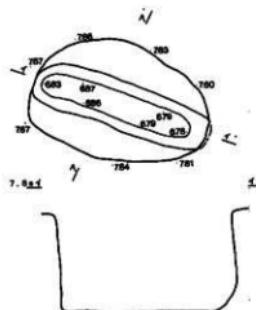
5 T ピット

TP-10



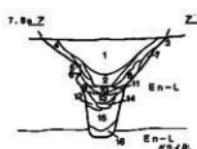
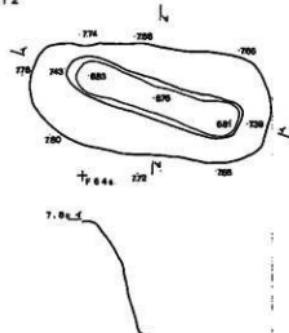
- TP-10 土壌記載
- 1 黄褐色土 (E-B, 黒色より)
 - 2 混合褐色土 (E-B > E-L, 黒色より薄い)
 - 3 黑褐色土 (E-B > E-L, 黒色より濃い)
 - 4 黄褐色土 (E-B > E-L)
 - 5 黄褐色土 (E-B-L)
 - 6 黄褐色一ーム土 (E-B-L > E-L, 黒色より薄い)
 - 7 黑褐色一ーム土 (E-B-L > E-L, 黒色より濃い)
 - 8 黑褐色土 (E-B-L > E-L, 黒色より濃い)
 - 9 黑褐色土 (E-B-L > E-L, 黒色より濃い)
 - 10 黑褐色土 (E-B-L > E-L, 黒色より濃い)
 - 11 黑褐色土 (E-B-L > E-L, 黑色より濃い)
 - 12 黑褐色土 (E-B-L > E-L, 黒色より濃い)

TP-11



- TP-11 土壌記載
- 1 黄褐色土 (E-B, 黒色より)
 - 2 混合褐色土 (E-B > E-L, 黒色より薄い)
 - 3 黑褐色土 (E-B > E-L, 黒色より濃い)
 - 4 黄褐色土 (E-B > E-L)
 - 5 黄褐色土 (E-B-L)
 - 6 黄褐色一ーム土 (E-B-L > E-L, 黒色より薄い)
 - 7 黑褐色一ーム土 (E-B-L > E-L, 黒色より濃い)
 - 8 黑褐色土 (E-B-L > E-L, 黒色より濃い)
 - 9 黑褐色土 (E-B-L > E-L, 黒色より濃い)
 - 10 黑褐色土 (E-B-L > E-L, 黑色より濃い)
 - 11 黑褐色土 (E-B-L > E-L, 黑色より濃い)

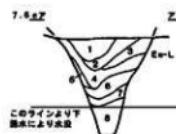
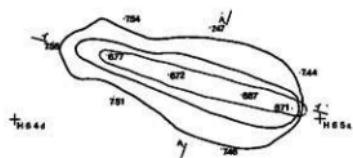
TP-12



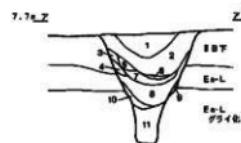
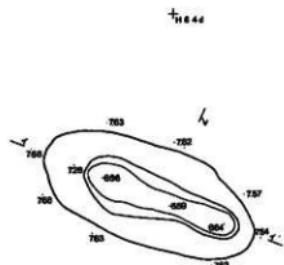
- TP-12 土壌記載
- 1 黄褐色土 (E-B, 黒色より薄い)
 - 2 黑褐色土 (E-B > E-L, 黒色より濃い)
 - 3 黑褐色土 (黒色なし)
 - 4 混合褐色土 (E-B > E-L)
 - 5 黄褐色土 (E-B > E-L, 黒色なし)
 - 6 黑褐色土 (E-B > E-L, 黒色なし)
 - 7 黑褐色土 (E-B > E-L, 黒色なし)
 - 8 混合褐色土 (E-B + E-L)
 - 9 黑褐色土 (E-B > E-L, 黒色なし)
 - 10 黑褐色土 (E-B > E-L, 黒色なし)
 - 11 混合褐色土 (E-B > E-L)
 - 12 黑褐色土 (黒色多くなし)
 - 13 黄褐色土 (E-B > E-L)
 - 14 黑褐色土 (黒色少しなし)
 - 15 黑褐色土 (黒色を帯びる, 少し黒さ)
 - 16 黑褐色土 (黒色を帯びる, 黒さ濃くなる, 黒さなし)

図VI-27 Tピット(2)

TP-13

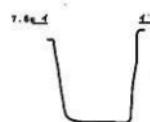
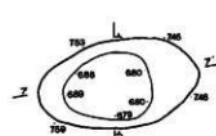


TP-14



- TP-14 土層剖面
- 1 黒 色 土 (E-L, 2より褐色地を帯びる, 0.5-1mの鉄色粘土粒子を微量に含む)
 - 2 黒 色 土 (E-L)
 - 3 黑炭質粘土 (黒炭土)
 - 4 黄褐色を帯びる鉄色褐色土
 - 5 黑 色 土 (2とは鉄分の多い層で分離される)
 - 6 黑 色 土 (2は鉄分が多く入り粘土)
 - 7 黑 色 土
 - 8 黑 色 土 (7とは鉄分の多い層で分離される)
 - 9 黑 色 土 (黒炭土)
 - 10 黄褐色を帯びる鉄色褐色土 (0.1-1mのE-L-Pを微量に含む)
 - 11 黑 色 土

TP-15

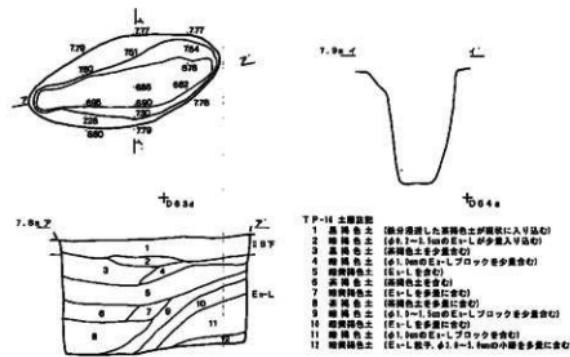


- TP-15 土層剖面
- 1 黒 色 土 (0.1-1mのE-L-Pを含む, 黒褐色)
 - 2 黑炭質粘土 (E-L-Pを含む)
 - 3 黑炭質粘土 (E-L-Pを含む)
 - 4 黑炭質粘土 (3よりV弱い, 黒褐色)

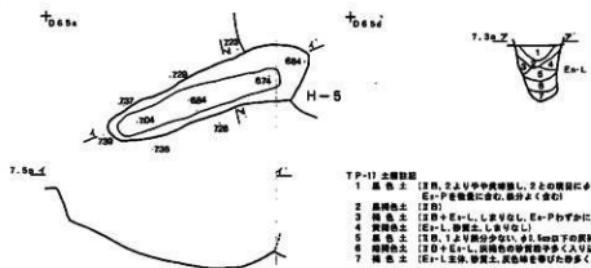
図VI-28 Tピット(3)

5 T ピット

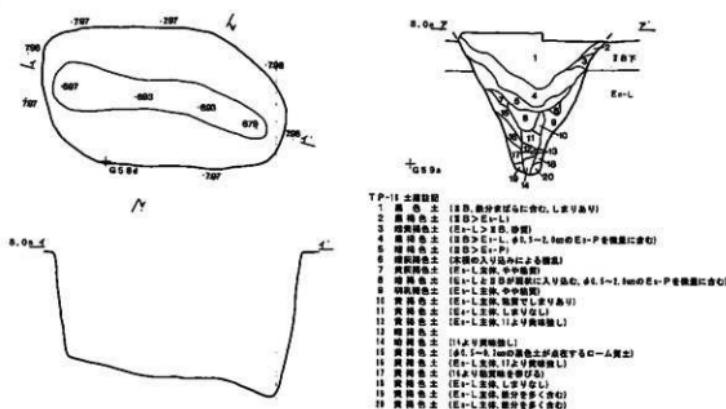
TP-16



TP-17

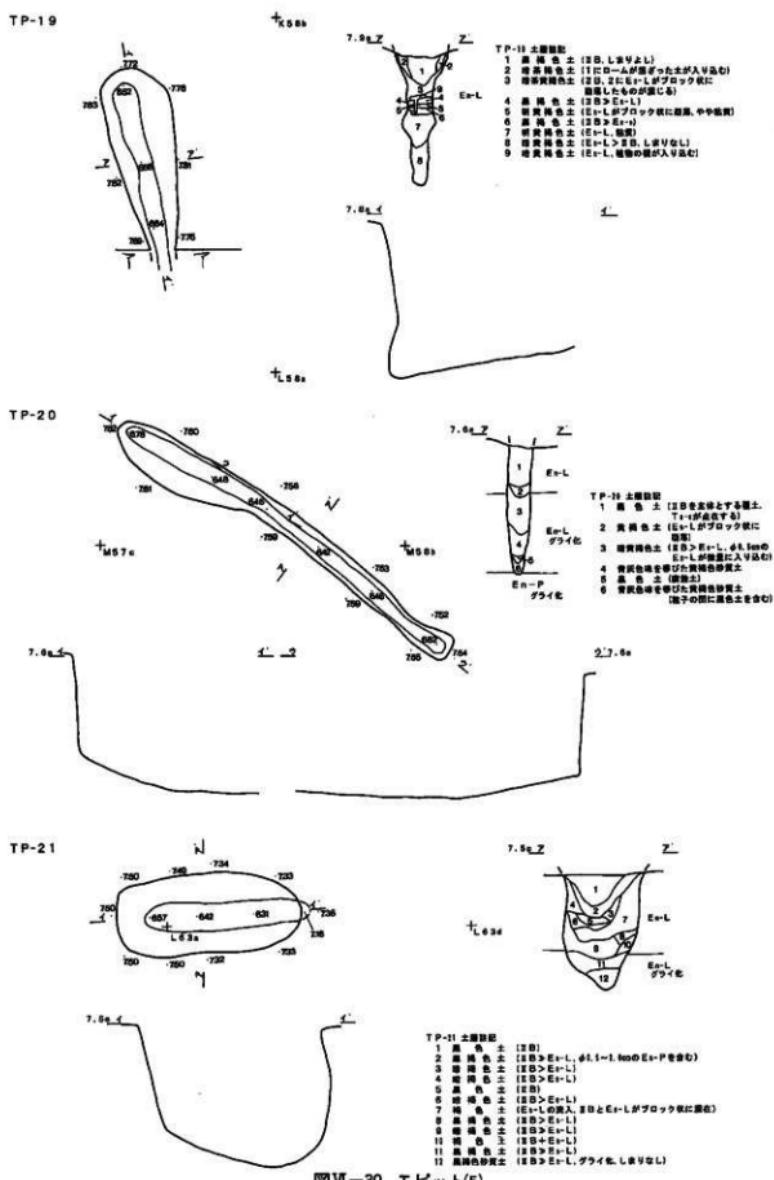


TP-18



図VI-29 T ピット(4)

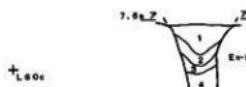
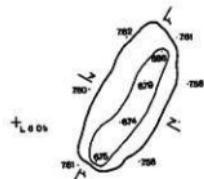
VI ニ黒畠の遺構とその遺物



図V-30 Tピット(5)

5 Tビット

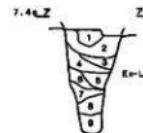
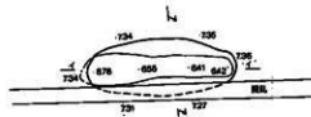
TP-27



T-P-2. 土壌酸性記
 1 黑 級 土 [S B, pH. 6.0~7.0のE+Pを微量に含む]
 2 黑 褐 土 [S B+E+L]
 3 明褐 褐 土 [E-L]
 4 活化褐土(即ち黄褐色土) [グリナ化したE+L土壤]
 5 黑 褐 土 [S B+D-L, pH. 6.0のE-n-しが入り込む]
 6 黑 褐 土 [E+Lがブロック状に崩落]
 7 黑 褐 土

TP-23

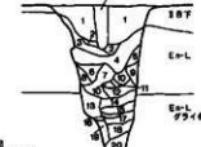
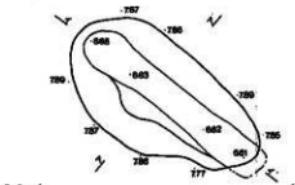
+1



T-P-11 土壌性状	
1 植物色 土	(Z3) 生長、少しうるさい。
2 色 土	(Z3) の入り込み。
3 種 色 土	(Z3) が、少しL-1-LmのE+Pを歯茎に含む。
4 植物色 土	(Z3+E-L-L) 鮮やかでない。(しまりなし)
5 種 色 土	(Z-E-n-L-L) の入り込みを生じる。
6 植物色 土	(Z-L+L+3-B, 6-L-1m) のE+Pを歯茎に含む。
7 種 色 土	(Z-L-L-L) のL。
8 種 色 土	(Z-L-L+3-B, 6-L-1m) のE+Pを歯茎に含む。
9 種 色 土	(Z-E-L-L) が、少しR。

TP-24

+
113

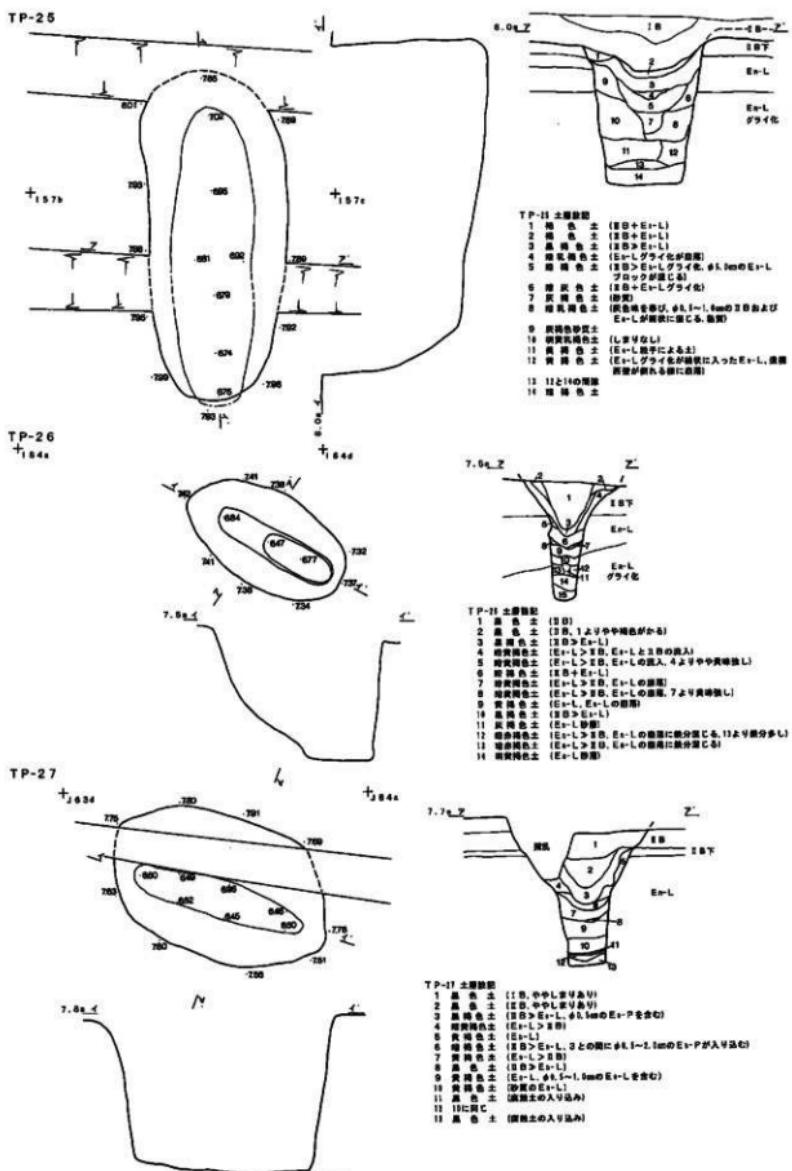


T-P-II 土壌性質

- 1 黒 色 (上)
- 2 黄 色 (上) (B-E+L)
- 3 黄褐色 (上) (B-E+L)
- 4 黄 色 (上) (B-E+L)
- 5 黄 色 (上) (B-E+L, Feo 3% および E+L が表面に走る)
- 6 黄 色 (上) (B-E+L)
- 7 棕褐色 (上) (表面の部分がE+Lで染まる様にくずれたもの。ブロッケ状)
- 8 棕褐色 (上) (E+L)
- 9 棕褐色 (上) (E+L, Feo 3% および E-L が表面に走る)
- 10 棕褐色 (上)
- 11 棕褐色 (上) (E+L, E-L がブロッケ状に走る)
- 12 棕褐色 (上) (E+L, E-L が走る)
- 13 棕褐色 (上) (E+L+L, E-L, 黄褐色の斑紋の跡跡)
- 14 黑 色 (上)
- 15 黑褐色 (上) (E-L, E-L, 黒褐色の斑紋, L+LのE-Lを含む) (E-L, E-L, 黑褐色の斑紋)
- 16 黑褐色 (上) (E+L+L)
- 17 黑褐色 (上) (E+L+L, E-L, 黒褐色のE-Lを含む) (合む)
- 18 微暗褐色 (上) (E+L+L, 黑褐色入り混じる)
- 19 暗褐色 (上) (E+L+L, 黑褐色, 黑褐色入り混じる)
- 20 暗褐色 (上) (E+L+L, 黑褐色, 黑褐色入り混じる)

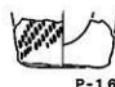
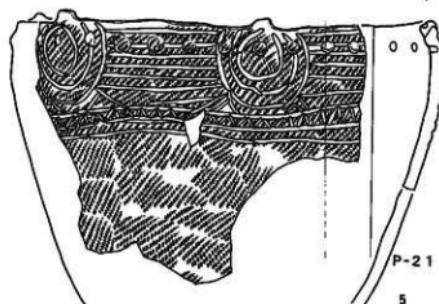
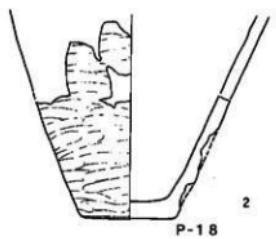
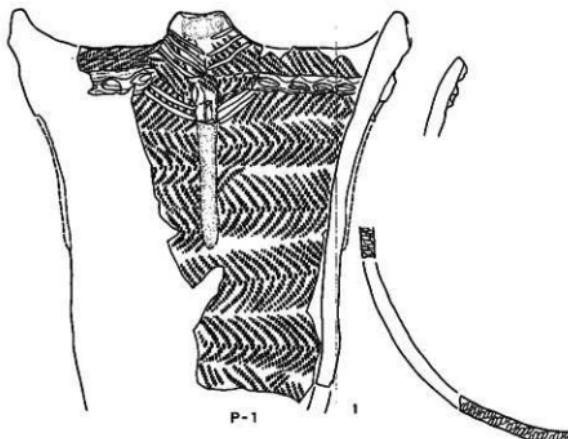
図VI-31 Tピット(6)

VI-1 黒層の造構とその遺物



図VI-32 Tピット(7)

5 T ピット



図VI-33 土壙の土器(1)

遺物(S=1/3)

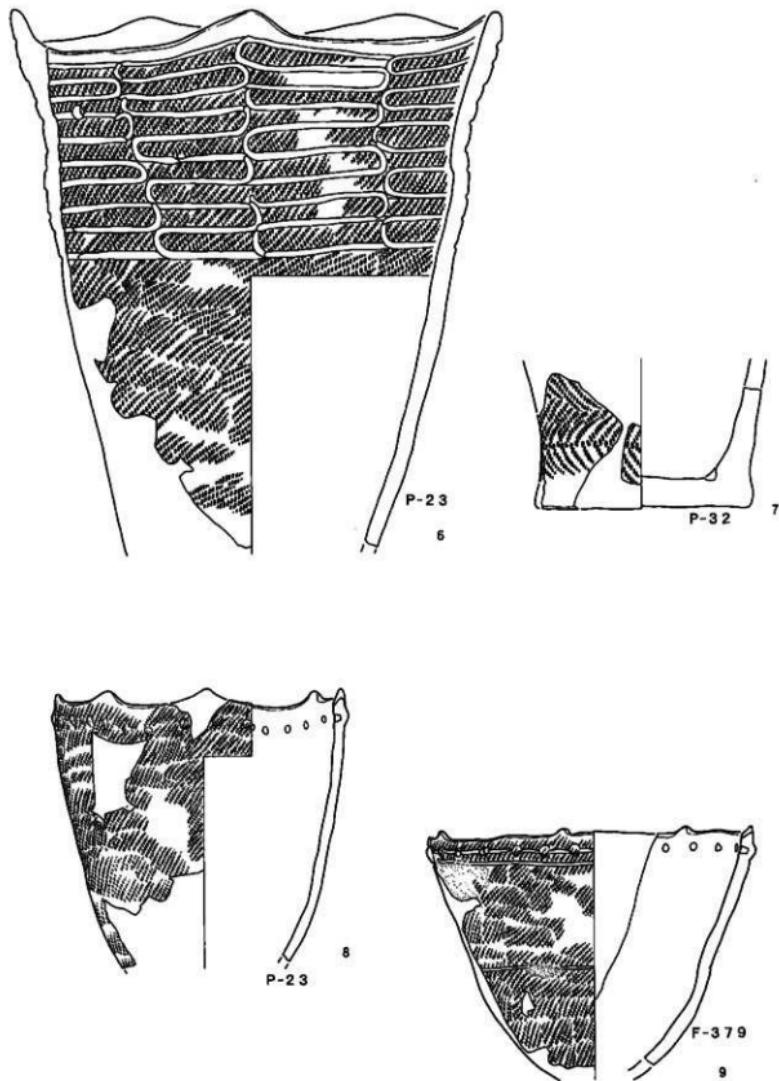
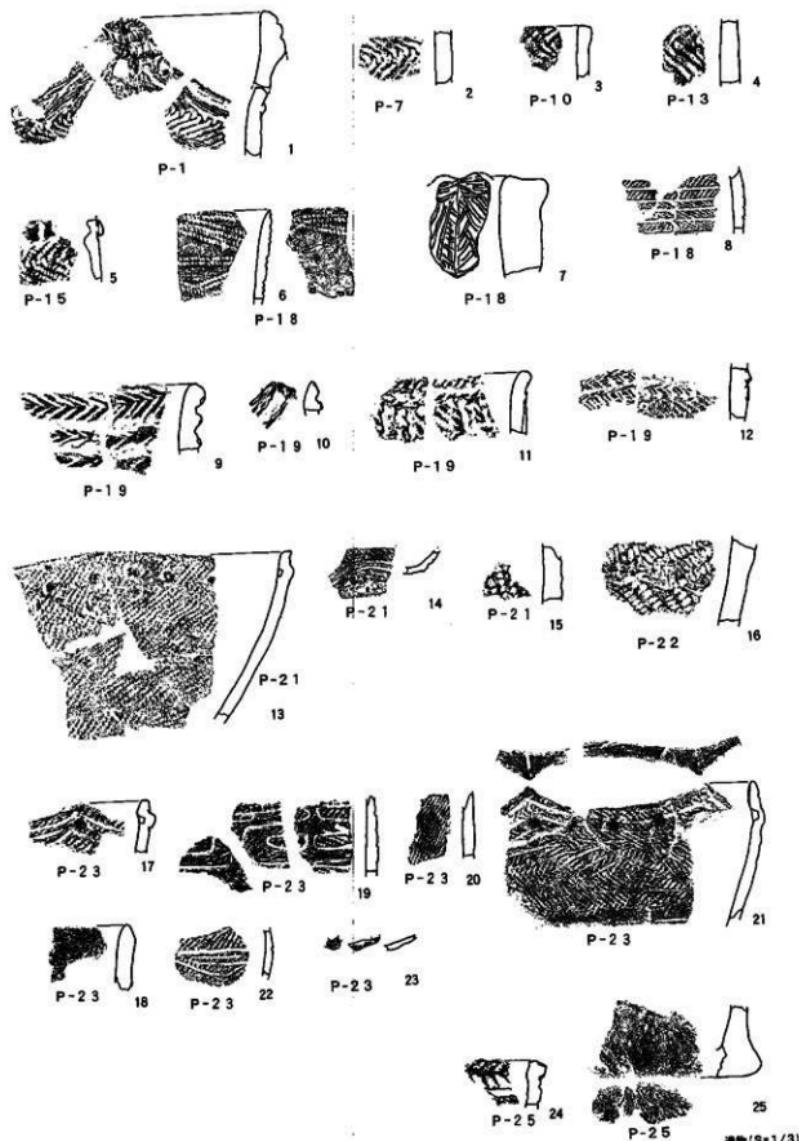


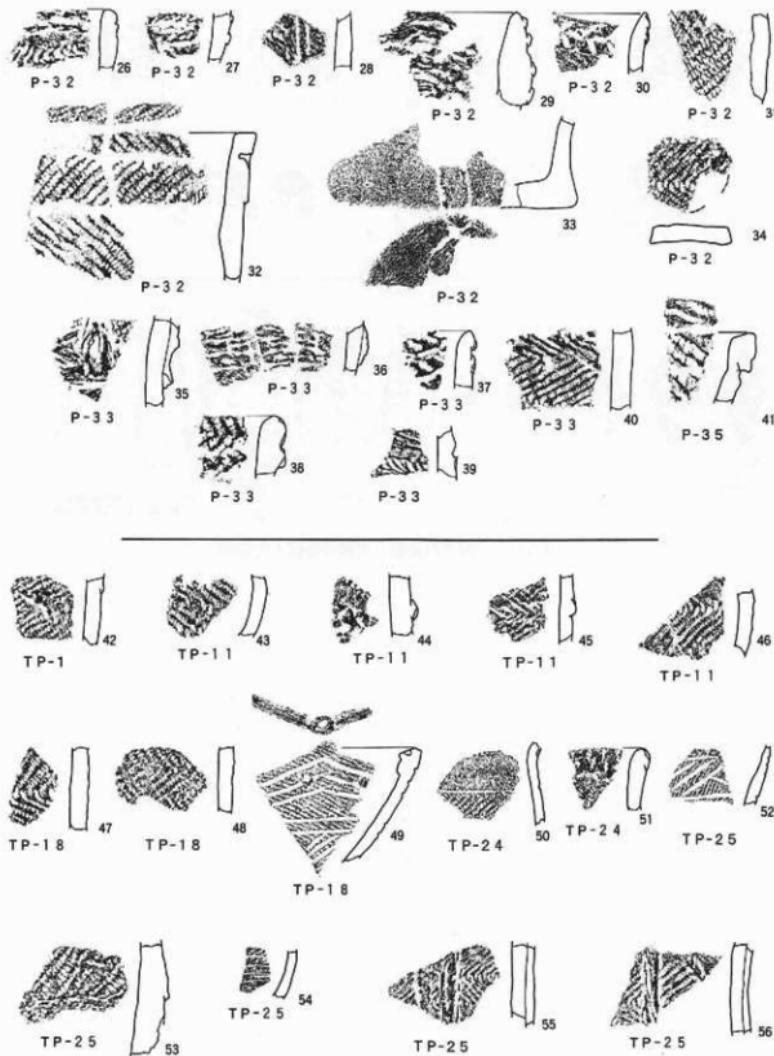
図 VI-34 土壌の土器(2)

遺物(S=1/3)

5 Tピット



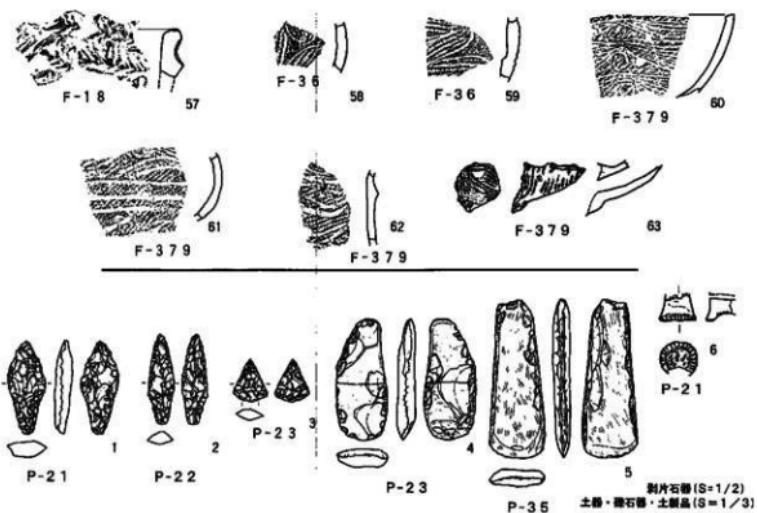
図VI-35 土壌の土器(3)



図VI-36 土壌の土器(4) Tピットの土器

遺物(S=1/3)

5 T ピット



図VI-37 焼土の土器、土壤の石器・土製品

表VI-1 土器掲載一覧

図番	剖面図遺構名	層位	分類
VI-12-1	G59a H-3	II B	IV c 舜式
2	B56c H-3	II B	IV a 余市式
3	B56c H-3	II B	IV a 余市式
4	B56c H-3	社1・2	IV a 余市式
5	B56c H-3	社1・2	IV a 余市式
6	B56c H-3	社1・2	IV a 余市式
VI-12-7	D61a H-4	床面	III a 舜ケ岡1式
8	D61a H-4	床面	III a
9	D61a H-4	床面	III a
10	D61a H-4	床面	III a 舜ケ岡1式
11	D61a H-4	床面	III a 舜ケ岡1式
12	D61a H-4	床面	III a 舜ケ岡1式
VI-12-13	D55d H-5	復土1層	III a 舜ケ岡1式
14	D55e H-5	床面	III a
VI-13-1	D55g H-6	復土上部	IV a 余市式
15	D55g H-6	復土中部	IV b 手標式
16	D55g H-6	復土中部	IV c 舜式
17	D55g H-6	床面	IV c 舜式
18	D55g H-6	床面	IV c 舜式
19	D55g H-6	床面	IV c 舜式
20	D55g H-6	床面	IV c 舜式
21	D55g H-6	床面	IV c 舜式
VI-13-23	E59a H-7	復土中部	IV a 余市式
23	E59a H-7	復土中部	IV a 余市式

図番	剖面図遺構名	層位	分類
VI-13-24	E58d H-7	復土中部	IV a 余市式
25	E58d H-7	復土中部	IV a 余市式
VI-14-16	—	H-8	復土5層
27	E58c H-8	復土6層	IV c 舜式
28	E58c H-8	復土6層	IV b 手標式
29	E58a H-8	復土6層	IV b 手標式
30	E58a H-8	復土6層	IV c 舜式
VI-14-31	—	H-9	社5層
32	D55b H-9	社5層	IV c 舜式
33	E55b H-9	社5層	IV a 余市式
34	E55b H-9	社5層	IV a 余市式
35	E55a H-9	床面	IV a
36	E55a H-9	床面	IV a 余市式
37	E55a H-9	床面	IV a 余市式
VI-15-38	J55a H-11	復土1層	IV b 手標式
39	J55a H-11	復土1層	IV b 手標式
40	J55d H-11	復土3層	IV c 舜式
41	J55d H-11	復土3層	IV c 舜式
42	J55d H-11	復土1層	IV c 舜式
43	J55d H-11	復土1層	IV c 舜式
44	J55d H-11	復土1層	IV c 舜式
45	J55d H-11	復土1層	IV c 舜式
46	J55a H-11	復土1層	IV c 舜式
VI-15-46	F51a H-12	復土	IV c 舜式

図番	剖面図遺構名	層位	分類
VI-15-1	B62a P-1	Ⅲ B	III a 半截竹管
2	E63d P-7	復土	III a
3	G60a P-10	復土10層	III b-3
4	C61b P-13	社1上面	III a
5	C57a P-15	床底	III a 組合体
6	H57a P-18	復土1層	I b-4
7	H57a P-18	復土1層	III a 半截竹管
8	H57a P-18	復土1層	IV b 手標式
9	G60a P-19	復土1層	III a 刺突
10	G60a P-19	復土1層	III a 半截竹管
11	G60a P-19	復土1層	III a 半截竹管 振引き
12	G60a P-19	復土1層	III a 短沈線
13	D58d P-21	復土	IV c 舜式
14	D58d P-21	復土	IV c 舜式
15	D58d P-22	復土	IV a 余市式
16	D58d P-22	復土上部	IV a 余市式
17	I55c P-23	復土5層	IV c 舜式
18	I55c P-23	復土3層	III b-3
19	I55c P-23	社1上面	IV a 入江式
20	I55c P-23	社1上面	IV c 舜式
21	I55c P-23	社1上面	IV c 舜式
22	I55c P-23	社1上面	IV c 舜式
23	I55c P-23	社1上面	IV c 舜式
24	I59a P-25	復土3層	III a 組合体
25	I59a P-25	復土3層	III a 底部
VI-16-20	I55c P-32	社2, 3, 4	III a 爪
27	I64a P-32	社2, 3, 4	III a 刺突
28	I64a P-32	社5, 6	III a 半截竹管
29	I64a P-32	社5, 6	III a 半截竹管 振引き
30	I64a P-32	社2, 3, 4	III a の字に刺み
31	I64a P-32	復土1層	IV a 余市式
32	I64a P-32	復土1層	IV a 余市式
33	I64a P-32	社5, 6	III a
34	I64a P-32	復土1層	土壤円盤 円形
35	I63b P-33	復土3層	III a 爪
36	I63b P-33	復土上部	III a 刺突
37	I63b P-33	復土2層	III a 刺突

図番	剖面図遺構名	層位	分類
VI-16-38	I63b P-33	復土2層	III a 爪全体
39	I63b P-33	復土1層	III a 爪
40	I63b P-33	復土	III a
41	I61a P-35	復土4層	IV a 余市式
42	E55a H-11	復土1層	III a
43	J55a H-11	復土12層	III a 爪
44	J55a H-11	復土1層	III a 爪
45	J55a H-11	復土1層	III a の字に短沈線
46	J55a H-11	復土1層	III a
47	J55a H-18	復土1層	III a
48	F50a H-18	復土1層	III a
49	F50a H-18	復土1層	IV c 舜式
50	I57a H-24	復土1層	IV c 舜式
51	I57d H-24	復土2層	III a 組合体
52	I57a H-25	復土2層	IV c
53	I57a H-25	復土2層	IV a 余市式
54	I57a H-25	復土2層	IV c 舜式
55	I57a H-25	復土2層	III a 組合体
56	I57a H-25	復土2層	III a 組合体
VI-37-1	G58a H-18	復土中	III a 沈能による加飾
58	G58a H-18	復土上面	IV c 舜式
59	D58a H-38	Ⅲ B	IV c 舜式
60	S58a H-37	復土	IV c 舜式
61	G58b H-37	Ⅲ B	IV c 舜式
62	H58a H-37	Ⅲ B	IV c 舜式
63	H58a H-37	Ⅲ B	IV c 舜式
VI-37-6	D56d P-21	復土1層	スタンプ形土製品
VI-33-1	B62a P-1	復土中	III a Ⅲ割れK 061aと合
2	G60a P-18	床面直上	IV b 手標 I55a, H57aと合
3	F57a P-18	復土1層	IV a 手標 F56a, F57aと合
4	F57a P-18	復土中	IV a 余市式
5	D58d P-20	復土中	IV c 舜式 G58dと合
VI-34-6	I55c P-23	復土9層	IV b 手標式
7	I64a P-32	復土中	III a 底部
8	I55c P-23	復土1層	IV c 舜式 J55dと合
9	D58c F-19	復土面	IV c 舜式 H-58dと合

表VI-2 石器持載一覧

図番号	遺構名	層位	分類	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
VI-16-1	H-6	覆土下部	石錐	黒曜石	31.3	17.5	3.9	1.4	
VI-16-2	H-6	覆土下部	石槍	黒曜石	58.4	27.3	9.0	11.1	
VI-16-3	H-6	覆土下部	スクレイバー	黒曜石	43.4	38.4	7.5	15.4	
VI-16-4	H-6	覆土上部	石槍	黒曜石	30.6	39.1	22.9	30.2	
VI-16-5	H-6	覆土上部	石錐	黒曜石	25.8	47.8	18.1	21.8	
VI-16-6	H-6	覆土下部	石斧	泥岩	106.1	40.3	17.5	119.9	
VI-16-7	H-6	床面	石斧	泥岩	(88.3) (44.4)		13.7	100.1	
VI-16-8	H-6	床面	石斧	泥岩	89.7	32.1	15.6	72.9	
VI-16-9	H-6	覆土下部	石斧	泥岩	89.7	32.1	15.6	72.9	
VI-16-10	H-6	覆土下部	たたき石	泥岩	140.0	68.0	68.0	498.9	
VI-16-11	H-7	覆土上部	石斧未製品	泥岩	96.7	48.9	15.0	106.6	
VI-16-12	H-7	床面	台石	安山岩	137.0	83.0	45.0	711.9	
VI-17-13	H-8	覆土5層	石錐	頁岩	30.3	15.7	4.3	1.7	
VI-17-14	H-8	覆土5層	石錐	黒曜石	(14.3)	14.4	3.4	0.6	
VI-17-15	H-8	覆土6層	石槍(折れ)	黒曜石	23.8	18.3	(0.8)	2.6	
VI-17-16	H-8	覆土6層	石槍(折れ)	黒曜石	22.3	13.2	(9.4)	2.3	焼け
VI-17-17	H-8	覆土6層	石錐	黒曜石	31.1	8.6	4.8	1.3	赤井川産
VI-17-18	H-8	覆土6層	楔形石器	黒曜石	21.7	22.8	11.2	5.8	焼け
VI-17-19	H-8	覆土6層	石斧未製品	閃綠岩	128.8	57.5	21.9	263.3	H-9・87と接合
VI-17-20	H-9	床面	石錐	黒曜石	39.0	8.8	3.8	1.2	
VI-17-21	H-9	掘り上げ土	石錐	黒曜石	39.0	8.8	3.8	0.8	
VI-17-22	H-9	覆土5層中	石錐	黒曜石	41.8	17.8	4.7	2.7	
VI-17-23	H-9	掘り上げ土	石錐	黒曜石	39.2	19.2	7.1	4.2	
VI-17-24	H-9	覆土5層中	石錐	黒曜石	42.3	14.2	7.7	4.0	
VI-17-25	H-9	覆土	楔形石器	黒曜石	19.9	23.2	9.6	4.5	
VI-17-26	H-11	覆土3層	石槍・ナイフ	黒曜石	39.6	28.1	9.1	8.0	
VI-17-27	H-11	覆土1層	石斧	泥岩	(96.8)	33.5	15.0	58.6	
VI-17-28	H-11	覆土3層	たたき石	安山岩	126.5	58.7	43.3	455.7	
VI-17-29	H-11	覆土1層	砥石	砂岩	(65.0) (135.0)	27.0	255.2	H-11・40と接合	
VI-17-30	H-11	覆土1・2層	砥石	砂岩	(55.0) (81.0)	16.0	88.3		
VI-17-31	H-11	覆土2層	平玉	かんざ岩	14.1	13.7	7.2	2.0	
VI-37-1	P-21	覆土1層	石槍	黒曜石	37.5	15.4	6.1	3.3	
VI-37-2	P-22	底底	石錐	黒曜石	36.4	9.7	4.9	1.5	
VI-37-3	P-23	覆土1層	石錐	頁岩	(17.0)	13.7	4.5	0.8	
VI-37-4	P-23	覆土1層	石斧	泥岩	73.5	32.3	10.0	27.0	
VI-37-5	P-35	覆土1層	石斧	片岩	95.9	33.8	8.8	51.5	

表VI-3 燃土規模一覧

II B. 中・上位面焼土		焼土番号	長径 × 短径 × 厚さ (m)		
F 2	0.34 × 0.32 × 0.11		0.63 × 0.52 × 0.09		
F 16	0.79 × 0.23 × 0.12	F 32	0.46 × 0.16 × 0.08		
F 22	0.46 × 0.29 × 0.09	F 33	0.86 × 0.64 × 0.17		
F 31	0.23 × 0.17 × 0.06	F 40	0.4 × 0.19 × 0.05		
F 36	0.26 × 0.18 × 0.02	F 46	0.62 × 0.22 × 0.08		
F 64	(0.54) × 0.48 × 0.07	F 47	0.79 × 0.04 × 0.14		
F 67	0.66 × 0.46 × 0.11	F 50	0.94 × 0.74 × 0.1		
F 81	0.22 × 0.18 × 0.03	F 51	0.58 × (0.22) × 0.5		
F 85	0.22 × 0.15 × 0.08	F 53	0.83 × 0.49 × 0.07		
F 378	0.34 × 0.2 × 0.1	F 58	0.43 × 0.3 × 0.04		
F 379	0.98 × 0.56 × 0.18	F 59	0.64 × 0.36 × 0.12		
II D. 下燃土		F 66	0.62 × 0.5 × 0.06		
		F 70	0.68 × (0.3) × 0.11		
		F 72	0.64 × (0.31) × 0.08		
		F 73	0.62 × 0.32 × 0.06		
		F 74	0.66 × 0.48 × 0.12		
		F 83	0.34 × 0.22 × 0.09		
		F 380	0.58 × 0.28 × 0.04		
		F 381	0.69 × 0.44 × 0.07		

表VI-4 遺構造物集計表(1)

	H-3	28	1・2層	床	壁	合計
土	Ⅲ	4		1	5	
Ⅳ	1				1	
Ⅴ	2				2	
Ⅵ	2				2	
Ⅶ	11	77			88	
Ⅷ	1				1	
Ⅸ	1				1	
V	2	-			2	
土 壁 合 計	24	77	1	102		
石	R - F	1		1		
石	フレイク・チップ	1		1	2	
石	石 砕	1			1	
石	地石墨晶品			1	1	
石	標・標 月	34	1	1	36	
石	有茎な鏡・鏡片			1	1	
石	石 壁 合 計	36	2	4	42	

	H-5	外	壁土1層	壁土2層	床	床	壁	合計
土	Ⅲ		2			2	4	
Ⅳ		1					1	
不 明				1			1	
土 壁 合 計	1	3				2	6	
石	R - F				1			1
石	フレイク・チップ			1				1
石	石 砕				3		3	
石	石 壁 合 計		1	1	3		5	

	H-4	I	Q	壁	床	壁	床	壁	床	合計
土	Ⅲ			1						1
Ⅳ		22	15	1	1				39	
Ⅴ		6	8	2				1	16	
Ⅵ		1							1	
Ⅶ		1						1		
Ⅷ		1						1		
Ⅸ		5	2		1				8	
土 壁 合 計	36	25	3	2	1			1	67	
石	R - F			1						1
石	フレイク・チップ	10	6							16
石	石 砕	1							1	
石	標・標 片		2							2
石	有茎な鏡・鏡片		1						1	
石	石 壁 合 計		1	13	7				21	

	H-6	壁 土	壁土上部	壁土中層	床 土	床	壁	合 計
土	Ⅲ		4	1	2	7		
Ⅳ		3			3			
Ⅴ		1			1			
Ⅵ		2	5	5	12			
Ⅶ			1		1			
Ⅷ			2		2			
Ⅸ		7	9	5	21			
V			1		1			
不 明		1	1	2	4			
土 壁 合 計	18	20	14	52				
石	石 砕		1		1			
石	石・ナイフ	1	1		2			
石	標・標 片		1		1			
石	R - F	1			1			
石	フレイク・チップ	5	2	5	12			
石	地石墨晶品	1			1			
石	標	1			1			
石	岸 片		3	1	4			
石	たたき 石		1		1			
石	標・標 片	1	8	3	9	21		
石	有茎な鏡・鏡片				1	1		
石	石 壁 合 計	1	17	12	16	46		

	H-7	壁土上部	壁土中層	壁 土	床 土	床	壁	合 計
土	Ⅲ			1		1	2	
Ⅳ		1	1				2	
Ⅴ		20					20	
Ⅵ		3	123	1	10	137		
Ⅶ			1				1	
Ⅷ		29					29	
不 明		53	19				72	
土 壁 合 計	106	145	1	11	263			
石	R - F	1					1	
石	フレイク・チップ	14	23				37	
石	石多・赤色晶片	1					1	
石	Ⅲ				1	1		
石	標・標 片	36	66				102	
石	有茎な鏡・鏡片		1				1	
石	石 壁 合 計	53	89	1	1	143		

5 T ピット

表VI-5 構造遺物集計表(2)

	H-8	基 土	5 基	6 基	底 底	壁	炉2底土	合 计
土	瓦	4	1	5				10
	瓦	6	23	20	1			50
	瓦	5	4	20	14			43
	瓦	1	17					18
	瓦	1	9	11				21
	瓦			1				1
石	不 明	1	2	4				7
	土 総 合 計	17	40	78	15			150
石	石 砂	1		1				2
	石 砂・ナイフ		1	1				2
	石 砂		1					1
	鐵 鉛 石 砂		1					1
	フレイク・チップ	7	9	24	14	1	5	60
	磨 石			1				1
	瓦		1					1
	石 片		2					2
	石 片	1	1					2
	燧石 鉛石 錫石		1					1
陶	燒 破 瓦	5	2					7
	燒 破 片	62	43	190				295
	有 定 形 烧 片		1					1
	石 総 合 計	71	58	227	14	1	5	376
	成 化 材		3	1				4
木	ベンガラ	2		1				3
	その他の合計	2	3	2				7

	H-9	日 砂 土	5層上部	6層中間	H-7底土中	基 土	底 底	合 计
土	瓦			10			1	11
	瓦			2				2
	瓦	1	4	2	2			9
	瓦	2		6		1	2	11
	瓦			6				6
	瓦	5	1					6
石	不 明	1					1	1
	土 総 合 計	7	2	12	20	2	1	74
石	石 砂			1		1	1	2
	石 砂・ナイフ			1		1		2
	鐵 鉛 石 砂		1					1
	灰 F			1				1
	フレイク・チップ	17	14	7	45	1	19	1104
	石 片			1		1		2
	石 砂			1				1
	石 砂・片	24	132	35	138			64 394
	石 総 合 計	41	147	42	187	1	22	67 507

	H-11	1 层	2 层	3 层	底 底	合 計
土	瓦	7			7	
	瓦	6		1		7
	瓦	13		5	18	
	不 明	16			16	
	土 総 合 計	42		6	48	
	土 砂 品	1			1	
石	石 砂・ナイフ		1		1	
	R F	1	1		2	
	フレイク・チップ	10		5	1	16
	石 片	1			1	
	た た き 石		1		1	
	石 砂		1		1	
	燒 破 石	4			4	
	石 砂 品	1			1	
	燒 破 片	21		8	1	30
	有 定 形 烧 片	1			1	
土	土 総 合 計	38	3	15	2	56

VI II層の激摶とその遺物

表VI-6 遺構遺物集計表(3)

P-1		國 土
土	國	11
	土	31
總	國 土 合 計	42

P-4	■ 土 5
土等	II

P-7	三日權土
土基	基
石基	權一號片

P-10	1	2	5	7	8	9	12	13	15	總	計
黑		2		1			1	1	1	1	7
黑4					1						1
黑3-2									1		1
黑 土 合 計	2	1	1	1	1	1	2	1	9		

P-13	西北 1
土器	瓦

P-15	2	周	底	合	計
土	四	4			4
	五		1		1
基	土	四	1		5
石器	器	一	破片		1

P-15	覆土上	覆土中	覆土下	ナ	シ	合	計
北	面	1					1
	厚さ	1	19	57	3	80	
總	土 箱 合 計	2	19	57	3	81	
五種	一 次	1	1	3			5

P-15		覆土1層	覆土2層	覆土3層	床	壁	合計
土 基 礎	1	1					1
	2		1				3
	3	1					1
	4		1				2
	5	4			1		5
	平均	1					1
	不 規 則	1					1
土 基 合 計		11	-	2	1	14	
石 材 部	た た き 石	1					1
	搬 ・ 搬 片	8	4				12
	石 基 合 計	9	4				13

P-19		國土
土 器	五	47
	四	5
	不 精	4
	土 器 合 計	56
石器	圓・扁片	1

P-20		國土
石	フレイク・チップ	14
	圓・扁片	1
	不 精	1
	石 器 合 計	15

	P-21	黒 土	黒 砂	合 計
土 基	Ⅲ	14		14
	Ⅳ	8		6
	Ⅴ	17		17
	Ⅵ	15		15
土 基 合	土 基 合	1		1
	不 基	1		1
石 基	土 基 合 分	54		54
	石 基 + ナイフ	1		1
	R - F	1		1
	フレイク - チップ	11	7	18
砂 基	石 基	1		1
	鐵	14	7	21
	磚 - 鋼 片	11	5	16
	石 基 合 分	39	19	58

P-12	1	2	3	4	5	合計
土 丘	2	1				3
瓦	1					1
透 土 基 礎 合 計	3	1				4
石 臼				1		1
フレイク・チップ	12	21		8		41
標 識	14	12	2	2		30
土 砂 合 計	26	33	2	11		72

P-24	國 土
土	2
里	2
町	1
都	3
市	3
五島	1
縣	1

P-12		1脚上細	覆土1	覆土3	覆土5	覆土8	覆土9	合計
土 盤	直			2		1		3
	直±		1					1
	W	18			2	1		21
	W±	1		7		1		9
不 透	W	40	37		2			79
	不 透 明	18	9		1			28
	土 透 合 計	77	47	7	7	3	141	
石 板	石 錐	1						1
	磨 錐	3						3
	フレイク・チップ	17		1	2			20
	石 錐 ミ ニ	1						1
板 橋	磨 石	2						2
	磨 ・ 錐 片	44		12	7	8	15	86
	有 名 な 磨 片	1	22					23
	無 名 の 磨 片	20	20	13	9	8	15	88

P-25		黑 土	褐 土 1	褐 土 2	褐 土 3	灌 溉	合 計
土 壠	基		1	16	84	20	91
	基±		1	5	24		30
	基b				4		4
	基±3	1		6	3		10
不 耕	不 耕		3	4	18	2	27
	石 砾 帶	基	1	5	31	103	22
石 砾	フレイ ク・チップ		2	3	3		8
	砾 - 破 片			1	1	1	3
	土 砾 含 計		2	4	4	1	11

5 T ピット

表VI-7 遺構遺物集計表(4)

	P-21	積土 1	積土 2・3・4	積土 3	積土 5・6	瓦	瓦	不規	合計
土	瓦	17	68	39	3	5	2	134	
	瓦	2	27	13	1		1	44	
	瓦			1				1	
	瓦						1	1	
石	瓦	9	1				2	12	
	不規	11	46	19	5			81	
	土器合計	39	142	71	10	5	6	273	
	石器						1	1	
岩	瓦		1		1			2	
	フレイク・チップ	1	4	1				6	
	無機質副品				1		1	2	
	陶・織片	15	35	2	3	6	2	1	64
樹	瓦	16	40	2	5	7	2	2	74
	土器合計						1	1	
	その他	ス	エ						1

	P-22	積土上面	積土	積土 1	積土 2	積土 3	積土 4	積土 5	瓦	不規	合計
土	瓦	5	3	10	16	9		1	3		47
	瓦	2		1	1						5
	不規			2	2			1		3	8
	土器合計	7	3	13	19	9	1	2	3	3	60
石	石器・織片				1	3		1			5
	その他	グル	エ								1

	P-23	積土 1	積土 4	合計
土器	瓦		1	1
石器	瓦	1	1	
石器	角片	1	1	
石器	土器合計	2	2	

	TP-1	1	瓦
土器	瓦	2	
石器	織・織片	175	

	TP-2	1	瓦
土器	瓦	9	
石器	織・織片	67	

	TP-3	積土
石器	織・織片	2

	TP-11	積土 1	積土 11	合計
土	瓦	2	1	3
石	瓦	4	4	
土器	土器合計	6	1	7
石器	織・織片	2		2

	TP-15	積土
石器	織・織片	1

	T	1	1	2	3	合計
土	瓦	10	10	2	31	
	瓦	1	3		4	
	瓦	1			1	
	土器	12	22	2	36	
石	土器	6	4		12	
	土器					
	土器					
	土器					

	F-36	積土表面
土器	瓦	2

	F-379	積土表面
土器	瓦	32

	F-18	積土中
土器	瓦	1

	TP-29	積土 1
土器	瓦	1

	TP-24	1	瓦	1	合計
土	瓦	1			1
	土器		1		1
	土器		1		1
	土器		1		1
石	フレイク・チップ	1	4		5
	石器		1		1
	石器		1		1
	石器		1		1

	TP-25	積土 1	積土 2	積土 3	積土 4	積土 5	合計
土	瓦	1		1		7	9
	瓦				2		2
	瓦				7		7
	瓦			2	2		4
石	土器	1	2	12	7	1	29
	フレイク・チップ	1	4				5
	石器		1			1	1
	石器		1			1	1
樹	織・織片		2				2
	石器		4	5			9
	石器						
	石器						

	F-48	積土上
土器	瓦	1

	F-53	積土上
石器	フレイク・チップ	39

	F-66	積土中
土器	瓦	1

	F-74	積土
土器	瓦	2

VII 低湿部包含層の遺物

1 概要

報告する低湿部の範囲は、図VII-1のごとく東側・西側・南側にある。東側と南側は、一連のものでオサツ川の旧流に、西側は旧ユカンボシ川の右岸に位置する低湿部である。報告はI黒層の土器・石器、II黒層の土器・石器と、木製品に分けて行うこととしたので、ここでは低湿部を別に整理しておきたい。

東側では、擦文土器が少量、続縄文時代後葉の土器がF-1周辺を中心に300点ほど出土している。縄文土器は、中・後・晚各期の土器が出土しており、なかでは中期前半と中葉、晚期前・中葉の土器が目立つ。石器はスクレイバー類・石斧等が少數出土しているのみである。II黒層の遺物は西側低湿部と較べると少量で、台地部の遺構の時期とも重なるものが少ない。

西側では、擦文文化期後期の復元土器一個体を除くと擦文・続縄文の土器の出土はごくわずかで、大半が縄文中・後・晚各期の土器である。中・後期は晚期ほどの点数ではないが、なかではそれぞれその前半の土器が多い。II黒層の土器は、東側低湿部に比してはるかに多い。石器も石鎚・石錐・スクレイバー類・石斧・たたき石・礎石・石鍤など器種、数ともに東よりも多い。

木製品は、舟関係・狩猟漁労具・容器・串類・杭や柱等の建材のほか、花矢・制裁棒・漆器・下駄も出土している。他には抉りや有孔の加工材や板材・割材・枝材・丸木材や樹皮などで、合計約300点を製品や加工材料としてとらえることができた。東側と南側は、I黒層とII黒層に数点あった以外は、I黒層で約150点。その中にあって、南側の出土数は、非常に少ない。西側はI黒層で確認できず、I黒層で約150点、II黒層で数点の出土で、木製品でみると、両低湿部は同程度の遺物包蔵状態であった。

(三浦)

2 I 黒層の土器・石器

(1) 土器 (図VII-2~10、表VII-1・2、図版VII-10・11)

VII群はおもにI B 3層以上で出土し、VI群はおもにI B 4層以下で出土する。

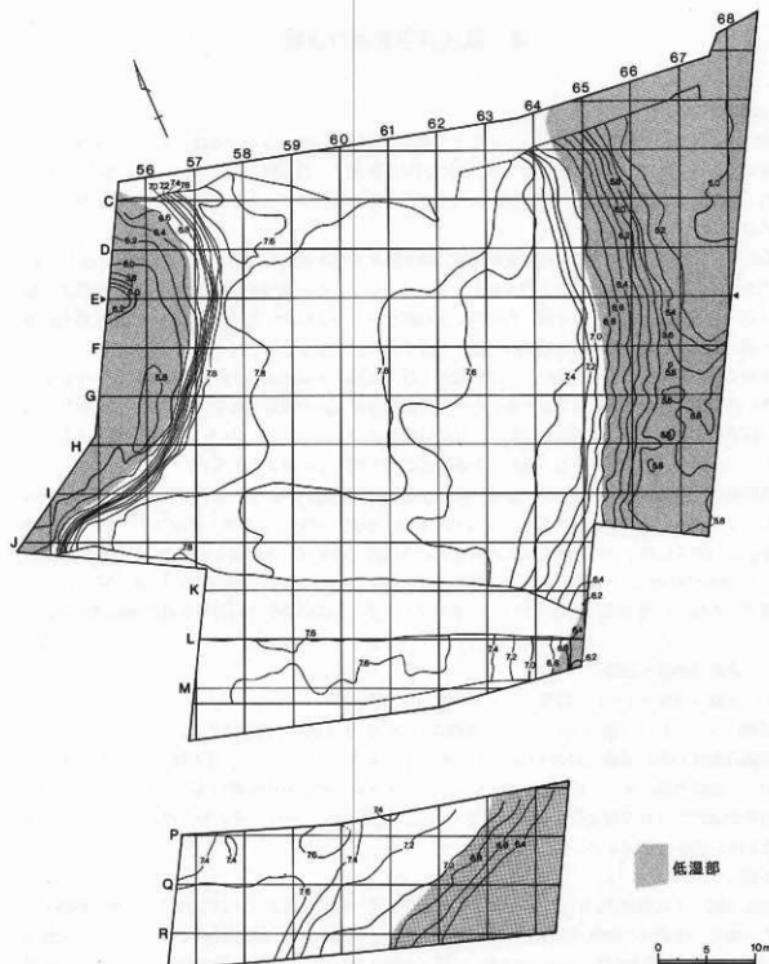
東側低湿部からはVII群土器が304点、VI b類土器が35点出土しており、VI c類土器が246点出土している。VII群土器が8点、VI b類土器が1点出土している。擦文前中後期の土器は出土していない。

西側低湿部からはVII群土器が3点出土している。VII群土器が146点、VI b類土器が1点出土し、VI d類土器が146点出土している。

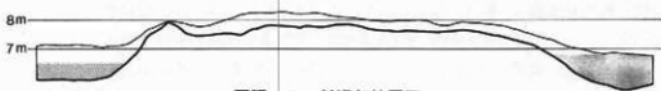
VI b群

後北A式：1は深鉢の口縁部、外面はRL横走→ナデ→横位隆起線文・刺突→垂下する隆起線文・刺突→頸部文様帶内に刺突→斜線文、内面はヨコナデ。外面には炭化物が付着する。2・3は深鉢の口縁部、外面は横位隆起線文→隆起線間に刺突、内面はヨコナデ。7は深鉢の頸部、外面はナデ→横位隆起線文・刺突→隆起線わきに刺突、内面はヨコナデ。

後北B式：4は深鉢の口縁部、外面はRL横走→ナデ→横位隆起線文・刺突→頸部文様帶内に刺突、内面はヨコナデ。5は深鉢の口縁部で全体に摩滅している。外面はRL横走→ナデ→横位隆起線文・刺突→頸部文様帶内に刺突、内面はヨコナデ。6は深鉢の口縁部、外面はナデ→横位隆起線文・刺突→頸部文様帶内に隆起線文・刺突、内面はヨコナデ。8は深鉢の頸部で全体に摩滅している。外面はナデ→隆起線文・刺突、内面はヨコナデ。9は深鉢の胴部、外面はRL縦走→頸部文様帶内に刺突、内面はヨコナデ。10は深鉢の頸部、外面はRL横走→ナデ→頸部文様帶内に刺突→押引文、



・センターは、最終面(E n - L 上面)での測量



図版-1 黒層部範囲図

内面はヨコナデ、周囲を円盤状に打ち欠く。

Vc 群

後北 C₂・D 式：11は深鉢の口縁～頸部、外面はナデ→RL 帯状→弱いナデ→弧形の微隆起線文→刺突、内面はヨコナデ。内面に炭化物が付着する。12は深鉢の頸部、外面はナデ→RL 帯状→弱いナデ→弧形の微隆起線文→刺突、内面は摩滅している。14は口縁は端面を形成するくらいに肥厚気味である。口縁端面が内傾する。刻みのある微隆起線文がない。底部はいくぶん構円形になっている。図の左側の体部上半が内傾し、上面観は口縁が弧を描かず尖っていることから注口が付くと思われる。後北 C₂・D 式末期に当たる。15は口縁部の上面観が四角形で4か所の平縁に小突起をもつ。頸部上半は直線的で頸部にくびれはない。口縁部断面形が方形で口縁端面がやや水平。後北 C₂・D 式末期の時期にあたる。

北大 I 式：13は胴下半～底部、外面はナデ→RL 帯状（V字のモチーフ）→刺突、内面は摩滅している。16は胴部上半は直線的で頸部にくびれなく、胴部下半は内湾気味にたちあがる。口縁部断面形が方形で口縁端面がやや外傾する。口縁部に微隆起線文をもつが円形刺突文はない。17はミニチュアの鉢胴部が内湾気味にたちあがり、口縁部断面形が方形で口縁端面がやや外傾する。北大 I 式の古い時期にあたる。

Vi e 類：18は内面はヨコナデ→タテナデ、外面はタテケズリ。胴部下半が内湾気味にたちあがり、底部はやや横に張り出す。

Vi 群

Vi d 類：19は口縁部が直線的に外反し立ち上がる。貼付帯に馬蹄形圧痕文をもつ。図V-4-44より更に頸部が退化している。文様によって口縁部と頸部と胴部が区別できるに過ぎない。

(2) 復原個体の接合関係と分布について（図V-4-5）

後北 C₂・D 式の深鉢（2-14）はE 61 aに離れて接合関係を持つ。無文の深鉢（4-15）は北大 I 式の深鉢（4-16）と接合関係が重複するがより広く分散している。

北大 I 式の深鉢（4-16）はF-1の東側とI 66 aに分布し、北大 I 式の深鉢（図V-25-12）の接合関係と重複する。

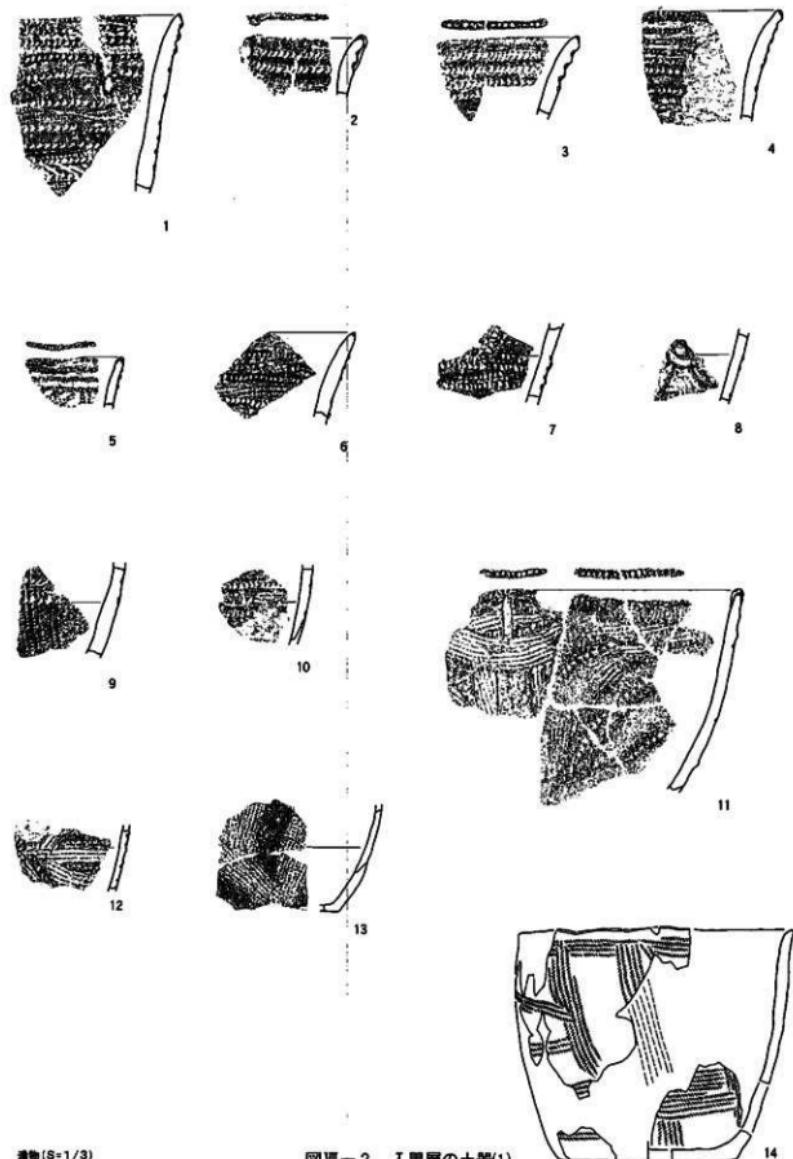
北大 I 式の深鉢（4-16）、F-1の深鉢（図V-25-12・13）は一群の土器集中と考えられ、一括性が強い。また、F-78（図V-26-18）の深鉢も同じ斜面の南西側に統いて分布していることから同じ時期ととらえてよい。

土器破片の分布の特徴は、西側低温部（旧ユカンボシ川）よりも東側低温部（旧オサツ沼）に多く出土している。このことは、河川口に面している立地よりも沼に面している立地を活動の中心としていることがうかがえる。

上述に傾向は続縄文時代後葉に顕著である。後北 C₂・D 式は東側低温部斜面の北東寄りの標高7.5m前後に分布している。北大 I 式は東側低温部斜面の南東寄りの標高7.0m以下の一段低い斜面裾部に分布している。F-1の標高は約6.7mである。北大 I 式期の頃には活動域が低い部分にあったといえる。

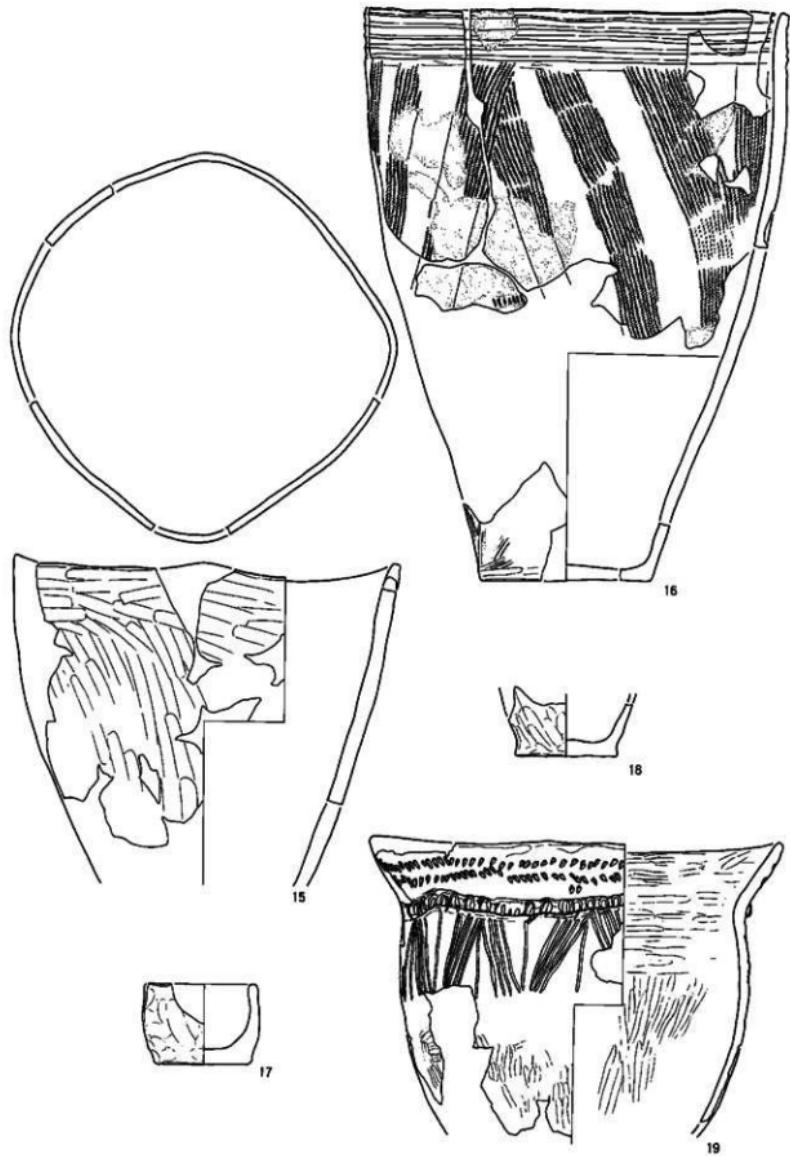
（鈴木）

2 I 黒層の土器・石器



遺物(S=1/3)

図版-2 I 黒層の土器(1)

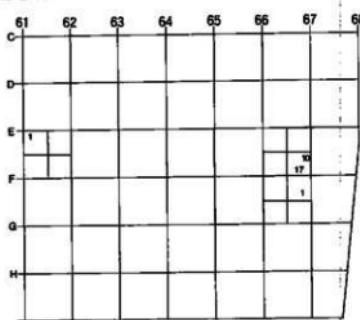


図VI-3 I 黒層の土器(2)

遺物(S=1/3)

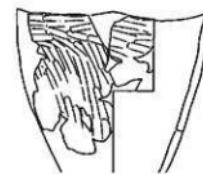
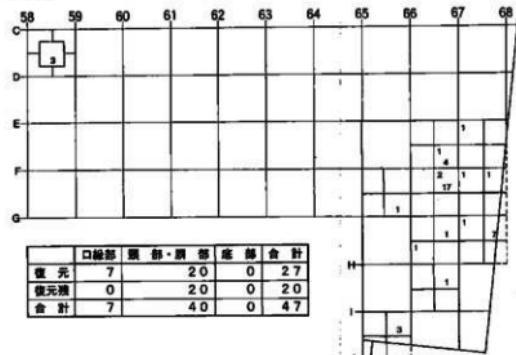
2 I 黒層の土器・石器

W-2-14

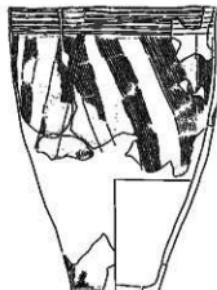
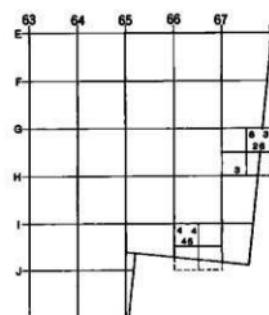


	口縁部	頭・肩部	底 部	合 計
復元	1	7	7	15
復元残	0	11	3	14
合計	1	18	10	29

W-3-15



W-3-16

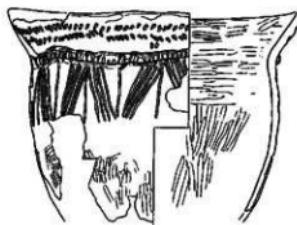
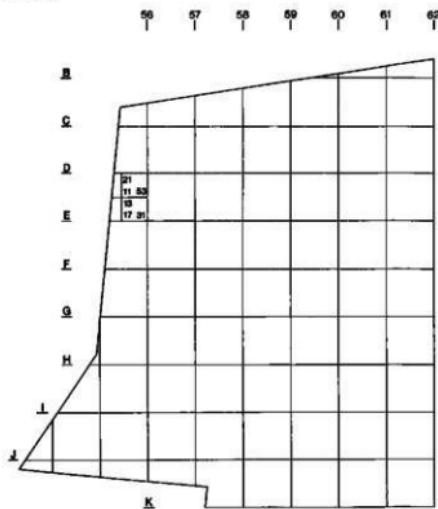


	口縁部	頭・肩部	底 部	合 計
復元	14	84	7	105
復元残	0	0	0	0
合計	14	84	7	105

口縁部	底 部
頭部・肩部	

図版-4 I 黒層の土器接合図(1)

W-3-11



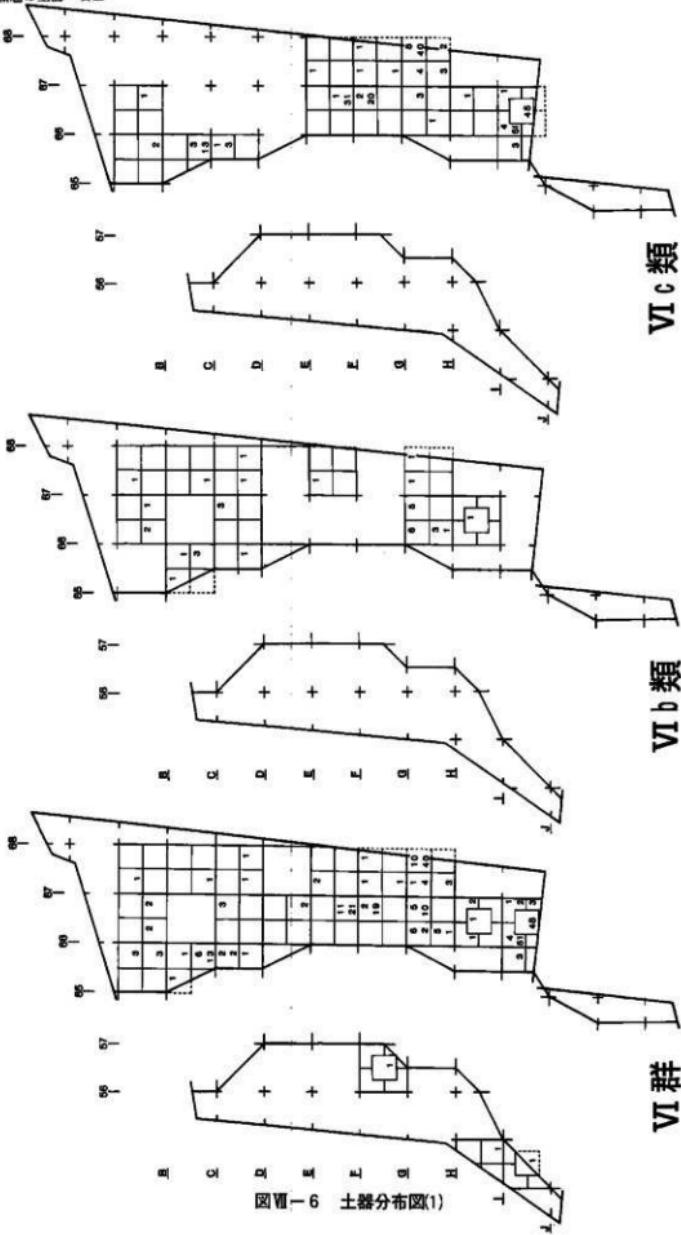
	口縁部	頭 部	肩 部	底 部	合 計
復元	14	13	25	0	52
復元残	20	15	59	0	94
合 計	34	28	84	0	146

部位不明細片数：124

口縁部	底部
頭部	肩部

図VII-5 I 黒層の土器接合図(2)

2 I 黒廻の土器・石器

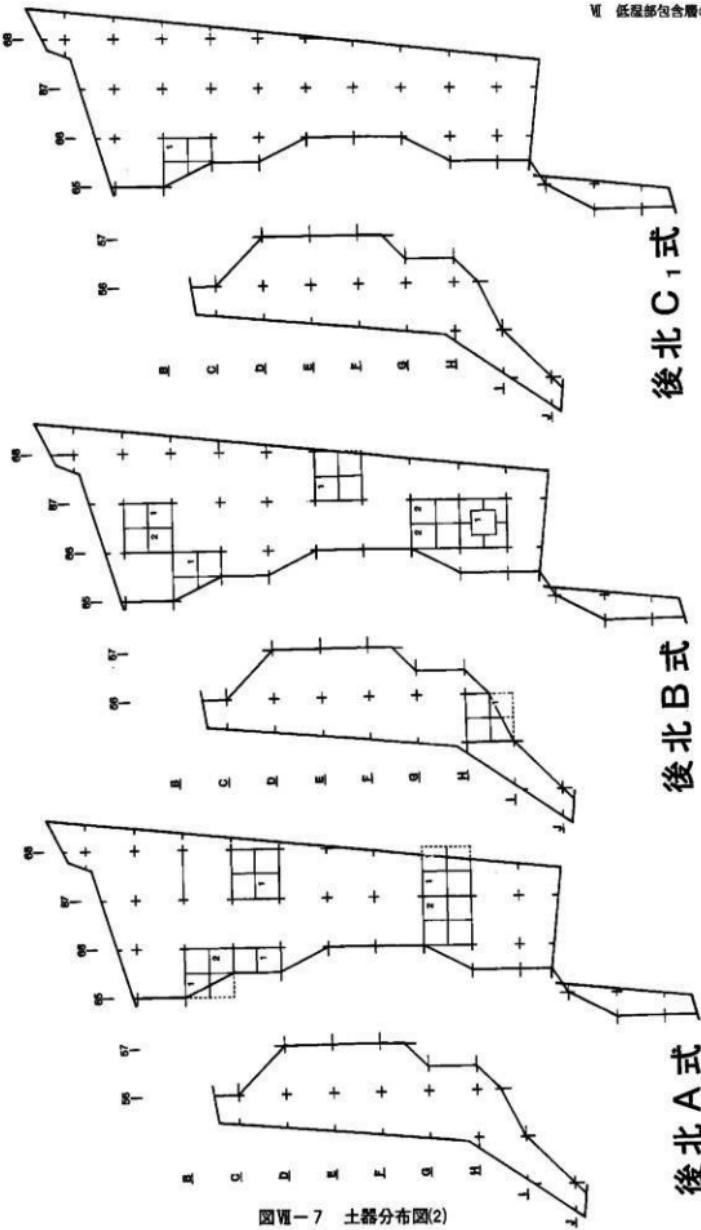


図Ⅷ-6 土器分布図(1)

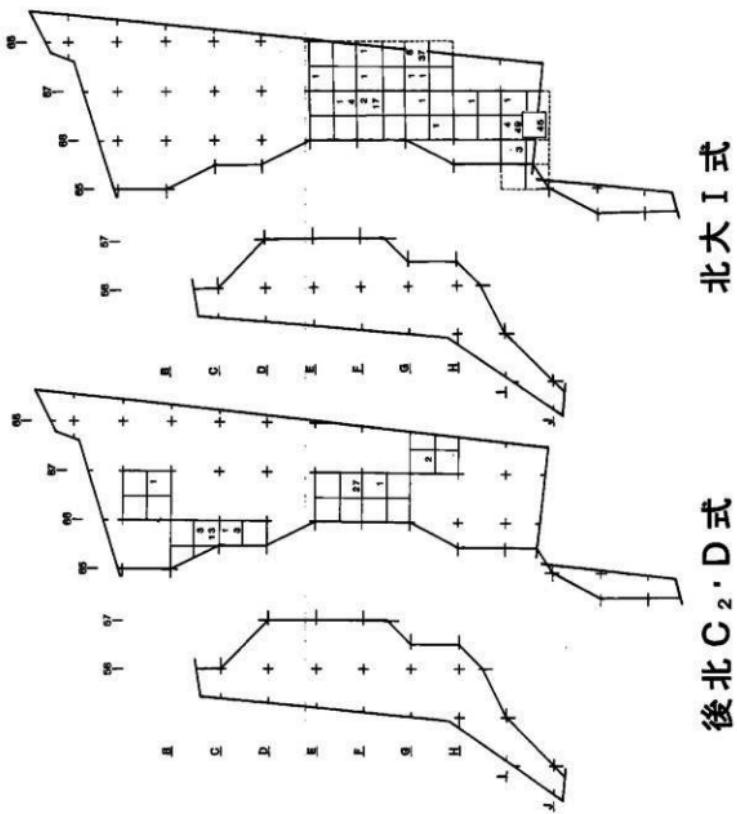
後北C₁式

後北B式

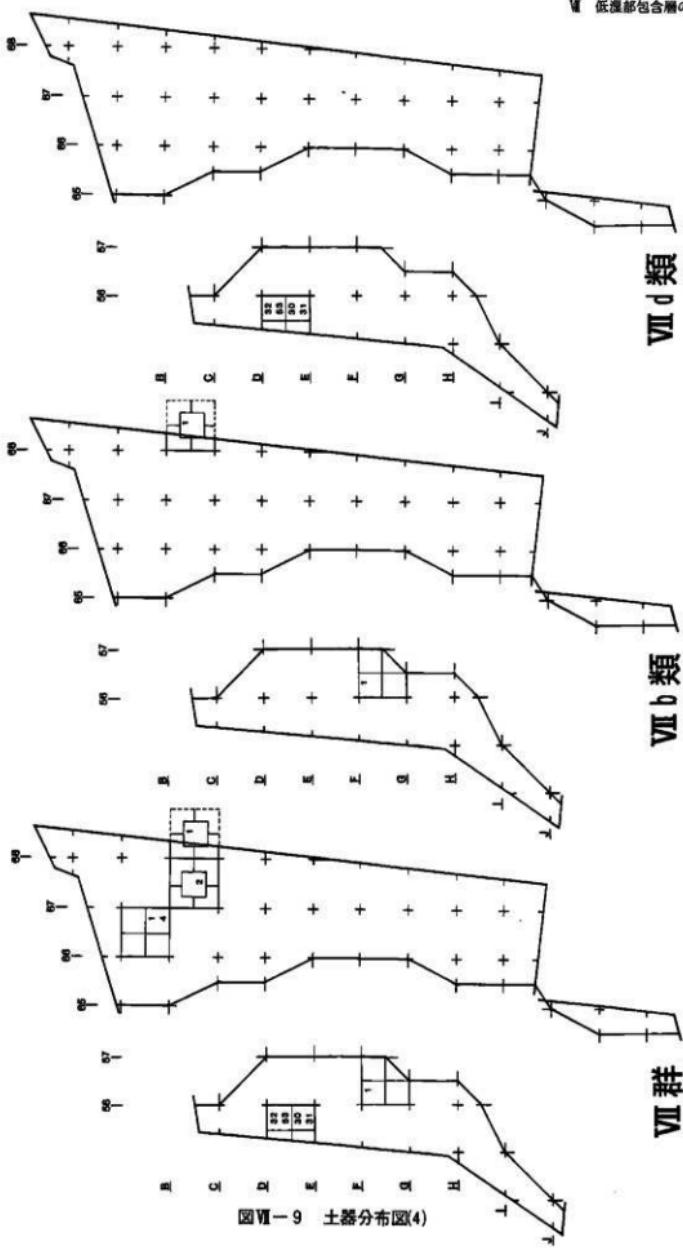
後北A式

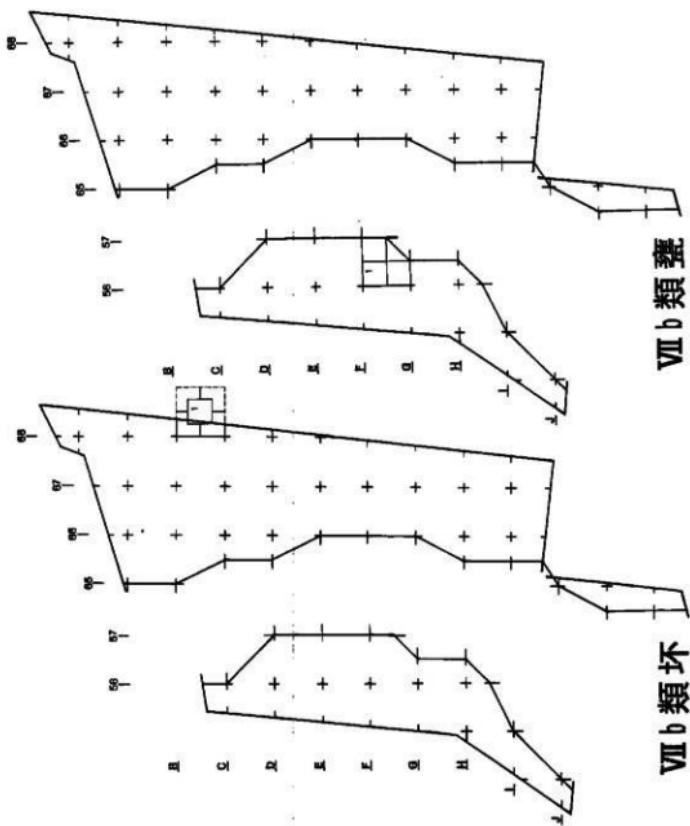


図VII-7 土器分布図(2)



図VII-8 土器分布図(3)





図Ⅶ-10 土器分布図(5)

表VII-1 土器觀察表

W-2-11

3-15

四

數VI-2 圖解機械土器一章

图 号	先锯区	锯 位	分
VII-2-1	B65 C	1B-4	VII b
2	B65 C	1B-4	VII b

218

2 I 黒層の土器・石器

(3) 石器等

石錐 (図版-12)

1点が出土している。石質は黒曜石。図示していない。分布図のみ掲載した。

スクレイパー (図版-11-1~5、図版-12、表版-3、図版-12)

11点が出土している。そのうち5点を図示した。石質は全て黒曜石である。1はⅡB層で検出されたが、I B層の縄文晚期、続縄文期の可能性が強い。下部と裏面右側面に刃部をもつもの。2は表面に原石面が残る。下部と右側面に刃部をもつ。3は下部と右側面に刃部をもつ。1~3はすべて裏面に主制離面を残す。2・3は北大式期のF-1・78出土のスクレイパーの形態に似る。4は綫長の剥片のパルプ付近を刃部に形成。5は表面に原石面が残る。下部から右側面に刃部が形成される。

石核 (図版-12)

2点が出土している。石質は1点が黒曜石、1点が矯正岩で、図示していない。分布図のみ掲載した。

石斧 (図版-11-6、図版-12、表版-3、図版-12)

1点が出土している。6は石質は泥岩。富良野市無頭川遺跡などの縄文晚期の石斧に似る。

たたき石 (図版-12)

3点が出土している。石質は砂岩、安山岩と閃緑岩である。図示していない。分布図のみ掲載した。

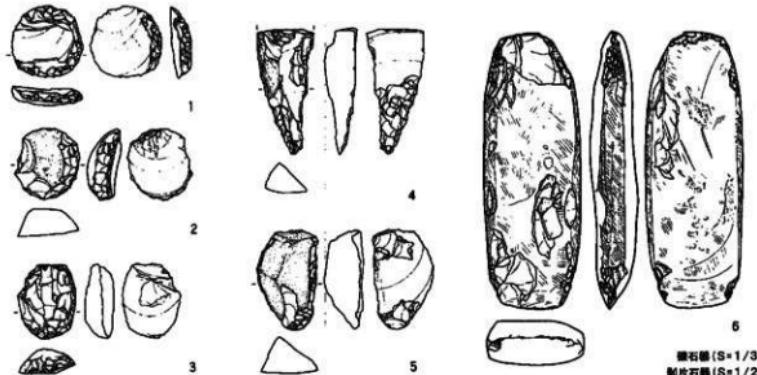
砥石 (図版-12)

1点出土している。図示していない。分布図のみ掲載した。

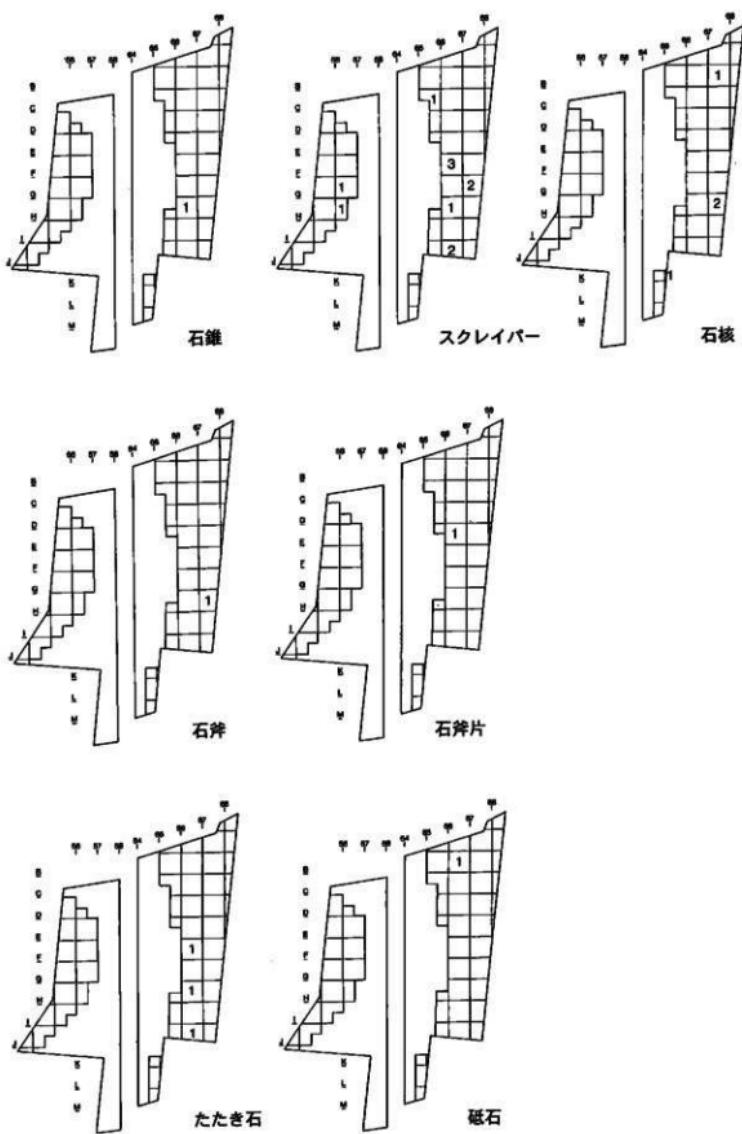
(倉橋)

表版-3 I 黒層掲載石器一覧

掲載番号	調査区	遺物番号	分類	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	材質	備考
W-11-1	H	65 c	189	スクレイパー	I B?	28.8	29.0	6.1	5.1	黒曜石
W-11-2	I	66 a	187	スクレイパー	I B	28.4	25.0	10.6	9.2	黒曜石
W-11-3	F	67 b	56	スクレイパー	I B	30.4	23.7	9.5	7.5	黒曜石
W-11-4	G	56 b	12	スクレイパー	I B 1	50.8	22.0	11.6	10.1	黒曜石
W-11-5	F	56 c	10	スクレイパー	I B 4	40.0	24.2	11.7	1.2	黒曜石
W-11-6	G	67 c	199	石斧	I B	170.0	58.0	3.1	492.7	泥岩



図版-11 I 黒層の石器



図VII-12 石器分布図(1)

3 II 黒層の土器・石器等

(1) 土器

III群土器(図VII-13-1~7、表VII-4、図版VII-13)

1~3・5・6はIII群a類土器である。1は波頂部破片である。器外面について、並列する2本の粘土紐を、口縁部沿いと波頂部からの垂下文様とに貼り付ける。隆帶上にLR繩線を施す。口唇部にはLR繩文を施す。粒径2mmの小砂粒を含む。内面は磨きによって調整する。2は口縁部が肥厚し、外面にLR繩文をほどこす。地文は結束第一種羽状繩文である。3は口縁部の肥厚帯直下に粘土ひもを貼り付け、縦方向の刻みを連続して施す。破片には斜めに貼り付けた隆帶をもつ。内面は横向方向の丹念な磨きによって調整する。焼成は比較的良好である。5は胴部破片である。波頂部から垂下した隆帶文様が8の字形に残存する。内面は横方向の磨きによって調整する。胎土には、微細な長石粒を混和剤としてよく含む。焼成は良好である。6は口縁部分の隆帶を繩の端部によって連続押圧する。胎土には粒径1mmの小石粒をよく含む。内面はなでによる調整を施す。4、7はIII群b3類である。いずれも補修孔がある。4は結束第一種羽状繩文を地文に持つ。口縁部分にくびれを持つ。口縁端部には指頭による押圧痕がある。成形の際のものと思われる。胎土には微細な長石・雲母の小砂粒をよく含む。7は地文にLr繩文を施した後、調整と思われる擦痕が全面に残る。口縁部内面、口縁端部には器外面と同一原体による繩文を施す。器面にはすが全面を覆う。またIII群土器片による再生土製円盤が出土している(図VII-26-1、12)が、台地の項目に一括して記載した。

IV群土器(図VII-13-8~15、表VII-4、図版VII-13)

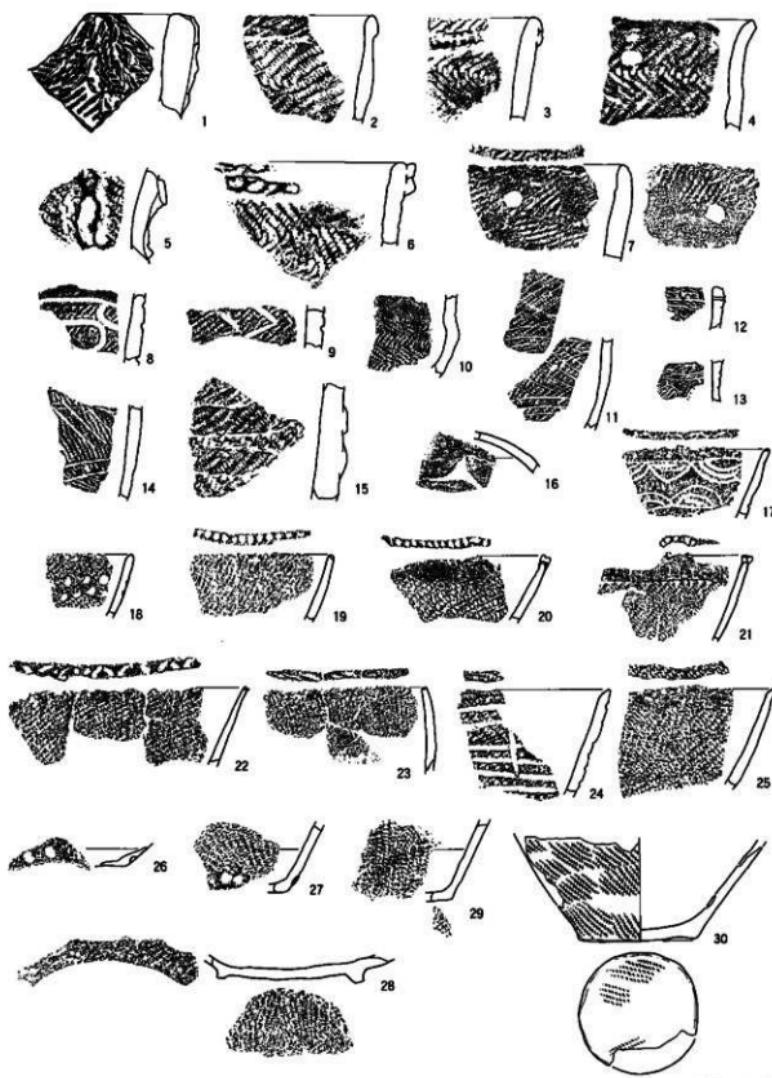
8・9はIV群b類土器である。8は手稻式土器の胴部である。沈線により器面を飾る。横方向に平行な直線を縦位の弧線により区画する。9は平行する鋸歯状の沈線を想定できる。10はIV群土器である。器の屈曲部分である。屈曲部は無文帯である。11~14はIV群c類土器である。11は球形をした胴部破片である。注口土器の可能性がある。器面には細沈線で直線構成の文様を描く。12・13は小型の器である。いずれも器壁が薄く、焼成が良い。磨り消し文様を持つ13は、残存する屈曲部分から注口土器の破片である可能性がある。15はIV群a類、余市式土器である。地文にRL繩、隆帶上にLR繩を施すことで、羽状に器面を飾る。

(大泰司)

V群土器(図VII-13-16~30、VII-14-1、表VII-4、図版VII-14・15)

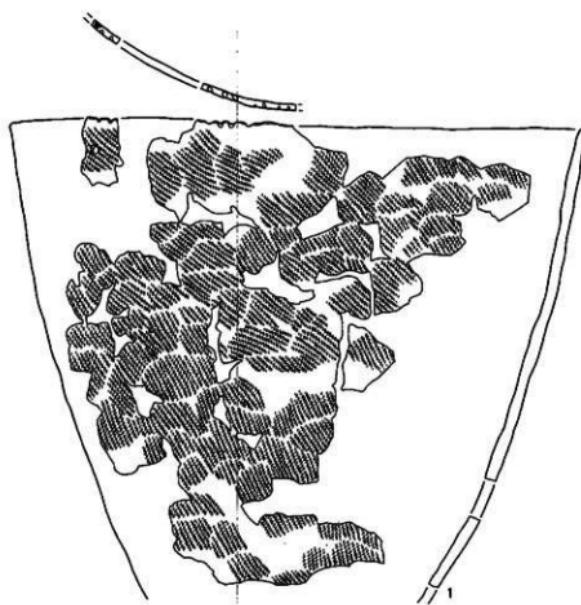
a類 東側の低湿部のEラインより北から主に出土したが、多くは磨滅し、細片化していた。16は壺の肩部で、無文地に三叉文が施されている。調整は外面がミガキ、内面はナデである。胎土に海綿骨針を含む。大洞B-C式かと思われる。17は無文地に横走する2条の沈線を施し、それらの間に沈線で連弧文を描いたものである。胴部には斜行繩文が施されていると思われる。口縁部の断面は角張り、口唇には円弧状の短沈線が施されている。内面の調整はヨコナデである。18はLR繩文を地として竹管状工具による刺突文が施されたもので、口唇直下には無文帯がある。26・27は立ち上がりの部分にLR繩文を施した後、刺突文(26)や爪形文(27)を加えたものである。26の同一個体片で口縁部に刺突文の施された破片が出土したが、磨滅が激しいため図示しなかった。18・27の内面はみがかれている。これらは大洞B-C式に併行するものかと思われる。

b類 1は東側の低湿部で径2.5mほどの範囲からまとめて出土した深鉢で、全面にRL繩文が施されている。やや内縫気味に立ち上がる器形で、口縁部の断面は角張り、口唇には刻み目が施されている。接合しなかったが、上げ底で繩文の施された底部破片が出土している。器壁は薄い。内面は粗いナデ調整がなされており、器面には凹凸が残る。内面には炭化物が付着している。19~22はLR繩文の施されたもので、口唇には刺突(21)や刻み目(19・20・22)が加えられている。20・21は口



遺物 (S = 1 / 3)

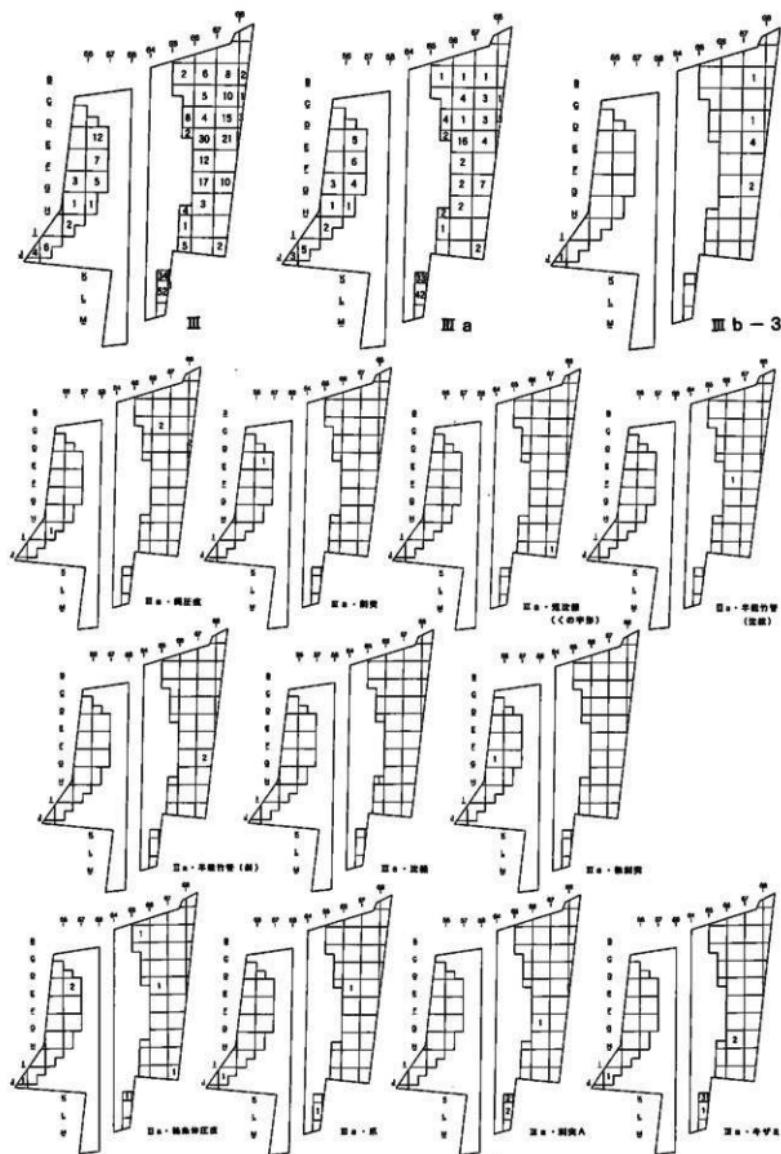
図VII-13 II 黒層の土器(1)



図VII-14 II 黒層の土器(2)

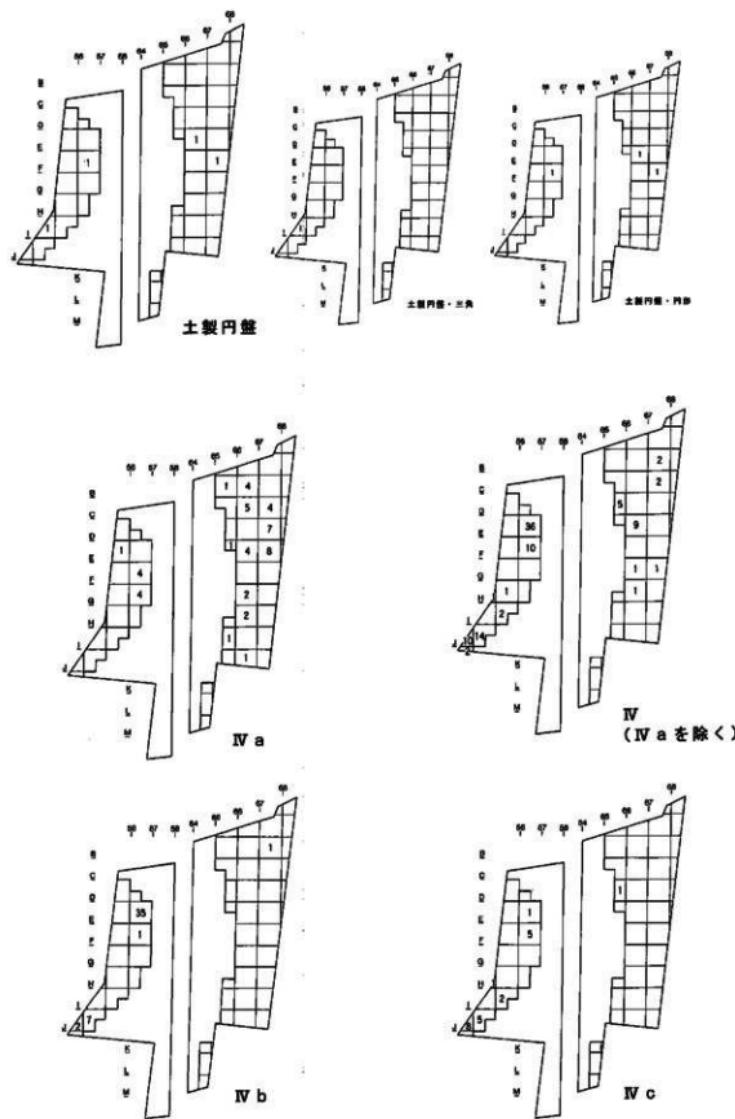
表VII-4 II 黒層掲載土器一覧

図番号	発掘区	層位	分類と備考		
VII-13-1	I 55a	II B	III a 織縫		
2	A 66c	II B下	III a 口縁部肥厚部に網文		
3	I 55	擾乱	III a 口縁部肥厚部に網文		
4	C 67d	II B下	III b-3		
5	J 55a	II B	III a 爪		
6	G 56a	擾乱	III a 刺突		
7	J 54a	II B	III b-3		
8	I 55c	擾	IV b 手縫式		
9	I 55d	擾乱	IV b クリッカ式		
10	I 55b	II B	IV c 堆林式		
11	I 53c	擾	IV c 堆林式		
	I 54a	擾	IV c 堆林式		
12	G 56c	II B	IV c 堆林式		
13	I 53d	擾	IV c 堆林式		
14	E 66c	擾	IV c 堆林式		
15	D 55b	I B	IV a 余市式		
16	C 65d	I B 4	V a		
17	B 66a	II B上	V a		
18	E 66c	II B (焼)	V a		
19	F 55d	II B (焼)	V b		
20	B 66a	II B上	V b		
21	C 65d	I B	V b		
22	H 54a-H 55	I B・II B	V b		
	d-1594				
23	H 55c-165	II B	V b		
	d				
24	E 66b	II B (焼)	V c		
25	E 55c	II B (焼)	V c		
26	A 66b	II B上	V a		A 66c-G 56c一部
27	G 56a	II B (焼)	V a		
28	E 55d	II B (焼)	V b		
29	E 66c	I B 4	V b		
30	B 66a他	II B上	V b		
図番号	発掘区	層位	分類と備考		
VII-14	I 65d他	II B	V b		

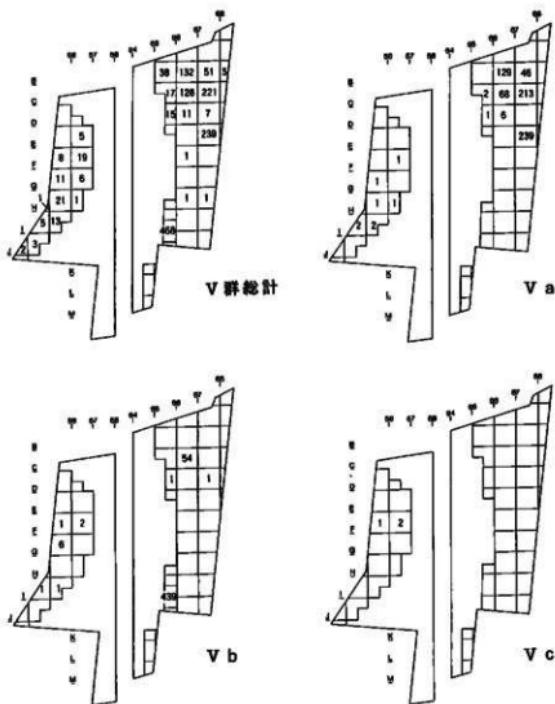


図VI-15 土器分布図(6)

3 Ⅱ黒層の土器・石器等



図版-16 土器分布図(7)



図面-17 土器分布図(8)

唇直下にヨコナデによる無文部がある。21は突起の両端に粘土粒を貼付し、それらの間を内面側にへこませている。22の刻み目はハの字状である。これらの内面は横方向になでられている。以上の土器は大洞C₁式に併行すると思われる。

23は口縁の内彎する器形のもので、縦走するRL縞文が施され、口唇には斜方向の刻み目がみられる。内面の調整はヨコナデである。大洞C₂式に併存すると思われる。

28~30は深鉢の底部で、いずれも底面に繩文が施されたものである。28は上げ底で、底面には炭化物が付着している。30はわずかに高台状になり、底面は丸みがある。内面の調整は、28はミガキ、29・30がナデである。

●類 西側の低湿部からわずかに出土した。24は深鉢で、RL 斜行繩文を施した後に横走する沈線をめぐらし、縦位の沈線を加えたものである。25は鉢と思われ、LR 繩文が施されている。これらの口縁部の断面は切り出し形で、口唇には縄文が施されている。内面調整は横ナデである。25は胎土に海綿骨針を含む。これらはママチ2類に相当すると思われる。 (中田)

(2) 石器等

石鎚 (図版-18-1~3、図版-19、表版-5、図版版-15)

7点が出土している。このうち3点を図示した。石質はすべて黒曜石である。1は平基。2は凹基。3は有茎鐵。1、2は縄文前期、3は縄文後期に見られる石鎚に形態が似る。土器の分布は縄文早期、前期のものはほとんど見られず、出土の経緯、経路がはっきりしない。

石槍・ナイフ (図版-19)

1点が出土している。図示していない。分布図のみ掲載した。

石錐 (図版-19)

1点が出土している。図示していない。分布図のみ掲載した。

つまみ付きナイフ (図版-18-4、図版-19、表版-5、図版版-15)

1点が出土し、図示した。4は石質が黒曜石。表面が周縁加工されている。

スクレイバー (図版-18-5~7、図版-19、表版-5、図版版-15)

10点が出土した。このうち3点を図示した。石質は5が頁岩、6がメノウ質頁岩で、7が黒曜石である。3点とも側縁に刃部をもつもの。5は裏面の剥離によりつまみ付ナイフのような使用も考えられる。

石斧 (図版-19)

石斧8点、石斧片2点、石斧未製品1点が出土している。図示していない。分布図のみ掲載した。

たたき石 (図版-20)

3点が出土している。図示していない。分布図のみ掲載した。

北海道式石冠 (図版-18-8、図版-20、表版-5、図版版-15)

1点出土した。4点に破損して出土したが、接合により1点となった。①地区からの出土はこれ1点のみである。下方から上方へのすり面の調整が行われている。

台石・石皿 (図版-18-9、図版-20、表版-5、図版版-15)

1点出土している。1点図示した。9はC 66 c II B下から出土した台石である。全体に研磨され、整形されている。石質は多孔質の安山岩である。

砥石 (図版-20)

1点が出土している。図示していない。分布図のみ掲載した。

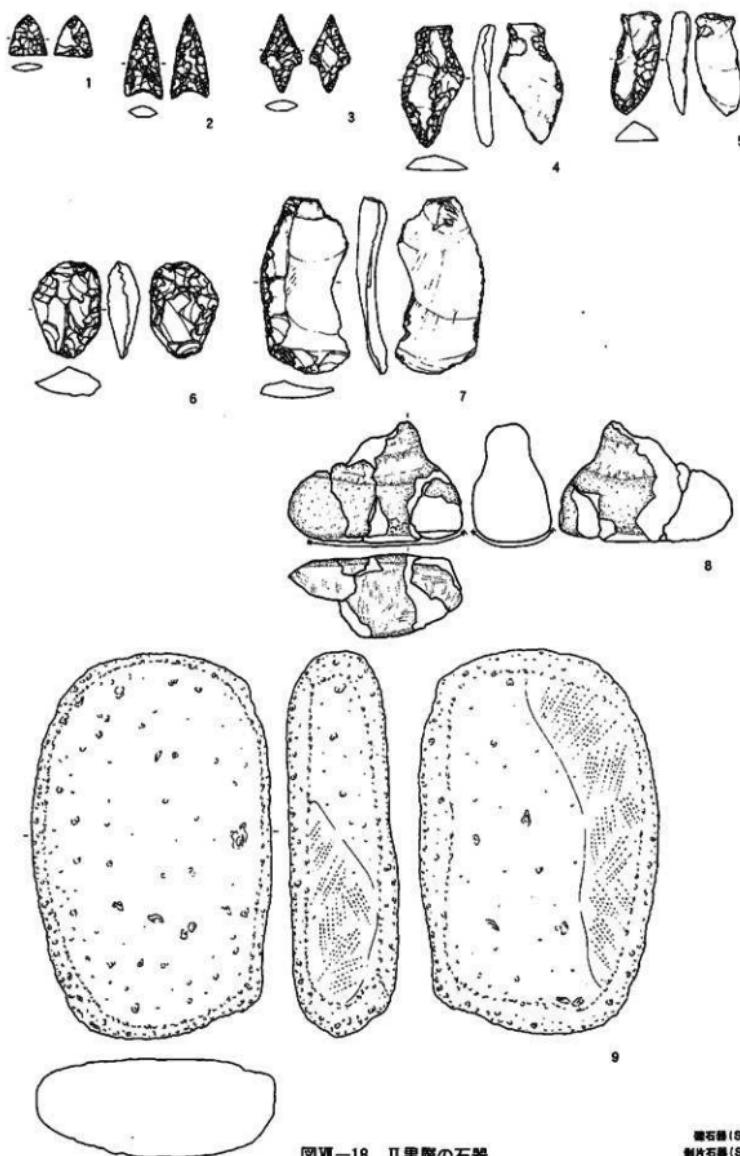
石錐 (図版-20)

5点が出土している。図示していない。石錐は台地部F 65区と低地部F 67区からそれぞれ5点の出土である。分布図のみ掲載した。

(倉橋)

表版-5 II 黒層掲載石器一覧

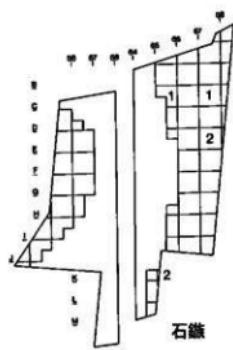
掲載番号	調査区	遺物番号	分類	場所	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	材質	備考
W-18-1	B	67 b 5	石鎚	II B下	15.7	14.1	2.3	0.5	黒曜石	
W-18-2	L	64 d 3	石鎚	II B	29.6	14.5	4.1	1.6	黒曜石	
W-18-3	J	54 a 14	石鎚	II B	31.5	16.3	3.6	1.2	黒曜石	
W-18-4	J	65 b 5	つまみ付きナイフ	II B	49.2	24.6	6.0	7.2	黒曜石	
W-18-5	C	66 d 7	スクレイバー	II B下	42.2	16.5	7.1	5.3	頁岩	
W-18-6	J	53 d 5	スクレイバー	II B-4	38.2	27.1	12.0	11.7	頁岩	
W-18-7	H	55 d 4	スクレイバー	II B	71.1	32.9	6.0	14.4	黒曜石	
W-18-8	F	66 c 96	北海道式石冠	II B	(71.5)	(106.9)	48.0	316.0	安山岩	
W-18-9	C	66 c 8	台石	II B下	315.0	195.0	76.7	7600.0	安山岩	



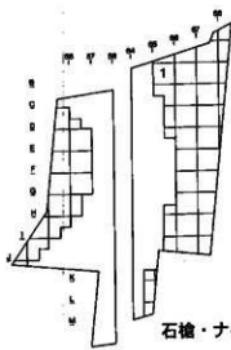
図VII-18 II 黒層の石器

破石器(S=1/3)
剥片石器(S=1/2)

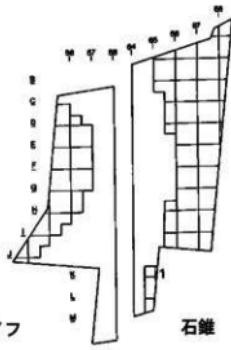
3 黒層の土器・石器等



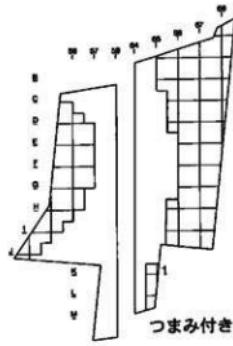
石礫



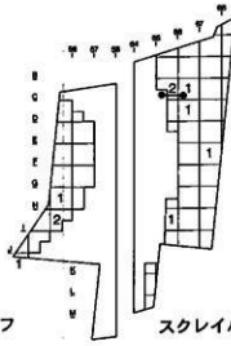
石礫・ナイフ



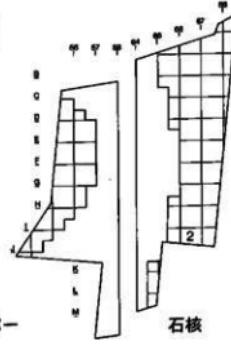
石錐



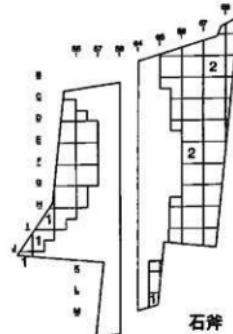
つまみ付きナイフ



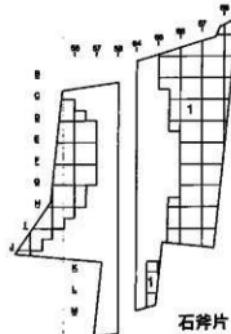
スクレイパー



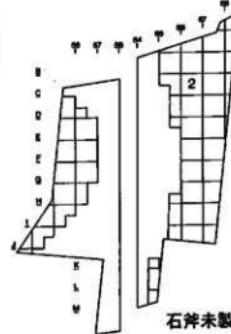
石核



石斧

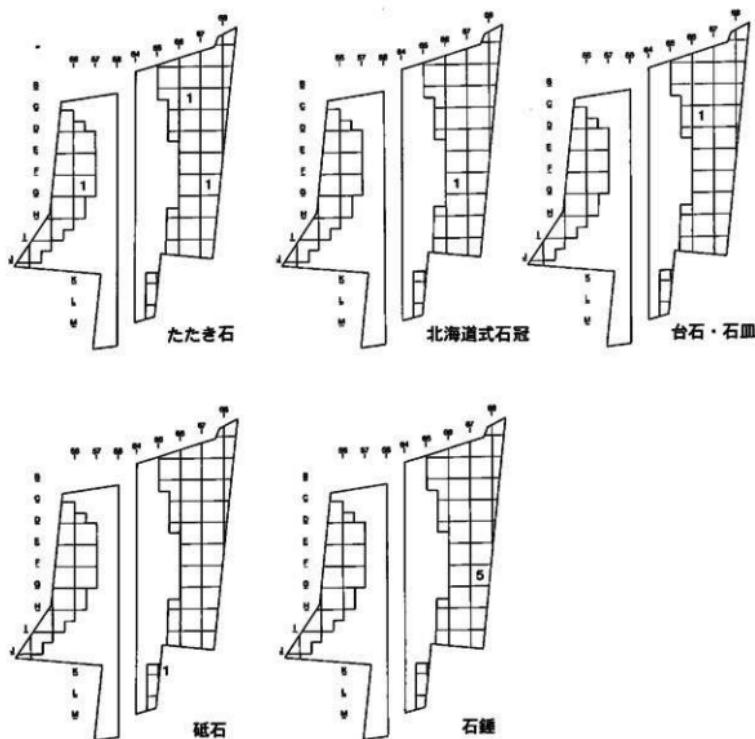


石斧片



石斧未製品

図VI-19 石器分布図(2)



図VII-20 石器分布図(3)

4 木製品

ここで報告する製品は、図Ⅶ-24~39、表Ⅶ-6・7、図版Ⅶ-16~27に示した計81点の木製品・漆製品・樹皮加工品を代表とする。ただし、図・写真未掲載の245点の製品等も表Ⅶ-8~13にまとめておいた。

(1) 出土状況

低温部の0黒・I黒・II黒層から出土した木製品・漆製品・樹皮加工品は合計324点（搅乱の1点と、台地上0黒の漆製品1点を除く）で、その内訳は0黒層：木製品9点、I黒層：木製品272点・漆製品1点・樹皮29点、II黒層：木製品13点である。I黒層では、木製品の60%以上169点がIB1層、20%55点がIB2層、12%32点がIB3層という割合を示す。総製品数に占める、アイヌ文化期から擦文文化期の製品は、0黒層からIB3層で294点、90%以上である。特に0黒層とIB1層の近世アイヌ文化期の製品が、199点60%以上と高い出土率を示す。

これを低温部別で見ると、木製品では、東側と南側で0黒層とII黒層に数点あった以外は、I黒層で147点となる。南側の総出土数は10点と、その中にあって非常に少ないが、そのうちIB3層に6点と高い割合を示す。西側では0黒層は確認できず、I黒層で126点、II黒層で8点の出土である。樹皮は東側IB1層の5点と、西側のIB1~3層出土の24点となる。

東西の両低温部は同程度の遺物包蔵状態といえるが、I黒層の細分で微妙な違いもある。IB1・2層においては西側の方がやや多く、量的に少ないIB3~5層では南側も含めて東側が高い割合を示している。全層、0B・IB1層、IB2層の各木製品出土位置図を図Ⅶ-21~23に掲載してある。

(2) 木製品・漆製品・樹皮加工品

表Ⅶ-6~13に示したごとく、名称・出土位置・層位のほか、木取り・樹種・大きさ等を示してある。また、掲載した図の縮率にバラつきがあるので、表Ⅶ-6・7にはこれも示した。以下、主な表項目の説明を記しておく。

【木取り】：板材やそれを利用した製品では、柾目・板目・追柾に分けている。割材やそれを利用した製品で樹心を通って割っているものは、半割・1/4割・1/6割・1/8割・1/12割・1/16割、樹心をはずして割っているものは、偏○割・心持と分類してある。刺り物（舟・容器）は今回はすべて横木取りである。杭や枝材など棒状の材で割りのないものは、丸木と表現している。

【樹種】：基本的には顕微鏡観察で、属までの同定である。樹種同定については、IV章表土層の遺構分も含めて次項で詳述する。層位や地点を無視して樹種だけでいえば、0B層以下同定294点中トネリコ属が143点約49%と、圧倒的多数を占める。他では、ヤナギ属25点約8.5%・イヌエンジュ21点約7%・コナラ属約20点7%が目立ち、あと25属等は各10点以下である。また少數だが、スギ・ヒノキ属？アスナロ属？・ブナ・ケヤキ属と近辺で自生せず、持込みと思われる樹種も見られる。製品と樹種の関係で特徴的なものについては、その製品項目の説明で触れる。

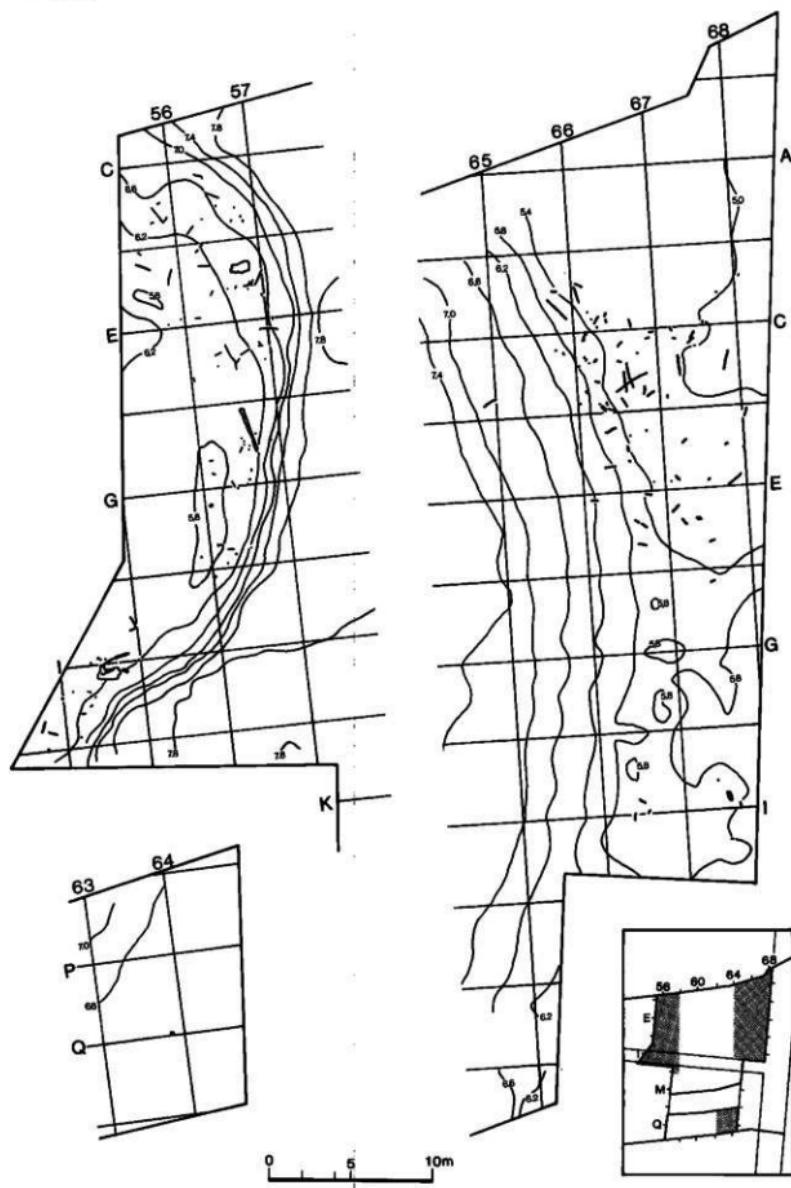
【大きさ】：水漬き状態で、できる限り破片を接合した上での、最大長・最大幅・最大厚・重量である。（ ）付きは、その部分や製品に欠損があることを示す。従って名称の項には、「○片」と記載されている。重量の項に「乾重量」とあるのは、保存処理後の計測値で、長さほかにも反映する。また重量の項に「計」とあるのは破片総体の重さを示し、その場合、最大長・最大幅・最大厚は、破片中の最大片1片の計測値である。

【縮尺】：基本的には舟関係1/6、一般製品や板材1/3、そのやや大型のもの1/6、建材関係1/8、樹皮1/2とした。ただ、図に入りやすくするために縮尺を変えたものもある。

VII 低型部包含層の遺物

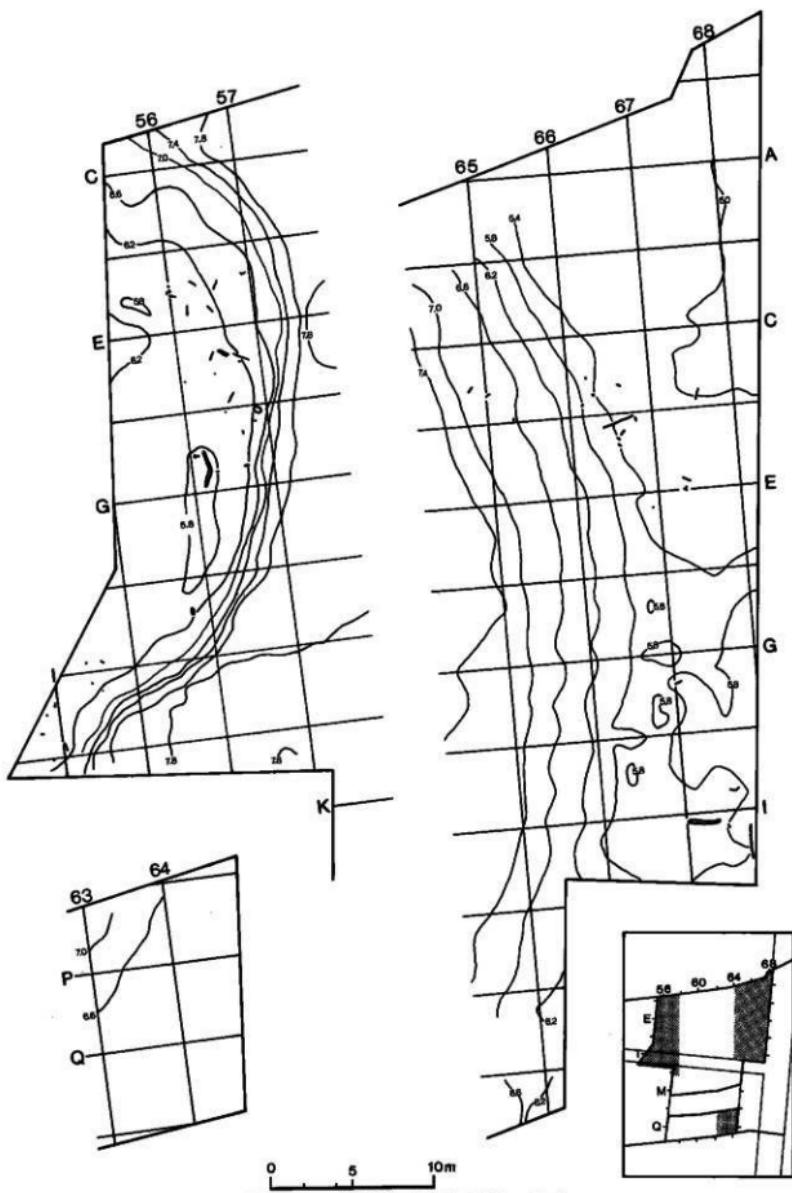


図VII-21 木製品出土位置図 (I 黒層以下全層)



図版-22 木製品出土位置図 (OB・IB 1層)

V 低温部包含層の遺物



図VII-23 木製品出土位置図 (IB 2層)

次に図示した木製品を中心に、種別・製品別に記述する。

舟部材・舟用具

舟數（舟底）（1）：舟底全体から切断されて物送り？された、舳側か櫓側の部分で、さらに縦半分になっている。腐朽・摩耗が激しく、特に先の立上り部分の損傷が著しい。板縫じ用の孔が確認できるのは、腐朽欠損のためと思われる。樹種はカツラ属、巨木から横木取りされたもので、舟底は2cm前後まで削り込まれている。これまで出土品としては、舳部分のみが通例であったが、これは中央部付近で切断され、舟底の平坦部まで残存している貴重なものといえる。

舳（2）：舳の立上り部分の破片だが、腐朽・摩耗が著しく、切断されたものかはわからない。樹種はトネリコ属、樹心部付近からの年輪が観察でき、横木取りである。やや小振りの舟と思われる。

車櫓受台部（3）：直径7cmほどのモミ属の丸木材を、樹心を残すように柾目取りしている。舟の舷側板に縛り留めるための抉りが末側の端部に付けられている。元側は折損している。車櫓が組まれる軸は枝利用式であるが、摩耗のためか中途で折損している。

早櫓（4）：全長166.2cm、柄部長102.2cm、柄部径2.2mmにコナラ属の1/4割材を削り出した早櫓の完形品である。水搔き部はナデ肩で、先端はU字形、割れがはいており、一対の補修孔が開けられている。水搔き部だけで木取りをみると追征である。

漁道具

回転式離頭鉤中柄部（5）：一本式の中柄。串にもみえるが、基部に棹に装着する平坦面が削り出されている。アジサイ属の1/4割材から作られている。

魚叩き棒（6）：ハシドイ属の丸木を、握り部と頭部を削って作った、魚叩き棒と思われるもので、叩き痕よりも全体に摩耗した印象の方が強い。

狩猟具

矢中柄（7・8）：7はツルウメモドキ属の枝を1/4に割って削り出した脆弱そうな中柄で、尖端部・基部の整形が粗い。8はアジサイ属の太めの枝を1/4に割って削り出した中柄で、体部の太さのわりに尖端部・基部が極端に細く作られている。特に鎌装着部は三角形状に明瞭に作出されている。

矢（木鐵）（9～11）：3点ともアジサイ属の太めの枝を削って削り出されている。9は平坦な先端部と極端に細い基部を持つ。10・11は中柄部と一体化した形式。10は細長い頭部が基部から作出され、紡錘形の鐵部へと続く。11は全体的に扁平で、三角形鐵が作出されている。

切裁具

小刀樹皮製鞘（12）：劣化が進んでおり図では別描したが、三枚重なったシラカバ樹皮製のマキリ鞘で、片側のみの残存と思われる。突起部の張出しは小さな丸形で、ここに吊り紐用の孔が一つある。縫い孔は、13ヶ所確認できる。

灯火具

挟み木？（13・14）：13は太い枝の片端を粗く削り、そこから40cm削り裂いたもの。14は股木片端を削り短い割り裂きを入れたもので、両者とも炭化面はないが、灯火用樹皮を挟む材と思われる。

容器類

刳物容器（15・16）：15は円形盆状容器の切断品で、部分的に焼けている。側縁が緩く立ち上がる。16は素木の円形浅鉢片。再加工されたものか、器厚が不均一で部分的に焼けている。

漆椀（17等）：17は腐朽の著しい小型の平底椀片で、高台の痕跡がみられる。内側朱漆（未分析）・外黒漆塗りだが、高台内には塗はない。外側には黒地に朱漆（未分析）で草文が描かれている。

食用具

貫（18）：加工は粗いが、範部の肩が張り柄部との区分が明瞭である。モミ属の粧目板を加工。

串状製品（19～26）：断面形や端部の加工で名称をつけた。23はイチイの1/6割材を粗削りした、長さのある両先串である。これ以外はみな枝材の1/4割材を使った長さ20cm以内の短い串で、22と24は両先である。26はやや湾曲している。

歩行具

下駄（27）：ハリギリの追粧板を削り出した、齒高の低い厚みのない連歯下駄である。台尻側半分以上を欠損し横結孔も確認できない。台先の上面觀はやや右下がりで、台尻に向かって幅は均一である。前壺は円孔で中央部にある。齒の接地面は狭く、氷雪上歩行の滑り止めと考えられる鉄紙を打った痕跡が3ヵ所みられる。

祭祀・儀礼具

花矢（28）：長い尖端突起（鐵部）を削り出し、その付け根に最大径があり、基部に向かって次第に細くなる。基部は端を欠損するが、削りで一段と細身に作られる。削花等の痕跡はない。

制裁棒（棍棒）（29）：打ち部は2ヵ所の瘤状で、その間は摩耗のような削りである。先端部は切断されているようにも見え、さらに瘤が続いている可能性もある。棍棒ではなく大型の横柵で、打撃部が使い減りしたものかもしれない。

各種用具の部品や素材等

ピン状製品（30等）：30は片端尖頭で、両尖頭のものもある。莫蘿や獸皮留めの木針であろう。

軸状製品（31・32）：31はつまみの付いた小型製品。32は断面略三角形の大型品で下端を欠損する。

楔状製品（33）：先端はU字形。樹表側は割りっ放し、樹心側をなだらかに調整し、さらに平坦面を作るよう削りを入れている。

扶抉各種材（34～36等）：34は両端が削られた長い紡錘形の板で、側縁に1ヵ所の浅い抉りが入る。35は角棒状で両端部のねじれの位置にある削りが、浅い抉りに見える。36は断面かまぼこ形で、曲面側の両端が一段低くなる抉りが入る。その他も片端に浅い抉りが入るものが多い。

有溝各種材（37等）：37は短くカットされた枝の側面に、片側に開口する浅いV字溝が入る小型品。木口面は両面とも削りが入っている。

有孔各種材（38等）：38は二つの角孔が確認できる板。舷側板の利用品か。

角材・その加工製品（39・47）：角材は割材や厚板から作られ、その製作過程から連続して製品化加工に入るものもあるのだろう。

割材・その加工製品（40・41・48～50等）：トネリコ属材を割材にしたものが多い。加工は各稜線を削って丸みをつけたり、面取りすることが主である。

板材・その加工製品等（42～46・51～54等）：42・43は厚板を加工した小型品。44～46は細板材の加工品。53は箱物の薄板か。51・52・54は台板であろうか。他に捧酒箸状やつまみ状の製品、スギの細板材や薄粧目板（箱物・曲物の材料）も出土している。

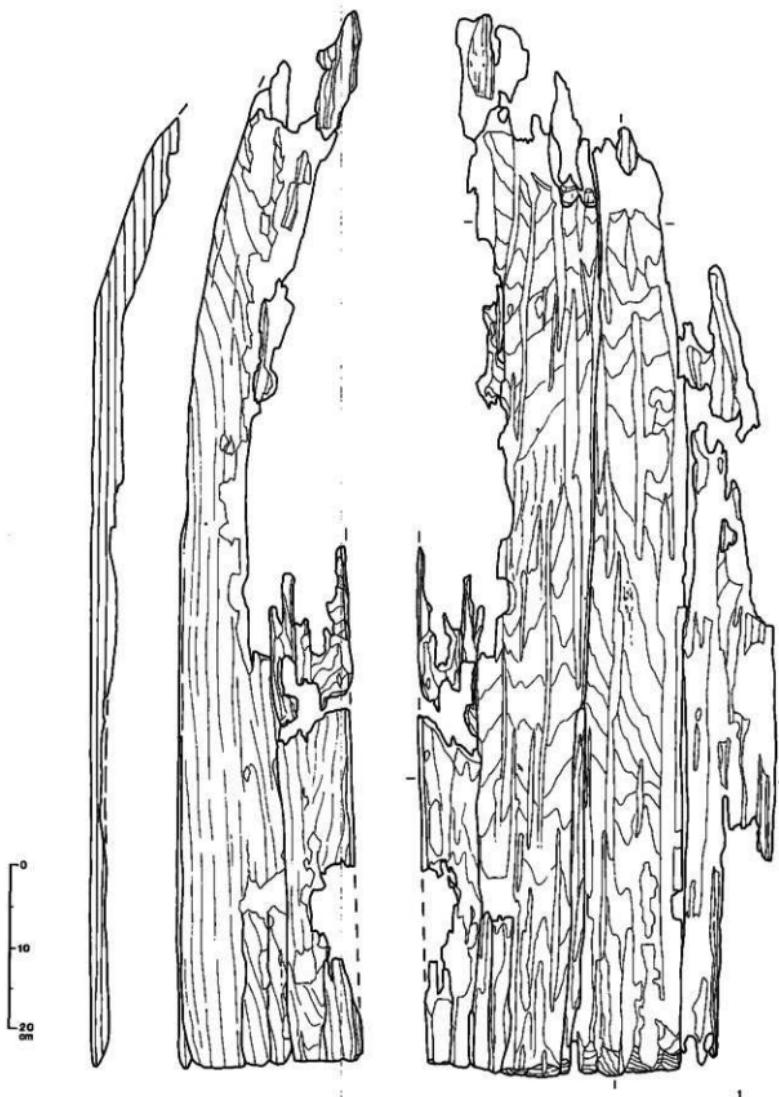
枝材（図未掲載）：51点出土している。トネリコ属やヤナギ属が多い。一部、焼痕の見られるものもある。とくにブナの焼枝材は、本州材移入、あるいは苗の持込みの可能性を示し興味深い。

丸木材・その加工製品等（55等）：55は対面する二面から切り倒した、長さ約3mの原材の切り出し部分を図化したもの。他に股木を含めて21点出土している。トネリコ属やイスエンジュが目立つ。

木端（図未掲載）：加工途上の切り落し木片や、製品切断で出る木片。

切片（図未掲載）：加工途上や製品切断時の削り落し小片、剥片。

炭化材（図未掲載）：大きさ、木取りとも様々。加工のため意識的に焼いたものだけかは不明。

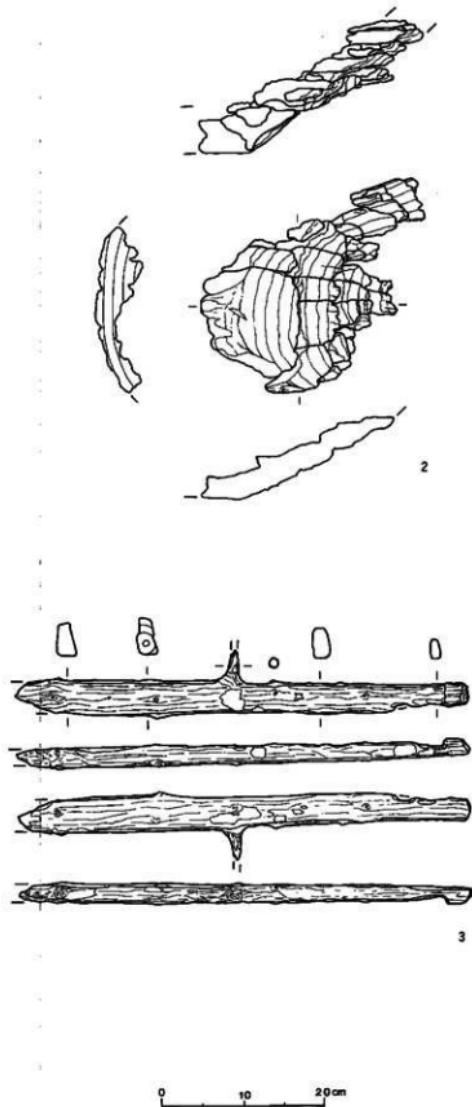
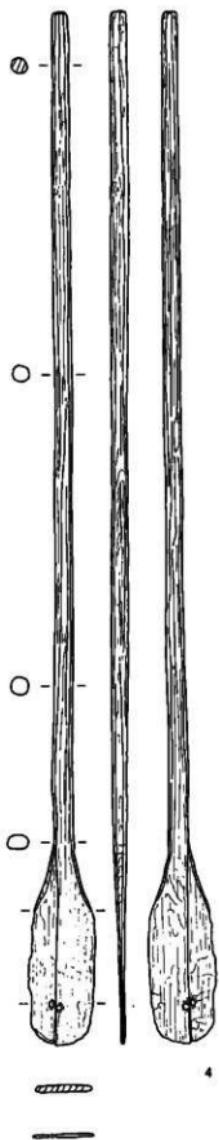


図Ⅴ-24 木製品(1の1)

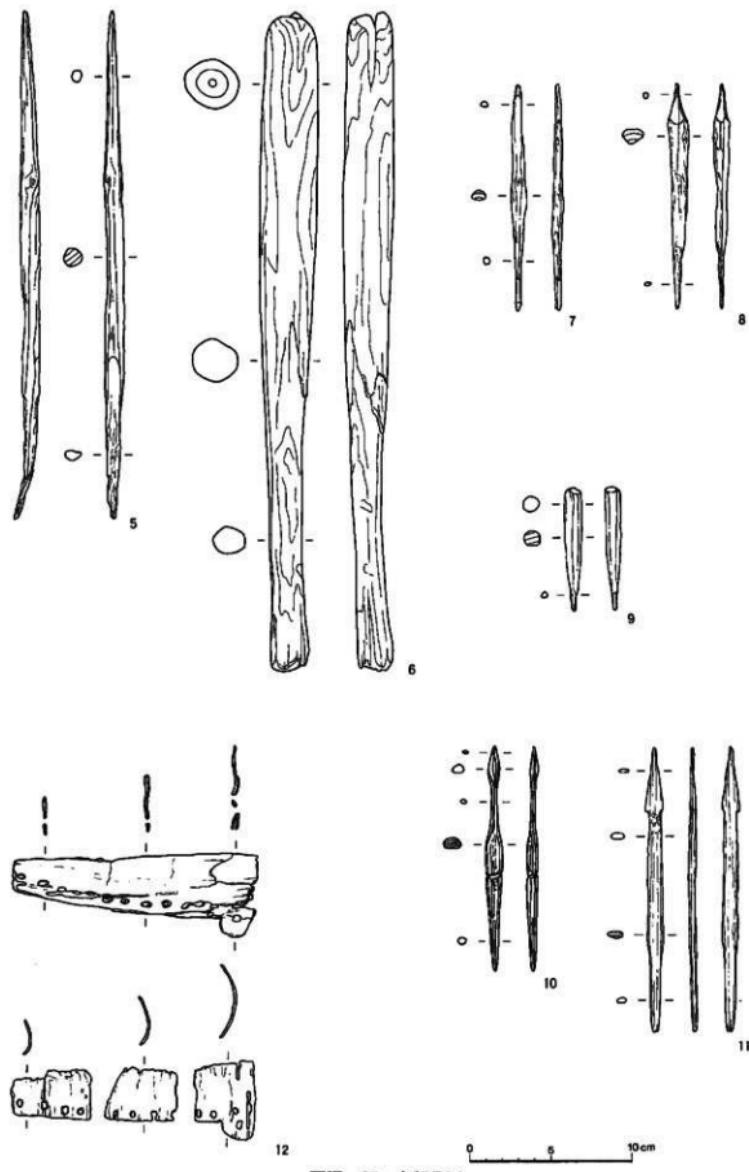


図VII-25 木製品(1の2)

4 木製品

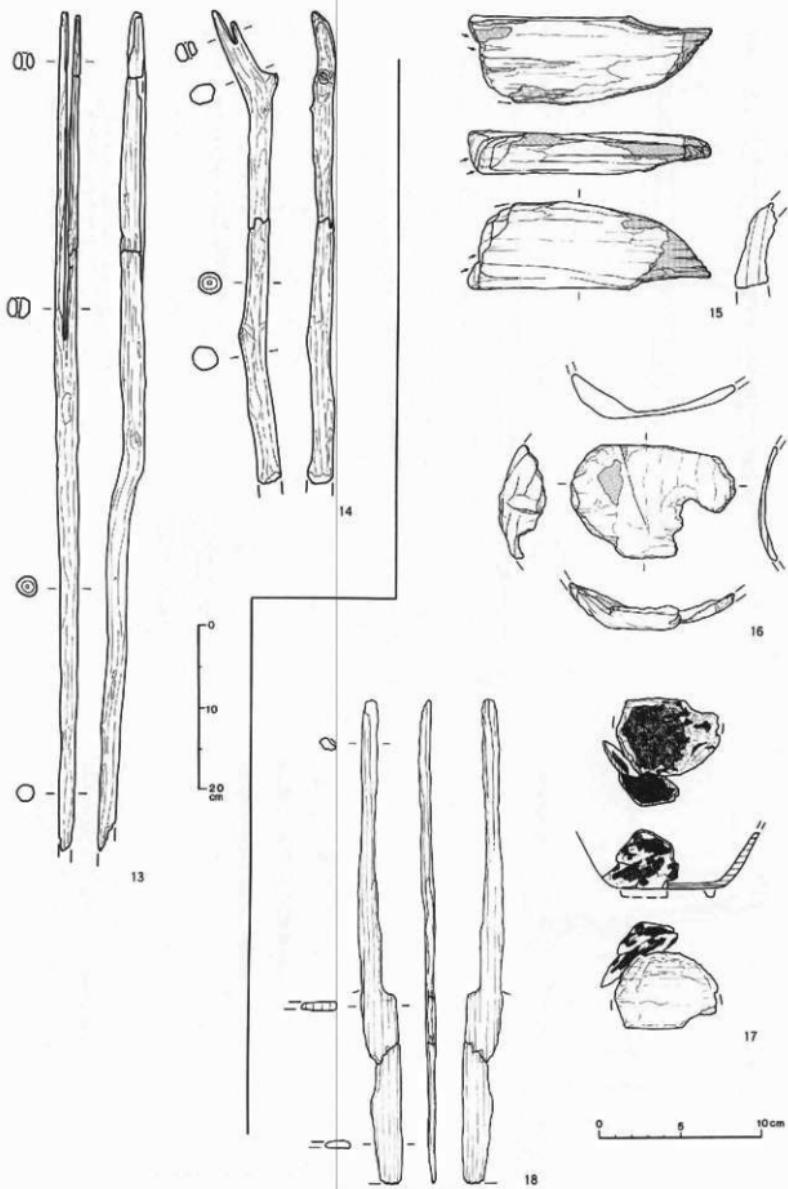


図Ⅳ-26 木製品(2)

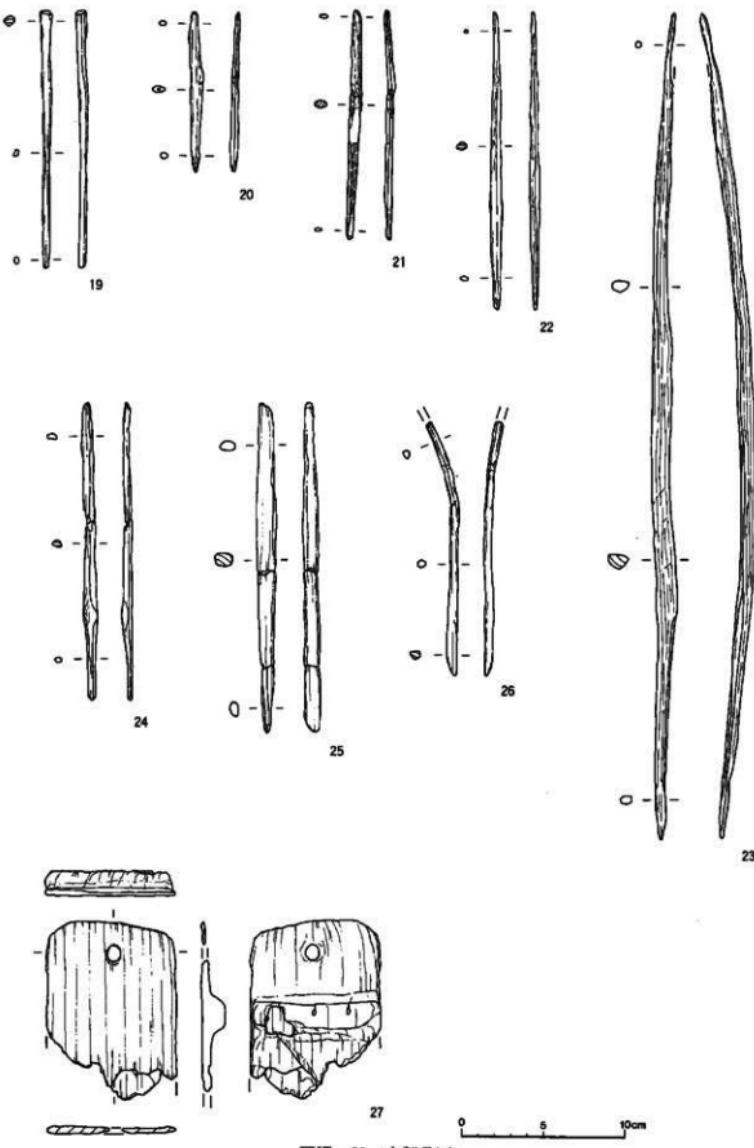


図版-27 木製品(3)

4 木製品

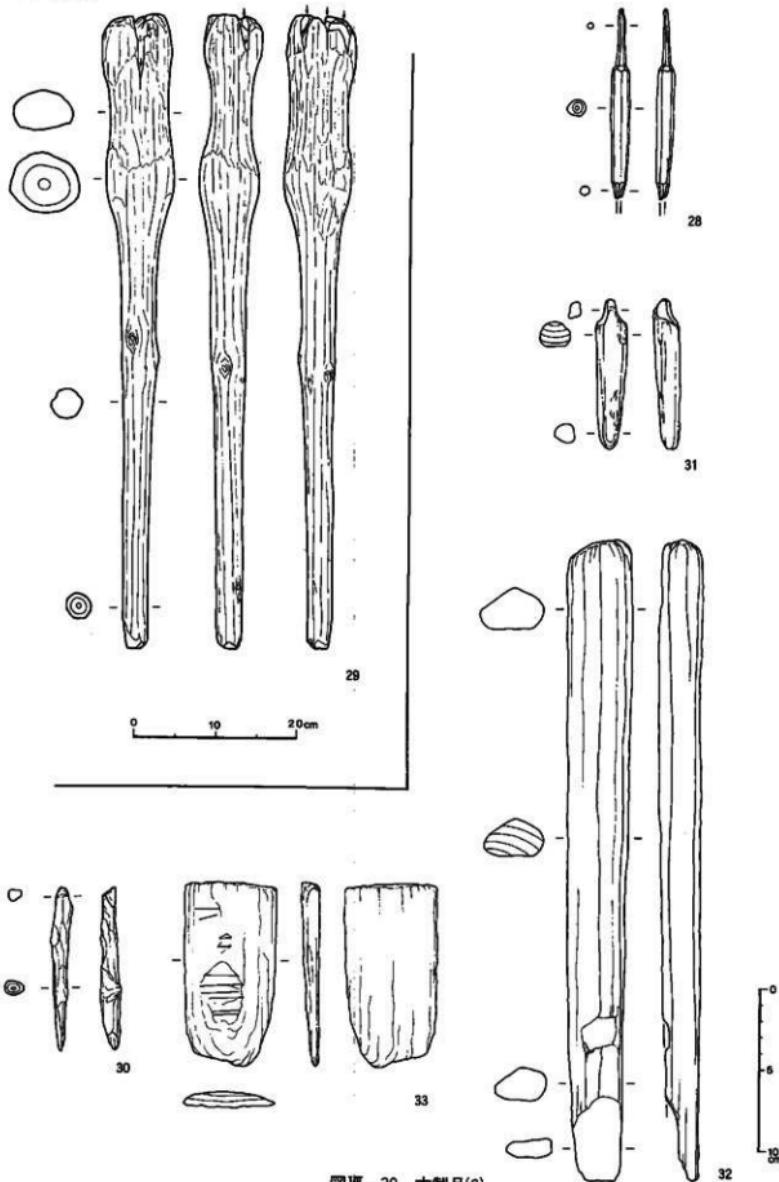


図VII-28 木製品(4)



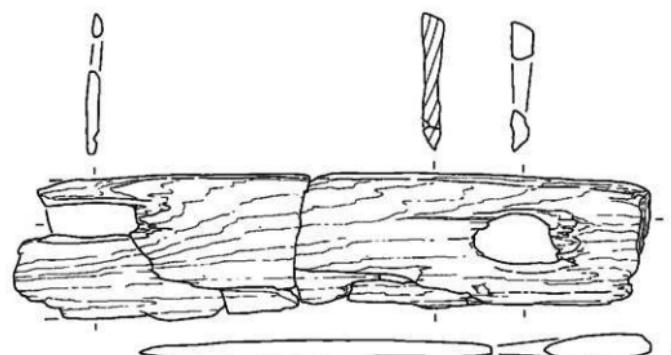
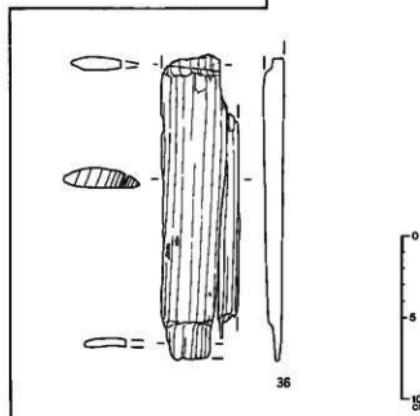
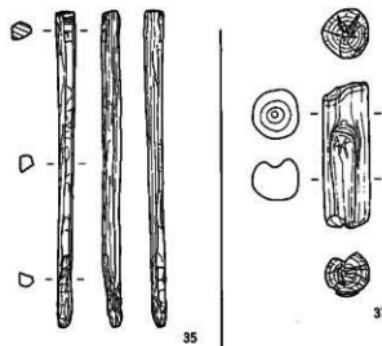
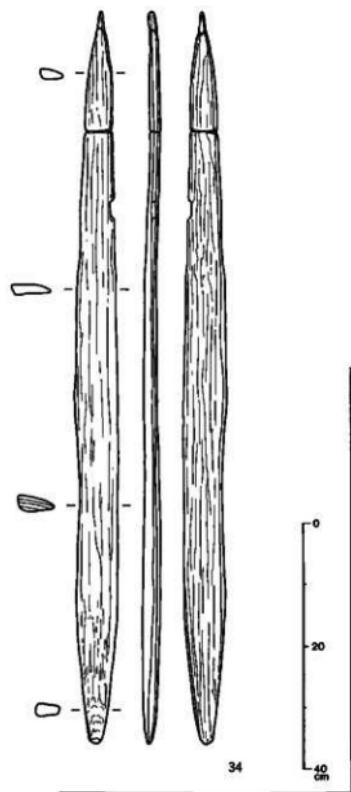
図版-29 木製品(5)

4 木製品



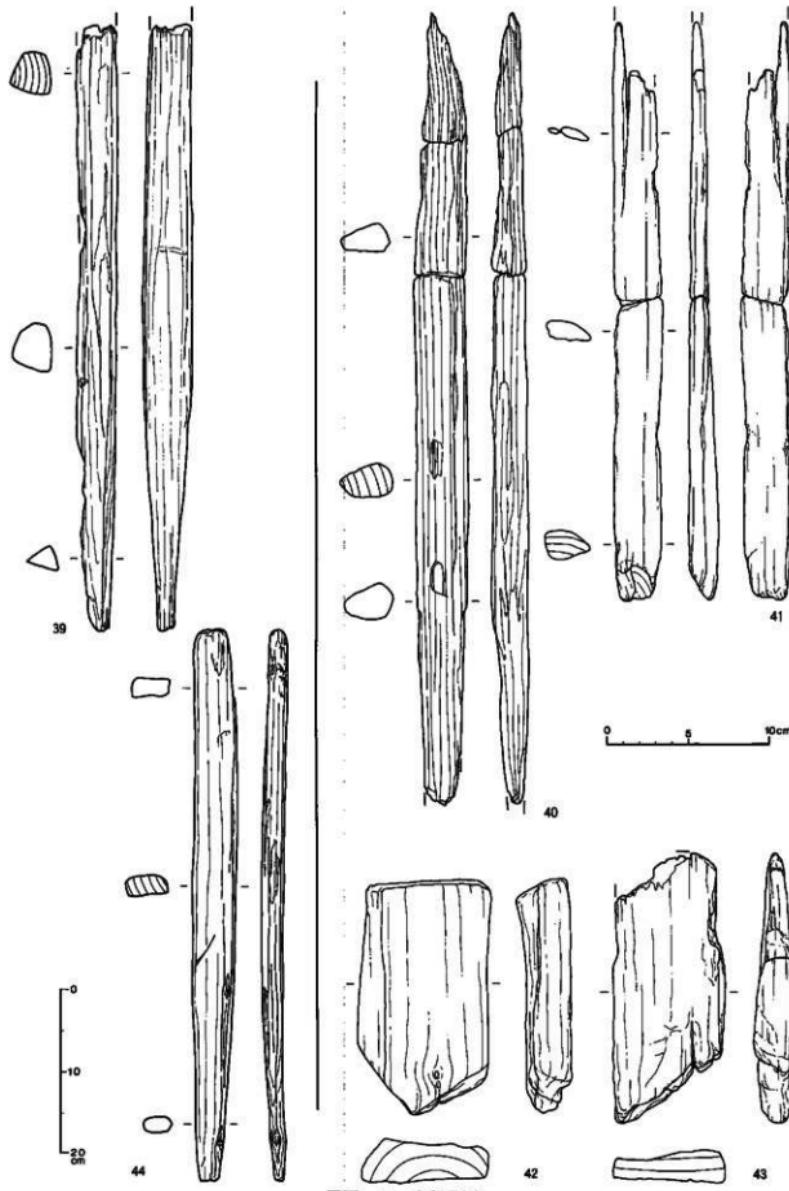
図版-30 木製品(6)

VII 低層部包含層の遺物



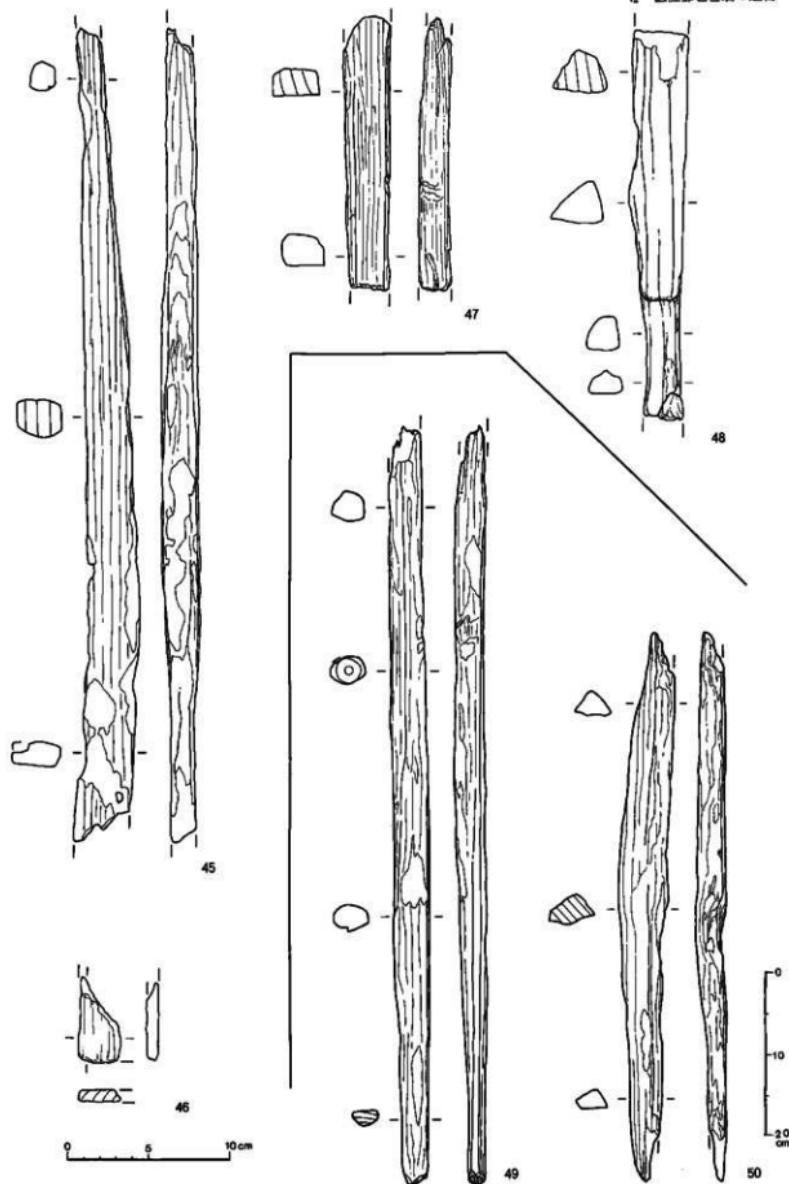
図VII-31 木製品(7)

4 木製品



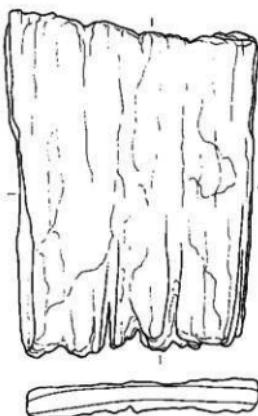
図版-32 木製品(8)

VII 低窓部包含層の遺物

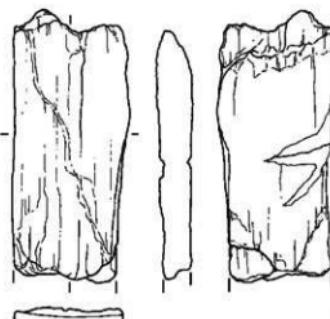


図VII-33 木製品(9)

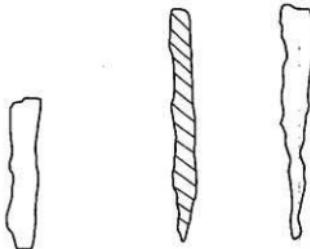
4 木製品



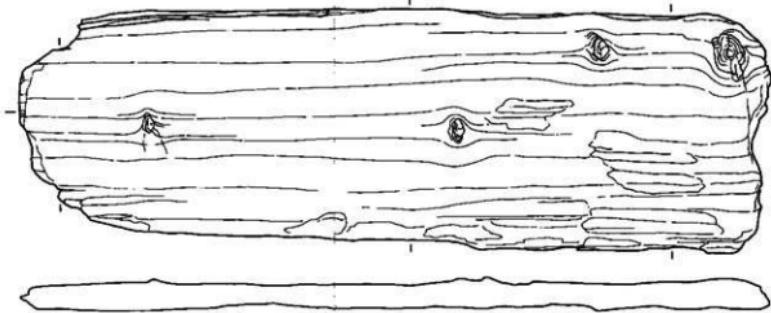
51



52



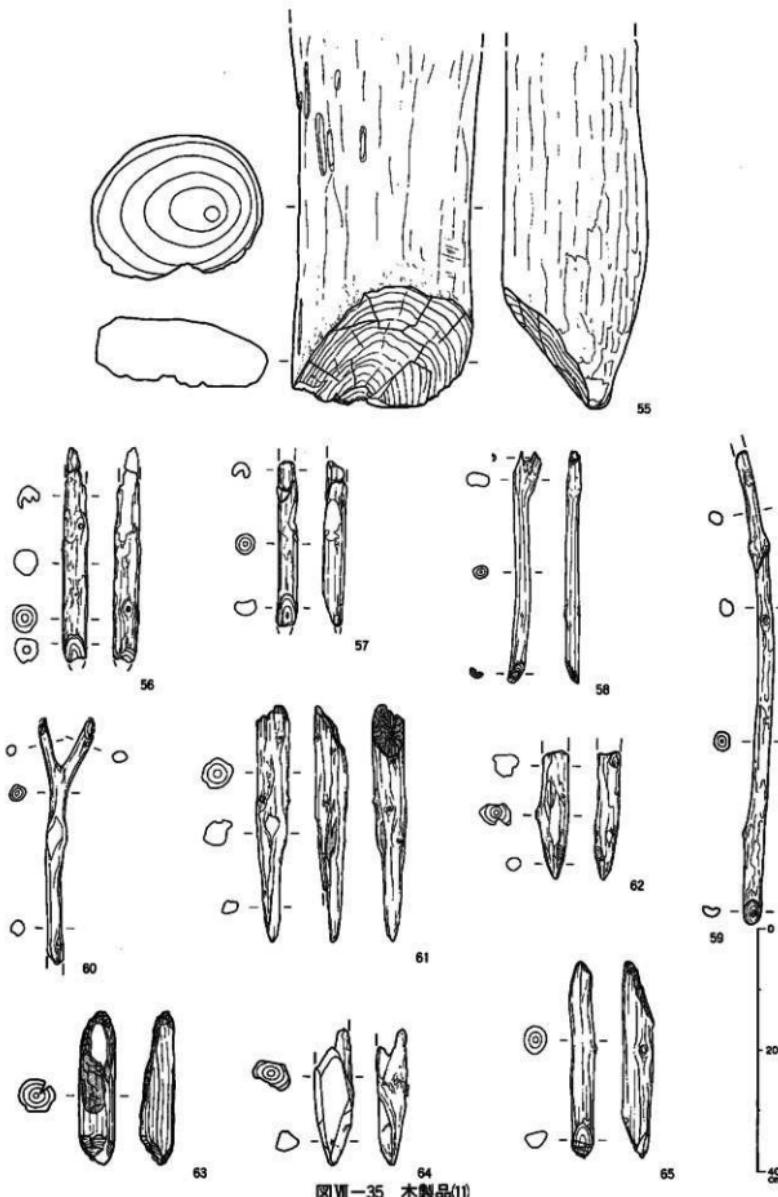
53



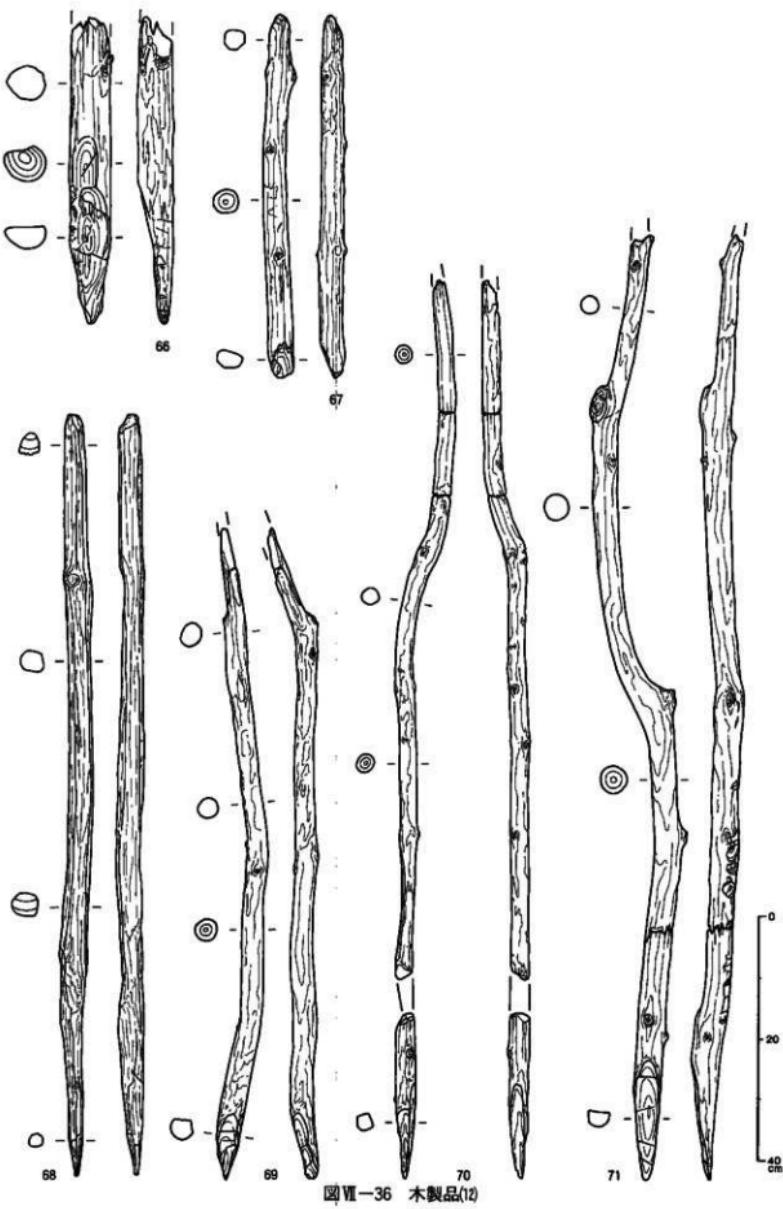
54

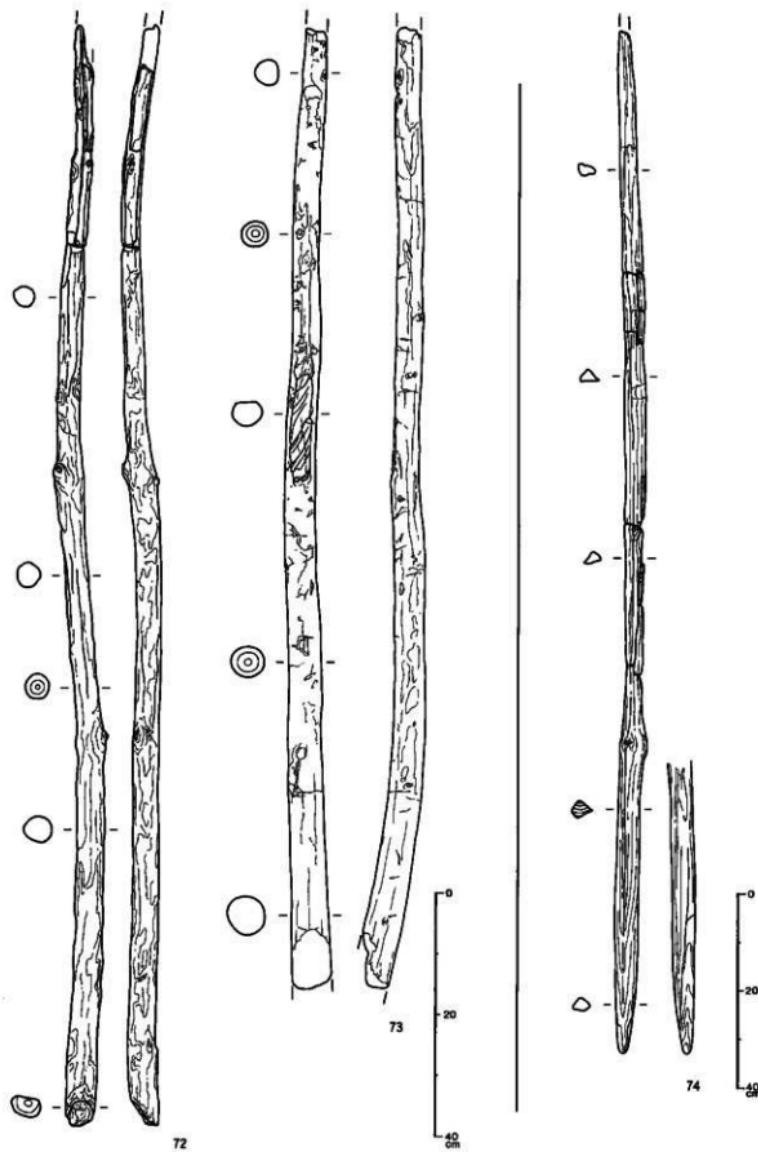
図7-34 木製品(10)

0 5 10 cm

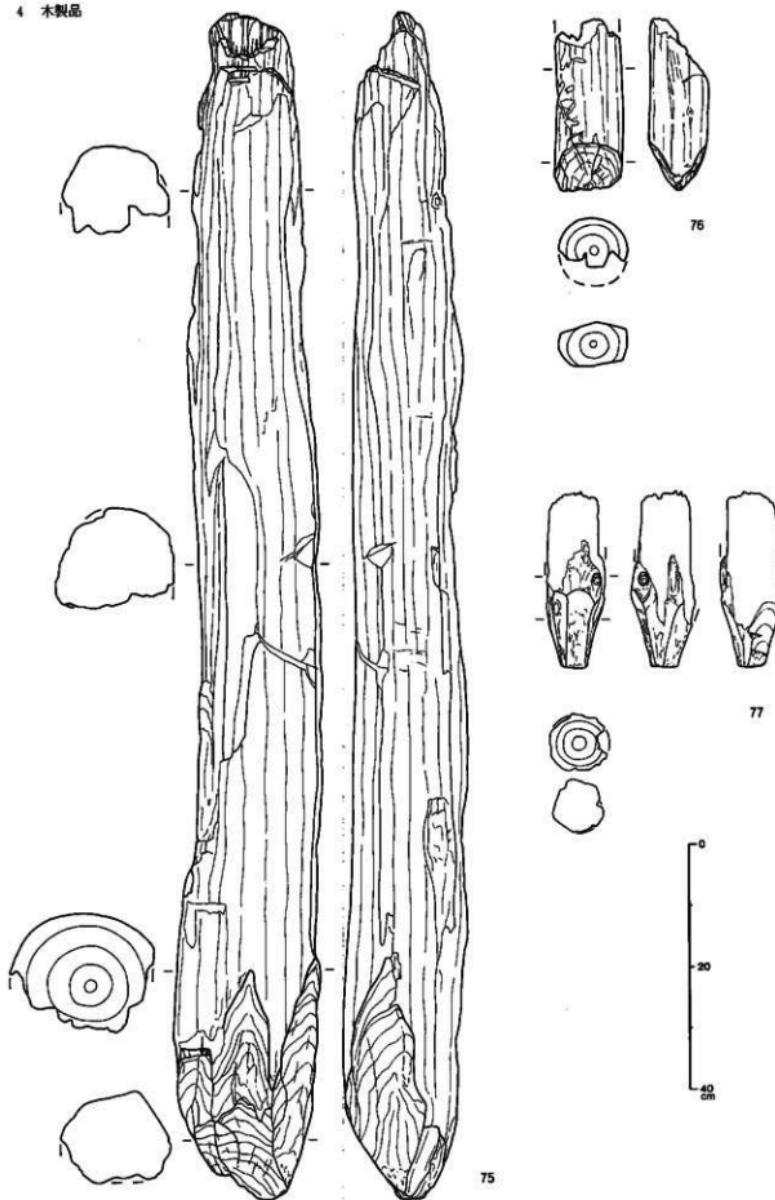


図VII-35 木製品(1)

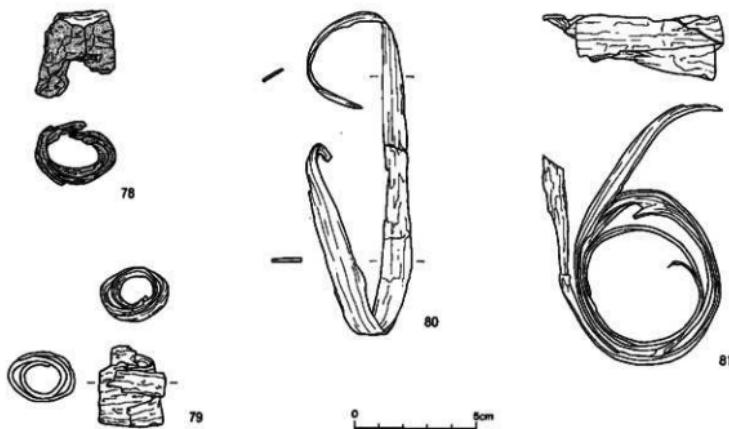




図版-37 木製品(13)



図版-38 木製品(14).



図VII-39 樹皮

杭・建築部材・建材等

丸杭状製品等 (56~59等)：杭と思われるが、下端がほぼ一面で切り落され杭先らしくないもの。58は股木部分の両枝元も切り落としている。

刺し杭 (図未掲載)：径3cm前後で、長さ50cm程度の細く短い杭を刺し杭とした。

細杭 (図未掲載)：径3cm前後で、長さ50cm以上と思われるの細く長い杭を細杭とした。

二股杭 (60等)：股部で他のものを受けることを目的とした杭。60は股木部分の両枝途中に切痕が見られるが、杭先を欠損する。

杭 (61~71等)：尖端に二面以上の切痕や割りが見られ、杭先らしいもの。68は削材から削り出された杭で、ほかはすべて丸木杭である。69~71は股木部や湾曲のある長杭の上端部欠損品である。

建築部材 (72~74等)：72は木元に切痕のある丸木材で、表面全体に叩き締められたような痕がある。73は両端を大きく太さのある丸木で、中央部に削りで長さ17cmほどの平坦面を作っている。二点とも杭または梁材であろう。74は削材を削った2m以上の長材で、屋根または壁の材と思われる。三点とも樹種はトネリコ属である。

柱 (75~77)：75は元側に幾多の削りを入れて先を作った巨木柱で、上端は切断されている。原材であろうか。76は対面する二面を削った柱根、77は端は平らな木口面を残すが、大小七面を削り落された先の柱根である。

樹皮加工品

樹皮 (78等)：78などの焼けている樹皮は灯火用の可能性がある。小片は切片であろう。

渦巻状樹皮 (79等)：本体から剥がされた樹皮は丸まり渦巻状となる。これも灯火用や結束用の原料となるものであろう。

帯状樹皮 (80・81等)：丸まったものもあるが、幅を一定に揃えられた樹皮で、結束に用いられるものと考えられる。

(三浦)

表Ⅱ-6 損耗木製品(1)

品名	規格	種類	材種	原木	被加工	長さm	幅m	厚さm	重量t	備考
1 (6) 鋼板被覆品	面 D56d 面 F56d	I B1 269 I B2 271	楓木 楓木	カツラ トネリコ風	[13.3] 4 [17.6] 4	4.4 2.7	0.035 (4000)	/ t/t	保手及後実測、劣化等い	
2 (7) 鋼片	面 H 154b 面 C 66c	I B2 349 I B1 7.5 / 面	楓木 モクナガ風	[16.2] 2 [65.6] 2	10.6 17.6	2.4 2.4	1639 [119.4]	/ t/t	保手及後実測、劣化等い	
4 (7) 両側	面 E 67c 面 G 66c	I B1 5.2 / 面 I B5 3.4 / 面	丸木 ヘンディヤ風 モクナガ風	[30.9] 5 [40.35] 5	1.2 1.5	1.1 1.1	20.2 236.6	/ t/t / t/t	木端部に落物穴。 一式。	
5 (8) 同左(表面研削材)	面 B 66b	I B1 1.8 / 面	丸木	[13.7] 3	0.85	0.65	[3.0]	/ t/t		
6 (8) 魚印き串	面 G 66c	I B5 1.7 / 面	モクナガ風	[13.7] 3	1.25	0.35	5.4	/ t/t		
7 (8) 矢巾野	面 C 66b	I B1 1.33 / 面	アシサイ風	[13.6] 3	1.1	0.3	4.0	/ t/t		
8 (8) 矢巾	面 C 66a	I B1 2.43 / 面	アシサイ風	[7.45] 3	1.1	0.3	4.0	/ t/t		
10 (8) 矢巾(曲)	面 I 67d	I B1 2.7 / 面	アシサイ風	[13.3] 3	0.7	0.4	3.1	/ t/t	漆部との接合の一体化したもの	
11 (8) 矢巾(曲)	面 D 66a	I B3 1.80 I B1 2.74 開削口	楓木 カバノキ風 油刷面	[17.4] 5 [15.8] 5	6.1	0.65	[7.1]	/ t/t	漆部との接合の一体化したもの	
12 (8) 小刀削除面	面 P 56d	I B1 1.76-1 丸木	トネリコ風	[102.8] 4	2.7	3.1	[40.0] 0	/ t/t	所にたまに加工 油刷部が剥げてない、自然の剥れか?	
13 (8) 焼み木??	面 C 66c, C 65b	I B1 1.76-2 丸木	イヌイヌイヌジ モクナガ風	[57.4] 4	5.1	0.3	[10.0] 0	/ t/t	油刷部が剥げてない、自然の剥れか?	
14 (8) 烧み木??	面 C 66c, C 65b	I B1 9.0 楓木	モクナガ風 モクナガ風	[14.4] 3 [65.4] 3	2.45	0.65	[9.1] 0	/ t/t	油刷部の剥離か?	
15 (8) 焼み木??	面 E 56c 面 E 67d	I B1 3.13 I B2 1.02 楓木	モクナガ風 モクナガ風	[10.0] 3 [65.4] 3	1.1	0.3	[31.2] 0	/ t/t	雨漏りのような跡に見えるあり	
17 (9) 鋼片	面 C 66d	I B1 8.2 開削口	モクナガ風	[23.5] 5	3.2	0.7	[6.2] 0	/ t/t	内部が塗装状態 未塗装か?	
19 (9) 刈込み	面 H 161	I B5 2.4 / 面	モクナガ風	[15.4] 4	0.7	0.75	2.5	/ t/t	鉛筆なし	
20 (9) 刈込み	面 F 56c	I B1 2.83 / 面	ハギ風	[9.7] 4	0.9	0.45	1.5	/ t/t	板くぎ痕	
21 (9) 刈込み	面 I 66c	I B1 1.67 / 面	アシサイ風	[13.7] 4	1.0	0.6	2.1	/ t/t	所焼付痕	
21 (9) 阿牛串	面 D 67a	I B3 1.17 / 面	アシサイ風	[10.1] 4	0.8	0.6	2.3	/ t/t		
21 (9) 阿牛串	面 C 64c	I B2 1.74 / 面	ヘンディヤ	[51.4] 4	1.4	0.7	[11.4] 0	/ t/t	色い斑紋	
21 (9) 阿牛串	面 K 65a	I B1 1.65-1 / 面	ヘンディヤ風	[18.8] 4	0.9	0.6	3.6	/ t/t		
23 (9) 角串	面 D 66d	I B2 1.00 / 面	トネリコ風	[20.4] 4	1.2	1.0	11.2	/ t/t		
26 (9) 角串	面 K 65a	I B1 1.65-1 / 面	ヘンディヤ風	[10.4] 4	0.6	0.55	[3.1] 0	/ t/t	色い斑紋	
27 (9) 三脚串	面 B 66b	I B1 4.7 / 面	ハギ風	[11.9] 4	0.9	0.5	[5.7] 0	/ t/t	油刷下地、後半は空洞	
28 (9) 花火	面 J 64c	I B1 3.48 / 面	アシサイ風	[11.9] 4	1.15	1.45	[4.4] 0	/ t/t	鉛筆なし	
29 (9) 別焼付	面 D 66a	I B1 9.1 丸木	モクナガ風	[77.1] 4	5.6	7.3	1400	/ t/t	大型の焼付か?	
30 (9) ピン付焼付品	面 J 65a	I B2 3.47 丸木	ヘンディヤ	[0.9] 4	1.25	1.0	[6.5] 0	/ t/t	ねじだれ焼付利用	
31 (9) つまり木被付焼付品	面 C 66d	I B1 8.1 / 面	モクナガ風	[3.1] 4	1.9	1.6	14.6	/ t/t	つまり出し	
32 (9) 烧付焼付品	面 E 66d	I B1 0.1 丸木	トネリコ風	[39.2] 4	4.0	2.65	[13.6] 0	/ t/t	断面二方形状	
32 (9) 烧付焼付品	面 H 56a	I B1 3.40 開削口	トネリコ風	[11.2] 4	5.6	1.1	36.2	/ t/t		
34 (9) 烧付斜面加工製品	面 D 67c	I B1 1.25 楓木	トネリコ風	[118.5] 3	7.1	3.4	1440	/ t/t	雨漏りの軽減、隙間に熱が通り	
35 (9) 烧付斜面加工製品	面 E 66c	I B2 1.4 / 面	モクナガ風	[52.35] 4	3.15	0.7	336.0	/ t/t	雨漏り、長い狭り	
35 (9) 烧付斜面加工製品	面 I 63d	I B2 3.85 丸木	モクナガ風	[13.6] 4	4.7	1.35	[61.3] 0	/ t/t	新規カーボン糊、同一面の間に密着	
37 (9) 有縫丸太材	面 D 66d	I B1 1.01 丸木	トネリコ風	[6.3] 4	2.45	2.35	52.4	/ t/t	短く切られた枝、片面に開口するV字溝	
38 (9) 丸太材	面 C 66c, D 65a	I B1 1.34 油刷	トネリコ風	[13.5] 4	4.9	5.1	[135.4] 0	/ t/t	保手及後実測、二つの溝	
39 (9) 丸太材加工品	面 E 67a	I B1 4.9 / 面	トネリコ風	[41.5] 4	3.15	2.2	[140.0] 0	/ t/t		
40 (9) 丸太材加工品	面 B 66a	I B1 4.9 / 面	トネリコ風	[35.2] 4	2.9	1.45	[140.0] 0	/ t/t		
41 (9) 丸太材加工品	面 E 66d	I B1 3.15 / 面	トネリコ風	[41.5] 4	2.9	1.45	[140.0] 0	/ t/t		

表II-7 極期木製品(2)

遺物名	遺物名	種類	区分	性質	形状	大きさcm	幅cm	高さcm	幅cm	高さcm	幅cm	備考
42 22 鋸材加工品	■ C 65 a	I B1	5.8	板目	イヌエンジニア	14.1	4.0	3.2	131.7	17.3	平添五角形	
43 22 鋸材加工品	■ F 56 c	I B1	2.64	板目	ハノキヨク	(16.4)	6.45	2.4	(11.7)	17.3	片端円筒形	
44 22 鋸材加工品	■ F 56 c	I B1	8.6	板目	トヨリヨク	61.2	6.2	2.6	64	14		
45 22 鋸材加工品	■ E 27 a	I B1	3.14	板目	セクリヤク	(5.2)	3.4	0.75	(16.0)	17.3	両端丸頭	
46 21 鋸材加工品	■ J 65 a	I B1	3.46	板目	ニレヨク	(11.9)	3.0	2.7	61.7	17.3		
47 21 角材	■ D 67 c	I B1	1.24	1/4板	トヨリヨク	(13.0)	3.4	2.7	(16.1)	17.3		
47 21 鋸材片	■ P 63 c	I B1	0.2	1/4板	トヨリヨク	(31.1)	4.4	3.4	(16.0)	17.3		
49 12 鋸材片	■ D 66 b c	I B1	1.37	1/4板	トヨリヨク	(66.6)	6.1	3.6	(66.0)	17.3	心形断面あり	
50 12 鋸材片	■ E 56 d	I B1	3.12	1/4板	トヨリヨク	(11.2)	15.4	2.6	49.5	6		
51 12 鋸材片	■ G 56 a	I B1	2.91	板目	カツラ	(16.5)	7.8	3.3	(15.5)	17.3	方形の截面が?	
52 12 鋸材片	■ F 56 c	I B1	3.38	板目	ヘルギリ	(21.7)	(16.1)	0.5	53	17.3	保存状態良調、薄板	
53 12 鋸材片	■ I 54.5 H 54 t	I B1	3.68	板目	セモリ	46.15	14.7	2.2	50	17.3	合板か?	
64 12 鋸材	H 55 d	I B2	3.44	板目	トヨリヨク	(24.9)	3.0	23.5	17.3	前面二面削、切断部のみ顯示		
65 24 切り出した鋸材	■ F 56 c d	I B1	2.94	板目	トヨリヨク	(91.0)	4.1	4.1	(16.5)	17.3	下端面二面削り	
59 74 丸棒状鋸材片	■ Y 67 a d	I B1	1.5	丸棒	トヨリヨク	(16.0)	3.3	3.4	(15.5)	17.3	下端面削	
59 74 丸棒状鋸材片	■ Y 67 a d	I B2	2.5	丸棒	アシナガイ	37.6	4.0	2.5	116.0	17.3	配先孔、両柱先削成	
59 24 丸棒状鋸材片	■ D 66 d	I B2	9.9	丸棒	トヨリヨク	(77.4)	3.4	3.4	(65.0)	17.3	元先の底	
59 74 丸棒状鋸材片	■ M 64 a	I B3	0.10	丸棒	コウラクツジヨク	(41.0)	6.1	3.1	(14.4)	17.3		
60 14 一枚板	■ D 67 a	I B1	1.18	丸棒	トヨリヨク	38.6	5.3	5.2	(71.4)	17.3	下端面二面削り、両柱先削成、上端削	
61 24 板先	■ G 66 d	I B3	3.3	丸棒	カバーヨク	(74.5)	5.1	3.7	(14.4)	17.3	柱先二面削り	
67 24 板先	■ M 167 c	削板	3.6	丸棒	カバーヨク	(24.4)	5.7	5.3	(14.4)	17.3	柱先二面削り、上端削	
61 24 板先	■ C 66 a	I B1	1.38	丸棒	トヨリヨク	(21.4)	6.3	4.9	(14.4)	17.3	下端三面削り	
64 24 板先	■ M 154 a	I B1	3.65	丸棒	コナラヨク	31.1	3.0	5.0	371.1	17.3	下端三面削り、上端削	
65 24 板先	■ C 66 a	I B3	1.78	丸棒	トヨリヨク	(43.0)	6.7	6.9	(94.0)	17.3	下端三面削り、うち一面削り	
66 24 板先	■ M 153 d	I B2	3.51	丸棒	トヨリヨク	58.3	4.3	4.6	668	17.3	元先二面削り	
67 24 板	■ Fish 64 s	I B1	2.87	丸棒	トヨリヨク	(94.0)	121.4	4.5	4.2	1353	17.3	下端尖削の柱
69 24 板	■ C 67 c d	I B1	1.15	1/4板	コナラヨク	(104.3)	4.0	4.0	(44.0)	17.3	配先二面削成	
69 35 乾	■ M 153 c	I B1	3.54	丸棒	イヌエンジニア	(145.0)	3.7	3.6	(79.0)	17.3	元先削り、表面削成	
70 35 乾	■ B 65 c	I B1	1.44	丸棒	トヨリヨク	(152.5)	7.0	4.0	(14.4)	17.3	中間柱穴削り、中間柱穴削成	
71 35 乾	■ D 66 b c	I B1	1.36	丸棒	イヌエンジニア	(178.0)	5.0	6.5	(193.0)	17.3	元先削成、柱穴削成、柱穴削成	
71 35 乾	■ D 66 a d	I B2	1.35	丸棒	トヨリヨク	(155.0)	6.4	6.3	(214.0)	17.3	中間柱穴削成、中央部二面削成	
73 26 海藻剥離片	■ E 56 b c	I B3	2.85	丸棒	トヨリヨク	(94.0)	6.7	4.0	(84.0)	17.3	無作為的海藻剥離、断面三一五形	
74 26 海藻剥離片	■ C 66 b c	I B1	7.8	1/4板	トヨリヨク	(183.5)	23.5	19.4	438	17.3	元削り、表面削成、切り出孔か?	
75 26 海藻剥離片	■ M 154.5 H 154.5	I B3	1.12	丸棒	トヨリヨク	(27.5)	10.1	9.6	(156.0)	17.3	下端三面削り二面削成	
76 26 海藻剥離片	■ C 55 c	I B4	3.26	丸棒	トヨリヨク	(31.6)	10.1	9.0	(151.0)	17.3	元先削成、柱穴削成、柱穴削成	
77 26 海藻剥離片	■ D 65 d H 65	I B1	3.94	丸棒	トヨリヨク	(31.6)	3.6	3.5	5.0	17.3	下端二面削り(大三小三)削り、先は平ら	
79 27 海藻剥離片	■ D 66 c	I B1	2.56	削板	○ ○	(10.0)	3.3	2.5	4.0	17.3	ほぼ全縁剥け、灯火用?	
80 27 海藻剥離片	■ G 66 b	I B2	2.97	丸棒	カバーヨク?	(96.0)	12.1	4.3	8.1	17.3		
80 27 海藻剥離片	■ F 66 d	I B1	2.79	削板	○	(16.4)	7.15	2.4	16.2	17.3	底面5度3.5度半周	
81 27 海藻剥離片	■ P 66 b	I B1	2.88	削板	○	(16.4)	16.2	2.4	16.2	17.3		

表Ⅴ-8 未焼就木製品等(1)

通 呼 名 称	規 格	厚 度	幅 度	連 長	不 合 金	不 合 金	長 度	幅 度	厚 度	規 格	
未焼就片	J 60.1 鋼-18	0.8	3.90	-	-	-	-	-	-	-	
未焼就片	西 E67 a	1.8	外水	トネリコ風	9.4	1.3	1.1	1.1	1.1	外 未焼就片小片	
未焼就片	西 H66 c	1.8	外水	トネリコ風	13.1	3.4	1.1	1.1	1.1	内 未焼就片小片	
未焼就片	西 H66 b c	1.8	4	7/16	トネリコ風	17.2	2.6	1.1	1.1	1.1	
未焼就片	西 F66 d	1.8	2	3.08	○ クワ風	26.4	(4.2)	1.1	1.1	1.1	
未焼就片	西 E67 a	1.8	外水	トネリコ風	35.0	3.9	0.6	36.1	1.1	未焼就片	
未焼就片	西 G67 b	1.8	3.9	標準外原	12.5	1.7	1.1	1.1	1.1	未焼就片	
未焼就片	西 G68 a	1.8	2.6	標準	19.5	(6.3)	(6.3)	(6.3)	(6.3)	未焼就片	
未焼就片	西 H56 b	1.8	2.77	標準	15.3	1.8	0.4	1.5	1.5	未焼就片	
未焼就片	西 F56 a	1.8	3.09	標準	4.2	3.0	2.3	4.2	4.2	未焼就片	
未焼就片	西 H66.161a	1.8	5	1/16	トネリコ風	45.7	9.4	4.5	43.6	未焼就片込み	
未焼就片	西 E67 b c	1.8	5	1/16	トネリコ風	11.0	4.9	2.6	5.8	未焼就片	
未焼就片	西 C66 b	1.8	6.4	1/4	トネリコ風	13.4	5.2	2.5	7.5	未焼就片	
未焼就片	西 F66 d	1.8	3.05	1/4	トネリコ風	(16.5)	(6.0)	(0.2)	(15.7)	未焼就片のみ留め合ひあり、両端切底	
未焼就片	西 H54 c	1.8	3.84	1/4	トネリコ風	(16.3)	4.4	1.1	6.02	未焼就片から片頭へ施用し、差向に施し快り	
未焼就片	西 H55 d	1.8	3.43	標準	(17.1)	7.3	1.1	7.3	7.3	未焼就片	
未焼就片	西 C46.161b	1.8	1.75	標準	(16.8)	3.1	2.6	3.1	3.1	未焼就片台形、片端尖り角り	
未焼就片	西 C56 b	1.8	1.77	標準	13.0	5.0	2.8	15.8	未焼就片台形、片端尖り角り		
丸形未焼就片	西 C55 b	1.8	2.35	4/4	トネリコ風	(16.5)	(3.2)	(0.8)	(17.2)	三面削除部片、片端や片尖り	
丸形未焼就片	西 C66 a b	1.8	1.79	4/4	トネリコ風	-	-	-	-	片端や片尖り	
未焼就片	西 C66 b	1.8	2.22	標準	トネリコ風	(6.0)	(1.8)	(0.8)	(6.0)	片端や片尖り	
未焼就片	西 A68 a	1.8	2.23	標準	トネリコ風	(3.2)	(0.2)	(0.8)	(3.2)	片端や片尖り	
未焼就片	西 D56 d	1.8	2.48	標準	トネリコ風	1.1	2.4	1.0	2.1	1.0	
未焼就片	西 D56 c	1.8	1	2.52	標準	トネリコ風	3.9	2.1	0.5	1.2	1.0
未焼就片	西 D56 d	1.8	2.62	標準	ニレ風	6.0	2.9	0.4	1.9	1.0	
未焼就片	西 D56 b	1.8	2.65	標準	ニレ風	6.1	3.7	1.2	2.4	0.8?	
未焼就片	西 D56 b	1.8	3.22	標準	コラ風	(0.8)	2.7	0.3	(3.1)	1.0	
未焼就片	西 H55 c	1.8	3.37	標準	トネリコ風	(7.3)	(3.5)	(0.7)	(7.1)	1.0	
未焼就片	西 H54 b	1.8	1.36	標準	トネリコ風	6.0	5.2	1.2	4.0	1.0	
未焼就片	西 C66 b	1.8	6.2	標準	ヘンノキ風	(11.0)	(2.5)	(0.8)	(15.5)	1.0	
未焼就片	西 C66 b	1.8	6.5	標準	オニグルミ	10.3	2.9	0.4	2.2	1.0	
大圓切片	西 B68 a	1.8	6.8	標準	○ トネリコ風	(7.3)	2.4	1.0	2.0	1.0	
切片	西 D67 b	1.8	1.14	標準	トネリコ風	14.4	4.5	0.3	3.8	1.0	
切片	西 D67 b	1.8	1.21	標準	トネリコ風	12.1	3.5	0.6	2.4	1.0	
切片	西 D67 b	1.8	1.22	標準	トネリコ風	5.8	1.6	0.4	1.1	1.0	
切片	西 A66 d	1.8	2.20	標準	トネリコ風	(6.3)	(4.4)	(0.8)	(3.6)	1.0	
切片	西 C56 c	1.8	2.25-1	標準	セキツヨ風	6.3	4.0	0.5	1.7	1.0	
切片	西 C56 c	1.8	2.25-2	標準	イヌエンジニア	(8.8)	(3.4)	(0.6)	(1.7)	1.0	
切片	西 C66 c	1.8	2.28	標準	ヤナギ風	(6.0)	(3.0)	(0.6)	(1.8)	1.0	
切片	西 D56 c	1.8	2.29	標準	トネリコ風	(7.9)	(3.4)	(0.6)	(3.5)	1.0	

表VII-9 未燃木製品等(2)

遺物名	発見区	層位	遺物号	木取り	種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	片
切片	西 D56 c	1B1	264	板目	トネリコ属	(6.0)	(2.7)	(0.4)	(14)	先史、頭骨焼
切片	西 D56 c	1B1	265	板目	トネリコ属	3.6	3.4	0.6	—	—
切片	西 D56 c	1B1	268	板目	イヌエンドウ属	4.5	4.4	0.6	—	—
切片	西 F56 c	1B1	304	板目	イヌエンドウ属	5.1	3.4	0.5	13	—
切片	西 D56 c	1B2	329	板目	トネリコ属	—	—	—	—	片(?)
切片	西 D56 a,b	1B2	331	板目	トネリコ属	—	—	—	—	板
切片	西 E56 d	1B4	339	板目	オニグサルミ	(7.2)	4.1	0.6	(15)	—
切片	西 F56 d	1B4	341	板目	ハリギリ	(3.3)	(6.0)	(0.3)	計(15)	—
切片	西 I54 b	1B1	357	板目	トネリコ属	(1.2)	2.6	0.5	計(15)	—
切片	西 I54 b	1B1	358	板目	トネリコ属	7.7	1.7	0.2	18	—
切片	西 I54 b	1B1	359	板目	トネリコ属	6.5	4.4	0.7	—	—
切片	西 I54 a	1B1	360	板目	トネリコ属	4.4	1.9	0.4	—	—
切片	西 I54 a	1B1	361	板目	トネリコ属	(4.3)	(0.4)	(0.4)	4	—
切片	西 H54 b	1B1	365	板目	トネリコ属	(0.1)	(0.4)	(0.4)	計(15)	—
切片	西 H54 c	1B1	367	板目	トネリコ属	5.0	3.5	0.5	—	—
大型切片	西 I54 a	1B1	370-1	板目	トネリコ属	—	—	—	—	鉢(?)
切片	西 I54 a	1B1	370-2	板目	オニグサルミ	—	—	—	—	鉢(?)
切片	西 I54 a	1B1	371	板目	トネリコ属	(4.4)	(3.1)	(0.5)	(15)	—
切片	西 H54 c	1B1	372	板目	トネリコ属	5.6	3.1	0.4	16	—
切片	西 I55 a	1B1	375	板目	トネリコ属	(7.0)	(0.5)	(0.5)	(21)	—
切片	西 H54 c	1B1	377	板目	トネリコ属	5.7	4.4	1.5	34	—
角片	西 E67 b	1B5	37	1/4断	コナラ属	(7.7)	4.3	3.2	(15)	片端部破
角片	西 H56 d	1B5	45	1/4断	セミ属	24.9	2.9	2.1	44	—
角片	西 D66 d	1B2	97	1/4断	トネリコ属	11.3	2.0	1.2	33	片端部破
半骨片	西 167 a,d	1B2	32	半骨	トネリコ属	(14.4)	9.2	(0.5)	44	片端部破
半骨片	西 B66 b	1B1	51	半骨	ヤマダギ属	(3.5)	(0.4)	(0.4)	60	骨取り
半骨片	西 D67 b	1B2	119	半骨	トネリコ属	(6.5)	6.4	3.4	(66)	1/4断端部破
半骨片	西 C55 c	1B1	237	半骨	ハンドグサ属	—	—	—	(54)	1/4断端部破
半骨片	西 D56 a	1B2	260	半骨	トネリコ属	—	—	—	(91)	骨取りへる
半骨片	西 F56 d	1B3	275	半骨	コナラ属	(6.0)	2.2	2.2	(48)	片端部破、逆偏平
半骨片	西 I63 d	1B1	363	半骨	カエデ属	(14.2)	(6.6)	(3.2)	(24)	—
半骨片	西 P63 c	OB	①-1	半骨	コナラ属	14.1	(0.1)	5.1	(413)	半端部破、樹脂質
骨片	西 C66 a	1B1	57	1/4断	トネリコ属	(11.6)	(6.2)	(3.6)	(12)	骨取り
骨片	西 C67 a	1B1	87	1/4断	トネリコ属	13.4	4.3	3.0	166	1/4断端部破、逆偏平
骨片	西 D66 c	1B1	93	半骨	ハンドグサ属	16.5	5.1	5.4	475	半端部1/3断、逆偏平
骨片	西 B67 c	OB	104	1/4断	コナラ属	25.8	4.2	1.4	72	—
骨片	西 C67 c	1B2	129	1/4断	イヌエンドウ属	(10.0)	1.4	0.9	(165)	断面半分、元側切痕
骨片	西 C66 c	1B1	227	1/4断	セコソシ属	10.8	4.1	2.1	119	—
骨片	西 F56 d	1B2	282	1/4断	トネリコ属	(36.5)	(6.7)	(3.7)	(490)	断面半分、宋側切痕
骨片	西 E56 d	1B2	301	半骨	トネリコ属	184.7	6.1	4.9	1588	1/4断端部
骨片	西 E56 a	1B2	318	1/4断	ニシ属	(61.1)	6.1	3.2	(665)	1/4断端部

表VII-10 未精練木製品等(3)

通 動 物 名	来 原	身 部	筋 骨	皮 膜	連絡筋	骨 不 取	骨 切 痕	骨 痕	骨 痕	骨 痕	骨 痕	骨 痕	骨 痕	骨 痕	骨 痕
鶴村	西	C 56 a	IB 2	3.27	半筋	○	コナラ風	11.1	4.4	1.3	412	1	元経板		
鶴村	西	H 54 c	IB 1	3.69	1/1筋	○	イヌエンジン	11.1	1.4	1.4	84	1	片端切痕		
鶴村片	西	I 54 d	IB 1	3.79	1/1筋	—	トネリコ風	—	—	—	(133)	1			
鶴村	南	P 63 d	IB 3	①-3	1/1筋	○	トネリコ風	15.4	1.4	1.2	31	1			
鶴村片	南	P 63 b	IB 4	③-5	1/1筋	○	ヘンニキ風	31.7	6.4	1.2	312	1	部分的に剥離り		
鶴村片	東	D 67 b	OB	9.2	1/1筋	○	タガ風	(65.2)	1.4	1.0	(74)	1	片端剥離		
鶴村片	東	H 67 c	OB	7	4心	○	トネリコ風	(55.0)	4.9	4.2	(160)	1	片端切痕		
鶴村	東	H 67 c	OB 4	2.2	筋目	○	トネリコ風	17.1	4.2	1.5	53	1	片端切痕、遊離筋、椎心筋膜あり		
鶴村片	東	D 66 c d	IB 1	9.4	不明	○	ヤマギス風	31.5	11.5	1.0	(75)	1	片端面の剥離、米輪筋		
鶴村片	東	B 67 c	IB 1	10.3	筋/4筋	○	イヌエンジン	(14.3)	1.4	1.1	36	1	片端剥離		
鶴村	東	C 66 c	IB 2	1.31	筋/1筋	○	イヌエンジン	45.2	6.9	4.2	56	1	片端切痕、遊離筋		
鶴村片	東	C 66 b	IB 2	1.32	半筋	○	トネリコ風	(21.4)	5.4	3.4	(203)	1			
鶴村片	東	C 66 c	OB	2.24	筋目	○	トネリコ風	(15.9)	1.0	0.9	(613)	1	片端剥離筋		
鶴村片	西	D 66 b	IB 1	2.53	筋/1筋	○	ヘリギリ	1.8	—	3.7	41	1			
鶴村片	西	E 56 b	IB 3	2.90	筋目	○	トネリコ風	24.3	6.3	1.7	165	1	片端剥離		
鶴村片	西	E 56 d	IB 3	2.96	筋目	○	タガ風	(46.9)	—	—	(649)	1	片端剥離、西脇筋		
鶴村片	西	G 56 b	IB 1	2.99	筋/1筋	○	トネリコ風	(44.9)	6.2	1.0	(253)	1	片端剥離		
鶴村片	西	D 66 c	IB 2	3.34	筋/1筋	○	トネリコ風	(53.9)	4.4	1.9	(219)	1	片端切痕		
鶴村片	西	D 66 c d	IB 2	3.35	4心	○	トネリコ風	(64.8)	5.6	4.3	(639)	1	片端剥離		
鶴村	西	H 54 c	IB 1	3.68	筋目	○	トネリコ風	11.2	7.6	2.0	117	1	片端切痕		
鶴村片	西	B 54 (154)	IB 1	3.73	筋目	○	トネリコ風	35.4	15.2	4.0	219	1			
鶴村片	西	H 54 b	精(150)	3.85	筋目	○	トネリコ風	(15.0)	0.9	1.0	(104)	1	片端剥離筋		
鶴村片	西	D 56 a	IB 3	4-4	筋/1筋	○	トネリコ風	7.4	—	0.3	18	1			
鶴村片	西	P 63 a	IB 3	①-8	筋目	○	トネリコ風	—	—	—	(115)	1			
鶴村片	西	C 67 a	IB 1	2.50	筋目	○	トネリコ風	(16.4)	(7.4)	0.0	(316)	1			
鶴村片	西	D 56 c	IB 1	2.51	筋目	○	ニラ風	—	—	—	(131)	1			
鶴村片	西	D 56 d	IB 1	2.58	筋目	○	トネリコ風	—	—	—	(310)	1			
鶴村片	西	F 56 c	精(150)	3.07	筋目	○	トネリコ風	(44.0)	8.4	3.0	(610)	1	片端剥離加工、片端剥離筋		
鶴村片	西	D 56 a	IB 2	3.30	筋目	○	トネリコ風	10.4	(9.9)	1.2	(152)	1	片端剥離部分工、片端剥離		
鶴村片	西	E 56 a	IB 2	3.02	筋目	○	コナラ風	(44.0)	7.2	2.1	(74)	1	片端剥離全筋		
鶴村片	東	B 66 b	IB 1	4.8	筋目	○	スギ	5.6	2.6	1.1	24	1	片端剥離		
鶴村片	東	C 67 a	IB 1	8.4	筋目	○	コナラ風	16.2	1.6	0.8	53	1			
鶴村片	西	D 56 a	IB 1	2.33	筋目	○	トネリコ風	19.1	2.2	1.5	57	1	片端加工		
鶴村片	西	C 56 c	IB 1	2.39	筋目	○	ヘリギリ	—	—	—	(91)	1			
鶴村片	西	D 51 EH 1	IB 1	3.24	筋目	カツラ	—	—	—	—	1				
鶴村片	西	I 54 b	IB 1	3.56	半筋	○	トネリコ風	14.6	4.6	1.2	33	1	片端切痕		
鶴村片	西	D 56 d	IB 1	3.28	筋目	スピリ	—	—	—	—	1				
鶴村片	東	I 66 c	IB 3	3.0	半筋	○	トネリコ風	(55.4)	(9.9)	0.4	(68)	1	片端筋引き抜き、片端切痕、その両邊邊筋		
鶴村片	東	H 68 601	IB 2	5.0	半筋?	○	コナラ風	54.1	10.1	1.1	(448)	1	片端筋引き抜き筋の自然木小?		
鶴村	東	H 67 c	IB 1	6	元木	○	トネリコ風	(24.9)	3.4	1.7	(71)	1	片端切痕		
鶴村	東	E 66 d	OB	1.2	丸木	○	ヤマギス風	34.8	1.3	1.4	34	1	片端切痕		

表VII-11 未燃薪木製品等(4)

遺 品 名	采 集 区	層 位	遺物種	木 取 り	幅	高	長さ	幅	高	長さ	幅	高	重量	片
板付	夏 E66d	0B	1.3	丸木	トナガ	41.1	1.3	1.1	1.1	11				
板付	夏 E66d	1B2	1.7	丸木	トナガ	13.7	1.3	2.1	2.1	72	片燃切頭、部分的に面取りあり			
板付	夏 E67 a	1B3	1.8-1	丸木	トナリコ	16.6	1.3	2.1	2.1	62	片燃切頭、部分的に面取りあり			
板付	夏 E67 a	1B3	1.8-2	丸木	トナリコ	16.9	1.3	2.1	2.1	55	片燃切頭、逆側削、部分的に面取りあり			
板付	夏 E67 a	1B3	1.8-3	丸木	トナリコ	15.7	2.3	0.6	0.6	56	片燃切頭、逆側削、部分的に面取りあり			
板付	夏 H67 a	1B3	1.9	丸木	コナラ	14.9	1.1	1.0	1.0	7	部分外側面取りあり			
板付	夏 H67 c	1B4	2.3	丸木	トナリコ	5.3	1.0	0.7	0.7	3	片燃切頭			
板付	夏 E67 a	1B4	3.6	丸木	○	タブ	31.0	3.4	2.6	167	元燃切頭、片燃切頭、斜め切頭			
板付片	夏 E66 c d	1B3	4.2	丸木	トナリコ	(16.9)	2.4	2.9	2.9	(98)	元燃切頭?			
板付片	夏 H66 a	1B3	4.3	丸木	○	タブ	(16.9)	1.0	0.7	(61)	片燃切頭、斜め切頭			
板付	夏 H67 b	1B3	4.4	丸木	ツル性植物	26.2	1.1	1.1	1.1	33				
板付片	夏 B66 b	1B3	4.6	丸木	ニレ属	61.0	2.4	2.1	2.1	301				
板付片	夏 B66 b	1B3	5.0	丸木	○	コナラ	(16.9)	1.0	0.7	(30)	元燃切頭、全面焼			
板付	夏 B66 c	1B3	5.3	丸木	トナリコ	61.4	2.1	2.1	2.1	236	元燃切頭、斜め切頭			
板付片	夏 C66 a	1B1	5.5	丸木	タブ	(61.0)	2.1	2.1	2.1	(217)	片燃切頭、斜め切頭			
板付片	夏 C66 a	1B1	5.9	丸木	タブ	7.5	2.3	2.3	2.3	(62)	片燃切頭			
板付	夏 C66 a	1B1	6.1	丸木	○	タブ	(16.9)	3.6	1.3	(97)	元燃切頭?			
板付	夏 C66 b	1B1	6.6	丸木	ヤナギ	15.5	1.4	2.1	2.1	38	元燃切頭、未燃切頭			
板付	夏 C66 b	1B1	7.0	丸木	ヤナギ	(15.0)	1.1	1.0	1.0	(151)	元燃切頭			
板付	夏 C66 b	1B1	7.1	丸木	ヤナギ	52.7	4.1	3.0	3.0	589	元燃切頭、斜め切頭			
板付片	夏 C66 c	1B1	7.3	丸木	ヤナギ	(66.3)	2.1	1.7	1.7	(130)	元燃切頭、斜め切頭			
板付片	夏 C66 c	1B1	7.6	丸木	トナリコ	(16.9)	1.4	1.5	1.5	(102)	元燃切頭			
板付片	夏 C66 d	1B1	8.0	丸木	ヤナギ	58.5	1.7	1.6	1.6	(65)	元燃切頭			
板付	夏 C67 a	1B1	8.6	丸木	ヤナギ	111.6	2.1	2.1	2.1	365	元燃切頭			
板付	夏 D66 d	1B2	9.5	丸木	ハシノキ	16.5	1.3	1.6	1.6	49	元燃切頭			
板付片	夏 D66 d	1B2	9.6	丸木	ハシノキ	16.2	1.9	1.1	1.1	24	二面削			
板付片	夏 D66 d	1B1	9.8	丸木	ヤナギ	(22.1)	2.5	2.2	2.2	(135)	元燃切頭、二面削			
板付	夏 B68 a	0B	1.13	丸木	ヤナギ	31.4	2.1	2.0	2.0	155	元燃切頭			
板付	夏 D67 b	1B1	1.20	丸木	○	タブ	(41.9)	2.1	1.7	(28)	片燃切頭			
板付片	夏 D67 c	1B1	1.23	丸木	トナリコ	(16.9)	1.4	1.6	1.6	(70)	片燃切頭			
板付	夏 C65 d	1B1	1.26	丸木	○	イヌエンシス	13.2	2.3	2.1	2.1	76	片燃切頭		
板付	夏 C66 d	1B1	1.45	丸木	○	ブナ	(16.9)	1.1	1.0	1.0	(131)	元燃切頭、斜め切頭		
板付	夏 C66 d	1B1	1.46	丸木	○	ブナ	11.2	4.1	1.4	1.4	37	元燃切頭、全面焼		
板付	夏 C66 d	1B3	1.81	丸木	トナリコ	12.3	2.6	1.3	1.3	53	元燃切頭?			
板付片	夏 A67 d	1B4	2.11	丸木	ヤナギ	(16.9)	2.4	1.8	1.8	(117)	元燃切頭			
板付片	夏 C56 b	1B1	2.30	丸木	ヤナギ	16.6	2.1	2.0	2.0	88	片燃切頭			
板付片	夏 C56 b	1B1	2.34	丸木	○	ベニズイ	(17.6)	1.1	1.1	1.1	(131)	全面焼		
板付片	夏 C56 b d	1B1	2.42	丸木	○	ブナ	(17.6)	1.1	1.1	1.1	(240)	片燃切頭		
板付	夏 D56 b	1B1	2.54	丸木	トナリコ	31.0	1.0	1.2	1.2	156	元燃切頭			
板付片	夏 D56 a	1B1	2.61	丸木	トナリコ	(22.6)	2.3	1.3	1.3	(137)	元燃切頭、未燃切頭			
板付片	夏 D56 c	1B1	2.67	丸木	ヤナギ	(16.9)	1.1	1.1	1.1	(66)	片燃切頭			

表IV-12 未掲載木製品等(5)

通 物 名	海 洋 部 分 区	層 位	通 報 番 号	取 扱 方	長 さ cm	幅 cm	厚 さ cm	重 量 g	備 考		
									片側切歯、逆彎歯	片側切歯、二面彎歯	片側切歯
鮫村	西 G56b	IB1	298	丸木	○ トネリコ属	46.9	4.4	3.6	33		
鮫村	西 E56d	IB1	316	丸木	○ ハシドリイ属	61.7	2.1	1.1	(16)	片側切歯	片側切歯
鮫村	西 E56a	IB1	336	丸木	△ ハシドリイ属	64.4	2.1	2.0	35	片側切歯	片側切歯
鮫村	西 T56c	IB2	350	丸木	△ 底面削	14.5	1.4	0.9	18	片側切歯?	
鮫村	西 O56d	IB3	380	丸木	○ トネリコ属	31.1	2.6	1.5	(16)	片側切歯	片側切歯
鮫村	西 E56b	IB1	319	丸木	○ コナラ属	64.0	2.2	1.5	(16)	片側切歯、底面削	片側切歯
鮫村	東 E67a	IB1	9	丸木	○ トネリコ属	16.4	2.3	0.9	13	片側切歯?	
鮫村	東 H67b	IB1	20	丸木	○ トネリコ属	16.4	2.2	1.1	15	片側切歯?	
鮫村	東 I67a	IB2	21	丸木	○ トネリコ属	64.9	6.1	4.5	(16)	金棒曲、片側切歯	
鮫村	東 I67a	IB4	28	丸木	○ トネリコ属	61.4	4.2	0.1	41	片側切歯	
鮫村	東 I67c	IB2	31	丸木	○ イヌエンジニア	61.3	6.1	5.9	55	片側切歯	
鮫村	東 C66c	IB1	72	丸木	○ トネリコ属	26.1	3.4	1.8	14	片側切歯	
鮫村	東 C66c	IB1	77	丸木	○ ヤマガラ属	44.7	3.4	2.9	(16)	片側切歯	片側切歯
鮫村	西 B56d	IB1	89	丸木	○ トネリコ属	146.4	3.9	3.5	(16)	片側切歯	片側切歯
鮫村	西 D56c	IB1	247	丸木	○ イヌエンジニア	101.4	7.0	5.7	189	片側切歯	
鮫村	西 D56c	IB1	249	丸木	○ イヌエンジニア	117.2	4.8	4.7	114	片側切歯	
鮫村	西 D56d	IB1	263	丸木	○ トネリコ属	118.6	9.3	7.2	418	片側切歯、複雑な彎りあり	
鮫村	西 E56c	IB2	310	丸木	○ トネリコ属	71.0	3.9	3.5	93	片側切歯	
鮫村	西 E56d	IB1	311	丸木	○ ニレ属	53.7	4.2	3.2	45	複雑な切歯	
鮫村	西 F56a	IB1	317	丸木	○ トネリコ属	171.0	5.5	5.4	181	片側切歯	
鮫村	西 F56a	IB1	323	丸木	○ ナツカミヤマ属	116.8	3.2	3.1	41	片側切歯	
鮫村	西 F56d	IB1	381	丸木	○ トネリコ属	81.0	8.0	4.2	415	多	元側切歯
鮫村	東 I67b	IB3	29	丸木	○ トネリコ属	37.3	5.4	3.5	265	枚?	元側切歯、複雑な彎りあり
鮫村	西 C66a	IB2	54	丸木	○ イヌエンジニア	36.7	3.7	2.7	114	元側切歯、複雑な彎りあり	
鮫村	西 C66d	IB1	83	丸木	○ クワ属	36.5	13.0	6.6	158	元側切歯、複雑な彎りあり	
鮫村	西 D56a	IB1	232	丸木	○ トネリコ属	91.1	6.1	3.9	98	元側切歯	
鮫村	西 D56b	IB2	333	1/断面	○ コナラ属	61.5	5.5	5.1	83	元側切歯	
鮫村	西 G56c	IB4	326	丸木	○ トネリコ属	—	—	—	(16)	片側切歯	
鮫村	西 D68a	IB1	92	丸木	○ トネリコ属	56.3	2.1	2.0	211	下端尖、上端鋸歯	
鮫村	西 B66a	IB1	139	丸木	○ トネリコ属	68.5	2.1	1.1	244	下端尖、上端鋸歯	
鮫村	西 B66d	IB1	143	丸木	○ トネリコ属	34.8	3.2	1.1	67	下端尖、上端鋸歯	
鮫村	西 F65d	IB1	342	丸木	○ トネリコ属	44.7	2.7	2.3	(16)	下端尖、上端鋸歯	
鮫村	西 D66c	IB2	382	心材	○ コナラ属	126.9	2.1	3.1	(16)	来尖尖、二面削、根部削	
鮫村	西 C66c	IB1	74	丸木	○ カバノキ属	134.5	2.1	2.2	210	来尖尖、二面削、根部削	
鮫村	西 D67d	IB1	127	丸木	○ サナギ属	126.0	2.1	2.2	210	来尖尖、二面削、根部削	
鮫村	西 G56a	IB1	140	丸木	○ ハシドリイ属	107.9	4.5	3.0	413	元側尖、複交二面削	
鮫村	西 C55b	IB1	238	丸木	○ トネリコ属	101.9	2.3	3.0	61	元側尖、複交二面削	
鮫村	西 L53c	IB2	353	丸木	○ イヌエンジニア	122.2	3.4	4.5	116	元側尖、複交二面削	

表III-13 未焼就木製品等(6)

遺物名	来 源	分 類	層 位	遺物番号	不取 り	備 考	層 位	長さ(m)	幅 cm	厚さ(cm)	重量(g)	備 考
枕先 枕	東 西	F655a F556b	1B5 1B1	4.1 2.89	丸木 丸木	○ ○	ハシゴイ属 イスエンドジス	(17.9) (9.4)	5.1 4.3	3.4 4.4	(122) (475)	下端丸、玉~六面削 下端丸、玉三面削、頭部丸
枕先 奥化村	南 東	D556b C664c	1B2 1B1	3.32 ③-7	丸木 丸木	○ ○	ハシゴイ属 サクラ属	4.1 (12.4)	3.4 4.4	3.2 2.1	457 (155)	下端丸、一端削 下端丸、直交二面削
枕先 奥化村	東 西	C664d B667a	1B1 1B3	7.9 1.41	轆轤 轆轤	○ ○	ガエテ属 トネリコ属	37.4 23.0	4.4 3.0	2.1 1.4	331 36800	新井井筒と矢槍 新井井筒と矢槍
枕先 奥化村	東 西	A67c A67c	1B3 1B3	2.17 2.18	轆轤 轆轤	○ ○	トネリコ属 トネリコ属	44.7 23.0	14.2 3.4	3.4 1.4	1760 1540	轆轤、櫛心頭椎 轆轤、金環椎
枕先 奥化村	東 西	E556b E556c	1B3 1B2	2.19 3.20	轆轤 轆轤	○ ○	トネリコ属 コナラ属	- -	- -	- -	848 844	轆轤、金環椎
枕先 奥化村	東 西	I53d H54c	1B2 1B2	3.64 3.78	轆轤 轆轤	○ ○	クワ属 トネリコ属	31.5 6.3	9.0 1.1	2.2 1.1	354 34	新井井筒と矢槍 新井井筒と矢槍
枕先 奥化村	東 西	I54d C67c	1B2 1B3	3.83 3.9	轆轤 轆轤	○ ○	ヤマギ属 トネリコ属	5.5 2.0	1.1 1.1	1.8 1.8	122 122	轆轤
轆轤	南	P64d	1B1	③-6	轆轤	○	トネリコ属	-	-	-	-	-
轆轤	東	C68a	1B1	5.6	轆轤	○	トネリコ属	(2.9)	(2.7)	-	(25)	部分丸上フ
轆轤	東	C68a	1B1	6.0	轆轤	○	トネリコ属	(4.2)	(2.7)	-	(67)	部分丸上フ
轆轤	東	C68b	1B1	6.7	轆轤	○	トネリコ属	(2.8)	(0.4)	-	(19)	部分丸上フ
轆轤	東	C67a	1B1	8.8	轆轤	○	トネリコ属	(1.9)	-	-	(20)	部分丸上フ
轆轤	東	C556c	1B1	2.26	轆轤	○	トネリコ属	-	-	-	(21)	部分丸上フ
轆轤	東	F556c	1B2	2.36	轆轤	○	トネリコ属	-	-	-	(21)	部分丸上フ
轆轤	西	F556c	1B2	2.36	轆轤	○	トネリコ属	-	-	-	(21)	部分丸上フ
轆轤	西	F556b	1B2	2.44	轆轤	○	トネリコ属	-	-	-	(43)	部分丸上フ
轆轤	西	F556b	1B2	2.57	轆轤	○	トネリコ属	-	-	-	(47)	部分丸上フ
轆轤	西	F556b	1B2	2.59	轆轤	○	トネリコ属	-	-	-	(615)	部分丸上フ
轆轤	西	F556d	1B2	2.70	轆轤	○	トネリコ属	-	-	-	(414)	部分丸上フ
轆轤	西	F556d	1B1	2.72	轆轤	○	トネリコ属	-	-	-	(177)	部分丸上フ
轆轤	西	F556d	1B1	2.73	轆轤	○	トネリコ属	-	-	-	(6)	部分丸上フ
轆轤	西	F556c	1B1	2.76	轆轤	○	トネリコ属	(6.9)	2.2	-	(6)	部分丸上フ
轆轤	西	F556c	1B1	2.77	轆轤	○	トネリコ属	-	-	-	(11)	部分丸上フ
轆轤	西	F556d	1B1	2.78	轆轤	○	トネリコ属	-	-	-	(14)	部分丸上フ
轆轤	西	F556d	1B1	2.80	轆轤	○	トネリコ属	1.1 (31.9)	0.1 (5.8)	0.1 0.5	(91)	部分丸上フ
轆轤	西	F556d	1B1	2.81	轆轤	○	トネリコ属	-	-	-	(61)	部分丸上フ
轆轤	西	F556d	1B1	2.93	轆轤	○	トネリコ属	-	-	-	(51)	部分丸上フ
轆轤	西	G556b	1B1	2.95	轆轤	○	トネリコ属	-	-	-	(18)	部分丸上フ
轆轤	西	G556b	1B1	3.00	轆轤	○	トネリコ属	-	-	-	(19)	部分丸上フ
轆轤	西	I53c	1B1	3.03	轆轤	○	トネリコ属	-	-	-	(19)	部分丸上フ
轆轤	西	I54a	1B1	3.62	轆轤	○	トネリコ属	-	-	-	(19)	部分丸上フ
轆轤	西	I54d	1B1	3.76	轆轤	○	トネリコ属	-	-	-	(19)	部分丸上フ

(3) 木製品の樹種同定

<1> はじめに

遺跡から出土する木製品の樹種を明らかにすることは、当時の木材利用・個別の用具の樹種選択の実態をとらえることになり、遺跡を営んだ人々の生活を知る手立てとなる。さらには、遺跡周辺の植生や、人々の交易関係・移動を解明する上で重要な手がかりとなるのである。

北海道の擦文・アイヌ文化期の遺跡では、当センターが千歳市美々 8 遺跡の低湿部の調査で報告した約 5,000 点と、オサツ 2 遺跡の約 250 点の同定記録が、当該期・当該地域の先駆的資料である。今報告と以後に続く当遺跡の報告資料が、これらと比較検討され、必要不可欠の資料となることを期待したい。

なお、自然木の同定については、次報告以降で追加資料としてゆきたい。

(三浦)

<2> 試料および識別的方法

1) 試料

樹種同定時の出土材は水漬で保管されていた。試料は、破断面などのあまり目立たない部分を選び、加工された部分は避けること、また、正常な組織構造の観察ができるように、腐れなどによる劣化の進んだ部分、節など組織の乱れのある部分、髓に近い部分はできるだけ避けることに留意し、木口面、板口面、粂口面の 3 断面を採取した。

①生物顕微鏡用試料

出土材から直接両刃カミソリを用いて各断面の、一年輪以上が含まれる 5 mm × 5 mm、厚さ 10~20 ミクロン程の切片を採取した。その後、3 断面を 1 セットとしてプレパラートを作製し、観察を行った。

②走査電子顕微鏡用試料

まず、出土材から片刃カミソリで小木片（1 cm 角程）を採取し、アルコール・シリーズで脱水し、さらに室内に 24 時間以上放置し、乾燥させた。次に、ルーペ及び実体顕微鏡（Nikon - SMZ-10）において確認しながら、両刃カミソリでわざかに切り込みを入れて割裂し、各断面を露出させた。それらを一年輪以上が含まれる 5 mm 角程のブロックになるよう整形し、一つの試料台に 1 断面ずつを導電性接着剤（ドータイト）で固定した。その後、イオンスピッタリング装置（JEOL - JFC-1000）で金（Au）のコーティング（1.2 kV、8 mA、10 分）を施し、観察を行った。

2) 識別方法

出土材の生木部分については生物顕微鏡観察、炭化部分については走査電子顕微鏡観察により識別を行った。また、生物顕微鏡では明確にできなかった点についても、走査電子顕微鏡で観察を行った。

①針葉樹材の樹種識別上の主な観察項目

生物顕微鏡・走査電子顕微鏡：年輪構造（早材部から晩材部への移行の状態、晩材の幅）、樹脂道（垂直・水平樹脂道の有無、エピセリウム細胞の壁厚）、仮道管（有縁壁孔の配列、らせん肥厚の有無、分野壁孔の型と数）、樹脂細胞（有無、分布）、放射組織（放射仮道管の有無、放射柔細胞の末端壁の状態、細胞幅と細胞高）

走査電子顕微鏡：仮道管のいぼ状層、有縁壁孔の壁孔壁、らせん肥厚の形状など。

②広葉樹材の樹種識別上の主な観察項目

生物顕微鏡・走査電子顕微鏡：道管（木口面における配列、らせん肥厚の有無、せん孔の形状、道管相互壁孔の形状と配列、チロースの形状）、仮道管（有無）、輪方向柔細胞（分布と配列）、放射組織の形態（同性・異性、細胞幅と細胞高、分布）

走査電子顕微鏡：道管のらせん肥厚の有無と形状、せん孔の形状、バスチャード壁孔など。

（3）識別結果

平成8・9年度の①・③区出土の木製品のうち、木質部をもつ398点の遺物について樹種の識別を行ない、20科28属を同定した。樹種構成は針葉樹4科5属、広葉樹16科23属であり、そのうち7属については種までの同定を行った。それらの同定の根拠となった組織構造的な特徴を、針葉樹、広葉樹、同定できなかったものの順で以下に記す。なお、広葉樹の放射組織の同性と異性の区別については、平伏細胞のみからなるものを同性、それ以外のものを異性とした。しかし、オニグルミのように大部分が平伏細胞からなり、方形細胞が時々混じる場合には、同性に区別した。また、可能性は高いが断定するには至らなかったものには、属名の後に?を記した。

1 イチイ *Taxus cuspidata* Sieb. et Zucc. (イチイ属 *Taxus*) (いちい科 TAXACEAE)

仮道管と放射柔細胞からなり、分野壁孔はヒノキ型である。仮道管の内壁には、はっきりとしたらせん肥厚が存在する。

顯微鏡写真 No. 1

2 モミ属 *Abies* (まつ科 PINACEAE)

仮道管と放射柔細胞からなり、分野壁孔は典型的なスギ型である。放射柔細胞の壁は厚く数珠状末端壁を有する。

トドマツと推定される。

顯微鏡写真 No. 2

3 トウヒ属 *Picea* (まつ科 PINACEAE)

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管、水平・垂直樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞からなる。分野壁孔はトウヒ型である。らせん肥厚は存在しない。木口面で早晚材の移行が比較的ゆるやかであることからトウヒ属としたが、分野壁孔の形状が典型的なトウヒ型ではないものも認められ、カラマツ属の可能性も否定できない。

エゾマツ やアカエゾマツが推定される。

顯微鏡写真 No. 3

4 スギ *Cryptomeria japonica* D. Don

(スギ属 *Cryptomeria*) (すぎ科 TAXODIACEAE)

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなり、樹脂道、放射仮道管は存在しない。仮道管にらせん肥厚は存在しない。樹脂細胞は早・晩材部の移行部から晩材部にかけて散在する。年輪界は明瞭で、早材部から晩材部への移行はやや急である。晩材部の幅は比較的広い。放射組織は単列のみで一般に10細胞高以下である。分野壁孔はスギ型である。仮道管の内壁の表面にはイボ状突起の存在が走査電子顕微鏡により確認できる。

顯微鏡写真 No. 4

5 ヒノキ属? アスナロ属? *Chamaecyparis? Thujopsis?* (ひのき科 CUPRESSACEAE)

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなり、樹脂道、放射仮道管は存在しない。仮道管にらせん肥厚は存在しない。樹脂細胞は晩材部の接線状に散在する。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅が狭い。分野壁孔はヒノキ型がほとんどであるが、中にはスギ型との中间的なものもしばしば認められ、1分野に2~5個存在する。分野壁孔が、典型的なヒノキ型のみでないことから、アスナロ属の可能性も否定できない。

顯微鏡写真 No. 5

6 ヤナギ属 *Salix* (やなぎ科 SALICACEAE)

4 木製品

木口面：散孔材である。道管は時折2～3個の複合管孔を形成する。

板目・柾目面：放射組織は単列で異性である。道管要素は单せん孔をもつ。らせん肥厚は存在しない。また、道管相互壁孔は交互壁孔である。

エゾノカワヤナギ、オノエヤナギ、バッコヤナギ、エゾノバッコヤナギなどが推定される。

顯微鏡写真 No. 6

7 オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr.

(オニグルミ属 *Juglans*) (くるみ科 JUGLANDACEAE)

木口面：散孔材である。大型の道管が単独もしくは2～3個複合して存在する。道管内には顕著にチロースが認められることが多い。柔細胞の接線方向への配列は本属の特徴である。

板目・柾目面：放射組織は1～3細胞幅で3～20細胞高であり同性であるが、方形細胞を含む場合がある。道管要素は单せん孔をもつ。らせん肥厚は存在しない。

顯微鏡写真 No. 7

8 カバノキ属 *Betula* (かばのき科 BETULACEAE)

木口面：散孔材であり、一般に道管は2～4個が放射方向に複合する。

板目・柾目面：放射組織は1～4細胞幅で40細胞高以上にもなり、同性である。道管要素は階段せん孔をもつ。らせん肥厚は存在しない。

シラカンバやウダイカンバ等が推定される。

顯微鏡写真 No. 8

9 ハンノキ属 *Alnus* (かばのき科 BETULACEAE)

木口面：散孔材である。多くの道管は2～4個が放射方向に複合する。

板目・柾目面：放射組織は単列で同性である。集合放射組織を形成する。道管要素は階段せん孔をもつ。らせん肥厚は存在しない。

ハンノキ、ケヤマハンノキ等が推定される。

顯微鏡写真 No. 9

10 コナラ属 *Quercus* (ぶな科 FAGACEAE)

木口面：環孔材である。孔圈部の大道管にはチロースが認められ、付近には周囲仮道管が存在する。孔圈外の道管は、やや放射状に配列することがある。

板目・柾目面：放射組織は単列と広放射組織からなり、同性である。道管要素は单せん孔をもつ。ミズナラ、コナラ、カシワ等が推定される。

顯微鏡写真 No. 10

11 ブナ属 *Fagus* (ぶな科 FAGACEAE)

木口面：散孔材である。道管はほぼ平均に分布し、年輪の前半部の道管の方が大きく、外側にいくにつれて大きさと数が減少する。

板目・柾目面：放射組織は単列のもの、2～数列のもの、広放射組織の3種類があり、ほとんど同性である。道管要素は、一般に年輪の前半部で单せん孔、外側では、階段せん孔と網状せん孔をもつ。らせん肥厚は存在しない。

ブナ（北海道南部が北限）、イヌブナ（北海道外）が推定される。

顯微鏡写真 No. 11

12 ニレ属 *Ulmus* (にれ科 ULMACEAE)

木口面：環孔材である。孔圈部の道管は2～3列になり、孔圈外では多数の小道管が接合して集団

管孔を形成し、接線方向にかなり規則的に配列する。

板目・桿目面：放射組織は1～6細胞幅、3～70細胞高で、同性である。道管要素は単せん孔をもち、内壁にはらせん肥厚が存在する。

ハルニレまたはオヒヨウが推定される。

顯微鏡写真 No. 12

13 ケヤキ属 *Zelkova* (にれ科 ULMACEAE)

木口面：環孔材である。孔圈部の大道管が一列に並ぶ。孔圈外では急に道管の大きさを減じている。小道管は多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集團管孔を形成している。

板目・桿目面：放射組織は6～7細胞幅のものが多く、上下の縁辺のみが方形細胞の異性である。方形細胞には、時々結晶が認められる。道管要素は単せん孔をもつ。小道管の側壁にはらせん肥厚が存在する。

ケヤキ（北海道外）が推定される。

顯微鏡写真 No. 13

14 クワ属 *Morus* (くわ科 MORUS)

木口面：環孔材である。孔圈部では単独あるいは2～3個の道管が複合する。孔圈外では小道管が複合して團塊状をなす。道管内にはチロースが認められる。

板目・桿目面：放射組織は1～6細胞幅、5～60細胞高で、異性である。道管要素は単せん孔をもつ。小道管のらせん肥厚は、走向が不規則な場合がある。

ヤマグワが推定される。

顯微鏡写真 No. 14

15 カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.

(カツラ属 *Cercidiphyllum*) (かつら科 CERCIDIPHYLLACEAE)

木口面：散孔材である。ほとんどの道管は単独で数がきわめて多く、年輪内全体を通じて平等に分布する。

板目・桿目面：放射組織は1～2細胞幅で、直立細胞の間に、方形細胞と平伏細胞が入り込む典型的な異性である。道管要素は階段せん孔をもち、Barの数も20本以上と非常に多い。らせん肥厚は存在しない。

顯微鏡写真 No. 15

16 モクレン属 *Magnolia* (もくれん科 MAGNOLIACEAE)

木口面：散孔材である。単独または2～数個の放射方向に接続した道管が平等に分布する。

板目・桿目面：放射組織は1～2細胞幅で5～35細胞高と高い。上下縁辺の1～2列のみが直立細胞ないし方形細胞で、そのほかは平伏細胞の異性である。道管要素は単せん孔と階段せん孔をもつ。らせん肥厚が存在する。道管には階段壁孔と対列壁孔が認められる。

ホオノキ、キタコブシ、コブシが推定される。

顯微鏡写真 No. 16

17 アジサイ属 *Hydrangea* (ゆきのした科 SAXIFRAGACEAE)

木口面：散孔材である。道管は単独または2～3個複合して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞が放射方向へ連続して認められるのが特徴である。

板目・桿目面：放射組織は1～2細胞幅、3～5細胞高で、板目面では上下方向で軸方向柔細胞と接している。異性である。道管要素は階段せん孔をもつ。らせん肥厚は認められない。

4 木製品

用途適性から類推してノリウツギと考えられるが同属の他樹種の可能性もある。

顕微鏡写真 No. 17

18 サクラ属 *Prunus* (ばら科 ROSACEAE)

木口面：散孔材である。道管は単独または2～3個が複合して年輪内に平等に分布する。

板目・径目面：放射組織は1～4細胞幅で、20細胞高以上になる場合が多い。異性であるが、板目面では判別しにくい。道管要素は单せん孔をもつ。らせん肥厚が存在する。

エゾヤマザクラ、ミヤマザクラ、シシリザクラ、ウワミズザクラ等が推定される。

顕微鏡写真 No. 18

19 ナナカマド属 *Sorbus* (ばら科 ROSACEAE)

木口面：散孔材である。道管は径が小さく単独または2～3個が複合する。

板目・径目面：放射組織は2～3細胞幅、3～30細胞高で同性である。道管要素は单せん孔をもち、稀に多孔せん孔が認められる。内壁にはらせん肥厚が存在するが、腐朽により形状が明瞭ではないため、本属の2～3本が束になるSらせんとZらせんの特徴的な肥厚であるかは確認できない。しかし、網状（多孔）せん孔が認められることから、ナナカマド属であると考えられる。

顕微鏡写真 No. 19

20 イヌエンジュ *Maackia amurensis* Rupr. et Maxim.

(イヌエンジュ属 *Maackia*) (まめ科 LEGUMINOSAE)

木口面：環孔材である。孔塞部から孔塞外への道管の径の移行はゆるやかである。年輪界付近には小道管の集団管孔の不規則な配列がみられる。

板目・径目面：放射組織は1～6細胞幅、6～50細胞高で、同性である。小道管が層階状配列をなし、顯著ならせん肥厚が認められる。バスチャード壁孔が走査電子顕微鏡により認められる。

顕微鏡写真 No. 20

21 ハギ属 *Lespedeza* (まめ科 LEGUMINOSAE)

木口面：道管は環孔材に配列することが多い。孔塞部から孔塞外への道管の径の移行はゆるやかである。年輪界付近では小道管の集団管孔が不規則に配列する。

板目・径目面：放射組織は1～4細胞幅で4～60細胞高と高く、顯著な異性である。小道管が層階状配列をなし、らせん肥厚が認められる。

エゾヤマハギ等などが推定される。

顕微鏡写真 No. 21

22 ツルウメモドキ属 *Celastrus* (にしきぎ科 CELASTRACEAE)

木口面：きわめて径の大きい道管が不規則に分布する。

板目・径目面：放射組織は1～6細胞幅で、多列部が20～60細胞高、時々100細胞高以上に達する。異性である。道管要素は单せん孔をもち、らせん肥厚が存在する。大道管の付近には周囲仮道管が存在する。

ツル性植物の同定には資料が乏しいが、ツルウメモドキ属であると考えられる。

顕微鏡写真 No. 22・23・24

23 カエデ属 *Acer* (かえで科 ACERACEAE)

木口面：散孔材である。道管は、単独または数個が複合して均等に分布するが数は少ない。

板目・径目面：放射組織は1～8細胞幅で5～30細胞高で、同性である。道管要素は单せん孔をもち、らせん肥厚が存在する。

イタヤカエデ、ヤマモミジ、ハウチワカエデ等が推定される。

顯微鏡写真 No. 25

- 24 ハリギリ *Kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai

(ハリギリ属 *Kalopanax*) (うこぎ科 ARALIACEAE)

木口面：環孔材である。孔圈外では小道管が多数接合して複合管孔を形成し、斜線状や波状に配列する。

板目・桿目面：放射組織は1～6細胞幅で上下の縁辺の1列のみに方形細胞が並ぶ異性である。道管要素は単せん孔をもち、らせん肥厚は存在しない。

顯微鏡写真 No. 26

- 25 コシアブラ *Acanthopanax sciadophylloides* Fr. et Sav

(ウコギ属 *Acanthopanax*) (うこぎ科 ARALIACEAE)

木口面：環孔材であるが、孔圈道管はあまり明瞭でなく、孔圈外では散孔状に配列し、半環孔状を呈する。

板目・桿目面：放射組織は1～4細胞幅で異性である。道管要素は単せん孔をもつ。道管壁にらせん肥厚は存在しない。

顯微鏡写真 No. 27

- 26 ヨウラクツツジ属？ *Menziesia?* (つつじ科 ERICACEAE)

木口面：散孔材である。道管は径が小さく、単独または2～3個が複合し、年輪内に平等に分布する。

板目・桿目面：放射組織は大部分が1細胞幅で稀に2細胞幅になり、2～60細胞高である。直立細胞と平伏細胞からなる異性である。道管要素は階段せん孔をもつ。らせん肥厚の有無は、腐朽がひどく確認できない。

つつじ科のヨウラクツツジ属に類似するが、断定はできない。

顯微鏡写真 No. 28

- 27 トネリコ属 *Fraxinus* (もくせい科 OLEACEAE)

木口面：環孔材である。道管は孔圈部で大きく、孔圈外では急激に小さくなり、単独のものと2～3個が放射方向に複合するものがある。道管の周囲には周囲柔組織が存在する。

板目・桿目面：放射組織は1～4細胞幅、10細胞高ほどで比較的均一であり、同性である。道管要素は単せん孔をもち、らせん肥厚は存在しない。

ヤチダモ、アオダモ等が推定される。

顯微鏡写真 No. 29

- 28 ハシドイ属 *Syringa* (もくせい科 OLEACEAE)

木口面：散孔材である。道管は、単独または数個が複合して均等に分布する。

板目・桿目面：放射組織は1～2細胞幅で、異性であるが、大部分は平伏細胞である。道管要素は単せん孔をもち、2本の対をなす特徴的ならせん肥厚が存在する。

木口面において道管が年輪に沿って一列に並ぶこともあり、道管の配列は個体間で違いが見られた。ハシドイと推定される。

顯微鏡写真 No. 30

- 29 広葉樹

木口面：環孔材である。孔圈部の道管は2～3個が複合し、孔圈外では急激に小さくなるが、正常

な配列は観察できない。

板目・柾目面：放射組織は1～4細胞幅、5～60細胞高、稀に100細胞高以上に達する。異性である。道管要素は単せん孔をもつ。らせん肥厚の有無は確認できない。

髓付近の試料しかとれず、腐朽もひどく、正常な組織構造の観察ができないため、樹種の特定はできなかった。

顯微鏡写真 No.31

30 広葉樹

木口面：道管は散孔状に配列しており、わりに大きな道管が、単独または2～3個が複合して存在する。軸方向柔細胞が接線状、周囲状に配列する。

板目・柾目面：放射組織は1～4細胞幅、5～40細胞高で異性である。道管要素は単せん孔をもつ。らせん肥厚は存在する。

髓付近の試料しかとれず、正常な細胞構造の観察ができないため、樹種の特定はできなかった。

顯微鏡写真 No.32

(岡本育子)

参考文献

- 岡本省吾・北村四郎 (1981)『原色日本樹木図鑑』、保育社
- 大谷 謙・石田茂雄 (1978)『走査型電子顕微鏡による本邦産双子葉木本植物のせん孔板の観察』、北海道大学農学部演習林研究報告、35-1, P 65～98
- 大谷 謙・石田茂雄 (1978)『走査型電子顕微鏡による本邦産双子葉木本植物の道管要素のらせん肥厚の観察』、北海道大学 同上、35-2, P 433～464
- 島地 謙・伊藤隆夫 (1982)『図説木材組織』、地球社
- 島地 謙・伊藤隆夫 (1988)『日本の遺跡出土木製品総覧』、雄山閣
- 宮本忠輔 (1996)『つる性木本植物の二次木部の解剖学的性質』、北海道大学卒業論文
- 勅北海道埋蔵文化財センター (1990)『美沢川流域の遺跡群Ⅳ』北埋調報69
- 勅北海道埋蔵文化財センター (1991)『美沢川流域の遺跡群Ⅴ』北埋調報77
- 勅北海道埋蔵文化財センター (1992)『美沢川流域の遺跡群Ⅵ』北埋調報83
- 勅北海道埋蔵文化財センター (1996)『美沢川流域の遺跡群Ⅹ』北埋調報102
- 勅北海道埋蔵文化財センター (1997)『美沢川流域の遺跡群Ⅺ』北埋調報114
- 勅北海道埋蔵文化財センター (1996)『千歳市オサツ2遺跡(2)』北埋調報103

VII 台地部包含層の遺物

1 概要

(1) I 黒層について

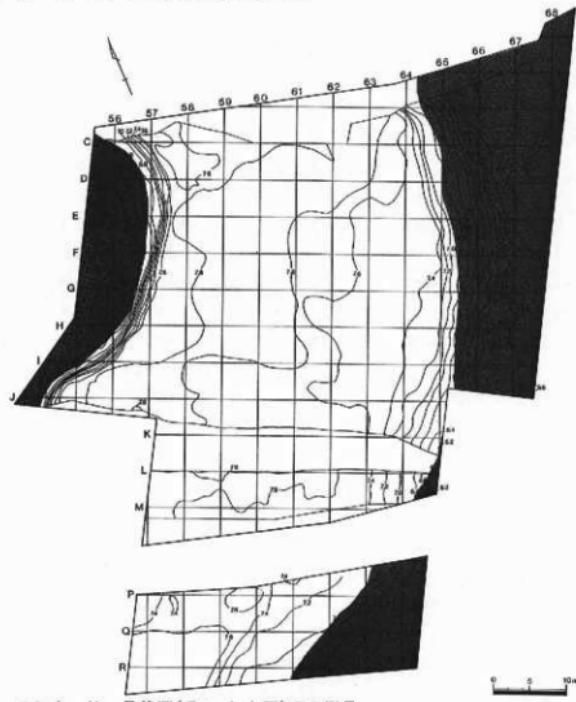
後北B式を主体としたVII群は台地の中央部(D~H・60~64)に特に多く、G 60とG 63に集中する。これはI黒層下部の焼土に起因する。北大I式が中央部南東(H~I・60)に集中し、東側低湿部に向かって多く分布する。I黒層上部の焼土に起因する。

VII b類を主体としたVII群は台地の中央部北西(A~E・57~63)に特に多い。これはI黒層土坑墓があることに起因する。VII c類とVII d類の分布は2個(VII-4-44・46)の復原個体を示している。

石器は石鎚、石鎚未製品が、後北B式を主体としたVII群の分布域に重なり、片岩の剝片も同じ分布をしているので、後北B式期に片岩製石鎚の製作を行なっていた可能性が高い。

(2) II 黒層について

III a類を主体としたIII群は台地の南東(G~J・60~65)に濃く分布する。これはII黒層下部の焼土、土壤(P-32~34)があることに起因する。



2 I 黒層の遺物

IV c 類を主体としたIV群は台地の南西 (G ~ J・57~59) に狭く分布し、IV b 類・IV c 類の分布はほぼ重なる。IV a 類はこれらと異なり、I ラインに沿って台地を横断するように分布している。IV a 類期の住居群と分布が重ならない。これらはII黒層上部の焼土があることに起因する。

V b 類を主体としたV群は台地の北半 (A ~ I・56~64) に薄く広く分布する。V b 類・V c 類は北半の南西部に多く出土する。

石器は石礫、スクレイパー類、石核、石斧が北半にやや多く分布している。石槍・ナイフ、石錐は住居群の周辺に偏っている。
(鈴木)

2 I 黒層の遺物

(1) 土器 (図版-2~14、表版-1~3、図版版-6~10)

VI群土器が1162点、うちVI b 類土器が491点、VI c 類土器が133点出土している。VII群土器が273点、うちVII b 類土器が3点、VII c 類土器が120点、VII d 類土器が75点、VII e 類土器が28点出土している。

I B 層からはVIII群とVI群が出土しており、VIII群の出土は極めて少ない。VI群は焼土付近からの出土が多く、低湿部に近くなつてVII群の後半の出土例が増加する。

VII群 (図版-2~14、表版-1~3、図版版-6・8・9)

後北 A式 1は深鉢の口縁部、外面は横位隆起線文→隆起線間に刺突、内面はヨコナデ。32は双頂の突起を4対もち、4対の突起の下位にV字隆起線文をもつ。口縁部の横位隆起線はナデにより断面が三角形を呈する。33の断面形と異なる。隆起線文間に刺突。後北 A式の新しいもの。33は突起下に二重の菱形隆起線文を配置し、その下端から縁位の隆起線文を垂下させる。

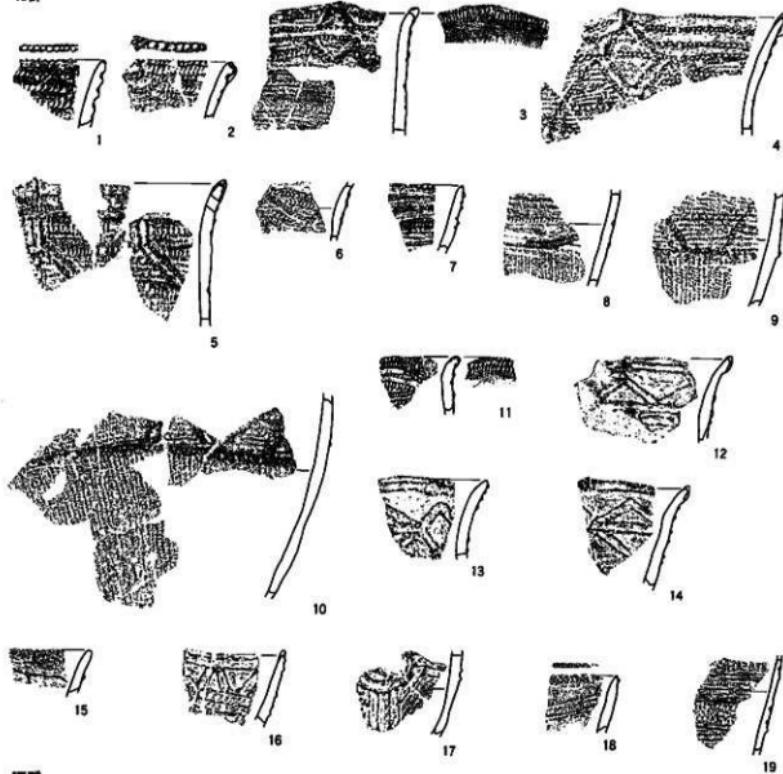
後北 B式 2~7は深鉢の口縁部である。2の外面は横位隆起線文・刺突→弧状の隆起線文・刺突→隆起線間に刺突・頸部文様帯内に刺突、内面はヨコナデ。3の外面は全体に摩滅している。RL 横走→ナデ→横位隆起線文・刺突→波頂部に菱形の隆起線文・刺突→弧状隆起線文・刺突→頸部文様帯内に刺突、内面はヨコナデ、口縁端内側に刻み目。4の外面はRL 横走→ナデ→横位隆起線文・刺突→波頂部に菱形の隆起線文・刺突→鋸齒状隆起線文・刺突→頸部文様帯内に刺突、内面はヨコナデ。5の外面はRL 横走→ナデ→横位隆起線文・刺突→菱形？で2本単位の隆起線文・刺突→頸部文様帯内に刺突→菱形内に縦位の押引文、内面はヨコナデ、補修孔あり。6の外面はRL 横走→ナデ→横位隆起線文・刺突→弧状の隆起線文・刺突→頸部文様帯内に刺突→弧状の内に円形隆起線文、内面はヨコナデ。7の外面はRL 横走→ナデ→横位隆起線文・痕跡的に残る刺突→隆起線間に刺突、内面はヨコナデ。8~10は深鉢の頸部下半～胴部上半である。8の外面は、胴部上半にRL 縦走、頸部下半にRL 横走→ナデ→弧状の隆起線文・刺突→頸部文様帯内に刺突、内面はヨコナデ。9と10は同一個体、胴部上半にRL 縦走、頸部下半にRL 横走→ナデ→鋸齒状隆起線文・刺突→頸部文様帯内に刺突、内面はヨコナデ、炭化物が付着する。11は壺の口縁部、外面は横位隆起線文→頸部文様帯内に刺突、内面はヨコナデ、口縁端内側に上下2段の刻み目。

34は一重の小さな円形隆起線文とV字隆起線文をもつ。35は耳付き壺、体部上半に二重の円形隆起線文を6対ついていると思われる。体部下半の文様は体部上半の残存部と反対側にあったので180度回転して掲載した。36は隆起線文で菱形・逆台形を形づくる。37は隆起線文がつく底部。

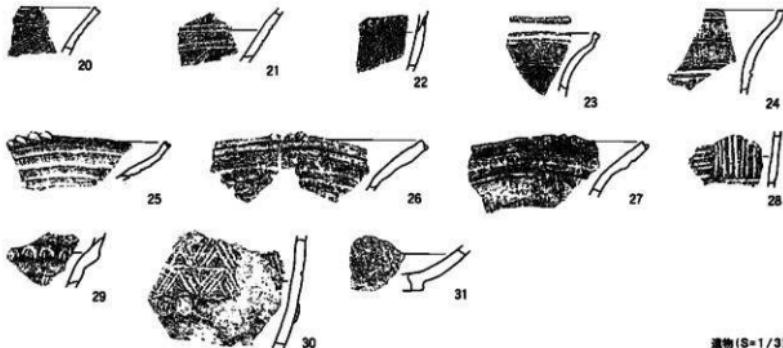
後北 C₁式 12~17は深鉢の口縁部と頸部下半～胴部上半である。12と13と14は同一個体、外面は全体に摩滅している。対向する2対の口縁部突起下に2本単位の縦長菱形隆起線文→横位2本単位隆起線→この上下に3個の鋸齒状隆起線文、内面は？→ヨコナデ。15の外面はRL 横走→ナデ→横位隆起線文→縦位隆起線文、内面はヨコナデ？。16と17は同一個体。外面はRL 斜行→ナデ→横位隆起線文→鋸齒状隆起線文→円形隆起線文→縦位隆起線文、内面はヨコナデ。

Ⅶ 台地部包含層の遺物

VI群



VII群



遺物 (S=1/3)

図版-2 I 黒層の土器(1)

VI b 類 38~40は深鉢底部で、39・40は上げ底が発達しておらず、38に比べて新しい時期の可能性がある。

後北 C₂・D 式 18は深鉢の口縁部、口縁端に横位隆起線文・刺突→RL 帯状横走、内面はヨコナデ。19は深鉢の胴部、隆起線文→刺突・RL 帯状横走、内面はナデ。

北大 I 式 41は胴部上半は直線的で頸部に若干のくびがあり、口縁部断面形が方形で、口縁端面は水平。口縁部に浅めの円形刺突文をもつが微隆起線文はない。北大 I 式の古い時期である。

VII群 (図版-2・4、表版-1・2、図版図-7・10)

VII a 類 20と21は十勝豪寄式甕の口縁部と頸部で、同一個体。胎土はよい。20は口縁端面は両面側からの強いナデのためにへこんでいる。外面は端面処理→ヨコナデ→半截竹管状工具による2本単位の沈線、内面はヨコミガキ、炭化物が付着する。21は半截竹管状工具による2本単位の沈線。22は十勝最寄式甕の胴部上半である。胎土はよい。頸部と胴部の境の外面には半截竹管状工具による刺突→タテミガキ、内面は摩滅のため不明。

VII b 類 23と24は球胴甕の口縁部で、X-1の球胴甕～底部(図V-9-9)と同一個体の可能性がある。口縁端面がへこむくらいを強くナデされる。外面はタテハケ→ヨコナデ→沈線→ヨコナデ、内面はヨコハケ→ヨコナデ→ヨコミガキ。25は甕の口縁部、口縁端面がへこむくらいを強くナデされる。外面はヨコナデ→段状沈線→口縁端に4列の刻目、内面はヨコハケ→ヨコナデ。26と27は甕の口縁部で、同一個体。接合痕がよく残る。口縁端面がへこむくらいを強くナデされる。外面はタテハケ→ヨコナデ→凹線→口縁端に4列の刻目、内面はヨコハケ、炭化物が付着する。42は頸部と胴部の境に段状沈線による段を持つ。すべて耕作土から出土したがP-2と同じグリットから出土しており、P-2の上半部は耕作により削平されていることよりP-2の壠口に置かれた可能性が高い。43は内面ヨコハケ→ナメハケ、外側ヨコナデ→タテハケ。外底面は砂圧痕→ナデ。底部側面が張り出す。

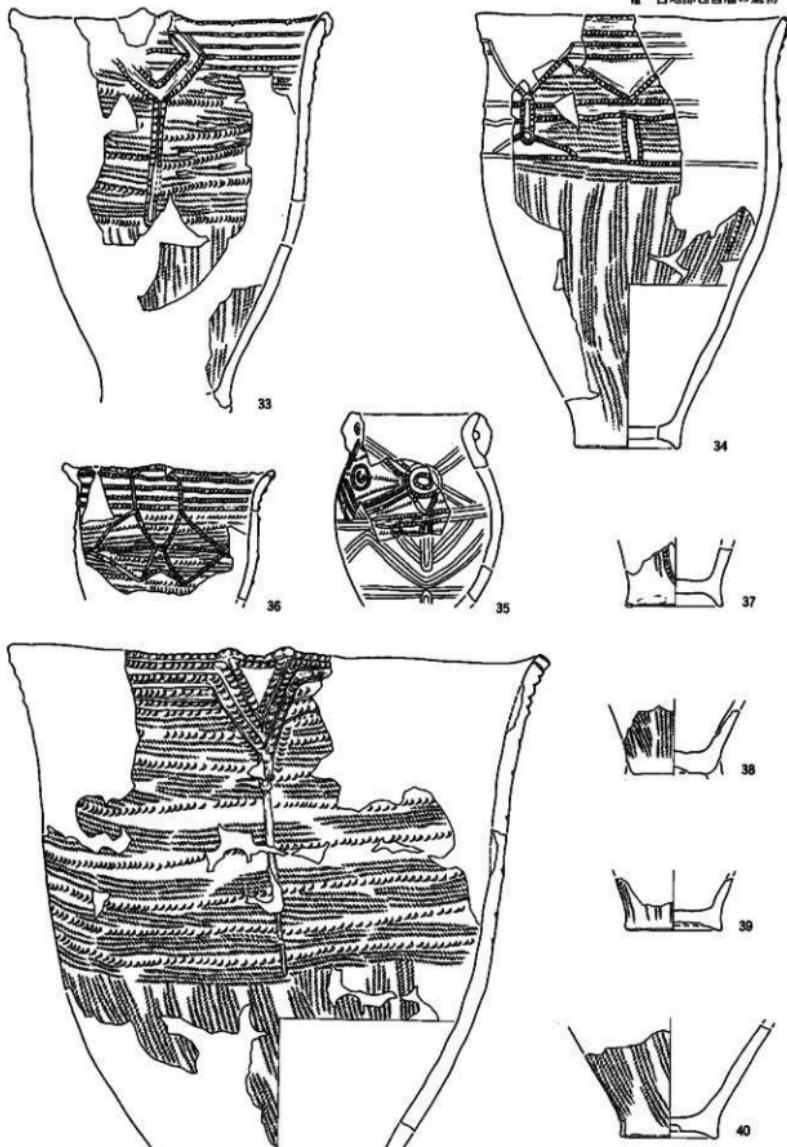
VII c 類 31は鉢の底部、外面はタテハケ、内面はヨコハケ。44は口縁部が受け口氣味に立ち上がる。頸部から口縁部に統けて外反する器形で、頸部は不明瞭、横位沈線文の下地によって頸部の範囲が区分できる。

VII d 類 28は甕の頸部、外面は下地沈線はない。縦位沈線→横位沈線、内面は内黒、ヨコミガキ、炭化物が付着する。29と30は甕口縁部～頸部でH-2(図V-4-1)と同一個体。29の外面はヨコナデ→馬蹄形圧痕文。内面は内黒、ヨコミガキ。30の外面は貼付帶→馬蹄形圧痕文→横位沈線→下段鋸齒状文→上段鋸齒状文。内面は内黒、タテミガキ。ともに炭化物が付着する。45は高杯の脚部。内面はミガキ、外面はタテハケ→ヨコナデ→二段の刺突、外底面はケズリ→ナデで上げ底になっていない。46は頸部は直線的で、口縁部は少し受け口状になる。下地に横位綾杉文を施し、それと反対方向の横位綾杉を所々施す。貼付帶に馬蹄形圧痕文をもつ。

(2) 復原個体の接合関係について(図版-5・6)

後北 A 式の深鉢(図-3-32)は、F-17があるグリットに接合関係を持ち後北 A 式深鉢(図-3-33)の接合関係とほぼ重複する。

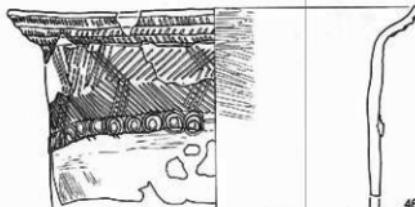
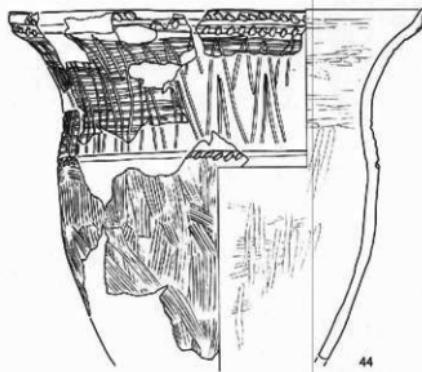
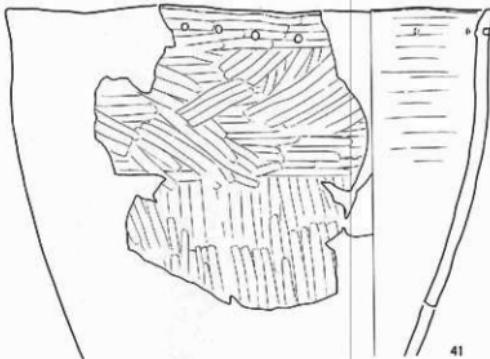
後北 B 式の深鉢(図-3-34)は、後北 B 式の甕(図-3-35)やF-29の後北 B 式深鉢(V-25-10)の深鉢の接合関係と重複する。
(鈴木)



図版-3 I 黒層の土器(2)

遺物 (S=1/3)

2 I 黒層の遺物

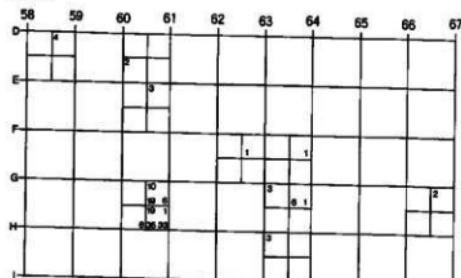


遺物(S=1/3)

図4-4 I 黒層の土器(3)

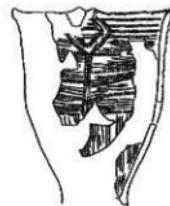
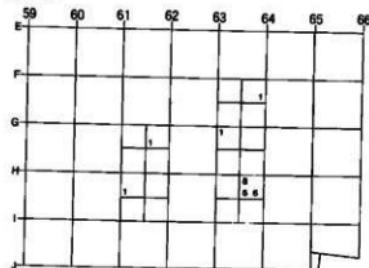
図 台地部包含層の遺物

W-3-32



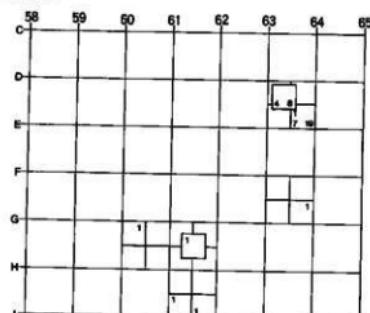
	口縁部	頸 部	肩 部	不 明	合 計
復元	5	63	42	0	110
復元残	43	49	6	1	99
合計	48	112	48	1	209

W-3-33



	口縁部	頸 部	肩 部	底 部	合 計
復元	7	5	7	0	19
復元残	2	2	2	0	6
合計	9	7	9	0	25

W-3-34



	口縁部	頸 部	肩 部	底 部	合 計
復元	1	5	21	3	30
復元残	2	7	6	0	15
合計	3	12	27	3	45

部位不明細片数：3

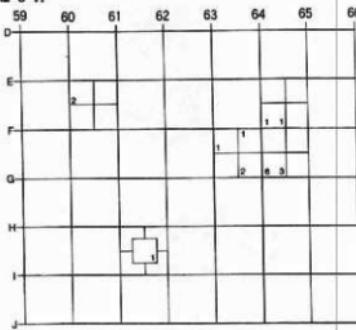
口縁部	不明
頸部	肩部

口縁部	底部
頸部	肩部

図Ⅶ-5 I 黒層の土器接合図(1)

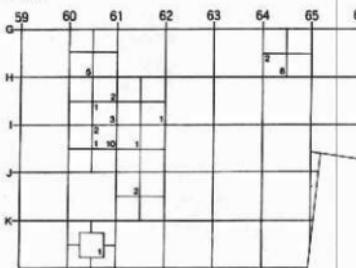
2 I 黒層の遺物

W-3-15



	口縁部	頭 部	胴 部	底 部	合 計
復元	1	6	4	0	11
復元残	0	6	1	0	7
合計	1	12	5	0	18

W-4-41



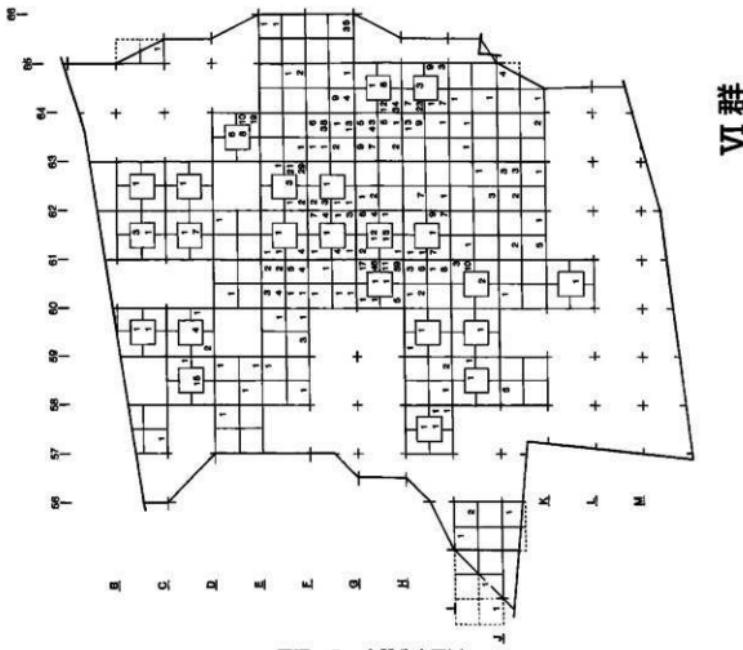


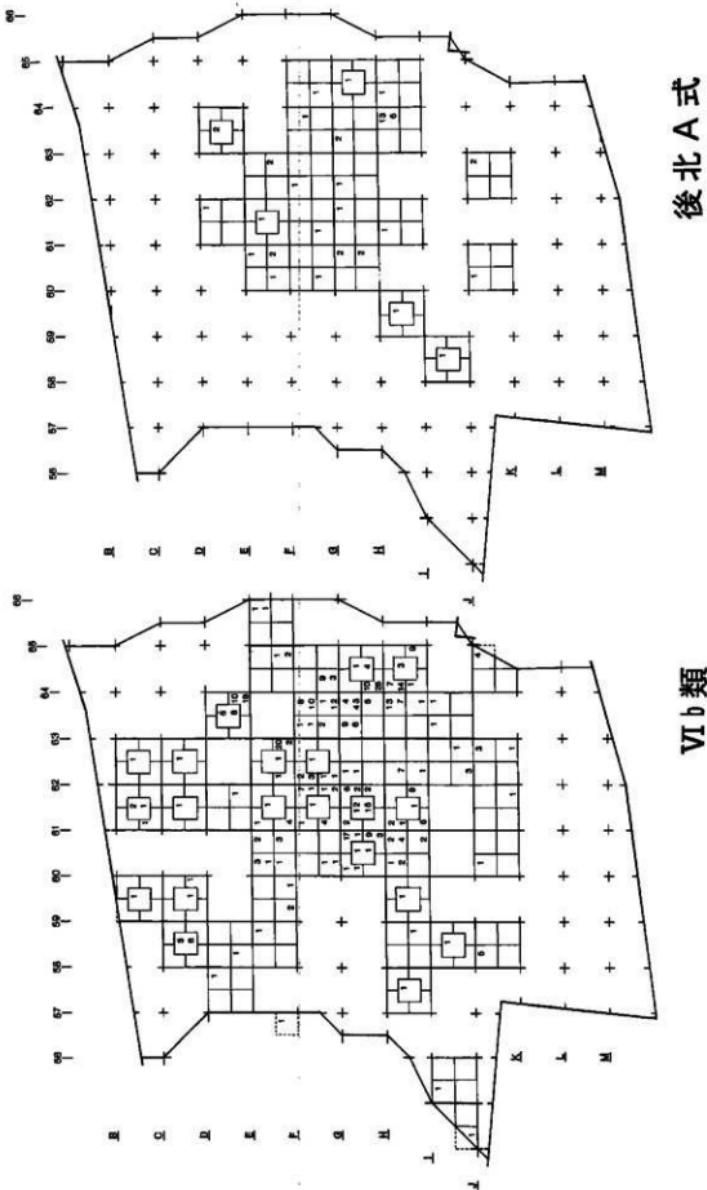
図7 土器分布図(1)

表7-1 I 黒層掲載土器一覧

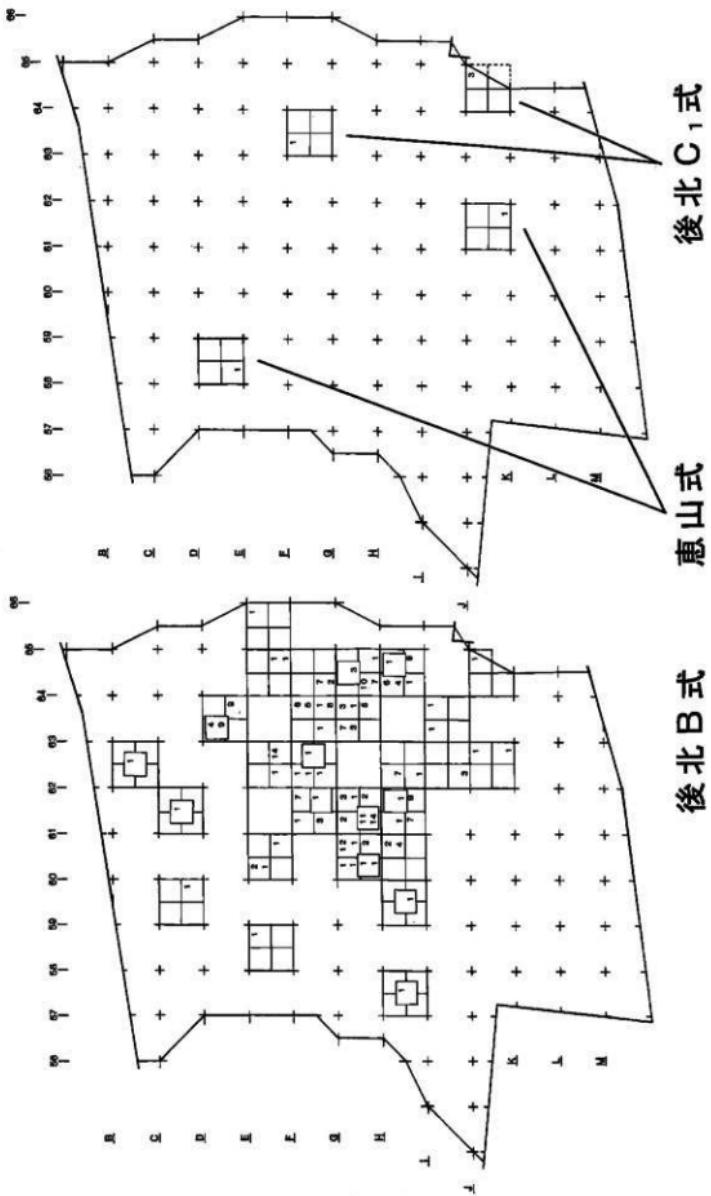
図番号	発掘区	層位	分類
VI-2-1	E62c	I B	Vlb 後北A式
2	H64a	I B	Vlb 後北B式
3	G60a	I B	Vlb 後北B式
4	F63c	I B	Vlb 後北B式
5	F61a	I B	Vlb 後北B式
6	G61c	I B	Vlb 後北B式
7	E62c	I B	Vlb 後北B式
8	H61b	I B	Vlb 後北B式
9	G61d	I B	Vlb 後北B式
10	G61a	I B	Vlb 後北B式
11	G60d	I B	Vlb 後北B式
12	J64b	I B	Vlb 後北C,式
13	J64a	I B	Vlb 後北C,式
14	J64a	I B	Vlb 後北C,式
15	F60d	I B	Vlb 後北C,式
16	F63a	I B	Vlb 後北C,式
17	F53c	I B	Vlb 後北C,式
18	H57c	I B	Vlc 後北C,·D式
19	H59a	擾乱	Vlc 後北C,·D式
20	E64a	I B	Vla 十勝茂寄式
21	E64b	I B	Vla 十勝茂寄式
22	F62a	I B	Vla 十勝茂寄式
23	G58a	I B	Vlb

図番号	発掘区	層位	分類
VI-2-24	G59a	I B	Vlb
	25	E59	I B
	26	F56a	I B
	27	D60b	I B
	28	B58b	I B
	29	E57d	I B
	30	F59d	I B
	31	F59c	I B
VI-3-32	G60c他	I B	Vlb 後北A式
	33	H63d他	I B
	34	D63c他	I B
	35	G64b他	I B
	36	G60d他	I B
	37	E64c	I B
	38	H60c他	I B
	39	G64b他	I B
	40	C58他	I B
VI-4-41	G64b他	I B	Vlc 北大I式
	42	A60	I B
	43	F59b	I B
	44	F57a他	I B-2
	45	H65a	I B
	46	H65a	I B

2 I 黒層の遺物



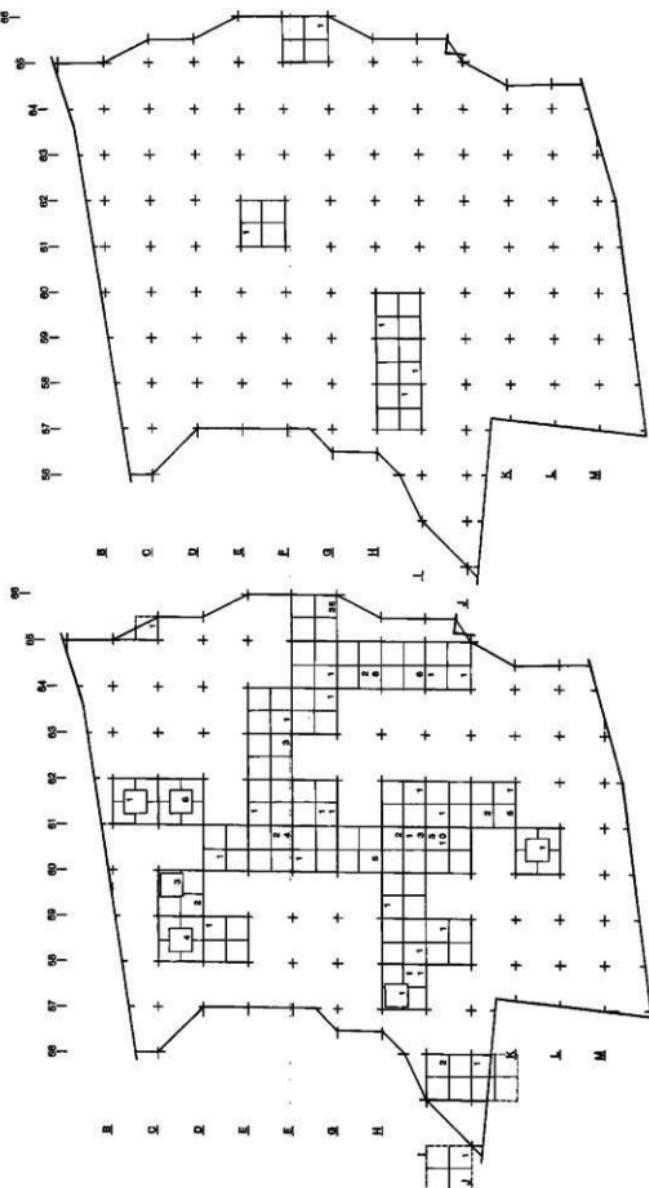
図版-8 土器分布図(2)



図VII-9 土器分布図(3)

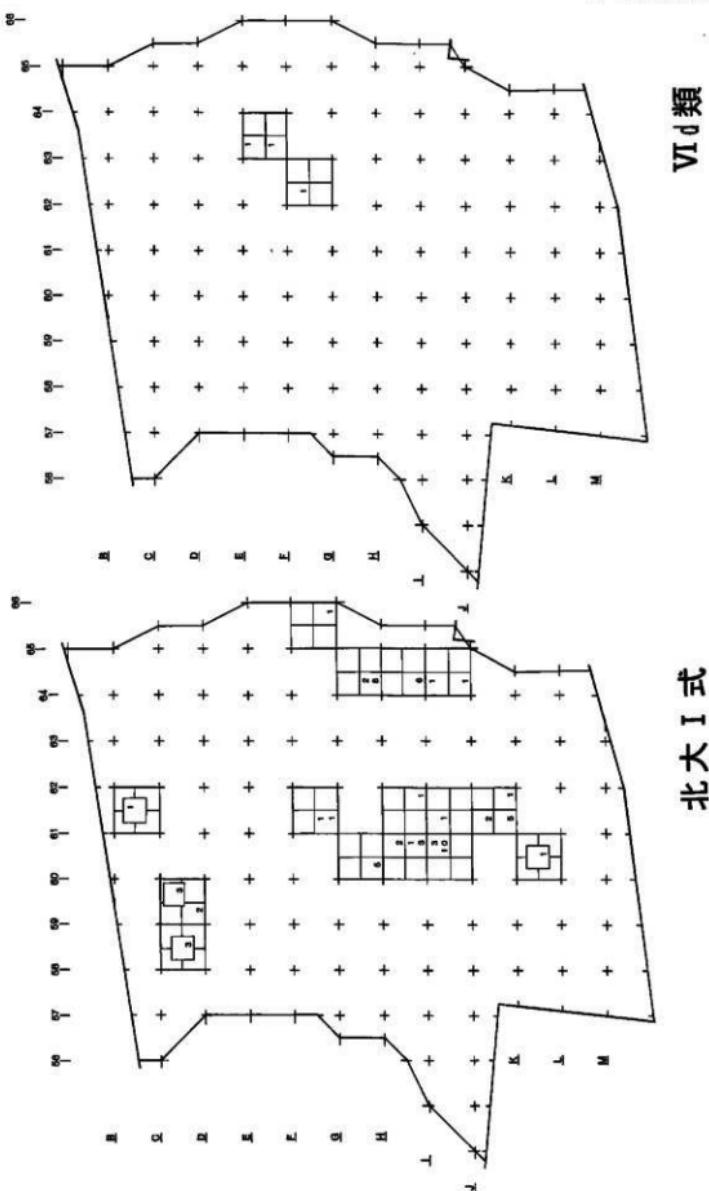
後北C₂・D式

VIc類

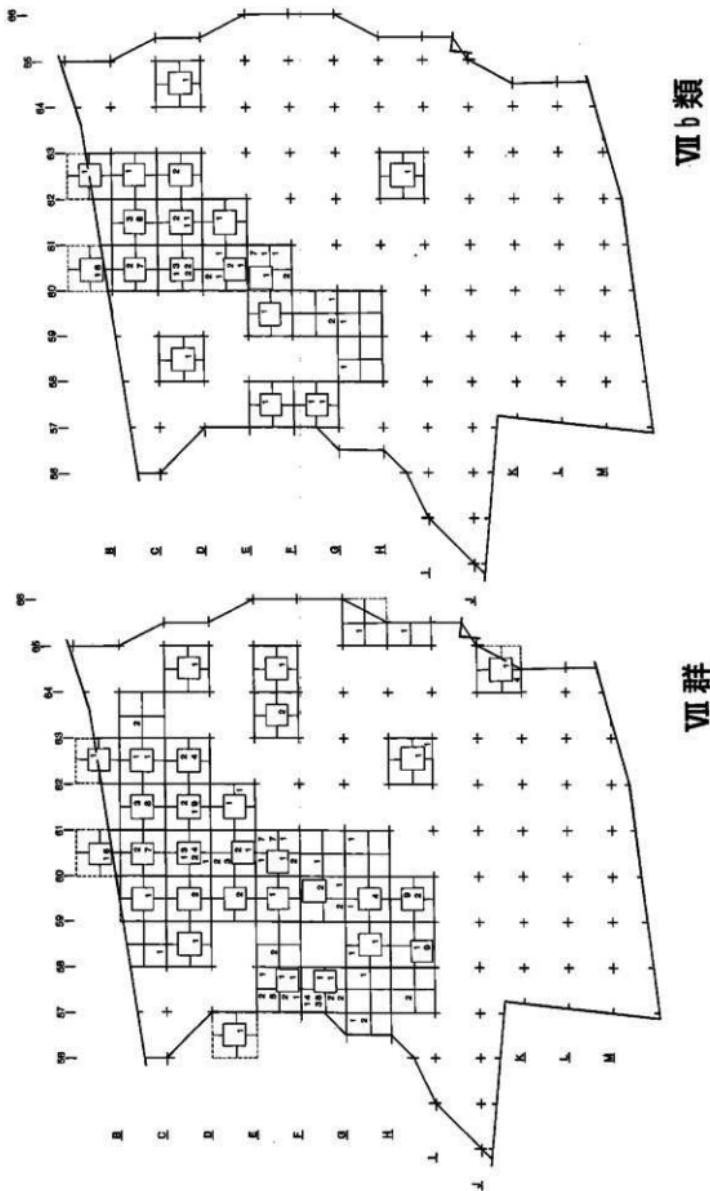


図四-10 土器分布図(4)

図 台地部包含層の遺物



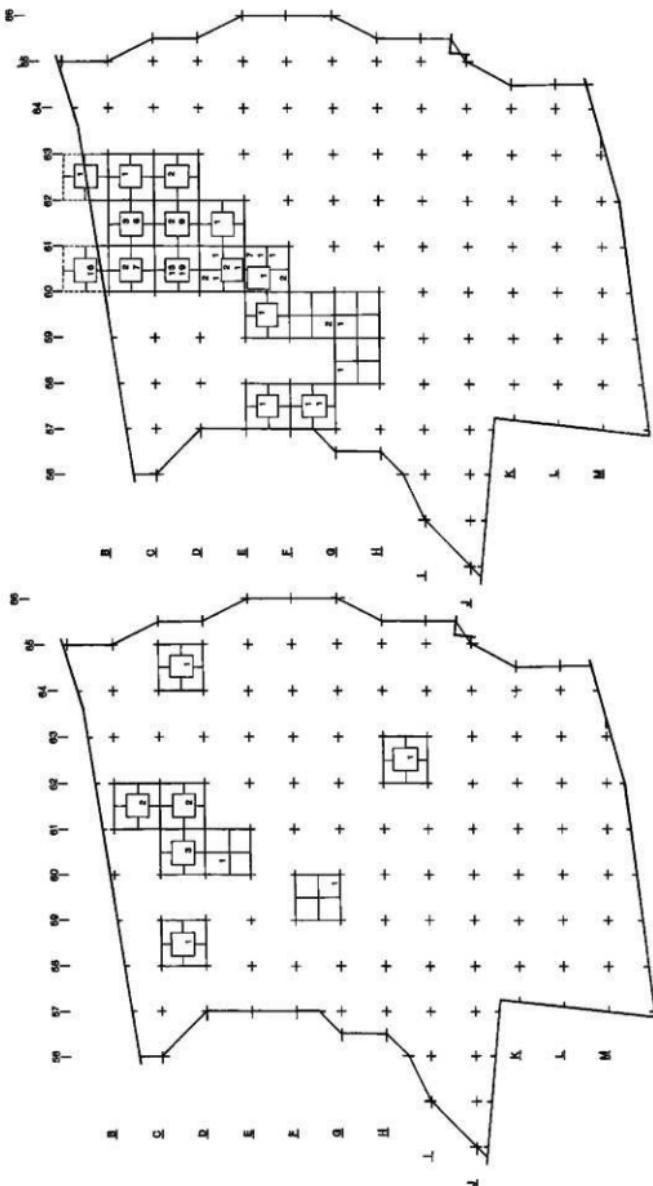
図Ⅷ-11 土器分布図(5)



図版-12 土器分布図(6)

VII b 類型

VII b 類型



図VII-13 土器分布図(7)

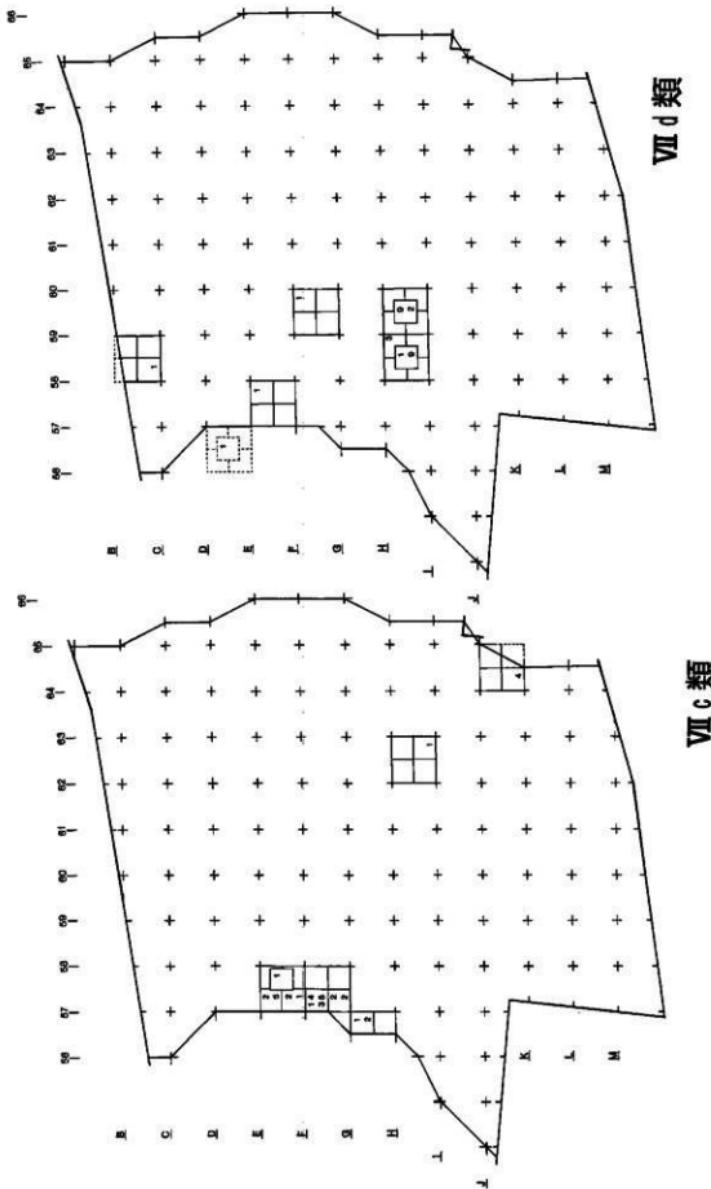


図14-14 土器分布図(8)

表図-2 土器観察表(1)

図-3-32

口部部	口部部	腹部	脚部	備考
外 実記貼付	粘土紺巻上げ			- Hue7.5YR7/6 (橙色) - 灰化物付着
内 面	ヨコナデ			
	RL横走帶繩文			
	長いヨコナデ			
外 内 面	一帯上の横位置記録 一帯上のV字状縦起継 二番目の横位置記録 二番目のV字状縦起継 三番目の横位置記録 三番目のV字状縦起継	四・五番目の横位置記録 V字状縦起継に斜突 横位置記録間に斜突	RL横走帶繩文間に斜突 V字状縦起継下位に押引き	
内 面	粘土紺巻上げ	?		
内 面	ヨコケズリ			- 後北A式
内 面	ヨコナデ			- 2/5既存

図-3-33

口部部	口部部	腹部	脚部	底部侧面	備考
外 実記貼付	粘土紺巻上げ	?			- Hue107.5YR6/6 (黄褐色)
外 内 面	RL後走帶繩文	長いヨコナデ			
内 面	?				
外 内 面	横位置記録・斜突(上約3本) 菱形上半部縦起継	横位置記録・斜突(上約3本) 菱形下半部縦起継・斜突	横位置記録下位に横位置記録・斜突 斜 突 押引き		
内 面	粘土紺巻上げ	?			
内 面	ヨコケズリ				- 後北A式
内 面	ヨコナデ				- 1/3既存

図-3-34

口部部	口部部	腹部	脚部	底部侧面	備考
外 内 面	粘土紺巻上げ ?	ヨコナデ	RL横走帶繩文		- Hue107.5YR7/8 (黄褐色) - 灰化物付着
外 内 面	横位置記録・斜突(本体) V字縦起継・斜突	円形縦起継・斜突 V字縦起継下位に横位置記録・斜突 横位置記録・斜突(本体) V字縦起継・斜突	RL横走帶繩文 V字縦起継下位に横位置記録・斜突 円形縦起継から伸びる縦起継		
内 面	粘土紺巻上げ	ヨコナデ			- 後北B式 - 上半1/2既存

図-3-35

口部部	口部部	腹部	脚部	備考
外 内 面	粘土紺巻上げ ?	ヨコナデ	RL横走帶繩文	- Hue107YR8/4 (黄褐色)
外 内 面	横位置記録・斜突 内形縦起継・斜突 内形縦起継から伸びる縦起継	内形縦起継・斜突 横位置記録・斜突(2) 内形縦起継下位のV字縦起継 V字縦起継下位の横位置記録	RL横走帶繩文 V字縦起継下位の横位置記録	
内 面	粘土紺巻上げ	ヨコナデ		- 後北B式 - 1/6既存

表VII-3 十器鑽空表(2)

頁=3=36

W-4-41

	口部	口部	面部	脚部	寄生
外 面	粘土巻き上げ				Hue7.5TYR/4 (褐色)
	?				石灰、長石、 チタニア、鐵石 が多い
	タテハケ				黄鉄鉱付着
内 面	タテナデ				
	ヨコナデ	ヨコナデ	ナメナデ		
内 面	ヨコナデ				
	円形網室				
粘土巻き上げ					
?					
タテハケ					
ヨコナデ					
?					
タテハケ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテハケ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテハケ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					
ヨコナデ					
?					
タテナデ					

W-4-47

部位	誤部	正常側面	備考
外 面	粘土結晶上げ		・10VRA/4 (褐色)
	?		
	タテハケ ヨコハケ	タテハケ	
内 面	块状状態		
	ヨコナデ		
	粘土結晶上げ ? ヨコハケ ヨコミガキ		・VB b ・表面以下性質

W-4-44

外 面	口唇部	口腔部	咽部	胸腔	腹腔
		粘土块上升 ?			Heu10Y/RB/ (浅黄色)
		ヨコハケ タテハケ			
		ヨコナデ		ナナメハケ	
	凹 鍋				
		横位縦歯 大きな縦歯 下側縦歯 上側縦歯			
	刺 実		刺 実		
内 面		粘土块上升 ?			
		ヨコハケ ヨコナデ			・Vc ・全体に薄延 ・1/3弱
	ヨコミガキ		タテミガキ		

W-4-46

口部		口端部	頭部	頭部	側面
		粘土帶巻上げ			・Huey(0.8/3 (こぶし)黄褐色) ・炭化植物層
		?			
			タテハケ		
		ヨコナデ			
外 面	斜 面	左向き縦筋 (下部→上部)			
		右向き縦筋 (上部→下部)			
		ヨコナデ			
		粘土帶巻位置度の為の沈降			
		粘土帶			
		馬蹄形底座文			
内 面	斜 面	粘土巻上げ			
		ヨコナデ			・18.4
		ヨコミガキ			・上部(1.3)有
		ヨコミガキ			

(3) 石器等 (図版-15~18、表題-4、図版題-10)

石鎚・石鎌未製品 石鎚41点、石鎌未製品8点が出土している。形態の確認できたものは三角形のもの3点、凹基11点、平基5点、有茎鎌4点である。そのうち、凹基2点、平基3点、有茎鎌1点の6点を図示した。分布はF 63区から6点、F 61区から5点、G 63、H 61、J 63区から4点が出土した。特徴が見られたのは、片岩の石鎚で、後北A・B式土器のVI群B類土器の分布域とほぼ一致している。形態は三角形の凹基、平基のものである。石質は3~5は片岩。その他は黒曜石である。1は凹基のうち最大長のもの。I B出土の三角形の石鎚(凹基と平基を含む)は長さは1.3cm~2.7cm、幅は1.2cm~1.6cmに収まる。

石槍・ナイフ 6点出土している。図示していない。分布図のみ掲載した。

石錐 4点が出土している。このうち2点を図示した。石質はともに黒曜石。7~8はともに刺突部を作り出したもの。

つまみ付きナイフ 出土している1点を図示した。石質は黒曜石。9は表面が片面加工、裏面が周縁加工されているもの。先端を欠く。

スクレイパー 3点が出土している。石質は黒曜石。図示していない。分布図のみ掲載した。

横形石器 1点が出土している。石質は黒曜石である。図示していない。分布図のみ掲載した。

石槍 6点が出土している。6点が黒曜石で、2点が矯面岩である。図示していない。分布図のみ掲載した。

石斧・石斧片・石斧未製品 石斧4点、石斧片1点、石斧未製品1点が出土している。図示していない。分布図のみ掲載した。造構と包含層の間ではE 59c I B出土とH-9出土の片岩の石斧が接合した。包含層間ではH 58d I B出土とH 57c II B上出土の泥岩の石斧が接合した。

たたき石 1点が出土している。石質は閃綠岩。図示していない。分布図のみ掲載した。

すり石 1点が出土している。石質は砂岩。図示していない。分布図のみ掲載した。

台石・石皿 台石が1点出土している。石質は泥岩。図示していない。分布図のみ掲載した。

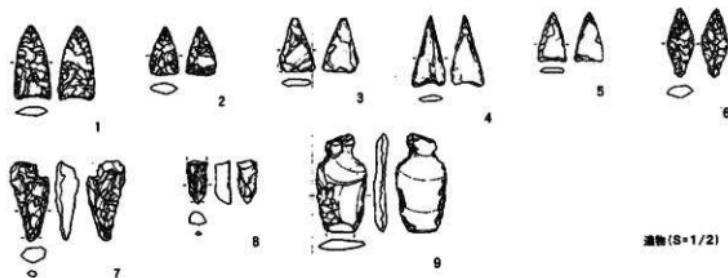
砥石 1点が出土している。J 63aから出土した3点が接合し、1個体になったものである。図示していない。分布図のみ掲載した。

(倉橋)

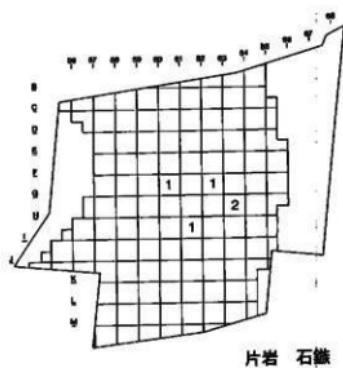
表題-4 I 黒層掲載石器一覧

掲載番号	調査区	遺物番号	分類	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	材質	備考
題-15-1	Q 61 c	3	石鎌	I B	27.9	13.6	3.8	1.4	黒曜石	
題-15-2	F 63	11	石鎌	I B	18.4	10.4	3.9	0.8	黒曜石	
題-15-3	G 63 a	42	石鎌	I B	20.4	14.5	2.5	0.8	片岩	
題-15-4	H 61 d	8	石鎌	I B	25.5	12.4	2.0	0.7	片岩	
題-15-5	F 60 d	16	石鎌	I B	18.2	10.2	1.5	0.5	片岩	
題-15-6	F 59	10	石鎌	I B	26.9	9.6	4.2	1.1	黒曜石	
題-15-7	E 61 a	14	石鎌	I B	32.0	14.2	8.6	3.3	黒曜石	
題-15-8	E 59 d	25	石鎌	I B	16.8	7.6	5.3	0.9	黒曜石	
題-15-9	E 59 c	20	つまみ付きナイフ	I B	(40.0)	20.8	4.0	3.1	黒曜石	赤井川(内腹)

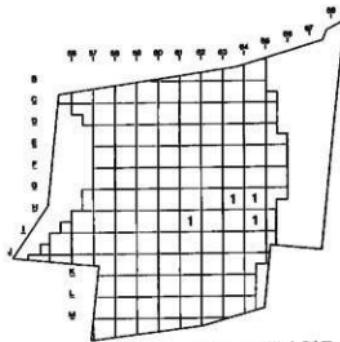
2 I 黒暦の遺物



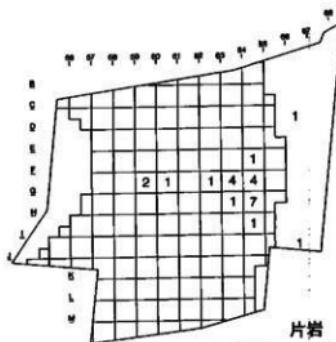
植物 (S=1/2)



片岩 石鐵



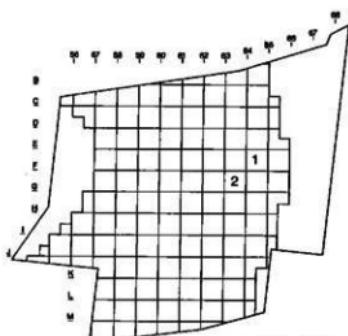
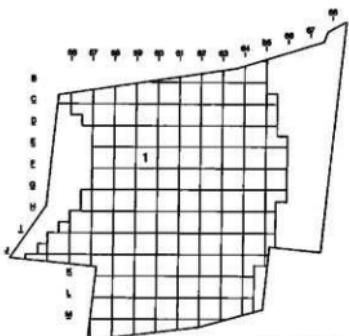
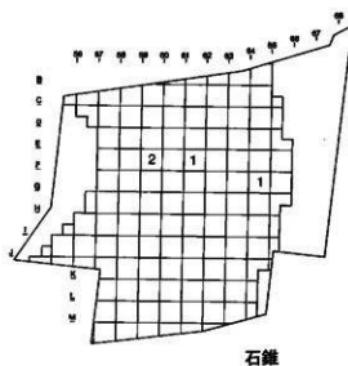
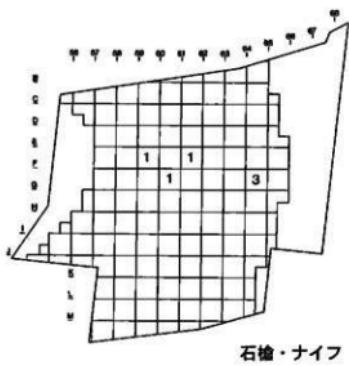
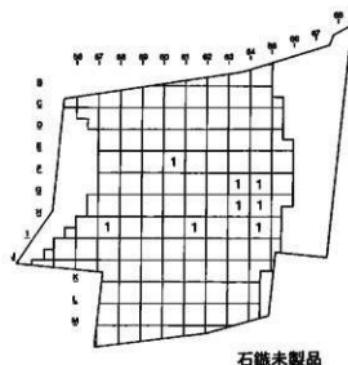
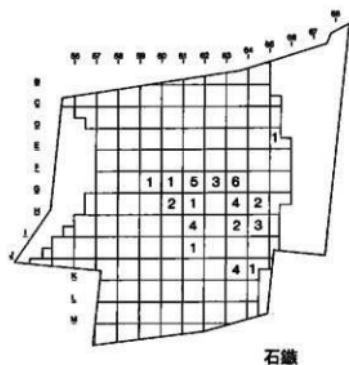
片岩 石鎚未製品



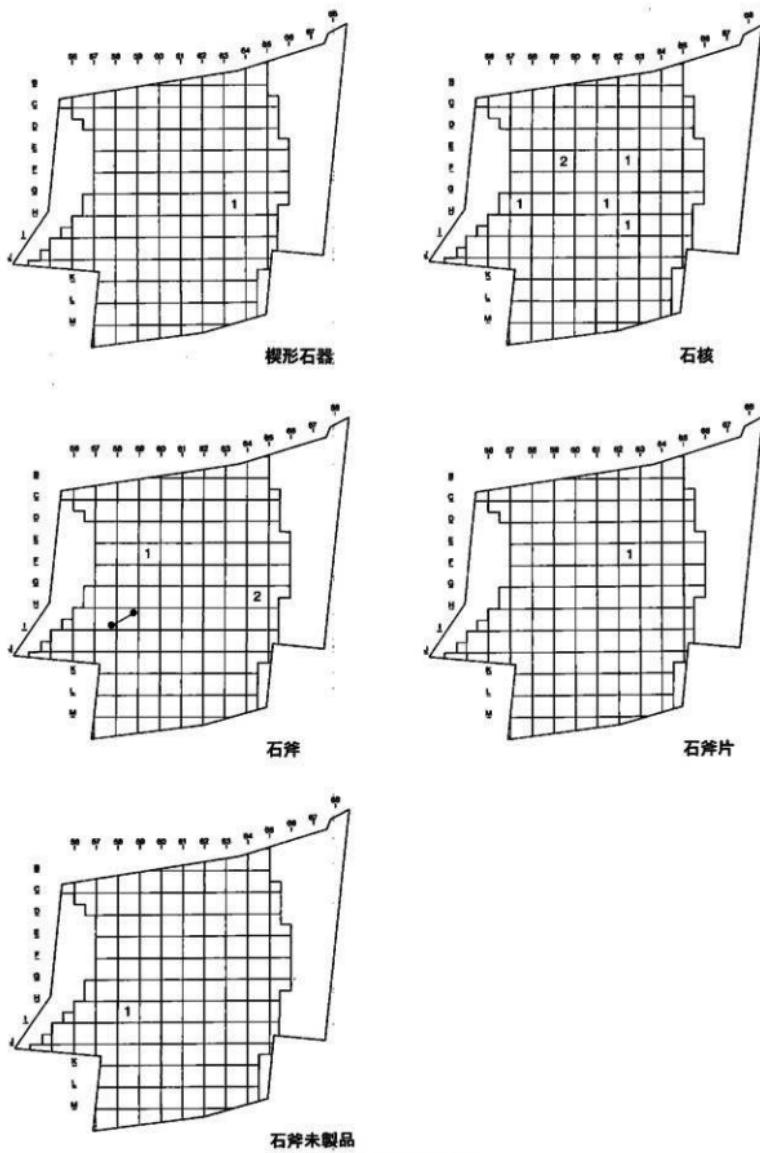
片岩 フレイク

図版-15 I 黒層の石器、分布図(1)

図一 台地部包含層の遺物



図版16 石器分布図(2)



図版-17 石器分布図(3)

図7-18 台地部包含層の遺物

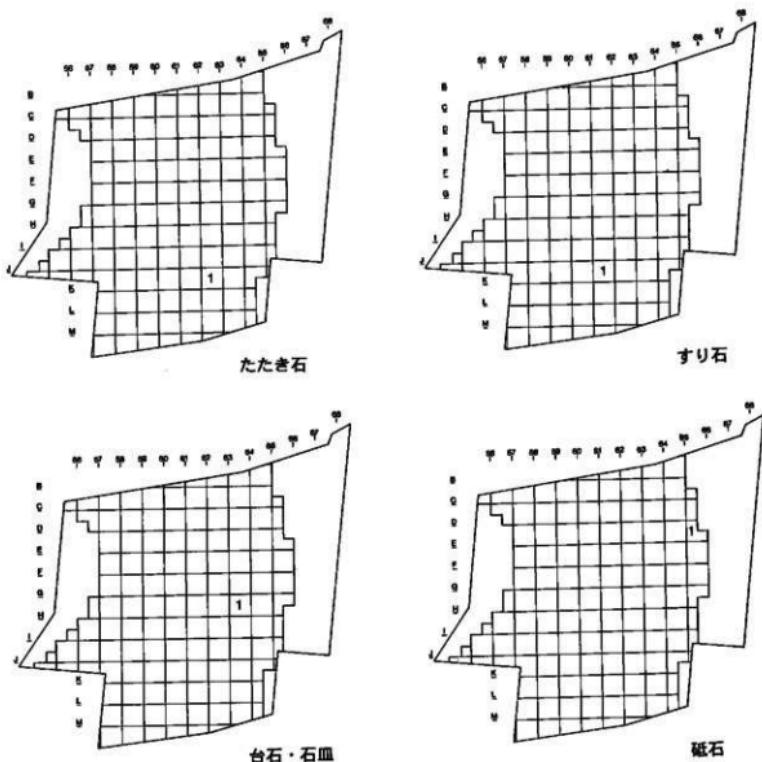


図7-18 石器分布圖(4)

表7-5 I 黒磨等の金属製品等一覧

回数	回版地	名 称	量・グラム 層	大 き さ mm・g	備 考
M19.1	W-11	一文字湯口内耳鉄錐	西側搅乱	1920.5 22.2 18.5 全重量 (1120.0)	搅乱一括32片
M19.2	W-11	鉄 錐	C 65 d	1 B 1 23.5 8.5 (1.5) 重量 (406.4)	
M19.3	W-11	小太刀	西側搅乱	1920.5? 長 (40.3) 幅 3.0 厚 0.8 重量 (410.8)	重量は鋸込み
M19.4	W-11	鍔	西側搅乱	1920.5? 長 6.75 幅 6.4 厚 0.45	3に付属
M19.5	W-11	足金物	西側搅乱	1920.5? 長 5.05 幅 1.7 重量 24.3	3の箱金具、先頭
M19.6	W-11	足金物	西側搅乱	1920.5? 長 5.45 幅 2.1 重量 28.1	ノ、口側
M19.7	W-11	刀装具片	西側搅乱	1920.5? 長 7.9 幅 3.3 厚 3.7	3の箱か柄の金具
M19.8	W-11	素 材	B 65 b	1 B 2 23.0 幅 1.0 厚 0.9 重量 24.3	
M19.9	W-11	釘	F 61 b	1919.5? 長 10.4 幅 0.4 厚 0.3 重量 7.7	
M19.10	W-11	棒状鉄製品	F 60 a	1919.5? 長 (3.6) 幅 0.6 厚 0.4 重量 (1.1)	
M19.11	W-11	棒状鉄製品	G 63 c	1919.5? 長 (6.0) 幅 0.5 厚 0.5 重量 (2.8)	
M19.12	W-11	細板状鉄製品	H 58	1919.5? 長 5.5 幅 0.35 厚 0.3 重量 7.0	
-	-	鉄 淚	I 63 a	1 B 上 長 4.5 幅 3.3 厚 3.0 重量 21.4	1点单独出土

(4) 金属製品(図版-19、表Ⅳ-5、図版Ⅳ-11)

表Ⅳ-5にあるように、I 黒層から出土したものと、畠の耕作土攪乱中から発見され本来の位置が不明のものがある。2・8は、東側低湿部の上端部から出土しているが、便宜上台地部で取り扱った。9~12と鉄滓は台地の中央やや南寄りからの出土で、その周辺のアイヌ文化期・擦文文化期の遺構と関連するものであろう。1の鍋は、I ラインより北、58ラインより西の耕作土中から出土した32点の破片を一括として扱った。3~7の大刀一式は、刀装具が装着されたまま出土したもので、耕作土中からではあるが、東側のX-1~3や擦文文化期の墓塚との関係が強い遺物と考えられる。この畠が西側低湿部を埋めて作られていることは、土が付近から運ばれてきた可能性が高い。図I-10と表I-1に示した周辺の遺跡のうち、北海道式古墳と考えられている3(ユカンボシC1遺跡)あたりからこの土とともに運ばれてきた遺物である可能性を示唆しておきたい。

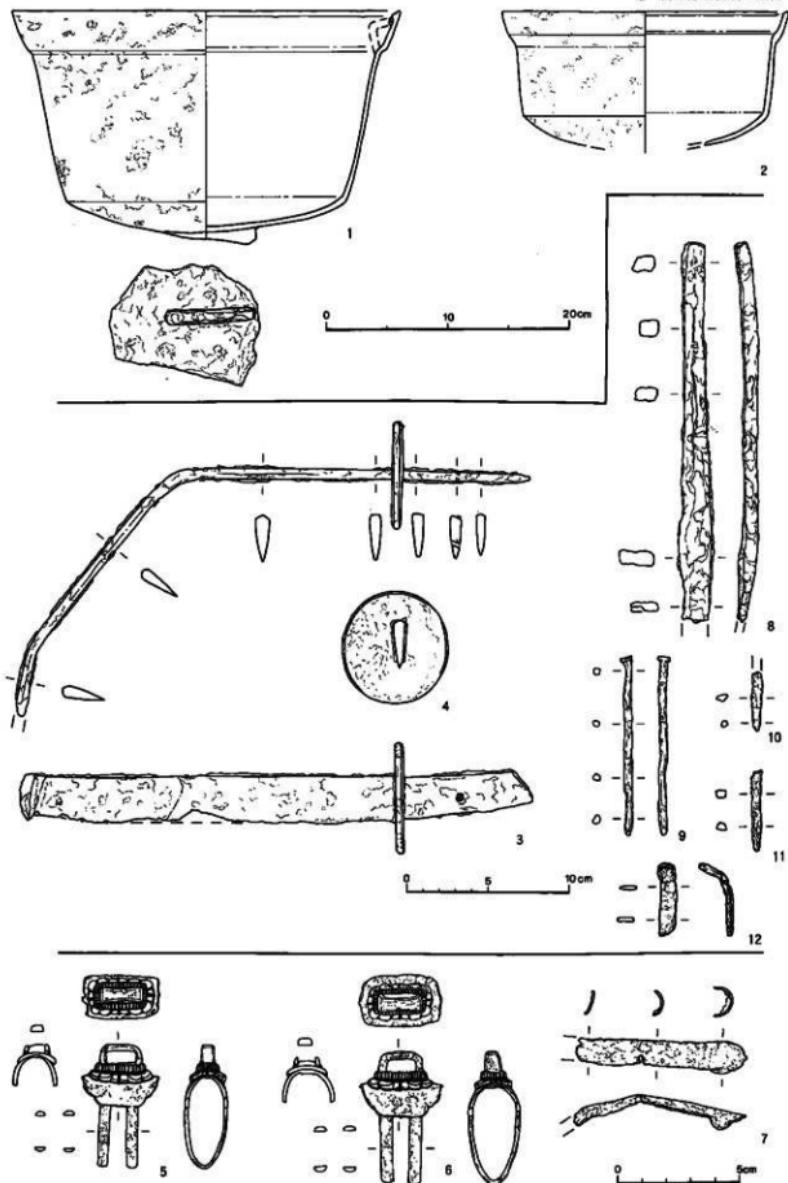
1・2は鉄鍋である。1は32点の破片を図上復元した、一文字湯口の内耳鉄鍋。接合はごく一部でしかできないが、口縁部から内耳部、胴部、底部、湯口とすべてそろっており、口径約32cm、高さ約19cmと推定できた。2は口縁部から胴部の約二分の一が残存している小型の鍋。出土時点では二分の一の形を保っていたが、さびのため半分から折れ接合部は崩落してしまった。底部中央を欠損しているため、湯口の形態や脚の有無は不明である。耳部も不明であるが、口縁部から頸部の形状から見て、内耳か無耳であったと考えられる。

3は直刀。折れ曲がっているのは、攪乱のためと思われる。切先部と本来の茎部を欠損する。棟は山形で、刀身は厚みがあり、ふくらんでいる。茎は刀身を利用し、目釘孔が一つ穿孔されている。茎尻は折れた後の処理をしている。棟区があるように見受けられるのは、4の鐸を茎尻側から叩き込んだためと考えられる。4の鐸は、厚みが均一な銅の板で、平面形はやや下ぶくれの円形、縁部は滑らかに処理されている。縁にあるつぶれは、攪乱のためと思われる。この刀本来の鐸ではなく、のちにあてがわれたものであることは、刀身を通す孔が中心からずれていることや、その孔の縁に形の少し歪んだ切り込み跡が見てとれることがわかる。5・6の鞘の足金物と7の鞘の覆輪の一部は、3の刀に通ったままで出土した。内側には一部、鞘の木質も残っている。銅あるいは銅の合金製で、全体が錆で覆われ、一部の地金は侵食されている。足金物は5が切先側、6が鐸側で、図示した向かいであることは、足の長さからも判断できる。吊り部の台座は長方形で、幅1mmの縦隆線が巡るもので、その裾には刻み入りの細金線が二重に回っている。さらにその下には、八弁の花弁をあらわした装飾が付き、その裾にも刻み入りの細金線が花弁形に沿って一周している。花形であろう鞘の背にかかる部分は、これらの吊り部と装飾を乗せており、6には鞘の背にあたる裏側に、隆起帯がある。7の先端部も同じような形の装飾に加工されている。このような鞘に足金物等が付く構えは、平安時代から鎌倉時代のものであるが、前述のごとく組み直されたことは間違いない、直接この時代を示すものではない。しかし、北海道に持ちこまれたのが擦文文化期であったことは、認められよう。

8は加工前の鉄素材であろう。両面の中央に浅い筋が入る平棒状の製品で、片端付近の側辺の一部にふくらみがある。さびによるふくれではなく、叩き広げられたものかとも考えられる。I B 2層で擦文文化期の遺物の可能性がある。9は丸釘である。頭部の平面形は三角形状で、平たく作られている。出土層やさびの状態から、新しいものではないと判断した。10・11は細棒状の鉄製品片で、釘か素材としてもたらされたものと思われる。断面形は10がやや丸気味、11は四角形状である。12は細板状の鉄片で、曲がっている。やはり、素材と考えられる。10・11・12は表Ⅳ-5最後尾に掲載した鉄滓は鍛冶遺構と関係のある遺物であろうか。

(三浦)

図版-19 台地部包含層の遺物



図版-19 I 黒層等の金属製品

3 II 黒層の遺物

(1) 土器 (図版-20~33、表版-6・7、図版版-12~30)

III群土器 (図版-20~23、表版-6・7、図版版-12~20)

III群は4,987点出土した。III群a類土器が3,265点、III群b3類土器が62点出土した。III群a類は萩ヶ岡1、2式が主体である。点数としては縄文土器破片のなかで最も多い。P-18から東鉄路IV式土器が出土している(図VI-35-6)ことを除いて、包含層中で最も古い土器群である。明確に天神山式と位置づけできるものはなかった。萩ヶ岡2式について新しい要素の強いものも円筒上層式併行として、III群a類とした。遺構の遺物について隆帯上に連続押圧した丸軸絶条体から、円筒上層a式としたものがある。しかし破片から推測できる文様構成から萩ヶ岡1、2式併行の可能性は高い。III群b3類について、典型的な北筒式に比定できるものはない。分布図の項目について、隆帯上の連続押圧について原体別に示した。隆帯の両側縁を留めるように刺突を施す。刺突は逆'く'の字形を呈するように施す。この様な刺突方法について分布図と表には『刺突A』の略称で表すものとする。隆帯上に'く'の字形に短沈線を連続するものと関連する刺突とみなして別に扱った。また、棒、あるいはヘラによる刺突について、隆帯の粘土紐をまたぐような原体による押圧痕をキザミ、隆帯幅より狭い施文具による押圧痕を刺突として区別した。分布の傾向として、III群a類はG 61・I~J 62~64グリッドに集中が見られる。施文原体別の集中についても同様であった。

III群a類土器：波状口縁部(図版-21)

図版-21は波状口縁の波頂部である。いずれも萩ヶ岡I、II式の範疇に比定できる。

1は半軸絶条体によって連続した押圧を施す。圧痕から判断すると縄を軸にした絶条体である。内面は丹念に研磨を施す。器壁には長石小粒をよく含む。2は突起様の波頂部を持つ。隆帯上および口縁端部には半軸絶条体による圧痕を連続的に施す。1と同様に絶条体の軸は縄である。隆帯間および突起の肥厚部分には、横方向のLr縄線を複数条施す。3は棒状にのびる波頂部を持つ。隆帯上および突起の肥厚部分には縄文による押圧を連続して施す。内面は磨きによる調整を施す。4は突起様の波頂部を持つ。隆帯上には縄文による圧痕を連続して施す。口縁端部は斜方向の短沈線を施す。器壁は薄く焼成は良好である。5は台形状の波長部分に横方向を基調とする隆帯を貼付ける。隆帯上は深い刻み込みを連続して施す。内面は磨きによって調整する。6は台形状の波長部分に横方向の沈線を施す。波頂部については肥厚した中央部は剥落する。内面は磨きによって調整する。7は沈線によって加飾する。口縁端部には直径2mmの刺突を不規則に施す。沈線と刺突は同一の施文具である。8~14は'く'の字をモチーフとした刻みを隆帯上に施す。隆帯の間は横方向を基調とする沈線を充填するように施す。9は隆帯上をなぞる様に沈線を施す。粘土紐の両側縁を器壁に留めるような刺突である。10は9と同様な粘土ひもを留めるような刺突である。地文部分に刺突し、隆帯上にそのまま原体を押しつける。11は隆帯間に沈線を充填した後、短沈線を施す。12・13は爪による刺突を連続して施す。12は隆帯上に'く'の字形に爪から指頭部分までの圧痕を連続して施す。口縁端部には爪型文を連続して施す。14は口縁端部に'く'の字形に短沈線を連続して施す。隆帯上には器壁部分に隆帯縁を留めて付ける様に刺突を連続して施す。

15は横方向に一列に並んだ刺突を波頂部外面について一面に施す。16は口縁端部および隆帯上を半截竹管を用いた短沈線によって加飾する。隆帯間に半截竹管による直線を隆帯沿いに充填する。17はなで調整の器面に対して、無文の隆帯を貼付ける。隆帯間に文様は充填しない。18はなで調整の器面に対して、隆帯を貼付ける。半截竹管により、隆帯上を浅くなぞるようにして沈線を施す。器壁はかたくしまる。19は粘土ひもの貼り付けによって肥厚した波頂部分を持つ。隆帯文様を縁取るよう

に半截竹管による刺突を連続して施す。器壁に刺突し、隆帶上で押し引くように抜き取る。

20・21・22は突起様の波頂部分を持つ。20は結束第1種羽状縄文を地文に持つ。隆帶部分は、く桜の字状に外反する。補修孔を持つ。裏面についてなで調整の痕跡がある。21は口縁端部についても縄文を施す。突起の腹部には短い粘土ひもを貼付けた突起部分を持つ。22についても突起の下部は肥厚する。

：単軸絡条体による圧痕を持つもの（図版-20-2、22-1-5、23-6-11）

20-2は突起様の波頂部を持つ。突起部分から縦方向に短い粘土紐を貼り付ける。突起部分は縄線で加飾する。口縁端部は絡条体による連続刺突を施す。内面はよく磨く。結束第1種羽状縄文を地文として持つ。22-4・23-6・8は絡条体の軸が縄であることを観察できる。他個体は丸軸絡条体である。6は絡条体の端部を押圧したものである。9は爪による連続押圧を伴う。10は沈線による加飾を伴う。22-4・5は他個体に比べ、器壁が厚く粗い胎土である。器内面について、5は磨き調整をよく施す。23-11は横走する隆帶に絡条体による連続刺突を施す。内面は縦方向によく磨く。

：縄文による圧痕を持つもの（図版-22-6-8・10・11、23-12）

11の器面には爪による押圧が併存する。7・10・11は2本の粘土紐を一組にして隆帶を施文する。

：刻みによる圧痕を持つもの（図版-22-12-18・26・28・29、23-13-16）

刻みもしくは短沈線を連続して施すタイプである。22-14・15・18・28・29、23-15は粘土紐貼り付けを器面に留めるような意識をした、刺突を施すタイプである。22-15はⅢ群a類土器の隆帶部分の破片である。隆帶の両側縁を留めるように刺突を施す。刺突は逆'く'の字状を呈するように施す。この様な刺突方法について分布図と表においては「刺突A」の略称で表すものとする。23-3は器面について、器壁の刺落が甚だしい。隆帶による装飾を器面に施す。加飾は胴部の上半分全面に及ぶ。隆帶には、両側縁を留めるような刺突を連続して施す。口縁部分は肥厚し、短沈線による鋸歯状文様を連続して施文する。内面はよく磨く。胎土には長石粒をよく含む。結束第1種羽状縄文を地文として持つ。22-16・17・18は器表面について、口縁部の肥厚部に縄文を施文する。22-28・29は他個体に比べて、器壁がやや厚く残存する径から大型の器と推定できる。地文について、22-29は結節を持つ縄文を持つ。口縁部には押し引くような刺突を横方向に連続する。23-16は棒状工具の先端部を連続刺突し、その上をなぞるように短沈線を浅く施す。

：爪型による圧痕を持つもの（図版-20-1、22-19・20、23-17-21）

20-1は台形の波状口縁を持つ。波頂部中央にボタン状の貼り付けを持つ。器面を縄線によって加飾する。口縁端部には爪による刺突を連続して施す。器壁は比較的厚手であり、混和剤は目立たない。結束第1種羽状縄文を地文として持つ。22-17は3本の沈線が粘土ひもの側縁を留めるように引いてある。18は爪をつけた後にそのまま指頭部分を押しつける施文の連続である。22-19・20は爪の先端のみを押圧する。22-20は内面は横方向によく磨く。隆帶は断面三角形になるように指頭を押しつける。その際に連続して爪を押圧する。口縁端部には指頭圧痕を連続する。23-21は波頂部のつけ根部分の破片である。頂部から垂下するように隆起させた突起部分である。隆帶上には連続して爪を押圧する。

：半截竹管による沈線を描くもの（図版-23-2）

2は4単位の波状口縁を持つ土器である。波頂部から半截竹管による2条の沈線を垂下する。波頂部にはわざと打ち欠いた痕跡がある。この個体はH-4近辺からかたまって出土し、C64グリッドから、そしてH-4覆土中、P-32覆土中からも出土する。H-4・P-32はともに中期前半、Ⅲ群a類土器期の遺構である。

：半截竹管による連続する押し引きを持つもの（図版-22-21～23、23-22～25）

口縁部破片、22-21～23は粘土紐を2本一組として貼り付ける。22-21は口縁端部に径2mmの刺突をアトランダムに施す。23-22は器面を半截竹管の押し引きによって加飾する。隆帶は粘土紐を沈線で留めるように貼る。分布図で（斜）としたものは斜方向の押し引きを並列したものである。

：棒状工具の先端で刺突を連続して施すもの（図版-22-24・25、23-1・26）

23-1は突起様の波頂部を持ち、波頂部中央はボタン状のはりつけにより肥厚させる。器形はよく外反する。口縁部には粘土紐の貼り付けによって肥厚させる。隆帶上には連続した刻みを施す。地文には結束第1種羽状繩文を持つ。内面は丹念に磨く。23-26は絶体の軸により、粘土紐を器面を留めるように刺突したものである。隆帶上には絶体圧痕がある。

：口縁部の肥厚帯に、繩文を施すもの、またそれに類するもの（図版-22-27・30）

27は撫り糸による回転施文を口縁端部に施す。隆帶によって波状文様を口縁部に施す。30は粗い撫で付けによって内面調整を施す。

：横状把手（図版-23-3～5）

いずれも沈線により加飾する。3・5は半截竹管を沈線の原体にする。波状口縁の中央に貼付する。

：綾織り地文を持つ胴部破片（図版-23-27～29）

綾織り文地文は全体の破片をおしなべて見ても目立つ量ではない。29はRLとLLを撫り合わせた原体を地文に持つ。より戻しが見受けられる。21-7と同一の個体である。

：底部（図版-23-30・31、20-4・5）

23-30は胴部地文に結束第1種羽状繩文を持つ底部破片である。31は繩文の圧痕を持つ底部である。所謂、綱代圧痕である。20-4の内面には、輪積みによる成型痕がよく残る。結束第1種羽状繩文を地文として持つ。5は大型の器形を推定できる底部である。胎土中には纖維、粒径0.2～0.7cmの長石粒が目立つ。

Ⅲ群 b 3類（図版-22-9・24-26・31-33）

9は口唇部を丹念に面をとり、繩を連続して押圧する。24・25は口縁端部に連続刺突を施す。小型の半截竹管によるC字型の刺突を押し引き気味に刺突する。26の口縁部肥厚帯は折り返した形状である。31は口唇部直下に横走沈線を持つ。口縁形態について、やや屈曲気味に外反する。口縁端部は撫で付けるように面をとる。内面は指頭による調整痕が残る。32は口縁端部に繩文を施文する。繩の端部が回転した痕が残る。内面は撫で付けによって丁寧に調整する。器壁はかたく、よくしまる。32は地文が結束第1種の羽状繩文である。口縁端部には指頭による形成痕が残る。内面は撫で付けによって調整する。

（大泰司）

IV群土器（図版-18・22-24、表版-6・7、図版-13・21-28）

後期の土器IV群は1,454点出土した。余市式土器破片は他のIV群破片と明らかに異なるので、分布図は別に図示した。IV群a類は余市式が554点、IV群b類は137点、IV群c類は豈林式が553点出土した。後期の最終末期を除いて全般にわたって出土した。IV群a類はほとんどが余市式である。例外として遺構遺物であるが、P-23から入江式に比定できる土器片が3点出土している（図VI-35-19）。IV群b類は手縫式が目立つ。分布の傾向として余市式はI 56、58、61、64、F 25グリッドに散点的な集中を見る。ほかのIV群はC～E 59～61グリッド、G～I 57～59グリッドに集中する。また低湿地の分布状況をみるとIV群b類が比較的よく分布する。

IV群a類（図版-20-7、24-1～11）

図版-24について、1～11はIV群a類の口縁部および胴部破片である。20-7は底部破片である。

いずれも余市式である。1・8は口縁端部の隆帯直下に円形刺突を持つ。5・6・10は器面に対して垂直に刺突し、刺突具を器面に押しつけながら斜め下方向に抜き取る。1は口縁部の内面に繩文施文を施す。1・3・4・7・9を除き、RLとLR、2種類の原体を用いて施文する。3・7は無節の原体を用いる。口唇部の残る破片についていざれも繩文を施文する。胎土について、いざれも、粒径1mmあるいはそれ以上の大きさの混和剤をよく含み、特徴的である。11はIV群a類土器口縁端部、口縁部肥厚帯、地文いざれも同一のRL繩による施文を施す。20-7は余市式土器の底部破片である。RLとLR、2種類の原体を用いて羽状に施文する。

IV群b類(図Ⅷ-24-12・13・15、25-1)

24-12はウサクマイC式土器である。横走沈線を施し、頸部には帯状の無文帶が走る。口縁端部には口縁部の磨り消し文様と同じ原体による繩文を施す。13は手稻式土器である。手稻式特有の文様を持つ破片である。横走する平行沈線を括弧様の沈線で縦に区切る文様である。15は屈曲する頸部と、よく膨らむ胸部を持つ。胸部上半には横走する磨り消し文様帯を持つ。そしてN字状をあしらった沈線文が横向方向に連続して並ぶ。25-1はウサクマイC式土器である。よく外反する口縁部を持ち、幅3mmの沈線によって器面を飾る。器壁はしまりがあるが、小石粒をよく含む。

IV群c類(図Ⅷ-24-14~16、25-2~22、26-1~20)

いざれも堂林式土器である。24-14はの胸部破片である。胸の屈曲部に無文帶をもつ。磨り消し繩文である。復元土器24-16、25-19~22、26-20はIV群c類土器、堂林式である。いざれも器内面について丹念に磨き調整する。21は沈線によって器面上半部を加飾する。21は短沈線による弧線文を巡らせる。21は底部から外へ開く器形である。他は口縁部分で微妙に内彎する。突起の裏面について22は円形の刺突を波頂部の突起それぞれについて中心に施す。

25-2~16・18はIV群c類の口縁部破片である。13・14を除いて口縁部に器内面から外方向への刺突を持つ。個体として考えた時、13・14は細片のため、刺突の有無を明言できない。2についてはIV群c類土器の刺突を持つ個体について、波頂部直下には刺突があるという普遍性が見受けられるため、刺突文様を持たない個体である可能性が高い。口唇部形態について2・3・7・9・11は切り出し小刀状である。4・5・6・13は切り出し小刀状だが、口縁端部について微妙に屈曲部分を持つ。8は端部が丸く、微妙に肥厚する。10は器形自体やや内彎するが口唇部について、外側へと微妙に屈曲する。施文する沈線について12が細沈線であるほか、9・10・11は沈線による加飾を持たない。13は口縁部破片である。口唇断面形態は切り出し小刀状であるが、場所によっては内側へ屈曲する。口唇部は横方向によく磨く。沈線により、菱形を基調とする文様で器面を飾る。内面には磨き調整を施す。口縁部分には、中央に径3mmの刺突を持つ突起がある。

25-14はIV群c類土器の口縁部である。口縁端部を丁寧に撫で付けて面をとる。15は胸部破片である。深鉢の屈曲部分である。器面には、細沈線による連続した弧線文が想定できる。16は焼成良好の胸部破片である。平行沈線の区画内を斜行する平行短沈線により充填する。17はやや口縁形態がやや内彎する深鉢破片である。口唇部を丹念に磨いて面をとる。18は羽状に繩文を施した後、研磨を施してある。内面は煤がよく付着する。

26-1・2・3・6・7はIV群c類の口縁部破片である。26-1は磨り消し繩文により器面を飾る小形の浅鉢である。口縁部断面形態は先端が細く尖る。沈線により器の全面にわたって加飾する。3・4はミニチュアの浅鉢形土器である。5~19は注口土器の破片である。5と6、7と8、9と10、12と13は同一個体である。2は口縁部破片である。平行沈線によって器面を飾る。内面は成形痕が残るもの、撫で調整をまんべんなく施す。6は注口土器の口縁部である。ボタン状の貼り付けを持ち、

その上から、円形の刺突を施す。7と8は同一個体の口縁部および底部である。口唇断面は切り出し小刀状である。焼成は悪く、胎土は粗い。9と10は磨り消し繩文文様を持つ胴部破片である。器壁は薄く、焼成は良好である。内面は磨きにより丹念に調整する。11は薄い器壁を持つ球形の胴部破片である。内面は撫で付けにより、丹念に調整する。節の細かいRL、LR繩を交互に施し、器面を羽状に飾る。IVcの中でも古手である。12と13は焼成良好な破片である。球形の胴部であり、注口土器の破片と想定できる。内面はなで調整を基調とし、指による成形痕がよく残る。14は浅い沈線で器面を加飾する。内面は撫で付けによって丁寧に調整を施す胎土には粒径2~5mmの小石をよく含む。掲載表に示したとおり、H-6からの破片と接合した。後期の切り合った住居跡は堂林式期に凹みとして生活に用いられたようである。F-379がそれを示す。15はボタン状の貼り付けを持つ。貼り付けの上から円形の刺突を施す。幅広い原体による沈線文により器面を飾る。指による成形痕がよく残る。16は細沈線によって器面を飾る。小型器形であり、屈曲部に貼り瘤を持つことから注口土器の可能性が高い。内面は撫で付けによって丁寧に調整する。17・18は注口土器の注口部破片である。いずれも器外面は丹念に磨き調整を施すが、内面については指による成形痕がよく残る。注口のつけ根は粘土貼り付けにより加飾する。19は底部破片である。横走沈線が器面を飾る。器壁は薄く、焼成は良好である。

(大泰司)

V群土器 (図版-27-1~20、表置-7、図版置-28・29)

V群a類

5は壺の肩部片。外面は磨かれ無文で、内面は横方向のナデである。胎土に海綿骨針を含む。6は浅鉢で細かいLR繩文が施され、底部は上げ底と思われる。これら亀ヶ岡系土器はb類の可能性もある。7は壺の体部片と思われ、LR繩文を施した後に弧状の沈線を加えている。内面の調整はヨコナデである。8は爪形文が施されたもので、口縁部の断面は角張り、口唇には刻み目が施されている。突起の部分には刺突が加えられている。9・10はLR繩文を施した後、口縁部に半截竹管状工具による刺突文(9)や押引文(10)の施されたものである。9は口縁部の断面が尖る。10の口唇には刻み目が加えられている。18は立ち上がりの部分に刺突文が施されたもので、底面にもLR繩文が施されている。内面調整はいずれもナデである。これらは大洞B-C式に併行するものかと思われる。

V群b類

1・11~13は繩文を地として横走する沈線文が施された深鉢である。1・11は口縁部の断面が角張り、口唇には繩文が施されている。1は口縁部がわずかに内彎する器形である。内面の調整はナデで、一部に炭化物が付着している。13は沈線の間に刺突が加えられている。14・15は繩線文の施された小片である。深鉢の底部の形態には立ち上がりの部分に丸みのある平底(2)と上げ底(3・19)がある。2は底面にもLR繩文が施されている。内外面とも一部に火を受けた痕跡がある。3は器面が磨滅している。これらの内面調整はナデである。

V群c類

16は大型の浅鉢で、上面觀は多角形になる可能性がある。口縁部の断面は角張り、小突起の部分はやや肥厚する。口唇には繩文が施されている。内面に炭化物が付着する。20は深鉢の底部で、丸底気味の平底と思われる。底面にもLR繩文が施されている。これらはママチ2類に相当すると思われる。

4は直線的に立ち上がる器形の深鉢で、I B層・II B層から出土した。口縁部の断面は切り出し形で、やや尖り気味になる部分もある。RL繩文を施した後に5本の平行沈線がひかれたもので、口唇直下は繩の圧痕、口唇には繩文が施されている。内面は横方向に粗くなっている。ママチ3類に相当すると思われる。

(中田)

(2) 包含層出土の土製品（図版-28、表種-7、図版種-30）

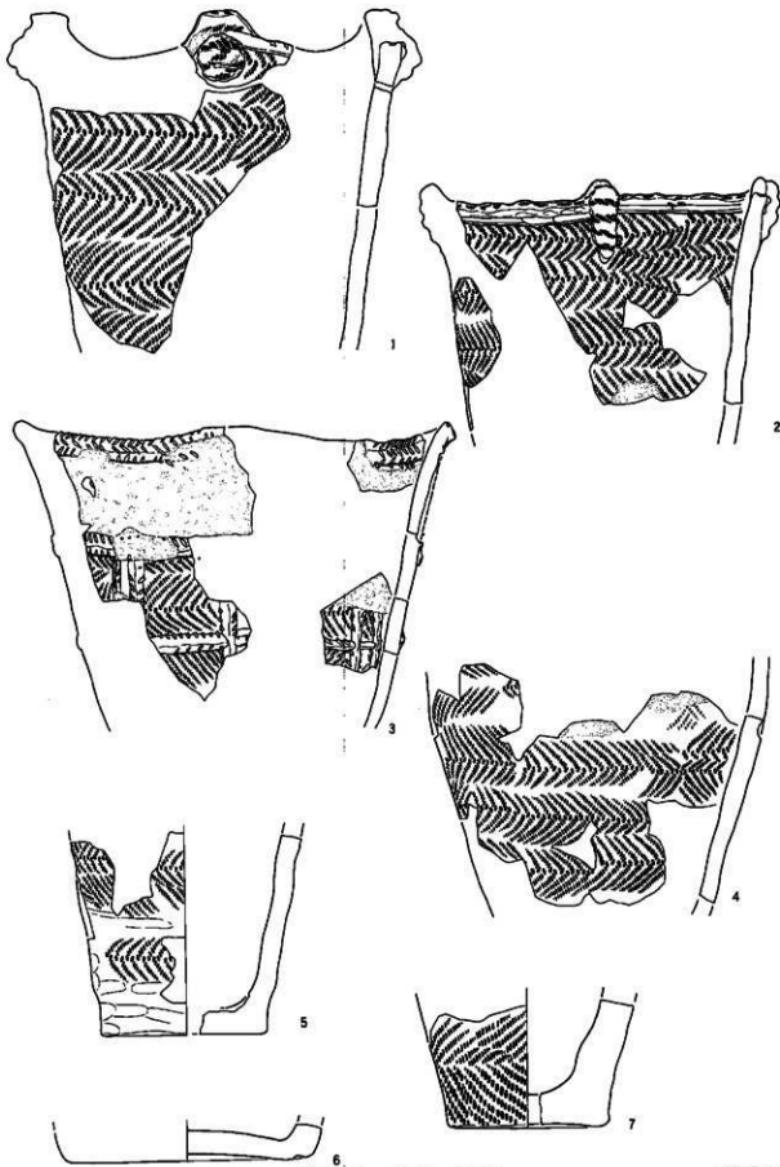
再生土製品（28-1～19）は87点出土した。意図的に打ち欠いた可能性がある土器破片のうち、定型的であり、確実に製品といえるものだけを抽出した。ほとんどがⅢ群a類の土器から作ったものである。唯一17のみが中期後葉、Ⅲ群b3類土器の再生である。これら縄文時代中期の再生土製品は、特に凹タイプは中期後葉の遺物である可能性がある。再生土製品の出土傾向について量的に多いのはE64グリッドである。円形、三角形、凹タイプの三種は分布の傾向が合致する。Ⅲ群b3類土器の分布傾向を踏まえると、再生土製品の分布に傾向が似る。再生土製品が中期前半の土器を材料として中期後半に作られたという解釈もできる。

形態から5種類に分類できる。三角形型。円形。貫通孔をもつもののうちほぼ中心部分に孔があるもの。器表面部分中央について器壁の半ばまで穿孔し、製品の径が4cm程の、凹みを持つタイプ。精円形型で長軸の端部に刺突を持つものである。出土量について、そのうちわけは、三角形型28点、円形45点（そのうち直径2cm以下のもの4点）、凹みを持つタイプもの10点、中心部分に貫通孔があるもの5点、精円形型で端部に刺突を持つもの1点である。そのうち19点を図化した。1～6は円形である。うち1・2は直径2cm以下の個体である。7～13は三角形である。8・9は側縁を擦ることによって形態を整える。他は打ち欠きのみである。14・15は個体の中心に貫通孔をもつものである。側縁について、擦ることによって形態を整える。16は端部に貫通孔を持つものである。欠損はあるが精円形型であったと推測出来る。17～19は器壁の半ばまで穿孔するものである。細かい打ち欠きにより成形する。出土した再生土製品のうちでは比較的大型な個体群である。低湿地出土の土製品を2点挙げておく。4と7がそれである。明らかに、土器片の縁辺について連続した意図的な打ち欠きがある。また、いずれも貫通孔があいている。

20・21は縄文時代の土製品および焼成粘土塊である。20は平たい直方体をした土製品である。全面を直径2mmの円形刺突が覆う。刺突は長軸を基準とし正面、裏面に3列、側面に1列、それぞれ並ぶ。長軸方向に貫通孔を持つ。堂林式土器の廃棄を伴うP-23の脇から出土した。類例と検出レベルを考慮してⅣ群c類、堂林式に伴う土製品と推定する。21は焼成粘土塊である。直径9mmである。円錐形を基調とする形状を持ち、端部は焼成後、折損する。時期は不明だが出土したレベルから縄文時代後期後半の可能性がある。

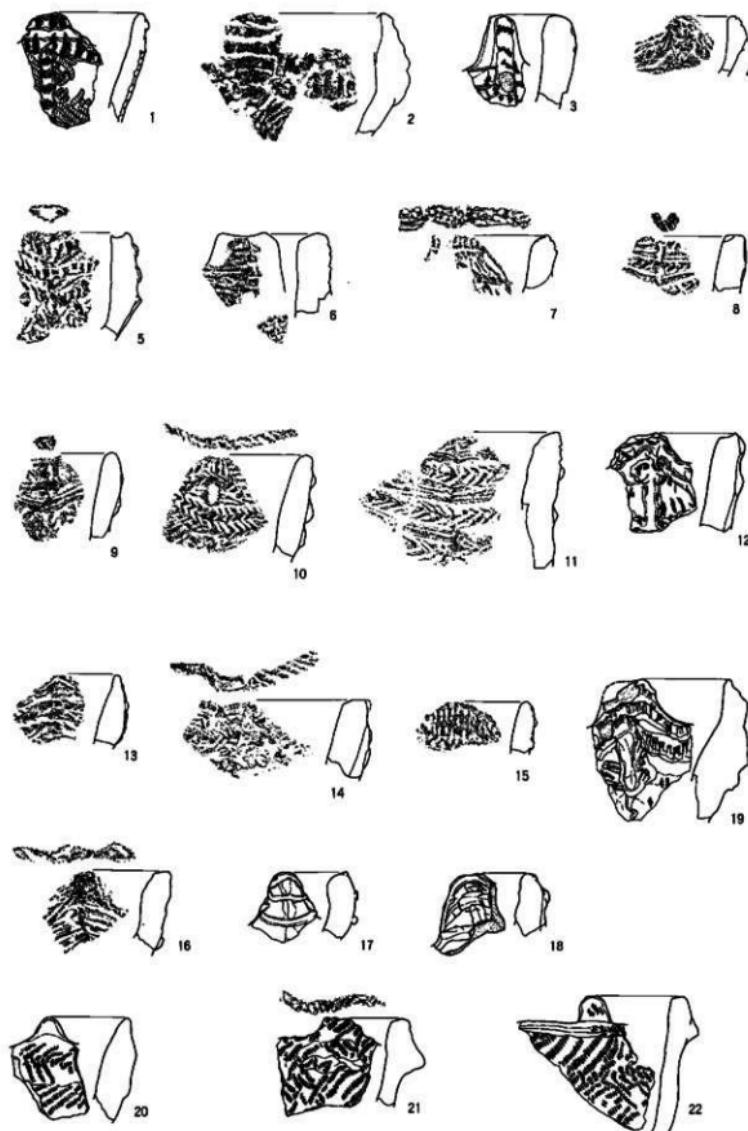
(大泰司)

3 II 黒層の遺物



図版一20 II 黒層の土器(1)

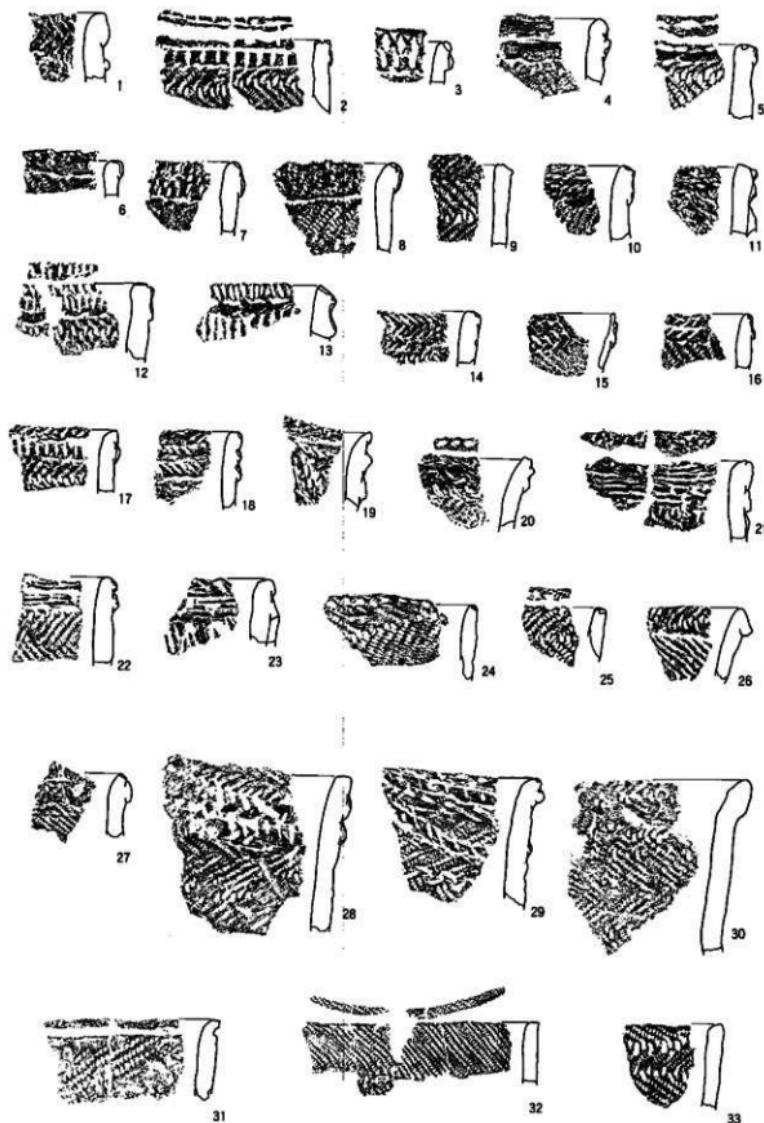
遺物(S=1/3)



図版-21 II 黒層の土器(2)

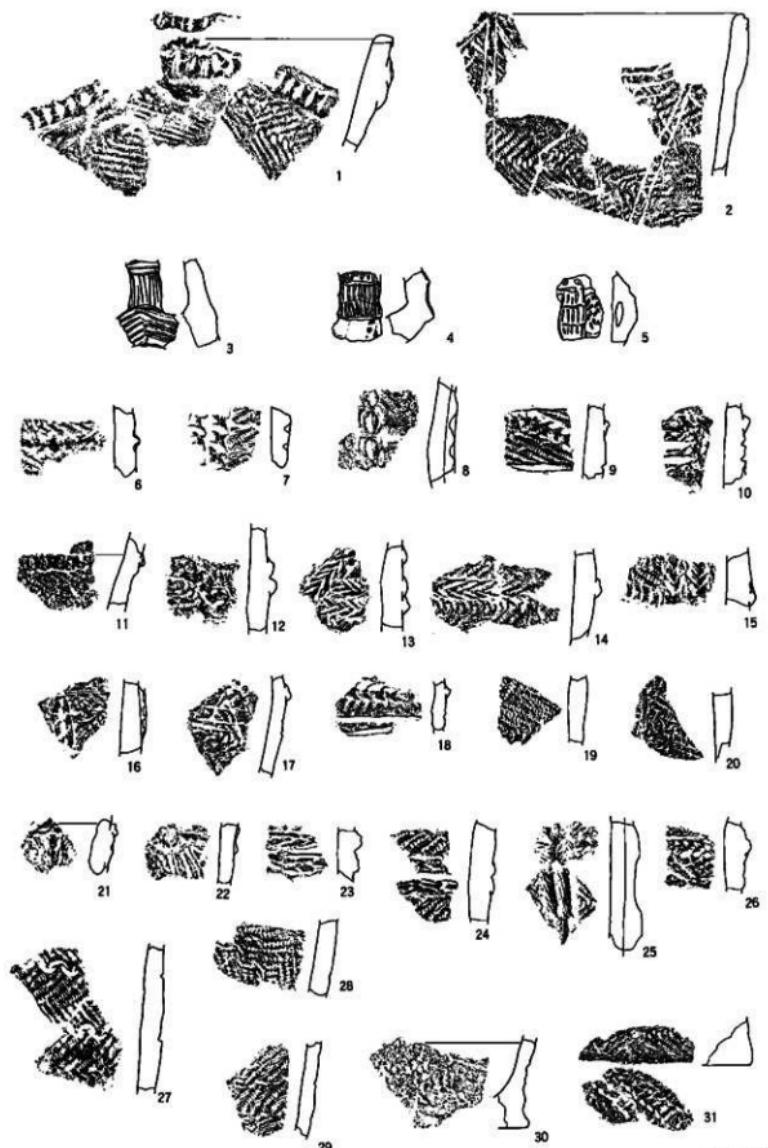
遺物 (S=1/3)

3 II 黒層の遺物



図版一22 II 黒層の土器(3)

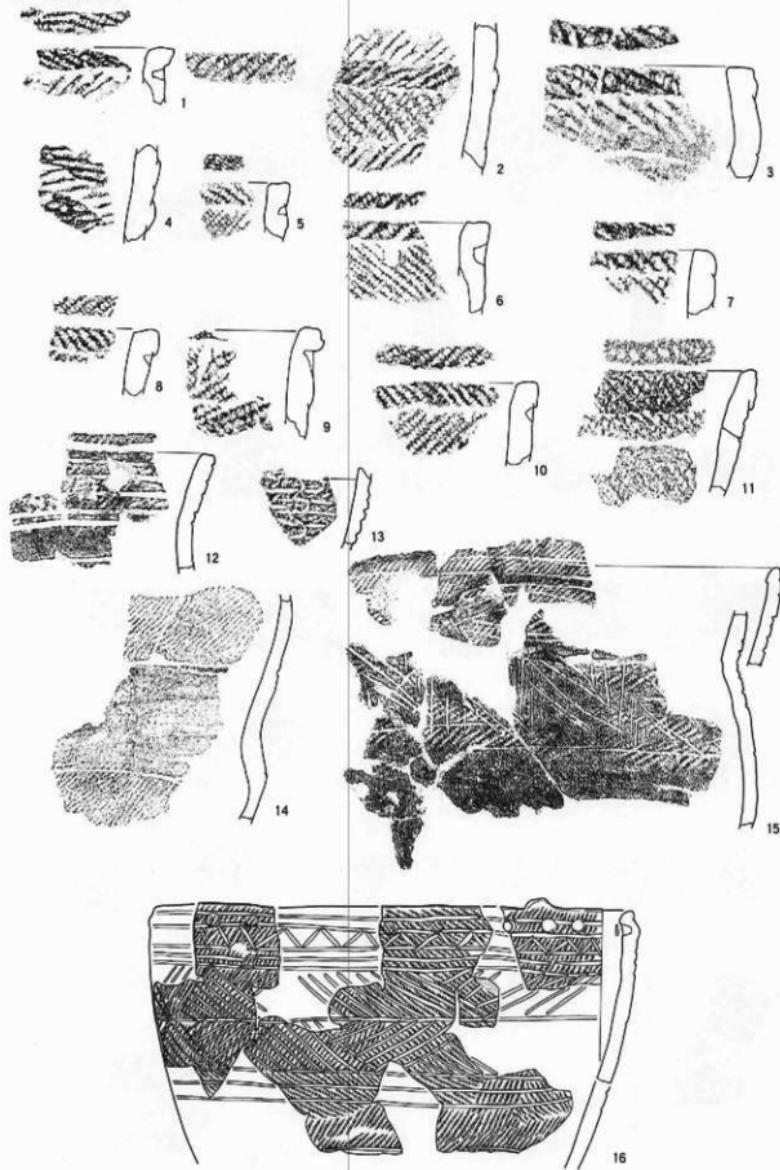
遺物 (S=1/3)



図VII-23 II黒層の土器(4)

遺物 (S=1/3)

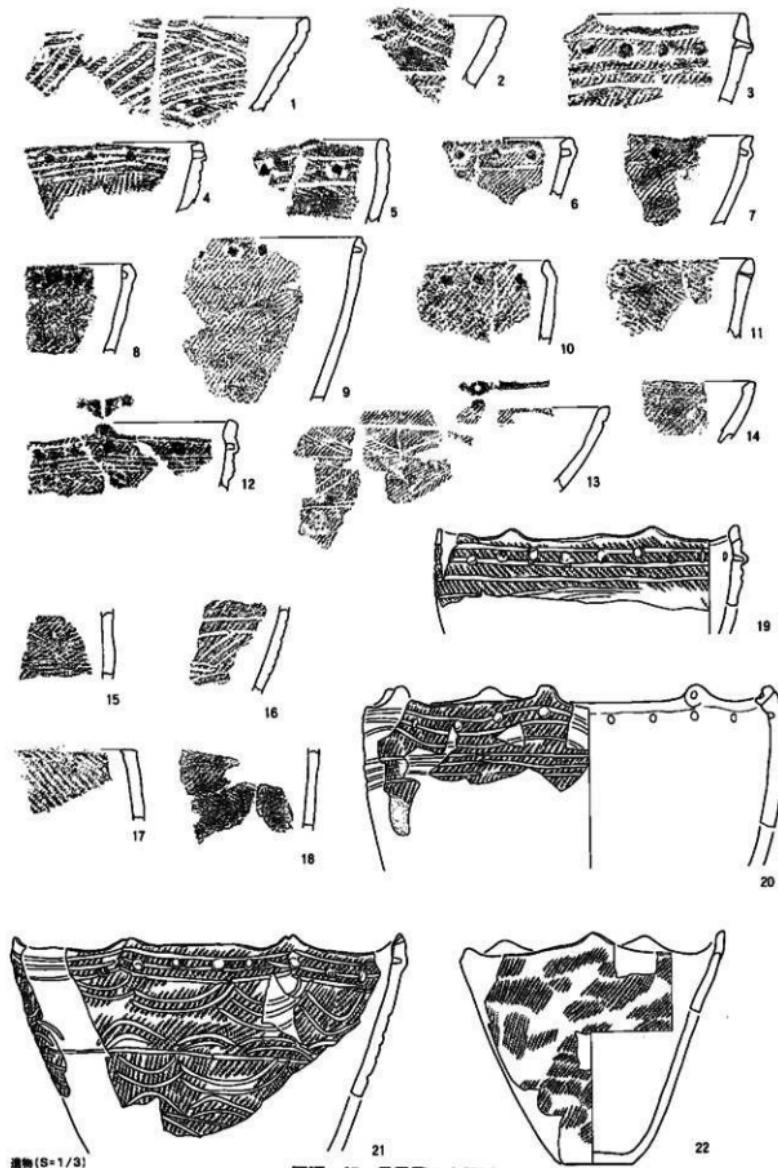
3 II 黒層の遺物



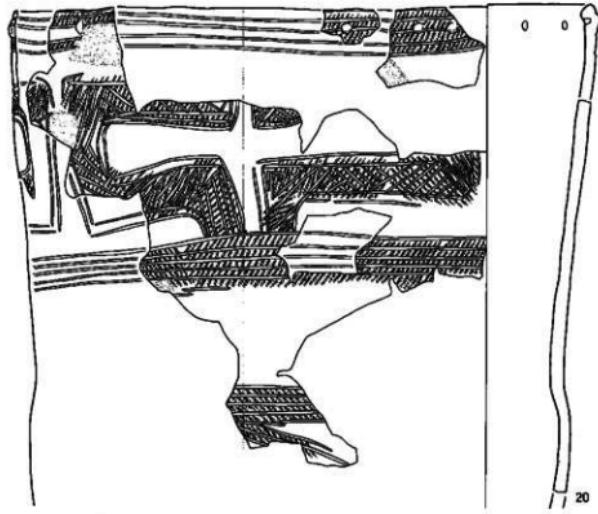
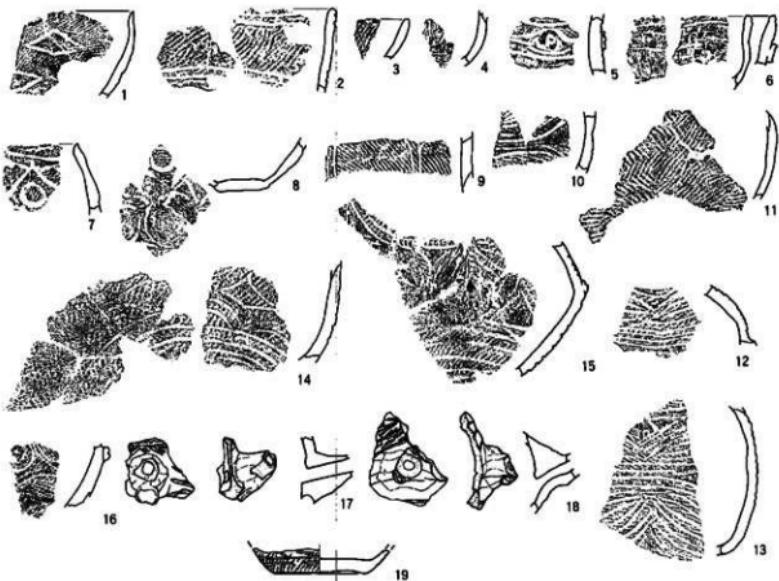
図版-24 II 黒層の土器(5)

遺物 (S=1/3)

Ⅶ 台地部包含層の遺物

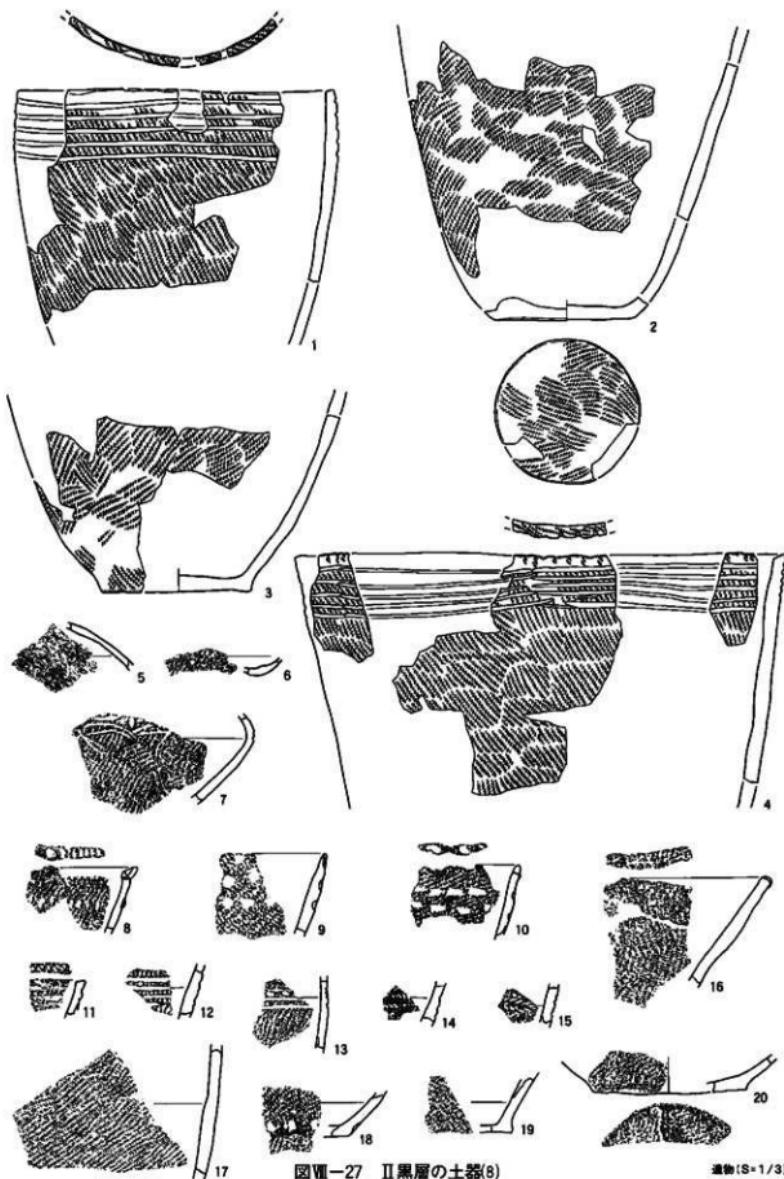


3 II 黒層の遺物



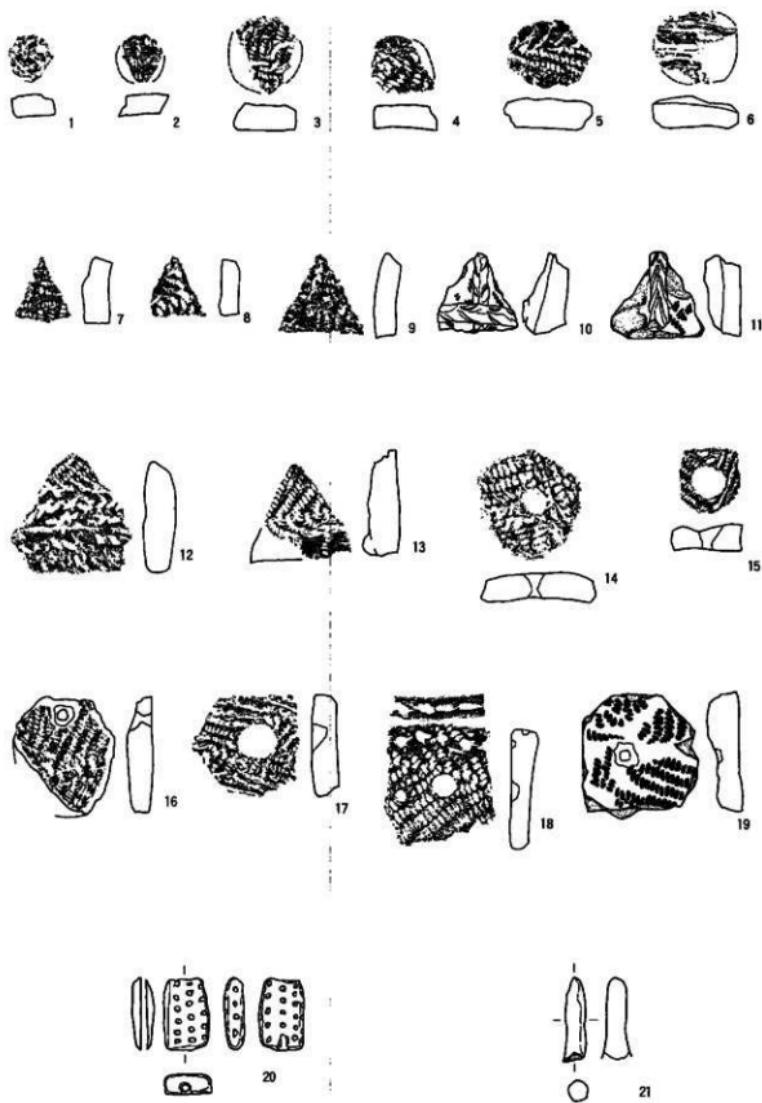
図版-26 II 黒層の土器(7)

遺物(S=1/3)



図版-27 II 黒層の土器(8)

遺物(S=1/3)



図版+28 II 黒層の土製品

遺物 (S=1/3)

図 台地部包含層の遺物

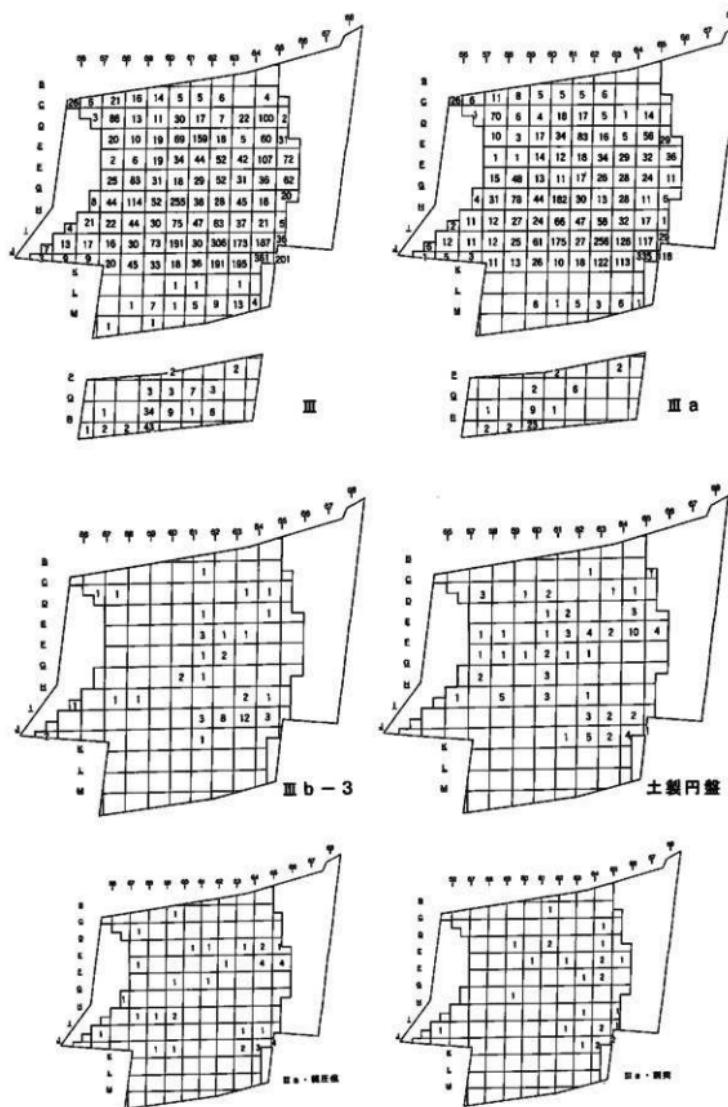
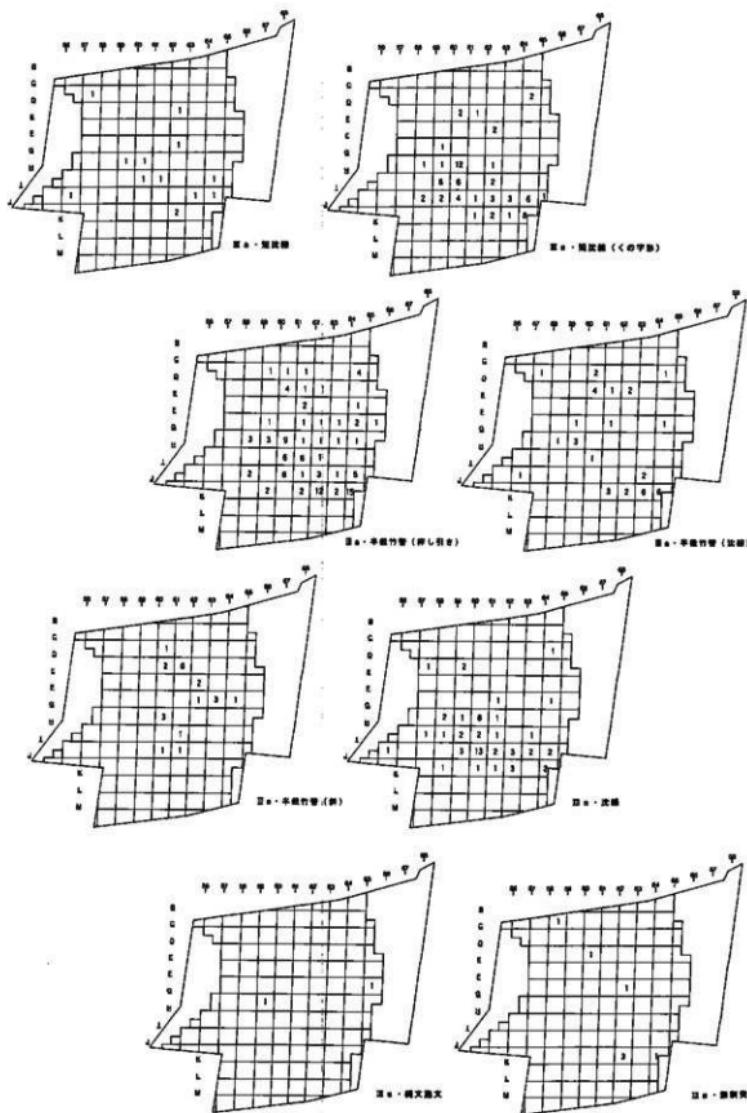


図 VII-29 土器分布図(9)

3. II 黒層の遺物



図版-30 土器分布図(II)

■ 台地部包含層の遺物

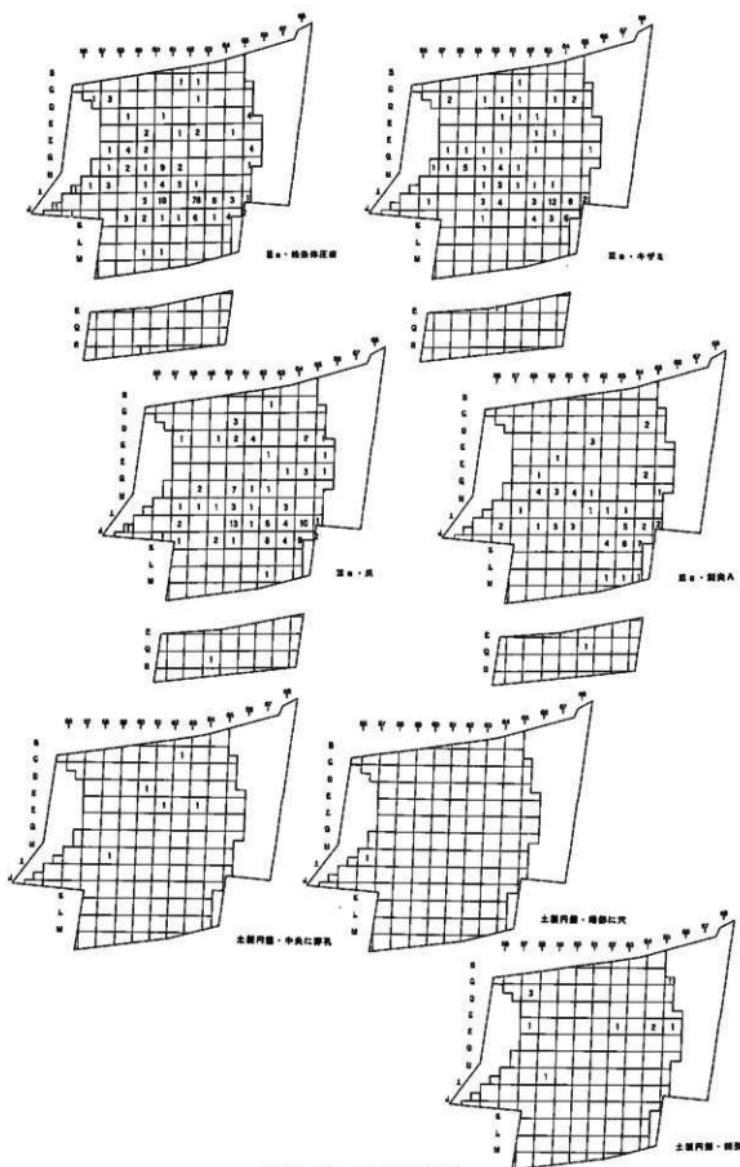


図31 土器分布図(1)

3 II 黒暗の遺物

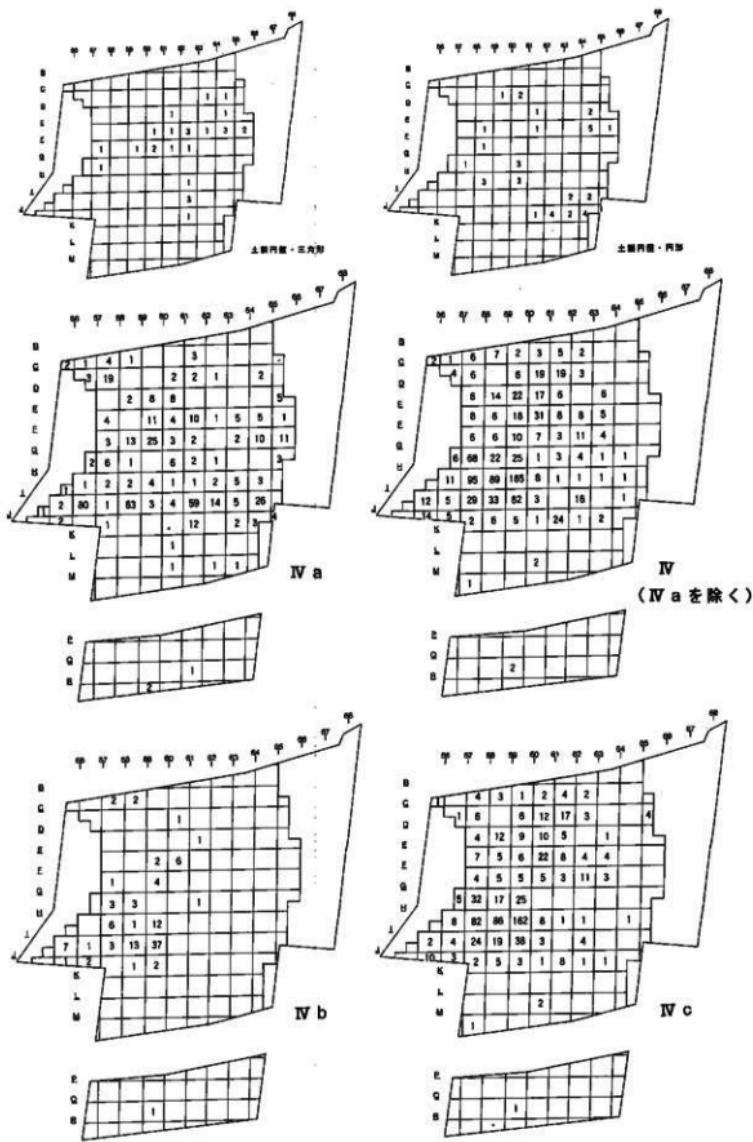


図7-32 土器分布図(12)

図 台地部包含層の遺物

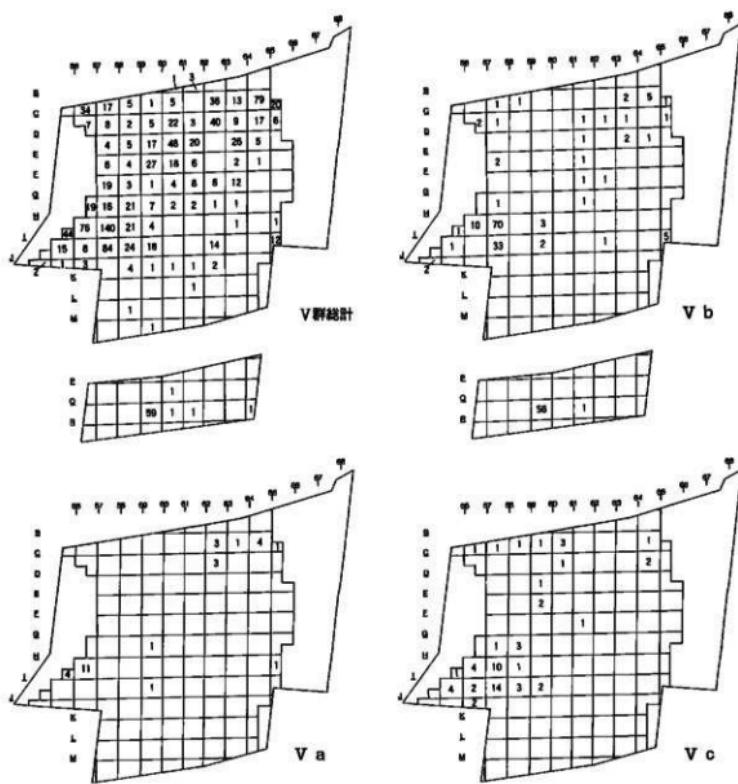


図33 土器分布図(13)

表題-6 II 黒層掲載土器一覧(1)

図番号	発掘区	層位	分類
W-20-1	E63b	II B	Ⅲ群 織ヶ岡1、2式併行 夷文圧痕と彫線文
2	B54b	II B	Ⅲ群 織ヶ岡2式併行 縦条体圧痕と彫線文
3	D50d	II B	Ⅲ a 織ヶ岡1、2式併行 口縁部に2本一起の粘土紐 刺突A
4	I62d	II B	Ⅲ a 痕跡破片
5	C57b	II B	Ⅲ a 底部下半部分
6	P63b	II B	Ⅲ a 底部破片
7	G62d	II B	Ⅳ a 底部破片

図番号	発掘区	層位	分類と備考
W-21-1	H57d	II B	Ⅲ a 縦条体
2	H59d	II B	Ⅲ a 縦条体
3	D63	耕作土	Ⅲ a 織文
4	E65a	II B	Ⅲ a 織文
5	I60b	II B	Ⅲ a 刻み
6	J62b	II B	Ⅲ a 次線
7	I64c	II B	Ⅲ a 次線
8	J63a	II B	Ⅲ a 刺突A
9	J64d	II B	Ⅲ a 刺突A
10	J62	II B	Ⅲ a 刺突A
11	H60d	II B	Ⅲ a 煙吹線、くの字に刻み
12	J62d	II B	Ⅲ a 爪
13	J64a	II B	Ⅲ a 短次線、くの字に刻み
14	J61b	II B	Ⅲ a 短次線、くの字に施す
15	E60d	II B	Ⅲ a 刺突
16	J63a	II B	Ⅲ a 半截竹管、押引き
17	J62b	II B	Ⅲ a 織文
18	C57c	II B	Ⅲ a 半截竹管、沈線
19	J63a	II B	Ⅲ a 半截竹管、沈線
20	G59a	II B	Ⅲ a 口縁部把厚等夷文施文
21	F51c	II B	Ⅲ a 口縁部把厚等夷文施文
22	E54a	II B	Ⅲ a 口縁部把厚等夷文施文

図番号	発掘区	層位	分類と備考
W-22-1	F59c	II B	Ⅲ a 縦条体
2	J65a	II B	Ⅲ a 縦条体
3	F57d	II B	Ⅲ a 縦条体
4	J59d	II B	Ⅲ a 縦条体
5	J62a	II B	Ⅲ a 縦条体
6	H58b	II B	Ⅲ a 爪
7	F65d	II B	Ⅲ a 爪
8	D57d	II B	Ⅲ a 爪
9	D59c	II B	Ⅲ b-3 口縁部縫綱夷文施文
10	D61a	II B	Ⅲ a 爪
11	D61c	II B	Ⅲ a 爪
12	C60c	II B	Ⅲ a 刻み
13	E63c	II B	Ⅲ a 刻み
14	J61a	II B	Ⅲ a 刻み
15	P60a	II B 上	Ⅲ a 刻み
16	F62b	II B	Ⅲ a 刻み
17	I60	II B	Ⅲ a 刻み
18	G59c	II B	Ⅲ a 刻み
19	F64d	II B	Ⅲ a 刺突A
20	P61c	II B	Ⅲ a 刺突A
21	F58a	II B	Ⅲ a 半截竹管、押引き
22	J62d	II B	Ⅲ a 半截竹管、押引き
23	J64a	II B	Ⅲ a 半截竹管、押引き
24	D61c	II B	Ⅲ b-3 刺突
25	B61c	II B	Ⅲ b-3 刺突
26	G63b	II B	Ⅲ b-3 口縁部縫綱夷文施文

図番号	発掘区	層位	分類	備考
27	G59a	II B	Ⅲ a 織文施文	
28	I59b	II B	Ⅲ a 刻み	
29	F65a	II B	Ⅲ a 織み	
30	G57b	II B	Ⅲ a 織文施文	
31	I62d	II B	Ⅲ b-3	
32	I63a	II B	Ⅲ b-3	
33	H57	II B	Ⅲ b-3	

図番号	発掘区	層位	分類と備考
W-23-1	C57b	II B	Ⅲ a 刻み
2	D60c	II B	Ⅲ a 半截竹管による沈線
3	G59a	II B	Ⅲ a 次線
4	H61a	II B	Ⅲ a 次線
5	J64a	II B	Ⅲ a 次線
6	G60b	II B	Ⅲ a 縦条体
7	F58b	II B	Ⅲ a 縦条体
8	I63a	II B	Ⅲ a 縦条体
9	I62d	II B	Ⅲ a 縦条体
10	I60a	II B	Ⅲ a 縦条体
11	R59d	II B	Ⅲ a 縦条体
12	J65a	II B	Ⅲ a 織文
13	G57a	II B	Ⅲ a 刻み
14	J62b	II B	Ⅲ a 刻み
15	J64b	II B	Ⅲ a 刻み
16	F64c	II B	Ⅲ a 刺突A
17	J59a	II B	Ⅲ a 爪
18	J63a	II B	Ⅲ a 爪
19	I62b	II B	Ⅲ a 爪
20	J55b	II B	Ⅲ a 爪
21	Q59b	II B	Ⅲ a 爪
22	H60d	II B	Ⅲ a 半截竹管、押引き
23	H60d	I B	Ⅲ a 半截竹管、押引き
24	G58d	II B	Ⅲ a 半截竹管、押引き
25	I61c	II B	Ⅲ a 半截竹管、押引き
26	D66a	II B	Ⅲ a 半截竹管、押引き
27	D62c	II B	Ⅲ a 縦条体
28	F58b	II B	Ⅲ a 縦縞り文
29	H56b	II B	Ⅲ a 縦縞り文
30	R58	II B	Ⅲ a 底部
31	G60a	II B	Ⅲ a 底部

図番号	発掘区	層位	分類と備考
W-24-1	H64b	II B	IV a 余市式
2	D65d	I B	IV a 余市式
3	J61b	II B	IV a 余市式
	J61b	II B	IV a 余市式
4	D65b	I B	IV a 余市式
5	I64d	II B	IV a 余市式
6	I63b	II B	IV a 余市式
7	F58d	I B	IV a 余市式
8	H56	風倒木	IV a 余市式
9	F59a	II B	IV a 余市式
10	I64a	II B	IV a 余市式
11	F65d	II B	IV a 余市式
12	H57c	II B	IV b カウナ式
13	Q59a	II B	IV b 手摺式
14	G58d	II B	IV c 登林式
15	D61b	II B	IV b 登林式
16	H58c	II B	IV c 登林式 直輪構成の文様帶

表図-7 Ⅱ黒層揭露土器一覧(2)・土製品一覧

図番号	発掘区	層位	分類と備考
WZ-25-1	H57a	II B	IV b 陶輪化
2	B61b	II B	IV c 堂林式
3	C57a	II B	IV c 堂林式
	C50c	II B	IV c 堂林式
4	I57b	II B	IV c 堂林式
	I57	擾乱	IV c 堂林式
5	E60d	II B	IV c 堂林式
	E60d	II B	IV c 堂林式
6	C60c	II B	IV c 堂林式
	C61	耕作土	IV c 堂林式
7	D40c	II B	IV c 堂林式
8	H56d	II B	IV c 堂林式
9	D59b	II B	IV c 堂林式
	C61	耕作土	IV c 堂林式
10	C61b	II B	IV c 堂林式
	C41	耕作土	IV c 堂林式
11	E61a	I B	IV c 堂林式
	E63c	II B	IV c 堂林式
12	D59c	I B	IV c 堂林式
	E59c	I B	IV c 堂林式
	E59d	I B	IV c 堂林式
13	F50c	I B	IV c 堂林式
	H57a	II B	IV c 堂林式
	I62b	II B	IV c 堂林式
14	F40d	II B	IV c 堂林式
15	H57a	II B	IV c 堂林式
16	H59b	I B	IV c 堂林式
17	I57a	II B	IV c 堂林式
18	H57a	II B	IV c 堂林式
19	E60d	II B	IV c 堂林式
20	G58d	II B	IV c 堂林式
21	H57c	II B	IV c 堂林式 曲線構成の文様帶
22	H58b	II B	IV c 堂林式 刻突や沈線を施さない

図番号	発掘区	層位	分類と備考
WZ-26-1	J55	II B	IV c 堂林式 注口土器
2	I58d	II B	IV c 堂林式 注口土器
	I60	II B	
3	I62b	II B	IV c 堂林式 注口土器
4	F62a	I B	IV c 堂林式 に?7法鉢形
5	E57c	II B	IV c 堂林式 に?7法鉢形
6	G59c	II B	IV c 堂林式 注口土器
7	D59b	I B	IV c 堂林式 注口土器
8	D61d	II B	IV c 堂林式 注口土器
9	I58a	II B	IV c 堂林式 注口土器
10	H56d	II B	IV c 堂林式 注口土器
11	H59b	II B	IV c 堂林式 注口土器
	H59	擾乱	
	I62b	II B	
12	G59c	II B	IV c 堂林式 注口土器
13	G57b	II B	IV c 堂林式 注口土器
14	H-6	床直	IV c 堂林式 注口土器
	H-6	覆土	
	H-6	覆土上面	
	H-6	覆土上面	
D58a	II B		
D58b	I B		
15	H57s	II B	IV c 堂林式 注口土器
	H57s	II B	
	H57s	II B	
	H57d	II B	

16	H57a	II B	IV c 堂林式 注口土器
17	G57c	II B	IV c 堂林式 注口土器
	G57	耕作土	IV c 堂林式 注口土器
18	H56	II B	IV c 堂林式 注口土器 感部破片
19	I58b	II B	IV c 堂林式 直線構成の文様
20	H59c	II B	IV c 堂林式 直線構成の文様

図番号	発掘区	層位	分類
WZ-27-1	I57a	II B	V b
	B56c	II B	V b I59d から同一個体
2	H56c	II B	V b
3	Q59b	II B	V b
4	H57d	I B + II B	V c
5	B55b	II B	V aまたはV b
6	G59c	II B	V aまたはV b
7	H56d	II B	V a
8	B84d	II B	V a
9	B84d	II B	V a
10	H56a	II B	V a
11	I57a	II B	V b I57d から同一個体
12	H59c	II B	V b
13	G61a	II B	V b
14	F62c	II B	V b
15	D61a	II B	V b
16	I55b	II B	V b
17	Q59c	II B	V
18	B65b	II B	V a
19	Q59c	II B	V b
20	J54d	II B	V b

図番号	発掘区	層位	分類と備考
WZ-28-1	E56c	I B - 4	再生土製品 円形 III a断
2	G60c	II B	再生土製品 円形 III a断
3	D64c	II B	再生土製品 円形 III a断
4	J65a	I B	再生土製品 円形 III a断
5	J64d	II B	再生土製品 円形 III a断
6	C50c	II B	再生土製品 円形 III a断
7	E63b	II B	再生土製品 三角形 III a断
8	E62c	II B	再生土製品 三角形 III a断
9	F59c	II B	再生土製品 三角形 III a断
10	E61a	II B	再生土製品 三角形 III a断
11	F62d	II B	再生土製品 三角形 III a断
12	H54c	I B - 3	再生土製品 三角形 III a断
13	C63d	II B	再生土製品 三角形 III a断
14	H58a	II B	再生土製品 貫通孔 III a断
15	E63c	II B	再生土製品 貫通孔 III a断
16	D60b	II B	再生土製品 貫通孔 III a断
17	C57a	II B	再生土製品 四型 III a断
18	C59a	II B	再生土製品 四型 III a断
19	C57a	II B	再生土製品 四型 III a断
20	J55a	II B	IV c 斜土製品
21	C61b	II B	焼成粘土塊

(3) 石器等

石鎚・石鎌未製品（図版-34-1～7、図版-36、表題-8、図版題-31）

石鎚53点、石鎌未製品2点が出土している。石質は1点の片岩を除き、すべて黒曜石である。1点の片岩は本来I B層出土のものが混入したものと考える。薄身で、五角形のものが1点、三角形で、凹基のもの6点。平基のもの1点、木の葉形のもの1点。菱形のもの2点、有茎鎌21点である。このうち五角形のもの1点、木の葉形のもの1点、菱形のもの1点、有茎鎌5点、計7点を図示した。石質はすべて黒曜石である。1は五角形のもの。2は木の葉形のもの。3～7は有茎鎌。4は基部が一部欠損。7は赤井川産の黒曜石に見られる小さな流紋岩等の不純物が見られる。

石槍・ナイフ（図版-34-8～14、図版-36、表題-8、図版題-31）

18点が出土している。このうち6点を図示した。石質はすべて黒曜石である。8は、石質はいわゆる花十勝、茶色と黒色が混じり合う。表面は全面に調整が施されているが、裏面は一部主刺離面を残す。9は流紋岩等の白色の不純物が見られる。周縁には潰れが見られる。10は下部が一部欠損。周縁部がわずかに潰れている。11は流紋岩等の白色の不純物が多く見られる。赤井川産の黒曜石と考える。周縁部に潰れは見られず、基部の作り出しもしっかりしている。12は周縁部に潰れは見られず、基部の作り出しもしっかりしている。13は周縁部に潰れが見られる。裏面には古い刺離面が残る。横長の剣片から作られている。14は周縁部に潰れが見られ、裏面に古い刺離面が残る。横長の剣片から作られる。基部に原石面が残る。

石錐（図版-34-15～18、図版-36、表題-8、図版題-31）

5点が出土している。石質は黒曜石3点、頁岩1点、メノウ質頁岩1点である。このうち4点を図示した。石質は15がメノウ質頁岩。その他は黒曜石。15は、錐の部分の摩滅は見られない。16は錐の部分の摩滅は著しい。回転錐であろう。裏面には古い刺離面が見られる。横長の剣片から作られている。17は上部を一部欠く。錐部分に摩滅が見られ、回転錐と考える。18は流紋岩等の白い不純物が見られる。肉眼観察では赤井川産のものにみえる。錐部分に摩滅がなく、錐部分に上方方向の刺離が數本見られることから突き錐と考える。

つまみ付きナイフ（図版-34-19～23、図版-36、表題-8、図版題-32）

5点が出土している。すべて図示した。石質は19が珪質頁岩、21が頁岩。その他がメノウ質頁岩である。19は表面が周縁加工、裏面は右面のみ周縁加工されているもの。20は表面を周縁加工したもの。裏面には刃こぼれ状の刺離がいくつか見られた。21は表面が全面加工のもの。裏面は左面に一部刺離が取られている。裏面には古い刺離面が残る。縦長の剣片から作られている。22は表面は全面周縁加工されたもの。裏面はつまみ部分の作り出しのみが行われている。裏面には古い刺離面が残る。縦長の剣片から作られている。23は表面は全面加工、裏面はつまみ部分の作り出しのみが行われている。裏面には主刺離面が残る。縦長の剣片から作られている。

スクレイバー（図版-34-24～29、図版-36、表題-8、図版題-32）

26点が出土している。石質は黒曜石が21点、メノウ質頁岩1点、頁岩3点、矽質頁岩1点である。6点を図示した。石質は、27がメノウ質頁岩、28が頁岩、29が矽質頁岩で、その他が黒曜石である。24は円形のもの。表面に原石面を残す。下部から左面にかけて刃部を形成している。25は上部、右面に原石面が残る。下部に刃部が形成されている。裏面右側抉られている部分に刃こぼれ状の刺離が見られる。26は表面に風化した古い刺離面が残る。原石面と同じドットで示した。表面に鉄分が斑状に付着する。流紋岩等の白い不純物がわずかに混じる。裏面には主刺離面が残る。下部に刃部が形成されている。27は下部に刃部が形成されている。裏面には主刺離面が残る。28は下部に刃部が形成されてい

図 台地部包含層の遺物

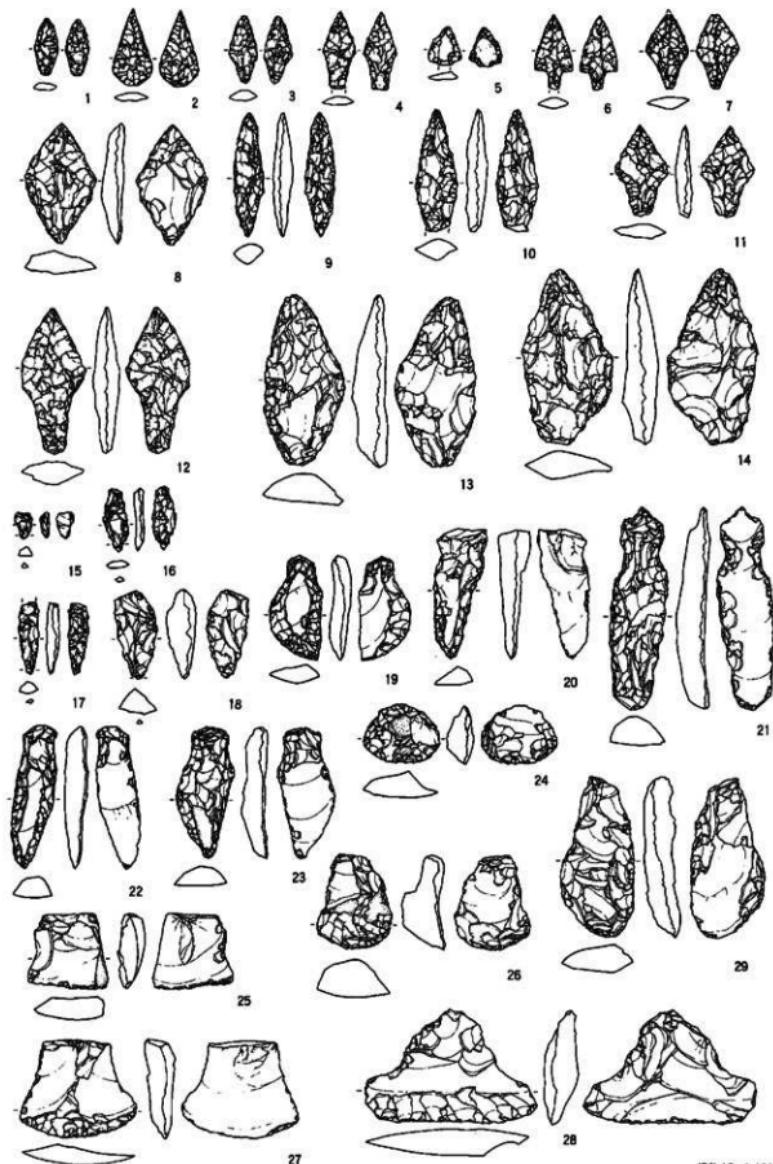
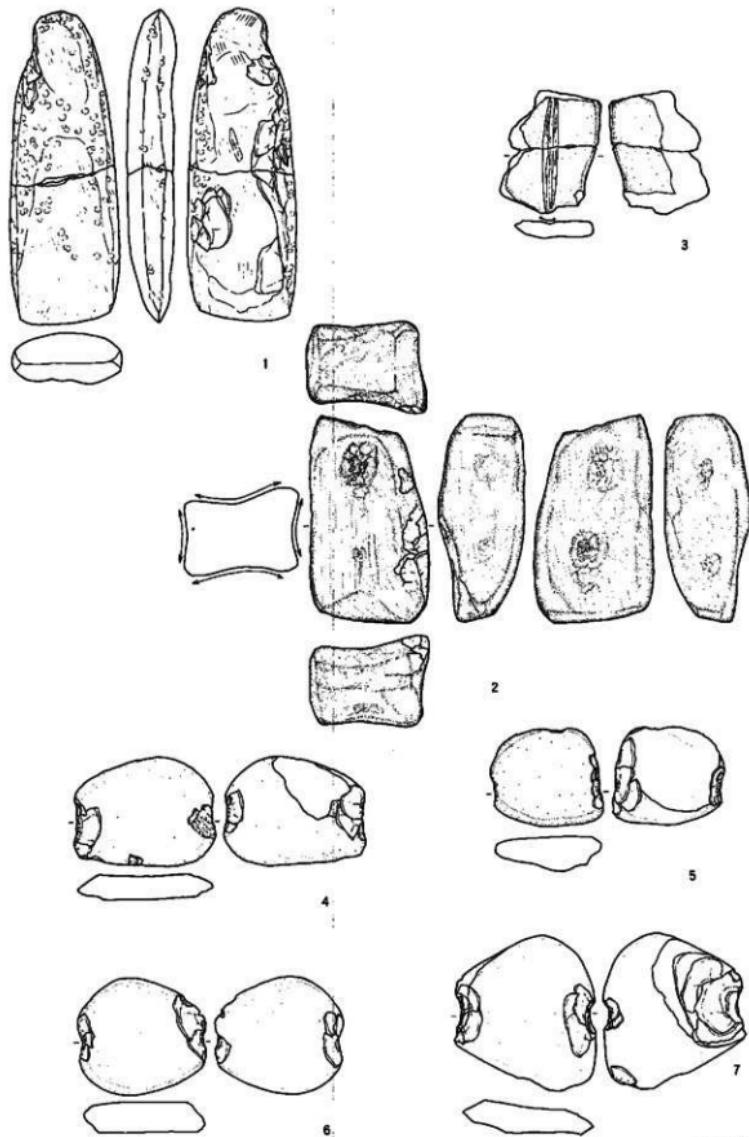


図34 II 黒層の石器(1)

遺物(S=1/2)

3 Ⅱ黒層の遺物



図版+35 Ⅱ黒層の石器(2)

遺物 (S=1/3)

る。29は下部側縁部に細かな刃部調整もしくは刃こぼれ状の剥離が見られる。裏面には主剥離面が残る。

石核（図版-37）

18点出土した。石質は黒曜石16点、頁岩1点、縞頁岩1点、メノウ質頁岩1点である。図示していない。分布図のみ掲載した。

石斧（図版-35-1、図版-37、表版-8、図版版-33）

21点が出土している。うち1点を図示した。1は石質は泥岩。

たたき石（図版-35-2、図版-37、表版-8、図版版-33）

5点が出土している。このうち1点を図示した。2はいわゆる四面砥石をたたき石に転用したものである。石質は砂岩である。凹石に転用している。

すり石（図版-37）

5点が出土している。図示していない。分布図のみ掲載した。

台石・石皿（図版-38）

2点出土している。図示していない。分布図のみ掲載した。

砥石（図版-35-3、図版-38、表版-8、図版版-33）

12点が出土している。1点図示した。3は石質は砂岩である。F 61c出土の2点が接合して1点となったものである。

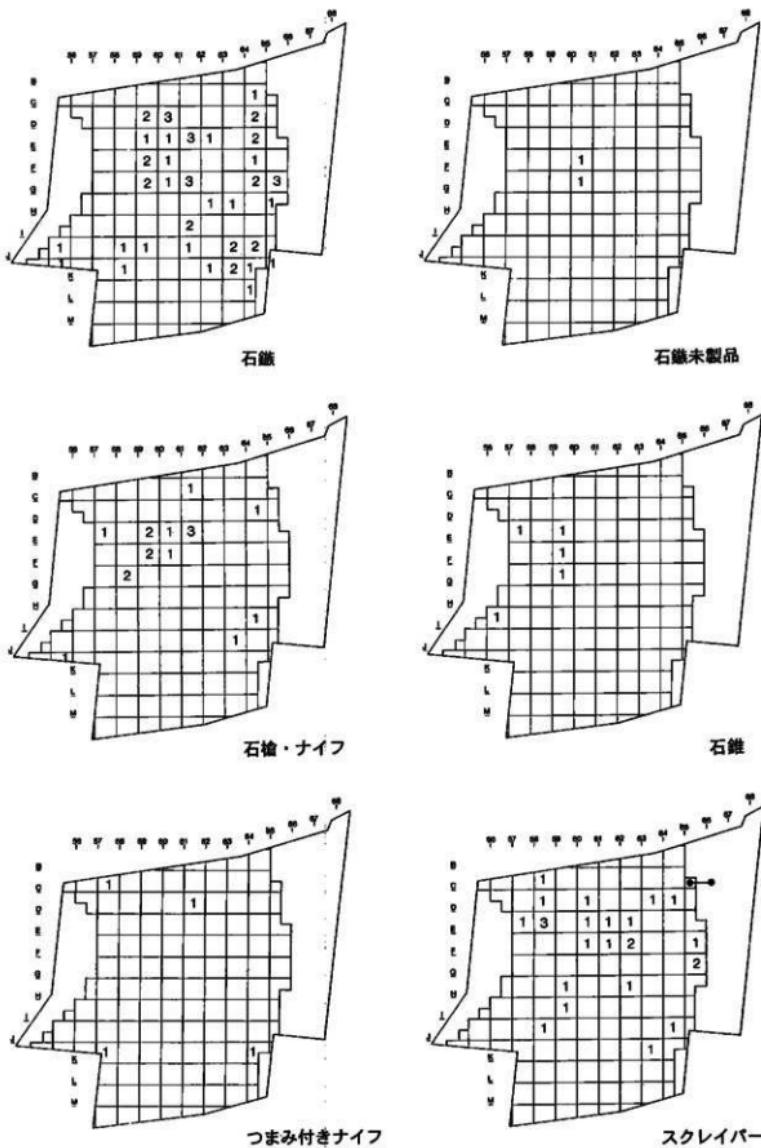
石錐（図版-35-3、図版-38、表版-8、図版版-33）

5点が出土している。このうち4点を図示した。石錐は台地部F 65区と低地部F 67区から出土した。石質は4~6が安山岩、7が泥岩。7はF 65a出土のもの2点が接合して1点になったものである。打ちき部分は、紐などをかけるときの利便を図ったようで、潰れが見られる。(倉橋)

表版-8 Ⅱ 黒層揭露石器一覧

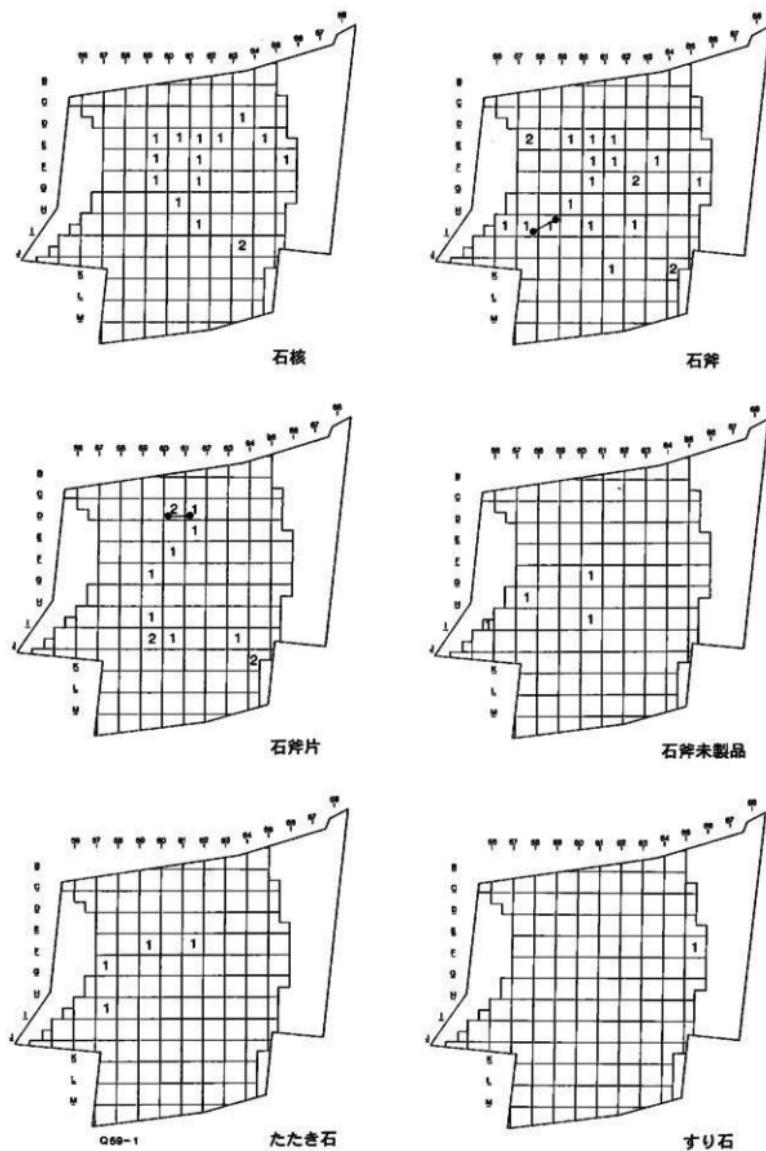
掲載番号	調査区	遺物番号	分類	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	材質	備考
W-34-1	I	59 b 4	石核	II B	21.7	8.2	2.8	0.6	黒曜石	
W-34-2	I	55 c 7	石核	II B	30.5	14.9	0.3	1.1	黒曜石	
W-34-3	F	59 b 52	石核	II B	26.4	11.0	4.2	1.1	黒曜石	
W-34-4	C	64 c 5	石核	II B	29.9	12.1	3.6	1.2	黒曜石	
W-34-5	C	60 c 11	石核	II B	14.4	13.5	2.2	0.5	黒曜石	
W-34-6	C	59 b 6	石核	II B	28.7	14.6	3.7	1.3	黒曜石	
W-34-7	F	65 a 160	石核	II B	(30.3)	17.1	4.6	1.6	黒曜石	
W-34-8	D	61 b 13	石核・ナイフ	II B	47.6	28.2	8.3	9.2	黒曜石	
W-34-9	D	59 d 15	石核・ナイフ	II B	50.1	11.3	6.1	3.6	黒曜石	
W-34-10	E	59 a 57	石核・ナイフ	II B	48.4	16.1	7.6	5.2	黒曜石	
W-34-11	F	65 a 197	石核・ナイフ	II B	36.3	21.4	6.2	5.3	黒曜石	
W-34-12	I	63 a 19	石核・ナイフ	II B	59.1	25.5	9.6	9.1	黒曜石	
W-34-13	D	61 c 5	石核・ナイフ	II B	69.5	32.2	11.4	24.0	黒曜石	
W-34-14	H	64 a 12	石核・ナイフ	II B	71.3	35.4	11.2	26.0	黒曜石	
W-34-15	D	57 b 5	石核	II B	9.8	6.5	3.8	0.3	メノウ質頁岩	
W-34-16	D	59 c 33	石核	II B	25.1	9.1	3.4	0.7	メノウ質頁岩	
W-34-17	E	59 c 53	石核	II B	28.8	7.2	4.3	0.9	黒曜石	
W-34-18	F	59 b 26	石核	II B	35.0	15.8	10.4	5.2	黒曜石	
W-34-19	J	57 d 1	つまみ付きナイフ	II B	43.1	21.1	6.9	7.2	頁岩	
W-34-20	B	57 b 3	つまみ付きナイフ	II B	52.8	20.2	12.0	8.9	メノウ質頁岩	
W-34-21	J	64 a 10	つまみ付きナイフ	II B	82.4	22.5	10.1	23.4	頁岩	
W-34-22	C	61 b 4	つまみ付きナイフ	II B	58.6	15.8	8.3	9.7	頁岩	
W-34-23	B	61 c 3	つまみ付きナイフ	断片	52.4	20.8	8.5	9.8	珪質頁岩	
W-34-24	D	60 d 8	スクレイパー	II B	31.3	23.7	10.1	6.0	黒曜石	
W-34-25	D	58 d 10	スクレイパー	II B	29.7	32.3	9.0	10.6	黒曜石	
W-34-26	E	61 d 23	スクレイパー	II B	37.9	31.7	13.9	14.2	黒曜石	
W-34-27	C	64 b 4	スクレイパー	II B	47.6	39.7	9.4	15.4	頁岩	
W-34-28	C	60 c 17	スクレイパー	II B	70.5	45.8	13.5	29.6	頁岩	
W-34-29	E	52 c 17	スクレイパー	II B	65.6	29.7	11.0	23.1	珪質頁岩	
W-35-1	H	57 c 13	石斧	II B上	95.9	33.8	8.8	51.5	頁岩	H64d I Bと接合
W-35-2	E	59 d 63	たたき石	II B	122.3	71.9	33.6	624.1	砂岩	F61c-40と接合
W-35-3	F	61 c 30	石核	II B	74.2	54.9	12.4	65.9	砂岩	F61c-40と接合
W-35-4	F	65 a 203	石核	II B	66.4	85.3	17.6	121.8	安山岩	
W-35-5	F	65 a 204	石核	II B	59.3	66.2	20.3	111.2	安山岩	
W-35-6	F	65 a 205	石核	II B	72.7	79.1	19.6	170.8	安山岩	
W-35-7	F	65 a 206	石核	II B	88.6	86.5	17.4	186.7	安山岩	F65a-207と接合

3 黒層の遺物

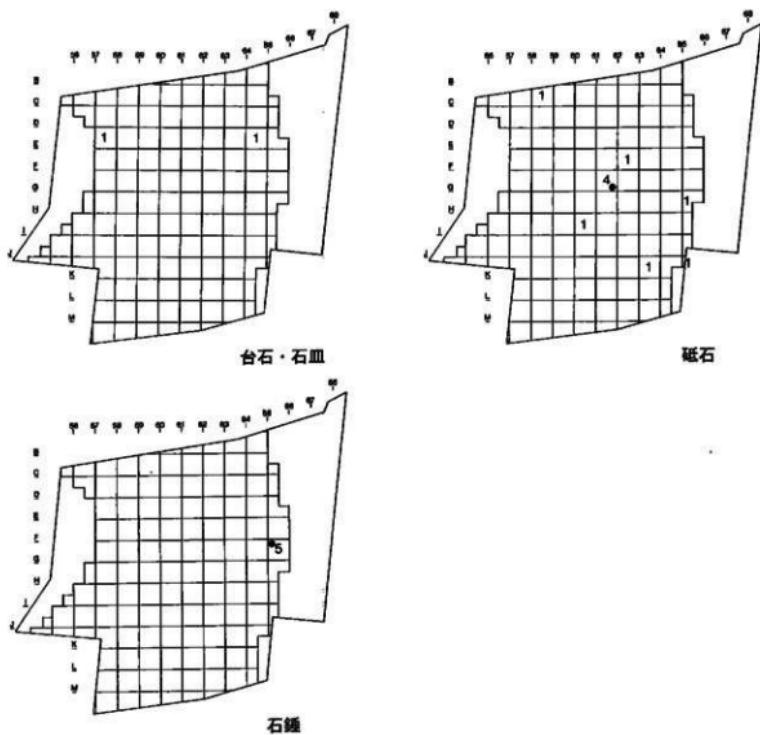


図版-36 石器分布図(4)

図 1 台地部包含層の遺物



図版-37 石器分布図(5)



図版-38 石器分布図(6)

IX 自然科学的分析

1. 化石林形成ころの古植生について

北海道開拓記念館 山田悟郎

1. 試料と試料の処理方法

1) 試料

花粉分析に使用した試料はユカンボシ C 15遺跡の発掘調査で、低湿部に面した F - 23区付近を深掘りした際に、恵庭 a 軽石堆積物 (En-a) やその下部の外来疊混じりの火山噴出物再堆積層下位で検出された、化石林を埋積した泥炭および有機成分に富んだ凝灰質粘土である。層序は、下位から灰色粘土 (13cm)、上部が有機成分に富んだ、火山噴出物が挟在した灰褐色凝灰質粘土 (20cm)、泥炭 (6cm)、有機成分に富んだ、火山噴出物が挟在した灰褐色凝灰質粘土 (10cm)、泥炭 (4cm)、外来疊混じりの火山噴出物再堆積物 (75cm)、En-a (70cm)、En-a ローム質粘土で、その上位は繩文時代の遺物包含層である腐植土が堆積する。花粉分析用試料は泥炭と下位の凝灰質粘土までから 7 点採取した。化石林は火山噴出物の再堆積層下部から下位の凝灰質粘土との間で検出され、倒木の近くには根株があることから、これらの樹木は流木ではなく現地性のものと考えることができる。

2) 試料の処理

採取した試料のなかで泥炭については 5g を、凝灰質粘土については 20g を 50cc 遠沈管にとり、下記の順に化学・物理処理を行いプレパラートを作成した。

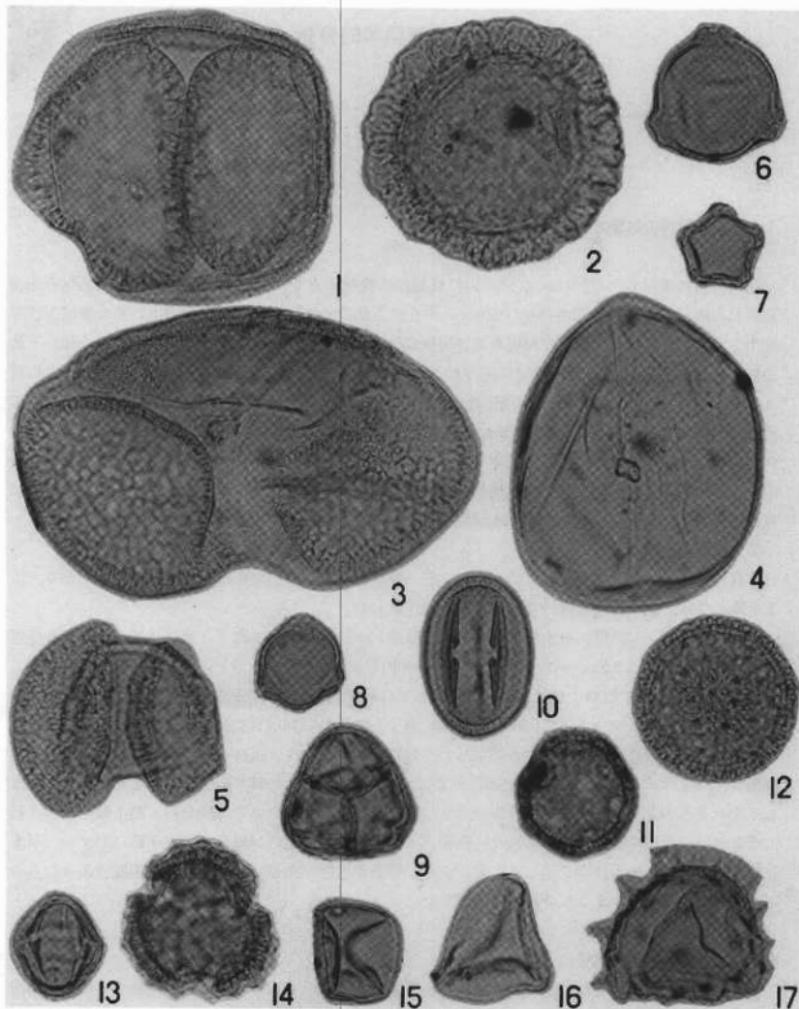
アルカリ処理 (24時間) → 水洗 (遠心分離で 5 回) → 比重分離 → 水洗 (3 回) → フッ化水素酸処理 (24時間) → 水洗 (3 回) → アセトトリリス処理 → 水洗 (3 回)

検鏡は通常 400 倍で行い、属・科の同定に際しては 1000 倍で行った。同定・計数は、樹木花粉を 200 個以上数えるまでにレンズ下に出現した花粉・胞子を無作為に同定して計数した。各試料から検出された花粉・胞子の数は図 IX-2 の表に示したとおりである。また、主な花粉・胞子の出現率の消長を花粉ダイヤグラムにして表示した (図 IX-2)。表示にあたって、樹木花粉は樹木花粉総数を基準としてそれぞれの花粉の出現率を百分率で示し、草本花粉・胞子については総花粉・胞子数を基準としてそれぞれの出現率を百分率で示した。花粉ダイヤグラムの末尾には総花粉・胞子数に対する、草本花粉・胞子総数の出現比率を示してある。なお、特徴や形態が類似していて区分が困難であったものについては - (ハイフン) で結んで表示した。

2. 検出された花粉・胞子

7 点の試料から樹木花粉 11 属 1 科、草本花粉 3 属 16 科、胞子 2 属 2 科、形態分類胞子 2 種類が検出された。樹木花粉で主となるのは針葉樹の *Picea* (トウヒ属: エゾマツ・アカエゾマツ)、*Larix* (カラマツ属: グイマツ) で、*Abies* (モミ属: トドマツ)、*Pinus* (マツ属: ハイマツ)、*Tsuga* (ツガ属: ツガ・コメツガ) などの針葉樹や、*Alnus* (ハンノキ属: ミヤマハンノキ・ハンノキほか)、*Betula* (カバノキ属: ダケカンバ・ウダイカンバほか) などの落葉広葉樹と *Ericaceae* (ツツジ科: コケモモほか)、*Myrica* (ヤマモモ属: ヤチヤナギ) などの灌木を伴った構成を示す。なお、*Tsuga* は北海道に自生したものではなく、季節風等によって本州から運ばれたものと考えられる。

1. 化石林形成ころの古植物について



1. モミ属 2. ツガ属 3. トウヒ属 4. カラマツ属 5. マツ属 6. カバノキ属
7. ハンノキ属 8. ヤマモモ属 9. ツツジ属 10. タデ科 11. ナデシコ科
12. ハナシノブ科 13. バラ科 14. キク亜科 15. イネ科 16. カヤツリグサ科
17. コケスギラン

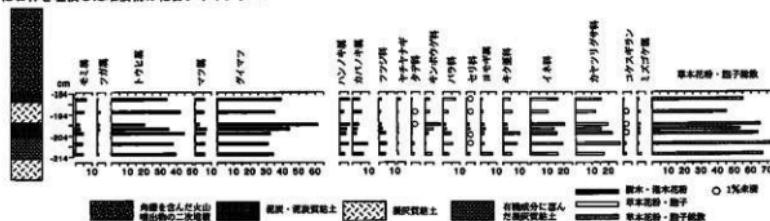
(最下層のプレパラートで撮影、 $\times 1200$)

図IX-1 検出された花粉・胞子の顕微鏡写真

化石林を埋積した堆積物中から検出された花粉・胞子

			泥炭		泥灰質粘土		泥灰質粘土	
			1	2	3	1	2	
<i>Abies</i>	モミ属	14	14	6	8	12	11	12
<i>Tsuga</i>	ツガ属	2	6	4	4	2	2	3
<i>Picea</i>	トウヒ属	71	111	45	86	104	96	94
<i>Pinus</i>	マツ属	13	16	7	18	16	16	15
<i>Larix</i>	カラマツ属	81	93	137	108	76	79	81
<i>Salix</i>	ヤナギ属	0	0	0	0	0	1	1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	13	7	14	11	9	14	8
<i>Betula</i>	カバノキ属	9	15	9	8	6	24	16
<i>Ulmus</i>	ニレ属	0	0	1	0	0	0	0
<i>Ericaceae</i>	ツツジ科	4	4	4	6	11	13	11
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属	5	3	2	2	2	2	2
<i>Polygonaceae</i>	タデ科	3	3	2	6	6	15	12
<i>Chenopodiaceae</i>	アカザ科	0	0	0	0	0	0	1
<i>Caryophyllaceae</i>	ナデシコ科	0	3	1	0	2	1	1
<i>Ranunculaceae</i>	キンポウゲ科	15	16	58	29	13	8	32
<i>Cruciferae</i>	アブラナ科	0	1	2	1	1	1	1
<i>Saxifragaceae</i>	ユキノシタ科	1	1	2	2	0	2	1
<i>Rosaceae</i>	バラ科	35	14	11	11	31	48	26
<i>Geraniaceae</i>	フウロウソウ科	5	0	1	0	0	0	0
<i>Umbelliferae</i>	セリ科	2	3	12	11	3	2	14
<i>Gentianaceae</i>	リンドウ科	0	1	3	3	0	1	4
<i>Polemoniaceae</i>	ハナシノブ科	0	1	2	3	2	2	3
<i>Campanulaceae</i>	キキョウ科	1	2	0	0	0	0	0
<i>Menyanthes</i>	ミツガシワ属	0	0	0	0	1	0	0
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	6	8	13	16	14	18	52
<i>Carduoideae</i>	キク亜科	21	28	18	17	64	71	58
<i>Gramineae</i>	イネ科	76	52	150	74	102	163	114
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科	71	59	124	81	142	234	122
<i>Liliaceae</i>	ユリ科	0	2	0	1	1	0	1
<i>Lysichiton</i>	ミズバショウ属	0	0	0	0	0	0	1
<i>Equisetaceae</i>	トクサ科	1	1	2	1	1	1	1
<i>Lycopodiaceae</i>	ヒカゲノカズラ科	2	2	3	2	2	6	2
<i>Selaginella</i>	コケスギラン属	3	2	3	6	4	14	16
Monocolite type spore	单溝型胞子	2	1	2	0	0	5	3
Trilete type spore	三溝型胞子	1	2	1	1	1	1	1
<i>Sphagnum</i>	ミズゴケ属	6	11	15	9	12	13	19
合 計(個)		461	482	634	525	640	884	708

化石林を埋積した堆積物の花粉ダイヤグラム



図IX-2 検出された花粉・胞子

1. 化石林形成ころの古植生について

草本花粉・胞子では Gramineae (イネ科)、Cyperaceae (カヤツリグサ科) が主となり、Polygonaceae (タデ科)、Ranunculaceae (キンポウゲ科)、Rosaceae (バラ科)、Umbelliferae (セリ科)、Artemisia (ヨモギ属)、Carduoideae (キク亜科) を伴った構成である。また、数は少ないが *Sellaginella* もほぼ連続して出現する。

上位から 2 枚目の泥炭で一時に *Larix* が急増する以外には花粉構成に大きな変化はみられず、優勢種の交代もみられず、*Larix* と *Picea* が主となった亜寒帯性針葉樹の森林が存在していたものと考えられる。*Myrica* や Ericaceae の出現率は低く、林床下に分布したと考えられる湿原はそれほど発達したものではなかったと考えられる。同様に、やはり高層湿原に分布する *Sphagnum* の出現率が低いことも、湿原の発達状態がそれほどでもないことを示唆している。注目したいのは、極地や高山地帯に多く分布する *Sellaginella* (コケスギラン) が、数は少ないもののほぼ連続して検出された。亜寒帯性針葉樹の *Larix* や *Picea* が寡占し、*Sellaginella* が検出されたことから、化石林が検出された泥炭や凝灰質粘土が堆積した頃には極地に近い気候環境であったと推定される。

3. 化石林形成ころの古植生について

ユカンボシ C 15 遺跡近くには、千石でほとんどの姿が残されていないがかつてはオサツ沼が存在していた。遺跡がのる台地はオサツ沼に注ぐユカンボシ川に臨んだ河岸段丘である。松下ほか(1972)によると、千歳市から恵庭市にかけた地域と馬追丘陵の間には、表層から -30 ~ -40 m の深度まで支笏火山噴出物が堆積しており、遺跡が分布する河岸段丘の形成は支笏火山噴出物堆積後のことで、上位にのる火山噴出物の再堆積層や En-a 軽石層が整合であることから、化石林の形成はカルデラを形成した支笏火山噴火後から En-a 軽石噴出前となる。カルデラを形成した支笏火山噴火は、苦小牧市美々の化石林の炭化物の ¹⁴C 年代測定値をもとに 32,200 年前頃とされてきたが (石狩低地帯研究会、1965)、最近になって支笏降下軽石 1 (Spfa 1) で埋積された炭化物から $42,000 \pm 1,800$ y. B. P. (I-17521) という年代値が報告され (柳田、1994)、支笏火山噴出物の噴出年代の検討が迫られている。En-a の噴出年代の下限は、松沢・小坂 (1972) によって En-a 軽石層下位のローム質粘土から採取した炭化物の年代である $21,100 \pm 700$ y. B. P. (Gak-3263) であり、上限は、柏原 (1970) によった支笏火山噴出物の二次堆積層の年代である $15,000 \pm 400$ y. B. P. (Gak-2370) である。したがって、その噴出年代は $21,100$ 年前から $15,000$ 年前の間に求められる。したがって、化石林は $42,000$ 年前から $15,000$ 年前の間に形成されたこととなる。ところで、花粉分析の結果では亜寒帯性針葉樹の *Picea* と *Larix* が主となり、*Abies*、*Pinus* や広葉樹の *Alnus*、*Betula* をわずかに交えた亜寒帯性針葉樹林が存在したことが確認されている。また、低湿地に分布する *Myrica* や Ericaceae もわずかに出現するほか、高層湿原を形成する *Sphagnum* もわずかではあるが出現することから亜寒帯性針葉樹林の林床には高層湿原が分布していたと考えることができる。しかし、その規模は広いものではなく、亜寒帯林の周辺には Gramineae、Cyperaceae、Polygonaceae、Ranunculaceae、Rosaceae などからなる草原が広がるとともに、極地や高山帯に分布する *Sellaginella* (コケスギラン) も分布した。現地調査の結果では、化石林を構成した樹木の大部分は、特徴的な端子が付着した枝と穂果から、現在の北海道には自生しないグイマツ (*Larix gmelinii* GORDON) であることが判明している。グイマツは最終氷期の初めには陸橋となった宗谷海峡を経由して北海道に再進出し、完新世はじめまで湿原等に分布し $8,000$ 年前頃には北海道から姿を消した亜寒帯性針葉樹である。泥炭等に含まれている植物遺体の詳細な調査はまだで、*Picea* の花粉も多く検出されていることから細かな遺体を調べると穂果の鱗片や葉片などが発見される可能性がある。最終氷期の石狩低地帯で *Larix* や

Picea が主となった花粉構成を示すのは、40,000年前から12,000年前にかけた時で、特に25,000年前から12,000年前にかけた時期で顕著である（五十嵐・熊野、1981）。今回のように多量にグイマツの遺体が検出されたものとしては、樹幹や球果・小枝・葉が多量に出土した北広島市音江別川流域での $22,700 \pm 1000$ (Gak-2216) や（矢野・藤田、1970）、樹幹・枝・葉などが多量に出土した音江別川流域の他地点での $15,000 \pm 400$ y. B. P. (Gak-2370) などがある（柏原、1970）。このように、*Larix* の遺体が確認されたり *Larix* や *Picea* が主となった花粉構成を示すのは23,000年前から15,000年前頃で、ユカンボシ C 15 遺跡の縄文期の遺物包含層下部を構成する台地の形成期頃に分布したグイマツが主となった化石林の年代もこの範囲の中に収まるものと考えられる。当時は、現在よりも年平均気温で 6°C ほど低かったと予想されている（矢野、1987）。

ところで、千歳市柏台 1 遺跡では En-a 軽石層下位のローム質粘土中から、木質部表面が褐鉄鉱で置換され内部が侵食された木の根株と根の間から旧石器が発見され話題を呼んでいる。柏台 1 遺跡では泥炭等の低湿地堆積物はみられないが、火山噴出物の堆積状況からはユカンボシ C 15 遺跡で発見された化石林とそれほど年代がかけ離れた時期のものではないと考えられる。化石林の年代測定と旧石器から推定される年代を併せ考えることによって、当時の森林相とそこに生活した人々の関係が明らかになるものと考えられる。

引用・参考文献

- 五十嵐八枝子・熊野純男 (1981) 「北海道における最終氷期の植生変遷」『第四紀研究』第20巻第3号, p. 129-142
- 石狩低地帯研究会 (1965) 「石狩平野における支笏降下軽石堆積物の ^{14}C 年代」『地球科学』81
- 柏原信 (1970) 「野幌丘陵南部における低位段丘堆積物の ^{14}C 年代」『地球科学』24巻4号, p. 149-150
- 松下勝秀・藤田郁男・小山内熙 (1972) 「札幌・苫小牧低地帯およびその周辺山地の形成過程」『日本海岸平野』地質学論集第7号, p. 13-26, 日本地質学会
- 松沢逸巳・小坂利幸 (1972) 「恵庭 b 降下軽石堆積物直上の炭化細片の ^{14}C 年代」『地球科学』26巻2号, p. 84-85
- 柳田誠 (1994) 「支笏降下軽石 1 (Spfa-1) の年代資料」『第四紀研究』Vol. 33 No. 3, p. 205-207
- 矢野牧夫 (1987) 「石狩低地帯の最終氷期におけるグイマツの出現期」『北海道開拓記念館研究年報』第15号, p. 1-10
- 矢野牧夫・藤田郁男 (1970) 「石狩平野における含グイマツ泥炭層の ^{14}C 年代」『地球科学』第24巻3号, p. 111-112

2. ユカンボシ C 15遺跡の珪藻・花粉化石と植物珪酸体より見た環境変遷(1)

2. ユカンボシ C 15遺跡の珪藻・花粉化石と植物珪酸体より見た環境変遷(1)

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

ユカンボシ C 15遺跡は、石狩低地東縁の湿地帯に位置し、オサツ沼とユカンボシ川などの中小河川が形成した低湿地と微高地に立地している。これまでの調査により、據文化期以降の木製品を中心とする遺物が豊富に出土しており、当時の人々の生活や交易を知る上で重要な資料が得られている。

今回、遺跡を取りまく環境の変遷や農耕に関する情報を得るために、低地部の堆積物を対象として自然科学分析調査を実施することとなった。このうち、堆積環境の変遷については珪藻分析を、古植生の変遷については花粉分析と植物珪酸体分析、住居内の灰の種類を明らかにするために灰像分析を行うことにした。今回、低湿地部の埋積過程および周辺植生に関して若干の資料が得られたので、その報告を行う。

1. 層序と試料

本遺跡の基本層序は、周辺の低湿性遺跡と類似した堆積物が認められているため、これまでの調査所見が踏襲されている。すなわち、0 B 層・Ⅰ B 1～3 層が植物繊維に富んだ泥炭層、Ⅰ B 4～5 層・Ⅱ B 層が砂層と粘土層の互層とされ、またⅠ B 3 層中に10世紀に降灰したとされる白頭山一苦小牧火山灰（B-Tm）が部分的に認められるとしている。これまでの発掘調査により、Ⅰ B 5 層・Ⅱ B 層が編文時代、Ⅰ B 4 層が続編文時代、Ⅰ B 3 層が據文化期、Ⅰ B 1～2 層および 0 B 層がアイヌ文化期の遺物包含層とされている。

今回の調査では、1 地区の G-56 北、低湿地・東 Loc. 1、X-3 周溝の 3 地点が対象とされた。G-56 北と低湿地東 Loc. 1 が低湿地部にあたり、X-3 周溝が微高地部に構築された遺構の埋積物である。以下、各地点ごとに層序と分析試料を述べる（表Ⅳ-1）。

G-56 北では、礫・砂層の上位にⅠ B 5 層～Ⅰ B 1 層が認められている。本地点では、珪藻分析用試料 24 点（試料番号 25～48）、花粉分析用試料 24 点（試料番号 34～57）が採取された。この中から、層相などを考慮して、珪藻分析が 12 点、花粉分析・植物珪酸体分析が 9 点が選択された（表Ⅳ-1）。

低湿地・東 Loc. 1 では、砂層の上位に En-a 層・Ⅱ B 層・Ⅰ B 層・0 B（あるいはⅠ B 上）層が見られる。本地点では、珪藻分析試料 26 点（試料番号 69～94）、花粉分析用試料 26 点（試料番号 109～134）が採取された。分析は、珪藻分析が 17 点、花粉分析・植物珪酸体分析が 17 点実施した（表Ⅳ-1）。

X-3 周溝では、周溝埋積物から 3 点の土壤試料（試料番号 2(4)上・中・下）が採取された。この内の試料番号 2(4)上について花粉・植物珪酸体分析を実施した。

2. 分析方法

(1) 硅藻分析

試料を湿重で約 7 g 秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージで任意の視野を走査し珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する。同定は、K. Krammer and Lange-Bertalot (1986・1988・

表IX-1 微化石分析試料

採取地点	試料名	花粉・植物珪酸体分析		珪藻分析	
		花粉分析 試料番号	分析試料	珪藻分析	
				試料番号	分析試料
G-56北	I B-1	1/4	34	●	25
	I B-1	2/4	35		26
	I B-1	3/4	36	●	27
	I B-1	4/4	37		28
	I B-2	1/3	38		29
	I B-2	2/3	39	●	30
	I B-2	3/3	40		31
	I B-3上	1/1	41	●	36
	I B-3下	1/4	42		32
	I B-3下	2/4	43	●	33
	I B-3下	3/4	44		34
	I B-3下	4/4	45	●	35
	I B-4	1/5	46		37
	I B-4	2/5	47	●	38
	I B-4	3/5	48		39
	I B-4	4/5	49	●	40
	I B-4	5/5	50		41
	I B-5	1/1	51	●	42
	砂&泥層	1/1	52		43
	砂層	1/4	53		44
	砂層	2/4	54		45
	砂層	3/4	55		46
	砂層	4/4	56		47
	泥層	1/1	57		48
低湿地 東Loc. I	OB or IB上	サンプル#01	109		69
	OB or IB上	サンプル#02	110	●	70
	OB～IB1 or IB上	サンプル#03	111		71
	I B1	サンプル#04	112	●	72
	I B1～I B2	サンプル#05	113		73
	I B2	サンプル#06	114	●	74
	I B2～I B2下	サンプル#07	115		75
	I B2下～I B3上	サンプル#08	116	●	76
	I B3中（B-Tm含む）	サンプル#09	117	●	77
	I B3中	サンプル#10	118	●	78
	I B3下上	サンプル#11	119	●	79
	I B3下～I B4	サンプル#12	120		80
	I B4～I B4白粘土	サンプル#13	121	●	81
	I B4白粘土～I B5上	サンプル#14	122		82
	I B5中	サンプル#15	123	●	83
	I B5下	サンプル#16	124		84
	Ta-C1とC2の間層	サンプル#17	125	●	85
	II B黒上	サンプル#18	126		86
	II B黒中	サンプル#19	127	●	87
	II B黒下～II B白粘土上	サンプル#20	128	●	88
	II B白粘土下～II B黒上	サンプル#21	129		89
	II B黒下～II B褐色上	サンプル#22	130	●	90
	II B褐色中	サンプル#23	131	●	91
	II B褐色下～II B灰褐色上	サンプル#24	132		92
	II B灰褐色中	サンプル#25	133	●	93
	II B灰褐色下	サンプル#26	134	●	94
X-3周溝 サンプル	2(4)上		106	●	
	2(4)中		107		
	2(4)下		108		

2. ユカンボシ C 15遺跡の珪藻・花粉化石と植物珪酸体より見た環境変遷(1)

1991a, b)、K. Krammer (1992)、Reichardt, E. (1995)、Lange-Bertalot, H. and D. Metzeltin (1996)、Lange-Bertalot, H., K. Kulbs, T. Lauser, M. Noerpel-Schempp and M. Willmann (1996)、Metzeltin, D. and A. Witkowski (1996)などを用いる。

同定結果は、海水生種、海水～汽水生種、淡水生種順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数が100個体以上の試料について、産出率2.0%以上の主要な種類について、産出グラフを作成する。堆積環境の解析にあたっては、安藤 (1990)、Asai, K. and Watanabe, T. (1995)、伊藤・堀内 (1991) の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

花粉・胞子化石は、湿重約5～10gの試料について水酸化カリウム処理、篩別(250μm)、重液分離(臭化亜鉛、比重2.3)、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理(無水酢酸：濃硫酸=9:1)の順に物理・化学的な処理を施して分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の層位的分布図として表示する。出現率は、木本花粉が木本花粉総数よりヤナギ属を除いた数を、草本花粉・シダ類胞子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基準とした百分率で算出する。また、図表中で複数の種類をハイフン(-)で結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

(3) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250kHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出される種類とその検出個数の一覧表で示す。また、検出された種類の出現率を百分率で算出し、植物珪酸体群集の層位的分布図を作成する。各種の出現率は、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体ともそれぞれの総数を基準とした百分率で算出する。

3. 化石の産状

(1) 硅藻化石

結果を表IX-2～7、図IX-3・IX-4に示す。

〈1地区 G-56北〉

全ての試料から淡水生種が豊富に産出する。完形殻の出現率は、80%前後と高い。珪藻化石群集は、ほぼ層相変化と対応して変化する。

試料番号48～44は、淡水生種の生態性(塩分・pH・流水に対する適応能)の特徴は、多少の塩分(類)であれば耐えられる貧塩～不定性種、pH 7.0以上のアルカリ性水域を最適とする真・好アルカリ性種、川などの流水域に普通な真・好流水性種が優占あるいは多産する。主な産出種は、好流水

表 IX—2 植物分析结果(1)

种名	属名	生境地		海拔	C ₅₅₂										Euc. ₁															
		灌木	乔木		35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53							
<i>Sympetrum lucetiae</i> Kerteszi	Oligoneuriella	al.11	l-ph. L, S		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							
<i>Pagliaria beweria</i> Gruner	Oligoneuriella	al.11	l-ph. U		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							
<i>Mercilia capitata</i> Ehrenberg	Oligoneuriella	al.11	r-ph. U		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							
<i>Mercilia capitata</i> var. <i>hungarica</i> (Grun.) Boos	Oligoneuriella	al.11	r-ph. U		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							
<i>Mercilia gressitti</i> Reichenb.	Oligoneuriella	al.11	ind.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							
<i>Mercilia integrata</i> (T. Smith) Raffts	Oligoneuriella	al.11	unk.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							
<i>Mercilia pusilla</i> V. Smith	Oligoneuriella	al.11	ind.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							
<i>Nitschka frostiana</i> (Kuntze) Orman	Rhopalodia	al.11	ind.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Bir.) W. M. Waler	Rhopalodia	al.11	ind.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							
<i>Achanthes hispida</i> Gruner	Achanthes	al.11	unk.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							
<i>Achanthes levii</i> Gruner	Achanthes	al.11	l-ph. T		1	2	1	1	1	11	3	8	4	1	1	5	1	1	3	2	-	-	2	5						
<i>Achanthes elongata</i> Lange-2.	Achanthes	al.11	unk.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
<i>Achanthes elongata</i> Gruner	Achanthes	al.11	ind.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
<i>Achanthes fragilioroides</i> Petereon	Achanthes	al.11	unk.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
<i>Achanthes frigida</i> Burret	Achanthes	al.11	unk.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
<i>Achanthes grana</i> Schleicher	Achanthes	al.11	r-ph. U		14	4	7	6	4	1	13	5	15	13	16	25	6	11	9	5	4	7	4	5	2	1	6	6		
<i>Achanthes laevicollis</i> (Kuntze) Orman	Achanthes	al.11	l-ph. T		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Achanthes laevicollis</i> ver. <i>spiculata</i> Petz.	Achanthes	al.11	r-ph. U		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Achanthes laevicollis</i> ver. <i>elliptica</i> Cleve	Achanthes	al.11	r-ph. L, T		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Achanthes lateristrata</i> Burret	Achanthes	al.11	ind. T		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2		
<i>Achanthes marginata</i> Gruner	Achanthes	al.11	ind. T		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>Achanthes minorista</i> Kerteszi	Achanthes	al.11	ind. U		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>Achanthes rotundata</i> Krasnaya	Achanthes	al.11	l-ph. T		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>Achanthes ontogenia</i> Stepp.	Achanthes	al.11	l-ph. U		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>Achanthes oestripii</i> (C. C.) Burret	Achanthes	al.11	l-ph. U		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>Achanthes paragalli</i> Brun & Bertrand	Achanthes	al.11	l-ph. U		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>Achanthes rectifolia</i> Leichter	Achanthes	al.11	unk.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>Achanthes rectitrapa</i> Burret	Achanthes	al.11	r-ph. U		2	2	11	2	3	15	3	10	21	20	31	2	3	6	5	1	1	2	4	-	-	-	-	21		
<i>Achanthes rostrata</i> Burret	Achanthes	al.11	unk. T		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>Achanthes schlaetettii</i> Burret	Achanthes	al.11	unk. U		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>Achanthes sp.</i>	Achanthes	al.11	unk.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>Ambora affinis</i> Kerteszi	Ambora	al.11	unk.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>Ampelodesma polystachya</i> (Kuntze) Orman	Ampelodesma	al.11	unk.		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
<i>Axonocarpus vitrea</i> (Griseb.) Miquelianus	Axonocarpus	al.11	l-ph. U		7	1	6	9	1	1	3	-	3	7	11	15	3	1	4	7	5	2	-	-	-	-	12	5		
<i>Axonocarpus vitrea</i> (Griseb.) Miquelianus	Axonocarpus	al.11	l-ph. U		3	4	1	-	-	1	3	-	-	2	6	1	-	7	22	1	-	-	-	-	-	-	-	7	1	
<i>Axonocarpus vitrea</i> (Griseb.) Miquelianus	Axonocarpus	al.11	l-ph. U		1	21	53	64	10	-	-	-	-	1	2	3	3	8	7	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Axonocarpus vitrea</i> (Griseb.) Miquelianus	Axonocarpus	al.11	l-ph. U		1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Axonocarpus vitrea</i> (Griseb.) Miquelianus	Axonocarpus	al.11	l-ph. U		8	61	5	15	14	12	5	5	6	3	1	12	34	9	4	22	35	17	13	15	23	5	3	-	3	2

2. ユカンボシ C 15遺跡の珪藻・花粉化石と植物硅酸体より見た環境変遷(1)

表IX-3 珊瑚分析結果(2)

表 IX-4 硅藻分析結果(3)

2. ユカンボシ C 15遺跡の珪藻・花粉化石と植物珪藻体より見た環境変遷(1)

表IX-5 硅藻分析结果(4)

表 IX-6 珪藻分析結果(5)

種 名	屬 名	分類 學 名	分布地點	G-562c												總計	Loc.
				76	78	80	86	88	91	42	44	46	48	70	72		
<i>Navicula radiosa</i> fo. <i>nipponica</i> Shirokane			Ophi-ind. a-11 ind. 7							1	1	1	1	1	1	1	1
<i>Navicula amphichaeta</i> Kuetzing			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Navicula amphibia</i> Bock			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Navicula schassanii</i> Bartsch			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Navicula ferruginensis</i> Grunow			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Navicula exavata</i> Bartsch			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Navicula temioloides</i> Bartsch			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Navicula venerabilis</i> Rahn & Böhm			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Navicula ventralis</i> Krebs			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Navicula ann.</i>			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Medionia affinis</i> var. <i>turgiceps</i> (Grun.) Cleve			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Medionia alpina</i> Bartsch			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Medionia bisinuata</i> Clever & Cleve			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Medionia dubia</i> (Cleve) Cleve			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Nitzschia aciculata</i> Lange			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Nitzschia archibaldi</i> Lange-Berntal			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Nitzschia horridissima</i> Grunow			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Nitzschia dissipata</i> (Kutz.) Sacc.			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Nitzschia terrestris</i> (Perr.) Bartsch			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Orthoceras roccosum</i> (Balt.) 20 Years			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria acerosaria</i> V. Seith			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria borealis</i> Ehrenberg			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria borealis</i> var. <i>scolaris</i> (Ehr.) Schencková			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria bivalvis</i> (Grun.) Cleve			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria brevirostris</i> Cleve			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria divergensissima</i> (Grun.) Cleve			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria eoxanthina</i> var. <i>elisaeana</i> Kraemer			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria gibba</i> Ehrenberg			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria gibba</i> var. <i>linearis</i> Bartsch			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria latipena</i> (Kutz.) Cleve			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria latiloba</i> (Grun.) Cleve			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria latistriata</i> (Grun.) Cleve			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria laevigata</i> (Grun.) Cleve			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria laevigata</i> (Grun.) Cleve			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria lacustris</i> Bartsch			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria lindii</i> Bartsch			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria major</i> Bartsch			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria nana</i> (Grun.) Smith			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria nobilis</i> Ehrenberg			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria notata</i> Ehrenberg			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria oblonga</i> Bartsch			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria plicatula</i> Ehrenberg			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria robusta</i> Bartsch			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria schenckiana</i> Bartsch			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria silvatica</i> Petersen			Ophi-ind. a-11 ind. 7														
<i>Planaria stroblospora</i> (Grun.) Cleve			Ophi-ind. a-11 ind. 7														

表IX-7 硅藻分析結果(6)

THE JOURNAL OF CLIMATE VOL. 17, NO. 10, OCTOBER 2004

pH:水素イオン濃度に対する適応性
I.R.:導電率に対する適応性
C.R.:流水に対する適応性

1996-1997 學年
中大學生會

卷之三

l-ph:禁止水生植物
ai-1:好76%接種

ind : 無不定性項
ind : 液水不完全

卷之三

卷之三

卷之三

unk: 混沌不明確 **unit**: 流冰不明確

卷之三

卷之三

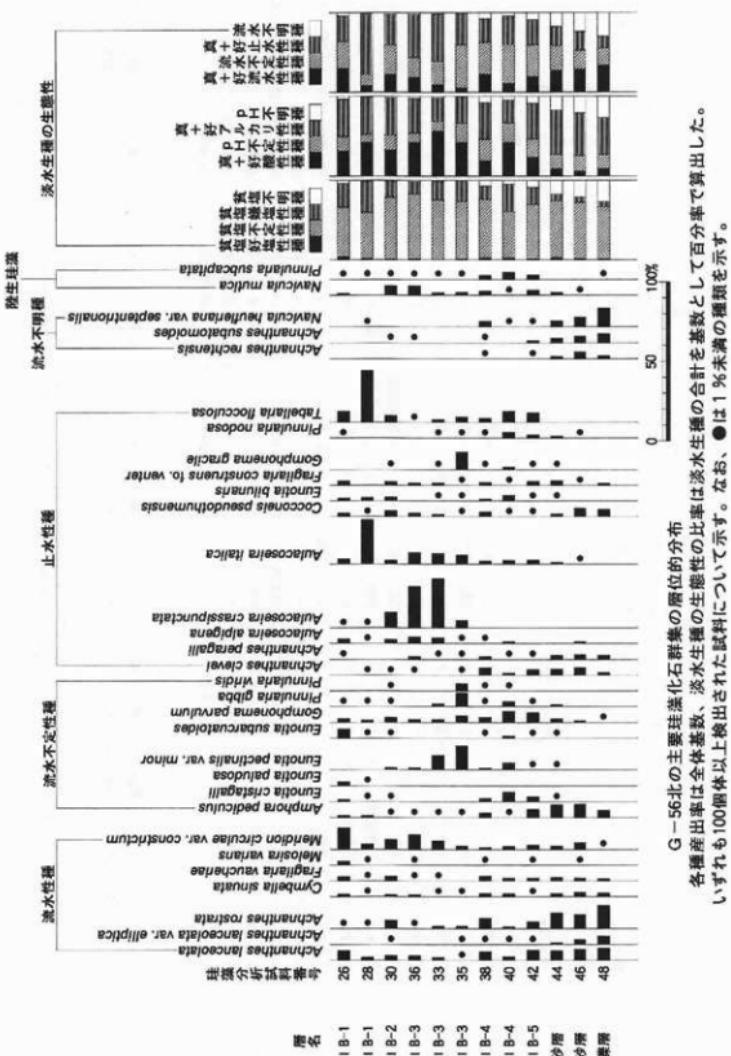
卷之三

Y:標記稻米產地指標 0:否 1:是地村有生稻
P:高麗起原指標 (以上是安農, 1990)

日本水性漆
塗料の現状と将来 [1] 岩瀬一郎

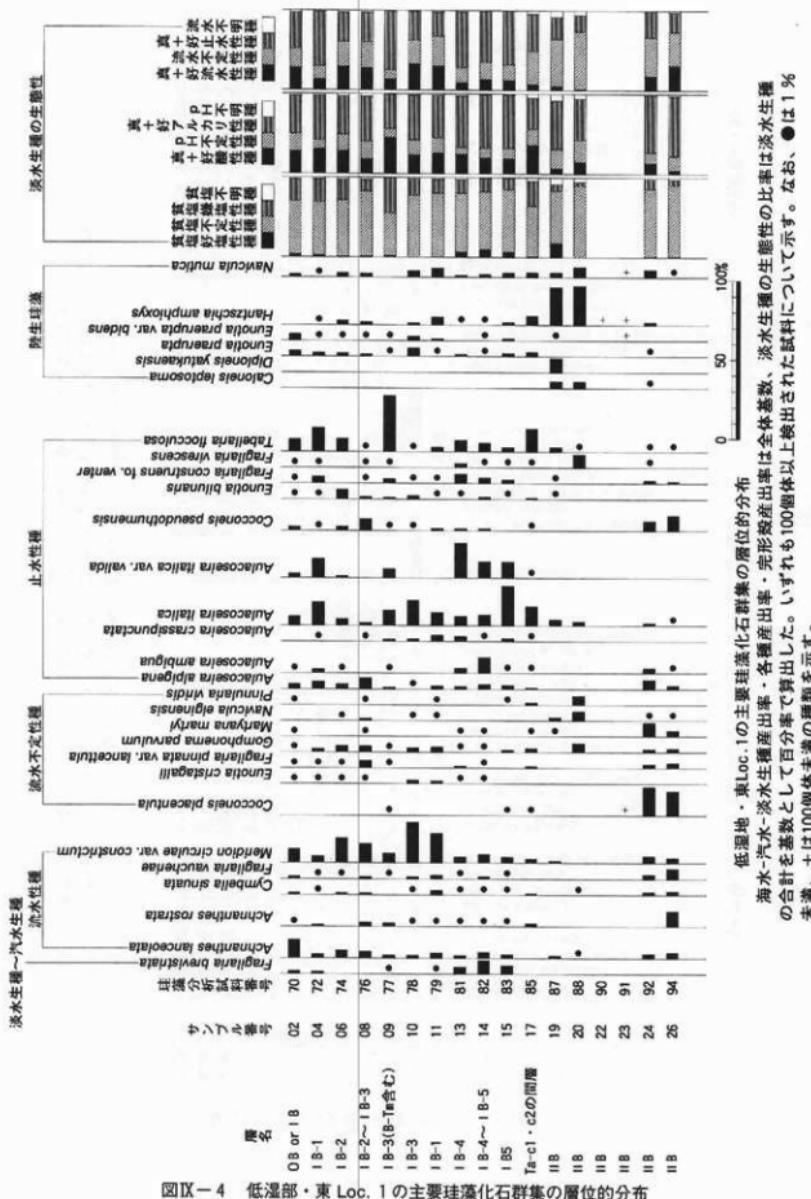
17.000 12.000 10.000 8.000 6.000 4.000 2.000 1.000 500 250 100 50 25 10 5 2 1

卷之三



図IX-3 G 56区北の主要珪藻化石群集の層位的分布

2. ユカンボシ C 15遺跡の珪藻・花粉化石と植物硅酸体より見た環境変遷(1)



図IX-4 低湿部・東 Loc. 1 の主要珪藻化石群集の層位的分布

性の *Achnanthes lanceolata*、*A. rostrata*、流水不定性の *Amphora pediculus* が10%前後と多産し、好止水性の *Achnanthes clevei*、*A. peragallii*、*Cocconeis pseudothumensis*、流水に対する適応性が不明である *Achnanthes rechensis*、*A. subatomoides*、*Navicula heusleriana* var. *septentrionalis*などを伴う。この内、*Achnanthes lanceolata* は、河川中～下流部や河川沿いの河成段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現する中～下流性河川指標種群（安藤、1990）の一種である。

試料番号42～38は真・好流水性種が減少し、真・好止水性種、真・好酸性種が増加する。流水不定性の *Eunotia cristagalli*、*Gomphonema parvulum*、好止水性の *Aulacoseira italica*、*Pinnularia nodosa*、*Tabellaria flocculosa* が多産する。この内、*Pinnularia nodosa* は、沼よりも浅く水深が1 m前後で、一面に水生植物が繁茂するような沼澤やさらに水深の浅い湿地に生育する沼澤湿地付着生種群（安藤、1990）の一種である。

試料番号35では真・好流水性種がさらに減少して、流水不定性種や真・好止水性種、真・好酸性種が増加する。主な産出種は、流水不定性の *Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Pinnularia gibba*、好止水性の *Gomphonema gracile* である。これらの種は、沼澤湿地付着生種群（安藤、1990）でもある。

試料番号36・33になると、真・好酸性種、真・好止水性種が増加し優占する。好止水性で浮遊性の *Aulacoseira crassipunctata* が30%前後と優占し、この他に好流水性の *Meridion circulae* var. *constrictum*、流水不定性の *Eunotia pectinalis* var. *minor*、好止水性で浮遊性の *Aulacoseira alpigena*、*A. italica*などを伴う。優占種の *Aulacoseira crassipunctata* は、電気伝導度の低い貧栄養の泥炭池で認められるとしている（Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1991a）とされる。

試料番号30は真・好止水性種が減少し、真・好流水性種が増加する。*Aulacoseira crassipunctata* が約10%に減少し、好流水性の *Achnanthes rostrata*、*Meridion circulae* var. *constrictum* などが産出する。

試料番号28になると、淡水浮遊性の *Aulacoseira italica*、*Tabellaria flocculosa* が30%前後検出され、ふたたび真・好止水性種が優占する。

試料番号26は、好流水性の *Meridion circulae* var. *constrictum* が約14%と多産し、この他に好流水性の *Achnanthes lanceolata*、流水不定性の *Eunotia subarcuata*、好止水性の *Tabellaria flocculosa*などを伴う。

〈1地区低湿地・東 Loc. 1〉

試料番号90・91では珪藻化石がほとんど産出しない。これ以外の試料では、淡水生種が豊富に産出する。完形殻の出現率は、試料番号87・88が30%～40%と低く、それ以外が70%前後と高い。珪藻化石群集は、層相変化に対応して変化する。

試料番号94・92では、貧塩・不定性種、真・好アルカリ性種が優占し、流水に対しては真・好流水性種～真・好止水性種がほぼ同率で産出する。流水不定性の *Cocconeis placentula* が多産し、好流水性の *Fragilaria vaucheriae*、*Meridion circulae* var. *constrictum*、流水不定性の *Martyana martyi*、好止水性の *Aulacoseira alpigena*、*Cocconeis pseudothumensis*などを伴う。

試料番号88・87は、一般水域に生育する水生珪藻の他に陸上のコケや土壤表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に生育する陸生珪藻が約50%産出する。その主なものは、陸生珪藻の中でも耐乾性の強いA群（伊藤・堀内、1991）の *Hantzschia amphioxys* が25%と優占し、同じくA群の *Navicula mutica*、水域にも認められる陸生珪藻のB群（伊藤・堀内、1991）の *Caloneis leptosoma* を伴う。水生珪藻は、流水不定性の *Navicula elginensis* などが産出する。

試料番号85は、淡水浮遊性の *Aulacoseira italica*、好止水性の *Tabellaria flocculosa* が15%前後と多産し、真・好酸性種、真・好止水性種が増加する。

試料番号83~81は、貧塩-不定性種、真・好アルカリ性種、真・好止水性種が優占することを特徴とする。産出種の特徴は、淡水浮遊性の *Aulacoseira italica*、*A. italica* var. *valida* が10~20%と多産し、淡水域-汽水域まで塩分に対しての適応性の高い広域塩性種の *Fragilaria brevistriata*、淡水浮遊性の *Aulacoseira ambigua*、*Fragilaria construens* fo. *venter*、*Tabellaria flocculosa* を伴う。

試料番号79・78では、真・好流水性種が増加する。真流水性の *Meridion circulae* var. *constrictum* が多産し、淡水浮遊性の *Aulacoseira italica*、好流水性の *Achnanthes lanceolata*、*Fragilaria vaucheriae*、流水不定性の *Gomphonema parvulum*などを伴う。

試料番号77になると真・好酸性種、真・好止水性種が増加する。淡水浮遊性の *Tabellaria flocculosa* が優占し、同じ生態性の *Aulacoseira italica*、*A. italica* var. *valida*、真流水性の *Meridion circulae* var. *constrictum* を伴う。

試料番号76・74では再び真・好流水性種が増加する。真流水性の *Meridion circulae* var. *constrictum* が10~15%と多産し、好流水性の *Achnanthes lanceolata*、流水不定性の *Gomphonema parvulum*、好止水性の *Aulacoseira alpigena*、*Cocconeis pseudothumensis*などを伴う。

試料番号72では真・好流水性種が減少し、淡水浮遊性の *Aulacoseira italica*、*A. italica* var. *valida*、*Tabellaria flocculosa* が15%前後検出され、真・好止水性種が増加・多産する。

試料番号70は、真・好流水性種が増加する。特徴は、好流水性の *Achnanthes lanceolata*、真流水性の *Meridion circulae* var. *constrictum*、淡水浮遊性の *Aulacoseira italica*、*Tabellaria flocculosa* が10%前後と多産する。

(2) 花粉化石

結果を、表IX-8と図IX-5・6に示す。

〈1地区 G-56北〉

花粉化石は9試料とも良好に検出される。木本花粉の出現傾向は、試料番号51~47、試料番号45~39、試料番号36・34で異なる。試料番号51~47では、クルミ属・コナラ属コナラ亜属が多産し、モミ属・トウヒ属・マツ属・クマシデ属-アサダ属・カバノキ属・ハンノキ属・ニレ属-ケヤキ属・カエデ属・ウコギ科・トネリコ属などを伴う。試料番号45~39ではクルミ属が減少し、ハンノキ属が増加・多産する。試料番号36・34になると引き続きコナラ亜属が多産するが、ハンノキ属が減少する。また、ヤナギ属が最も高率に検出されるようになる。

草本花粉では、イネ科・カヤツリグサ科・カラマツソウ属・ヨモギ属などが連続して検出され、この他にミズバショウ属-ザゼンソウ属・ガマ属・サジオモダカ属・ワレモコウ属・セリ科などが検出される。これらの種類の中でミズバショウ属-ザゼンソウ属が試料番号41~36で多産する。

〈1地区低湿地・東 Loc. 1〉

試料番号134~130の4試料では、花粉化石がほとんど検出されない。また、試料番号128・127では、花粉の保存状態が極端に悪い。したがって、これら6試料では、花粉化石を統計的に扱うことを差し控える。それ以外の11試料では、比較的良好に検出される。

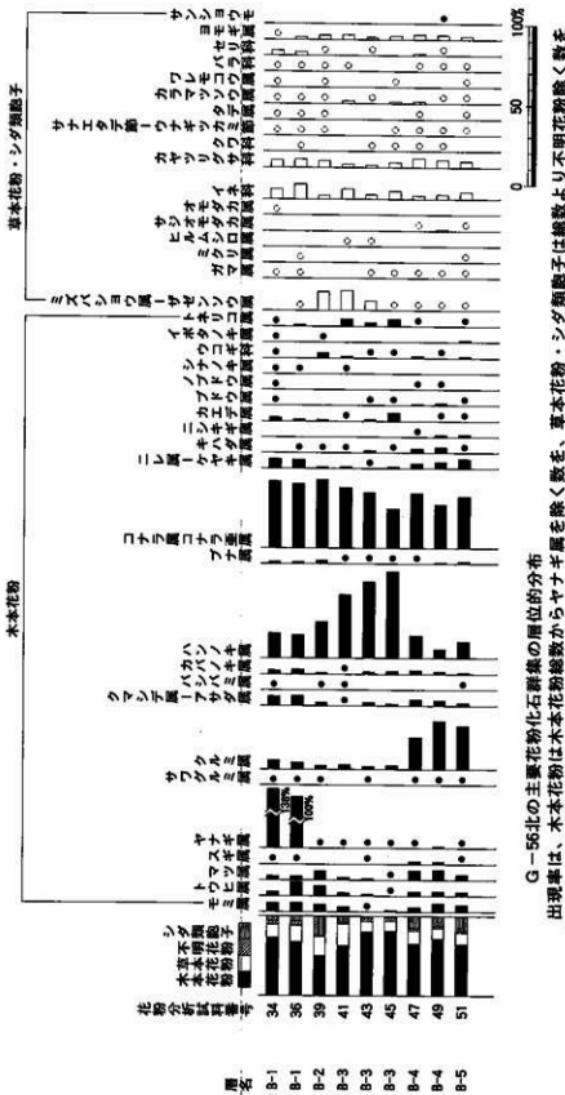
木本花粉では、コナラ亜属・ハンノキ属が多産し、モミ属・トウヒ属・マツ属・ヤナギ属・クルミ属・クマシデ属-アサダ属・カバノキ属・ニレ属-ケヤキ属・カエデ属・ウコギ科・トネリコ属などを伴う。これらの種類の中でヤナギ属が試料番号114~110で比較的多く検出され、ハンノキ属が上位に向かい増減を繰り返しながら減少傾向を示す。

草本花粉では、イネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属が比較的多く検出され、ミズバショウ属-ザゼンソウ属・ガマ属・ヒルムシロ属・オモダカ属・サンエタデ節-ウナギツカミ節・カラマツソウ属・

表IX-8 花粉分析結果

種類	G-5北	地図地・東Loc. I															X-S 地図		
		110	112	114	116	117	118	119	121	122	123	125	127	128	130	131	133	134	106
木本花粉																			
モミ属	17	15	20	16	5	6	12	26	17	18	39	22	5	31	23	7	24	12	16
トウヒ属	8	25	27	7	6	1	11	11	19	23	39	25	9	37	38	11	12	10	1
マツ属	8	6	24	5	6	1	24	24	13	10	22	8	12	16	27	6	13	10	16
スギ属	1	2	-	2	-	7	5	2	1	4	6	1	4	-	2	5	1	2	-
ヤナギ属	427	225	3	2	1	2	1	4	1	37	18	40	-	8	-	1	1	-	2
サワガシ属	3	1	3	-	2	-	2	3	2	2	-	1	1	2	1	-	1	-	-
クルミ属	18	10	16	9	10	12	32	111	100	10	6	4	9	7	5	3	5	11	11
クマシロギアーテガ属	19	14	16	3	12	7	16	7	17	6	17	36	12	31	5	8	7	11	15
バシバシ属	1	-	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	8	7	5	2	8	8	10	6	4	7	7	11	17	14	45	6	8	9	14
ハンノキ属	50	33	93	125	258	273	58	21	46	36	40	66	231	65	174	63	27	55	85
ブナ属	5	3	9	1	5	1	1	4	6	11	8	12	8	7	2	3	10	7	5
コナラ属コナラ属	130	81	176	118	194	123	139	29	119	127	96	136	105	105	106	96	138	158	132
ニレ属ケヤキ属	19	13	5	4	5	6	13	16	22	16	10	14	19	14	17	7	8	11	12
カラマツ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キハダ属	-	1	1	1	7	2	11	13	3	2	-	-	1	1	3	-	-	2	2
ウルシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ニシキオク属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	8	3	5	2	7	27	-	3	3	5	4	2	3	5	1	1	2	1	-
トチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ノブドウ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シナノイヌ属	1	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	3	-	14	4	2	4	5	2	4	1	-	4	7	4	7	1	1	3	3
ミズキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
フジ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	2	-	-	-	2
イボタノキ属	1	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	2	1	-	-	-	-
トネリコ属	3	3	-	15	13	22	2	1	8	2	5	1	7	1	-	7	-	3	-
ニワトコ属近似種	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉																			
ミズシジョウ属-ゼゼンシウ属	-	5	65	61	39	1	1	1	5	7	3	5	41	12	8	6	-	-	1
ガマ属	3	1	-	-	-	1	3	1	2	-	2	1	3	-	-	1	-	-	-
ミクリ属	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-
ヒルムロ属	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サジオオダガ属	-	-	-	-	-	2	5	2	-	1	1	-	-	1	2	1	-	-	-
オモダガ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	4	-	-	-	-	-	-	-
イキ科	61	60	16	32	20	30	13	15	25	27	67	50	101	83	31	45	36	23	43
カヤツリグサ科	45	35	34	10	18	16	34	25	22	40	45	74	66	37	19	35	51	11	28
ユリ科	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
アヤメ科	3	-	5	2	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-	1	2	1	-
クワ科	-	2	-	1	1	2	1	-	1	-	1	-	-	-	-	1	2	4	10
サナエタケ科-ウナギツカミ科	1	1	1	-	-	1	2	1	2	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
タデ属	1	1	1	-	-	1	-	1	-	-	7	-	12	-	-	-	-	-	-
アザシ科	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カラマツ属	2	3	7	8	5	7	5	1	3	1	4	3	15	9	5	5	1	10	6
トリカブト属近似種	-	-	2	2	1	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1	-	-	-	-
キンボクウ科	-	-	2	2	1	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1	-	-	-	-
アブリ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ユキノクソ科近似種	-	1	-	1	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ラメノコウ属	2	-	1	-	-	2	-	1	-	1	-	3	-	1	-	6	7	-	-
バラ科	7	3	3	1	-	-	1	1	4	3	6	4	2	2	1	1	2	1	-
マメ科	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	1	-	-	1	2	-	-
ミゾハナ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	1	-
セリ科	29	15	3	-	1	7	3	-	6	3	5	16	7	5	-	1	2	-	1
ヒルガオ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シリ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカネ属-ヤエムグラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5
オミナシ属	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	1	5	1	-
ゴキヅル属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ホタルブクロ属-ツリガネニンジ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ科	8	9	23	15	10	13	18	14	12	11	6	16	69	15	36	16	12	8	21
他のキク属科	1	1	3	-	3	5	2	1	6	14	1	4	1	-	-	-	2	1	2
タンポポ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3	-
不明花粉	56	54	31	12	28	26	19	15	6	13	16	18	22	10	16	8	12	17	23
シダ植物	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	10	-
他のシダ植物	57	43	201	36	18	9	95	61	105	96	67	75	608	104	233	44	923	1170	758
合計	737	451	412	312	554	487	405	368	366	338	306	375	476	346	498	213	265	304	319
木本花粉	166	139	198	138	92	75	102	71	85	133	125	255	349	170	127	119	108	56	138
草本花粉	50	34	11	12	28	18	12	9	11	15	18	22	19	16	8	12	17	23	16
不明花粉	57	43	201	36	18	9	95	62	105	90	87	75	608	104	233	44	923	1170	758
シダ植物	560	538	811	486	664	581	602	499	566	567	499	745	1453	629	850	376	1326	1530	1215
総計(不明を除く)	950	538	811	486	664	581	602	499	566	567	499	745	1453	629	850	376	1326	1530	1215

2. ユカンボシ C 15遺跡の珪藻・花粉化石と植物珪酸体より見た環境変遷(1)

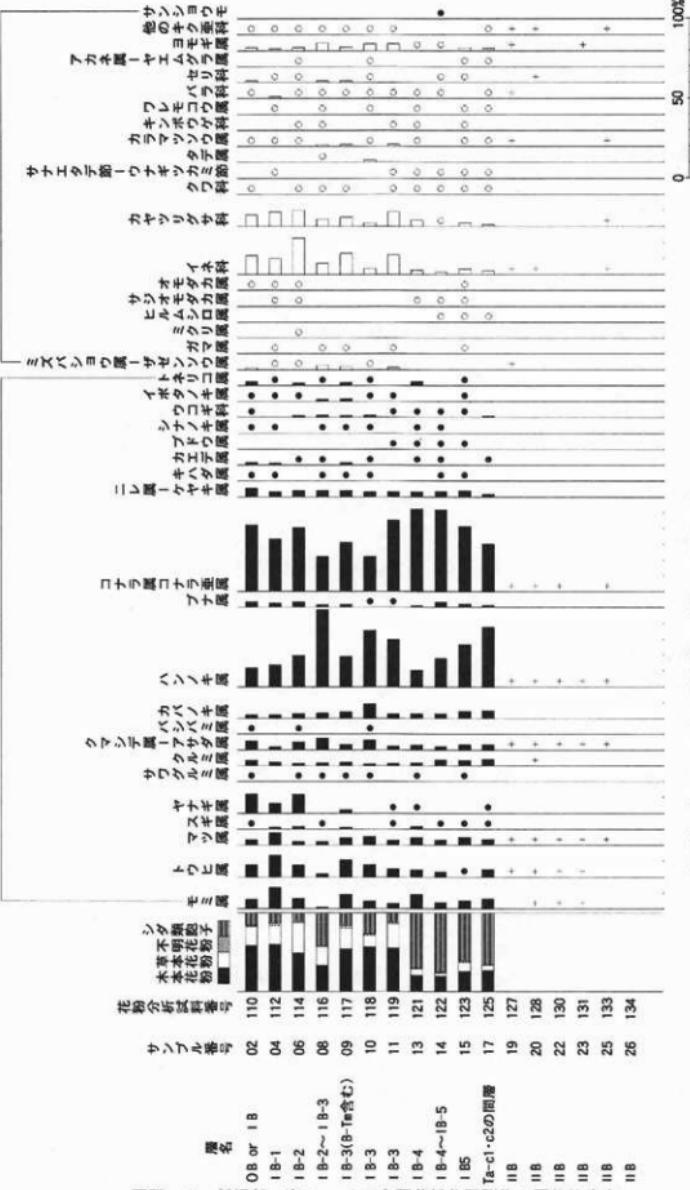


図IX-5 G 56区北の主要花粉化石群集の層位的分布

Distance (m)	Open Circles (%)	Solid Circles (%)
0	0	0
25	1	2
50	2	3
75	4	5
100	8	9

草本花粉・シダ類胞子

草本花粉



図IX-6 低湿地・東Loc. 1の主要花粉化石群集の層位の分布

低湿地・東Loc. 1の主要花粉化石群集の層位の分布
出現率は、木本花粉数は木本花粉総数からヤナギ属を除く数を、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉
を除く数をそれぞれ基準として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は花粉化石の保存状態が悪い
試料で検出される種類を示す。

2. ユカンボシ C 15遺跡の珪藻・花粉化石と植物硅酸体より見た環境変遷(1)

ワレモコウ属・セリ科などを伴う。

〈X-3周溝〉

木本花粉のマツ属・ハンノキ属、草本花粉のサナエタデ節—ウナギツカミ節・ヨモギ属・他のキク亞科・タンボボア科、シダ類胞子が検出される程度であり、検出個体数も少ない。

(3) 植物硅酸体

結果を、表IX-9と図IX-7~9に示す。全体的に植物硅酸体の保存状態は良好である。

〈1地区 G-56北〉

試料番号51~43では、タケ亞科・ヨシ属・イチゴツナギ亞科がわずかに認められる程度であり、検出個数が少ない。

植物硅酸体群集は、試料番号41と試料番号39~34で異なる。試料番号41では、タケ亞科とヨシ属の産出が目立つが、中でもタケ亞科が多産する。試料番号39~34になるとタケ亞科が減少し、ヨシ属が優占する。この他、ウシクサ族、イチゴツナギ亞科が上位に向かい増加する傾向を示す。

〈1地区低湿地・東 Loc. 1〉

試料番号134・133・131では、タケ亞科・ヨシ属・イチゴツナギ亞科がわずかに認められる程度であり、検出個数が少ない。植物硅酸体群集は、試料番号130・128と試料番号127~110で異なる。試料番号130・128では、タケ亞科が優占し、ヨシ属・スキ属・イチゴツナギ亞科が隨伴する。試料番号127~110になるとヨシ属が増加し、優占する組成となる。

〈X-3周溝〉

タケ亞科が優占し、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亞科が隨伴する。

4. 考察

(1) 低地の環境変遷

〈1地区 G-56北〉

I B 5層よりも下位の層準では、中一下流性河川指標種群を含む流水性種が多産する。したがって、当時は氾濫の影響により砂・礫が堆積する不安定な環境であったと推定される。

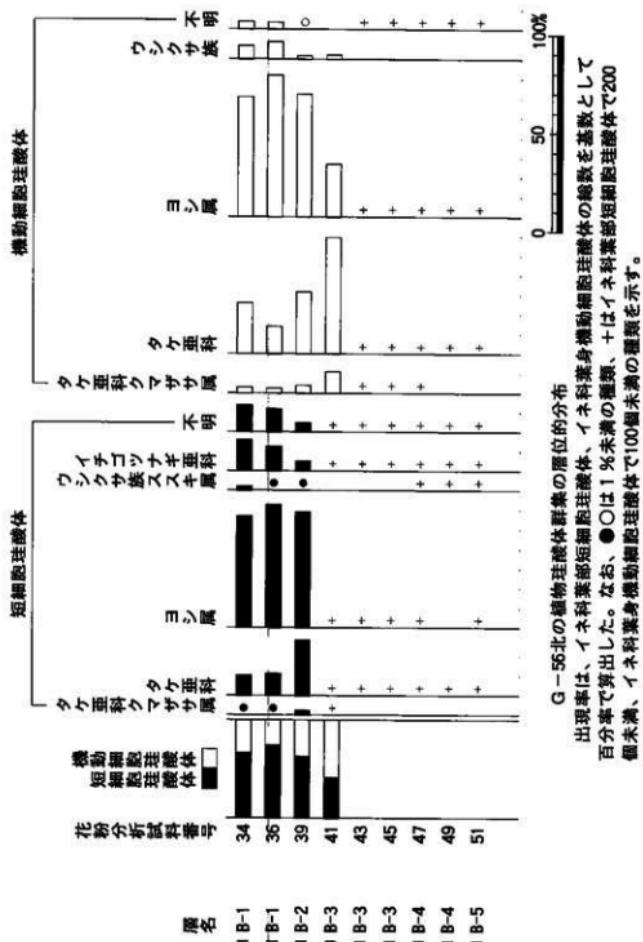
砂を含む泥炭層であるI B 5層・I B 4層は下位の層準と比較して流水性種が減少するものの、引き続き流水性種の種数および割合とも高く、さらに流水不定性種や止水性種など複数の種類が混在している。したがって、繩文時代～続繩文時代頃、調査地点は、泥炭の堆積が進行する比較的安定した場所となつたものの、河川等の氾濫の影響を受けていたことが推定される。なお、本層準で多産する木本花粉のクルミ属は河道周辺の植生を反映しており、そのような場所に生育していた母植物に由来する化石が流下・堆積したものとみられる。

I B 3層における珪藻化石群集は上部と下部で異なり、下部で沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種・止水性種および真・好酸性種が多産し、上部で電気伝導度の低い貧栄養の泥炭池で特徴的に産出するとされる *Aulacoseira crassipunctata* が優占する。したがって、I B 3層堆積期になると弱酸性を呈した沼沢地～湿地のような安定した水域となり、貧栄養な止水域へ変化したと推定される。I B 2層～I B 1層では、浮遊性の珪藻化石が多産するが、層準によって流水性種が多産した。これより、調査地点は、基本的には沼沢～湿地の様相を呈していたが、河川の氾濫など流水の影響を受けることがあったと推定される。

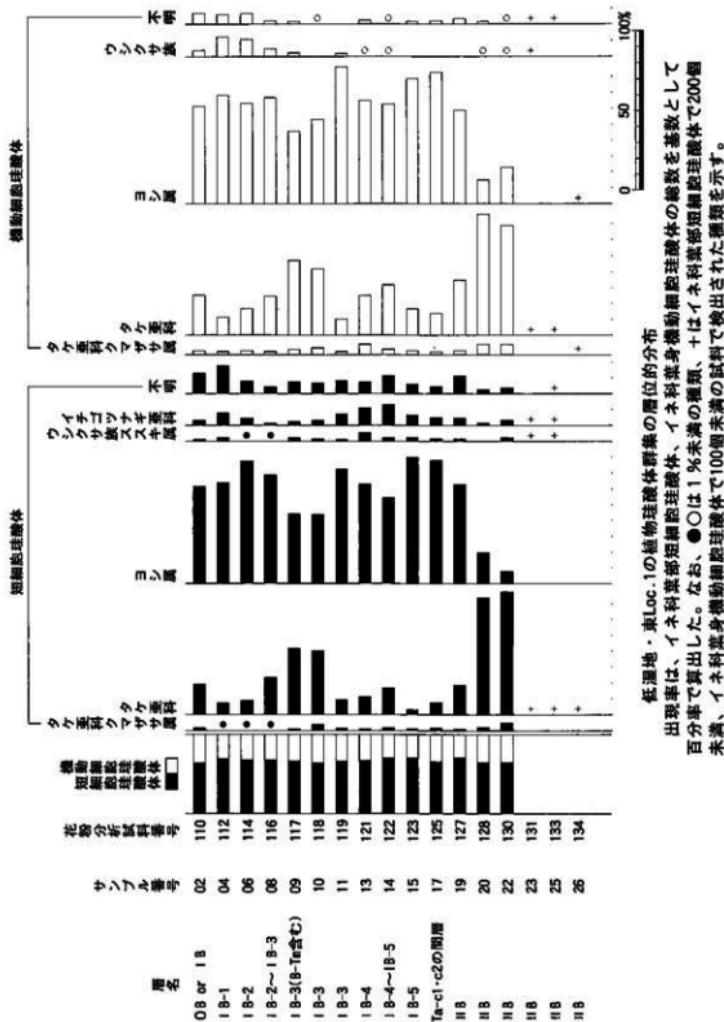
このように掠文化期～アイヌ文化期の頃の調査地点は、泥炭の堆積が進行する安定な場所となっていたが、しばしば河川の氾濫の影響を受けることがあったと考えられる。このような沼沢地～湿地

表IX-9 植物珪穀類分析結果

種類	試料番号	G-56光	低溫地・東Loc.1												X-3 網濾				
			110	112	114	49	51	116	117	118	119	121	122	123	125	127	128	131	133
イネ科葉部短細胞壁織体																		106	
タケ至科クマガサ属	2	2	5	6	-	-	-	4	2	1	2	3	8	3	3	4	3	5	10
タケ至科	22	38	61	41	13	8	4	3	4	45	20	23	53	103	83	20	28	46	9
ヨシ属	119	211	127	10	14	6	4	-	5	143	164	197	154	109	90	153	152	146	214
ウシクサ族ススキ属	4	3	1	-	-	2	2	1	3	6	2	2	6	3	3	13	6	7	4
イチゴツナギ亞科	33	43	11	6	3	2	3	3	3	8	20	11	3	6	7	15	27	35	18
不明キビ型	16	19	3	1	3	-	1	2	3	10	20	10	4	10	4	6	11	13	3
不明ヒメジハ型	8	14	6	5	2	-	-	-	17	11	9	5	6	5	7	4	14	5	3
不明ダムシチク型	5	7	1	2	2	1	-	1	1	3	14	1	1	5	4	3	3	1	2
イネ科身縫物細胞壁織体																		1	
タケ至科クマガサ属	3	3	5	11	3	2	2	-	3	2	3	2	4	5	2	8	4	3	2
タケ至科	27	16	40	60	12	3	7	6	7	33	13	20	26	58	48	11	30	36	19
ヨシ属	63	83	79	27	4	3	2	2	8	80	78	76	71	56	61	92	78	71	69
ウシクサ族	7	10	2	2	-	-	-	-	5	14	13	5	3	-	2	1	1	-	1
不明	4	4	1	1	1	1	1	1	5	9	7	8	2	2	1	-	3	1	2
合計	269	337	215	71	37	17	14	11	17	233	257	254	224	246	205	211	241	268	267
イネ科葉部短細胞壁織体	104	116	121	101	20	9	12	9	20	130	114	120	106	123	115	107	120	113	109
イネ科身縫物細胞壁織体	313	453	342	172	57	26	26	20	37	363	371	374	330	369	320	318	361	381	360
総計	313	453	342	172	57	26	26	20	37	363	371	374	330	369	320	318	361	381	360



G-55北の植物珪酸体群集の層位的分布
出現率は、イネ科葉身短動細胞珪酸体、イネ科葉身短動細胞珪酸体の総数を基準として
百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、+はイネ科葉身短動細胞珪酸体で200
個未満、イネ科葉身短動細胞珪酸体で100個未満の種類を示す。



図IX-8 低温地・東Loc. 1の植物珪酸体群集の層位的分布

2. ユカンボシ C 15道路の珪藻・花粉化石と植物珪酸体より見た環境変遷(1)



×—3周溝の植物珪酸体群集
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数
を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満の種類を示す。

図IX-9 X-3周溝の植物珪酸体群集

には、ミズバショウ属・ザゼンソウ属、ガマ属、ヒルムシロ属、ヨシ属やタケ・ササ類などのイネ科、カヤツリグサ科、カラマツソウ属、セリ科、ヨモギ属などの草本類が生育していたとみられる。

〈低湿地・東 Loc. 1〉

II B 層下部（サンプル26～24）では、中～下流性河川指標種群を含む流水性種、流水不定性種、止水性種などがほぼ同じ割合で混在する。このような群集組成は、氾濫堆積物や人為的攪乱が及んでいる水田などの堆積物で認められる場合が多い。今回の場合、前者に由来するものと判断される。すなわち、当時の調査地点は河川の氾濫の影響を受ける場所であったとみられる。II B 層中部（サンプル23・22）は、珪藻化石・花粉化石ともほとんど検出されなかった。植物珪酸体でタケア科が検出されることから、少なくとも周辺にはタケ・ササ類などが生育していた可能性がある。II B 層上部（サンプル20・19）になると、耐乾性の強い陸生珪藻の A 群の一種である *Hantzschia amphioxys* が特徴的に検出され、さらに沼沢湿地付着生種群（安藤、1990）を含む流水不定性種が産出する。また、植物珪酸体ではタケア科が優占する群集からヨシ属が優占する群集へ変化する。したがって、調査地点は、しばしば乾燥することがある湿地のような場所であったが、周辺では次第にヨシ属が繁茂するようになったと思われる。このように II B 層が堆積した縄文時代頃、低湿地部は氾濫の影響が弱まり、ヨシ属などが生育する沼沢地のような安定した環境へ変化したのであろう。

Ta - c₁ と c₂ の間層（試料番号85）は、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種や酸性種と止水性種が多産する。したがって、周辺は弱酸性を呈した沼沢地のような環境であったと考えられる。このような場所には、ヒルムシロ属、ヨシ属などのイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの草本類が生育していたと考えられる。

I B 層は、中～下流性河川指標種群（安藤、1990）を含む流水性種が多産する群集と淡水浮遊性種が多産する群集が交互に認められる特徴がある。また、水素イオン濃度は全般的に真・好アルカリ性種が優占するが、真・好酸性種の割合も高い。浮遊性種の割合が高い層位は、I B 5～I B 4（試料番号83～81）、I B 3 層中部～上部（試料番号77）、I B 1 層（試料番号72）である。これに対して、I B 3 層下～中部（試料番号79・78）、I B 2 層（試料番号76・74）、0 B or I B 層（試料番号70）では、止水性種の割合が低くなり、流水性種の出現率が高くなる。したがって、弱分解質～分解質の泥炭層である I B 層が堆積する頃になると低湿地部は、基本的には弱アルカリ性～弱酸性を呈した池沼のような安定した場所であったが、河川の氾濫や流れ込みの影響を受けることがあったと考えられる。また、このような低湿地にはミズバショウ属・ザゼンソウ属、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ヨシ属などのイネ科、カヤツリグサ科、カラマツソウ属、セリ科、ヨモギ属などが生育していたと考えられる。

〈X-3 周溝〉

埋積物中からは、花粉化石がほとんど検出されない。一方、植物珪酸体ではヨシ属が低率であり、タケア科珪酸体が優占する組成が得られた。調査地点が微高地に位置することを考慮すると、ヨシ属珪酸体の供給量が少なく、相対的にタケア科珪酸体が増加したのではないだろうか。このような状況を考慮すると、微高地上は比較的乾いた状態であり、少なくともタケ・ササ類が生育していたと考えられる。このような環境であったために花粉化石が分解・消失した可能性がある。

（2）森林植生

G-56北および低湿地・東 Loc. 1 における花粉化石群集は、コナラ亜属が多産することが特徴である。随伴する種類もヤナギ属・クルミ属・カバノキ属・ハンノキ属・ニレ属・ケヤキ属・カエデ属・ウコギ科・イボタノキ属・トネリコ属といった落葉広葉樹の種類が多い。したがって、低地周辺

2. ユカンボシ C 15遺跡の珪藻・花粉化石と植物珪酸体より見た環境変遷(1)

の台地上や低地内の微高地には、コナラ亜属を中心とした落葉広葉樹からなる林分が存在したことが推定される。これら要素のうち、ヤナギ属・クルミ属・カバノキ属・ハンノキ属・カエデ属・トネリコ属などは河岸林の構成要素でもあり、当時もそのような場所に分布していた可能性がある。花粉化石群集の層位分布において、これらの種類のうち、ハンノキ属・ヤナギ属などは層位的に急激な変化を示している。I B 5層より下位と I B 3層ではハンノキ属が多産する。I B 2層上部ではヤナギ属が多産する傾向があり、特に G-56北で顕著である。このような産状は局所的な植生を強く反映した結果とみられ、これら2種類が調査地点近辺に分布していたことが推定される。したがって、縄文時代頃および擴文化期の調査地点近辺にはハンノキ類が、アイヌ文化期にはヤナギ類がそれぞれ生育していた可能性がある。なお、G-56北 I B 5層～I B 4層で多産しているクルミ属は集水域の植生を反映しており、そこから花粉化石が流下・堆積したと考えられる。

花粉化石群集で無視できないほど出現しているモミ属・トウヒ属・マツ属などの針葉樹は、台地上や後背丘陵地の森林構成種であったとみられる。

5.まとめ

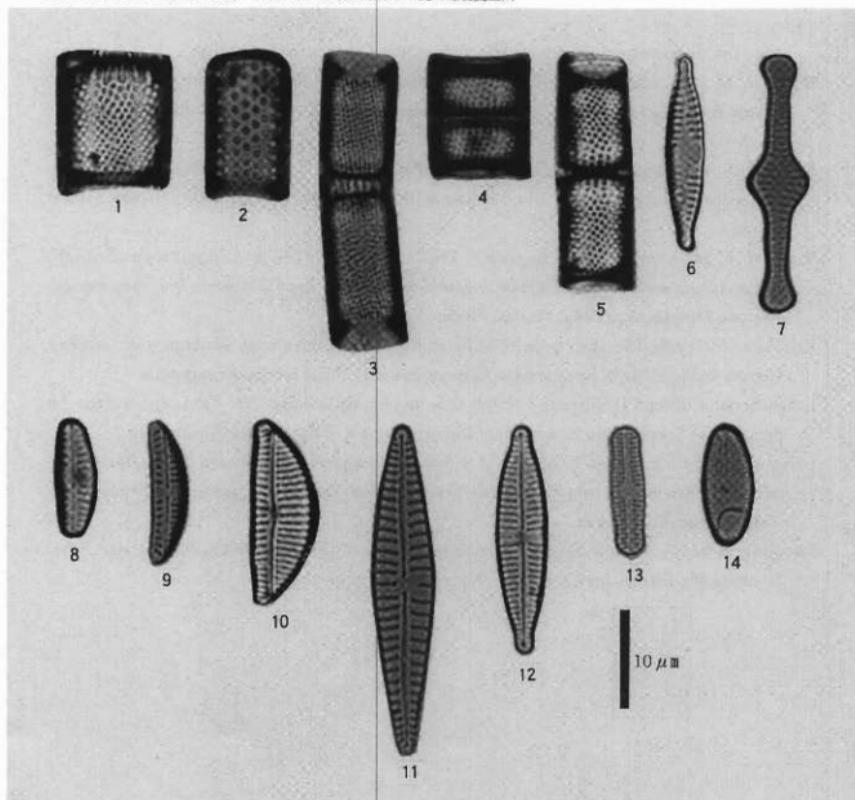
今回、G-56北、低湿地部・東Loc. 1、X-3周溝における珪藻化石・花粉化石・植物珪酸体の産状から遺跡周辺の環境について若干の検討を行った。その結果、コナラ亜属など落葉広葉樹を中心にモミ属・トウヒ属・マツ属などの針葉樹を交えるような植生が存在しており、時期により低地にハンノキ類・ヤナギ類・クルミ属などが生育していた可能性があることが推定された。また、湿地にはミズバショウ属・ザゼンソウ属・ガマ属・イネ科・カヤツリグサ科・セリ科・ヨモギ属などの草本類が生育していたことが推定され、これらの草本類が泥炭の形成に関与していると思われる。

一方、調査区内で微高地を挟んで認められる低湿地部は、氾濫の影響を受ける不安定な時期、沼沢地～湿地のような時期、池沼のような安定した時期と変遷しており、常に安定している場所ではなかったことが明らかにされた。さらに調査区両端に認められる低湿地部は、例えば縄文時代頃、G-56北は氾濫の影響を受ける不安定な環境であったのに対して低湿地部・東Loc. 1は池沼のように安定した環境であったなど、同時期でもその環境が異なっていたことが想定される。このように調査地域の環境は、時系列的にも空間的にも変化に富んでいることから、調査地点周辺の環境変遷は、現在調査中の他地点の調査結果を踏まえた上で、詳細な検討を加えていきたいと考えている。

〈引用文献〉

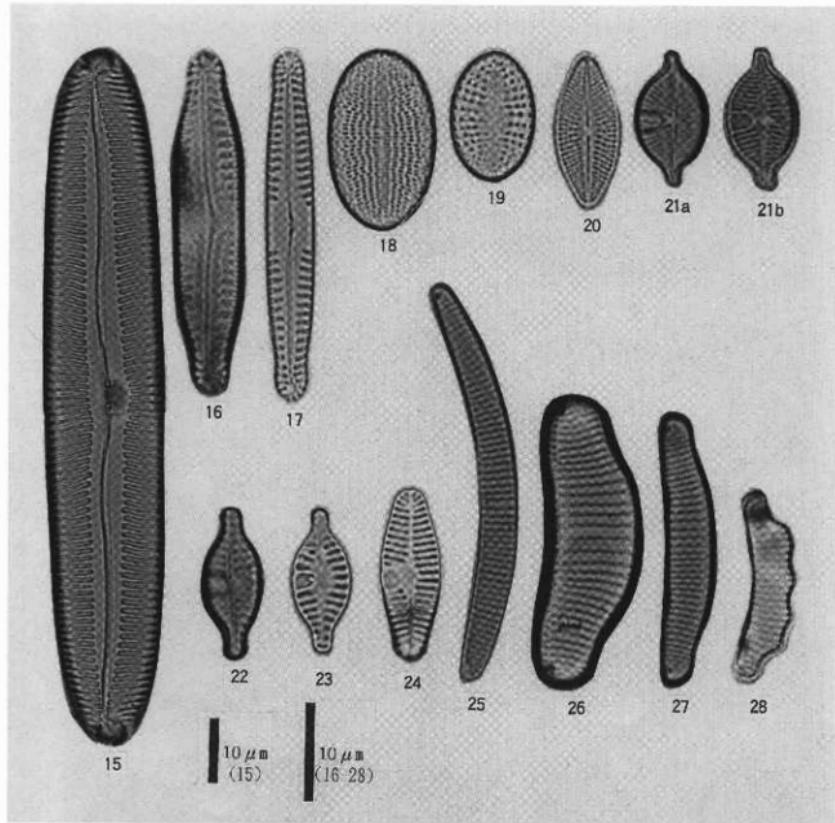
- Asai, K. and Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, p. 35-47.
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p. 73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 蘭生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p. 23-45.
- 近藤鉢三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析、その特性と応用. 第四紀研究, 25, p. 31-64.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p.1-353, BERLIN・STUTTGART.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1

- von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Suriellaceae. Band 2/2 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaeae, Eunotiaceae. Band 2/3 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Reichardt, E. (1995) Die Diatomeen (Bacillariophyceae) in Ehrenbergs Material von Cayenne, Guyana Gallica (1943). Iconographia Diatomologica 1, 107p., Koeltz.-Koenigstein.
- Lange-Bertalot, H. and D. Metzeltin (1996) Oligotrophe-Indikatoren. 800 Taxa repräsentativ für drei diverse Seen-Typen. Iconographia Diatomologica 2, 390p., Koeltz.-Koenigstein.
- Lange-Bertalot, H., K. Kulbs, T. Lauser, M. Noerpel-Schempp & M. Willmann (1996) Dokumentation und Revision der von G. Krasske beschriebenen Taxa. Iconographia Diatomologica 3, 358p., Koeltz.-Koenigstein.
- Metzeltin, D. and A. Witkowski (1996) Diatomeen der Baren-Insel. Suesswasser-und marine Arten. Iconographia Diatomologica 4, 287p., Koeltz.-Koenigstein.



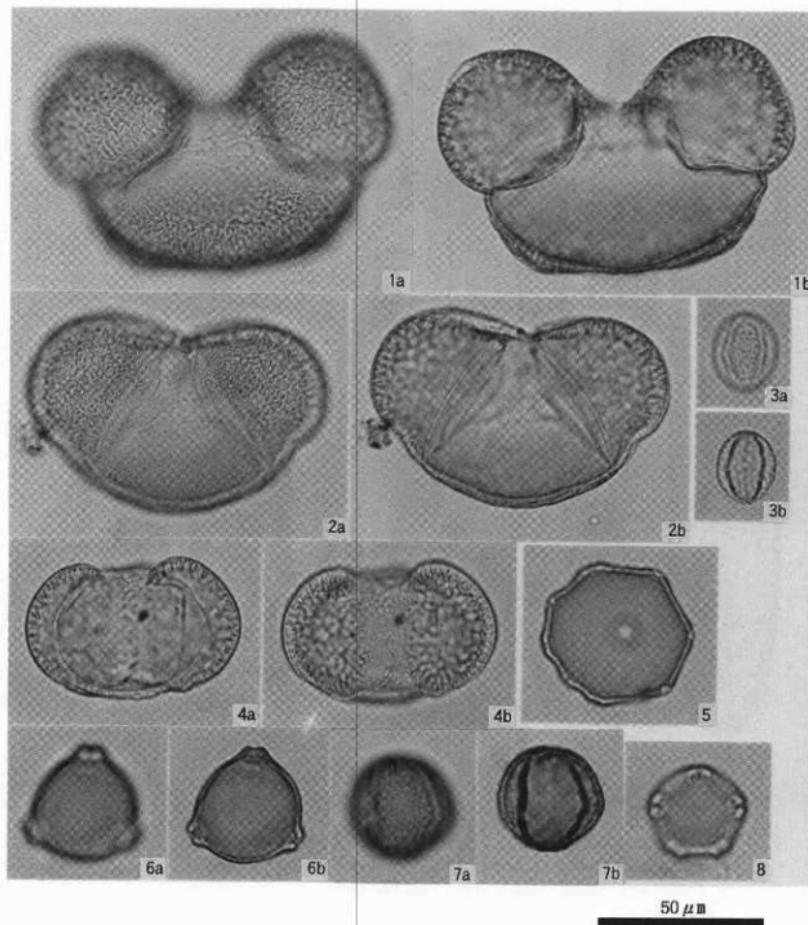
1. *Aulacoseira italica* var. *valida* (Grun.) Simonsen (試料番号74)
2. *Aulacoseira crassipunctata* Krammer (試料番号30)
3. *Aulacoseira italicica* (Ehr.) Simonsen (試料番号35)
4. *Aulacoseira alpigena* (Grun.) Krammer (試料番号26)
5. *Aulacoseira ambigua* (Grun.) Simonsen (試料番号42)
6. *Fragilaria vaucheriae* (Kuetz.) Petersen (試料番号46)
7. *Tabellaria flocculosa* (Roth) Kuetzing (試料番号26)
8. *Cymbella sinuata* Gregory (試料番号40)
9. *Amphora pediculus* (Kuetz.) Grunow (試料番号36)
10. *Cymbella silesiaca* Bleisch (試料番号40)
11. *Gomphonema gracile* Ehrenberg (試料番号35)
12. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (試料番号40)
13. *Navicula heufleriana* var. *septentrionalis* Hustedt (試料番号42)
14. *Navicula mutica* Kuetzing (試料番号30)

図IX-10 硅藻化石顕微鏡写真(1)



15. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg (試料番号35)
 16. *Pinnularia nodosa* Ehrenberg (試料番号40)
 17. *Pinnularia subcapitata* Gregory (試料番号40)
 18. *Cocconeis placenta* (Ehr.) Cleve (試料番号46)
 19. *Cocconeis pseudothumensis* A. Mayer (試料番号76)
 20. *Achnanthes clevei* Grunow (試料番号44)
 21. *Achnanthes peragalli* Brun et Heribaud (試料番号36)
 22. *Achnanthes rostrata* Oestrup (試料番号30)
 23. *Achnanthes rostrata* Oestrup (試料番号46)
 24. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (試料番号46)
 25. *Eunotia bilunaris* (Ehr.) Mills (試料番号30)
 26. *Eunotia praerupta* Ehrenberg (試料番号30)
 27. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst (試料番号33)
 28. *Eunotia cristagalii* Cleve (試料番号40)

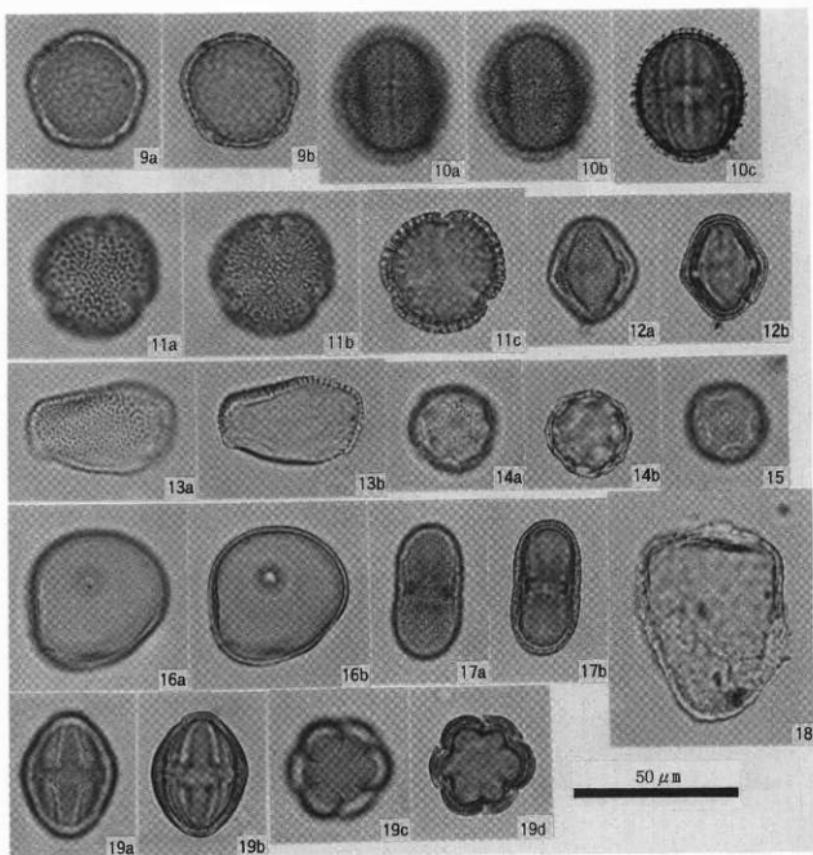
図IX-11 珪藻化石顕微鏡写真(2)



1. モミ属(試料番号112)
3. ヤナギ属(試料番号34)
5. クルミ属(試料番号112)
7. コナラ属コナラ亜属(試料番号41)

2. トウヒ属(試料番号112)
4. マツ属単維管束亞属(試料番号112)
6. カバノキ属(試料番号41)
8. ハンノキ属(試料番号41)

図IX-12 花粉化石顕微鏡写真(1)



9. ニレ属-ケヤキ属(試料番号34)

11. イボタノキ属(試料番号41)

13. ミズバショウ属-ザゼンソウ属(試料番号41)

15. カラマツソウ属(試料番号41)

17. セリ科(試料番号41)

19. ワレモコウ属(試料番号41)

10. キハダ属(試料番号41)

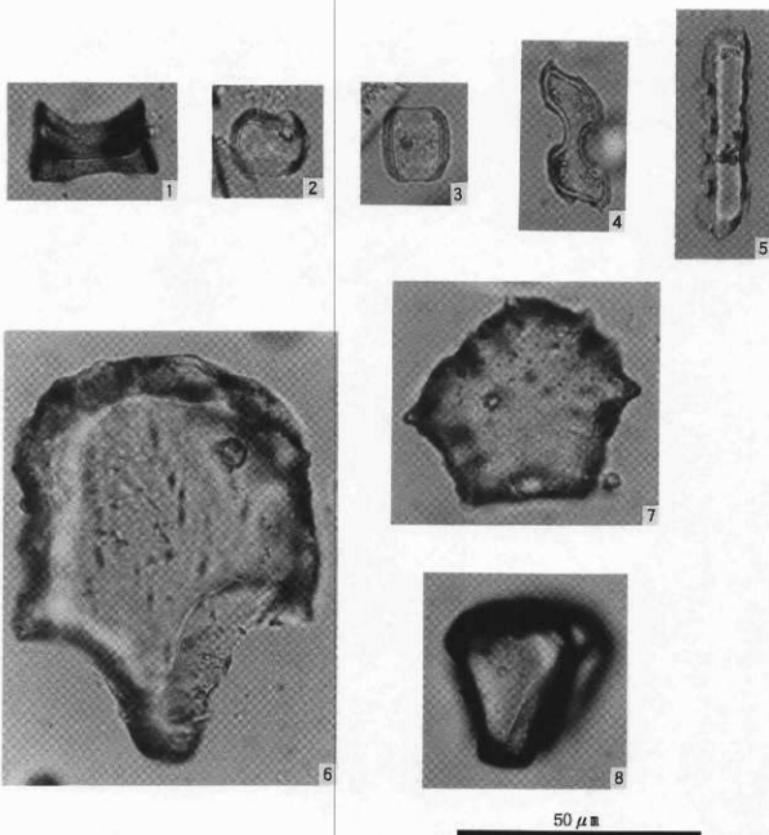
12. ウコギ科(試料番号41)

14. サジオモダカ属(試料番号112)

16. イネ科(試料番号41)

18. カヤツリグサ科(試料番号41)

図IX-13 花粉化石顕微鏡写真(2)



- 1. クマザサ属短細胞珪酸体(試料番号106)
- 2. ヨシ属短細胞珪酸体(試料番号39)
- 3. ヨシ属短細胞珪酸体(試料番号117)
- 4. ススキ属短細胞珪酸体(試料番号117)
- 5. イチゴツナギ亞科短細胞珪酸体(試料番号39)
- 6. ヨシ属機動細胞珪酸体(試料番号117)
- 7. クマザサ属機動細胞珪酸体(試料番号39)
- 8. ウシクサ族機動細胞珪酸体(試料番号106)

図IX-14 植物珪酸体 観微鏡写真

X 成果と問題点

1. 「ユカンボシ」の呼称について

遺跡名称にも使われている「ユカンボシ」の地名解釈で、現在広く引用されているのは長見義三の説である。これはアイヌ語の「yuk-ampa-usi」と解き、「シカ・がたくさんいる・所」と説明するものである。長見はさらに、「…往昔、この川辺の大湿原にシカが春から夏に濃い群れをなしていたのだろう。…」と付け足している(1976年『ちとせ地名散歩』)。また、『増補千歳市史』では「yuk-kam-pu-us-i」[シカ・肉・庫・多い・所]と解してある(1983年)。

しかしながら、松浦武四郎のものをはじめとするいくつかの地図、地名辞典をみても「シカ・がたくさんいる・所」という説明はもっとも新しく表された長見のものにしかなく、さらに北海道の全体にわたるアイヌ語地名においても同音、同形、同意の地名は見いだしがたく、納得しがたい。

ここでは「ユカンボシ」に相当する地名表記のみられる記録、地図、地名辞典類のいくつかを、年代の新しいものから順にならべ異(古)称を示すなかで、本来的な語はどのようなものと推定できるかについて記しておきたい。

なお現在ユカンボシと呼ばれる地名はユカンボシ川のみである。この川は、恵庭公園の西端付近に源泉があり、ほぼ6kmほど東に流れ、河川改修の結果今では市道「南24号」が「長都川」と交差するところで合流している。自然状態では、例えば100年ほど昔は、オサツ沼の西の広がりのなかに直接流れ込んでいた。つまり、河口部は沼の一部であった。あるいは水位がいくぶん低下すると、ユカンボシC15遺跡の中央部を北へ抜け、大きく東に曲がりオサツ川に合流していたものとみなされる。

「ユカンボシ」地名の初出は、1920年(大正9年)の「大日本帝国陸地測量部」発行の5万分の1地形図『漁』(いざり)である(図I-3上)。これでは「ユカンボシ川」の名称となっており、中流域には「ユカンボシ」の地名も描き込んである。以後5万分の1地形図では、1936年(昭和11年)も、現在も川の名称は「ユカンボシ」である。1936年(昭和11年)の地形図(図I-3下)にも川と鉄道が交差するあたりに「ユカンボシ」の地名があるが、ここは現在では「戸磯」(といそ)に変わっている。

さて5万分の1地形図で古いものはどのようにになっているかというと、1910年(明治43年)「陸地測量部」発行の『漁』(いざり)には、「イカンボシ川」があり上流部には「イカンボシ」の地名もみられる(図I-2下)。さらに古いのは1896年(明治29年)「陸地測量部」製版の「北海道假製五万分一図」「長都」(おさつ)である。これは「假製」という制約もあって、湖岸線や河川に比べて山地形の表示は概略的なものである。行政の区画として、右下に「千歳(チトセ)村」、左端に「漁(イザリ)村」、中央部に「長都(オサツ)村」が表示してある。この図の地名表記はアイヌ語を片仮名・漢字で写したものばかりである。「長都(オサツ)村」のなかに、川に沿うように「エカンブウシ」の表示がある(図I-2上)。

この「假製五万分一図」と兄弟のような関係にある1894年(明治27)年3月、北海道庁『胆振国千歳郡千歳原野区画図』(25000分の1)(恵庭市郷土資料館蔵)ではユカンボシ川と「オサツ川」との合流地点は明瞭ではないが、この図には中流域に川に沿って「エカンブウシ」の表記がある。

それでは永田方正『北海道蝦夷語地名解』(初版明治24年; 1891年)の復刻版(1984年)ではどうになっているのか。残念ながら、ここで話題にしている「胆振国千歳郡」の地名では「オサツ」はあるが「ユカンボシ」に相当するものは見あたらない。巻末の折り込み地図でも「オサツ」はあるが「ユカンボシ」に相当するものはない。そのような小さな地名であったことであろう。ある

1. 「ユカンボシ」の呼称について

いは交通路が河川から陸上に変わりつつあり、その重要性が低下していたのかもしれない。

つぎには松浦武四郎の諸記録に目を通しておく。

『丁巳第十五卷由宇発利日誌』では「ヲサツ、此處に鮭番屋一棟有。其處よりチトセ並にイサリフトえ歩行道有るよし也。當時ユウハリ蝦夷八軒、……。扱此処より少し上がりて右の方小川有。字イカソフレと云よし也。……。」とある。この「イカソフレ」には「イカソヘツ」の注釈がある。

『戊午日誌第三十三卷東西新道誌』では「イカソブシ」について「小川にして皆礁砂也。急流。其名義、久敷振にて対面して喜びしと云義。イカソブシの訛りなるよし。……。」と説明している。これは1858年（安政5年）夏に現在の国道36号にはば近い道筋を西から東へ歩いた時のものであり、道路と川とが交わるあたりでの伝聞なのである。このなかで「新道」という表現をしているのは、その前年に幅2間で開削、改修なされたことの反映である。この『戊午新道日誌』の地図部分では「イカソブシ」とある。なお、『午十番手控』には「ヘカソブシ」と書いてあるという。

松浦武四郎と前後する時期の記録である『入北記』（玉蟲左太夫、安政4年の見聞録。1992年稻葉一郎解説）では、松浦武四郎が「新道」と記した道筋を、武四郎とは逆方向に進んで、千歳から島松へむかうなかで（9月9日）「……イカソブシト云フ處ニ至リ、小憩所アリ……」とみえる。これの帰路（12日）は「……（島松から2里半で）イカソブシテ小憩ス。……。」とある。

1822年頃（文政5年）の間宮林蔵の地図と伝えられている『蝦夷全図』は内陸の河川湖沼など詳細なものである。尺がありにも大きすぎて地名が読みとれないが、地名に関しては、部分拡大図とでもいえるものが小林和夫作成で示してある。この小林の付録地名図には「ヲサツ」の西隣に「井カソブシ」が描いてある。そして、この地図では「井カソブシ」川は直接沼に注いでいる。

1821年頃（文政4年）の伊能忠敬『蝦夷國測量図』は、詳細な図であるが、内陸は河川湖沼の記入がなく、地名が少ない。さいわい勇払、石狩間の山道の書き込みがあり、千歳、恵庭あたりは詳しいのだが、ここで話題にしている部分の地名は読み取れない。

以上のような呼称を古いものから並べると次のようになる。「井カソブシ」「イカソブシ」「イカソブシ」「ヘカソブシ」「イカソボシ」「イカソフレ」「イカソヘツ」「エカソブウシ」「イカソボシ」「ユカソボシ」。これを見ると、話す方、聞く方、書く人、読む人ともに「○カソ○○」は共通している。そしてこれらの語が川の名称であることは、一貫している。地名の意味（語義）は松浦武四郎の「イカソブシ」「久敷振にて対面して喜びしと云義。」しか伝わっていない。

呼称の変遷をたどると「ユカソボシ」は和語変形の結果であって、もっとも新しいものである。したがって、「鹿」に関連するものとはみなしがたい。地名の意味がすっかり失われ、川の名称にもかかわらず川のどのような特色でもって（地形、特産物）呼んだのかが明らかでない。つまり地名の発祥地とでもいうべきものが不明瞭なのである。「○カソ○○」の語形から思いつくのは「ベカソベウシ」である。しかし、「ユカソボシ」と呼ばれている地名のもとというには、「ベカソベ（ヒシ）の成育する地形条件」の吟味、P音の脱落の説明、伝承語義との連絡などに別途説明が必要である。

（西田 茂）

引用、参考文献

- 松浦武四郎著、高倉新一郎校訂、秋葉実解説 1982年 『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』下
松浦武四郎著、高倉新一郎校訂、秋葉実解説 1985年 『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』中
高倉新一郎編著 1987年 『北海道古地図集成』
佐々木利和編 1988年 『アイヌ語地名資料集成』

2. II 黒層遺物とその造構について

萩ヶ岡1、2式期の造構：図Ⅹ-1-②に縄文時代中期前半Ⅲ群a類期の住居と土壌を示した。本文で示したとおり、H-4、P-1、P-19、P-32について、それぞれの時期を決定する遺物中に共通する土器がある。従ってこれらを造構のセットとして捉える事ができる。共通する土器とは、図1に拓影で示した土器a₁（図VI-35-1）と土器a₂（図VI-35-10）、土器b（図Ⅹ-23-2）のうち2ないしは1種類である。a₁とa₂はいずれも径2mmほどの半截竹管による連続した押し引きを隆帯に施し、胎土と焼成についてよく似る。別個体だが、同一時期の土器と判断した。またa₁とa₂、bは包含層からも出土している。その出土位置について造構配置図に示した。a₁とa₂を'a'、土器bを'b'として表した。すると4つの造構に囲まれた台地上平坦部に分布が集中することがわかる。焼土の集中A〔F-32、40、47、48、50〕（VI章-4参照）や図Ⅹ-37に示した包含層出土石核の分布もほぼ合致する。当時、住居の南側に焼土が広がり、3基の土壌を利用したことが伺える。台地平坦面には小型の円形土壌P-6、7、13が分布する。本調査区内では定形的な造構である。先の4造構と時期的に同一かどうか遺物上からは判断できない。さらに、東側の一段低位な段丘面のII黒層焼土群付近に土器aの出土がある。関連して、太矢印で示した位置から北海道式石冠（縄文時代円筒土器文化特有の遺物）が出土している事を付記する。以上、同一時期の空間利用モデルとして提示する。

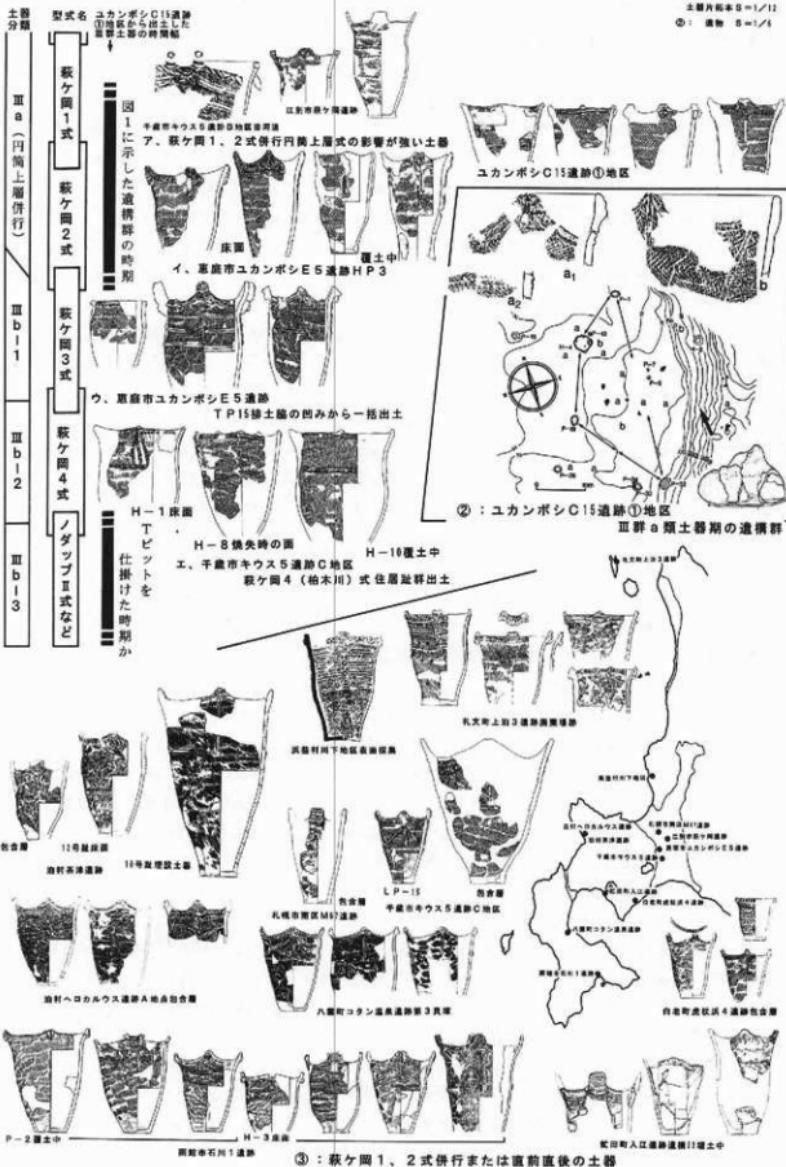
萩ヶ岡式土器：今回、萩ヶ岡1、2式が出土した縄文土器の主体である。この土器群を特定の期間を表す遺物群として認識する。編年上後続する萩ヶ岡3式（天神山式）の土器片はなかった。そこで、対比のために萩ヶ岡1、2式、萩ヶ岡3式、萩ヶ岡4式について、当遺跡から比較的近くに位置するユカンボシE7遺跡、キウス5遺跡C地区の造構に伴う土器をそれぞれにあてはめた（①）。一般に、萩ヶ岡3式を構成する器種をみると、波状口縁の頂部を棒状に造り出し、地文は斜行縄文の器が目立つ。胸部のふくらみが強くなり、口縁部には明瞭な肥厚帯を造り付ける。半截竹管施文について、竹管の端部で粘土紐の側縁辺を器に押しつけ、そのまま粘土紐上を直線的に引くという操作を連続した『刺突A』（図章-3参照）に類する刺突と、隆帯とは無関係に、竹管により器表面を直に押引いて加飾する、という2種類の装飾方法が普遍的となる。萩ヶ岡4式（柏木川式）については、頸部に屈曲部分を持ち、突起様の波頂部はあるものの平口縁といってよい深鉢が目立つ。3式段階においても、ウに示した様な平口縁深鉢はあるが、器形としてより確立する。ところで今回出土のⅢ群a類土器について、円筒上層b、c式の影響が強い然系圧痕文を隆帯上に連続して施す個体や、上層式そのものについて確定できる物（①-A）はない。③は、北海道の天塩山地、日高山脈より西の地域において、萩ヶ岡1、2式に併行する土器とその直前直後の土器を並べたものである。道南を中心とした沿岸部には、円筒上層b式から系譜がある弧線文モチーフを、細い隆帯や沈線で器面に施す土器が分布する。三角形の波状口縁を持ち、胸部がゆるく膨らむ。口縁部文様帶に大木8式起源の渦巻き文様をあしらう複林式に類した個体もある。それに対して石狩低地帯を分布の中心とする土器群は、胸部上半に直線構成の文様を施す。隆帯上連続刺突について施文具は多様である。今回出土の1、2式について、隆帯上「く」の字形連続施文の方法に、棒状工具と半截竹管、2種類の施文方法があり、相関的である。3式期の半截竹管施文の緒源が伺える。1、2式は器面調整を終えてから隆帯もしくは沈線加飾をする。調整として器内面をよく磨き、縄文施文によって器面を整える。隆帯の刺落したものについて裏面をみると、縄文地文の凸型が転写されているものがある。器面調整を先に施すため、粘土紐貼付けの直前には器表面が乾いていたことがわかる。この時期の遺物について焼成時の隆帯刺落が多い。隆帯上に施された連続刺突や短沈線の役割として、粘土紐の刺落防止もあると思われる。

『刺突A』には、それがよく表れていると考える。

（大泰司統）

2. II 黒層遺物とその遺構について

①：ユカンボシC15遺跡①地区周辺縄文時代中期中葉の土器支脈



図X-1 II 黒層遺物とその遺構 関連図

④：東光土器 S=1/11
土器片断本 S=1/12
◎：遺物 S=1/1

3. I 黒層の土器について

(1) アヨロ3類aと併行する土器群(図Ⅹ-2)

F-41からアヨロ3類aと併行する深鉢が出土した。この焼土の付近にあるF-37からは後北A式深鉢が1個体出土し、周囲の包含層からも後北A深鉢が1個体出土した。現在までのところアヨロ3類aと後北A式の並行関係は、江別太遺跡(1979年)、旧豊平河畔遺跡(1981年)の調査によって確定されており、今回の調査例は3例目となるものである。

本遺跡の例はその関係のあたりに位置付けられるのだろうか。先の2例のアヨロ3類aには形態上から新旧は見い出せない。江別太遺跡のアヨロ3類aはⅢ3層出土で、伴出したのは貼付帯が突起下のみにある江別太2式(高橋分類のI群2類a)であり、後北A式祖型である。旧豊平河畔遺跡のアヨロ3類aは1号住居出土で、伴出したのは貼付帯が横環しており江別太3式(高橋分類のI群1類でⅢ1層相当)であり、後北A式である。

F-37の深鉢は、貼付帯が4本横環し、突起下に4個のV字貼付文を付け、突起間に小さなV字貼付文をついている。器面に対して角度が深い三日月形の刺突が浅く付けられ、横位の押し引文がある。このような特徴は、江別太遺跡の後北A式(I群1類)には見られず、後出的な要素である。

一方、F-41出土の深鉢は器形・文様構成は先の2例と同じであるが、区画文様は異なる。2段の波状帯繩文の波裾と波頂と交わる部分に、斜行繩文で菱形をつけ、その帶繩文を刺突で区画している。器面に対して鈍角に刺突しているため短い押し引き文のようにも見える。

以上より、先の2例とF-41のアヨロ3類aとF-37の後北A式の関係は下記のようになる。

江別太遺跡Ⅲ1層→旧豊平河畔遺跡、1号住居→ユカンボシC15遺跡、F-41・37

波状帯繩文を沈線で区画しない類例として次の2例がある。これらはいずれも後北式系の器形である倒錐形を呈し、F-41の例とは異なる。北広里3遺跡包含層とフゴッベ洞窟層位不明の例である。

北広里3遺跡包含層の例は、3段のやや直線的な波状文の波裾と波頂とが交わる部分に、縦位沈線文をつけ、その帶繩文を刺突で区画している。ほかに包含層からはアヨロ3類a深鉢片が出土している。1号住居からは貼付帯が突起下にあり、横位沈線・斜沈線・鋸齒状沈線を多用する江別太1式(高橋分類のI群2類b)の深鉢が出土している。

アヨロ3類aの影響が、北海道中央部においては江別太1式→後北A式にかけてあり、文様構成の影響、器形・文様構成の影響にまで及んでいることがわかる。

(2) 後北A式深鉢の変遷(図Ⅹ-3)

江別太遺跡のI群1類は旧豊平河畔遺跡の後北A式に近接し、旧豊平河畔遺跡→F-37という関係が判明した。これに拠って遺跡とその周辺の資料を用い、後北A式の編年を試みる。

江別太遺跡の江別太1・2式深鉢は下記のように変化する。

突起下口唇部：縦位棒状貼付文→縦位棒状・V字状貼付文

頸部文様：鋸齒状・斜沈線文+区画文(押し引き状刺突・沈線)→斜沈線文+区画文(刺突)
旧豊平河畔遺跡の後北A式は下記のようである。

突起下口唇部：縦位棒状貼付文 頸部文様：鋸齒状・斜沈線文+区画文(刺突)

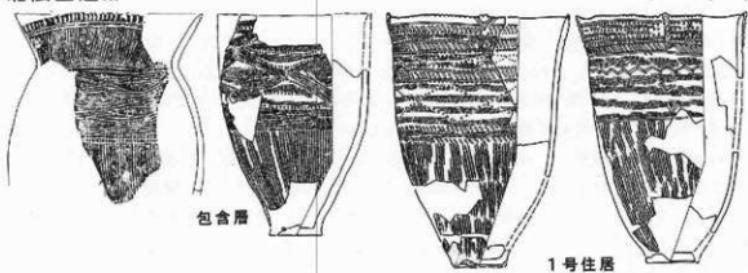
これらの特徴は、突起下口唇部直下に縦位棒状・V字状貼付文があること、頸部文様が帶状繩文とは別に区画文(押し引き状刺突・刺突)を伴う鋸齒状・斜沈線文があることである。江別太1式→江別太2式→旧豊平河畔遺跡の後北A式への変化は非常に漸移的である。

江別太遺跡の後北A式深鉢は、突起下貼付帯の施される位置が2種類あり、下記のようである。

突起下口唇部：挾角V字状貼付文 突起下横位貼付帯下：V字状貼付文+縦位棒状貼付文

3. I 黒層の土器について

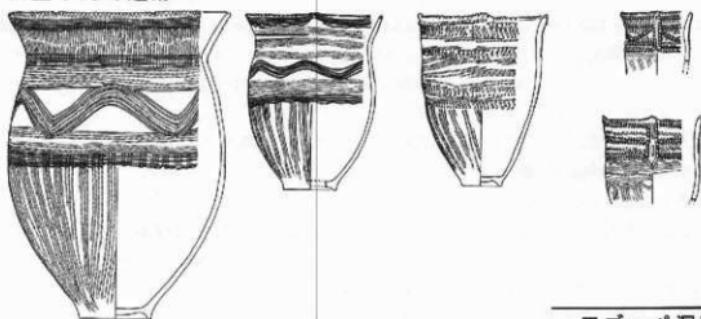
北広里遺跡



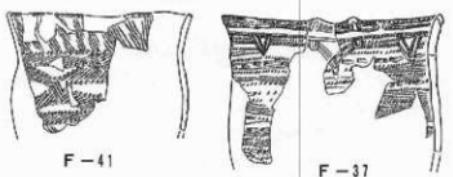
江別太遺跡 III 3層



旧豊平河畔遺跡 1号住居



ユカンボシ C15 遺跡



フゴッペ洞窟



図X-2 アヨロ3類aと併行する土器

頸部文様：帯縄文、間隔のあかない帯縄文+区画文（押し引き状刺突）

F-37の後北A式深鉢は、突起下横位貼付帯下にV字状貼付文、その脇に短い縦位棒状貼付文、頸部文様は間隔のあかない帯縄文+区画文（刺突）、その間に横位押し引き文がある。

これらの特徴は、江別太遺跡の後北A式深鉢は突起下口唇直下に貼付帯があるものが先駆的要素を持ち、突起下横位貼付帯下にV字状貼付文+縦位棒状貼付文があること、頸部文様が間隔のあかない帯縄文+区画文（押し引き状刺突・刺突）は後出の要素を持つ。江別太遺跡の後出的要素を持つものに較べるとF-37の後北A式深鉢はより後出的である。

ユカンボシC15遺跡包含層、オサツ2遺跡土坑墓（GP-5）の後北A式深鉢は下記の様である。

突起下横位貼付帯下：V字状貼付文+縦位棒状貼付文、菱形状貼付文+縦位棒状貼付文

頸部文様：間隔の空かない帯縄文とその上に横位押し引き文+区画文（刺突）

これらの特徴は、横環する貼付帯の本数が増えて突起下の貼付帯文様がより下部に付くよう見えること、V字の角度が開きV字状には見えなくなること、菱形貼付文が出現すること、帯縄文とその上に横位押し引き文があることである。

オサツ2遺跡土坑墓（GP-2・6）の後北A式深鉢は下記のようである。

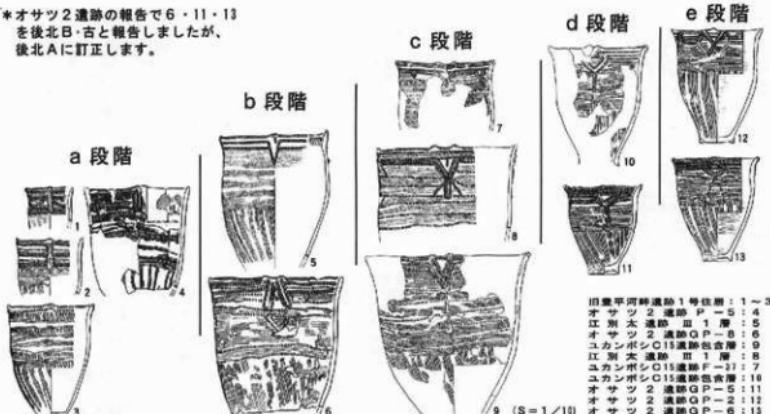
突起下横位貼付帯下：V字状、菱形状貼付文 頸部文様：帯縄文と刺突列を交互に施す。

これら特徴は刺突が区画文としてではなく、文様帶に変化して存在することである。

以上の特徴をまとめると次のような土器群が成立し、a→b→c→d→eと変遷する。

- a：突起下口唇部直下に縦位棒状・V字状貼付文、頸部文様に帯状縄文とは別に区画文（押し引き状刺突・刺突）を伴う鋸歯状・斜沈線文。
- b：突起下口唇直下に貼付帯、頸部文様に間隔の空く帯縄文+区画文（押し引き状刺突・刺突）
- c：突起下横位貼付帯下にV字状貼付文+縦位棒状貼付文、頸部文様に間隔の空かない帯縄文+区画文（押し引き状刺突・刺突）。
- d：横環貼付帯の本数が増え、菱形貼付文が出現すること、帯縄文とその上に横位押し引き文
- e：刺突が帯縄文の区画文としてではなく、独立した文様帶として存在する。

*オサツ2遺跡の報告で6・11・13
を後北B・古と報告ましたが、
後北Aに訂正します。



図X-3 後北A式の変遷

3. I 黒層の土器について

(3) 後北 C₂・D 式の分類案 (図 X-4・5、表 X-1・2)

下記の 2 点の問題から変遷を考慮する必要がある。

1：後北 C₂・D 式深鉢 (図 V-25-13) と北大 I 式深鉢が F-1 から出土している。この後北 C₂・D 式深鉢は終末期のどの時期にあるのか。

2：後北 C₂・D 式無文深鉢 (図 VI-3-15) と深鉢? (図 VI-2-14) が出土しており、とくに無文土器の縦年上の位置付けが不詳である。

後北 C₂・D 式の縦年は大沼 (1982 年) の 4 段階案があり、「初め」・「一般的」・「後葉」・「末」を設定し、さらに上野 (1987 年) は札幌市 K 135 遺跡の出土状況と文様構成から「一般的」を古と新に細分した。大島 (1990 年) は小樽市蘭島餅屋塀遺跡の土器を文様構成から I 類・II 類・III 類・IV 類・V 類に細分し、I 類→II 類・III 類→IV 類→V 類の変遷を提示している。大沼案との関係は述べられていないが、I 類は「初め」、II 類は「一般的」、III 類は「後葉」、IV 類・V 類は「末」に対応していると思われる。

細分の主な方法は、「一般的 (古)」・「一般的 (新)」が層位的事実にもづく以外は、遺跡内における同一文様構成を持つ土器群の抽出を細分単位としたものである。

私案は、同一文様構成を持つ土器群の抽出を基本とし、文様構成を系統別に分類して、K 135 遺跡の層位的事実を考慮したものである。無文化や終末に至る経緯を考察するには対象資料を道央地域のものとし、均質な条件を設定するのがよいとおもわれる。対象時期は「一般的 (古)」～「末」とする。文様構成を系統別に分類する上では上野 (1987 年) や林 (1988 年) が参考になった。分類要素の抽出は表 X-1・2 に示したとおりである。私案は大・中型深鉢に適用できる。小型深鉢、注口付き深鉢、注口、皿、ミニチュア土器は文様帶の圧縮・単位の欠落があるため当てはめるのは最適でない。

区画文様は文様割付けの基線である。区画文 I は波頂から下る縦位帯状繩文で、平縁になるとほとんど消滅する。区画文 II-1 は横環する「上帯」・「中帯」・「下帯」3 本で、区画文 II-2 は「上帯」・「下帯」2 本の帯状繩文である。それらにより器面は縦横に区画される。区画文 II-1 の場合は帯間が上下 2 区画あり、上側を「帯間 1-1」、下側を「帯間 2」と呼ぶ。区画文 II-2 は一つで「帯

表 X-1 後北 C₂・D 式深鉢の分類1)

I a	円形文を縦位帯と中帯の交点に、その両側に筋縫形文を配置。
I b	円形文を縦位帯と中帯の交点に、その両側に上下に開く横位弧形文を配置。
I c	円形文を縦位帯上の帯間 1-1 に配置。
I d	円形文を縦位帯上の帯間 1-2 に、他の文様を上下 2 段に配置。
II a	筋縫形文を縦位帯と中帯の交点に、その両側に上下に開く横位弧形文を配置。
II b	筋縫形文を縦位帯と中帯の交点に、その両側に上下に開く横位弧形文を配置。
III a	逆・捺強文を縦位帯と中帯の交点に配置。
III b	逆・捺強文を縦位帯上の帯間 1-1 に配置。
III c	逆・捺強文を縦位帯上の帯間 1-2 に配置。
IV	筋形・六角筋形文を縦位帯上の帯間 1-2 の上下 2 段に配置。
V a	通強文・六角筋形文を波頂下の帯間 1-2 の上下 2 段に配置。
V b	通強文を波頂下の帯間 1-2 に配置。
Via	U 字形文を縦位帯上の帯間 1-1 に配置。
Vi b	U 字形文を縦位帯上の帯間 1-2 の上下 2 段に配置。
Vi c	U 字形文を縦位帯上の帯間 1-2 に配置。
Vi a	V 字形文を縦位帯上の帯間 1-1 に配置。
Vi b	V 字形文を波頂下の帯間 1-2 に配置。
VI a	山形文を波頂下の帯間 1-2 に配置。
Vi b	山形文を波頂下の帯間 1-2 に、口縁部に円形刺突文に配置。
Vi c	山形文を波頂下の帯間 1-2 に、口縁部に円形刺突文、腹部が括れて口縁端面が水平に。
IX a	横位帯上に縦位帯状繩文を付し、縦位帯状繩文と充填状繩文が並列配置される。
IX b	横位帯状繩文の数が少ないと、横位帯状繩文と充填状繩文が横位帯状繩文を分断する。
IX c-1	横位帯状繩文の数が少ないと、横位帯状繩文と充填状繩文が横位帯状繩文を分断する。口縁部に円形刺突文、腹部が括れて口縁端面が水平に。
IX c-2	横位帯状繩文の数が少ないと、横位帯状繩文と充填状繩文が横位帯状繩文を分断する。口縁部に円形刺突文、腹部が括れて口縁端面が水平に。
X a	横位帯状繩文が多段配置される。
X b-1	横位帯状繩文の数が少ない。
X b-2	横位帯状繩文の数が少なく、口縁端面が水平に。
X b-3	横位帯状繩文の数が少なく、腹部が括れて口縁端面が水平に。



図 X-4 文様帯の説明

間1-2」と呼ぶ。

充填文は縦位帯上や帯間に施される。充填文I-1・充填文I-2(図c-1、図c-2を除く)の名称は区画文I上や波頂下の位置にある単位として見たときの命名である。充填文I-1は区画文II-1の中帶上と帯間に付される。充填文II-2は区画文II-2の帯間に主に付される。

充填文の円形文と紡錘形文との違いはつぎのとおりである。円形文を描くときには、短い単位で3度以上原体を回転させているもので、1度の弧の曲率が大きく真円が描ける。紡錘形文を描くときには、長い単位で2度原体を回転させているもので、1度の弧の曲率が小さく真円が描けず、弧形となる。それを横位上下に合わせて閉じている。

括弧文・逆括弧文は「()」と「) (」があり、弧形2個を縦位に描くもの。紡錘形文を90°回転させたものと解釈できる。紡錘形文との違いは、弧と弧のあいだが空いて充填文IIが入ることである。

菱形・六角形文は、横位に展開する弧形の重複が、上下に配置されて生じる文様である。

連弧文は、横位に展開する同じ向きに開いた弧形が、重複せず配置されて生じる文様である。

U字形文は、弧形の曲率が極めて大きくかつ連続せず、上向きに開いた文様である。

V字形文は、U字形文が直線化した文様。

山形文は、V字形文が上下反転した文様。

充填文IIは充填文Iの中を更に充填する文様である。充填文IIの中に長・短縦位帯状文とあるが、「長」は段内いっぱいに伸びているもの、「短」は段内で途切れるものである。なお区画帶のないものは充填文という概念もないのだが、充填文I以外という定義も含めて仮りに充填文IIの欄に置いた。

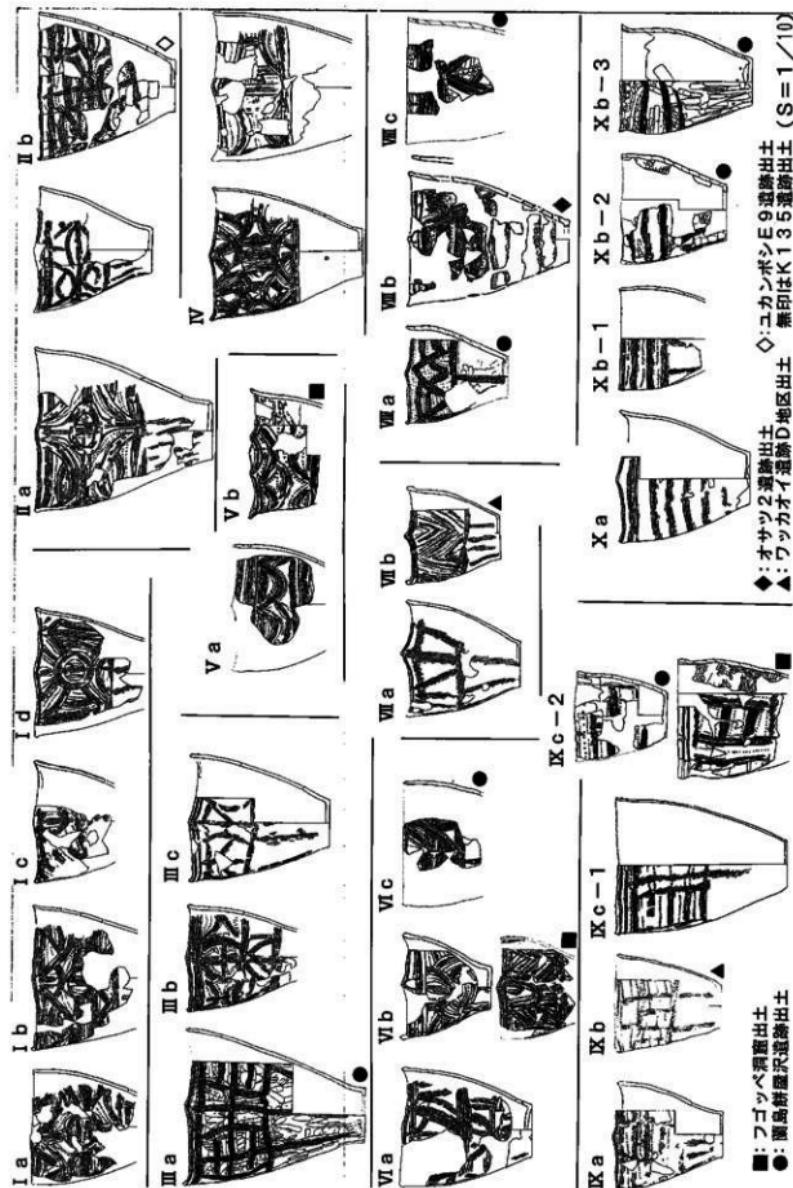
胴部下半より右側の項目は文様構成以外の要素を示した。文様構成以外の要素は大まかな目安であり、ある文様構成を持つ土器はこのような形態等を持つ傾向にあるということを示している。

「●」はその項目が当該することを示し、「○」はその項目が少例当該することを示し、「(●)」は充填文IIの項目において「●」に対して副文様となることを表す。「-」を不明を表す。

表X-2 後北C₂・D式深鉢の分類(2)

基準文様	充填文類												出現										
	充填文類 I-1			充填文類 I-2			充填文類 II			表面下地			口縁文様			口縁形状			口縁部位				
	横位 上 中 下	縦位 上 中 下	直位 上 中 下																				
Ia	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Ib	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Ic	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Id	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Ie	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
If	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Ig	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Ih	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Ii	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Ij	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Ik	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Il	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Im	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
In	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Io	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Ip	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
IQ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Ir	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Is	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
It	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Ik	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Id	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Ec-1	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Ec-2	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Ed-1	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Ed-2	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Ed-3	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

3. I 黒唇の土器について



図X-5 後北C₂・D式深鉢の分類

(4) 後北 C₂・D 式深鉢の変遷 (図 X-6)

後北 C₂・D 式深鉢の文様構成の変化は、文様帯の縮減に第一の原因があり、平縁化に第二の原因がある。それは、区画文 II-1 が区画文 II-2 に変化して帯間が減少し、器面の分割が単純化することであり、区画文 I が波頂から下るため平縁になると様割付けの基線となりえなくなることである。

- 1) このような区画文の変化を受けて充填文 I の施文位置も変化する。

- I : 縦位帯と中帯の交点→縦位帯上の帯間 1-1 →縦位帯上の帯間 1-2 の上下 2 段に
- II : 縦位帯と中帯の交点→縦位帯上の帯間 1-1 や 2
- III : 縦位帯と中帯の交点→縦位帯上の帯間 1-1 →縦位帯上の帯間 1-2
- V : 波頂下の帯間 1-2 の上下 2 段→波頂下の帯間 1-2
- VI : 縦位帯上の帯間 1-1 →縦位帯上の帯間 1-2 の上下 2 段に→縦位帯上の帯間 1-2
- VII : 縦位帯上の帯間 1-2 →波頂下の帯間 1-2
- VIII : 縦位帯上の帯間 1-2 →波頂下の帯間 1-2 →帯間 1-2

充填文 I 自体の変化(発生)もおこる。

- II : I が偏平になったもの。III : II の両端が欠失し 90 度転回したもの。
- IV : I ~ III の充填文 II (長短弧形) が充填文 I に転じたもの。
- V : IV の両端が重複しなくなったもの。VI : I の上部が欠失したものであろう。
- VII : VI が直線化したもの。VIII : VII が 180 度転回したもの。

区画文の変化が停止すると充填文 I 自体にも変化はなくなり充填文 II に変化が目立つ。例えば、VII の充填文 II は U・V 字形文や山形文や横位帯繩文→縦位帯繩文→短斜位帯繩文と変化する。

- 2) 充填文 I 系として定義(充填文 I の欠落?) できない IX・X は横位帯繩文の本数に変化がある。
- IX : 突起下に縦位帯繩文、横位帯繩文が多数→縦位帯繩文と横位帯繩文が交差、横位帯繩文の数が減少(3~5 本)→縦位帯状繩文が横位帯状繩文を分断、横位帯繩文の数が減少
 - X : 横位帯状繩文が多数→横位帯状繩文の数が減少(3~5 本)

- 3) 平縁化は d 段階に目立ちはじめ、同時に口縁部の形態変化が目立ち、口縁部文様に円形刺突文が加わる。付加される順序は、「円形刺突文→+口縁端面が水平→+頬部が括れる」である。

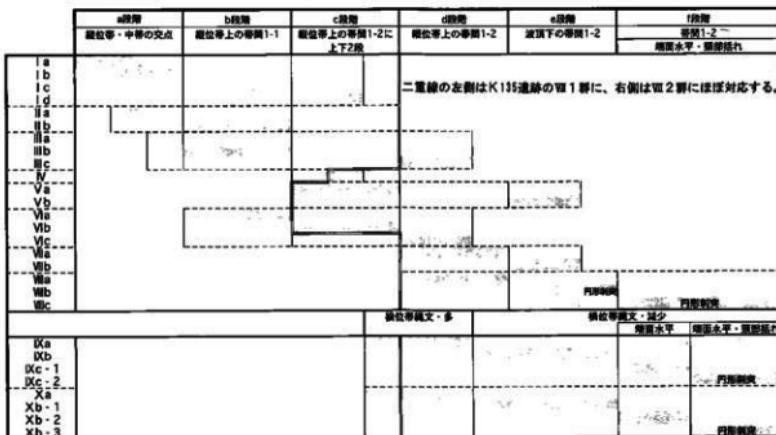


図 X-6 後北 C₂・D 式深鉢の変遷

(5) ユカンボシ C 15遺跡の後北 C₂・D式土器

F-1の深鉢（図V-25-13）は、口縁端面が水平で、頸部が括れることから、X b-3であり終末期にあたる。F-1周囲の深鉢（図V-2-14）は器高が低く、注口付き深鉢の可能性もあるので確実ではないが、口縁部の形態、頸部が括れないことからX bであろう。無文の深鉢（図V-3-15）は、平縁に小突起が付き、口縁端面を持ち、水平気味で、頸部が括れないことから、e段階後半～f段階前半に位置付けられる。

(6) 北大I式とVI群c類無文土器について（図X-7）

北大I式の細分は大沼（1982・89・97年）の二分案があり、内容は同じ段階を指していると思われる。「(古)」は口唇が角形、体部に帯状縄文や右下がり斜行縄文が施され隆起線や刺突により縁取られる。北海道大学構内ボーラー並木東地区遺跡を標識遺跡とする。「(新)」は口唇が丸みを持ち、口縁部が外反する。底部は厚くなり外へ張り出す。体部に斜行縄文。江別市吉井の沢遺跡を標識遺跡とする。

吉井の沢遺跡の中で「(新)」の定義よりも古相を示す土器があり、「(新)」「(古)」の中間に当たるものがある。口唇が角張って端面を持ち短い口縁部が外折し口縁径を増すが口縁径が著しく肩部径を凌駕することはない。これをもって「(新)」をb段階とc段階に二分し、「(古)」をa段階とよぶ。

本遺跡の土器（図V-25-12、26-18、図V-3-16、図V-4-41）は頸部が括れが弱いのでボーラー並木東地区遺跡の土器よりも一時期古い形態を示す。現時点ではa段階の初めと位置付けられる。

フゴッペ洞窟でdからf段階前半に当たる無文の深鉢とフゴッペ式が上層から出土している。フゴッペ式は太めの貼付帯を口縁部に縦横に付けること、口縁部の断面が角形であることから、a段階に近い要素を持っている。前後関係の精査は必要であるが北大I式の祖型の一候補と考えられる。

無文土器の例は、K 135遺跡で中型鉢がc段階、中型深鉢がd段階前半とe段階にある。蘭島餅屋沢遺跡では小型深鉢がd段階から、大型深鉢がdからf段階にある。フゴッペ洞窟でdからf段階前半にある。本遺跡では図V-3-15がe段階後半～f段階前半の例がある。

無文化はc段階の後北C₂・D式の鉢に始まり、続いてd段階に大型深鉢に起こり本格化する。それは北大I式において注口・片口に及ぶ。後北C₂・D式後葉に始まる有文土器と無文土器の2系は、北大II・III式にも引き継がれる。



図X-7 VI群c類無文土器の変遷

(7) 土坑墓等出土の土器 (図Ⅲ-8)

1. 坯の変化について

ユカンボシ C 15 遺跡の坯は全て非クロロ成形技法で、平底気味の丸底と平底がある。平底気味の丸底には、内底面が放射状ミガキで内外面に段があり、体部は内弯するものと、段が痕跡的となって凹み、体部が内弯するものがある。平底には体部中位の内外面に段があるものと、体部中位に沈線があるものとがある。このような特徴の類似は下記の遺跡においても見られる。

末広遺跡 I H-11 の坯は全て非クロロ成形技法で、内外面に段を巡らし、やや丸底気味である。末広遺跡 I H-80 の坯は非クロロ成形技法で、内外面に段を巡らし、平底気味の丸底で体部は内弯する。末広遺跡 I H-31・52 の坯は全て非クロロ成形技法で、形態は平底に近い。底部と体部の屈曲部分が凹み、体部は内弯する。末広遺跡 I H-62 の坯は全て非クロロ成形技法で、形態は平底。以上の特徴は、丸底から平底への変化に伴い、内外面に段（丸底気味）→内外面に段（平底気味の丸底）→屈曲部分が凹む（平底に近い）→平底へと変化している。

2. 壶の変化について

ユカンボシ C 15 遺跡の壺は、頸部の段状沈線が肩部と口縁部に数本づつあるもの、それが多条化したものとがある。段状沈線が肩部と口縁部に数本づつあるものには、口縁部が発達するものと発達しないものがある。このような特徴の類似は下記の遺跡においても見られる。

末広遺跡 I H-11・80 の壺は、少ない段状沈線が肩部と口縁部に分かれたり、口縁部が発達するものと発達しないものがある。末広遺跡 I H-52・47・62 の壺は多条化したものと無文のものがある。以上の特徴は、少ない段状沈線が肩部と口縁部に→肩部と口縁部に多条化した段状沈線→頸部全面を覆う沈線へと変化している。

3. 球胴壺の変化について

ユカンボシ C 15 遺跡の球胴壺は、頸部の沈線が多条化し、最大径が胴部上半にあり、器高の割に最大径が小さく球胴型的でない。このような特徴の類似は下記の遺跡においても見られるのだろうか。

末広遺跡 I H-11 の球胴壺は頸部に段状沈線がまばらにつく。I H-80 の球胴壺は段状沈線肩部と口縁部に数本づつあり、最大径が胴部中央にあり、器高の割に最大径が大きい。外面のミガキ方向が上半がヨコ、下半がタテとはっきり分かれる。段状沈線の多い個体のほうが最大径が上部にある。

以上の特徴は、壺の変化から類推すると、ユカンボシ C 15 遺跡と末広遺跡の例で時間差を表している。頸部に段状沈線がまばら→段状沈線肩部と口縁部に数本づつ、最大径が胴部中央→段状沈線が多条化し、最大径が胴部上半へと変化している。

4. 須恵器について

ユカンボシ C 15 遺跡の須恵器は生産地が未確定であるため、詳細な年代の決定は難しい。産地を東北地方に求めた場合、ヘラ切り高台付き須恵器壺・底部ナデ調整須恵器壺は、8世紀後半から9世紀前葉の間に位置付けられ、秋田城出土の編年試案（小松正夫、日野久、西谷隆、伊藤武士：1997年）によれば、形態と技法から8世紀第4四半期～9世紀第1四半期にしづり込まれ、伊藤武士、利部修、日野久氏のご教示によれば、8世紀第4四半期の可能性が高い。

双耳須恵器壺は8世紀後半から9世紀後葉の年代が与えられている。秋田県内では9世紀代に焼造されている。耳の付く位置は、末館窯跡・I号窯（1963年）が体部中位、富ヶ沢B窯跡・SJ 101（1992年）が体部中位、富ヶ沢B窯跡・SJ 102（1992年）が体部上位と竹原窯跡・SJ 01（1991年）口唇部で、いづれも耳が壺部の体部中位～口唇部についている。村田晃一氏に実見していただき、耳の位置が焼造時期（下位：古→上位：新）を示すこと。そのことから本遺跡の双耳壺、8世紀後半の可能

3. I 黒褐の土器について

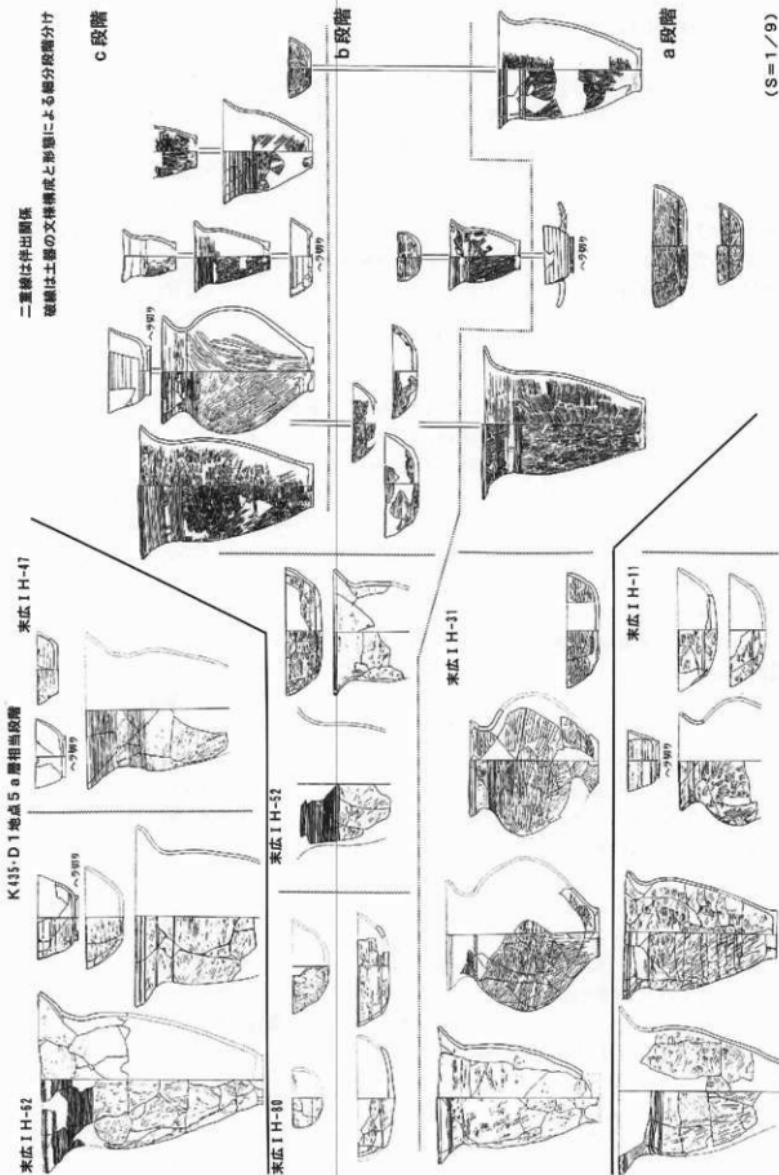


図 X-8 土坑墓等出土土器の時期

性が高いというご教示を受けた。同氏報文(1996年)によると秋田県よりも古い例がある。宮城県黒川郡大衡村、彦右エ門橋窓跡・SK 1(8世紀後葉~9世紀初頭)の例で耳は坏部の体部中位に付いている。いずれも本意遺跡例より後出的な形態であり、8世紀後葉よりも以前と考えられることから、本遺跡例の年代は妥当で、生産地は古い例のある宮城県あたりに求められるのかもしれない。

5. 段階の設定と層年代

- c段階: 平底坏、沈線が多条化した壺、沈線が多条化し、最大径が胴部上半にある球腹壺
- b段階: 屈曲部分が凹む(平底に近い)内弯坏、少ない段状沈線が肩部と口縁部にある壺
- a段階: 外面に段(平底気味の丸底)の内弯坏、少ない段状沈線が肩部と口縁部にある壺
- c段階は末広遺跡ⅠH-47・62と同じ壺・壺・ヘラ切り高台付き須恵器坏を持つ。これら共通点は時間的に近接していることを示しているが、新しい要素だけを拾いあげると外面がミガキで頸部全面を覆う沈線の壺、糸切り須恵器坏がある末広遺跡ⅠH-62・47はc段階より新しい。a段階は末広遺跡ⅠH-80と同じ組成(壺・壺)を持つ。b段階は末広遺跡ⅠH-31・52とほぼ同じ壺を持つ。

以上より、a段階→b段階→c段階という順序が成立する。a段階は、外外面に段(平底気味の丸底)の内弯坏があるⅠH-80と併行する。c段階は、頸部全面を覆う沈線の伴う壺がある末広遺跡ⅠH-62・47よりも若干古い。豊田宏良(1997年)は須恵器との共伴関係より、末広遺跡ⅠH-62・47を9世紀前葉、末広遺跡ⅠH-11を8世紀中葉と推定している。したがって、a~c段階は8世紀後葉~8世紀末の層年代が与えられる可能性が高い。
(鈴木 信)

4. 撥文文化期の墓

(1) 土坑墓について(図X-9、表X-3)

1. 土坑墓の構造など

土坑墓内に骨・歯は遺存していなかった。また、袋状土坑や小柱穴などの付属施設も持っていない。壁は直線的で外傾しながら立ち上がるものが多い。平面形は隅丸長角形(P-3・9・12・27)、小判形(P-2・17・29)、短い小判形(P-14・30・31)、長い小判形(P-8・28、X-1・G4)、幅の広い長方形(X-1・G2)、幅の狭い長方形(X-1・G1・3)がある。

隅丸長角形・小判形は後北朝から続く伝統的な平面形である。長い小判形・長方形は本遺跡例をさかのぼる時期の類例がないのでこの頃に始まる平面形であろう。長い小判形の継続する例として9世紀前半の千歳市末広遺跡(1981年)IP-57があり、より長くなった伸展葬墓が撲文文化期中後期

表X-3 土坑墓等の分類要素一覧

遺構名	総長(m)	幅員(cm)	平面形態	副葬品(墓坑内・棺内)	副葬品(墓口部)
X-1・G4	-2.2	1.16	長い小判型		
P-3	+1.2	(1.25)	隅丸長方形	壺(3個)	
X-2	-2.0	(2.0)	長方形	小刀	
X-1・G1	+2.5	1.08	長方形	斧・石器	
P-8	+2.5	1.42	長い小判型		
P-17	+3.2	0.98	小判型		
P-	+3.3	0.9	短い小判型		
P-19	+4.1	0.98	小判型	耳・ミニチュア壺	須恵器及耳坏・鏡石
P-11	+4.1	1.41	長い小判型		小判型・ミニチュア壺
P-21	+4.5	1.48	隅丸長方形	大型壺・刀子・鉄薬材	
X-1・G2	+4.6	0.9	長方形		
X-1・G3	5.1	0.9	長方形		
P-9	+5.3	1.45	隅丸長方形	手斧・鏡	
P-30	+5.3	6.1	短い小判型	壺	小型壺
P-11	+5.4	5.6	短い小判型		須恵器坏・ミニチュア壺
P-18	6.3	1.01	隅丸長方形	壺・刀子・斧・鏡	
P-2	+6.7	(1.32)	小判型		

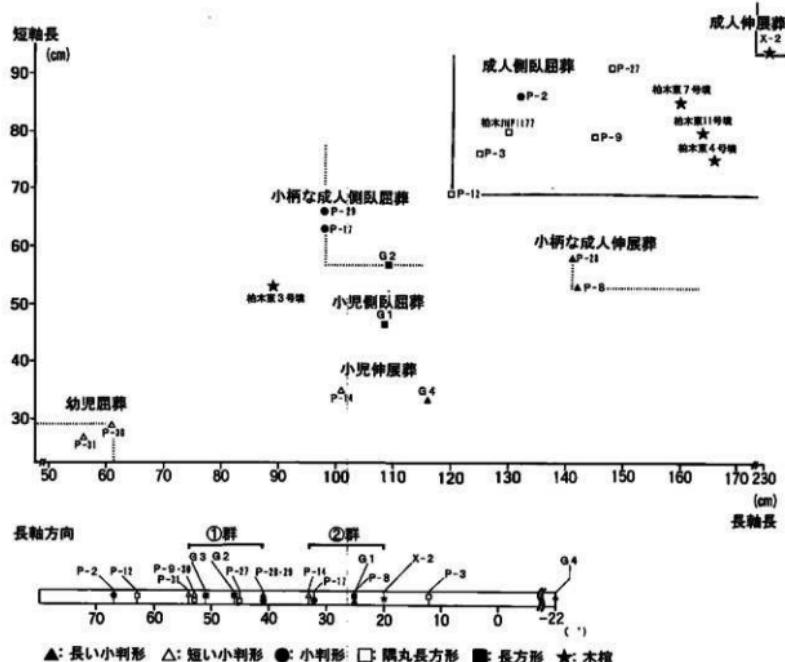
*長軸方向は真正から西に振れるものは正数、東に振れるものは負数表示す。

をへて近世アイヌ文化期に連続している。長方形はX-1のみにある。他の土坑墓と系譜が異なる可能性があり、同時期の木棺墓(X-2)からの影響が考えられる。より長くなった伸展葬墓が10世紀中葉の森町御幸町遺跡(1984年)Pit 1にあり、引き続いて近世アイヌ文化期に見られる。

土坑墓は壁がほぼ垂直に立ち上がり、付属施設・掘り方が認められなかった。土坑墓は遺体そのものを埋葬する空間であり、再葬がないと仮定すると上端長軸長は遺体の大きさを表していると考えてよいだろう。土坑墓の規模を長軸長でみると56~148cmまでの範囲に収まる。そして56~60cm(I群)、98cm(II群)、101~132cm(III群)、141~148cm(IV群)の4群に分かれる。小樽市蘭島遺跡D地点(1991年)・千歳市ウサクマイA遺跡(1975年)の遺体が残っている土坑墓の長軸長・短軸長から類推すると、I群は幼児、II群小児、III・IV群は成人を埋葬したと推定できる。

埋葬姿勢・年齢については、長軸長に短軸長が関係していると考えられる。骨が遺存していないので伏臥か仰臥かは不明である。P-30・31は幼児の屈葬、G-1は小児の側臥屈葬、P-17・29とG-2は小柄な成人の側臥屈葬、P-2・3・9・12・27は成人の側臥屈葬が考えられる。P-8・14・28、G-4は短軸が短いので膝を横に倒すことは難しい、P-8・28は長軸長が割合長く小柄な成人の伸展葬、P-14、G-4は長軸長が短かく小児の伸展葬が推定可能である。

長軸方向の変異は+67度から-22度まであるが、+54度から+20度に集中する。そして+54度~+42度の群(①群)と+33度~+20度の群(②群)に分かれる。



図X-9 土坑墓等の軸長・長軸方向

①群は側臥屈葬（4/8例）が多く、土器を副葬する。②群は伸展葬（2/4）があり、土器を副葬しない。そしてこの群にはX-2も含まれている。G3・G2（①群）とG1（②群）は切り合いがあり、G3・G2→G1という新旧関係があることから、①群（側臥屈葬が多い群）と②群（伸展葬がある群）とも考えられないこともないが、双方の群に2種類の埋葬姿勢が混在していることを考慮すれば併存しつつ、最後に②群の一部が造墓されたと考えるのが妥当である。

7世紀代の小樽市蘭島遺跡D地点・千歳市ウサクマイA遺跡においては側臥屈葬が主流の埋葬姿勢である。本遺跡は側臥屈葬が多いけれども屈葬がないわけではない。森町御幸町遺跡（1984年）Pit1は、長軸217cm・短軸120cmの長方形で伸展葬であろうことから、10世紀中葉以前の一時的な流行と推測できる。②群の中にX-2があり木棺伸展葬の影響が考えられる。そうだとすると、強度の屈葬ではなく仰臥で立て膝のような伸展葬様の屈葬が想定できる。

2. 副葬品

墓口脇にある使用後に底部穿孔された土器の副葬、墓口脇・墓坑内への土器の配置は後北期から続く伝統的な習慣である。本遺跡では墓口脇に副葬する例は幼児・小柄な成人と推定される土坑墓例に集中する。後述するX-1・G2の例より、小柄な成人が女性と仮定された場合、幼児・女性の土坑墓は伝統的な習慣を保持していると言える。

土器のなかで特筆すべきは、双耳須恵器坏である。（赤焼き）の双耳坏は後藤遺跡15号墳周溝から1例出土していて、赤褐色土器であること、耳が体部上半についていることから9世紀後葉である。よって、本遺跡例が道内最古となる。村田報文（1996年前出）によると、双耳須恵器坏は城柵（多賀城、伊治城、秋田城、払田柵、志波城など）・官衙とその周辺に多く出土しているので、直接搬入されたとすれば8世紀後葉の城柵・官衙との関係を示唆している。

P-3に疊を副葬する例がある。これは伝統的な習慣で、埋葬姿勢とも相応する。

金属器の副葬は工具と農具であり武具は見られない。側臥屈葬の成人と推定される中で比較的大きな規模を持つ土坑墓に集中する。比較的大きな規模を男性と仮定した場合、工具と農具を保持する役割があったといえる。ただし、小樽市蘭島遺跡D地点（1991年）81-10D土壤のように幼児墓に刀子・銅製環が副葬される例がある。刀子については万能器具的な使用方法が考えられ、十分に供給された場合、年齢によって扱われ方が異なるということはないかもしれない。

（2）周溝のある墓について（表Ⅹ-4）

「周溝のある墓」に似た遺構として青森、岩手県など東北北部では、「円形周溝」・「環状溝」・「環状遺構」などの名称がつけられている。これらは本来マウンドを持った遺構であるとの見解が主流である。本遺跡のX-1～3は墳丘を持っていないので、同じ用語を使用できない。そこで仮りに「周溝のある墓」と呼んでいる。X-1～3の類例は現在までのところなく、後藤遺跡、柏木東遺跡、町村農場1遺跡などは何れも墳丘が存在したという。

1. 構造について

周溝は長軸長4～5mで馬蹄形を呈する。周溝の途切れる部分は南側にある。周溝の調査が行われた後藤遺跡と比較すると、規模としては中級であり、一般的な長軸長と周溝の形態である。

主体部はX-1が土坑墓で、G2・3は構築時に併存し、G1・4は追葬されていた。主体部が多數あることは土坑墓が群を形成することに等しいもので、一主体部一墳丘（一周溝とも言い替えられる。）が原則の北海道式古墳には見られないことである。X-2（木棺直葬）には墳丘はないものの、この原則を順守している。

北海道式古墳の祖型がある東北北部においてもほとんどみられない。青森県上北郡下田町、阿光坊

4. 捷文化期の墓

9号墳の1例があり、一見そう見えるが、周溝と主体部のひとつが切り合っており、新たに主体部を構築した際に以前の周溝を利用したと考えた方がよい。よって、元々あった周溝内に新たに主体部を納めるという意図ではないのでX-1とは異なる。

X-2の木棺直葬墓は後藤遺跡15号墳主体部と同じ構造をしている。藤沢 敦(1997年)が「四辺埋め込み式」と分類している主体部構造である。これは、壁付近の壇底面に溝状の掘り込みを入れて、そこに短い板を埋め込み並列させるもので、そのため墓坑底に不連続の溝が残る。X-2にも長さ10~30cmの不連続の溝が巡る。

天野哲也(1985年)は北海道式古墳の主体部の規格が3種類あることを指摘して埋葬姿勢・年齢にも言及している。その中で最も小さい墓坑を年少者と推定し、つぎのを横臥屈葬かと推定している。

例えば、柏木東遺跡3号墓は私分類でいうと小児の側臥屈葬になり、天野氏の推測に合致する。4・7・11号墓も、私分類でいうと成人側臥屈葬となり、天野氏の推測に合致する。北海道式古墳においては側臥屈葬・伸展葬の2種類の埋葬姿勢があり、柏木東遺跡では側臥屈葬(4/15例)が少なからずある。北海道式古墳の側臥屈葬の墓坑は土坑墓のそれと比べると大きい。遺体のみを埋める空間ではなく副葬品を入れる空間としての意味が加わる。X-1が側臥屈葬・伸展葬で古い埋葬姿勢が残り、それが土坑墓と近似する。X-2は伸展葬であり新しい埋葬姿勢で、北海道式古墳と近縁性を持つ。

2. 副葬品について

副葬品は、X-1がG1内に疊、周溝・区画域に底部穿孔のない供獻土器がある。土坑墓にはない球頭窓の供獻がある。疊の副葬はX-1・G1に見られ、柏木東遺跡でも例があり古相を示している。X-2は墓坑内に小刀、周溝には何もない。X-1・X-2ともに副葬品は少なく、内容は土坑墓と比べて変わることろがなく、種・量は土坑墓が豊かである。新しい埋葬方法の採用と副葬品の多寡が相關していない。敢えて推測するなら、伝統的な有力者ではない者が新しい送葬儀礼を導入した可能性がある。唯一性別が推定可能な遺物がX-1区画域内から出土した。土製紡錘車である。G1・4が小児と推定されることから、G2・3のいずれかが女性となるか。

表X-4 北海道式古墳との比較

	ヨシダC15遺跡	柏木東遺跡	後藤遺跡	町村農場1遺跡
墳墓の数	3	14	21以上	2
墳丘の有無	あり	あり	あり	あり
周溝の形態	馬蹄形	円・稍円形?	円・稍円・馬蹄形	円形など
主体部の形態	土坑墓：木棺	木棺?	木棺?	不明
主体部の大きさ	小	大	小	大
埋葬姿勢	側屈 など	伸展	側屈(大)伸展(大) 側屈(小)	側屈(大)伸展(大) 側屈(小)?
主体部副葬品	明らか	疊	疊	疊
武具		あり	あり	あり
工具	あり	あり	あり	あり
農具	あり	あり	あり	あり
装飾品	あり			あり
その他	あり			あり
土器		あり	あり	あり
周溝の供獻品	明らか	明らか	不明	一部明らか
武具				あり
工具	あり			あり
農具	あり			あり
装飾品	あり			あり
土器	あり			あり

武具：太刀、鎌
工具：刀子、斧
紡錘車
磁石
農具：鎌、鍬

* 伸展は側臥屈葬のことである。明らか・不明とは報告の内容のことである。

X-1は墓坑の平面形・周溝という造墓にかかわる外的な要素は採用したが、埋葬姿勢や主体部を複数持つ伝統的な要素を保持している。X-1が送葬に関わる要素の伝統性の保持するいっぽうでX-2は新來の葬法を採用していることは、葬法が漸次的に変容をしていることを示す。

周溝のある墓と土坑墓群は併存しながらも、土坑墓は伝統的様相が濃厚で、X-2は対照的に新來の要素が明らかである。X-1はその中間的な様相を示している。

3. 北海道式古墳との時間的関係

本遺跡における造墓の歴年代は、土坑墓群の土器、X-1の土器、G1~3の切り合い関係、土坑墓群の長軸方向、G1~3とX-2の長軸方向から、8世紀後葉から9世紀初頭である。

北海道式古墳については資料に偏りはあるが、現段階での歴年代を述べて、本遺跡との比較とする。

後藤遺跡（1981年）は21基が確認されている。長軸方向は2・4・5・14・20号墳が略東→西（開口部）、11・16・17・18・19号墳が略西北西→東南東（開口部）、1・3・6・10・12・13・15・21号墳が略南東→北西（開口部）。少なくとも3群あることから比較的長く造営されたようだ。

坏は私細分のa段階が1点（15号墳）、c段階が2点（3・10号墳）。甕は私細分のa段階が2点（3・5号墳）、c段階が2点（3号墳）。須恵器は秋田城の出土例を参考にすると、9世紀前半となる丸底気味の坏が1点（17号墳）、9世紀後葉となる高台付きの糸切り坏が2点（5・15号墳）と糸切り坏が1点（12号墳）、9世紀後葉となる赤褐色土器双耳坏1点（15号墳）がある。

土器の年代は周溝出土であるが、8世紀後葉～9世紀後葉の幅があり、長軸方向が複数の群をなすことと一致する。恐らく後藤遺跡は8世紀後葉から9世紀後葉にかけて造営されたと考えられる。

柏木東遺跡は河野広道（1934年）・天野（1992年前出）から推定すると、9（1-A）・2・3・7号墳が西北西→東南東（頭位）、4号墳が北→南（頭位）、1号墳が北東→西南（頭位）であり、2群以上が想定される。

土器は後藤寿一・曾根原武保（1934年）、石附喜三男（1972年）、山本哲也（1988年）、天野（1992年前出）に報告されている。坏は私細分のa段階以前1点（9号墳）、甕は私細分のc段階が2点（1・14号墳）。須恵器は秋田城の出土例を参考にすると、8世紀第4四半期～9世紀第1四半期となる高台付き坏が2点（1・11号墳）、同じ時期くらいの器高の低い坏が1点（11号墳）がある。

土器の年代は8世紀中葉～9世紀前葉の幅があり、長軸方向が複数の群をなす可能性を表している。恐らく柏木東遺跡は8世紀中葉から9世紀前葉にかけて造営されたと考えられる。

町村農場1遺跡は2基あるが長軸方向などの詳細は不明である。山本（1988年前出）がX-G号墳周溝の須恵器を再報告している。それによると、8世紀第4四半期～9世紀第1四半期となる高台付き坏である。古墳もこのころに造営されたのだろう。

以上より、後藤遺跡は8世紀中葉から9世紀後葉、柏木東遺跡は8世紀中葉から9世紀前葉、町村農場1遺跡は8世紀末以降、ユカンボシC15遺跡は8世紀後葉から9世紀初頭に造営されたと考えられ、後藤遺跡の造墓期間が他より長期にわたるが、4遺跡は一時期併行していた。

4. 墓群立地と被葬者の村

墓は長都沼に向かって半島状に孤立した微高地に立地する。遺跡内に同時期の竪穴住居跡は存在しない。土坑墓群と周溝のある墓の被葬者は他に求めなければならない。本遺跡から約600m離れた所にユカンボシC3遺跡がある。この遺跡の土器を実見したところ、P-27と同じ形態、胎土を持つ坏やX-1の須恵器坏と同じものを数点確認した。墓群の継続した時期とも一致する。以上のことをから被葬者の集落をユカンボシC3遺跡に求めてよいと思われる。

（鈴木 信）

4. 球文化期の墓

3-(1)・(2)の参考文献

- 江別市教育委員会 「江別大遺跡」(1979年)
- 江別市教育委員会 「旧豊平河畔遺跡」「元江別遺跡群」(1981年)
- 高橋正勝 「北海道中央部の統繩文時代」「北海道の研究 1」(1984年)
- 野村 崇・大島秀俊 「北海道余市町フゴッペ洞窟出土の土器(1)」「北海道開拓記念館調査報告 31」(1992年)
- 深川市教育委員会 「北広里 3 遺跡」(1994年)
- 動北海道埋蔵文化財センター 「オサツ 2 遺跡(1)・オサツ 14 遺跡」(1995年)
- ##### 3-(3)・(4)・(5)・(6)の参考文献
- フゴッペ洞窟調査団 「フゴッペ洞窟」(1970年)
- ワッカオイ調査団 「Wakkaoi Ⅲ」(1977年)
- 動北海道埋蔵文化財センター 「吉井の沢遺跡」(1981年)
- 大沼忠春 「後北式土器」「縄文土器大観 3」講談社(1982年)
- 田才雅彦 「北大式土器」「北古時代文化 14」(1983年)
- 札幌市教育委員会 「K 135 遺跡」(1987年)
- 北海道大学 「北大構内の遺跡 5」(1987年)
- 北海道大学 「北大構内の遺跡 6」(1988年)
- 大沼忠春 「統繩文式土器様式」「縄文土器大観 4」小学館(1989年)
- 小樽市教育委員会 「蘭島屏風沢遺跡」(1990年)
- 千歳市教育委員会 「祝梅山田川遺跡における考古学的調査」(1991年)
- 野村 崇・大島秀俊 「北海道余市町フゴッペ洞窟出土の土器(1)」「北海道開拓記念館調査報告 31」(1992年)
- 恵庭市教育委員会 「ユカンボシ E 9・E 3 遺跡」(1993年)
- 上野秀一 「北海道統繩文化の諸問題」「北日本統繩文化の実像」(1994年)
- 動北海道埋蔵文化財センター 「オサツ 2 遺跡(1)・オサツ 14 遺跡」(1995年)
- 大沼忠春 「8・9世紀の土器一縦縫に沈線のある斐形土器」「昭夷・律令国家・日本海」 日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会編 (1997年)
- ##### 3-(7)、4の参考文献
- 後藤寿一 「古墳墓の発掘について」「昭夷往来 8」(1932年)
- 河野広道 「北海道の古墳様式について」「考古学雑誌24-2」(1934年)
- 後藤寿一・曾根原武保 「組垂環千歳郡恵庭村の遺跡について」「考古学雑誌24-2」(1934年)
- 後藤寿一 「北海道における古墳出土遺物の研究 (一)」「考古学雑誌24-2」(1934年)
- 雄物川町教育委員会 「平鹿郡雄物川町末館廬址発掘調査報告書」(1963年)
- 北海道文化財保護協会 「柏木川」(1971年)
- ウサクマイ遺跡研究会 「烏樋廬」(1975年)
- 天野哲也 「『概文化成立における古墳の意義』」「考古学研究24-1」(1979年)
- 江別市教育委員会 「後藤遺跡」「元江別遺跡群」(1981年)
- 千歳市教育委員会 「末広遺跡における考古学的調査 上・下」(1981・82年)
- 天野哲也 「『概文化社会における金属器の普及量と所有形態』」「考古学研究30-1」(1983年)
- 森町教育委員会 「御幸町」(1984年)
- 天野哲也 「北海道式古墳再考」「古代文化37-10」(1985年)
- 山本哲也 「北海道出土の須恵器資料紹介」「うつわ 2」(1988年)
- 玉川英喜 「岩手県内の円形周溝と方形周溝」「岩手県立埋蔵文化財センター研究紀要 X」(1990年)
- 盛岡市教育委員会 「志波城跡」(1990年)
- 秋田県教育委員会 「東北横断自動車道秋田縦貫線調査報告書 Ⅲ」(1991年)
- 小樽市教育委員会 「蘭島遺跡 D 地点」(1991年)
- 天野哲也 「曾根原武保ノート(前)」「北海道考古学 28」(1992年)
- 秋田県教育委員会 「秋田ふるさと村(仮称)建設事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書」(1992年)
- 札幌市教育委員会 「K 435 遺跡」(1993年)
- 天野哲也 「3 北海道」「古墳時代の研究 13」(1993年)
- 田才雅彦 「統繩文時代後北期から概文化時代初頭の土墳墓」「21世紀への考古学」雄山閣 (1993年)
- 伊藤博幸・酒井清治 「須恵器集成図録」「雄山閣」(1995年)
- 宮城県教育委員会 「下草古城跡ほか」(1996年)
- 村田晃一 「宮城県内の墳墓情報」「窓研通信 7」(1996年)
- 神 康夫 「青森県内の円形周溝地名表」「研究紀要 1」青森県埋蔵文化財調査センター (1996年)
- 藤沢 敦 「東北北部の末期古墳の主体部構造」「1997年度東北史学大会 研究発表要旨・資料」(1997年)
- 小松正夫・日野 久・西谷 隆・伊藤武士 「秋田城跡出土土器と周辺窓の須恵器編(試案)」「昭夷・律令国家・日本海」 日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会編 (1997年)
- 豊田良美 「北海道における須恵器の様相」「昭夷・律令国家・日本海」 日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会編 (1997年)
- 伊藤武士 「出羽における10・11世紀の土器様相」「北陸古代土器研究 7」(1997年)

5. 包含層出土の石器について

96年度ユカンボシ C 15遺跡①地区、③地区から出土した石器は約4,000点、97年度①地区、③地区から出土した石器は3,794点である。そのうち石鎌未製品、石斧片、石斧未製品、R フレイク、U フレイク、フレイク、有意な礫・礫片、礫・礫片を除いた、器種になる石器の数は、96年、97年を合わせて328点出土した。それをⅠ B、Ⅱ B 層の台地、低地に分けたものが、表X-5である。

Ⅰ B 層台地部から出土した器種として分類された石器は71点である。石器の接合は、それぞれの器種の事実記載部分、分布図で示したが、器種に上らないものでは、G 62 d Ⅰ B 出土と G 64 a Ⅰ B 出土の縞貝殻のフレイクが接合した。台地部ではⅠ B 層全体で出土した器種すべてがある。Ⅰ B 層台地部では、石鎌が器種全体の57.7% (41/71) となり半数を超える。そのほかの器種は10%を超えるものはない。遺構からは焼土 F-1、78から北大式期に伴うスクレイパーが出土している。すべて下端部に刃部をもち、図V-26-20、21のように原石面を残すものもあり、後北期のものより厚みをもつ。

Ⅰ B 層低地部から出土し、器種として分類された石器は、21点である。石錐、スクレイパー、石核、石斧、石斧片、たたき石・凹石、砥石が出土しており、Ⅰ B 層全体、Ⅰ B 層台地部とは大きく異なる。器種となる石器の出土量も台地部の1/3強（台地71点、低地21点）である。そのなかで、スクレイパーが11点と半数を占める。

Ⅰ B 層台地部と低地部でこのように大きく出土した石器の数が異なるのは、1：台地上ではアイヌ文化期から続縄文期までの遺構が検出され、低地部では北大式期の焼土のみが検出されたこと、2：土器などの出土が台地では続縄文期から擦文期まで見られるが、低地では続縄文（後北式～北大式期のものが特に多いことが上げられる。

Ⅱ B 層台地部から出土し、器種として分類された石器は166点である。石鎌が53点 (31.7%) と一番多く、他に10%を超えるものは、スクレイパー26点 (15.6%)、石斧21点 (12.6%) である。Ⅱ B 低地部から出土し、器種として分類された石器は41点である。スクレイパー10点 (24.4%) が一番多く、他に10%を超えたものは、石斧8点 (19.5%)、石鎌7点 (17.0%) である。台地と低地の器種となる石器の出土量は約4:1となっている。

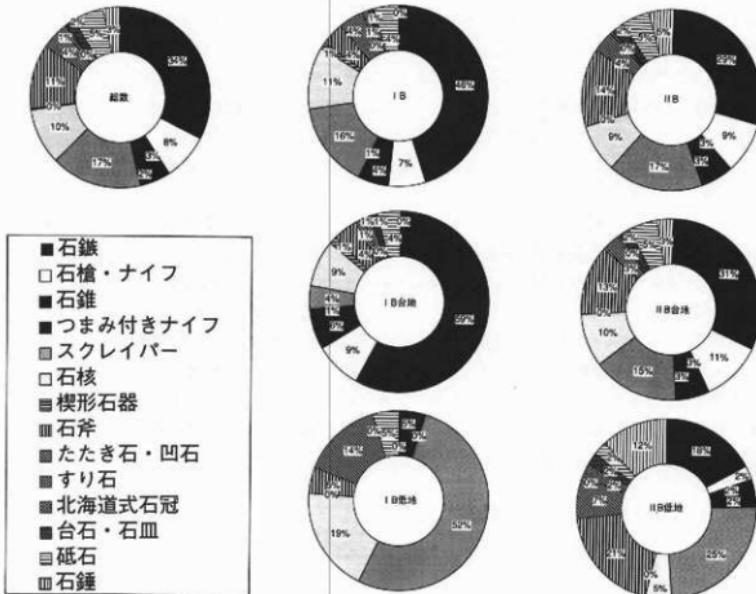
器種として数量的、形態的に比較ができるものは石鎌で、Ⅱ B 層では縄文時代後期から晩期に見られる有茎鎌が多く、Ⅰ B 層では無形の三角形の平基、凹基の石鎌が多い。Ⅰ B、Ⅱ B 層全体では長さはほぼ0.5cm～4cm、重さは3g以下である。特にⅠ B 層出土の石鎌は長さ0.5～3.5cm、重さが1.6g以下である。

Ⅰ B 層出土の片岩製の石鎌は、当遺跡より南南東に約790m程離れたオサツ2遺跡のGP-2、3、4、6出土の一括資料に見られるように、VI群B類（後北A、B式）の時期のものであると考える。

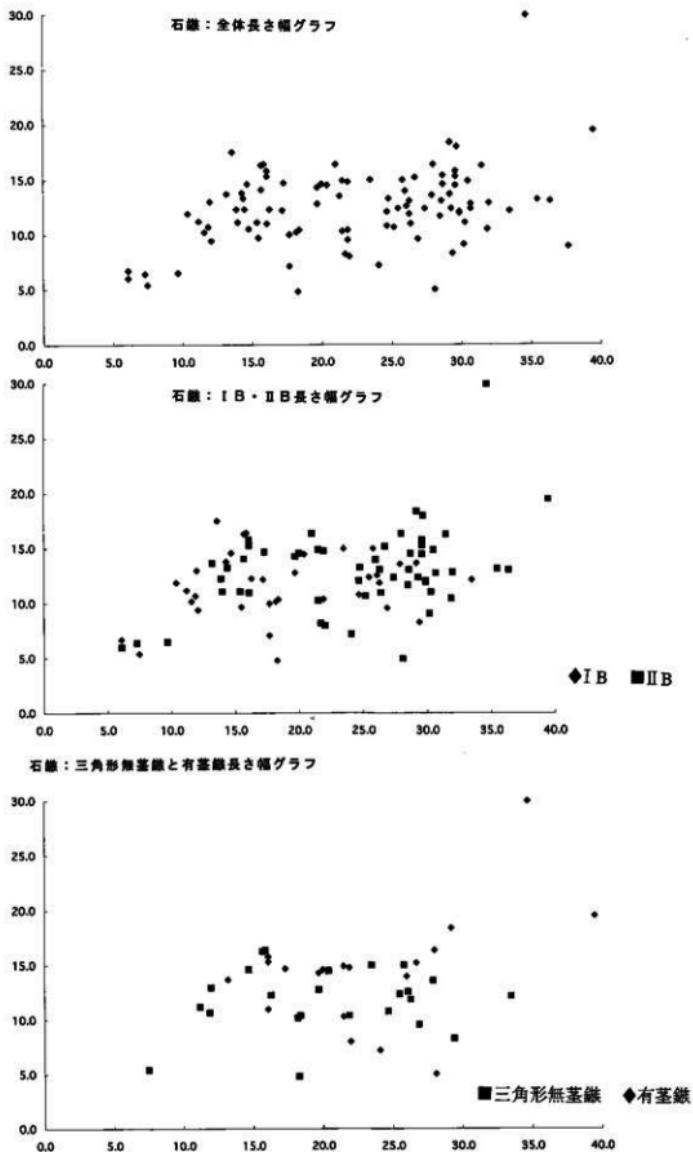
低地部から出土した土器は、Ⅱ B 下位の縄文早期から前期までは少なく、Ⅱ B 中位～上位の縄文中期から晩期までは比較的検出され、Ⅰ B 5、4の後北式期から北大式期までが出土しているが、石器も概ねその時期のものと思われるものが検出されている。

表X-5 石器器種別集計表

	総数	I B	I B台地	I B低地	II B	II B台地	II B低地	耕作土・攪乱・上部搅乱・表探
石鎌	107	41	41	0	60	53	7	6
石鎌未製品	12	8	8	0	2	2	0	2
石槍・ナイフ	27	6	6	0	19	18	1	2
石錐	11	5	4	1	6	5	1	0
つまみ付きナイフ	8	1	1	0	6	5	1	1
スクレイパー	54	14	3	11	36	26	10	4
石核	33	10	6	4	18	16	2	5
楔形石器	1	1	1	0	0	0	0	0
石斧	37	4	3	1	29	21	8	4
石斧片	20	2	1	1	16	14	2	2
石斧未製品	6	1	1	0	5	4	1	0
たたき石・凹石	14	4	1	3	8	5	3	2
すり石	2	1	1	0	1	1	0	0
北海道式石冠	1	0	0	0	1	0	1	0
台石・石皿	5	1	1	0	3	2	1	1
砥石	18	4	3	1	10	9	1	4
石錘	10	0	0	0	10	5	5	0
合計	366	103	81	22	230	186	44	33



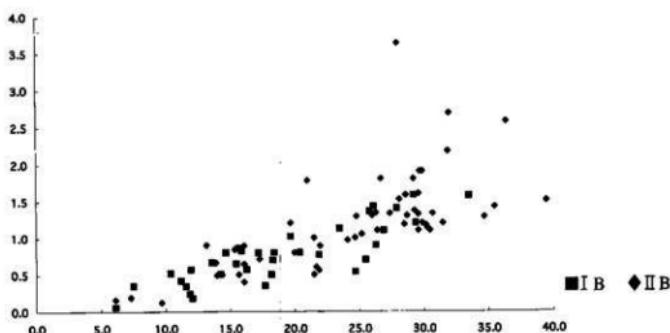
図X-10 石器器種別割合



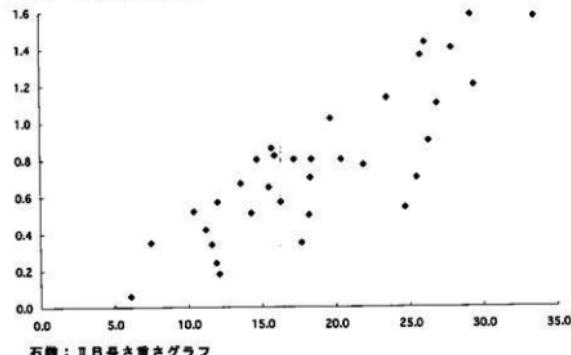
図X-11 石鎚長さ幅グラフ

5. 包含層出土の石器について

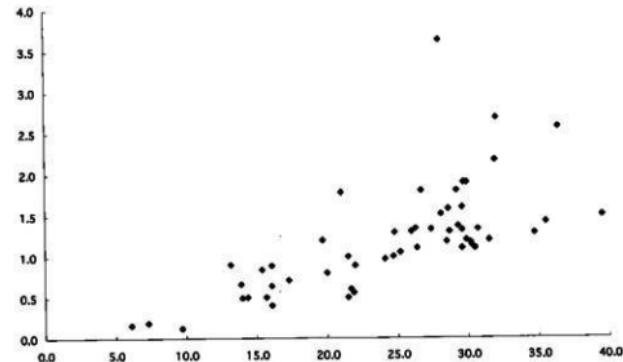
石錐：I B・II B長さ重さグラフ



石錐：I B長さ重さグラフ



石錐：II B長さ重さグラフ



図X-12 石錐長さ重さグラフ

報告書抄録

ふりがな	ちとせし ゆかんばしこい15いせき 1
書名	千歳市 ユカンボシ C 15遺跡（1）
副書名	北海道横断自動車道（千歳－夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	北埋調報
シリーズ番号	128集
編著者名	西田 茂・三浦正人・鈴木 信・中田裕香・倉橋直孝・吉田裕史洋・大森司統
編集機関	財団法人 北海道埋蔵文化財センター
所在地	〒064 北海道札幌市中央区南26条西11丁目 Tel 011 (561) 3131
発行年月日	西暦1998年3月31日
ふりがな	ゆかんばしこい15
所収遺跡名	ユカンボシ C 15
ふりがな	ほっかいどう ちとせし おさつ
所在地	北海道 千歳市 長都
市町村コード	01224
遺跡番号	A-03-263
北緯・東経	42度52分41秒・141度38分49秒
調査期間	1996.06.26～1996.10.30・1997.05.06～1997.10.31
調査面積	3,025m ² （うち当報告分 605m ² ）・8,855m ² （うち当報告分 3,180m ² ）
調査原因	道路（北海道横断自動車道）建設に伴う事前調査
種別	集落跡・墓・低湿地
主な時代	縄文時代中期・後期、統縄文時代、擦文化期、アイヌ文化期
主な遺構	縄文時代中期：住居跡1・土壙11・焼土25・Tピット22 縄文時代後期：住居跡8・土壙9・焼土11 統縄文時代：土壙3・焼土31・集石2 擦文化期：住居跡2・周溝のある墓3・土坑墓12・焼土14・灰集中1・溝1・道跡1 アイヌ文化期：住居跡1・焼土10・送り場1・灰集中2・鐵冶遺構1・道跡1 1739年以降：杭列3・窓状遺構3
主な遺物	縄文時代・統縄文時代：土器・石器等・土製品・石製品・木製品 擦文化期：土器・須恵器・石器等・土製品・金属製品・木製品 アイヌ文化期：石器等・フイゴ羽口・金属製品・木製品 その他全般に動物遺存体（骨・昆蟲・種子・自然木など）
特記事項	★台地上の一画にはⅠ黒からⅡ黒層にわたって、送り場・住居跡・土壙・焼土・墓石・Tピットなどが幾重にも重なる、遺構の集中区があった。 ★8世紀後葉から9世紀初頭に位置付けられる、擦文化期の周溝のある墓を3基確認した。この北側には同時期の土壙墓の墓域も存在した。 ★擦文化期とアイヌ文化期を主とした木製品約400点を低湿部から検出した。

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第128集

千歳市
ユカンボシ C 15遺跡(1)

－北海道横断自動車道（千歳－夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成10年3月31日 発行

編集 財団法人北海道埋蔵文化財センター

064 札幌市中央区南26条西11丁目

Tel (011) 561-3131

Fax (011) 561-0458

印刷 富士プリント株式会社

064 札幌市中央区南16条西9丁目

Tel (011) 531-4711

Fax (011) 530-2549

